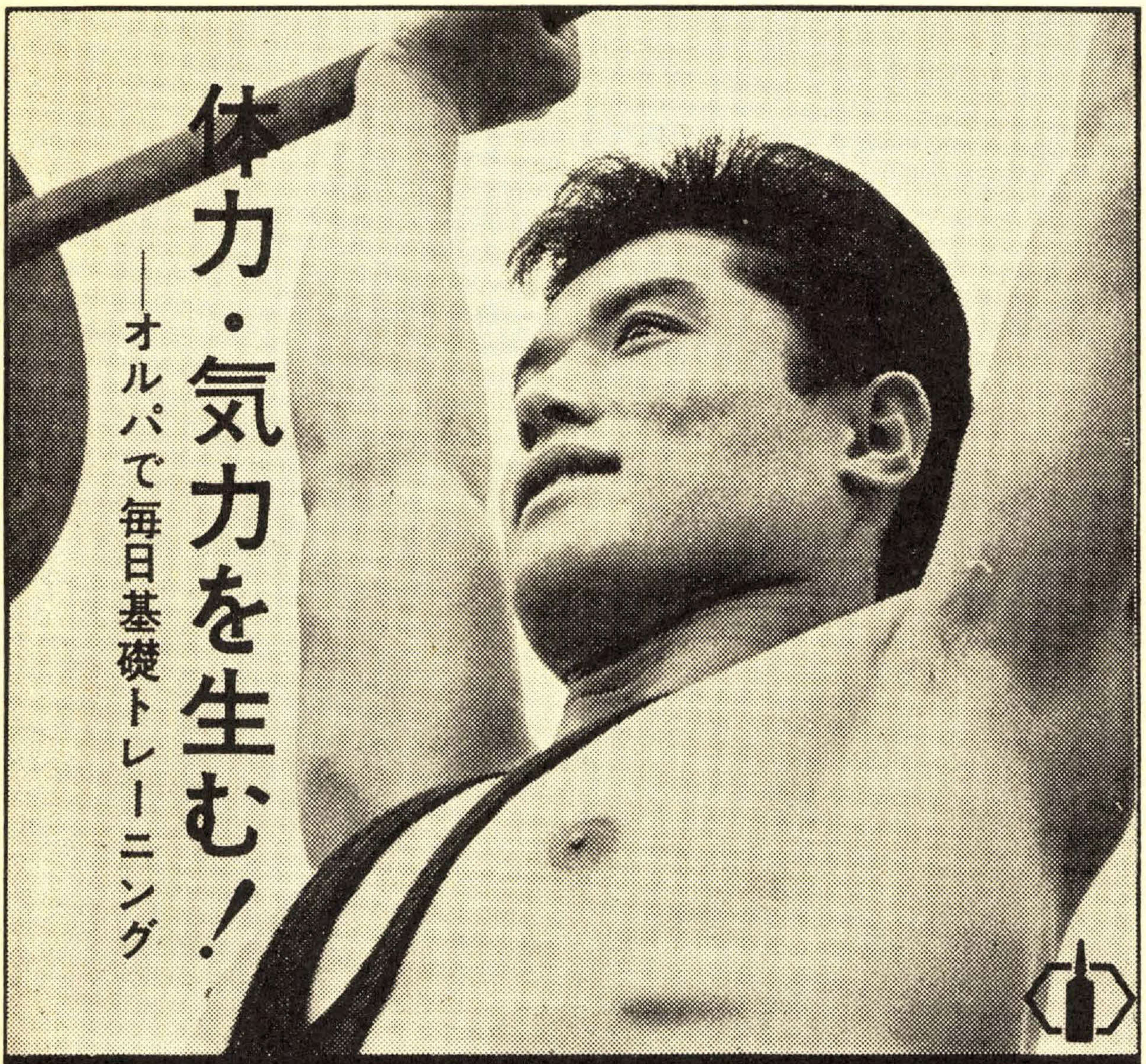
針葉樹

特集　1961年アンデス遠征記録

17

一橋大學一橋山岳部



基礎体力づくりにオルパ！

■体内の〈エネルギー生産のしくみ〉にとびこんで脂肪と糖分から活力を生み出し……

■〈アンモニア浄化のしくみ〉に働きかけ体に有害なアンモニアを除きます

L－オルニチン塩製剤

オルパ

60錠・120錠・300錠

オルパをこんなときに

- もっとスタミナが欲しい
- 栄養状態が悪く、だるい
- 食欲がなく胃腸の働きが悪い
- じんま疹などアレルギー性の病気に
- 貧血、つわりのとき
- 湿疹、皮膚炎などビタミンB群不足のとき
- 肝臓の保護と肝臓病の治療に

中外製薬株式会社

アタック直前ぐいっと一本！

体力をたっぷり確保してピークをめざす……完全装備にもう一つ、グロモントを加えてください！
角びん一本にグロンサン1000ミリグラムをつめこみ、さらにリンゴ酸とハチ蜜で強化した保健薬です。
疲労素を消しさり、最後のアタックにも十分の余力で挑めます。

●疲労回復・栄養補給に……

グロモント

グロンサン パーモント

速い効き目…グロンサン強力内服液
いつでもお傍に……グロンサン錠

中外製薬株式会社

針葉樹

第　13　号

1964

一橋大学一橋山岳部

目

次

目次

巻頭言……関　恒義……2

発刊によせて……4

■一九六一年アンデス遠征記録■

第一章　ヤンガヌコ峠を越えて……7
第二章　プカヒルカ登頂……21
第三章　ペルーからボリビアへ……38
第四章　オコルルニ源頭の山々……51
第五章　チョクニャコータを基地に……66
第六章　ププヤ・その一――アンデス果つるところ……83
第七章　ププヤ・その二――氷壁に囲まれた山……96

■アンデス・ノート■

一　アンデスへの招待……吉沢一郎……109
アンデスの農村を訪ねて……中村保……113
アンデスの農村を訪ねて……倉知敬……121

■四年間の合宿をめぐって■
はじめに……中島寛……131
鹿島槍の集中登山……倉知敬……150
爺岳をめぐって……中川滋夫……182
白馬と中央アルプス……大臼建二郎……184
穂高にかえる……蛭川弘……189
……蛭川隆夫……196
■記録■
北海道・東北……199
剣・黒部周辺……206
後立山連峰……219
槍・穂高……234
南アルプス・中央アルプス……272
上信越……297
八ケ岳・奥秩父・他……314
……323

■山小屋■……(336)
雪よ岩よ梓の青よ……
■部誌■
一九六〇年度……
一九六一年度……
一九六二年度……
■編集後記■……(354)
〈写真〉
1 写真プカヒルカ北峰頂上……(358)
2 プカヒルカ北峰稜線を行く
3 プカヒルカ北峰東面
4 プカヒルカ北峰西面
5 ヤーマとチャウピオルコ山群
6 ププヤの全貌
7 プカヒルカ南氷河
8 遠征隊隊員
9 プカヒルカ第一キャンプ……(363)
10 プカヒルカ南氷河にて
11 チャウピオルコ・ノルテと高処キャンプ
12 アカマニの頂上にて……(371)
13 五竜岳東面
14 爺岳・西俣奥壁
15 白馬連峰
16 涸沢にて
（5、6、7、10、11は中村 保撮影。1、2、3、9、12、14、15は倉知 敬撮影。13、16は遠藤昌土撮影。8は倉知作成。尚、4は早大遠征隊、近藤隆治氏撮影のもので、アルパマヨ方面より写したものである。同氏の御好意によって掲載させてもらった。）

針葉樹

第十三号

巻頭言

一橋山岳部の流れの中で、この十三号の時代という一時期の持つ意義は、決して小さなものではなかった。

一九六一年には、長い間の夢であった海外遠征が実現され、アンデスの処女峰の初登頂と未踏地域の踏査という形で実大きな成果をあげることが出来た。長年にわたる諸先輩のはかり知れない熱意と努力がこうろこびとするところである。

もとより、これは我々の仲間のみの力で為し得たものではなく、いろいろな方面から寄せられた絶大なる御支援に依る所、大であった。暖い協力を惜しまず寄せて下さった方々に対し、ここに我々の限りない感謝の気持を表わしたいと思う。

この計画は決して始めから順調な過程を経て遂行された訳ではなく、そのやりの問題を提起して来たけれども、何より特筆したいのは、これを成し遂げたことにより、登山活動を単

なる自己の内在的な充実の手段という消極的なものにとどめず、ささやかながらも我々の仲間の手によって山岳史に名を留むべき価値ある行為をなしたい、ということである。そして、終ることなく、大学山岳部として、なかんずく、あらゆる意味で変化誇りある一橋の大学山岳部としての激しい今日の時代において我々がはたさねばならない次の目標を探索し、常に前向きの姿勢をもってそれに取り組んで行きたいと思うのである。

我々はいつも或る目標を追求していかなければならない反面、絶えず新らしく今まで積み重ねられて来た成果を伝えていかねばならない。脈々として受け継がとなり肉となって我々に強い力を与えてくれるが、これが部の活動の形態や組織ないと、手痛い打撃をこうむる羽目におち入ることを我々は身をもって体験した形式的な規制によって生きるものではない。それは、各人の意識の中を潜り抜けてものであろう。それには伝統の何たるかを深く考え、良きは採り悪しきは捨てて、初めて生きてくる常に新らしい息吹きを与える積極的態度を忘れてはなるまい。原則に従って、それに

何より、ゲマインシャフトとしての山岳部にある人間は、お互に裸にならねばて、裸の状態にあっても相手を尊敬出来ることが必要であり、その尊敬の背後にる、未知なるものへの憧れ、より困難を求め前進する精神、が、なければならな帰ることが必要なのではないだろうか。山岳部とは「山へ登らねばならない」者て、決して「山へ登ってもよい」者の集まりではない、ということを知るべきであろう。

発刊によせて

部長　関　恒義

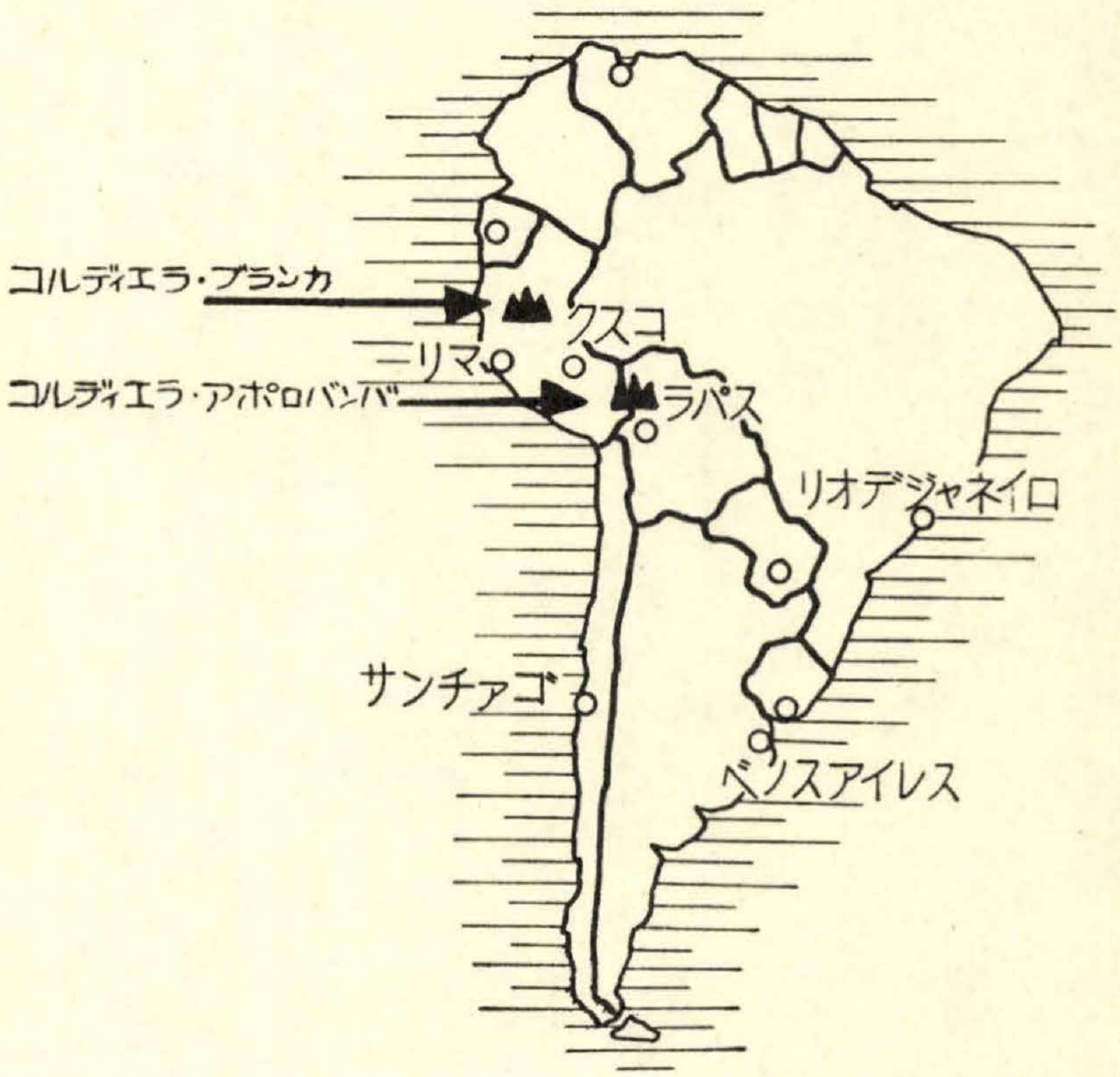
今回の『針葉樹』には、一橋大学八十五周年記念事業の一環として行ないましたアンデス遠征成功の記録を掲載できるようになりまして、まことに慶賀にたえません。これはひとえに、針葉樹会の先輩各位の並々ぬ御努力のたまものでありまして、まさに一橋山岳部四〇年の伝統の結晶であるといえます。また今回の遠征には、多くの先輩や諸団体から物的、心的に過分な御援助をいただきましたことを、この機会に心からあつく御礼申しあげます。

このような実績の上に、この五月に開かれました針葉樹会総会におきまして、針葉樹会々則が満場一致で決まりましたが、一橋山岳部今後の発展にとりましても、内容にふさわしい形式が与えられたものと喜んでいるしだいです。

山岳部の学生一同も、こういった輝かしい記録にはじないように一心に鍛錬にはげんでおりますが、最近の傾向の一つとして気になりますことは、新入部員がいぜんとして減少しつづけているということです。そのうちにまた、ドカッとはいることもあるだろうと期待してはいるのですが、このところ四、五年はそういう気配もみえません。この調子ですと大規模な山行は望みがたくなってまいります。ワンダーフォーゲルやスキー部ができている現在、昔のように学生を吸収することはできないだろうと思いますが、しかし何をおいても、質的、量的に水準を高めることが現在の山岳部に課せられた急務であろうと考えます。この点でも先輩各位の御援助のほどを、せつにお願いいたします。

1961

ペルー・ボリビア アンデス遠征報告



一九六一年アンデス遠征隊々員

吉沢一郎　隊長。一九二八年卒。五七才。

甘利仁朗　副隊長。装備担当。一九五八年卒。二七才。

中村保　渉外・写真担当。一九五八年卒。二六才。

丸山則二　渉外・会計担当。一九五八年卒。二六才。

中川滋夫　食糧担当。法学部四年（一九六一・三卒業）。二四才。

中島寛　装備担当。経済学部四年（一九六一・三卒業）。二三才。

倉知敬　輸送・医療担当。経済学部三年。二二才。

■第一章■

ヤンガヌコ峠を越えて

リマにて

丸山則二

スタンドバイ（入港用意）のベルが船中に鳴り響く。カイャオ港に着いたのだ。慌てデッキに駆け上がると、まだかなり遠方の地平線に、白い建物が浮かんでいた。港は、ほんの今しがた陽の光が当り始めたばかりかのように、うすいもやにつつまれて静まりかえっている。

我々、中村と丸山の二人は、現地での入山準備のため、他の隊員に先立って昭川丸に乗って日本を離れた。一九六一年三月一七日横浜を出てから一ヵ月半ばかり、北米から中米を回った長い航海の末、ようやく今、目的地のペルーに到着したのだ。

四月三〇日、在留邦人の暖い歓迎に迎えられ上陸する。習慣も物の考え方も異なる外国に初めてやって来たのだから、手荷物の通関からしてうまくいくかどうか気が揉めていた。だが、それは全く杞憂だった。リマに永年住みついている顔のひろい同胞のお陰で、税関を通り抜けるのは雑作もないことであった。

カイャオ港から首都リマまで車を飛ばす。広々した荒地を真直ぐにつらぬいているハイウェイを三〇分も行くと、リマの街に入った。不思議なことに、車も人通りも殆どなく、街はひっそりと静まりかえっている。聞くと、今日は日曜日、そして翌五月一日はメーデーで、商店や会社はすべて休みなのだそうだ。タクシー以外はすべて休業と徹底している。

下宿に荷物を置いてすぐ、邦字新聞「ペルー新報」の編集長、西村さんの案内で、在留邦人と商社の人々への挨拶廻りに出かけた。若い西村氏は実に手際良く案内してくれた。我々は多くの在留邦人の方々に会ったが、誰もが心から歓迎してくれた。そしてその後、その人達からはいろいろな面で献身的な協力を受けることになった。

あくる日からは山積した仕事が我々を待っていた。新聞社へのPRを兼ねたインタヴュー、装備の無税通関申請、その運搬と保管の準備、空軍への地図借用要請、目標の山の一部が国境にまたがるので国境往復の保証状発行依頼、無線通信機使用許可申請、サン・マルコス大学との交歓交渉……一々詳細に述べていこうとすると冗長におち入るばかりなので、これらに関してはここではふれないでおこう。ただ、最も懸案だった登山装備一式の無税通関許可を大蔵省から得るに際しては、我々の学校の先輩である塩川氏（三菱商事リマ支店長）の尽力に依る所、大であったことは特筆しておきたい。

さて、この間の事情については、山に関する事柄についてだけ、少し触れてみたい。我々はまず、ペルー山岳会のセサル・モ

ラレス氏に会いたかった。彼とは、すでに度々文通し、情報を知らせて貰っていたのだが、更に確めたいことが沢山あったのだ。

二世の通訳を頼み、早速彼の私邸を訪れた。彼は小柄で、鋭い目をした男だった。目標にしていたプカヒルカ中央峰についていろいろ尋ねた。彼の話によると、同じプカヒルカ中央峰を目標にイタリアのトリノから別の遠征隊が来ているという。又、ポーターについてはアンヘレス兄弟を決めてあるとのことだが、入山経路の詳しい情報については判らず、直接山のふもとの町ワラスまで行って調べる必要があった。

一方、ペルー山岳会は訪秘遠征隊のため、一夕、レセプションを催してくれた。我々の他に、同時に日本からやって来た関西学院隊、イタリアのトリノ隊とモンサ隊のつごう四隊と、山岳会関係者が集まった。モンサ隊はコルディエラ・ワイワッシュの峻峰ロンドイをねらっている。隊員の中にはK2、ガッシャーブルム4遠征隊の隊員、ワルタル・ボナッティの精悍な顔も見えた。トリノ隊の隊長はジュゼッペ・デイオニシ氏、頭が禿げた温和な感じの紳士だが、横巾広くがっちりした体格の持主だ。隊員は、皆気さくな連中だった。トリノの町の工員とか学生が寄り集まってにしてペルーへやって来た。中央峰は、フランスのレーモン・ラ来ている気軽な遠征隊なので、格式張った所が少しもない。それンペールとクロード・コーガンが一九五七年に試登し、岩とアイでいて、どことなくチームワークがとれている。ス・フルートに守られた三〇〇〇㍍ばかりの側壁を登って主稜線に

もちろん、彼等に問題のプカヒルカ中央峰について尋ねてみ達したが、頂上直下一〇〇〇㍍に迫りながら稜線上の大クレバスに阻まれ敗退している。また、一九六〇年には、イタリアのベルガた。連中は殆どスペイン語を解さず、英語も全然駄目、ペルー山モ隊が同じルートをトレースしたが、やはりランベール等の到達岳会の会員に通訳をたのみ何とか語り合ったが、どうもはっきり点より先には行けなかった。そして我々もこの中央峰を目標にやしない所があった。一九五五年、プカヒルカ北峰を登ったという って来たのだが、我々は前記のルートはさけて、クリンチ氏のすアメリカ隊のクリンチ氏から、我々は中央峰の写真をもらって、それを持参して来たが、不思議なことに彼等の持っている写真の中央峰とは丸で違う山のようなのだ。

だが、山の仲間はどこの誰でもすぐ気は通じ合うもの、片言ながら思い思いに語り合う。愉快の一語につきる。登路は違うようだが山は一緒、頂上で又握手しようぜ、と約束した。

翌日、我々はイタリア系移民のクラブを訪ね、トリノ隊と昼食を共にした。丁度、モンサ隊も居合せた。隊員達は我々の訪問を踊り上って歓迎し、握手とサイン攻めにした。ペルーにはイタリア人の移民が多く、大変な勢力を成しているので、このイタリア人のクラブもなかなか豪勢なもの、運動場から雨天体育場、宿泊所等と全て揃っている。倹約して安いホテルを転々としている我々とくらべると誠にうらやましい。

さて、我々は北峰へ登ったというアメリカ隊の情報を最も頼りにしてペルーへやって来た。中央峰は、フランスのレーモン・ランペールとクロード・コーガンが一九五七年に試登し、岩とアイス・フルートに守られた三〇〇〇㍍ばかりの側壁を登って主稜線に達したが、頂上直下一〇〇〇㍍に迫りながら稜線上の大クレバスに阻まれ敗退している。また、一九六〇年には、イタリアのベルガモ隊が同じルートをトレースしたが、やはりランベール等の到達点より先には行けなかった。そして我々もこの中央峰を目標にやって来たのだが、我々は前記のルートはさけて、クリンチ氏のすすめる北側からのルートをとる予定でいた。

ところが、前述のように、トリノ隊と話し合って、アメリカ隊の情報とくらべると、どうも様子がおかしい。いろいろ考えてみたが、北側と東側の差だけではうなずけないものがあった。そこ

で、我々は次のような推論を下してみた。我々が考えていた中央峰、すなわちアメリカ隊のいう中央峰は、実際は北峰である。そしてアメリカ隊の登ったという北峰は、北峰の手前のピークに過ぎない。彼等は手前のピークに登り、その向うにある真の北峰を中央峰と誤認している、と。

そして実際に、キャラバンの途中、初めてプカヒルカ連峰を望んだ時、このことははっきり判った。未踏峰は二つあったのだ。かくて我々はトリノ隊とぶつかることなく、北峰に登ることになったのである。

プカヒルカ山群は、北峰（六〇五〇㍍）、中央峰（六〇一〇㍍）、南峰（六〇四〇㍍）の三つのピークから成立っている。その一つ一つは、ほぼ一列に並んでいるが、それぞれ立派に独立した山で、別々の名前がつけられて然るべき程である。だが、それが見えにくい位置にあるために一括して呼ばれているのであろう。「プカ」とはインディオの土語・ケチュア語で、「赤い」という意味、「ヒルカ」は「山」の意で、プカヒルカは赤い山という単純な意味である。確かに岩の部分は鉄分を含んだ赤褐色をしていた。

出発まで

我々がリマに着いてから二週間経った五月一二日、吉沢隊長と甘利副隊長が空路到着した。我が隊の看板たる二人が来たのだから、早速挨拶回りである。その日から、大使館、在留邦人、外務省、文部省、サン・マルコス大学、ペルー山岳会等々、あちこち歩き廻った。

一八日には、キューバ丸で、中川、中島、倉知の若手三人が約三トンの荷物と共に到着、これで全員そろった。だが、三人は簡単にその日の内にリマのホテルへ入ったものの、船はまだ沖に停泊中。荷物の方が手元にとどくまでにもう一騒動あった。というのは、約九〇個の荷物の内、三個程が盗難にあったのだ。モーターボートで近づきアンカーの鎖を伝わって船にしのび込んだ賊が、ハッチの鍵をこじ開けて食糧のパックなどをかっぱらっていったのだ。失ったものは食糧二パックとピッケル三本、掛梯子一、縄梯子一。荷揚げの様子を見物に、鼻歌まじりに港へやって来た我々は、びっくり仰天。それからは全部の荷物が保税倉庫におさまるまで目を皿のようにして見張りをつづけた。

荷物の通関は、まかり間違えば一ヵ月もかかるという所を、在留邦人の八木氏の尽力のお陰で三日程で終えることが出来た。盗品発見の方はいろいろ手段を講じて見たが結局駄目だった。ただ登山に不可欠のピッケルだけは、関学隊の好意に甘え、二本拝借させてもらった。通関の終った三トンの荷物は、リマ日本人会会長の屋宣氏の私邸を借用させてもらい、その車庫に運び込んだ。

荷物の引き取りを待つ間、日本大使館は、我々と関学隊のためにレセプションを催してくれた。その席に、我々の到着以来イタリー語の通訳やら街の案内などいろいろ世話をしてくれたサン・マルコス大学の学生、ラウル・パトルコ君も出席したが、彼は学校の許可が得られたらぜひ我々の遠征に参加したいと云って来た。我々の方にしても、ペルー山岳会のメンバーである彼が加われば、日秘友好に寄与すること大だし、第一ペルーの仲間と一緒

に登るとは愉快だと思って前々から誘っていた位なので、大歓迎してその申し出を受けた。

出発前の数日は、連日あちこちから招待を受け、大いに激励された。特に在留邦人の婦人会代表が我々のホテルを訪れ花束を贈ってくれたのは嬉しかった。全く在留邦人の方々には何から何までお世話になった。あの親切な援助がなかったら、我々の準備はひどく難行していたことだろう。

一方、この間に、入山経路を調べ一切の下準備を済ませるため、五月一五日、丸山がワラスまで出かけた。ワラスは車で一日の行程。期待していたドライブだったが、あいにく山は雲にかくれて姿を見せなかった。ワラスは前日まで雨が降り続いていたということで、丁度雨期が終り冬の乾期に入った所である。

ワラスへ行く日本人は誰でも谷川さんの歓迎を受けないで済ますことは出来ない。町の中央で雑貨店を経営している谷川一家はワラスでは相当な顔、町の人は日本人を皆谷川さんの親戚位に思っているようで、大変信用がある。我々も御多聞にもれず、最後まで一切お世話になりっぱなしだった。

ワラスにはコルディエラ・ブランカ山岳会がある。まず、その山岳会のアルベルト・モラレス（セサル・モラレスの弟）に会い、入山経路の相談をする。南からヤンガヌコ峠を越えて行くのと、北から。パサカンチャを経てヌコ峠を経由するキャラバンルートに決めた。ポーターを頼むアンヘレス兄弟にも会う。エミリオ、エウヘニオ、ビクトリオ、マカリオのアンヘレス四人兄弟はアンディニスタ(Andinista)には名の知れた連中だが、我々はこの四人の内、上の二人を雇うことが出来た。だがエウヘニオの方は他にも約束があって、我々の隊へは、キャラバン中だけ馬方として参加するにとどまった。何しろ今年はコルディエラ・ブランカだけに一一パーティも入るので、ポーターも引張り凧である。

一方、馬を狩り集めるのも楽ではなかった。だが、これは、アコンカグアやワスカランに登ったことのあるという巡査のヴィアヌエバ氏に頼み、ユンガイの警察に依頼してもらった。ユンガイはヤンガヌコへ行く道の途中にある町である。早速、契約書をとりかわすためにエミリオに行ってもらった。こうした山奥では、文書による契約確認が確実なる取極めには絶対不可欠なのだ。

ワラスへ

先発の二人がリマに来てから数えて二五日目に、やっと遠征隊は山へ向うことになった。

五月二四日、まず中川、倉知両隊員と、二トンの装備・食糧を満載したトラックがワラスへ向った。そして翌日、残りの五人がコレクティボ（乗合タクシー）を一台借り切ってリマを発った。

リマの街を出た車は、砂漠の中を一路海岸沿いに北上する。左手に海を望みながらうねうねとのびたパン・アメリカン・ハイウェイをグングン突走る、といいたいのだが、実は不運にも我がコレクティボは見掛け倒しのボロ車で故障つづき、最後までスピード感に浸ることなど出来なかった。

バランカで朝食を摂り、パティヴィルカからハイウェイを離れ

山へ入る。フォルタレーサ河沿いに遡り、コノコチャ峠へ向う。道はよく整備されているが、曲折が多く、こうばいもきつくて、ますますスピードは出ないし、相変らずの故障つづきである。コルカスという村で、とう運転手は車の下にもぐって大修理をはじめた。その間に我々はゆっくりと昼食を摂る。

午後二時三〇分、遂に待望のコノコチャ峠に到着。この峠は高度四〇八〇㍍、ここで我々は皆、生まれて初めて富士山頂上以上の高地に立つわけであり、同時にコルディエラ・ブランカの端麗な姿にも初めて接するのである。広々とひろがった草原のむこうに、雪と氷におおわれた白嶺がきらめいている。紺碧の空の下、緑のじゅうたんと純白の峰々が見事なコントラストをなし、鋭角に連らなる稜線が碧空に浮き出ていた。その引き締った、そして際立った美しさ。これを見て感激しないわけにはいかない。

峠には小さな村があった。粗末ながら食堂もある。我々が車を降りて写真を撮り始めると、村中の人間が物珍らしそうに我々を取り囲み、質問攻めにした。皆が知っている限りのスペイン語を駆使して受け答えをするのを、中村がムービーに収め、丸山が録音をとる。一方、隊長は頭痛をおして小まめに動き回り、シャッターを押すのに忙がしい。

コノコチャの草原には真中にコノコチャ湖があって、そこから北へ一筋の流れが下っている。この源流がサンタ河をなし、風光明媚で有名なワイラス渓谷をつくるのである。そしてコルディエラ・ブランカはその右岸に累々と白嶺を連らねる。車はリオ・サンタに沿って下り、牧歌的な農村風景の中に入っていった。アドベという粘土のレンガでつくった窓もない小屋が、ユーカリの樹の間に点在し、麦やトウモロコシの畑が燥した砂漠に埃りっぽくかたまった家々を見慣れた眼に、とても落着いた印象を与えてくれた。

華麗なアイスフルートにかざられたチュルップ峰を真上にあおぎながら、ワラスに入る。谷川さんの家へ行くと、先に出たトラックはすでに着いており、荷物は中庭の石だたみの上に並べられていた。谷川さんは、軽くあいさつを交してテキパキ荷物の整理を手伝って下さった。そして、これから始終、この家族の人達の暖い好意と献身的な援助に支えられ、準備は手際よく進められていった。

ここで我々は三人のポーターをやとった。一人はすでに紹介済みのエミリオ・アンヘレス。彼は三六才の働きざかり、ヒマラヤで云えばサーダー並みの屈指のハイ・ポーターである。我々一同と会した時、とても気恥しそうにその長い顔を赤らめ、帽子を胸に抱いて、

「日本の皆さんと一緒に山に登れるのを、中村がムービーに収め、丸山が録かよろしく。」

と、かざらない素朴なあいさつをしたが、事実彼はたちまち我々の無二の親友となり、なかんずく非常にうれしい。どう奴だな、という非常に好ましい印象を持った。何より特筆すべきことは、彼がとても明るい性格の持主で、いつも強力な仲間となった。何ひょうきんな言行で人を笑わせることである。そのため、隊の雰囲気はたえず和やかなものになったし、又その上、なかなか頭の回転が早くて、言葉の不自由をカバーしてうまく切り回してくれ

た。

彼は、本職は靴屋だそうだが、一九五一年フランス・ペルギー隊のアルパマヨ遠征に馬方として参加して以来、毎年いくつかの遠征隊に傭われ、その持前の機敏さでたちまち定評のあるポーターとなった。一九六〇年にはイタリア・ベルガモ隊に参加しプカヒルカ中央峰にも行っており、我々にとって全く欠くことの出来ない仲間だった。

その他の二人は、パブロ・モラレスとデメトリオ・ノティヴィダ。いずれも二一才。パブロはタヌキのような顔をしたイカツイ男。怪力自慢でかつぐ方は人に負けないが、若いせいかワガママな所があっていけない。デメはパブロとは対照的に一寸したヤサ男。だが性格は強い。まだ新米なので主にベースキャンプの留守番をさせておいたのだが、どうしても登らしてくれといって、C2まで一人で登って来たりした。

まだ雨期が完全にあがらないので、快晴なのは午前中だけ、午後に白い雲が山をおおってしまう。そこで我々は朝早く起き、谷川夫妻と三人のポーターと共に対岸のコルディエラ・ネグラの峠まで車をとばし、ブランカの絶景をながめに行った。

ワスカランから北の方は陰になって見えなかったが、それから南へ続く雄大な白嶺は陽光にギラギラ輝いて連らなっていた。ブランカの最高峰・ワスカラン、そのうしろにチョピカルキのピラミッド、大きなコパ、ワルカン、オクシャパルカと並び、目の前には華麗なランラパルカとチュルップ、そして南へパルカラフ、ワンツァン、遠くカウヤラフ等々、日白押しに六千米級の山々が並んでいる。抜ける様に澄み切った空に、純白の山ひだが一本々々くっきりと際立って美しい。眼下には赤い屋根の海、ワラスの町が色をそえている。

ワラスの町はコルディエラ・ブランカに入る登山者にとって正に最良の根拠地だ。ワラスは遠来の登山者に、これから訪れようとする山々の魅力をまざまざと見せつけてくれる。寺院の前の広場を中心に碁盤の目のように規則正しくひろがった町並は、素朴だが小ぎれいにまとまって落着いた感じを持たせる。周囲の山々と見事に調和した山の町。我々は皆、ここなら一生住んでもいい、という意見に一致したものだ。

山へ出発する前夜、谷川家では我々のために町の要人を多数招き、レセプションを開いてくれた。県知事夫妻、警察署長兼山岳会々長、市長、司祭等々、ワラスの有力者は皆やって来た。食事の後、夜半過ぎまでワイノという民謡にのってダンスが続き、疲れた我々は彼等の根気の良さに参ってこっそり逃げ出してしまった程だった。この人達の底抜けの陽気さと親切さとは、今思い出してもなつかしく、またうれしくもある。

緑の谷ヤンガヌコ

五月二七日、我々七人はポーター三人を連れワラスを出発、ヤンガヌコ湖へ向った。湖まではりっぱな車道があって、トラックが入る。我々が雇った四トン積みの旧式なフォードには別誂えの木製の箱が運転台についていて、人間が多勢乗れるようになっていた。人間も荷物もこのトラック一台に全部乗り切り、ガタゴト

とヤンガヌコに向った。サンタ河沿共に少し遅れて後から我々を追って来た。

右手にコルディエラ・ブランカの峰々を見ながら、サンタ河沿いの道をユンガイ村まで行き、そこからヤンガヌコ渓谷をさかのぼる。はるか先の方にかすんで見えた大きなワスカランの双峰が、のしかかる様に巨大に間近かに見え出すと、もうユンガイである。ユンガイからは、渓谷沿いに山腹に切られた道をうねうねと登って行く。トラックは重荷にあえぐかのように、のろのろと動く。やがて目の前に、パックリとU字型に大きな口を開けた渓谷が現われた。異様に巨大なそのU字谷は、あたかも神秘な世界への導入門かのように見えるのだった。

夕刻、いや高い岩壁に両側をはさまれた、渓谷の中のヤンガヌコ湖に到着。湖畔にはコルディエラ・ブランカ山岳会のモダンなクラブハウスが建っている。そして周囲の草原には、既に我々のためにやって来た馬が三々五々草を食んでいた。やっと山の懐に入ったのだ。感無量である。

ここまで見送って下さった谷川夫妻に別れをつげ、トラックの運転手にチップをやって帰させれば、いよいよ山の生活の始まりである。六〇個近くあるキャンバスバッグの中から炊事道具や寝具を探し出すのも楽でない。いや、それよりこのせまり来る薄暗がりの中では、まず懐中電灯の入った梱包を見付け出さなくては ならない。こうなると丸で引越しか大掃除のようなもので、てんてこ舞いだった。それでも三時間程経つと、何もかも真新らしいものに囲まれて楽しい夕飯が始まった。

皆の注目のまとはラウルだったが、彼はその大柄な体を小さくする様にして、とても静かにしていた。紀で、他人の質問に一つ一つ、ためらいがちだが実に真面目な答を返す。我々の主食のアルファ米を彼は殆んど口にしないので、気の毒になって、一体あなたは何が好きなのですか、とたずねると (会話は主にスペイン語、ないしは英語で行なわれた)、自分は米飯は好きなのだが、今は腹が空いていないから食べないのだ、といかにも当惑したような顔をして答える。我々に余計な手間をかけないよう気を配って、あまりうまくないウソをついているのが見透しだったが、こういう人情に弱い日本人達は、こう云われると余計気をつかってしまうのだった。

彼は大学の休暇をとるのに苦労したらしく、今日こうして我々に顔を見せるまで、一体来るのか来ないのかとても気を揉ませたが、実験か何かの合間をみてギリギリの日程で馳けつけてきたのだ。彼にとって、経済学などを専攻している大学生や、社会学のドクター (こちらでは大学を卒業すれば博士だと思われている) 達が、半年近くも休みをとって探検などやっているのは、理解に苦しむことだったかも知れない。その点、日本の大学は非常に理解がある。こういう所だけは日本は先進国のおうようさを持っている。

さて、このクラブハウスは海抜四〇〇〇㍍の高地にあり、先日まで居たワラスよりは一〇〇〇㍍高い。陽がかげるとあたりは急に冷え込み、セーターなしでは居られない。この寒さの中で、外の暗闇の中に夜具もなくただポンチョだけかぶってうずくまっているアリエロ (馬方) たちは一体眠れるのだろうか。小屋の外に並べられた荷物は、まだ人気(ひとけ)あるここらでは盗難の恐れがあるの

で誰か夜番をする必要があったが、これはエミリオがすすんで買って出て、寝袋とエアマットを持ち外へ跳び出ていった。

四〇〇〇㍍という高度は、健康な者にとってはさほど影響を受けるものではないらしいが、このように急に登ってくると、一時的には仲々辛いものだった。程度の差はあったが、ある者はかなり激しい頭痛におそわれ、ある者は寝入りバナに軽度の呼吸困難に陥入って、早速酸素吸入器のやっかいになった。ただ一人、中島だけは全くいつもと変わりなかったと云っていた。

キャラバンはロバと共に

明けて五月二八日。快晴のキャラバン一日目の朝を迎えた。簡単な朝食の後、直ちに出発の準備にとりかかる。九人のアリエロにひきいられた、一六頭の馬と三四頭のブーロ（ウマとロバの合いの子）が、湖の回りにウロウロしている。まずそれを呼び集める。アリエロは一人ないしは二人で組をつくり、それぞれ自分の持馬と一緒に寝起きしている。古タイヤでつくったゾウリを素足につっかけ、手織のポンチョに手製のフェルト帽といういでたちである。アリエロ頭のエウヘニオ・アンヘレスだけは、やぶれたムギワラ帽に白いセーターを着込んで、大そうな貫禄だ。

アリエロの日当は三〇ソーレス（四〇〇円）、馬が五〇ソーレス（六五〇円）、ブーロが三〇ソーレスで、従って我々の輸送に要する一日の経費は約二八〇〇〇円となる。これを考えるとキャラバンに余計な日数は掛けられない。ところが、これまでブランカにやってきたどの遠征隊も皆、アリエロの怠慢な仕事振りに手こずっている。とはいっても、逃げないのだ。とはいっても、我々は気が気ではないので、我々の回る動物をひっとらえ、頭から毛布をかぶせて、ドッコイショと二人がかりで振り分けにキャンバスバッグを積む、という緩慢な彼等の仕事振りを、ただ、ながめているより仕方ないのだ。

用意の出来たアリエロからどんどん出発させ、四六匹を全て追い出した時には、始めからもう四時間も経っていた。だが、あたりの景色はいつまでながめていてもあきない程、素晴らしかった。澄んだ水を満々とたたえた湖、あくまでやわらかな草原、頭上にのしかかりそびえるワスカランの荒々しい氷壁。それに加えて、折りからソンブレロをかぶった伊達男たちが下から遊びに来て、ギターをかなでメキシカンソングを歌ってくれた。碧空にとけ込むようなその陽気な歌声は、まことにこの場にふさわしい、この上もない贈物だった。

あわただしい内にも、こうしたのどかな風物を交えて、我々はいよいよキャラバンの第一歩を踏み出した。余った四頭の馬に隊長や慎重派が乗り、残りの自称健脚組はしんがりを徒歩で行く。小屋からヤンガヌコの第一の湖を越えて、広い草原に入る。そこここに羊などが放牧されたのどやかな風物である。両側は切り立つ岩壁だが、その間は実に平らな一枚の板のような原っぱだ。これがパクチャの雪をかぶったおたムギワラ帽に白いセーターを着込んで、大そうな貫禄だ。

アリエロの日当は三〇ソーレス（四〇〇円）、馬が五〇ソーレス（六五〇円）、ブーロが三〇ソーレスで、従って我々の輸送に要する一日の経費は約二八〇〇〇円となる。これを考えるとキャラバンに余計な日数は掛けられない。ところが、これまでブランカにやってきたどの遠征隊も皆、アリエロの怠慢な仕事振りに手こずっている。とはいっても、逃げないのだ。とはいっても、我々は気が気ではないので、我々の回る動物をひっとらえ、頭から毛布をかぶせて、ドッコイショと二人がかりで振り分けにキャンバスバッグを積む、という緩慢な彼等の仕事振りを、ただ、ながめているより仕方ないのだ。

用意の出来たアリエロからどんどん出発させ、四六匹を全て追い出した時には、始めからもう四時間も経っていた。だが、あたりの景色はいつまでながめていてもあきない程、素晴らしかった。澄んだ水を満々とたたえた湖、あくまでやわらかな草原、頭上にのしかかりそびえるワスカランの荒々しい氷壁。それに加えて、折りからソンブレロをかぶった伊達男たちが下から遊びに来て、ギターをかなでメキシカンソングを歌ってくれた。碧空にとけ込むようなその陽気な歌声は、まことにこの場にふさわしい、この上もない贈物だった。

あわただしい内にも、こうしたのどかな風物を交えて、我々はいよいよキャラバンの第一歩を踏み出した。余った四頭の馬に隊長や慎重派が乗り、残りの自称健脚組はしんがりを徒歩で行く。小屋からヤンガヌコの第一の湖を越えて、広い草原に入る。そこここに羊などが放牧されたのどやかな風物である。両側は切り立つ岩壁だが、その間は実に平らな一枚の板のような原っぱだ。これがパクチャの雪をかぶったおたムギワラ帽に白いセーターを着込んで、大そうな貫禄だ。

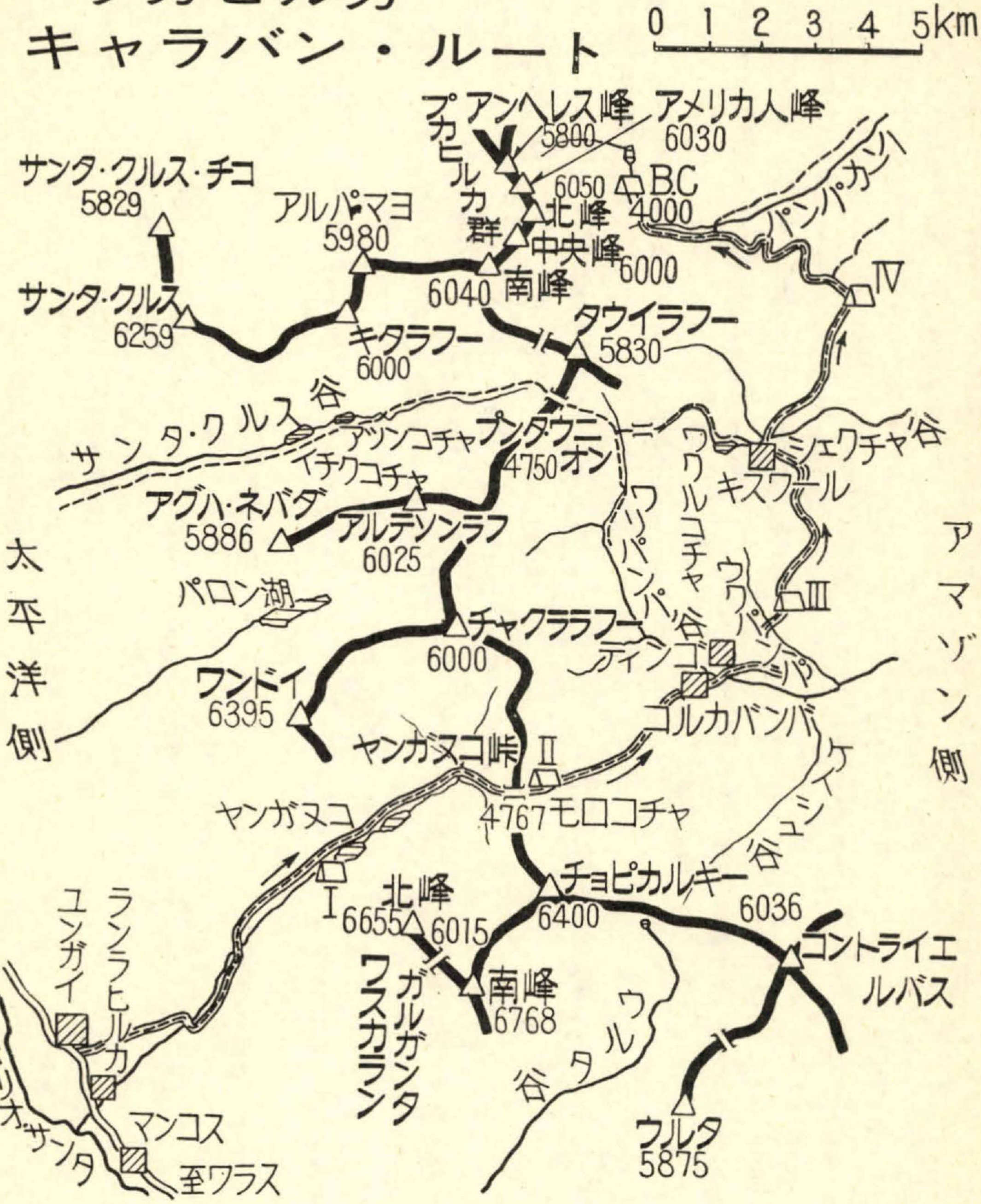
アリエロの日当は三〇ソーレス（四〇〇円）、馬が五〇ソーレス（六五〇円）、ブーロが三〇ソーレスで、従って我々の輸送に要する一日の経費は約二八〇〇〇円となる。これを考えるとキャラバンに余計な日数は掛けられない。ところが、これまでブランカにやってきたどの遠征隊も皆、アリエロの怠慢な仕事振りに手こずっている。とはいっても、逃げないのだ。とはいっても、我々は気が気ではないので、我々の回る動物をひっとらえ、頭から毛布をかぶせて、ドッコイショと二人がかりで振り分けにキャンバスバッグを積む、という緩慢な彼等の仕事振りを、ただ、ながめているより仕方ないのだ。

用意の出来たアリエロからどんどん出発させ、四六匹を全て追い出した時には、始めからもう四時間も経っていた。だが、あたりの景色はいつまでながめていてもあきない程、素晴らしかった。澄んだ水を満々とたたえた湖、あくまでやわらかな草原、頭上にのしかかりそびえるワスカランの荒々しい氷壁。それに加えて、折りからソンブレロをかぶった伊達男たちが下から遊びに来て、ギターをかなでメキシカンソングを歌ってくれた。碧空にとけ込むようなその陽気な歌声は、まことにこの場にふさわしい、この上もない贈物だった。

あわただしい内にも、こうしたのどかな風物を交えて、我々はいよいよキャラバンの第一歩を踏み出した。余った四頭の馬に隊長や慎重派が乗り、残りの自称健脚組はしんがりを徒歩で行く。小屋からヤンガヌコの第一の湖を越えて、広い草原に入る。そこここに羊などが放牧されたのどやかな風物である。両側は切り立つ岩壁だが、その間は実に平らな一枚の板のような原っぱだ。これがパクチャの雪をかぶったおだやかな山頂が、我々を指し招くように高くそびえている。

しんがりの徒歩組が第二の湖を越えたのが正午頃だった。強い日射しを受け通しなので、のどがとても渇く。湖畔には一軒の小屋があり、数人のインディオの牧夫達が我々をじっと見つめてい

プカヒルカ
キャラバン・ルート



る。こんな山奥によく住みついたものだと当り前の人なら感心する所だろうが、考えようによっては、浮世の煩悩から解放された天国に居るようなものだから、全くうらやましい限りである。

腹ごしらえが終ると、いよいよ峠を目指して登りに掛る。登り口は二股になっていて、左はワンドイ（六三九五㍍）やチャクラフ（六〇〇〇㍍）に登る道、右はヤンガヌコ峠（四七六七㍍）へ八〇〇㍍余りの急な道がつづいている。我々は右の道をたどり、今日峠越えをするのだ。

しんがりが登りにかかった頃に、先頭のグループはもう中腹にさしかかっていた。ジグザクの道を豆つぶのような馬がのろのろと動いているのがみえる。すぐ目の前では、小柄なブーロが重荷によろめきながら、これが我が悲運の星の宿命ナリ、といった様なその悲し気な顔をふせて、もくもくと歩んでいる。一方、馬の方はその格好よい長い脚を石ころに滑らせては足掻き、喘ぎ、鼻を鳴らして苦闘している。こうした素朴な動物達の苦難を見ていると、どうも同情を禁じ得ない。

アリエロは、そんなことには委細かまわず、一寸でも足並が乱れると、「カバヨッ！」とか「カラッホ！」とか叫び、羊の毛で出来た鞭を巧みに空間にパチンと打ち鳴らし追い上げる。

振り返ると、いままで岩蔭にかくれていた山々がいつの間にかその全貌を現わし始めた。ワンドイの四つの特徴ある尖峰、ヒダの美しいチャクラフ、そして前方には峠越しにチョピカルキ（六四〇〇㍍）がそのスマートな姿を見せる。右手には巨大なワスカランの双峰が、広大な氷河を前に、重量感あふるるばかりにそびえる。とにかく、これ程の麗峰を一時に見渡せる場所は滅多にあるまい。

背の低いかん木が叢生している植物限界を過ぎると、道はガラガラの岩道に変わり、やがて岩だたみのせまい峠に着く。八〇〇㍍程一気に登った訳だが、ペースを乱さず歩けば、さほど苦しいものでもなかった。乗馬組も徒歩組も、一日中軽い頭痛はしていたが、思っていた程苦しくはなかった。アマゾンまで急速に高度をおとす峠の向う側は黒ずんだ渓谷がうねうねと続く。眼下には今夜のキャンプサイトを予定しているモロコチャの草原が見える。

ジグザグの急な道を馳け降り、池塘の点在する草地に着く。直ちに幕営、炊事の準備にかかった。ところが、その頃からとうとう懸念していたことが始まった。皆、はげしい頭痛と、胃から湧き出る吐き気に悩まされ出したのだ。典型的なソロチェ（高山病）である。

幾山河越えさりゆかば

夜通しの頭痛で眠れないまま朝を迎える。特に、隊長は頭痛と吐き気に加えて高熱に見舞われ、出発まぎわまで酸素吸入をつづけた。急性肺炎を心配して、アクロマイシンを服用しても、胃が受け付けず吐き出してしまう。一時はどうなるか心配したが、どうやら出発は出来そうになった。中村や倉知等も高熱を出し防寒服を着込んで青い顔をしている。頭痛はしてもまだ元気な丸山と中島が、スローモーなアリエロにハッパを掛け掛け、馬に荷を載せ、九時半やっと第一隊が出発した。

今朝は雲が多い。かん木の生い茂った谷ぞいの単調な小路を下る。高度が低くなるにつれ段々温度があがり、空気が段々濃くなっていくのが、ひしひしと身に感じられ、誠に心地よい。小高い所に出ると、幾つか重なった尾根越しにコントライェルバス（六〇三六㍍）の大きく穏やかな山容が姿を現わし、眼を楽しませてくれる。丸で大きなタライをそのまま逆さにふせた様な、でかい平らな山だ。

昼前、バケリア村を通過。ここの農家の三人姉妹が鄙には稀な美人なのに驚いたが、そこから一時間程下ったティンコ村に来てみると、男女とも実に顔立ちが良い。これは恐らく、結婚様式に関係があるのだろう。外界との接触を殆ど断って、先祖代々の土地に住みついている彼等の顔には、幸福を絵に画いたような美しさがある。

農家の庭先の芝生を借りて食事を摂る。例によって村の衆が総出で我々を取り囲み、いつまで飽きずに、黙って我々の一挙一動を見詰め続ける。大人はどこか警戒心を抱いているかの如く、うさん臭そうに凝視しているが、子供達はすぐに打ちとけ、カメラの前に競って身をのり出し、食べものをねだり出す。子供とはいえこんなに陽気なのはいままでの経験からは珍らしいことだった。これまで接して来たインディオ達は、子供に至るまで外来の人間に対しては極度に警戒的で、なかなか打ちとけようとしなかったのだ。

コルカバンバ村で、粗末な橋をわたりワリパンパの谷を越える。そこから道は直ぐ登りにかかった。大きな尾根の腹をまいている道をゆっくり登り、一寸とした峠を越えると、もう午後の三時だ。予定では、今日はもう一つ先のシェクチャ谷はキスワル村まで行くことになっていたが、もう時間的に無理なので、少し先、ウクパンパ谷の向うに見える小高い台地をテント場と決めた。半日の遅れだ。遅れをなくすためには朝の早発ちが絶対に必要なので、明日は何としても緩慢なアリエロをスピーディにさせねばならない。アリエロ頭のエウヘニオは付き合っているとイイ奴だが、アリエロ達に対してもよいリーダーらしく、仲々無理はしようとしない。兄貴のエミリオも彼だけにはあまり強く言えないようだ。

テント場は高度三六〇〇㍍。しかも気持よい草原で、あたり一面緑に囲まれている。それに全員ソロチェから解放されて快調だ。昨夜のテント場が四四〇〇㍍だが、どうやら四五〇〇㍍辺りが、我々「富士山」族の高度馴化の限界らしい。だがそれ以後は、小きざみに登り降りをしていたので、あまりソロチェの影響を受けることはなかった。

日中のむせるような暑さにくらべ、夜は一際寒さが身にしみる。アリエロは積みかさねた梱包によりかかりポンチョをかぶったまま、夜明けまで身じろぎせず寝込んでいる。この寒いのに、と思って、一人に「寒くないのか。」と尋ねると、「寒い寒い。」という。「じゃ、眠れないだろう。」と聞いたら「眠れない。」という返事だ。ほとんど穀物のみの粗末な食事を摂るだけで、夜も大して眠らずに、一体家畜を追い荷を担ぐ彼等のエネルギーはどこから出てくるのだろうか。いつも彼等が口を真青にして噛んでいるコカの葉に、その秘密があるのかも知れない。

録音機を持ち出し、正調のワイノを歌わせようとしたが、恥し

そうにして仲々応じない。ピースを奨めるが喫おうとしない。彼等にとってコカが最高の好物なのでコカを盛んにねだる。ワラスでチップ用に買込んではおいたのだが、どの梱包に入れたか所在不明でやることが出来ない。チョコレートやアメで何とか機嫌をとって、エミリオやパブロに加勢してもらいながら、やっとワイノを三、四曲録音できた。単調だが哀愁あふるるワイノが、夜のしじまにこだまして、その夜はふけていった。

明けて三〇日、先発隊は八時半に出発。広々とした草原を進む。道はないので、馬もブーロも勝手な方向に首を向けてしまい、アリエロは大変だ。重荷に喘ぐこの愛すべき動物たちは仲々の合理主義者、無理をして一気に馳け上るような真似は絶対にしないのだ。放って置けば何回でもジグザグを切ってゆっくり登る。だからアリエロは始終ムチをならし、大声を張り上げていなければならない。首をたれた動物達は、突然鳴るムチの音に眠りから醒めたように後足を蹴上げ、ヨタヨタと馳け出す。だが、とうとう一頭の馬がこの草原の登りでのびてしまった。アリエロは盛んに罵声をあげ、荷物を他の馬に載せ代えると、その場に倒れた馬をそのまま放置して出発した。帰りに連れて帰ろうというのだろうか。

一一時、四四五〇㍍の峠に着く。晴れていればプカヒルカと初対面が出来たのだが、あいにくと上の方には厚い雲がかかって視界がきかない。峠からシェクチャ谷へ、ジグザグの下りが二時間程続く。途中から、プカヒルカにかかる氷河の端が雲間にわずかに見え出した。この坂で丸山はエウヘニオと馳け競べをしてみた。四〇〇〇㍍を越えるこの高地で全力疾走した後も、呼吸の乱れは平地とほとんど変わらない。たった二、三日の登り降りでこれだけ馴化しているとは、われながら驚いた。

せまいシェクチャの谷には、流れにそって点々とわら葺の小屋が散在するキスワル村があった。五、六〇㍍程の間隔で二、三軒の家が集まっている細長い村だ。山の斜面はたんねんに耕され、麦が青々と育っていた。村を出はずれた所で川は二手に分れ、道も二分する。先発パーティがどちらへ行ったかわからず、日暮れも近く、寒さも増すし腹も減るしで、大いに弱る。それに未だソロチェから完成に解放されない者は、すっかりばてて足がはかどらない。村の住民のあやふやな返事をたよりに日暮れてやっとテント場に着いた。

この日のキャンプは丁度シェクチャとハンカパンパとの間の広い峠。その向うには月光に輝り映えるプカヒルカの純白の山なみが、間近かに並んで待っていた。ここで、やっとプカヒルカの全貌にお目にかかれたのだ。興奮が皆を包む。一度プカヒルカに来たことのあるエミリオに矢継き早やの質問がとぶ。

アメリカ隊の登ったのはどれ？　どの氷河から？　CIはどの辺り？……エミリオの返事を一つ一つ、今まで頭にこびりついた写真と結びつけてみる。

どうやら、オレ達は正しかった、クリンチ達が登ったというピークとイタリア隊のいう中央峰との間にはもう一つ高いピークがある、間違いない、あれこそ北峰ダ、イヤ一番高いからプカヒルカ主峰である、等となかなかうるさい。我々の目標は北峰であると決まった。ピンととがったいい山だった。はたして登れるかしら、といささか心配だったが……。

明くれば、いよいよ麓のハンカパンパ谷へ入る。山の腹をまきながら、徐々に谷底へ下る。山は、相変わらず日中は雲にかくれて見えない。広くひろがった氷河からは、一ヵ所に流れ集まって、谷の源頭を形造っている。氷河の末端からは、巨大な岩壁がスッパリ切れ落ち、緑の草のジュウタンをしきつめた谷底につながっている。

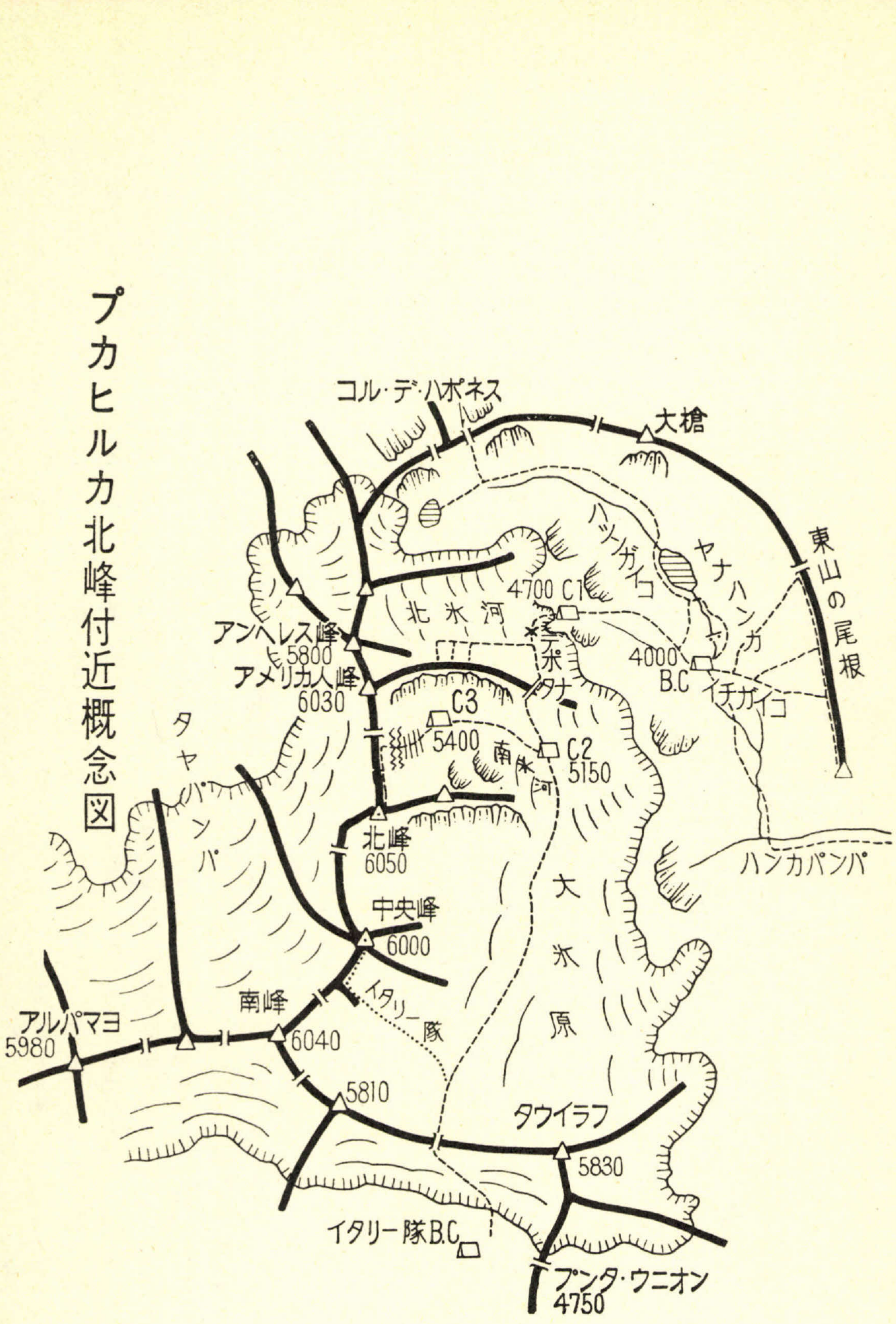
谷のほぼ真中に、ハンカパンパ村があった。あたりの風物とは少しつり合わない粗末な家が、一ヵ所に流れ集まって、谷らしく、村の中は閑散としている。その前を通りぬけ、段々湿地になっていく谷底を行く。ほとんどそのツメ近くまで行ってから、エミリオは右から入る小さな谷、ヤナハンカ谷へ我々を導いた。かん木をかきわけ急な坂をしばし登ると、小じんまりとした盆地に出る。水は端のかん木の下を秘やかに流れ、草は青々と繁っている。そこがアメリカ隊のベースキャンプ地だった。そしてそこは我々のベースキャンプにもなるのだ。

一目みて誰もが即座に気に入った、素晴らしいキャンプサイトだった。天然の芝生がその一〇〇㍍四方の台地をしきつめ、奥には一条の滝が、そしてそのはるか上の方には、岩の間に白い氷河の舌端が顔をのぞかせている。

次々と降ろされるキャンバスバッグを二列にきちんとならべ、必要なパックをどんどん解く。真新しい色もあざやかなテントがひろげられ、たちまちテント村が出来る。アリエロの労賃支払もしなくてはならない。これはヒマラヤとはちがって一人一人に渡すことはせず、アリエロ頭のエウヘニオに一括して払えばよい。エウヘニオはチップを要求して仲々強硬だが、まあ無事についたのだから大がいのことは聞いてやる。支払が終ると、箱からサントリーを出して、アリエロ達の苦労をねぎらい、乾杯。

やがて、彼等は三々五々、馬を追い、大声で別れをつげながら木の蔭に消えていった。そして、メステントの中では、ガタゴトと夕餉の支度が始まった。

プカヒルカ北峰付近概念図



■第二章■

プカヒルカ登頂

中村保

熱帯の氷河へ

六月一日、とうとうプカヒルカとのお付き合いが始まった。まず中島とエミリオが選ばれて、第一キャンプ設営地の偵察に向った。この時のようすは中島の偵察記を引用しよう。

一九五五年にアメリカ隊に同行したことのあるエミリオは、その正確な記憶とカンにによって巧みにルートを探し出し、ボクを導いて行ってくれた。ヤナハンカの明るいU字谷から、左側のかなり急だが草の密生した岩とガレまじりの斜面をたどって行くと、階段状の岩壁にぶつかった。それをうまい具合にバンド伝いにのりこえて、エミリオの云うアメリカ隊のキャンプ跡にやって来た。途中で、彼等のつくったケルンに幾つかお目にかかったし、ここでもつい少し前まで居たように思える程生々しい露営の跡があって、やっぱりなんとなく人臭い。

そこは丁度アンデス特有の懸垂氷河の真下であった。高度四七〇〇㍍、コルディエラ・ブランカの雪線の高さである。雪線がこのように、ある高さの所にぴたりと決められ、その下には雪もなにもなく岩が黒々としている、という実に単純な明確さは、全く驚異に値する。幾年もかかって巨大な氷の荷重に圧縮され黒ずんだ舌端には、入道のようなセラックが乱立し、不気味なクレバスがはやる我々の接近を拒んでいた。

左側のスラブをしばらく登った所に弱点を見付けて、いよいよ氷河に手を触れ、傾斜五〇度、三〇㍍ばかりの氷壁に取り付いた。

初めて触れる氷壁に慎重すぎる程たんねんに足場をきざみ、一歩一歩登攀していった。愛用のピッケルの一撃に、堅氷の砕け散るツァッケが全体の重みを支える轢みに快感を感じつつ〝氷を登っている〟という意識に酔った。これこそ、我々をしてここまで駆り出さしめた源のものであった。

氷壁の上はなだらかになって、北氷河中段の広い雪原に続いていたが、午後からは天候悪化し、いやなガスが回りを取り囲んでしまったので、それ以上ルートを見定めることも出来ずそこから引き返した。後日、この氷壁にはジュラルミンのステップ梯子が固定され、荷上用ルートとして確保された。第一キャンプはアメリカ隊と同じ所、氷河末端の岩の台地に設けることにした。

翌日よりCIへの荷上げが始まった。多くの良いシェルパを使えるヒマラヤと違って、隊員も荷上げの要員として相当テント間

を往復しなければならない。病もそろそろ馴化されて来たが、高地での三〇キロを越えるボッカは、日本では味わえなかったつらい仕事だった。ポーターは四〇キロ位かつぐので助かるけれど、ポーターというものを使うのは初めての我々にとって、あまり勤勉でない彼等をうまく有効に動かすのは、なかなか難しいことだった。

CIからいよいよ氷の世界が始まった。三日、降雪をついて、甘利、中村、中島、ラウルの四人は氷河上部の偵察に向ったが、まだ氷に慣れないのと悪天のため、北氷河中央の、何んとか平とでも名付けたいような広い雪原までトレースしただけで戻って来た。季節は乾期に入ったばかりのところなので天候はまだ安定しておらず、連日ガスがかかり、雪がちらつくことも多い。氷河には新しく積った雪がうっすらかぶり、危険なクレバスをカモフラージュしているので、行動中は石橋を叩いて渡るという表現がぴったりする程、神経を配った。氷河の経験のない我々にとっては絶えずピッケルの触覚によって隠れたクレバスを探らねば一歩も進めなかった。帰る頃には何でもない易しい所となってしまったルートも、最初は逐一スタカットでたんねんにたどり、後でお互にひやかし笑い合った程、皆の上を歩いたものだ。

ラウルは、あまり登山技術の方はしっかりしておらず、氷河に慣れない我々を頼りにしているような状態だった。しかし、彼は南米の人間のタイプにはめずらしい非常に律気な男で、日本人的な誠意をもって付き合える得がたい友達だった。日本の食糧だけが、約二週間寝食を共にし、今まで知らなかった日本人を理解することが出来たといって喜んでくれた。一緒に山を登ったことはともかく、外国人同志お互に心から理解出来たことは、何より嬉しいことだった。彼は翌日BCへ下り、そこからは馬で一人往路を帰っていった。

六月四日、中村、丸山、中川、倉知はCIより氷河上部の偵察に向った。すでにルート工作を終えた北氷河中段の雪原までは、アメリカ隊のルートに従ったのであるが、そこから先は全く未知の領域だった。北峰へ達するためには、この北氷河から、なんとかして南側の尾根を越え、その向うの南氷河に入る必要があった。この尾根はアメリカ隊の登ったピークに続く大きな尾根で、下部はかなり幅広くなって複雑な様子を見せていた。我々はこれをクリンチ尾根と呼んだが、今やこのクリンチ尾根を如何に乗り越すかが問題だった。北氷河をかなり上部までたどり、尾根が低く平らになったあたりをねらうか、クリンチ氏が教えてくれた下部の側壁のバンドへ取り付くか、あるいは尾根の端まで迂回するか、いずれかの方法を選ばなければならない。最初はまず先人のアドヴァイスに従って、岩壁の真中を斜めに横切っている雪のバンドを試みることにした。

空はカラリと晴れ上がり、焼けつくような灼熱の太陽を受けてギラギラ氷河が輝いていた。高度の影響さで、五体が非常にけだるく呆然として意志を失ったようにものうかった。雪のバンドを上目づかいににらみながら、軟雪をかぶった氷河を登っていくと、すぐにクレバスにぶつかり、左に右に大きく迂回しなければ

ならない。大きなクレバスをさけて登ろうとすると、小さなセラックが乱立し複雑な褶曲をした、極めて不安定な雪の迷路に入りこんでしまうのだ。いくらあせっても、なかなかバンドは近くならなかった。

アルファ米の昼食をすませてから、パーティを二つに分けて行動し、一旦上方へ登り上から迂回するのと、例の大雪原をトラバースし下の方から回り込むルートを探ることにした。上の方は相変わらずだったが、下のルートは一度危っかしいギャップを越えてしまうと、ゆるい斜面がバンドの下部まで続いており、案外簡単に岩壁の基部に達することができた。丸山と倉知はここでルート工作のため残り、中村と中川はバンドを登り尾根上に出た。軟雪のルンゼをつめれば、その上のバンドそのものは容易に突破できた。

一〇〇㍍以上もある尾根を横断し、岩の上に這い上って、やっと南氷河をのぞき込む。懸念していたように、その先は岩壁になって一〇〇㍍程切れ落ちている。とても南氷河への下降路にはならなかった。

午後からはいつも決まったようにガスがわくが、この日も例にもれず、すっかり視界を奪われてしまった。時間も遅くなったし、そこで引き返すことにする。見上げると、ガスの切れ間にプカヒルカが驚く程間近かに望まれた。下の方を見透して見ると、緩やかな雪壁が垣間見え一寸希望をつないでくれそうに見えた。

その後、悪天が続き、二日の停滞を余儀なくされた。先のルートが少しも定まっていない状態で、ジッとしているのは非常にはがゆいことだった。

迷路は開かれた

七日、今日こそはと、皆、気を張りつめてCIを出発した。中村、丸山、中島の三人は、北氷河の上部にクリンチ尾根を越える所はないものかと、北氷河をつめた。だが、クレバスに寸断された氷河は上に行く程悪く、どうやら五四〇〇㍍のあたりまで登ったものの、結局尾根に手もふれられないまま、諦めて引き返した。

一方、甘利と中川は四日に開いたルートを辿り、その先を偵察した。先日の引返点より尾根を下って行くことにする。やっかいなガスを呪いながら、切れ間を透してやっと先が岩壁ではないらしい所を見定め、慎重にスタカットで降りて行く。二〇㍍程の垂直に近いギャップを越すと、有難いことにその下には斜度四五度位のすっきりした雪壁が続いていた。一歩一歩着実に歩を移し、とうとう南氷河の底に降り立った。

下降点から更に、崩れそうなスノウブリッヂを渡り、氷河の真中に出た。五、六〇〇㍍程登った所に第二キャンプを建てるに格好の台地を見付けた。そこから更に時間の許す限り上部へ登ってみたが、南氷河は主稜線直下の巨大なアイスフォールまでは比較的おだやかであり、問題の最後のつめの氷壁も階段状になっていて可能性は充分考えられたので、以後この登路に集中してよいことを確信して勇躍引き返した。

翌日、CIから全員で荷上げに向った。ポーターのエミリオとパブロも加わった。重荷を背負ってのコンティニュアスほどつら

いものはない。いくら苦しくても休むわけにいかず、遅れると肩にかけたザイルで首をひっぱられ、呼吸を整えることもむずかしかった。

南氷河へ下る雪壁に固定ザイルを張り、南氷河下部の台地（五一五〇㍍）にC2を建てる。背後には、一九五七年フランスのテレイ隊が初登頂した峻峰タウイラフの、斧でそいだような鋭く美しいピラミッドがそびえ、その谷が、はるか下の方へなだらかなひろがりを見せていた。目指すプカヒルカの頂上は手前の巨大な岩稜にさえぎられて望めなかったが、キャンプサイトとしては全くすばらしい所である。この日、C2に中村、中川、中島の三名が入った。

六月九日。快晴。C2はアイスフォールの偵察に向う。C2からしばらくはゆるい氷河の登りだったが、五三〇〇㍍位のところから氷河は急に複雑な様相を呈して来た。南氷河が「く」の字形に曲るところで、巨大なクレバスが口を開けて行手を阻んでいた。下からはクレバスの位置がはっきり見えず、迷路の中を昆虫の試行錯誤のように、行っては引き返し、登っては降り、非常に骨の折れる登降を強いられた。

一見その上にルートが開けそうなところをめがけて、氷の断崖にアイスピトンをたたき込んでは攀じ登り、向う側をのぞくと不気味なクレバスによって完全に遮断されているということも一、二度ではなかったが、かろうじて左岸沿いにルートを見付けた。三段になったクレバスの上の、堅雪の斜面が唯一の突破口だった。

文字通り薄氷を踏む思いである。

このクレバス帯を抜けると、氷河はおだやかな台地になっていた。我々はブロック崩落の危険のない右側の尾根の下に第三キャンプの位置を確認し、C2へ下った。C3のキャンプサイトの台地は五四〇〇㍍、C2からわずか高差二五〇㍍の登りだったが、これに一〇時間を要した。それが下りは何と一時間もかからなかった。氷河の登攀技術は、一にも二にもルートファインディングである。アイスクライミングの技術に不安をもっていた我々であったが、氷河迷路に痛めつけられてみると、細かい技術よりもルートの選定ということが、いかに成功への大きな要因であるかを、身をもって悟った。

天候はようやく安定して来たが、プカヒルカはブランカの中でも最も東側に寄っているために、やはりガスが発生しやすく、午前中の快晴も午後には決まってガスに包まれ、夕刻になると又晴れ上る。したがってルートの偵察については、午前中をうまく利用することが重要だった。

南緯八度付近に位置するブランカでは、熱帯アンデスの特徴として陽の照っている時は頻る暑く、陽がかげると寒い。ことに夜間の寒気は相当烈しい。日較差が五〇度ぐらいある。これによって花キャベツのような見事なアンデスの氷が形成され、巨大な雪庇が発達するのである。また、冬期には殆ど降雪を見せないため、雪崩の危険は少ないが、雪庇や急斜面からの氷のブロック崩落の危険は相当ある。時間は一定しているとはいえないが、午後と夜中にブロックの崩れ落ちる響音を頻繁に聞いた。今にも落ちそうな氷のブロック（小さなビルディングぐらいのものもある）の下

の通過を余儀なくされたことも再三あったが、幸い事なきを得た。登攀にあたって、強風が吹かないことは非常に楽だった。陽が照っていれば、カッターシャツの腕をまくり、軽々とピッケルを振って、風雪に明け暮れる日本の冬山とは違った快適な登攀を楽しむことが出来る。

また、アンデスの日没はつるべ落しである。夕刻の六時頃、アーベントロートが一瞬タウイラフをバラ色に染めたかと思うと、たちまちにして漆黒の闇が迫り、寒気がしのび寄ってくる。逆に夜明けは遅く、日中の焼けつくような三〇度C近くにも昇る暑さに比べて、長い寒い夜をへ（マイナス二〇度C位）を過さねばならない。アタックに出かけるような特別な場合を除いては、普通の日の行動は夜が明け切り凍った空気がゆるんでくる頃でないと、始める気になれなかった。

アイスフォールの試登

南氷河へ偵察隊が出ていた時、下のキャンプ間では、北氷河の大雪原を中継地にして、精力的に荷上げが行なわれていた。九日には、延三〇日人分の食糧と、登攀に必要な最低限の装備が、C2に集積された。

食糧は色分けしたカートン・ボックスの中にきちんと一二食分づつ詰められているので、荷上量を確実に把握出来て、非常に便利である。箱を開ける度に、この荷造を手伝ってくれた多くの岳友達の協力を思わずにはおれなかった。箱の中の一つに、誰が入れたのか、数冊の週刊誌が詰め込まれてあったのだろうが、彼の思惑は見事に当って、こうした緊張した情況の中で、けだしそれは一服の清涼剤であった。

この日、C2には新らしく甘利、倉知、エミリオが入り、引き続いてキャンプを伸ばす体制が整った。北氷河中段に建設予定のC3から懸案のアイスフォールを越え頂上へ達するのは、一日では一寸難かしいように思われたが、決して不可能という程でもなかった。少々気が早いかも知れないが、既にC2へ荷上げされている三〇日人分の食糧をフルに活用し、一二日人分を直ちにC3へ運び上げて、三人のメンバーにより波状的に三回の試登をなす、という計画が考えられた。万全を期して完全な登頂体制にもっていくためには、更に幾何かの食糧と器材が必要であり、もう二、三日の余裕をもって、ベースキャンプから一連の荷上げをなさねばならなかった。それには更に貴重な日数と非常な労力を費さなくてはならない。今、登頂体制に入るということは、C2より下からの補給は殆ど絶って、今の装備のみで登頂に全力を集中することを意味する。他に、下で着実に補給作業を行なうべきメンバーの余裕はなかった。もし予想以上にアイスフォールが手強く、三回の試みで突破出来なくなったら、大分苦しい立場に追い込まれるだろう。だがチャンスは逃すなということもある。それにこの山はそんなに悪くないという、ばくぜんとしたカンみたいなものも働いた。勝負は短期間になされねばならないが、とにかく腹を決めて当ってみることにした。

翌一〇日、C1へ食糧調整に降りる中川を除いて五人でC3の

建設に向った。高度も五〇〇〇㍍を越えると、空身で登っている分には馴化されているのであまり苦しくはなかったが、ボッカとなると窒息するのではないかと思うほどしんどかった。途中、どうしても飛び越えねばならない小さなクレバスがあるので、クレバスのしわ寄ったツギ目の所に、持参したジュラルミン製の梯子を固定した。日が経って巾が広がっても大丈夫なように、両側をザイルでしっかり張り万全を期した。又、C3予定地の台地へつづく雪壁には二〇㍍の縄梯子を取り付けた。梯子の端の所が丁度クレバスにかかって、梯子に乗る時にイヤな気のする所だった。

C3は予定通り、右側寄りの小高くなった台地に設営した。そこからC2は見えなかったが、南氷河の蛇腹状にくねった氷の見事なうねりが一望の内に見渡せた。上を振り仰ぐと、錯綜し崩壊した巨大な氷塊が積み重なって、威圧的に見る者にのしかかってくる様だった。上部には屋根のヒサシの様に顕著に張り出した雪庇がかぶさり、その上にわずかにのぞいたゆるやかな雪の斜面と下のアイスフォールを両断している。キャンプサイトからクリンチ尾根の方へ少し登って見ると、アイスフォールの上の斜面が望まれ、ガスの間に頂上らしき山塊が見えかくれしていた。

甘利、中島、倉知の三人が、アイスフォール試登のためC3に入った。もちろん出来れば頂上まで行くつもりであったが、まずはこのアイスフォールの突破口を見付けることが出来ればよいと思っていた。次に倉知によるその時の偵察の記録を引用しよう。

一一日。晴後曇。六時C3を後にする。もっと早く出たかったが、暗闇の中で初めての氷壁を登る訳にもいかないので、明るくなる三〇分位前にしたのである。昨日C3に着いてから、つらつら氷壁をながめて、これならヒョッとして頂上まで行けるんじゃないか、という非常に希望的な感じを持ったので、三人ともひどく張り切っていた。明るい内に頂上へ達せられる見通しがついたら、後の人には悪いが断乎頂上はいただく、というつもりで完全なビヴァークの用意をした。そこで、エクスランの綿入れ防寒服上下、ストーブ、ツェルト等を持ったらリングをかつがなくてはならなくなった。

C3から氷河中央の、デブリのつまった広い溝へトラバースし、その左端を登る。ブロックを積みかさねた様なこのアイスフォールには、真中の巨大な出っぱりをはさんで、左右にルンゼ状の登れそうなヘコミがある。その内、右の方のがすっきりしているが、どうもブロック雪崩のラビーネンツークらしくて、下に巨大なデブリがゴロゴロしている。登り易そうで誘惑的だったがこれは敬遠し、何だか複雑で親しめない左のルンゼに取り付くことにした。

氷の上に乾いた雪が薄く積っている、いわば〝雪氷壁〟であ る。二、三度ピッケルを振って足場を切り、あとはアイゼンの前に突き出た二本のツァッケをキュッとひっかけて、グイグイ登る。四〇㍍いっぱいに二ピッチ登ると、又クレバスだ。だがこれは右手に大きなブロックが乗っているので、その腹をまけば何とかなるようだ。

しかし、ここまででもうかなり時間が経っているのを知って驚いた。所詮頂上は無理だナ、と淡い失望を感じ、三人とも拍子抜けした体だったが、ともかくも行ける所迄は行くつもりで再出発する。難儀の素のビヴァーク道具は一切そこにデポする。明日の

パーティがここまで運ぶ労力を節約出来るのだから、まんざら無駄ではなかったと慰めながら。

と、突然、地の底から湧き上るようなドドーッという音。一瞬、青くなったが、あたりに何の変化もない。どうやら左のルンゼのブロック崩落だったらしい。ヤレヤレ、あっちを選ばなくてよかったと胸を撫ぜ下ろした。それから、クレバス沿いに一ピッチとり、雪壁をトラバースしてクレバスを渡った。雪壁を回り込む様にして渡り切ると、目の前には又、三本のクレバスが待っていた。しかし小さいので、ポンポンと飛んで向う側に立った。この一つのクレバスはかなり口が開き、少し助走をつけて飛び越さねば渡れないようになった。氷は大分はげしく移動しているようで、もう数日後だったらここを渡るにも相当難渋しなければならなかったろう。

そこからは、いよいよ蒼氷の張りつめた傾斜六〇度ほどの氷壁だった。二〇㍍位だったが悪場の名にふさわしいものだった。つま先の二本のツァッケに全神経を集中し、ピッケルのピックでバランスをとりながら静かに体を持ち上げ、慎重にこれを登り切った。

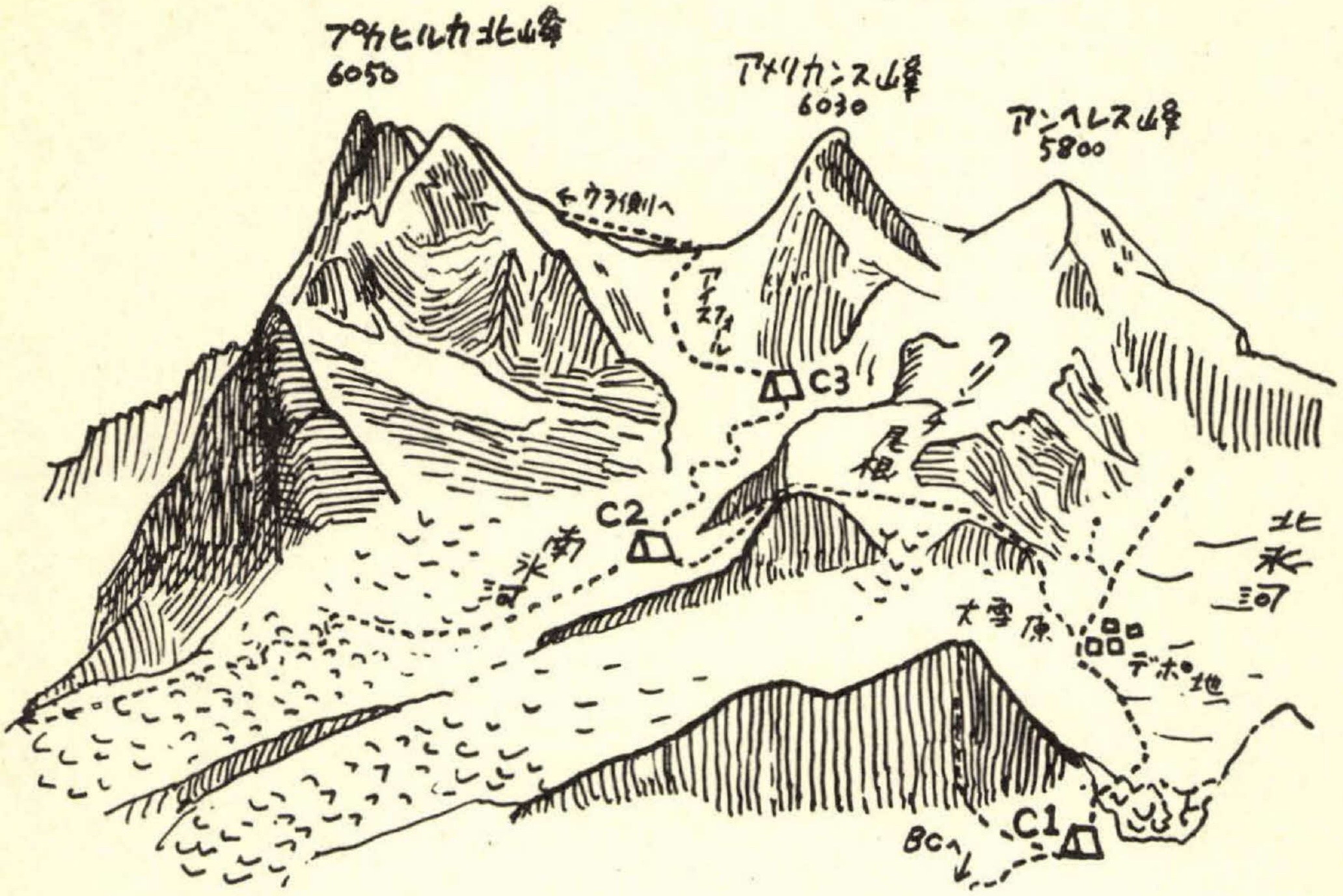
見上げると、頭上には駅の屋根を思わせる巨大な雪庇がかぶさっていた。その端には真下に向けてこれ又馬鹿でかいつららが突き出ている。口を開けて見とれていると、上下感がわからなくなって来て、頭がフラフラしとてもかなわない。

この雪庇の突破口は、二つの雪庇の合わさった違い目あたりか考えられなかった。その下はキラキラ輝いている氷壁になっているが、それは何とか登れそうだった。我々はその氷壁に向って右上へトラバース気味に登っていった。氷壁の下の氷棚まで達すると、もう午後二時だった。雪庇を越えれば頂上が見えるはずだから、ぜひ今日の内に登ってみたかったが、それにはまだ相当時間がかかりそうだった。帰りには固定ザイルを取り付けたり、ルート工作もしなければならない。この辺で引き返すのが妥当な様なので、ハーケン類から手袋などまで、明日のために残せる物は皆そこに置き、帰途に着いた。

下から六ピッチの間に、スノウ・バー六本、アイスハーケン八本を使い、固定ザイルを二〇〇㍍ほど張った。スノウ　バーはクリンチ氏の助言によって、この遠征のため特にあつらえた長さ一㍍程のジュラルミン製パイプである。硬雪、軟雪を問わず、固定ザイルやアップザイレンの支点として、いかんなくその威力を発揮してくれた。

この日、隊長は全員の士気を鼓舞するため、C2まで登って来た。息こそはずんでいたものの、元気一ぱいに、一歩一歩決めつける様なその持前の独特な歩調で、闊歩して来たものだ。

隊長が到着してから、C2の三人はC3へ登り、夕方C3へ六人が集合した。中村、中川、中島が次に試登することに決まり、後の三人はC2へ下った。



登頂——南十字星のビヴァーク

六月一二日。晴のち曇。午前五時四〇分、中村、中川、中島の三人はC3を出発した。デブリの多い氷河の本流を横断し、急な氷のルンゼに入り、そして蒼氷の張りつめた氷壁を登って氷棚へ出る。そこまでは、前日試登を行なった甘利達によってルートが切り開かれ固定ザイルが張られているので、わずか二時間半で到達することが出来た。氷棚で荷物をつめなおした我々は、頂上をめざして手さぐりの前進を始める。背中のサブザックはそれぞれ一五キロ、ビヴァークを考慮しているので相当な重さになってしまった。

氷棚を四〇メートルのザイル一ぱいにトラバースし、上の台地へつづく急な氷壁の登攀へ移る。熱帯下だから氷は特殊な発達をし、非常に密度の高い、硬い氷となって我々の前にたちふさがっている。このことは当初から充分頭に入れ、種々な型のアイスハーケンを作成し携行して来ていたが、中でも特別につくらせたコの字型とパイプ型のアイスハーケンが実に有効であった。日本で多く用いられている平型のものやV型のはすぐに曲ってしまう。

さて傾斜六〇度ばかりのこの氷壁は、虎の子のコの字型二八チンのアイスハーケンを三本打って這いあがった。ステップカッティングの連続なので、腕がすっかりきかなくなってしまった。上の雪庇を右にまいてやっと上の台地にあがると、初めてプカヒルカ北峰の全貌が姿を現わした。

意外なことに、今まで苦労して登攀を続けて来た氷河は、プカヒルカ北峰とアメリカン峰の間のコルから落ちている大氷河の末端に過ぎず、そこからはるか彼方までゆるやかな雪原が続いている。しかも、すぐ目の前で、幅一〇㍍、深さは不明な程の巨大なクレバスで切断されているではないか。見渡す限り、数百㍍にもわたって、あちら側とこちら側とをきびしく分断し、一寸たりともつながっている部分は発見出来そうもなかった。クレバスにルートを阻まれ、大きな回り道を余儀なくされたことは、今まで数え切れない程あった。どんな思いがけない所に口をあけていても、そんな意外なことが氷河では当り前なのだと考えるようにさえなっていた。ところが、このクレバスだけは、まわり道の余地を与えない程広く、長く、傲然と行手を阻んでいるのだ。

朝からガスの多い思わしくない天気であったのが、今はミゾレさえ降りはじめる。三人の間に陰うつな空気が流れた。最後の手段として、ブロックのつまった浅くなったあたりを選んで、クレバスの中へ降りて見た。すると一ヵ所だけ、対岸とつながっている部分を発見することが出来た。それも、こちら岸の大きなローソクみたいな形をしたブロックの端が、対岸の雪庇につながっただけのものである。もし、そこを通るとすれば、非常に不安定で危険なルートといわねばならない。しかし、もし退却を考えないなら、この氷塔と雪庇の登攀を行う以外に方法はない。

しばらく三人で協議した末、中川がトップで登攀を始める。高さ二〇㍍のテラテラの蒼氷の上にアイスバイルでステップを切り、ジリジリと登り続ける。氷の上できしるアイゼンの音が無気味に聞えてくる。時々アイスハーケンを打ち過ごすことができた。無限の雪原に、終りない歩みを続けているような重苦しい感じだった。

しかし、コルまで行かないうちにガスに切れ目が現われて北峰

の頂上が見え出した。われわれのささやかな予想が的中したことが、何か大きな収穫をした時のようにうれしかった。周囲は明るくなって、陽光さえプカヒルカの頂上を照し始め、登頂の成算も懸念から確信に変っていった。五時近く、コルより少し上の尾根に出た頃は、雲足も落着きを示して、われわれの焦燥感を和らげてくれた。

尾根の上に出れば、もう頂上は指呼の内にある。気持ははやるが、やはり六〇〇〇㍍のアンデスである。息がつまりそうで一投足が苦しい。後で知ったことであるが、二人とも自分の齢の歩数だけ歩いては、立止って呼吸を整えていた。頂上直下は一〇〇㍍ばかりの急な雪壁になっていた。折りしもアーベントロートに映えて、見上げる頂上もバラ色に輝いていた。

六時一五分、宿願のプカヒルカに立つ。

さすがにうれしさは抑え切れなかった。どっと湧き上るような感激を味わう余裕はないが、「登ったんだ！」と自分に言い聞かせた。頂上は小さな雪庇になっていて、無邪気に跳ね回るのを許さないほど不安定なところだった。周囲のコルディエラ・ブランカの山々も落日の中に消えようとしていた。サンタ・クルスを中心にして、アルパマヨ、キタラフと、写真で親しんで来た麗峰もなにか平凡に見えて仕方なかった。レイズンの空箱に、登頂の記録を書き入れた紙切れを封入して、雪の中に埋めた。

われわれには、まだ帰幕という仕事が残されていた。六時四五分、旗（ペルー・日本・一橋大学）をスノウ・バーに結びつけ、しっかり差し込んでから下降を始めた。

うす暗がりの闇の中をライトを頼りに雪壁を下る。下の雪原の安全地帯に降り立った時、頂上はすでに漆黒の闇の中で見ることは出来なかったが、安堵感と共に、登ったという楽しさがこみ上げてきた。登りのシュプールに導びかれて、例のクレバスの手前まで来たら、もう九時を少し過ぎていた。そこでツェルトをかぶりビヴァークすることにする。

アンデスのビヴァークは、ヨーロッパ・アルプスのそうそうたる登山家達も敬遠している程のつらいものであると聞いていたが、やはり相当なものだった。日本の冬山よりは万事楽だろうという想像は、このビヴァークについてだけは残念ながらはずれた。完璧に近い装備にもかかわらず僅かの仮眠も許さないほどの寒気に、平然と耐えることが出来たのも、登頂したという大きな満足があったからであろう。ローソクの灯を見つめ、凍りつくようなひざを抱えて時間の経つのを待った。灯が消えると、ツェルトを通して見える南十字星が、日本から遙か遠いアンデスにいることを、寒さとともにひしひしと感じさせた。ようやく沸した一ぱいのココアが実に旨かった。

夜明けの遅いこともアンデスの特徴の一つである。日没も早い上に、朝は六時にならねば明るくならないので、ビヴァークの苦痛もそれだけ長いわけである。翌朝六時二〇分、ビヴァーク地点を後にした。疲れでぎこちない体にむち打って、やっとのことで例の大クレバスを渡り、雪庇の下へ回り込んだ。そこで下から登って来た甘利達に出会った。頂上へ向う彼等を見送ってから、更に下降を続ける。C3を通過し、長い曲りくねった道をトボトボ下り、やっとC2へ戻った時には、三人とも足元がおぼつかない程疲れ切っていた。

続いて第二登

甘利、丸山、倉知の三人は一三日、第二登をした。次の記録は甘利による登頂記である。

先日の偵察のようすから考えると、最後の氷壁さえ乗り越せばあとは大したこともなさそうだったので、おそらく三人はその日の内に帰って来るだろうと思っていた。大分遅くまで待っていたが、もし失敗していたら明日こそで、とにかく明日は頂上まで行くつもりで万全の用意をし、なら機を逸せず第二登をしたい。とが起っているのか、あらゆる場合を想定し心の準備を整えるに努めたが、非常に複雑な気持であった。

翌朝。不安と緊張でひどく重苦しい気分につつまれたまま、暗闇の中を出発する。知った道だから今度は非常に速い。氷河全体が不気味なにぶい赤に染まって夜が明け、先日の引返点まで来た頃、やっとその不吉そうな赤が消えてくれた。

氷棚にデポしてあった荷を調べていると、上の方でかすかな音がする。フト振り向くと、はたせるかな、雪庇の下に一つ、赤いヤッケが居た。続いて二人現われる。「登ッタカー」と大声で呼ぶ。三人共立止ったが、何も言わない。もう一度呼んだらやっと「登ッタゾー」という弱々しい返事が戻って来た。安心して、「早く降りてこい。」と叫ぶ。次の瞬間にはもう自分達の登ることを考えていた。三人は相当疲れているらしく、はがゆい程ゆっくりした動作でアップザイレンをして、一人一人近付いて来た。どの顔も疲労で不自然にひきつっている。うす汚れた黒い顔、血走った目、カサに割れた口びる。本当に御苦労サン。握手し、荷物を降ろしてから、やっと微笑が彼等の口元に現われた。我々三人が様子を聞きたがって、機関銃のように質問を発するのに、返事はほとんど二言三言。それでも、徐々に気をとりなおして、普段の冗談もとび出すようになったし、めんどくさそうな口元から、何とか一部始終を聞き出すことが出来た。

どうやら頂上は一日で往復出来そうだ。ビヴァークの小道具は一切そこに置き、身軽になって彼等と別かれた。目標とルートは定まり、他に懸念するべきことはなかったから、自然に気持ははやり立った。同じ所まで往復するだけではつまらないので、出来たらアメリカン峰もかせいでしまうつもりだった。頂上の雪庇は向う側に張り出しているから、ただ単純な氷壁を登るだけのはずだった。

例の大クレバスは、固定ザイルがはってあっても、通過するのはなかなかどうして楽ではなかった。それを越え一息ついたものの、時間が惜しいので腹ごしらえもそこそこに、直ぐ登り続ける。空はきれいに晴れ上って陽光が輝いている。うねうね続く白い雪原に何条かのきたなく乱れた足跡が伸びていた。所々、申し訳けのように赤旗が立っている。この無垢の処女地はなるべくその美的調和を乱さないように通りたいものだ。

いくら気がせいても高度の影響はのがれるべくもない。まもな

く歩調はすっかり落ちて、行けども行けども一向にはかどるようすもなかった。後刻、頂上から見降ろした時、コルからアイスフォールまでつづくこの雪原が、実に細長く続いているのを知った。思っていたより、うんと奥行きの深い山だったのだ。

コルを越した頃から段々ガスが湧き出す。午後二時、頂上に立った時は全くの雲の中だった。きのうの三人は日没で殆ど写真が撮れなかったというので、今こそ腕の見せ時と、カメラを撫ぜて期待していたのだが、ガスではさっぱりアテはずれだった。だが、恒例の夕晴れを空頼みに、とにかく晴れ上るまで待つことにする。せまい頂上に三人並んですわり、ツェルトを引っかぶって待機の体制に入った。おかげでアメリカン峰の方はおあずけになってしまった。第一、このガスではどこから取り付いていいかもわからんから、これはもう問題でなくなった。

うめてあったレイズンの箱に我々の名簿も加える。しゃべり、食い、そして時々外をのぞいてみる。だがさっぱり晴れるけはいもなし。二時間も待ったあげく、とうとうあきらめて腰を上げた。

ところが、一ピッチ降り頂上の山塊の肩に出た時、にわかに頭上が明るくなって、青空がのぞいた。待望の夕晴れだ。一枚々々舞台の幕が上がるように、見る見るピークが顔を出す。中央峰のギザギザの稜線はすごい。よく目をこらしてみたが、イタリア人が登った形跡はないようだった。(後で聞いたら彼等は奇しくもほんのこの一時間程後に登ったそうだ) 南峰はおっとりしたかっこういい山だ。結構悪そうで、シュナイダーが一人で登ったとは信じられない位である。遠くの山々はまだ霧にかすんでパッとしない。でも、フィルムのある限りパチパチ撮りまくった。

大分遅れてしまったので、下りは無中だった。あのクレバスとその下の氷壁は、明るい内に通らないとやっかいなことになる。駆けるように雪原を降り、難関は無事通り過ぎて、うす暗くなる頃から、闇の中にルートを見透し、フラフラになってC3へ戻った。氷壁の下に着いた。それからボーッとした頭を一生懸命働かせな

翌一四日、C3を撤収し全員C2に収まってから、当隊切ってのスラッガー中島が選ばれて、ベースキャンプの隊長まで登頂成るの伝令に下った。隊長は一昨日登頂の成否を知らないままBCに戻ったのだ。中島はC2から、何とたったの二時間一〇分でBCへ降りてしまった。この会見記は隊長の手記を引用させてもらおう。

あたりに夕闇の迫るころ、山の方から何か声がした。時計を見ると五時五五分。あわててテントの外へ出る。ヘッド・ランプがチラチラ見えがくれしながらジグザグに降りてくる。しばらく見えなかったと思ったら今度は真直ぐこちらに向って近づいて来た。暗闇にも青い防寒服だとわかる。

やったなと思う。それでも不安で登頂かーと大声で聞くと、全員登頂ですと答える。君は誰だーというと、中島でーすと、その小さなあかりが返事をした。

初登頂の伝令ついに到着。C2からC1を素通りしてここまではるばる来てくれたのだ。全員登頂、しかも無事故。万感胸に迫り、私は中島の手を強く握り、そして両の肩を抱きしめ、そうか、そうか、よくやったぞ、ビヴァークは寒かったか、そうだろ

う、そうだろう、それにしてもよくやったぞ。何だか云うことが段々しどろもどろになって来て、私は押え切れずにまた泣いた。とんだ泣虫があったものだ。それでもやったんだ。こんな嬉しいことが二度とあるものか。山岳部の連中もさぞ喜ぶことだろう。

中島はセルベサをやりましょうという。セルベサってなんだっけ、ビールですよ、あ、そうだった、デメ、早く出せ、三人して缶のふたをきり、サルー（乾杯の意）と叫んでグッと呑む……。

イタリア隊を訪問する

北峰を落したら次はアメリカン峰をやろう、と以前から話し合っていた。しかし、今はもうあまり余裕がないのでそれは中止し、代りに中央峰方面へ踏査隊を出すことにした。今までは北峰と中央峰が混同されていた位だから、もちろんこの二つの山の間を結びつけた者はいない。南峰付近まで踏査し、プカヒルカ連峰の全貌を明らかにするのは、大いに価値あることだった。一五日、丸山と倉知の二人が二日間の予定で出発した。その時の様子は倉知の手記に語ってもらうことにする。

朝起きて見ると、ガスが重苦しくたれ込めていてどうも芳しくないが、とにかくラーメンをそそくさとかき込んで出発する。ツェルトと寝袋をかついで行ける所まで行き、次の日に付近の偵察をして、その日の内に帰って来る、というせわしい予定である。

霧に閉された氷河には、声をひそめて黙り込んでいるような無気味さがある。不規則にクシャクシャと褶曲した向うに何があるかという不安と期待、これに引き寄せられるかの様に歩き続けた。やがて、北峰より東に伸びた岩尾根の末端を廻る。端は豪快な岩壁となって切れ落ちていた。尾根を廻り切って向う側に出ると、広々した雪原だった。その数百㍍先にはアイスフォールが一線を画して落ち込んでいる。その先はかすんで見えない。だが、中央峰の山麓を目指すには、大体そのアイスフォールの高度の辺りを水平に横断していけばよいという目算があったので、斜め上に向けて登り、アイスフォール中段の棚へ出た。それからは、ひどく複雑な地形を呈していたが、クレバスの端に沿ってうまい具合にルートを見付けることが出来た。

タウイラフから中央峰、北峰にわたる広い巾をもったこの氷河は、開いた扇が要に集中する様に、ハンカパンパの谷の中心へ流れ込み、巨大な滝となって谷底へ落ち込んでいる。そこへ氷塊が崩落するすさまじい轟きは、日夜あたりに響き渡っていたものだ。巨大な氷のかたまりが、一ヵ所に向けて押し合いへし合い流れ込んでいるのだから、この氷河は見るからに複雑な褶曲をなしていた。これを一日で横断出来るかどうかということは、当初から大きな疑問だったのだが、実際に当って見ると事は意外に簡単だった。途中二、三ヵ所不安定な所があってスタカットで慎重に渡った他は、概して悪場もなく、どんどんペースをあげて、夕方には中央峰の懐へ入り込むことが出来た。

中央峰から東に伸びる尾根を越えると、その向うは、今までの複雑な氷河とは打ってかわって、クレバス一つない真っ平らな大雪原だった。折りから、この日も決まった様に霧が上がり、たち

まちウソみたいな快晴となってしまった。

それは又、まったく素晴しい景観だった。大雪原をとりかこむ中央峰、タウイラフ、南峰、数々の無名峰、いずれもが夕日に濃い影を映し、ヒダの一つ一つまでが手に取るようにクッキリ浮き出ていた。C1から初めて氷河の上に立ち、プカヒルカ北峰やアメリカン峰を望んだ時、キレイダ、と思うと同時に、アンデスはこれだけのものか、という軽い失望にも似た何かを感じたものだった。発達したアイスフルートを特徴とするアンデス特有の華麗さがなかったし、まとまった形の美しさにも乏しかったからかも知れない。だがここの景観は丸で別物だった。これこそアンデスだ、と思った。息のつまる様な興奮を感じながら、一心に目をこらして眺めた。

この雪原からイタリア隊は中央峰を攻撃しているはずだった。双眼鏡をのぞいてみると、アッタ、赤旗が点々と立っている、黒い物体がみえる。だが動いているものは何もなかった。頂上から落ちる岩と氷のバットレスは圧倒的だ。彼等は一体どの辺りに取り付いたのだろう。一方、中央峰の左の陰、雪原の奥まったその向うには、南峰がその端正なピラミッド型をのぞかせている。雪原のその奥の院へ一歩足を踏み入れてみたい衝動を猛烈に感じる。その左には、低いが城砦の様な嶮しい山、二座。そしてゆるく平らにのびたコルへ連らなり、タウイラフへ続く。見慣れたタウイラフも、こう間近かに見ると強烈な印象を与える。切れそうなギザギザの稜線、一直線に伸びる見事なアイスフルート、調和のとれた山容、山岳美の極致。

この大パノラマは、陽が傾くにつれ少しづつ変化を見せ、やがて美しくバラ色に染ったかと思うと、一瞬灰色の冷い山と化した。直ちに鋭い寒気がおとずれる。我々は急いで防寒服を着込みツェルトをかぶった。

翌日は快晴で明けた。寒気が激しく、陽が照り出すまで待たねば出発出来ない程だった。一体これからどの方面へ行くべきか迷ったが、結局北から始めた横断を完成するべく、雪原の南端のコルへ向うことにする。きのうはこの大雪原の真中にビヴァークしたつもりでいたが、実際歩いてみると実に広い所で、真中どころかそれはほんの端っこに過ぎなかった。しばらく行くと、高さ二〇センチ程の三角旗を、短い間隔で並べたイタリア隊のルートに出た。その小さな旗には奇異な感じを持ったけれど、考えて見ると雪は殆ど降らない、ガスがわきやすい、という導標の並べ方は、実に合理的である。イタ公め、流石にウマクやってるナ、と小憎らしく思った。

コルに着くと、そこはイタリア人のキャンプ跡だった。明らかにもう撤収した後であった。コルの向うはサンタ・クルス渓谷に流れ込む巾広い氷河だった。そして、その彼方へ拡がった緑の谷が、岩と雪ばかりに慣れた目にあざやかに映って見えた。谷をへだてた向うには、又新らしい山並が続く。パチパチ、シャッターを切る。

フト、下を見ると、何と人が居る。五人、並んで登ってくる。やがて、向うもこちらに気が付いたらしく立止った。何事か顔を寄せて相談している。この二人のスラッとした色男を〝雪男〟と

間違えるはずはあるまい、手を振り親愛の情を表わしつつ、彼等の方へ降りて行く。

会ってみると、彼等はイタリア隊のポーター達だった。最後に残った荷物を、頂上バットレス直下のC3まで取りに行く所だった。エミリオの弟のマカリオも居た。聞くと、イタリア人達は一三日に登頂したと云う。オメデトウを云い合う。メンバーは皆、ベースキャンプに居る、そこまで一時間で行ける、ゼヒ会いに行け、と彼等は奨めてくれた。

今日中にC2へ戻らなくてはならないのだが、もしイタリア隊のBCまで行くとすると、どうしても帰幕は明日になる。だが、ここまで来て彼等に会わないで帰る法はない、危険な事をする訳でもない、少々無茶だとしてもこの無茶は後日きっと価値あることとして認められるだろう。そう思って、上に登る彼等と別れて、我々は氷河を下った。

せっかく未知の山岳に入り込みながら、こうして神秘の大自然に背を向け、わざわざ人間に会いに行くというのは何たる矛盾かと思ったが、やっぱり我も人間、結局山も人間の認識あっての山であるということか。

氷河はずいぶんクレバスが多かったが、ルートは巧みに作られていた。これを降り切って、ひどく長く感じられたガレ場を通り越すとBCだった。

イタリア人達は皆、底抜けに陽気に騒いで歓迎してくれた。彼等はうらやましい程いい雰囲気を持っている。本当に心から山登りを楽しんでいるという風なのだ。スペイン語の片言と身振り手振りでは一時間経っても大して話は出来なかったが、雪原のビヴァーク点に戻るため、残念ながらすぐに帰らねばならなかった。それから、長い長い登りを終えて、うす暗くなる頃、やっと寝ぐらにたどり着いた。

約束を破って一日遅らしたことに対する罪悪感からかどうか、翌朝は馬鹿に早く目がさめ、決心した通りの早発ちが出来た。そして、追いかけられるような気持で、来た時の足跡をたどった。氷河では、一度通った道は二回目には驚く程速く歩くことが出来る。それにしても、来る時には一日たっぷりかかった道程をわずか二時間半程で走り通してしまったのには、いささか当人達が驚いた。C2へ戻り、大分気まずい思いをしたが、やるべきことをやったという満足感が胸いっぱいひろがってゆくのを、どうすることも出来なかった。

言いたいことがいっぱいあったが、とにかく成果を上げて無事に帰って来てくれたのでうれしかった。だが、食料も少ないし下で心配するといけないので、疲れた二人には御苦労だったが、予定通りすぐC2を撤収することにした。中島もC1から手伝いに登って来た。四人して荷物をまとめ、長い間お世話になった氷河に別れをつげた。ハシゴや固定ザイルを撤収していくと、結構な荷物になって最後の奮闘を強いられた。

C1に着くと、ポーター二人が登って来ていたので、思い切って、そのままC1も撤収してしまうことにし、大挙してBCに向った。途中で暗くなつたが、とにかく全員無事にBCへ着き、とうとうプカヒルカを終えた。

その晩は豪勢な焚火を囲んで、夜の更けるまで大いに騒ぎ、呑

み、踊った。ポーター達が即席の〝プカヒルカ勝利の歌〟を歌ってくれて、フィナーレをかざった。

帰路

我々が山に登っている間に、遠くから来た異人が山に居るゾ、というようなウワサがこの近辺にひびき渡ったのであろう。この周辺の土地を一手に握っているビニャウヤというアシェンダ（大荘園）の管理人がベースキャンプを訪れた。そのついでに、帰りのキャラバンに使う駄獣を彼のアシェンダで調達してもらう話がついたので、早速エミリオをその交渉に降ろした。

それが終って、エミリオが馬を引き連れ戻ってきたのは二一日だった。それまでの三日間は、やっと我々に許された天下御免の休養日となった。ある者は終日、草のしとねに寝ころがり、見物に来たインディオ達と遊んで暮らした。まだ動き足りない者は、キャンプの裏山を散歩したり、北の谷をつめて未踏のコルに勝手な名前を着けて来たりした。又、向学心に燃える若者達は、麓のハノカパンパ部落に泊り込み、目と耳でインディオの社会組織などの実証的研究を試みた。各人とも好きなままに休日をすごし、豊かな想い出のたくわえをしたのだった。

二二日、お別れの日が来た。思えば短い付合いだった。縁があれば又来よう。アディオス・プカヒルカよ。

登頂の御褒美に隊員に皆一頭づつ馬が与えられた。あらそって好みの馬を選び、颯爽と馬上の人となる。帰路は往路とちがって、コルディエラ・ブランカの北端を回るコースをとった。三日程で行けるパサカンチャという町まで行けば、鉱山用の自動車道があって、トラックが利用出来るのだ。

山の腹を幾つも曲がり、見えかくれするプカヒルカを振り返りながら駒を進めて行くと、暑い日射しにむせかえる様なアシェンダの屋敷に着いた。空気がやわらかく、とてもうまく感じる。そこから谷へ降り、谷の向うにあるポマバンバの町に向う。ポマバンバはこの辺りの物資の集散地でかなりにぎやかな開けた町、折りからのお祭りで景気よい。昔、ドイツ系の移民が住み込んで出来た町とかで、色の白い目鼻立ちの整ったのも多かった。彼等は、日本人などという世界のはての人種はもちろんかつて見たこともないから、我々が町を歩くと珍しがってゾロゾロと大挙してついてくる。こちらにしてもこんな経験はついぞないので、面白いやら、閉口するやら、体中がこそばゆかった。こんな僻地にもインテリは居るもので、日秘関係は如何にあるべきか、という議論を吹っかけて来たのが居たのには驚いた。この日はアシェンダの領主の親戚の家に泊った。好意で泊めてくれるのと思って遠慮勝ちにしていたら、あとでしこたま宿泊料をとられてしまった。だが何より有難いことに、貧弱なものだが温泉があって、久し振りに体の垢を落すことができた。

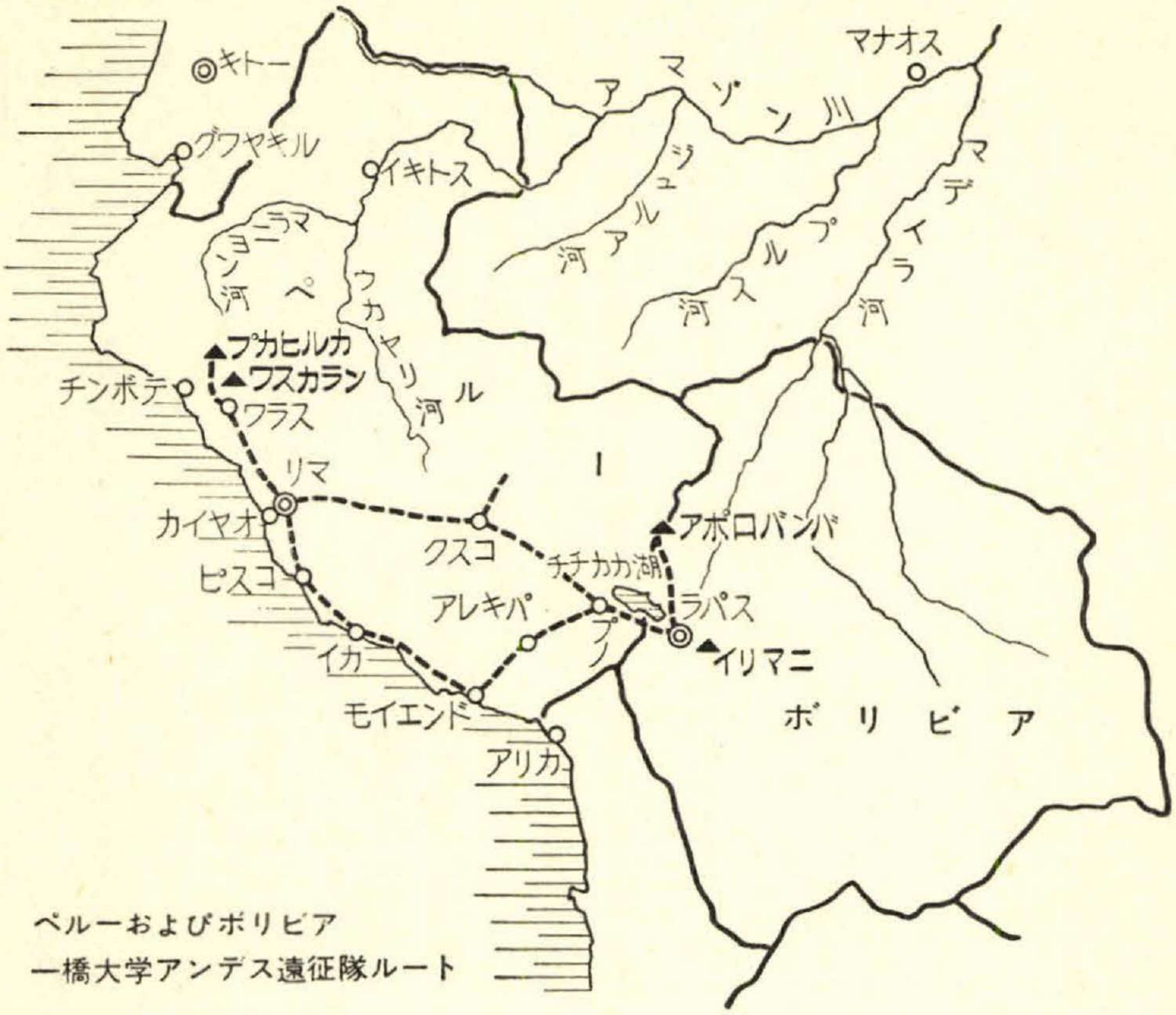
二三日、花火はじけるポマバンバを後に、北へ向う。谷を下り、広い平原を渡って、二つの峠を越えた。段々プカヒルカが小さくなった。途中で使っていたムーラ（馬とブーロの合いの子）が急死し、一悶着あった。弁償する、しないで馬方ともめて、とうとう

ワラスまで話がこじれたままだったが、結局わが方の勝訴に終った。次にアシェンダ・ビニャウヤへ入る日本人は、このウラミを晴らせられるかも知れないから、気を付けた方がよい。この日はチンチャバンバという部落にキャンプを張った。良い水が得られず苦労した所だった。

二四日、さらに一つの峠を越え、パサカンチャに到着した。直ぐにトラックを探し出し、馬からトラックに乗り換え、旅をつづける。けわしい山道を登り、ブランカの分水嶺を越えてサンタ渓谷側へ下る。夜の一二時も過ぎて、ワヤンカという町の近くにある外人向のホテルに着いた。やっと文明の世界へ戻って来た訳だ。文明の薫り溢るる建物に感激し、又、二五日もトラックの旅をつづける。一路サンタ渓谷をさかのぼり、夜遅くなって振り出しのワラスへ戻った。

ワラスでは又いろいろなことが待っていた。谷川さんの主催した登頂記念レセプションもあった。アンカッシュ県知事まで出席した盛大なものだった。日本の国歌とペルーの国歌の斉唱もあり、最後にインカ古来の民族舞踊ワイノにぎやかに踊った。

二八日、お世話になった谷川さん一家に別れをつげ、リマへ向った。皆、山に囲まれたこの小じんまりしたワラスが気に入って、なかなか離れ難かった。特に、短かったがとても親密になった谷川さんと別れるのはつらかった。おばさんや奥さんは泣いて別れを悲しがっていたのに、用がすめばサッサと帰らねばならない我々の身は本当に因果なものだった。



ペルーおよびボリビア
一橋大学アンデス遠征隊ルート

第三章

ペルーからボリビアへ

苦難の国境越え

倉知敬

リマに帰って来ると、すぐに次の目標・コルディエラ・アポロバンバのための準備が始まった。我々の出国手続、通関関係の書類作製、梱包、日本への報告・挨拶の老大な量の手紙……。

中でも、荷物の梱包・運搬に関する仕事は大変だった。特に我々のようにあちこち移動することの多い隊では、輸送問題は遠征のあらゆる局面に付いて回って来るのである。遠征の円滑な遂行のために、ひどくやっかいなことが要求された。日程に追われてこの細常に迅速かつ手際よい処理並大抵のことではなかった。かい仕事をやりとげるのは

夜はホテルで、隊長の部屋に全員集まり、今後のボリビアでの登山の方針について話し合った。第一に、アポロバンバのチャウピオルコ山群に残っていると思われる二つの未踏峰をねらい、次に未だ前人未踏のププヤ山群に踏み込むという、二段階の計画が

ここで最終的に決められた。

七月三日、現地での折衝と情報聴取のために、丸山が空路ラパス へ出発した。そして、翌日早朝には吉沢隊長以下、甘利、中村、中島の四人がコレクティボでリマを発った。中川と倉知は残っている仕事を片付けてから、荷物を運ぶトラックに便乗して行くことになった。

コレクティボの四人はペルー第二の都市・アレキッパまで、一〇〇〇余キロのハイウェイを一〇時間あまりとばし、その日はアレキッパに泊った。

翌日は、クスコまで通っている鉄道で、アンデスの高原に登って、チチカカ湖畔のプーノまで行き、そこからチチカカ湖横断の汽船に乗った。この汽車と船は乗換え時間が接続していて、その日の夜を徹して船旅をつづけることが出来た。そして翌朝には対岸のボリビア領、グァキに到着した。国境を越える時には別にトラブルもなくすんだ。

グァキからは再び汽車（ガソリン・カー）。一望千里のアルティ・プラノ（大高原）を行き、一一時頃ラパスに着いた。

町の入口の駅で、ボリビア山岳会の連中の出迎えに会い、汽車から降ろされて、彼等の用意したオンボロ自動車で町に入った。ボリビア山岳会はその後、我々の計画遂行を色々助けてくれた。もっとも彼等との付合いは、後日かえって事を面倒にするような念だった。

一方、リマに残された荷物と、中川、倉知の方はゴタゴタとした用事をすませて出発したのが五日の真夜中だった。三菱商事リマ支店の世話で、資材輸送の大型トラックとところが積荷が重いせいで、トラックはしか出せない。タクシーでは一〇時間程昼夜もかかってしまった。その間、二人をつづけ、我々二人は積荷の上と助手席た。その牛の歩みのような遅さには本当だ。

アレキッパには七日夜着、それからは山道なので中型トラックに乗りかえる。翌日は荷物の積みかえなどで一日つぶれ、九日早朝アレキッパを発った。フォード六〇年型の新車だったので、快適にアンデスの高原を走り、ようやく爽快な気分を味わうことが出来た。夕方プーノに到着、早速そこの邦人の有力者、原田氏に会ったが、国境の警備の厳しいことを知らされて驚いた。実際のだが、その国境をはさんでの間に一〇数余の関所があって、その一々に通行証を呈示しなければ通れないという。

困ったことには、先にボリビアへ行った丸山が通関手続一切をすませて国境で待っていてくれると思って、我々は何の通関書類も持って来てなかった。関所が沢山あるということは大使館では全然教えてもくれなかったし、予想するべくもなかった。原田氏は我々の不用意にあきれていたようだったが、すぐに税関や役所を回って交渉して下さった。役所の不能率と官僚性はどこでも同じことだろうが、こうした田舎ではひどいもので、話をつけるのが大変だった。結局保証人が必要だというので、一日中あちこち探して回った。

一方、パスポートは各自持参していたので人間の通関は簡単だった。中川は直ちにラパスに向かい、善後策をとることにした。電話電報は頼りにならないので、実際に行くより確実な連絡の方法はない。

ところが、コパカバナで丸山に会った中川は、丸山の方でも書類を用意していないことを知って唖然とした。すぐさまラパスに向かい、公使館を通じてリマの大使館に連絡した所、実は手違いで未だ書類そのものも出来ていないのだと判ってあわてた。

結局の所、二日間の原田氏の奔走のお陰で、原田氏を大使館の代理人として、税関から六〇日間のボリビア入国証を発行してもらうことが出来、貴重な「時」をついやさずに、この致命的な障害を乗り越えることが出来た。

一二日朝、勇躍プーノを出発、チチカカ湖の南端を回る道をコパカバナへ向った。要所要所には鉄道の踏切りのような横棒が道をさえ切っていて、それを通してもらうまでに何度も執拗な検査を受けなければならなかった。コパカバナで待期中の丸山に会い、ようやく安心した。その日はコパカバナ泊り。

一三日早朝、コパカバナを発つ。ティキナで一キロメートル位にせばまったチチカカ湖を、渡し舟で渡る。渡し終った所でラパスからの出迎えのトラックに出会ったので、荷物を積みかえ、今までのトラックはアレキッパルティ・プラノを半日走りつづけ、砂埃りで何もかも真白になってラパスに到着した。

ラパス日記

トラックの着いた翌々日には、もう山へ向けて出発することになったが、ラパスにはすでに三日から丸山が滞在しているので、その間の出来事については丸山の日記に語ってもらうことにしよう。

七月三日。空気が乾燥し澄み切っているので実にすがすがしい感じ。ラパス空港より公使館へ向う。後、トヨタ自動車の支店へ行き、河合さんに挨拶、荷物運搬用のトラックについてお願いをする。ホテル・ラパス泊。一泊三〇〇〇〇円)。貨幣単位の大きいのには全く閉口するボリビアーノ(一九九〇でふくれ上ってしまう。背広のポケットが札

七月四日。公使館へ行き更に打合せ。ボリビア山岳会の幹部に会う。連中は我々と山へ同行するつもりでメンバーまで決めてある。午後、街を散歩。ラパスは高原の真中にあるスリバチのような横棒が道になっている。街中到る所な所、谷間の最も低い所が高級住宅街となっている。街中到る所坂だらけで歩くのもきつい。ボリビアの社会ではインディオがペルーとは比較にならぬ程の力を持っているようで、ラパスではどこに行っても昔のままの衣服を身につけたインディオ達が街を濶歩している。現政府はブルジョア政権を倒し農民鉱山労働者をバックにして出来た急進左翼で、全人口の八五%をしめるインディオ達から強く支持されているそうだ。ペルーにくらべ親日的な国

で、感じがよい。

七月五日。ホテルを安い所に変える。今度のはホテル・アペニダ。一泊二〇〇〇ボリビアーノ（六六〇円）。受付のセニョリータがなかなか愛嬌があってよろしい。

七月六日。珍しく雲あり。午後、隊長以下四人が到着。到着時間がはっきりせぬまま、迎えに出れず。ボリビア山岳会のルームにて正式の打合せあり。先方は一緒に参加することを決めてしまい、日程を組み、予定表のファイルまで作ってある。仕方ないので合同遠征隊にすることにしたが、ファイルの表紙にはもうちゃんと、ボリビア・日本遠征隊（EXPEDICION BOLIVIANA-JAPONESA）と刷り込んであった。

七月七日。新聞社など、各方面へ挨拶回り。午後、公使館でボリビア山岳会と会談、遠征のイニシアチブは日本側が持つことを確認、ポーター雇用の件などを依頼する。ボリビア山岳会からはアルフレッド・マルチネス、ラウル・センテーノの二名が登攀隊員として参加する。他にもベースキャンプまでは数人が来るとのこと。

七日八日。下町（といっても高い所にあるが）のインディオの生活を見物に行く。リマのような非惨な貧しさはないようだ。夜はダンスなど楽しむ。

七月九日。丸山以外はボリビア山岳会の連中とチャカルタヤ・スキー場へ行く。世界最高の地点（五二八〇㍍）にあるという御自慢のスキー場だ。丸山はペルーからのトラックを出迎えにコパカバナへ行く。ホテルで日本製パチンコの機械にお目にかかった。

七月一〇日。ペルー領のユングヨまでトラックを迎えに行くも、遂に来ず。コパカバナへ戻る。

七月一一日。早朝、中川の声で起こされる。トラックは書類がとどいてないので足留めを喰っているという。冗談じゃナイ、足留めを喰っているのはこちらだ。リマの大使館で書類が揃っているかどうか調べておいてくれないとはひどい。中川はラパスへ向い、丸山は残って書類を待つことにする。（この手違いは、結局書類を頼まれた中川が、ねぼけて書類が整ったと感違いしたことに原因があった。それにしても、何日経っても連絡してくれない大使館も呑気なものだ。）

七月一二日。チチカカ湖で遊ぶ。夕方、倉知を乗せたトラックが着く。正式な書類がなくても通関が意外に簡単にすんだのはよかったが、又このコパカバナでも入国手続に手間どる。国境警備隊の中尉殿と仲よしになって、ピストル遊びなどする。

七月一三日。ラパスに全員そろう。

七月一四日。ヴィザの期日延期、私物の整理、買物といそがしい。ポーターは、ベナンシオ・パチャウェイという中年の男と、フリオ・チョケという若者に決まった。トヨタの河合氏宅の庭に待期している。トラックは荷物を積んで、かくて、準備完了。

先発隊、スチュス部落へ向かう

馬の調達の為に、中村、中島の二人がまず先に山へ向かうことになった。三井金属のジープを運転手付きで貸してもらい、一四

日出発した。以下は中村の手記による。

プエルト・アコスタまではチチカカ湖に沿った道で眺望は素晴しい。湖の神秘的な濃紺とアルティ・プラノの褐色の調和が美しい。プエルト・アコスタからは、アポロバンバに向って起伏の多いパンパ（高原）を行く。幾つかの人家と事務所が残っの白い峯が見え始めた。そしてウヤウヤへ。

ウヤウヤはパンパの真中にある寒村、折りから落日を映した人家には、人影は全くなく、迫りくる寒さと薄気味悪い風の音から廃村のような印象を受けた。ウヤウヤの標高は四六〇〇㍍。

途中からジープに乗せてやったスチェス部落に住んでいるインディオが、自分も馬を持っているし、スチェスでも更に必要なだけ雇うことが出来る、というのでスチェスに向かった。そのインディオは名前をワヌコといい、この辺のアイマラ・インディアンの中でもちょっとしたインテリ。スペイン語、アイマラ語、ケチュア語の三つの言葉を話す。

スチェスには以前、砂金のとれる鉱山があったが、今は廃鉱になっていてひどくさびれている。他に泊れるような所がないので、ワヌコの家に泊めて貰った。アドベ（土で造ったレンガ）造りの粗末な家だった。彼はアルパカ（アンデス特有の羊に似た動物）の肉とマイス（とうもろこし）を食べさせてくれた。アルパカの肉は味はあっさりしてまずくはないが、脂肪分のところに一寸と臭味がある。

夜は、アルパカの毛皮の上にポンチョをかぶって寝た。火の気がないのでとても寒い。特に夜中の冷え込みは激しかった。翌朝起きて見ると、パンパの表面は固く凍って、水の流れには氷が張りつめていた。

一五日には、スチェス湖のそばの自動車道路の終点までジープで入った。この辺りは鉱山の跡で、幾つかの人家と事務所が残っている。スチェス湖はペルーとボリビアの国境をなして細長く横たわり、その水は青く澄んで明るい感じである。この辺りには氷河湖が多く、大きな氷河の端には必ずといっていいくらい湖が形成されている。スチェス湖の彼方にはパンパが地平線まで拡がりこの涯しない高原の起伏の所々にはインディオのくすんだ人家が点在していた。

午後、中島は本隊を迎えにジープでウヤウヤへ戻った。一方中村は、スチェスのコマンド（部落長）の老人に会い、彼に馬の調達の世話をしてくれるように依頼した。その夜はそのコマンドの家に泊った。

インディオの家はどこも同じであるが、ここもアドベ造りの土蔵のような家、入口が一ヵ所と煙突がわりの穴がかまどの上の壁に一つ開いているだけだった。すみにはヤーマの毛皮の上にポンチョを二枚かけただけのベッドがある。家の中はほこりっぽく、その上、ヤーマやアルパカのふんを乾燥させた燃料をもやすので、すごくけむい。だが臭くはない。この燃料のことをケチュア語ではタキアという。

夕食は塩気の殆んどない、米とジャガイモとわずかに肉の入ったスープに、やいたジャガイモであった。火の気塩を少しくれ、といったら岩塩を大きな石でくだいて持って来てくれた。

四六〇〇米から四八〇〇米の高度に拡がるアポロバンバのアルティ・プラノはおそらく、人間の棲息している、世界で最も高い所だろう。同じアルティ・プラノでもチチカカ湖周辺の四〇〇〇米位の所と違って、農耕はいっさい出来ず、生活は牧畜だけに支えられている。

彼等の毎日の生活は、日の出と共にアルパカ達を追ってパンパに出て、牧草を求めさまよい歩き、陽の沈む頃また戻ってくるという放牧生活である。アルパカ、ヤーマ、羊等の放牧をしてその毛皮をとるのだ。そして一年に数度、とれた毛皮を持って一〇〇キロ近くも離れた町まで出かけて、米、とうもろこし、じゃがいも、塩、砂糖等の必需品を手に入れるのである。

一六日午前一〇時、意外に早く本隊がやって来た。相談の末、我々二人は馬の集まるまでここに残ることになった。食料を少し降ろしてから、本隊のトラックはペルー側の自動車道の方へ向けて、パンパの丘の陰に消えていった。

七月一六日はラパスの創立祭で、インディオ達にとっては唯一の楽しみのフィエスタ(お祭り)であるが、馬の調達を出来るだけ早く済ませなければならない我々の方は、お祭りで今日も一日無駄に過さなければならぬと思うと気が気ではなかった。インディオ達は太鼓を打ち鳴らし、笛を吹き、三々五々コマンドの家に集まり、そろった所で教会に出かけた。教会といっても人間が常駐している訳ではなく、祭りの時だけ使われる粗末なものである。教会ではボリビアの国旗をかかげて、笛太鼓に合わせてただ歩き回り、アルコールを薄めただけの酒を飲み、イさわいでいるだけだった。インディオの女達も来ていたが、こちらの方は近くに座り込んでじっと男達のさわぎを見つめているだけだった。インディオの祭りに期待をもって見に出かけたのだが、実に趣きのないものだった。

大勢集まっている所で馬の交渉をすれば何とかなろう、と思って、コマンドを通して話してもらったが、アルコールで酔いの回っているインディオ相手では無理な話だった。しかしどうにか馬二頭とヤーマ二〇頭を翌日でよかったら貸すという男が見つかったのは、拾いものだった。

中島は、先日泊めてもらった近くのワヌコの家に行ったが、会えずに帰って来た。近くといってもコマンドの家から往復二〇キロも離れている所である。

教会から帰って来たインディオ達はコマンドの家で翌日の朝二時頃まで、殆んど徹夜で飲み明かした。暗い土蔵のような家の中で、古ぼけた蓄音機をかけ笛を吹き、太鼓をたたいてワイノを踊った。ほの暗い灯のもとで踊りとも足ぶみともつかぬことをして、夜の更けるまでアルコールを飲んでいる姿を見ていると、文明の果てに住む民族のわびしさを感ぜざるを得なかった。いつ終るとも知れないこの淋しい宴を夢枕に、我々は同じ土蔵の片隅でアルパカの毛皮の上にポンチョを被って横になったが、眠りにつくまでには相当時間がかかった。

翌一七日、今日こそ馬の交渉を何んとかつけなければならないと思って思案していた所、コマンドが、我々に貸してくれるはず

であった馬が三頭、行方不明になってしまったと泣きごとを云い始めた。又、前夜約束してあったヤーマ二〇頭が時間になっても来ないので、そのインディオの家まで行って問いただした所、ニヤニヤしながら、

「ヤーマなど居ない。馬は一頭持っているが貸したくない。」

と云うではないか。あまりのことに唖然としてしまった。そこで、すぐ近くのインディオの所に行って交渉した所、馬は一頭居るが貸したくないと、これもまた同じ返事だった。金はいくら払うといっても、貸したくないの一点張り。インディオ達は驚くほど金に執着がなく、金を受け取るよりも馬を貸してやって働くことの方が面倒らしかった。この僻地では金も即座に利用出来ないせいかも知れない。

次に、前日のフィエスタの折に約束した男の所に行ったら、二日酔で仕事をしたくないから明日にしてくれと云われ、こんなことではいつ馬を集められるかと思って、全く暗澹とした気持になってしまった。

中島は御苦労にも、またワヌコの家に出かけたが、行き違いにワヌコは馬三頭をつれてコマンドの家にやって来た。又、コマンドの馬も二頭は帰って来たので、それらと前日約束をした他のインディオの馬二頭とヤーマ二〇頭をやとって、明日本隊の後を追うことにした。

午後はポカンと陽だまりの中で無為に過した。涯しないパンパと澄み渡った碧空、そして白い山なみを前に、時間の経過も止まったようなひとときだった。一人とぼとぼとパンパを歩いていると、インディオの表情を石のように固くさせている大自然の大きさを感じないわけにはいかなかった。

やがて陽が傾き、アルパカ達が長い影をつくって寝ぐらに戻って来る。教えられることもなく、石を積み上げた囲いの中におとなしく一頭々々うずくまった。アルパカは非常にかわいい動物だが、写真など撮りに近づくと長い首をこちらに向け、更に近づくと逃げていってしまう。

これでインディオの家に泊るのも四晩目だが、晩食は相変わらず砂まじりの、色だけのコーヒーととうもろこしのスープだけである。インディオ達は殆ど朝も昼も食べず、晩食だけの一日一食らしい。それだけで、よくこの苛酷な自然の中で生きるに必要なカロリーをとれるものだと感心した。そういう我々も予想外の長逗留で手持ちの食糧もなくなり、空腹に悩まされた。

一八日、一〇時頃、ワヌコが馬五頭とヤーマ二〇頭をつれて来た。約束の時間に二時間も遅れていて、また騙されたかと思っていた所なので、まずまず安心した。これにコマンドの馬二頭を加えて出発した。アリエロはワヌコの他にアイマラ・インディアン三人、荷物は殆どなかったので、皆馬に乗って行った。

馬といっても鞍などつけていない裸馬なので、パンパをつっ切って走る時は、振り落されないように懸命にしがみついていなければならなかった。ヤーマ二〇頭はアリエロが馬で誘導、パンパの中を軽々とよく走った。群をなす習性があるのか、必ずかたまって行動する。

ペルー側の自動車道路沿いに本隊の後を追い、午後三時頃、チョクニャコータのベース・キャンプに着いた。翌日のキャラバン

のことを考えて、アリエロ達には夕食を出しコーヒーをふるまい、テントに寝かしてやった。寝具には彼等持参のポンチョを使わせた。金にあまり欲のなさそうな連中であってみれば、せいぜいめずらしい食物でも与えて機嫌をとるより仕方がなかった。

涯しなき高原の旅

中村達の出た翌日（七月一五日）には、いよいよ本隊がラパスを出発した。

まだ暗い内に起きてトラックを待ったがなかなか来ない。ボリビア山岳会の連中はまもなく来たものの、トラックの方は運転手が行方不明、折角の旅立ちに腹立たしいことだった。

結局、出発は八時過ぎになった。トヨタの三トン積トラックと緑地に日の丸の輝く公使館のジープに分乗する。一行は我々五人に加わるに、ボリビア山岳会のマルチネス、センテーノ、ポータのベナンシオ、フリオ。それに途中までベナンシオの奥さんが同乗した。

コルディエラ・レアルの白い山なみを右手に見ながらアルティプラノを行くと、まもなく左側にチチカカ湖が現われる。湖畔に群生して居るアシの間に、名も知らぬ水鳥が遊んでいた。これを見てトラックの運転手は持参の猟銃をとり出した。マルチネスも自分の旧式のひどく重い歩兵銃でバンバンやり出した。我々も借りて撃っては見たが、結局水鳥は全部無事だった。後で判ったことだが、マルチネスの鉄砲はベースキャンプの回りに飛んでくる面は、なかなか強烈な印象だった。コロロとかワナクニなどのピ

翌朝起きると、地平線にズラリと並んだ山々が、赤く輝いていた。荒涼寂寥として拡がるパンパのはてにそびえているので、正に地のはての山という感じがした。モルゲン・ロートの中の初対

ッとがった山は実はホレボレするような美しさだ。朝の、体中にしみわたるような寒さに身をちぢめながら、いつまでも飽きずになながめた。

我々の目指すチャウピオルコ、パロマ山群はまだ地平線の彼方、もう一日トラックにゆられなければならない。夜間の文字通り凍る様な寒さに、冷え切ったエンジンを始動さすのも一騒動だった。又、フロントガラスに厚く張りつめた霜もふきとらなければならなかったが、息を吹きかけた位ではどうにもならない程、厚かった。

やがてガタゴト動き出し、石ころを両側に並べただけの粗末な道を、北へ向う。石ころと、イチューという殺風景な草の他は何にもない、一望千里の原っぱをのみすぼらしい家にぶつかった。半日近く進んだ所で四、五軒家がそれがスチェス部落だった。そこから少し行った所にも一軒家があったが、トラックが近づくと、中からのっそりと元気のなさそうな中村が姿を現わした。夜の寒さと食料不足に悩まされた話を聞いて同情したが、馬の調達がまだ済まないので気の毒にも彼と中島はまたそこに残ることになって、再び出発する。

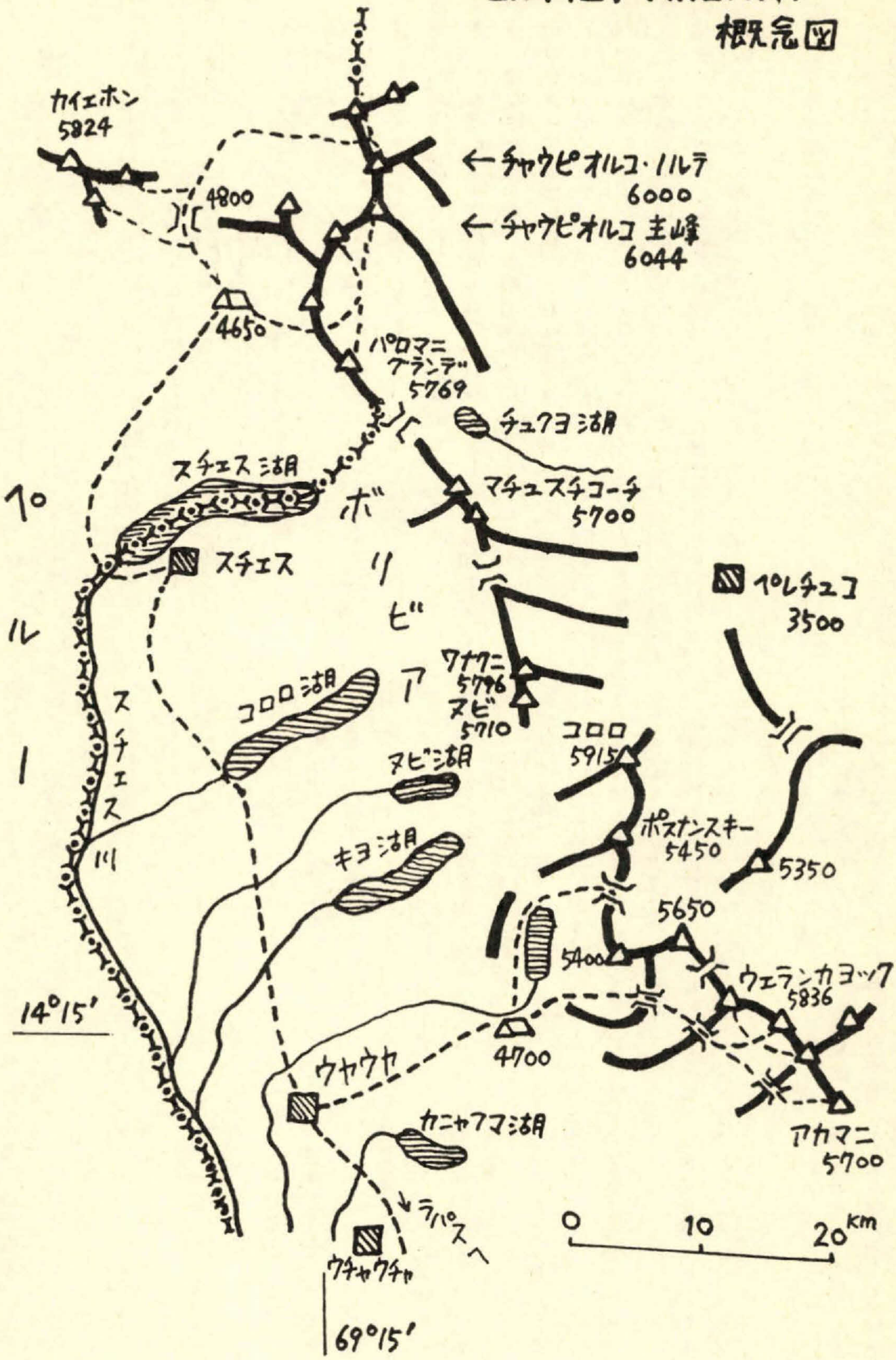
そこからは細長いスチェス湖を迂回し、スチェス川を渡る。このスチェス川がペルーとボリビアの国境になっているので、我々はここからペルー領へ入ることになる。運転手は国境を越えることをいやがったが、こんな所で引き返されては大変なのでいろいろなだめて、やっと何とか行ってもらうことに成功した。ペルー領に入ると、我々の向かう方向にりっぱな道路が続いている。この意外だった。行手の地平線には、カイェホン、チャウピオルコ、パロマ等の白く輝く峰が見え出し、ぐんぐん近くなった。いよいよアクするようなうれしさと、はたして登れるのだろうかという不安が交錯して、胸がさわぎ落着かない。

まもなくパンパから山のすそに入り、広い谷に沿って山腹に切られた道を登る。岩山の向うに、間近にせまった白いピークが見え隠れして目を奪う。谷に沿ってかなり登り降りしてから、ある山角を回ると道路はそこでプツリと切れてなくなった。そこからは細い小路になって峠の方へ続いている。それ以上車は進めないので引き返し、少しもどった浅い谷の出合いにベースキャンプをもうける。意外に長かった道のりに、帰りのガソリンがなくなるとブツブツこぼしていた運転手は、荷を降ろして喜んで帰っていった。あとで聞いたら、やはり途中で使いつくしてしまったので、徒歩で遠い部落まで買いに行かねばならなかったそうである。

ベースキャンプの回りはかなり広い草原、谷の奥には特徴あるかっこうをした山が見え、なかなか粋なキャンプサイトだった。付近にインディオのあばら家が一軒あって、牧夫が住んでいた。彼に聞くと、この辺りはチョクニャコータといい、奥の山も同名だという。高度は約四六五〇㍍。風が強い。

メス・テントを中心に五張りのテントを張る。プカヒルカのイタリア隊のベースキャンプでは、その整然としたキャンピングに感心したものだが、いささか経験をつんだ我々も、今度はかなり住み心地よくテントを整理することが出来て、隊長にほめられたものだった。

コルディエラ・アポロバンバ
概況図



その日の晩は、今後の方針についていろいろ話し合った。まずやらなくてはならないのは、一体ここはどの辺に当り、目的の山はどの方にあるかということだ。一九五八年のイタリア隊のスケッチ・マップから判断すると、どうやらここは彼等のベースキャンプだった所らしいが、はっきりした所はどうも判らなかった。

我々の目標にしていたピークは、チャウピオルコ・ノルテ（六〇〇〇㍍）とカイェホンの東にある五九九八㍍峰の二つの未踏峰だったが、地図には記入されていてもその実在が確かなものでなく、又あってもそれはすでに登られているピークなのかも知れないという、はなはだ頼りないものだった。この辺り、コルディエラ・アポロバンバの北部には、これまでドイツ隊（一九五七）、イタリー隊（一九五八）、イギリス隊（一九五九）の三隊が入っているので、めぼしい山はほとんど登られているようだが、科学的測量による本格的な地図は一部分の地域しかなく、未知の領域も多い。そんなわけで、我々の目標にしている前二者を初め、他にどんな魅力ある処女峰が残っているか興味津々たるものがあった。

とにかく、翌日は四組に分けて周囲の地形の偵察に赴くことにした。

(1) 甘利――ベースキャンプのある、チョクニャコータの谷をつめる。

(2) 丸山、ベナンシオ――チョクニャコータの一つ北方にある谷をつめる。

(3) 倉知、マルチネス――カイェホンとチャウピオルコ山群の間の峠（アパチェタ・デ・イスカイクルス、四八〇〇㍍）を越えて北方の谷の偵察。

(4) 中川、センテーノ――カイェホン方面の偵察。

(1) 隊の甘利は、チョクニャコータの谷をつめて氷河の端まで登り、さらに氷河を少したどってみた。特別難しい所もなく、容易にテントを伸ばすことの出来るルートだった。

(2) 隊も氷河に出て北方をのぞける稜線まで登ったが、地形が錯綜していて正確な位置を知ることが出来なかった。ポーターのベナンシオはいままでアイゼンをつけて歩いたことがなかったので氷河の上を歩かせるのに苦労した。

(3) 隊は峠を越えてシーナへ続くビスカチャニの大きく浅いU字谷をどんどん下っていったが、なかなか目標のアシェンダ・ルスニに着くことが出来なかった。

午後おそくルスニに着いたものの、そこから山の方へ向うオコルルニ谷はせまく、はっきりした見通しは得られなかった。しかし谷の奥にピラミッド型の魅力的な雪のピークを望むことが出来

た。

(4)隊はカイェホンの前衛峰、リティ・パタ（五二七二㍍）に登り、カイェホンの頂上へ到るルートをはっきり見定めることが出来た。チャウピオルコ方面が一望の内に見渡せたが、多くの山々が重なって正確な地形の省察は出来なかった。又、カイェホン付近にあると思われていた五九九八㍍峰らしきものは何処にも見当らなかった。

次に、中川の手記によるリティ・パタ登頂のもようを記そう。

リティ・パタの頂上から東にかなり大きな氷河が落ちているが、それと平行して南方に尾根が続いているので、それをたどることにする。イタリア隊がカイェホン、アナネアを登った時には、この尾根の西側の氷河から入っているので、東側から入るのはおそらく我々が初めてであろう。

尾根にとりつくまで、広いパンパを行く。パンパの途中で昼食を摂っていると、どこからともなくインディオの老人が現われどうやらナニがイカれているらしい。缶詰の残りをやり、お引き取りを願う。

ヤーマの道をたどって行くと、パンパがようやく尽きてガレ場になった。ゴロゴロした岩を登ると雪渓が現われ、それを七〇㍍程たどると枝尾根に達した。リティ・パタの頂上から南にのびる尾根の最低コル目指してトラバース。コルからはカイェホンが手にとるように見渡せた。あまり間近かに見えるので、山のスケールがどの程度なのかはっきりわからない。リティ・パタからカイェホンへ続いている尾根をたどって行けば、カイェホンの頂上にも、その左に遠く見えるアナネアにも比較的容易に登れそうに感じた。

時間があるのでリティ・パタへ登ることに決め、不必要なものはコルにデポして出発した。南尾根をダイレクトに登る。かなり広い雪のリッヂだったが、アイゼンがもぐり消耗する。センテーノを先に、コンティニュアスで進む。頂上直下一〇〇㍍はグッと尾根がせり上り、雪も急に硬くなって氷壁に変わった。センテーノは氷雪技術の経験皆無だから気を付けるようにと、隊長に言われていたが、一寸からかい半分、「お前、先に行くか。」と誘った所、「OK」とばかりに登り出した。

直上すべき所を、おかしなかっこうでジグザクに登り、見ていてこちらが冷汗をかいたので、一ピッチも行かない所で待たせて交代。そこからは中川トップになり、二ピッチで頂上に達した。頂上は東西に細長く伸びて、東側は岩峰になっていた。五㍍位降り岩峰にとりついたが、岩がボロボロで登る気がしないし、時間もないので止めにする。陽がかげりすっかり寒くなった往路を飛ばし、引き返した。

さて、これだけの偵察の結果から今後の方針を打ち出すのは大変難しいことだった。お互いのスケッチやら推定やらを綜合して全体の地形を知ろうと思っても、いろいろな点で意見が食い違って正確な所は摑めない。イタリア隊のスケッチ・マップも実際と合致しない所が多くて、さっぱり頼りにならなかった。チャウピオルコ・ノルテの位置ははっきり判らないし、五九九八㍍峰に至

っては影も形もないといってよい。先に入った遠征隊とはひとつ隣の谷か、或いは全く別の地域に居るのではないか、とまで疑ったりした。

そうすると、丸で不可解な推理小説にも似た面白さがわいて来た。臆測と想像力のおもむくままに、いろいろな珍説奇説を並べたてて見たが、わからなければわからなくなる程、これから始まる探検と登攀が楽しみになった。

結局こうした場合に最も適したやり方というのは、どこか核心につらなると思われるルートを見定めてそれを深く入って見る、という方針しかない。カイェホン方面の五九九八峰についてはは何も期待し得ないようなので、我々の目標はチャウピオルコ・ノルテに集中された。そして、それを北と南の両方から二手に別かれて追って見よう、という結論に落着いた。すなわち、北方のアシェンダ・ルスニからオコルルニャコータ谷をつめて、北からチャウピオルコ・ノルテを探る隊と、チョクニャコータ谷からチャウピオルコの本峰に登り、南から本峰を越えて主稜線伝いにチャウピオルコ・ノルテを目指す隊との二隊に分けるのである。

カイェホン方面については、その登攀が終って、尚日数の余裕があったならば登ることにした。頂上へのルートは偵察によって明らかだし、短時日に攻撃出来る程度成算のあることだった。

翌日の午後、待望の馬が中村と中島に率いられてベースキャンプに到着した。ヤーマも混ってキャンプの回りを右往左往するので、淋しかったベースキャンプもようやく活況を呈して来た。

これで用意が万端整い、全員が再び一堂に会したわけで、いよいよ本来の山登りという活動を始める段階となった。プカヒルカのベースキャンプを出て以来二七日目だったが、好天の続く一ヵ月近くの登山シーズンを棒に振った償いを、充分うめてくれそうな魅力ある峰々が待って居ることを思うと楽しかった。

前述のように隊を二分することになったが、その編成は次のようにに決まった。

北方隊（オコルルニ谷）――中村、丸山、倉知、センテーノ、ベナンシオ。

南方隊（チョクニャコータ谷）――中島、マルチネス、甘利、中川、マルフリオ。

そして気の毒ではあったが、隊長にはベースキャンプの留守番をお願いした。但し、ポーターのフリオをベースキャンプからの荷上げだけに留め、ベースでの隊長の世話をいいつけた。

計画の細目が決まると、ベースはたちまち荷分けにごったがえした。その日、暗くなるまでかかってようやく準備を終えた。両隊にテント二張りづつと、一週間から一〇日分程の食料が分けられた。その他、薬品から救難信号筒に到るまで、用意万端怠りなく整えられた。

第四章

オコルルニ源頭の山々

倉　知　敬

北へキャラバンする

朝はおそろしく寒い。ここは南米大陸の真只中だから、文字通り大陸性気候の見本みたいな、お天気を見せる。隊長の記録によると、日較差四七度Cという日があったそうだ。だから寝る時には、厚毛の大ジャケツに綿入れ防寒服と防寒チョッキを着込み、ダブルのシュラフザックにビヴァーク用の半シュラフを併用して、さらに上にツェルトをかけるという超完全防寒体制をとった。これだけすると、流石に朝は起されるまで寝て居られる。炊事当番はその内一、二枚省略すれば、早朝自然に目がさめるという訳だ。

一九日朝。張り切って跳び起き早々に出発準備を整えたが、散らばっていた馬を集めるのに手間どり、出発は一〇時頃になってしまった。北に向け、広々した谷を行く。馬七頭の小キャラバンである。馬上に一〇日分の食糧、テント二張、その他一切の登攀道具が積んである。いろいろ面倒なことがふくらみ気ははやる。

しかし、出発してからいくらも行かない内に、馬が暴れ出すやら、荷物がずり落ちるやら、一向にはかどらない。その上、この性の悪い馬どもは一寸目を離すと勝手な方に行ってしまって、草を食おうとするのだ。道草を食うとは正にこのことだった。アリエロのワヌコに文句を言うと、馬とはこういうもんサ、というような顔をしてニヤニヤするばかりだ。奴にしてみれば、馬の方が大切なんだろうから無理もないが、実に腹立しいことだった。だが、気が変わって馬を引き連れ帰られては元も子もない。あまり怒ると体に悪いから、などともっともらしい理由をつけて、自分だけどんどん先へ歩いて行くことにする。

アパチェタ・デ・イスカイクルスに着いた所で、早くも昼食。馬が着くや否や、早速アリエロにも御馳走を分けて御機嫌をとってやる。昼食用の主食の内、カンパンやセンベイはどうにか食べられたが、マシュマロだけは皆どうもそのくどい甘さ故に敬遠していた。そこでマシュマロは全部彼にやっとこちらもやっとニヤニヤして受けたようにニヤニヤして居た。そこで彼は丸で特別待遇をする。

峠の向う側には、おだやかな谷がうねっている。谷底は平らな草地となって続いている。この辺には、にあるような深い谷はないので、キャラバンには便利である。日本の谷のような激流岩をかむ廊下などにはもちろんお目にかかれない。しかし、しばらく降りたあたりからは、両側を圧倒的な岩峰や岩壁で囲まれるようになった。特に左側には顕著なピラミッ

ド型の岩峰がひときわ高くそびえていたが、これは後日、我々の獲物となった。

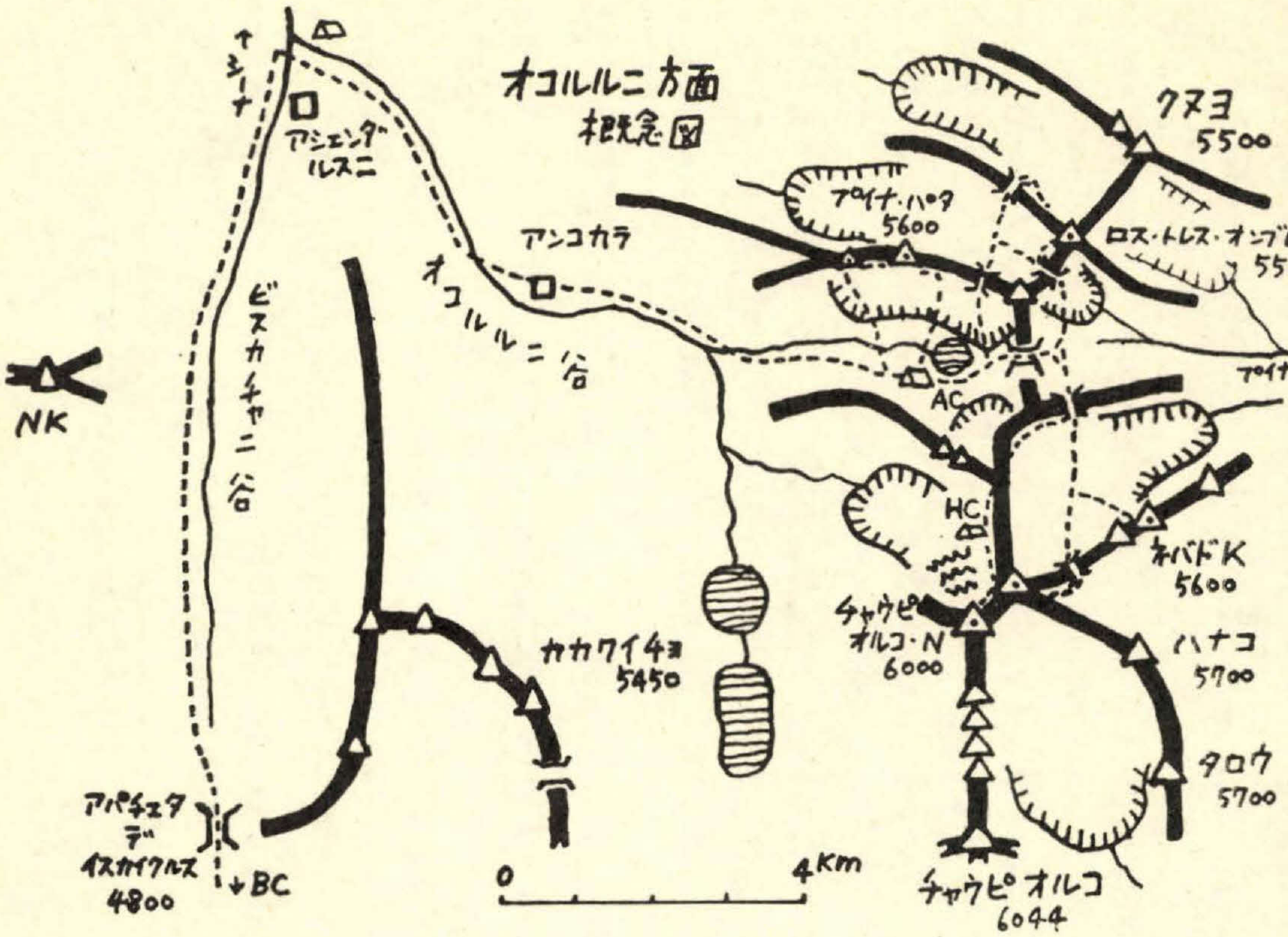
やがて、下流の方から風が吹き上げ、我々は這うようにのぼってくる霧につつまれてしまった。その切れ目から、放牧してあるアルパカなどが姿を見せるようになると、アシェンダ・ルスニも近い。アシェンダ（荘園）と言っても、インディオのうす汚い小屋が五、六軒と管理人のやや小ぎりっぱな白壁の家が一つ、ポツンとあるきりだった。そこからオコルルニへ入り、谷を行ける所までつめる予定だったが、馬が大分遅れてしまったせいで、この日は谷の出会いでキャンプすることになった。馬糞の無さそうな草地を選んでテント二張を張る。小さい方のテントにアリエロを寝かせてやり、晩めしも献上して御機嫌を伺う。おかげで例のニヤニヤは彼の顔から消えない。

翌日は左岸をからみながら支谷をつめた。一番奥、はるか彼方に真白なピラミッドが見える。帰りにはプイナ・パタだと判ったが、その時は何山だかさっぱりわからずひどく神秘的に見えたものだ。前夜キャンプを訪れたインディオの話によると、この谷には奥の峠を越えて向う側にあるプイナ部落まで馬の通れる道がついていると言う。彼も翌日はプイナまで行くというので、案内を頼むことにしていたが、朝になっても姿を現わさなかった。こうした期待はずれは今まで何度か経験していたので、もう大して気にならない。細々とつづく踏跡をたどっていくと、猫の額くらいのお粗末な畑と小屋が二、三軒現われる。その一軒からインディオの女が飛び出して来て、だまって一枚の紙切れを渡して又引込んだ。スペイン語のくずれた書体で何やら書いてある。センテーノに要約させると、きのうのインディオの、一緒に行けなくなったという伝言であった。どうやら奴っこさん、昨晩はあの小屋の女性と一人旅の徒々にいささか度を越したらしい。浮世の人間はどこへ行ってもやる事は同じである。

谷の右側にうねうね続く道を二時間も行くと、急に谷が開けて一寸とした草原になった。二軒の小屋があるる。聞くとアンコカラという部落。インディオの住人に食糧を売ってくれる様交渉したが、殆ど余所、オカという小さなサツマイモを買うことが出来たが、殆ど余りの食糧は持っていないようで、イイ顔はされなかった。山高帽とポンチョがよく似合った母子にカメラを向けると、サッとうす暗い家の内に入ってしまった。いい画材なので入口までいってモデルを頼み込んだら、パッと泥水をかけられた。畜生メ、と思ったが、後程インディオには写真を撮られると影が薄くなって早死するという迷信があることを知って、悪いことをしたものだと後悔した。それでもその時、オヤジの方は何とも言わずに撮らしてくれた。どうもこの家族は嬶天下らしい。

アンコカラまで来ると、以前みえたピラミッドは姿を消し、谷の奥には大きなドーム型の山が望まれた。これまた帰りがけに初めて、チャウピオルコ本峰と判ったのだが、ずっと南方にあるチャウピオルコを正面に見て歩いたのだから、ベースキャンプの方角へずいぶん戻っていたことになる。

さらに谷をつめると、カール状に開けた大きな盆地に出た。のどかな草原のアチコチにアルパカや羊が草を喰み、近づくとキョトンとした顔をあげてジッとこちらを見る。そののどかな様には、セガンチーニのアルプスの牧場の絵の趣きがあった。



盆地の行きづまりから左方の急な斜面へ踏跡が続く。こんな急な道は我が馬には無理だ、とアリエロがゴネ出した。例のニヤニヤはとうとう彼の顔から消えた。しかしここで帰られては大変だから強引に登らす。つたないスペイン語でとやかく言ってもきき目はないので、三人して日本語で怒鳴り、おどかし、なだめた。気の毒だとは思うが、そこは非情にならねば駄目だ。

急な所をジグザグに登ると、再び傾斜のゆるい草原となった。驚いたことに、こんな高地に馬が放牧してある。ワヌコの馬よりよっぽどたくましそうだった。岩かげには野ウサギが三々五々遊んでいた。そのすぐ上には、もう氷河の舌端がたれ下っていて、眼を奪った。このような雪線近くに生き物が住んでいるのは珍らしいのではないかと思うが、くわしいことはわからない。

やがて踏跡はモレーンの上を行くようになった。峠も見えて来た。峠の左半分は氷河が押し出し、道はその末端を回り込んでいる。峠の少し下に小さな氷河湖があり、その湖畔は絶好のキャンプサイトだった。我々はためらわず、そこに荷を降ろしテントを張った。

一週間後に再び来ることをワヌコに約束させて返させれば、我々だけの世界である。後を振り返ると、遠く特異なかっこうをしたカイェホン峰が、折りから夕焼に映えて赤く染っていた。くれなずむ周囲の地形を、しきりにイタリア隊のスケッチマップと照らし合わせてみたが、目指すチャウピオルコ・ノルテの位置はどっちなのか見当がつかなかった。しかし明日はとにかく南方のチャウピオルコ本峰の方へ登って見ることに決め、寝袋にもぐり込んだ。

チャウピオルコ・ノルテ登頂

明けて七月二一日、あいにく体の調子悪い丸山と、役に立ちそうもないポーターを残し、あとの三人が南へ向う。まず、踏跡をたどって峠へ出た。この辺りでは、アポロバンバの主稜線がペルーとボリビアの国境をなしているので、峠も国境をまたがっている。そこで我々はこの峠を国境峠と名付けた。高度約四九〇〇米である。

さて、峠から南を見ると横に広く岩壁が視界をさえ切っている。一ヵ所、ガレ場がその上まで伸びているので、そこを登ることにした。

北の方には、五六〇〇㍍位のそんなに高くはないが、岩と氷のけわしい山が二座、並んでいる。右の方はイタリア隊の地図にプイナ・パタとあるピークで、左は無名峰、後日我々が初登してロス・トレス・オンブレスと命名したピークである。

プカヒルカ以来、かなり間を置いたので大分登りが苦しい。一時間程かかって尾根へ出ると、パッと白く輝く山並が跳び込んで来た。眼もくらむばかりの素晴しい光景だった。優美な曲線を描いたスカイライン、紺碧の空と白い氷河のあざやかなコントラスト、プカヒルカとはまた趣きの違う氷河のたたづまい。それは又新たなる感激の一瞬だった。

右手にはドーム型の白いピークが頭上高くそびえ、左手には、コルディエラ・ブランカにあって世界で一番美しい山と呼ばれているアルパマヨに似た、美しいピークなどから判断すると、右の高いピークで、我々の目指すチャウピオルコ・ノルテであって、それはイタリア隊によって既に登られていた。

頂上は間近かに望めたが、とにかく全体のスケールが大きいので距離感というものがはっきりつかめなかった。実際はウンと遠いのだろうが、空気が澄み、さえぎる物もなく続いているので、まるで手がとどくような近さに感じてしまうのだ。ひょっとしたら、今日中に頂上まで達することも出来るかも知れないと思った りした。

山の名称はともかく、まず登りたくなる山は右方のドーム型のピークだった。そのドーム型の頂上の左の肩に、平らなジャンダルムがあり、そのジャンダルムからは北に向って巾の広い雪の尾根が伸びていた。その尾根は、途中で曲ってこちらへ続いている。我々はその尾根伝いに登ることにした。

アイゼンをつけ、アンザイレンをして登り始める。雪は固くしまって歩き良い。尾根の曲る所まで来ると、広巾い尾根の上に出る所で、一ヵ所四〇㍍位の非常に急なギャップを降りなければならないことがわかった。ピッケルを振って雪庇を破り、ステップを切りつつ慎重に下る。だが、センテノの降り方は丸で強引だった。こんな奴とザイルを組んでは命が危いと思ったが、日ボ親善のためには何とか一緒にやらねばならない。

広い尾根に出れば、あとはジャンダルム直下の氷壁まで、所々クレバスをまいて行けば簡単だった。しかしながら、久々の登攀であることと、高度の影響もあって、なかなかピッチがあがらない。その内に、朝方は晴れていた天気も、いつの間にかくずれ、ガスが湧き出した。

見通しの悪いガスの中を見透かしながら、前衛峰下の氷壁まで行き、氷壁を一ピッチ登って見る。だが、その先は大きなクレバスで阻まれていた。こうした氷壁の途中にあるクレバスは、下からは見えないが上と下をきれいに二分しており、越すことは困難だった。今日はここまでだ、と思って引き返す。このクレバスは左へその尽きる所までトラバースすれば、その上の氷壁へ抜けられる。しかしその上の氷壁こそ山だった。プカヒルカの経験からして、決して登れないとは思わなかったが、登り切るのにかなり時間がかかりそうだった。

峠のキャンプから往復するには少々遠すぎ失敗の可能性もあるので、広い尾根の五五〇〇㍍位の地点へアタック用キャンプを出すことにした。また、もう一つキャンプを出すに値する程、このチャウピオルコ・ノルテは立派な山容を持っているし、登ってもコクのある山だった。

あくる朝、我々は二人用の高処用テントと四日分位の食糧を持って、湖畔のキャンプを出た。初めてポーターのベナンシオをボッカさせた。山の技術は勿論のこと、気力も乏しく、ギャップの急斜面の降りなどは逆にこちらが荷を背負ってやる始末だった。

前日と同じルートをとり広い尾根に出て、予定した五五〇〇㍍の地点に高処キャンプをもうけた。中村、ベナンシオはギャップの所まで送ってやって、ギャップを無事に通り抜けたことを見とどけてから、下のキャンプに帰した。

丸山は依然調子悪く、停滞。センテーノは技術的な面で不安があるので、今回の登攀には遠慮してもらった。

翌二三日は四時起床。まだうす暗い内に出発した。天気は快晴、星がものすごく沢山見える。体の調子も、この前と比べれば余程楽だった。前日の引返点あたりで夜が明ける。クレバスが崩れてテラス状になった所から、スタカットで登る。まずクレバス沿いに四〇㍍いっぱいのトラバース。端に着き、そこから氷の大斜面に出た。

出口にアイスハーケンを一本たたき込み、たんねんにステップを切って一〇㍍も登ると、今度は小さいクレバス。これは簡単に越えた。それからは六〇度位の氷壁を、一歩一歩慎重にステップを切りつつ登る。交互にトップを交代し、呼吸を切らせ、腕を振り上げて、堅い氷に足場を造る作業を続けた。アイステクニックの乏しい我々には、氷壁のステップカットは、わずか二、三ピッチでも腕が棒になる程の仕事だった。

クレバスより三ピッチで、ジャンダルムから頂上へは広い尾根が続き、頂上直下で急なリッヂとなっていた。六〇〇〇㍍の高度ともなると、無風の様にみえても、かすかな風が身を切る様に冷たく感じられる。今まで東向きの斜面で陽をいっぱい浴びな

がら登っていたのでヤッケもいらなかったが、ここで急いでヤッケを着込んだ。

コンティニュアスで頂上直下まで登り、あとの急なリッヂは左側の斜面を、スタカットで二ピッチかけ、登り切った。リッヂが頂上の雪庇に合する所が悪そうに見えたが、意外に大したことはなかった。

いきなり六〇〇〇㍍まで登って来たせいで、苦しい息切れと、どうしようもない倦怠感に悩まされた。足下の圧倒的に切れた懸垂氷河と、意志を失ったような我々の緩慢な動作は、およそぐわない眺めだったろう。

雪庇を乗り越えると、なだらかな斜面が碧空に消え、そこが頂上だった。きれいに丸く盛り上った雪面に足跡をつけるのはイイ気持だった。第二登のせいか、大して感動的ではなかったが、自然に口元がほころびてくるのはどうしようもなかった。南方には、アポロバンバの見える限りの白い山並が望まれた。とりわけ、すぐ東に続いている二つの五七〇〇㍍位のピークは印象的だった。次はアレに登ろうよ、と話し合った。

形通りに記念写真をとり、早速下降にとりかかる。途中アップザイレンをまぜて登路を忠実に下った。アップザイレンはジャンダルム直下の氷壁で一回、スノウ・バーを支点にしてやった。スノウ・バーはその実用性を充分発揮してくれた。

下降には意外に時間がかかった。高処キャンプに帰りついた時は一九時を過ぎてすっかり闇につつまれていた。だが、ビヴァークせずに帰幕出来たのは、何より有難かった。

頂上からの展望で、一九五八年イタリア隊のつくったスケッチマップが完全に間違っていることを発見した。彼等は大分実際の山と山の名を混同していた。我々も登ったこのピークを彼等はチャウピオルコの本峰だと思って登っているのだ。チャウピオルコはドイツ隊が一九五七年初登してしまった訳である。プカいどっしりした山である。だから、イタリア人はそれとは知らずに、チャウピオルコ・ノルテを初登してしまったが、ここでは逆にイタリア人のまちがいのお陰で初登はならなかった、という次第である。南から登っているはずの甘利達がはるばるこちらまで登って来て、イタリア隊も我々も登ったあとだった、というのは気の毒だナと思った。だがチャウピオルコからこのチャウピオルコ・ノルテまで、起伏はげしい稜線が相当長くつづいているので、多分縦走は無理であろう。（後述の通り、彼等はチャウピオルコまで登っただけである。）

翌日は、ゆっくり高処キャンプを撤収し、峠のキャンプへ戻った。途中、プイナ・パタの氷壁を下降中の二人を見付けて、ハラハラしながら見物したものだった。

プイナ・パタ登頂

セキで苦しんでいた丸山も、やや容体がよくなったので、二四日、センテーノをつれてプイナ・パタに登った。次の記録は丸山

の登頂記である。

湖畔に張られたテントから、氷に覆われたプイナ・パタが手に取るように眺められる。頂上へのルートは、その東稜を末端から辿るか、最初南面の氷河を登り途中から東稜へ出るかのいずれかが考えられた。

どちらにしてもさほど困難な個所もなさそうなので、三ッ道具類の携行は極力減らした。一点の雲もない快晴。気温も高く、半そでの下着に毛のスポーツシャツで丁度よかった。テント場の近くで氷河に出て、アイゼンを着ける。氷河のすそは雪原となって拡がり、長いクレバスが幾重にも重なって横たわっていた。

登頂ルートを氷河経由に決めて急ではないが、腿までもぐる軟雪で、雪に不慣れなセノテーノが足をとられて、なかなか渉らない。悪場は用心してスタカットで進む。概して柔らかい雪の上をコンティニュアスでゆっくりと登る。この辺はテント場から見た感じではかなり急な斜面に思えたのだが、実際に来てみると気抜けする程の簡単な登りだ。

クレバスを避けながら、広いなだらかな斜面を行くと、氷棚へ続く急な雪壁にぶつかった。この雪壁の手前にはクレバスが口を開けており、それを越えるには完全なスノウ・ブリッヂを渡らねばならない。センテーノにしっかり確保するように念を押して慎重に渡る。次にそのままセンテーノに確保させて雪壁にかかる。雪壁は約五米位のものだが、相当に急で雪はかなり柔かい。氷棚の直下で、隠れていたクレバスを横にして危っかしい格好で降りて来るではないか。後でわかったのだが、彼のドイツ製アッケルを頼りに乗り越した。

氷棚は雪庇の直下にあり、庇から落ちる氷解水のためテカテカに凍っている。幅一米位。ここに腰を降ろしてセンテーノを引張り上げる。そこからは六、七米氷棚をトラバースして、雪庇の後退した部分を乗り越え稜線に出た。幅広い尾根で、硬雪が小気味よくアイゼンをきしませる。

稜線をコンティニュアスで約三〇分も行くと、我々は頂上に立っていた。

「グラシアス」と、言葉を交わして握手の後、センテーノ特製の梱包用紙箱から作ったボリビア国旗と、マジックインキで日の丸を染めた日本国旗を竹竿にさして、記念撮影を行った。

南北に走るトレス・オンブレス、クヌヨの鋭いのこぎり状の連峰が印象的だ。南の方、チャウピオルコ・ノルテの北稜上には、二つの動く点と、そのそばにテントと覚しき黒点が見える。前日がアタック日になっていたから、彼等はこの日は登攀を終えて、陽なたでのんびり休養をとっているのだろう。こんなことを考えながら乾パンにバターと蜂蜜を塗り、桃缶を添えて、昼食を済ませた。

キャラバンの道中から、主峰と並んで稜線上に小ピークが見えていた。そこへついでに行っておこうということになって、尾根伝いに歩き出した。途中に岩場があったが、これはまいて雪との境目を下る。一ピッチ目、テカテカの氷から下降、二ピッチ目は爪先のツァッケと岩との間に体を支えなければならない。センテーノに確保させて雪壁にかかる。程の氷が約一〇米続く。下半部は四五度近くある。丸山が先に降りセンテーノを待ったが、彼はアイゼンを横にして危っかしい格好で降りて来るではないか。後でわかったのだが、彼のドイツ製アッケルを踏み抜き一寸手間どったが、ピ

のアイゼンには、爪先に突出するツァッケがなかったのである。

三ピッチ目、これに懲りて、足場の良い岩に腰を降ろしてがっちりと確保し、センテーノを先に降ろした。傾斜は楽になったが、岩の上に薄く雪がついていてそこで確保地点を探していたセ場は終り、再び雪の斜面に出る。センテーノが突然足を滑らせた。ザイルの激しいショックを体全体でグッと受け止める。センテーノは六、七米雪面を滑って止まったようだが、丁度岩陰に隠れて姿が見えない。声を掛けてもしばらくは返事がなかったが、やがて来た。彼が足をとられた斜面という、彼ののんきな声が聞こえて、それが陽光で軟かは、内側は氷だが表面はささくれ立っていて、くなっていたので、踏み外したらしい。

この斜面をスタカットで、トラバース気味に登ると、間もなく平らなピークに達した。しかし、そこは丘状にはなってはいるが独立した峰と言える程のものではなく、尾根上の一隆起に過ぎなかった。

下りは、登って来た反対側の、雪の比較的少ない所も行けそうだったが、見なれた南側の氷河を選んだ。稜線から五ピッチ位までは、非常に急な傾斜で雪も深く悩まされたが、雪は安定していた。この間、一ピッチ毎に雪を掘ってはピッケルを埋め、センテーノの確保をした。

その後は硬い雪の緩い斜面が続いたが、クレバスが縦横に入り乱れていて、ルートを選ぶのに、大変神経を使ってしまった。その上センテーノの足許が不安なので、しばしばスタカットにした

その晩の湖畔のテントは、遅くまで話がはずんだ。ようやく氷河を降り切って、テントにたどり着いた時は、すでに夕闇に包まれていた。

成功して無事に帰って来たのだから、この花が咲いた。お互いにた。センテーノは、

「ノリジは素晴しいクライマーだ。」

と、しきりに感心している。ノリジはとんな楽しいことはなかっになおっていないようでゴホンゴホンやっている。

明日の行動をどうするか、いろいろ相談したけれども、センテーノと誰と組むかが問題だった。この日のセンテーノの登り方からして、彼と二人だけで組むのは、いささか危険かとも思われた。だが結局、明日は一日休養してゆっくり考えようということに落着いた。頭の痛い話だった。

未踏の氷河

翌日もいい天気だった。あまりいい天気なので、センテーノと倉知は北の方へ散歩に行くことにした。もう陽は高く登り、あたりはギラギラと輝いている。あまり遠くへは行けそうもないが、うまくいったらどこかのピークへ登ってみるのもいいだろう。

プイナ・パタとトレス・オンブレスの間のコルを目指して、われわれはクレバスの間を縫うようにして登る。プイナ・パタのきのうのトレースを左手に見ながら一時間も行くと、岩の露出して

いるコルに着いた。
コルからはトレス・オンブレスの東面が間近かに見え、足もとには未知の氷河が西へ向かって流れていた。頂上からは氷河の底へ複雑に入り乱れたアイス・フォールがかかっているので、氷河伝いにはこの山へ登れそうもなかった。だが、その氷河の対岸の尾根に一カ所深く切れ込んだキレットがあって、それを抜ければ簡単に山の北側へ回れそうに見えた。或いは北側からならやさしい登路があるかも知れないと思って、そのキレットへ向かって氷河を横断することにする。
面白いことには、プイナ・パタの北面には全然雪がなくて、頂上から下の氷河に至るまでガレの岩が露出している。南側のガレ場を氷河まで降りてまた氷河を登りかえすのは、いかにもつらいアルバイトのように思われたので考え込んでしまった。
しかし運良く、この岩尾根の右側に氷のゆるいルンゼがのびていた。この尾根を行ける所まで登って見ることにする。慎重を期して岩に確保用のハーケンを打ち、センテノに確保を頼んで登り出す。ステップカットにも大分慣れ、ある程度自信をもって登ることが出来る。一ピッチ登ってセンテノを引き上げてから、ハーケンにかけカラビナを返してくれよ、と彼に言ったところ、ハーケンにかけたまま置いて来た、と当り前のように答えたのには開いた口がふさがらなかった。
次にねじれたクレバスの雪庇状になった岩尾根を乗り越える。だが、その上には巨岩が累々と積み重なったような岩尾根が続き、とても抜けられそうもなかった。それでもアイゼンをはずして、右に左に岩峰を捲きながら登り続けた。主クレバスに注意しながら、慎重にトラバースして行く。雪をふみしめるアイゼンのきしりしか聞こえない静寂の中に、突如ブロックが一つころがり落ちて来てひどく驚かされた。
キレットというのは、幅一〇〇米位、両側は垂直の岩にかこまれて、門のようになっていた。はたして何が見えるか、心おどらせて到着したが、向う側は先程のコルと同じようにガレ場が、今度はかなりの距離を下っていた。その向うに原とも言うべき広い台地が拡がり、その奥にはどっしりしたクヌヨ峰がそびえていた。そのあまりの遠さにはがっかりしてしまったが、それはいつまで眺めていてもあきない雄大な景色だった。クヌヨの頂上から雪原へは、細い急な雪稜がのびているが、かなり手強そうだ。登るにはもう一つテントを出して、じっくり攻撃しなければなるまい。
ロス・トレス・オンブレスの北側はというと、この岩尾根の幾重にも重なった支稜にさえぎられて全然みえなかった。これからガレ場を氷河まで降りてまた氷河を登りかえすのは、いかにもつらいアルバイトのように思われたので考え込んでしまった。
しかし運良く、この岩尾根の右側に氷のゆるいルンゼがのびていた。この尾根を行ける所まで登って見ることにする。慎重を期して岩に確保用のハーケンを打ち、センテノに確保を頼んで登り出す。ステップカットにも大分慣れ、ある程度自信をもって登ることが出来る。一ピッチ登ってセンテノを引き上げてから、ハーケンにかけカラビナを返してくれよ、と彼に言ったところ、ハーケンにかけたまま置いて来た、と当り前のように答えたのには開いた口がふさがらなかった。
次にねじれたクレバスの雪庇状になった岩尾根を乗り越える。だが、その上には巨岩が累々と積み重なったような岩尾根が続き、とても抜けられそうもなかった。それでもアイゼンをはずして、右に左に岩峰を捲きながら登り続けた。主クレバスに注意しながら、慎重にトラバースして行く。雪をふみしめるアイゼンのきしりしか聞こえない静寂の中に、突如ブロックが一つころがり落ちて来てひどく驚かされた。
キレットというのは、幅一〇〇米位、両側は垂直の岩にかこまれて、門のようになっていた。はたして何が見えるか、心おどらせて到着したが、向う側は先程のコルと同じようにガレ場が、今度は前進出来なくなってしまった。もう午後二時近かったので引き返

すことにする。簡単に昼食をして、カンヅメのアキカンに名前を書いた紙切れを残し、帰途についた。

途中、プイナ・パタから続いているもう一本の岩尾根の方にも寄ってみた。氷河の分水嶺となっている雪のコルまで登って見たのだが、こちらの岩尾根の方がまだ脈がありそうに思えた。こうして、二人は一日の放浪に満足して、夕方、湖畔のテントに戻った。

きのうの晩決めかねた次の行動の計画は、今度は簡単に決定した。すなわち、あと残す日数は二日間なので、遠いクヌヨをねらうのは無理だと判った。従って次の目標は、プイナ・パタの隣りにそびえるロス・トレス・オンブレスだった。もちろんその時はまだ、その名前もなく、無名峰であった。

一方、ベースキャンプに戻る時の馬は、往きのキャラバンに使ったワヌコ達の馬を契約をしておいたが、はたして約束しておいた明後日までに来るかどうかは疑わしかった。そこでベナンシオを麓のプイナ部落までやって、他の馬もやとうことにした。もし先の馬が予定通り来たなら、少しぜいたくでも人間が乗るつもりだった。そうすると彼の代りの留守番が要るのだが、センテーノが自分はつかれたから休みたい、と申し出たので、それは労せずして彼に決まった。この国境峠には、ルスニとプイナを結ぶ山道が通じており、ここを時々インディオ達が通るので、食糧など盗まれないようにするにはどうしても留守番が必要だった。かくて氷河から登って来たわけである。

あくる日は、残る三人の日本人が例の無名峰を試みることになったわけである。

ロス・トレス・オンブレス登頂

前に述べたように、国境峠に立って北の方を眺めると、右手にプイナ・パタ、左手にロス・トレス・オンブレスが望まれる。その二峰の間は岩と雪の尾根で結ばれている。我々は国境峠から氷河をつめてこの尾根の上に出て、尾根伝いに頂上へ登るルートを選んだ。

国境峠から眺めるトレス・オンブレスは、氷壁と岩稜がうまく調和して、いかにも均整のとれた姿を見せている。スケールはそんなに大きくないけれども、アルプス的な美しい山だった。

我々は、峠から氷河の舌端をめがけてガレ場をつめ始めた。まだ誰も歩いたことのないだけあって、くずれやすい非常に歩きにくいガレ場だった。

氷河の上に出た所で、アイゼンをつける。今日は中村カメラマンが一日の行動を、逐一、一六ミリにおさめる予定なので、早速アイゼン着用のシーンも撮影された。

氷河は傾斜もゆるやかだし、クレバスも殆どない。ザイルをつけずに、真直ぐ氷河の分水嶺となっている雪のコルに向かう。雪はささくれ立って非常に歩きにくかったが、と申し出たので、それは労せずして彼に決まった。尾根の上に出る所で、凍った雪庇が少し張り出してはいたが、難なく越えて尾根上に出ることが出来た。きのうの帰りがけには、このコルへむこう側の氷河から登って来たわけである。

ここから頂上まで、高度差にして約三〇〇㍍もあろうか、下半

は岩、上半は雪の急峻なアレー部まで行ってからザイルと三ッ本格的登攀の準備をした。

取付からは巾一〇㍍、六〇度位の傾斜の岩壁だった。岩壁にはサラサラの雪が積っているが、岩は固く大まかで登りやすかった。雪と岩を縫って、四〇㍍いっぱいのピッチを二回続け、この岩壁を登り切った。写真係の中村がしきりにシネを振り回しながらポーズの注文をつけるので、いろいろ演技をつけて登らなければならない。

岩壁を登り切った所からは、鋭い岩峰が連立したヤセ尾根だった。それらを最初は左に、次は大きく右に捲いて行く。二ピッチ、スタカットで捲いてから、あとはもろい斜面をコンティニュアスでトラバース。尾根の上は文字通りギザギザのこぎり状で通れる気づかいもなかった。

岩尾根が尽きて、雪稜となる所まで、この右側の側壁をへづっていってから雪壁を尾根へ登り返した。二ピッチ登ると、馬の背状になった雪稜に出ることが出来た。

ここで昼食を摂る。尾根を捲き出した頃から湧き始めたガスが、今やあたりを包み、視界は二〇㍍もきかなくなった。時々うすくなるガスをすかして、上のルートを検討してみたが、この上の雪稜は傾斜が急なので直登は避け、左側のやや傾斜のゆるい雪壁を登ることにした。その壁は北へ伸びる尾根の側壁となっている。ただ、その雪壁の下部には横に一本クレバスが走っていたが、それは左よりの割れ目をとれば何とかなりそうだった。

昼食を摂った馬の背から、コンティニュアスで雪の斜面をトラバースする。ふくらはぎまでもぐる雪に足をとられながらも、地形も定かに見分けられない真白な空間を進んで目指すクレバスの違い目まで到着した。そこから再びスタカット。

緑色に鈍く光るクレバスにはいかにも複雑なかっこうをしたスノウ・ブリッヂが触れなば落ちなん風情で掛っていた。しかしスノウ・ブリッヂに積った雪は、見かけによらずしっかりしていて、ピッケルのシャフトが根本まで喰い込み頼りになった。静かに歩を移して行けば、固い氷の上に達しこの登攀の核心だったクレバスを越えることが出来た。

そのまま側壁を四〇㍍いっぱい登りつづける。このクレバスから上は雪も固くなり、もう雪壁というより氷壁だった。帰りのことを考えて、一々大きなステップを切りつつ登った。更に一ピッチ登ると、尾根の上に出た。そこからは頂上がガスで隠れしていた。

三人集まってから、ゆるい雪稜を登ると、そこが頂上だった。

平らな四角い岩の頂上で、三人並んで腰掛けるのに丁度いい広さだった。残念なことには、少しもガスが晴れずに何も見ることは出来なかった。カンヅメの空缶に名前を書いた紙切れを入れて残すつもりだったが、この山に名前をつける必要にせまられた。そこで三人で登ったことを記念して、ロス・トレス・オンブレス（三人の男達）と名付けた。

帰りは登路とまったく同じルートをとった。丁度氷河の末端まで来た頃、日暮れが訪れた。

平隠な幸福な一日だった。強烈な印象はなかったけれど、心の

片隅にそっとしまっておきたいような、地味な山登りだった。

残された三つの処女峰

七月二七日、国境峠のキャンプに居るのはこの日限りだ。この最後の日は、チャウピオルコ・ノルテの横にある未踏峰をねらうのについいやされた。ノルテの頂上から東の方を見た時、いずれも未踏と思われる二つのピークが見られたが、その内、手前のピークは高度五八〇〇㍍程もあろうか、アンデス特有のひどく発達した雪庇とアイスフルートにかこまれた美しい雪峰であった。我々の次の目標は、この真白な雪のピークにおかれたが、キャンプからの距離の遠さと雪庇で守られた鋭い尾根のために一日で登ろうとするのは、はなはだ成算のない話だった。

それでも、その一際秀れた容姿に魅せられて、この日丸山と倉知はそれに向かった。一方、残る中村にはテント場付近の氷壁でセンテーノの技術指導をするという、割の悪い仕事が押しつけられた。

きのうも一つの山に登ったことで、二人が湖畔のテントを出発したのはラッシュタクティックにはいささか遅すぎる七時頃になってしまった。それでもせいぜい急いで、チャウピオルコ・ノルテに登った時と同じガレ場をつめて、岩尾根のコルに出た。

ここで、チャウピオルコ・ノルテの東に並んでいる三つの未踏峰の相対的な位置について説明しておかなければならない。すなわち、ノルテのジャンダルムから東に向って二本の尾根が分かれている。その内南側の方の尾根は、グッと南へ曲って二つのピークを並べている。前衛峰に近い方が我々の登ろうとした雪庇とアイスフルートの峰であり、そのむこうにはそれよりもやや低いがまるで対照的な、峨々とした鋭峰がそびえている。前者の頂上の丸みをもった雪の肌に対し、後者のドキドキと連らなる尖塔の対照を面白く思って、我々はこの二峰をそれぞれハナコ、タロウと呼ぶことにした。一方、ジャンダルムから北方へ派出するもう一つの尾根は、一旦ゆるやかなコルをつくってから、鋭くとがった小さい双耳峰を形造っている。これが国境峠の上の尾根から見るとアルパマヨ・チコの間のコルを越えてハナコへ続く南東尾根の次の目標は、この真白な雪のピークにおかれたが、キャンプからの距離の遠さと雪庇で守られた鋭い尾根のために一日で登ろうとするのは、はなはだ成算のない話だった。

それでも、その一際秀れた容姿に魅せられて、この日丸山と倉知はそれに向かった。一方、残る中村にはテント場付近の氷壁でセンテーノの技術指導をするという、割の悪い仕事が押しつけられた。

きのうも一つの山に登ったことで、二人が湖畔のテントを出発したのはラッシュタクティックにはいささか遅すぎる七時頃になってしまった。それでもせいぜい急いで、チャウピオルコ・ノルテに登った時と同じガレ場をつめて、岩尾根のコルに出た。

ここで、チャウピオルコ・ノルテの東に並んでいる三つの未踏峰の相対的な位置について説明しておかなければならない。すなわち、ノルテのジャンダルムから東に向って二本の尾根が分かれている。その内南側の方の尾根は、グッと南へ曲って二つのピークを並べている。前衛峰に近い方が我々の登ろうとした雪庇とアイスフルートの峰であり、そのむこうにはそれよりもやや低いがまるで対照的な、峨々とした鋭峰がそびえている。前者の頂上の丸みをもった雪の肌に対し、後者のドキドキと連らなる尖塔の対照を面白く思って、我々はこの二峰をそれぞれハナコ、タロウと呼ぶことにした。一方、ジャンダルムから北方へ派出するもう一つの尾根は、一旦ゆるやかなコルをつくってから、鋭くとがった小さい双耳峰を形造っている。これが国境峠の上の尾根から見ると、アルパマヨに似た形を呈しているものである。そこで我々は自然にアルパマヨ・チコ（小アルパマヨ）と呼びならわしてきた。

さて、この岩尾根のコルからハナコへ登るには、ジャンダルムとアルパマヨ・チコの間のコルを越えてハナコへ続く南東尾根へ取り付かねばならない。そこで我々はまずそのコルへつづく氷河をつめる。ガラガラと石を落しながら、岩尾根を向う側へ降り氷河の末端へ出る。この氷河はかなり巾広く距離は短いので、盆地のような趣きを呈していたが、下半分はひどく複雑に褶曲していて、登攀には困難が予想された。しかし有難いことには、右よりにクレバスの殆んどない「とい」のような凹状のみぞが続いていたので、その中をルートに選んで登ってみると、案外容易に登ることが出来た。小さなクレバスは絶えなかったが、適当にさけることが出来た。

氷河の上部は、傾斜のゆるい平らな雪原だった。中程には、深

くなるにしたがって拡がり、まるで大きな蒼い口を開けているようなゾッとするクレバスが二、三あったが、うまくスノウ。ブリッジが渡っていて難なく越えることが出来た。こういう所へ一人が落ちたならば、もう一人はどうして引き上げればよいかと考えるとちょっと空恐ろしくなった。

雪は固くしまって、アイゼンは小気味よくきしる。しかし意外な敵は太陽だった。白一色の盆地の中で、南緯一五度の強烈な陽光に照りつけられては、体を動かすのすら大儀だった。コルに着いた時には、体中の水分がすべて抜け出てしまったような気持だった。

この北東尾根のコルから、ジャンダルムの腹をまいて南東尾根へトラバースするルートは、ノルテの頂上からも、どこからも見えなかったので、懸案の場所だった。それで、息をはづませ期待してコルへたどりついたが、むこう側が見えたとたんにがっかりしてしまった。というのは、その間は急な氷壁となって下の氷河まで一気に切れ落ちており、トラバースどころではなかったからだ。南東尾根へ取り付くには、この北東尾根をジャンダルムの頂上近くまでたどってから、トラバースするより仕方なかった。

下の氷河まで一気になぎ落ちている、ハナコのこちら側のフェースは恐ろしく威圧的であった。やさしさを秘めているのは頂上の柔かな曲線を描いた白いドームだけだった。このように近寄り難いことを思うと、その頂上の魅力は一層強く心にせまって来るものだ。

コルで昼食を摂ってから、尾根の登攀にとりかかった。スタカットで五ピッチ、登りながら南東尾根へと移った。そしてようやくめざすハナコへ続く尾根へ出たものの、それからは大きな雪庇と、崩れそうな小ピークの連続で、進むにはひどく時間がかかるように思われた。残念だったが、どう考えても時間が不足だったし、ビヴァークの用意もしていなかったので引き返さなくてはならなかった。このハナコとその向こうのタロウは、立派な山だけれども一つの遠征隊の目標となるには小さすぎるし、ここ当分は処女峰のままで居ることだろう。

こうしてハナコに別れをつげ、コルから氷河へ下った。真中あたりまで来た時、これから残っている時間で、北東尾根上の双耳峰に登れるのではないかと気が付いた。尾根の側壁は雪の状態さえよければ割合簡単のように思えたし、尾根も左のピークの方はそんなにやせてはいない。すぐ相談が決まって、クルッと右に九〇度曲って、再び登り出した。

双耳峰の真中の鞍部をめがけて真直ぐ登る。しかし壁状になるまでの登りは、吹きだまりのように雪が柔かくて、ヒザ以上まで もぐった。いくらも登らない内に、息は切れ気は遠くなりそうになって、登る気をおこしたのを後悔し始めた。それでも捨てバチ的なファイトをかき立てて、とにかく壁の下まで来た時には、精根つきはてた感じだった。

壁は思ったより短かく、簡単のようだ。雪はピッケルのシャフトが根本までささる丁度よい硬さで申し分なかった。四〇㍍いっぱい登った所はもう傾斜もゆるかったので、そのままコンティニュアスに変えて登りつづけ、鞍部へ出る。それから右のピークへつづく尾根は、紙のようなナイフエッヂだったので敬遠し、左のピークへ向かった。五㍍程の巾の、傾斜した雪面をゆっくり歩い

て頂上に着いた。下の氷河から二時間程しか、かかっていなかった。

感激の少ない頂上ではあったが、北の方にはプイナ・パタやクヌヨが一面の雲海の上にポッカリ浮いているのが見られ、頂上の雪庇越しにそれらを眺めていると、頂上の気分が出た。例によって旗を取り出し、ピッケルにつけて記念写真をとった。上の方からボリビア、日の丸、ボリビア山岳会旗、一橋大学校旗を連らねたこの万国旗は、何度も用をはたさなければならない。変なはずみで、この山は後からネバドKという名がつけられた。

帰りは何かうまい拾い物をしたような、いい気分だった。道標用の赤旗が残り少なく、五、六本しか立ててこなかったために、氷河の中でガスにまかれ、ルートを見つけるのに少しく苦労をしなければならなかった。しかし幸い事故もなく氷河を降り切り、この山群での最後の登攀を無事に終了することが出来た。

しかし日数の制限のために、この界隈に、ハナコ、タロウ、北の端にあるクヌヨ、といずれも魅力ある未踏峰を残していくのは、いかにも心残りだった。次の目標のププヤ山群の登攀はあきらめて、その三峰をねらう方が有意義のように思えたのだが、後日ププヤの山々もこれに劣らず魅力的なのを発見して、ようやく慰められた。

湖畔のテントに戻ると、すでにベナンシオは馬六頭をつれてプイナから帰っていた。ワヌコの方は、やはり危惧したように来てはいなかった。

ベースキャンプに戻る

来る時には二日がかりで来たけれども、下りだから一日で行くことにして、早朝四時頃から起き出して用意をした。毎日のことだが、朝方はひどく冷え込む。目の前の氷河湖にも分厚い氷が張って、石を投げた位ではヒビも入らなかった。

足先のしびれるような冷たさを足ぶみしながらがまんして、よううやく出発の準備を終えた頃、辺りが明るくなって来た。人も馬も白い息をはきながら降り始める。

馬というのは降りる時には尻を振ってすくんだような歩き方をするので、非常にペースが遅い。すぐに我々だけが先を歩くようになった。登った山を見たり、写真を撮ったりするために、各々あちこちに道草を食い、ゆっくり降りたりするのに少しく苦労をが先になってしまった。その内、いつか馬の方

この辺りから見える山は、どれが何山か、一応正しく指摘出来るようになった。やはりこの山群では、その盟主たるチャウピオルコとチャウピオルコ・ノルテがひときわぬきんでそびえている。特にチャウピオルコの本峰とくらべて少しも遜色なく、ノルテ（北峰）として区別するより別の独立した名を与えたい程、りっぱな山容だった。

陽が昇り高度が下がるに従って、一枚上着をぬいでいく。体と一緒に心も軽くなっていくようだった。そして腹もへり出した。ところが、馬と共に昼食も先に行ってしまったので、暗い内

に朝食を摂ったきりのすき腹をかかえて、馬に追い着くため、最後の奮闘をしなければならなかった。

その後はのんびりと峠を越えた。ベースキャンプの見える最後の山角を曲ると、センテーノのあげた大声と共に、テントから人がバラバラと飛び出して来た。両側から手を振り声をあげて、一歩一歩近付いた。

「ヤア、御苦労サン。どうだった?」

「ウーン、バテた。でもおもしろかったナ。」

特定の状況の下に限られた人間だけとしか接触してない時に、一週間程離れただけで、この程の新鮮な感じをもってあいさつ出来るとは、不思議なものだ。相手の顔を見るのが心持ち恥しくすらある。歩いては寝るだけの単純な生活の中で、やっと人間らしさを感じる一瞬だった。

オコルルニ谷より望むチャウピオルコ山群

■第五章■

チョクニャコータを基地に

中川滋夫

チャウピオルコの内院へ

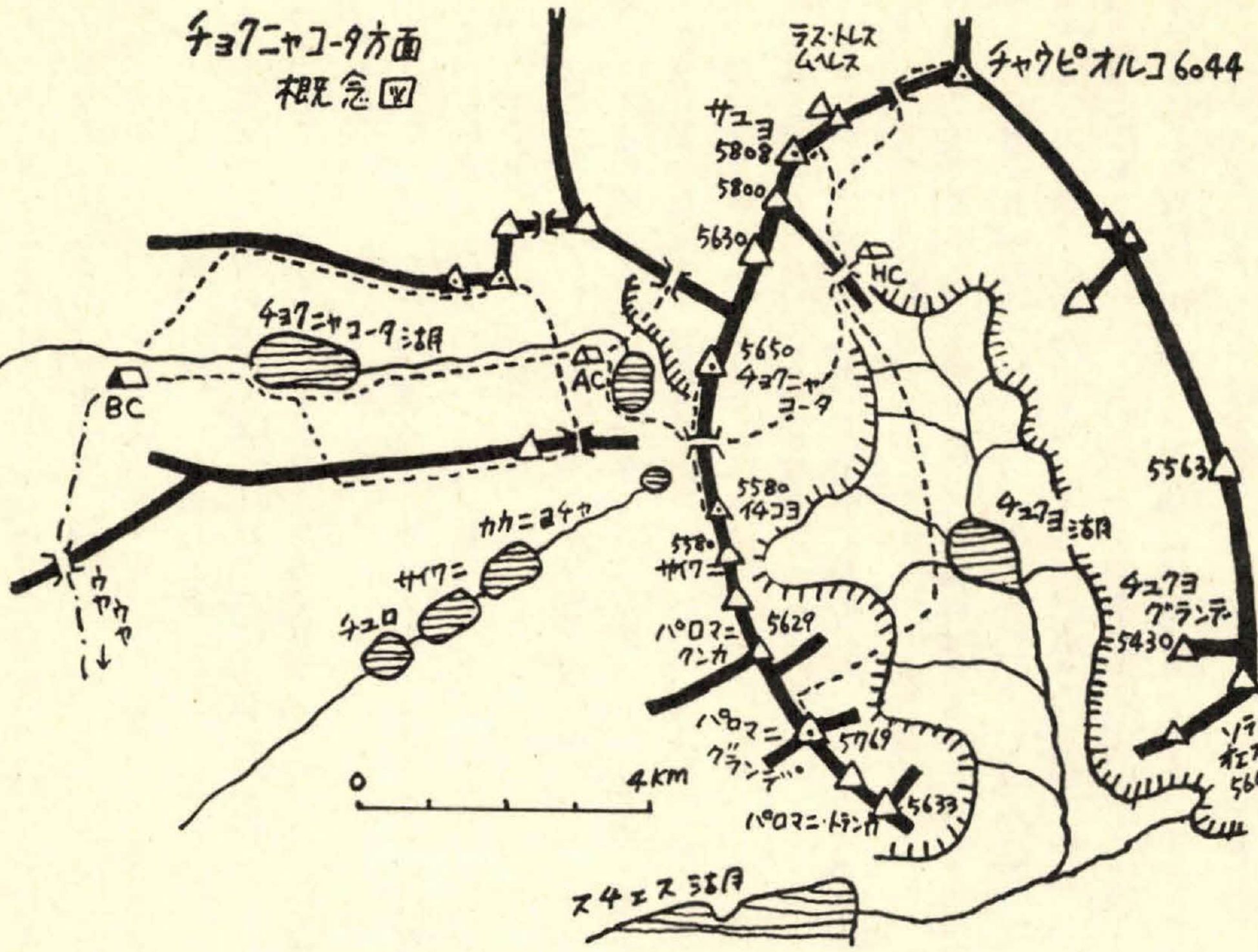
七月一九日。一一時、ベースキャンプを出る。荷物は二〇〇キロ一二頭のヤーマに振り分けにして積んだ。

ヤーマは一頭二〇キロ位しかかつげないので能率的でないが、馬を多く雇えなかったから仕方ない。それでも一頭七〇円位だから安いものである。ヤーマは集団で行動する習性があるらしく、残ったヤーマも一緒について来る。ぞろぞろと沢山のヤーマがくっついて来るので、荷物の割には大げさなキャラバンとなった。

谷沿いに広い草地をしばらく行くと、真青な水をたたえたチョクニャコータ湖に出るが、先日甘利が偵察したルートに従って、湖の右岸に沿って登る。敏捷なヤーマはけっこう早く歩くし、急な坂もスタコラ登って行く。湖を越え、谷の右側にあるルンゼ状の草付きを登ると、一段高くなった台地に出た。そこで谷を右側から左側へ横断し、大きな石のゴロゴロしているガレ場に入る。ガレ場ではヤーマが足を痛めるから、もうここでかんべんしてくれ、とインディオ達が泣き声で進むのを渋り始めた。彼等にはあまり価値のない「金」で釣るわけにはいかない。もう少しだ、といくら強引に引っぱり上げるより他ない。だが、いよいよ雪渓にかかると、もうテコでも動かない。大体予定地までは来たのだし、つまらぬいざこざを起こしても仕方がないので、ヤーマはそこで引き返させることにした。前進キャンプの予定地までは、もう一段高くなったテラスまで登らなくてはならない。

しばらくかかって荷物を整理してから出発。一人四〇キロ位かつぎ、後はそこにデポした。最初の五〇〇メートル位の雪渓で、フリオがすべったりころんだりするので弱ったが、仕方なく彼の分もかついでやる。どうやら彼はベースキャンプの番人に使う以外、使い道はなさそうだ。そこから右へせり上る巾五〇メートル程のバンドをたどるとやっとチョクニャコータ峰の足下に出た。ささくれ立った氷河が拡がり、手前には小さな湖がある。その湖の横に前進キャンプを張る。高度五〇五〇メートル。中島はベースキャンプに戻るフリオを送ってデポ地まで下り、残りの荷をテラスの上の安全地まで荷上げしてからフリオを帰らせた。それからフリオを誇る中島は、又四〇キロの荷を背負って前進キャンプへ戻って来た。

翌二〇日は初めて悪天になった。この日は二隊に分れて偵察する。第一隊の甘利と中川は、チョクニャコータ峰手前を北方に登っている氷河をつめて、氷河の状態と付近の概念をつかむ。第二隊の中島、マルチネスは、チョクニャコータ峰南のコルに出て、パロマニ、チャウピオルコへの登路を調べる。最初の偵察だが、



出来たら登れるピークに登って、「上から」概念をつかむことにして出発した。

まず第一隊。キャンプからすぐ氷河の上に出て、まっすぐ氷河をつめていったが、雪が腐っていて大いに悩まされた。おまけに雪で隠されている小さなクレバスが随所にあって、冷汗ものだった。午後三時、無名峰の間の広いコルに出たが、向う側は深く切れ落ち、この氷河の分水嶺の尾根もけわしいので、このルートは不適当と判った。

次に第二隊。これは中島のメモをまとめると、彼等は氷河をつめ、目標のコルまで割合簡単に達することが出来た。そこからコルの両側のピークに登ることにする。南側のピークの方がやさしそうなので、まずそちらへ取り付いたが、ピークといってもほとんどパロマニからのびている尾根の肩といった感じで、展望もよくない。

一方、コルの北側のピークは、丁度ベースキャンプから真正面に望まれるチョクニャコータ峰である。イチコヨに登った後、まだ時間があったので登ることにする。コルから頂上まで広い雪壁を直上、途中スタカットで登った悪場が三ピッチ程あった。主に南面はボソボソの軟雪で、スネまでもぐるのでつらかった。頂上直下で突発的な吹雪に見舞われて驚いた。日本の冬山ならざらにある何でもないものだったが、マルチネスにとっては慣れないことらしく、大そう驚いていた。

この日の偵察の結果、コルの向う側は多くのピークにかこまれ

た大雪原になっているので、コルを越えてキャンプを伸ばし、山の向う側に登路を見付けることにした。この辺の氷河はプカヒルカの氷河とは大分ようすが違って、第一よくもぐるし、ヒドン・クレバスも多い。特に変わっているのは、「ニエベ・ペニテンテ」である。これは、大陸性の乾燥した暑さのために雪が昇華して起る現象だが、雪の表面がささくれ立ち、氷柱が無数に並んでとび出している。上を歩くとボソボソもぐり歩きにくいことはなはだしい。

明けて二一日。なるべく遠くへキャンプを伸ばせるように荷物を大巾に制限し、一人当り、二五㌔位にまとめた。食糧は五日分、全部で一〇〇㌔に切りつめた。

それだけのことをしても、陽が高く昇ると例のニエベ・ペニテンテはグスグスくずれ出すし、クレバスもあって、ひどく時間がかかり、思った程すすむことが出来なかった。大雪原の真中へ出て、辺りを見渡すと、チャウピオルコ、サユヨ、パロマニなどのピークをどれがどれ、と指摘出来るようになった。

サユヨから東南に張り出した尾根の端に、かっこうの岩のくぼみを見つけて、そこに高処キャンプをもうけた。高度は五二五〇㍍。ここまでくると、氷河そのものの傾斜はゆるくても、非常に長く、それぞれのピークはあまりにも大きい、ということを、実感としてよく悟ることが出来た。そこで、もう一度皆で相談し、結局縦走はあきらめて、このキャンプを基点として、チャウピオルコをはじめ周囲の山を、放射状に登るやり方をとることにした。そう決めると、とても気が楽になった。

チャウピオルコ登頂

七月二二日、チャウピオルコとパロマニ・グランデをねらう。前者には中島と中川、後者には甘利とマルチネスのパーティが向った。

チャウピオルコ隊の中島と中川は八時出発、きのう氷河の軟雪にこりたので、なるべく雪の上に出ないように氷河と岩尾根の間をたどって時間をかせいだ。ガスの切れ間から時々浮びあがるチャウピオルコは、アッと思うような高い所に見え、威圧するようにおおいかぶさってくる。全く大きな山容を持つ山である。

いよいよ氷河に足をふみ入れる。例によって軟雪。膝までもぐりうんざりする。プカヒルカでの経験から、ワカンは不必要と思って持ってこなかったのは残念だった。一〇〇歩程進んではラッセルを交替して行く。後を振り向いては、アー、まだこれだけか、と嘆息する。遅々として進まない。山のふところまで氷河をたどるのに、三時間位かかってしまった。ガスも段々深くなって来た。

氷河をつめた所で急な雪壁にぶつかった。クレバスの割れ目に、上の方から雪がおしかぶさってきている無気味な感じだった。二ピッチ、六〇㍍位の壁だった。それからはなだらかな雪面が続いていたが、クレバスが無数にあり、しかもガスのために距離感も傾斜感もはっきりしない。おまけに初めての山ではないか。不安は募るが、二時間に一度位瞬間的に晴れ間を見せるし、夕方になれば

毎日すばらしい天気になることも判っている。あわてることはない、と図々しくかまえて晴れ間を待った。すわる場所を切って、サブザックはピッケルで固定し、あとは着られるものを全部着てアルファ米のにぎりめしにパクついた。

一時間も待った頃、ほんの二、三分だったが、頂上までのルートが垣間見えた。うまいことには頂上まではわずかだった。一ヵ所、一粁位の巾のクレバスを渡らねばならなかったが、向う側にピッケルをさして一気にとぶ。それからは、アマゾン側に切れ落ちた五〇度程の雪稜に出る。一ピッチ四〇粁いっぱいを登ると、あとは傾斜がゆるくなって頂上まで真直ぐに続いていた。

頂上は東西に細長くのびていた。頂上に立っても相変わらずガス。何も見えない。ツイていないことをこぼしながら、寒さに震えて一時間待った。

午後四時、空に吸いとられるように消えて行くガスの中から、アポロバンバの白嶺が現われる。まるで芝居の幕の開く時のように、期待と緊張で胸がいっぱいになった。

幕がしまった後は、いつものように残り少ない時間に追われながら往路を下った。

パロマニ・グランデ登頂

同日、パロマニ隊も無事登頂に成功した。次に登頂した甘利の手記を引用しよう。

チャウピオルコに向う中島達を出してからゆっくりテントを後にした。氷河を少し降りてからモレーンに下り、短い草の生えた気持よいガラ場を斜めに登って行く。今日の山は処女峰ではないので気が楽だ。氷河の取り付きでアンザイレン。平凡な雪の斜面を、クレバスをさけながら単調に登る。

腹の調子が悪く、息切れがして仕方がないが、マルチネスはうまく調子を合せてくれる。流石にボリビアで最も経験の深い山男と云われるだけあって、山の生活によく馴れたジェントルマンだ。単調な登りもようやく終り、ステップカットが必要になって来た処で主稜線に出た。ペルー側の見える主稜線のクレバスの中で昼食を摂っている時、突然雷鳴が鳴り出した、ペルー側を見降ろすと、雨雲のかたまりが、相当の速さでこっちに向って来る。六〇〇〇粁の稜線で雷に打たれたら大変とばかり、金物類を一切隔離してクレバスに避難する。やがて雲のかたまりはパロマニを覆い、雷鳴は鳴り響き、頭髪は電気を帯びてやや逆立った。それもしばらくで、やがて遠のいて行ったが、仲々晴れ上らない。しびれを切らして出かけようと云うと、マルチネスはまだいやだと云う。ボリビア一の山男の慎重な態度には感心した。結局一時間半程待期してやっとみこしを上げた。それからはよく締った硬雪の斜面をステップカットを交えながら、最後に一寸急な雪壁を登って頂上に出た。頂上はだだっ広い平らな広場で、のんびりとボリビアの広大なパンパを見降ろして放心の一時を過す。マルチネスは何と半畳程もあるボリビアの大国旗を持ち出して、写真を撮る。三〇㌢程の日本国旗との対照は誠に妙だった。

帰路、下の草原でパト（鳥）の卵を見つけ、一生懸命その夜の

おかずを集める。
正にのんびりした心地よい一日であった。

サユヨ登頂

七月二三日は中川、中島がサユヨから南に続く二つのピークの縦走、甘利、マルチネスがチャウピオルコ東の無名峰に向う予定だった。所が出発して一〇分も経たない内に、マルチネスが膝の痛みを訴えたので休ませ、甘利もサユヨ隊に合流することになった。きのうと同じ様に、氷河上に出る。きのうのラッセルがあるので大分楽ではあるが、皆きのうの疲れが抜け切らず、おまけに甘利と中川は不節制がたたって腹の調子が悪く、ピッチは上らない。

一時間ばかり行った所からトレースを離れコルに向う。氷河は段々傾斜が増し、雪は深くなった。一段高くなった所で昼食。時間的に遅いし、三人パーティなので縦走はあきらめ、サユヨだけにすることに決定。トレスからチャウピオルコ側に切れ落ちている岩と雪のリッジが猛烈に魅力的で、登攀欲をかき上がらせた。

だが今は、直射日光がジリジリと照りつけ、腹の調子は相変らず、雪は増々深くなって腰までのラッセル、おまけに傾斜がぐんぐんきつくなってファイトもなくなって来た。この辺はどうやら、サユヨとトレス・ムヘレスの両側の壁から落ちる雪の集まるらしいので雪崩を警戒したが、雪質は良く底雪崩の危険を除いてはまず安心だ。ブロックの落ちそうな奴も見当らない。

傾斜が強くなるにつれて、案の条雪が硬くなり、アイゼンのツァッケがきしむようになって来た。そこでファイトを取り戻し、直上、さらに左にトラバース。上の傾斜がきつくなったので、スタカットで登る。まず、中川トップで四〇㍍雪壁を登る。そこより中島と交代、左上に四〇㍍登るとコルに達した。

コルから上はスカブラ調の硬質の雪で、傾斜もさほどなく、四五度位だった。中川トップで右手にピッケル、左手にアイスバイルを持ち、交互に雪面に突立てながら強引に登る。時間がないので、ミドルの甘利がトップとラストの両方のジッヘルをして、二人が同時登攀をするというやり方をした。

三ピッチ目は、傾斜が今までで一番急になった。一歩々々カッティングを行い、岩の少し露出した小バンドに達した。ジッヘル用にハーケンを打とうと思ったけれど、足場が悪く良いリスもないので、岩の上のブルーアイスにアイスハーケンを打ち込む。氷が岩に張りついて発達したものなので、ガバと欠けることを恐れたが、ビンビン鳴って食い込んだ。カラビナをガチャリとセットし終えた時は全くホッとした。

そこから傾斜の落ちた雪面を一〇㍍ばかり登ると、頂上から南に伸びている尾根の上に出る。更に一ピッチ四〇㍍行けば、頂上直下四㍍の所に達した。だが頂上は、どうやら雪庇となって向う側に張り出しているらしい。一人づつ交代で、後の二人にしっかりジッヘルされながら頂上に立つ。頂上は本当にせまく丸イス位の大きさ、人間一人の体重をささえられそうもない。この可愛ら

しい頂上に皆すっかりうれしくなって、写真などパチパチやりながら夕闇迫るまで時を忘れた。

さて、帰りをいそがねばならない。アイスハーケンを打った所までスタカットで一ピッチ。次にそのアイスハーケンをピンに四〇㍍のアップザイレン。後は四〇㍍のザイルを二本つないで、ザイルを引きずりながら急いで下の氷河まで降りた。ここまで来るまでも口ぐせの「身をもって示す」方法で代って、それを背負って来たが、ライトの光を頼りに空腹をこらえつつ氷河を降り切った。しかしインディオにそのモラルは通用しないらしい。ニヤリ、ガレ場をたどってテントに戻った時は、全くフラフラで今にも倒れそうだった。

ベースキャンプの夜

七月二四日。疲れた。今日は撤収だという気持がますます疲労感を募らせる。ただ一人昨日のサユヨ峰アタックに「安息日」をとったマルチネスだけがはしゃいでいる。

一二時、いよいよ重い腰をあげて帰路につく。太陽の光だけがまぶしく、大平原とよんだ方がいいような氷河をラッセルしながら進んだ。時々予期しないところで小さなクレバスに落ちこんではヒヤッとする。三月の春山のようにグズグズの雪が重く、スネまでもぐる。

本当に静かな楽園といった氷河だ。壮厳でさえある。自分たちの登った山までが一幅の絵のようにに見える。ものうさをかみしめながら、午後四時半前進キャンプ地に着いた。

翌日は、ベースキャンプからあがってきたフリオを待って、いよいよチョクニャコータを目指して下山する。

途中、フリオが、荷物を軽くしなければ歩かないと言って、すわりこんでしまった。すでにポーターとして役に立たないことはわかっていたが、これまで我々に服従しないことはなかった。

荷物は約四〇㌔でけっして重くはない。腹立ちまぎれに、中島がいつも口ぐせの「身をもって示す」方法で代って、それを背負った。しかしインディオにそのモラルは通用しないらしい。ニヤニヤしながらついてくる。中島はあてがはずれて「今日の給料はやらねえぞ。」とわめいて先を歩いていった。

ベースキャンプでは隊長が待ちわびて、我々の帰着にピストルの祝砲をあげてくれた。隊長にフリオの話をしたら大笑いで「まけといてやれよ。」というだけ。相手にされず腹の虫のおさまらぬ中島は、口を動かしてこらえることにしたらしく、メス・テントに入ったままなかなか出てこなかった。

翌日は久し振りの休日であった。北方隊を待って吉沢隊長以下チョクニャコータゴルフ場（？）で一日、ゴルフをする。と云っても隊長の毒舌によると、我々は皆土ブをくわに代えた方がいいのだそうだ。

夜、北方隊帰着までの予定を検討しう方法を論議した。

残してあるカイェホンに行くのは我々の隊の目的なので文句はなく、中川とマルチネスが登攀隊員に決定し、フリオが荷上げを手伝うことになった。

そして端麗な容姿に隊長が一目ぼれしていたカカワイチョ峰に吉沢、中島が登る。甘利はベースでその後の移動に関する準備をすすめることが決定した。

シンシンと冷える食堂テントの中で紅茶をすすりながら、話題はププヤにうつり、議論は熱をおびた。

ラパスに着いてすぐ、五二〇〇㍍のチャカルタヤスキー場からコルディエラ・レアルの山塊を眼の前に見た時、われわれが一眼で魅せられた山があった。五八〇〇㍍のティキマニ峰である。マルチネスがラパスのレストランでマッチ箱をテーブルの上にたて、「これがティキマニだ！」と大げさに説明したが、まさにそんな感じだ。周囲の白嶺とは対照的なゴツゴツと岩肌をいからせた岩峰。ドイツ隊が一ヵ月もねばったが登れなかったとか、スイスも駄目だったとかいう話がわれわれをたきつけた。

チョクニャコータのベースでの夜、ププヤをやめてそのティキマニ峰を目指してはどうかという議論が出た。甘利は、日本での岩登りの体験とアンデスにおける氷雪技術の修得を総合して、おぼろげながらわかってきたアンデス的な登山を実験してみてはどうかと主張した。

それに対して隊長は、登山はアクロバットの遊戯ではない、もしティキマニをやるなら新しい構想で新しい隊を編成して出なおすべきで、あくまでも未知の領域を探るププヤへの道をおし進めねばならないことを主張した。

議論はこの二つの主張をめぐって、山登りの本質論議から海外遠征の意味、はては現代の青年について、全学連の行動についてといった問題にまで及び、その内容はここでは省略する。

結局、ププヤ山群の探検と登山をあくまでも追求することに決定したが、今からあの夜のことを思い出すと実に楽しい。一人一人の顔色までがはっきりと思い出されるのだ。議論が議論として話されたということだけでも楽しかった。

海外遠征隊が些細なことからくすぶったりケンカをして失敗するという例をよく聞くが、われわれは一度もそんなことがなかった。そうかといって皆が言いたいこともこらえてちぢこまっていたわけではない。あの夜はそういう意味ではもっとも隊の運営に支障を来たすかもしれない時だった。隊長もつらかったにちがいない。けた上で納得してきりぬけた。それをドライに自論をぶつしかしそういったことが可能なパーティーシップが出来ていたことは、遠征を通じて実にスムーズに計画を進め得たキイポイントだった、ということはいえるだろう。

カカワイチョ登頂

二十七日には、予定通りカカワイチョ隊とカイェホン隊がベースキャンプを発った。

カカワイチョ隊の方は、中島の記録を引用する。

実に優雅ななで肩のカカワイチョ峰はアンデス特有の美しい山だった。アイマラ語で「鳥の山」という意味で、隊長はベースキャンプで周囲の山々を観察しながら、ひそかに登頂への意欲を高

めていた。
氷河湖のまわりにある湿地帯を、浮島を渡りながら進む。のどかで、ところどころに美しい花が咲いている。どこかにうらさびしい荒涼とした雰囲気がある。フト、秋の尾瀬を思い出す。谷がせばまって、河原を右に左に跳んでいくと、急に氷河の舌端に出た。
右手のガラ場をつめて、いよいよカカワイチョにまっすぐ続く氷河の下へたどりつく。昼食をすませ、アイゼンをはく。革バンドを締める隊長の手に緊張感がみなぎっている。ザイルをつなぎ、氷河に一歩を踏み出す。
目の前に見えるカカワイチョは、ますます夢幻的で、優雅で、手をふれるのが惜しいような姿をしている。平原状の氷河を、時々足がズブリとクレバスの中にもぐりながらも、慎重にゆっくりと登っていった。隊長がスを乱さぬようザイルを時々足をとめて呼吸を整える。そのペー
二時間程でカカワイチョ直下のコルにたどり着いた。右手にチャウピオルコ北峰、更にサユヨ峰へと続く稜線が拡がる。深い谷をへだてたその稜線は、ズタズタにさけた巨大な氷河を従え、威圧的であった。その谷の底に見える氷河湖の静けさ、愛らしさが、ひときわ印象的だった。チャウピオルコ本峰から北峰への縦走という当初の計画が、とてつもない夢物語みたいに思われて思わず苦笑した。
クレバスを越え頂上へのピッチ。風の影響を受けない斜面であるため、軟雪の急斜面には手こずる。隊長に無事頂上へ立ってもらわねばならないから、無駄なエネルギーを使わなくてもすむよう、ステップを一つ一つ固めていく。
四ピッチで固い雪の上にとび出し、いよいよ頂上が間近になったことがわかる。ニエベ・ペニテンテが目立つようになった。四〇〇㍍ザイルでの六ピッチ目。ゆるくなったニエベ・ペニテンテを、アイゼンをふみしめながら黙々と隊長が進んでいく。赤いナイロンザイルがゆっくりと伸びる。最後の階段を登って隊長がカカワイチョの頂上に立った。五八才の隊長が、心に貯えてきた五四〇〇㍍の処女峰に登った。オーバーズボンのポケットからとり出したボリビア国旗と日本国旗、そして一橋大学の旗をピッケルに結び、足場をたしかめるようにしてこちらを向く。午後四時半、感激的なシーンだった。
下りは早い。一時間半で氷河の末端まで戻ってしまった。隊長は今日の登攀を自ら確かめるように何回も後を振り向いては、カメラのシャッターをおしていた。
湖の手前で日が暮れてしまったため、ヘッドランプのお世話になり、疲れた身体でベースに着いたのは八時四五分だった。ベースキャンプの灯が見えた時、それまで黙っていた隊長が急に大きな声で「登ったぞ!」とどなった。メス・テントでわれわれを待っていた副隊長以下の面々が皆とび出してきてわれわれを迎えてくれた。
一二時間の緊張から解放された隊長がミルクをすする時の顔は、頂上での隊長よりもはるかに印象的だった。僕は、イイナー、イイナー、と心の中で一人感激していた。五八才、五尺そこそこの身体で、キャンプ間を往復するのではなく五四〇〇㍍の処女峰に立ったことの意味が、わけもなくズシリと胸にこたえた。

カイェホン

非常に魅惑的なピラミッド型の岩峰に気をとられながら、パンパを行く。振り返ると、先日登ったチャウピオルコなどがその白い英姿を誇るように高くそびえている。一行は中川、マルチネス、それにボッカのフリオ。

午後二時半、リティパタの南尾根上のコルに達したが、少し時間は早くともその先にはよいテント場がないので、キャンプすることに決めフリオを帰した。

翌二八日は七時出発のつもりだったが、二人共寝過して八時半になってしまった。リティ・パタの頂上を左にまき、氷壁をトラバースする。カチカチの硬雪がささくれだっているのでステップカットの必要はなかったが、かなり急なのでスタカットで渡る。次にはカイェホンの巨大な南壁の下部へ伸びる尾根へ向う。よさそうな所を選んで一気に尾根に登る。それまで気がつかなかったが、このあたりまで来ると目指すカイェホンはグッと間近かに迫っていて、そのスケールには改めて驚かされた。

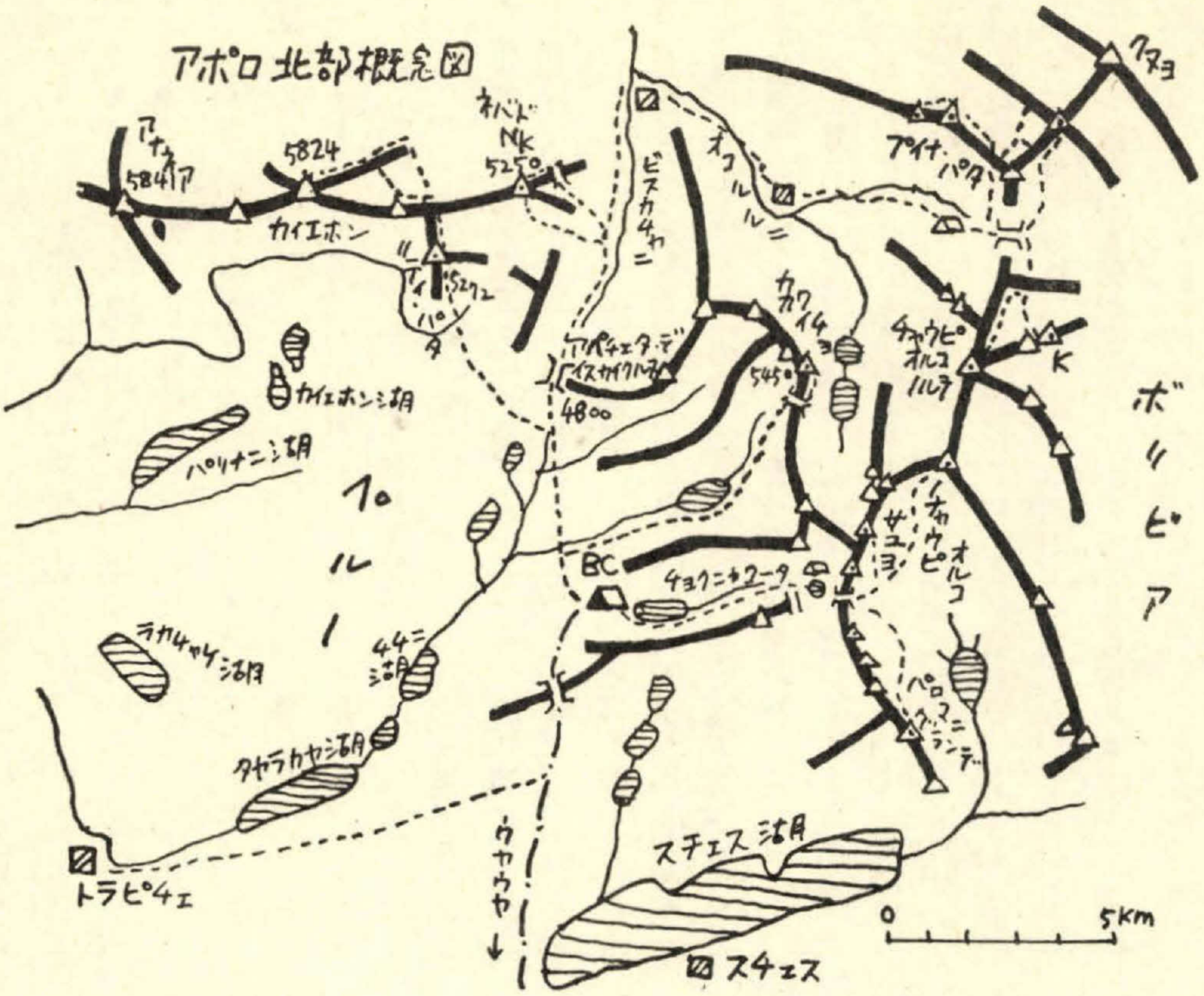
天気は上々、気分はよろしく、尾根上を登り降りして行くと、五〇〇㍍位の高さのケルンにぶつかった。初めてここに来たイタリア隊のものだろうが、なんとなく懐しい感じだ。尾根上の突起を五つ越えると、南壁を丁度真上に望むコルに出た。そこで昼食を摂る。フト時計を見ると、意外に時間が経っているのでギクリとした。マルチネスも気付いたらしく、これから登るのでは今日中にテントまで戻れないだろうから引き返えそう、と言い出した。それは言葉が解らない振りをして、食事をしながらそれから先択るべきルートに目を走らせた。

ルートは三つ考えられた。まず、南壁下の氷河に出てからその氷河を下り、一旦モレーン地帯に出て、カイェホンの東稜に取り付くルート。これは技術的に一番やさしそうだが、一旦二〇〇㍍ばかり降りて登りなおさなくてはならない、を途中まで下り東稜の側壁を登るルート。側壁は順層の岩で楽に登れそうだったが、稜線直下にかぶさっているアイスビルディングが問題だった。第三のルートは、頂上からここまで一気になぎ落ちている一〇〇㍍程の氷壁である。所々、蒼氷がキラキラ光っているし、いかにも悪そうだった。マルチネスにこの三つのルートを説明し、お前ならドレにするかと聞いてみたら、

「お前のいいようにしていいが、五時までに頂上に着かなかったら引き返そう。」

という。そこで色々考えて結局二番目をとることに腹を決めた。どうやらキーポイントの稜線直下の部分にもぬけられそうなルートを見つけたからだ。

コルから右に一〇〇㍍下ってから、いよいよ岩壁に取り付く。最初は階段状だったので、グングン高度をかせぐことが出来た。ルートをよく見定めたつもりでも、実際取り付いて見ると思いがけない障害にぶつかってしまうものだ。傾斜が段々きつくなって、とうとうオーバーハングした岩に突き当ってしまった。岩はもろくハーケンはききそうにもない。ピッケルを岩の裂目につっこんでホールドにし、まずマルチネスが登り出す。中川の肩をか



り、猫のように背をまるめてソロソロと体をもち上げる。そして、ともかく上へ消えて行った。次に、荷物を皆あげてから、中川はザイルにすがって、ヨイショヨイショと引きずり上る。出た所は広いバンド、見上げると上は雪壁、アイスビルディングがのしかかっている。先程のコルから見た時には五、六粁位に思えたが、二〇粁は優にある。ヌルヌルしたアブラ氷が一ヵ所あり、あとは硬雪だった。

とにかくやって見なくては判らないと覚悟して、マルチネスにジッヘルを頼んで登り出す。左手にピッケル、右手にバイルを握ってジワジワとアブラ氷に近づく。氷に出た所でアイスハーケンを打とうとしたが、氷はひどく硬くてなかなか入らない。思いッ切りたたいた所、氷が割れてハーケンもカラとも カラカラと落ちていってしまった。マルチネスの奴が何やらわめき立てているが、何を云っているのかさっぱりわからない。ヤレヤレ、と腹立しいままに上を見上げると、左上三粁程の所に氷のツララがあるのがふと目に止った。あれを何とか利用してやろうと思って、ツララ目がけてステップを切っていった。

近づいて見るとツララは直径二〇糎位の太い奴で、腕をグルリと廻せば格好のホールドになった。左腕をからませ、右のバイルは雪に打ち込んでジリジリと体を上げる。体と一緒に左腕もソロソロとずり上げ、左ひざをツララの内側にこじ入れて一息つく。こうしてなんとか危機を脱し、あとはバイルで一歩々々ていねいにステップを切りつつ、一〇粁も登ると尾根上に跳び出た。マルチネスは「ムイ・ディフィシル（とても難しい）」を連発しながら登って来た。

そこで小休止をとってから、不必要なものはそこに置いて尾根をたどる。広い稜線をコンティニュアスで登る。雪がささくれ立っていて、とても歩きにくい。尾根上のクレバスを右に回り込んで雪壁を登りかえすと、上は雪庇が張り出していた。仕方なく雪庇に沿ってスタカットで登る。四ピッチ行った所でトップのマルチネスが急に動かなくなったので、どうしたとたずねると、モウ進めないという。

ドレドレとそこまで行って見たら、成程その向うはスッパリと切れ落ちている。尾根がここで切れる筈はないと、今までのルートを振り返ってよく考えて見たが、どうやら我々は頂上直下の北側に張り出した大雪庇の下に居るらしかった。頂上直下の雪庇をまいて行ったら向う側へ出てしまったというわけだ。この辺りでは一五㍍ばかり頭上にはみ出している。止むなく三ピッチばかり引き返し、比較的張り出しの小さな所を選んで、マルチネスの肩を借りて強引に乗り越した。頂上は、まだ三つ程コブを越した向うで雪煙をあげていた。

時計を見るとすでに四時半。頂上まで三ピッチ位あるだろう。このギザギザのノコギリのような雪庇のフチを登っていくには一時間はかかる。すると頂上を後にするのは六時になる。登りよりはるかに難しい降りで日が暮れてしまう。頂上でビヴァークなど、とても考えられない。それに話のよく通じないボリビア人と危い橋を渡るのも気が進まない。どうやら危険の大き過ぎる冒険のようだった。

「降りよう。」

と云ったら、マルチネスもうなづいた。カメラを取り出しシネを廻す。頂上は相変わらず雪煙をあげている。

けだるく、長い帰路。アップザイレンを避けて、尾根を端までたどることにする。簡単に下れると思っていたのに、尾根の下部はズタズタに切れていたので、途中であきらめて岩場を下る。よううやくモレーンの上に出、ビヴァーク・サイトを探す。何より休みたかった。岩の出っ張りの下にうづくまり、ツェルトをかぶった。

身に着けられるものはすべて着込んだのだが、夜中猛烈に寒く眠れなかった。マルチネスも寝れないらしかったので、ローソクをつけ暖をとった。暖くする方法を色々考えたが、マルチネスが持って来た一㍍四方程ある馬鹿でかい国旗を見付けて、早速使うことにした。頂上でひるがえすはずだったのが、足腰にまきつけられる羽目となった。ボリビアのと日本のとあるので、それぞれ国籍に応じて使ったものだった。

陽が当るようになってから出発、足が重くたびたび立止っては一息入れた。もう二度と試みる時間はないだろうと思うとつらかった。正午、テントに着く。テントは風で倒れていた。ジュース、紅茶、汁粉、メシと立てつづけに口に入れたら、やっと人間らしさが戻って来たような気がした。頂上でビヴァークなカイェホンをカメラにおさめ、すぐにテント撤収、ベースキャンプに重い足を向けた。

再びチョクニャコータに集結

カイェホンから戻るとの方へ行ったグループも帰って居たので、何日か振りに皆の顔がそろった。カイェホンは失敗だったが、皆、それまでの数々の登山に満足し、隊長も処女峰を踏んで御機嫌だった。ただ、食料補給と連絡に来るはずだったボリビア山岳会の連中がさっぱり現われないのは心配だった。あんまり信用のおけない彼等をオメオメと待っているわけにも行かないので、ププヤの方へベースキャンプを移すために、こちらで何とかトラックを呼ぶ必要があった。最初の予定では、我々の入山の一週間後位に、ボリビア山岳会の小型トラックがベースキャンプまで来て食料を補給し、こちらでの我々の下山予定日を確かめてラパスへ戻る、そしてその下山日にトラックをつれてベースキャンプへ来る、ということになっていた。それがさっぱり音沙汰ないのだから！　始めから我々で一切手はずを整えておくのだったと、皆腹を立てた。

とにかくチョクニャコータでの計画は一応予定通り成功した。我々は明日から次の第三の目標・未知のププヤへ向って行動をおこさなくてはならない。さし当って出来ることと云えば、電報を打てる一番近い所へ行くことだった。幸い、ベースキャンプに遊びに来たインディオから、近くにトラピチェというアシェンダがあって、そこで電報を打てると聞いたので、早速甘利と中島が出かけた。トラピチェで、どうにかペルー経由でラパスのトヨタ自動車宛打電することが出来たが、かぬのやら、着いても何日かかるのか、話だった。だがうまいことには、トラピチェには小型トラックが一台あったので、それを借りて少しづつ運んでしまうことにした。あまりいい顔はしなかったが、どうやら話をつけて、翌日ベースキャンプへ来るよう頼んだ。

約束通り、翌三〇日朝、トラックがやって来た。五日程の食糧と偵察用の装備だけ持って、隊長以下、甘利、中村、丸山、中島の五人がベースキャンプを発った。トラックはその日の内にププヤのふもとまで行って戻り、翌日はさらに第二便を出す予定だった。

その日は、残りの荷のパッキングをすまし用意万端整えた。翌日は朝早くから、今か今かとトラックの来るのを待ちかまえていたが、どうした訳か結局やって来なかった。次の日も朝から待ちかまえていたのだが駄目だった。何か事故が起ったに相違ないと思っていたが、昼頃フラリとトラピチェからインディオがやって来て、車が帰りに故障、当分修理出来ぬという連絡をもたらした。重なる手違いに腹立しい限りだったが、何か善後策をとらなくてはならない。

ラパスへ打った電報は、着くとしても二日か三日後、それから手配してここまで来るのに三日と見て、最低五日位かかるのだから当分駄目だった。もう残っている手は付近の部落から馬を徴発することしかないので、ペルー領だが一番近くのアナネアという部落まで行って見ることにした。ところがはるばる行ってみるとお祭りだとさわいでいて、さっぱりラチがあかないし、

馬もあまり居るようすもなかった。
結局の所、頼りに出来るのはトヨタのトラックしかないようだった。それまでこのパンパのド真中にポツンとあるベースキャンプでゴロゴロして居なければならない。
アナネアから帰って来て、気の抜けたようにボンヤリして居たら、この暇にどこか一つその辺の山に登れんだろうかと気が付いた。前々から目をつけて居たのだが、カイェホンの東にピラミッド型の魅力的な岩峰がある。リティ・パタ登頂の時とカイェホン試登の時に間近かに眺めてすっかりおなじみの山で、ビスカチャニ谷から八〇〇〇㍍程の高差を一気につき上げている端正な処女峰である。どこから取り付いていいか見当もつかないが、同時に目をひきつけて離さないものがあった。
他の隊員がすでに遠く離れている時に、残された二人だけでこの手強そうなピークを狙うことはいけないことだったかも知れない。だが、その山のことを倉知に話すと、彼も同じことを考えていたようで、すぐに話が決まってしまった。留守番はマルチネスとセンテーノの二人に頼み、早速出発してその日の内に山のふもとまで行っておくことにした。そこから翌日一日で登ってしまうつもりだった。

アンデスの岩登り・ネバドNKの登攀

その日、丁度トラピチェからインディオが一人、馬に乗って遊びに来ていた。その馬を拝借してザックを運ぶことにする。用意を整えてベースを出た時はもう夕暮近かった。ベナンシオに馬を引かせ、トボトボ後を追う。
カイェホンの方から見た時、ビスカチャニ谷から浅い谷がこの岩峰の真下まで入っているのを見付けていたので、その谷へ入って見るつもりだった。
アパチェタ・デ・イスカイクルスを越す頃はもう薄暗かった。ベナンシオは夜道を心配して帰りたがるが、なんとかゴマかして、やっと八時頃目的の谷の出会いまで来ることが出来た。そこでツェルトを張り、飯を食い、シュラフにもぐり込んで快適なビヴァーク。星がきれいだった。
翌朝は五時起床。陽がなかなか谷まで射し込んで来ないので猛烈に寒くてやり切れなかった。アゴを出そうんと上げて見上げると、頂上から東にのびる岩尾根のコルが真上に見えるので、とにかくコルへ登って見るつもりで、五〇㍍程のガレ場をつめて側壁に取り付いた。
壁下でアンザイレン、アイゼンは着けない。先に倉知トップで登り始める。久々に岩登りが出来るかと思うと心が浮立つようだった。だが、岩は逆層でホールドに苦労するし、体も馴れてないのでぎこちない。浮石は流石に多く、一つ一つ確めなければならない。時間は食うし神経を消耗させられる。トップを交互に代わり三ピッチ登ると雪壁に出た。傾斜はゆるいのでコンティニュアスでドンドン高度をかせぐ。再び岩に出たが、やさしい岩場なので尚、連続登攀を続ける。途中で早い昼食。見降ろすとビヴァーク地点に豆粒程の大きさの人間らしきものがモソモソしていた。

ペナンシオか。

続いて雪壁を一気に八〇㍍も登ると、意外に早くコルに出た。所がフト前を見ると、浅い谷をへだててその向うに又でかい岩尾根があって、そこにも下で見えたのと同じ様なコルがある。よく考えたら、下で見えたのコルだった。二つの尾根が重なって見えていたわけだ。目指すコルはまだはるか遠くの方で、そのこの尾根は上方で岩壁となって消えていた。頂上は見えない。まスケールの大きさにはいささか度肝をぬかれた。この尾根へは反あ、そんなに遠いこともあるまい、と話し合って、ルートをその対側の谷から簡単に登れる草地が続いていて、そちら側から登れ岩壁にとることにした。

ばいままでの苦労は節約出来たわけで、癪にさわることだった。

コルから尾根をつめて行くに逆層のツルツルのスラブにすぐに逆層のツルツルのスラブにぶつかった。倉知トップで、岩が斜めに積み重なったようなそ

の壁に立ち向う。始めは右のガリーをつめ、右端からスラブに移る。ハーケンを打とうにもリスも見当らないらしく「消耗々々！」を連発していたが、その内にスルリと上に抜けた。次のピッチは雪の積った急なルンゼ。中川トップ、キックステップで四〇㍍っぱい登る。次は雪と岩のまじった壁、四〇㍍。その上はハング帯なので雪のバンドを左に横断して、この壁の左端となっていた稜の向うへ出る。又急な岩壁。下部は雪壁となって下の谷まで一気にナギ落ちている。頭上の稜はハングしていてとても駄目。

これは又、ひどい所に出たもんだと思ったが、仕方なく左へトラバースを続け、岩場と雪壁とのコンタクトを行く。ソロソロと岩につかまりながらトラバースを始めた所、ホールドになると思った岩がボロボロとくずれて手がつけられない。そこでピッケルとバイルを両手に握り、雪壁を行く。ところが上の岩が雪の上まで張り出しているので、体がつかえてうまく渡れない。どうやら三㍍程進んだが、サア進もうか、戻ろうか、全く泣き出したい気持だった。一か八か、とにかくやって見るのだと自分に言いきかせて、ほとんど腹ばいのような格好で遠くの方にピッケルを伸ばし、左手のバイルでバランスを取りながら、ジワリジワリと体を動かし、からくも岩と雪の間に出来たクラックに頭から体を突込む。

ピッケルとバイルでジッヘルし、倉知を迎える。今の悪場でひどく時間を食ったのでヤキモキしていた。倉知は、このひどいトラバースにあきれて、もう引き返そうと言う。時計を見るともう三時半。予定ならもうとっくに頂上のはずだった。時間の経つのが早いのには愕然としたが、又このひどいところまで登って来い、とにかくここまで登って来たが、結局下の方が負けらなかった。もう頂上も近いぜ、と誘う。しばし、両方で意地を張っていばかりで稜の上の岩のである。次のピッチは雪壁を登り、一五㍍ながら、つき出た岩の間をテラスに出る。交互にトップを交代しなぬうようにして稜伝いに登る。

いくらも登らぬ内にザイルが岩の間にからんで動かなくなった。そこで左に稜を敬遠して、ボロボロの薄いカワラの積み重なったような岩場を行く。浮石をとっては投げ、ピッケルで引っき落としては一歩づつかせぐ、といった有様ではかどらない。

もうあたりには段々暗さがしのびよりやりと肌に感じるようになって来た。汗ばんだシャツがひんれが剣や穂高の岩場な

ら、あと何ピッチ、何分で抜けられると安心しておられるのだが、ここではさっぱり頂上も現われないし、第一頂上へ抜け出たって下りの安全ルートさえわかっちゃいないのだ。今さら登ったルートを下るわけにはいかなかった。うす暗い中で降りるにはもっと安全なルートを探す必要があった。危険なトラーバスはもう出来ない。一体我々はこの山のどの辺に居るのだろう。左右の壁が大分せまくなっていることを考えると、ピラミッド型のこの山の大分上の方に居るらしいことはわかった。とにかく今は上へ上へと登ることより手がなかった。

次は一二ピッチ目。左の稜を行く。続いて岩と雪の壁を倉知が登り出す。まともにアイスシャワーを浴びせられる。剣でもこうして彼から雪の洗礼を受けたことになると思ったので、アップザイレンをすることにしたが、上ではそれ所でないらしく苦闘している。

次は雪のルンゼ。トップ交代があったナ、などと思ったりしたい。傾斜も急なので、ズルズルと仰向けに落ちていきそうだった。一歩一歩雪を固めては登る。

そこから出っぱった岩を乗り越えると、稜の肩まで雪壁が続いていた。それを登り切ると、今度はやっと頂上が見えた。しかもほんの五〇㍍先。

「頂上が見えたぞ！」

と下にどなる。陽が急速に落ちて、あたりはバラ色に染まり始めた。

コンティニュアスで頂上へ向う。陽のまさに沈まんとする頃、登攀終了。握手。寒気が襲う。ホンの肩へ壮厳な入日。

完全に暗くならぬ内に少しでも降りようと、すぐ下山に移る。北東に伸びた稜線が比較的ゆるいのでそちらへ降りる。アイゼン着用。少し降りるともう真暗。ライトを出し、雪の緩斜面をどんどん下る。つづいて、滑りそうなスラブを苦労して降りて行ったら、コルに出た。下の方から見えた例の遠いコルらしい。南側に落ちている雪のルンゼをルートに選ぶ。スタカットで三ピッチ、どうにかこうにか下れたが、そこからはスッパリ切れ落ちていて、はるか下の方に雪面が青白く光っていた。とにかく今は上へ上へと行く。

睡気を訴えていた倉知は、ここでビヴァークしようと云ってすわり込み、居寝りを始めた。だが、下の雪面まで降りれば何とかなると思ったので、アップザイレンをすることにして彼を起こした。あんまり頼りになりそうもないハーケンを二本打って、四〇㍍のメインザイルと五〇㍍の五ミリザイルをセットした。真暗の中を倉知がこわごわ降りていったが、壁はまったく垂直らしくて沈痛な叫びを発している。予想に反して下の雪渓には全然とどかないが、途中の岩のテラスに運よく着いたらしい。中川、続く。ライトの電池も切れてまったくの闇。ソロソロと降りていったら、アッという間に左に振られ空中に投げ出されたようなかっこうで、左膝からイヤという程岩にぶつかった。そのままズルズルとテラスへ降りた時は全く気が転倒していた。

今まで気付かなかった疲労が、今のショックで一度にドッと襲って来た。ビヴァークに決定。石を落してすわる場所をつくった。ツェルトは持って来なかったので、着のみ着のままのビヴァーク。寒くて到底寝られない。ただ風がないのだけは幸いだった。一時頃になってやっと月が昇った。

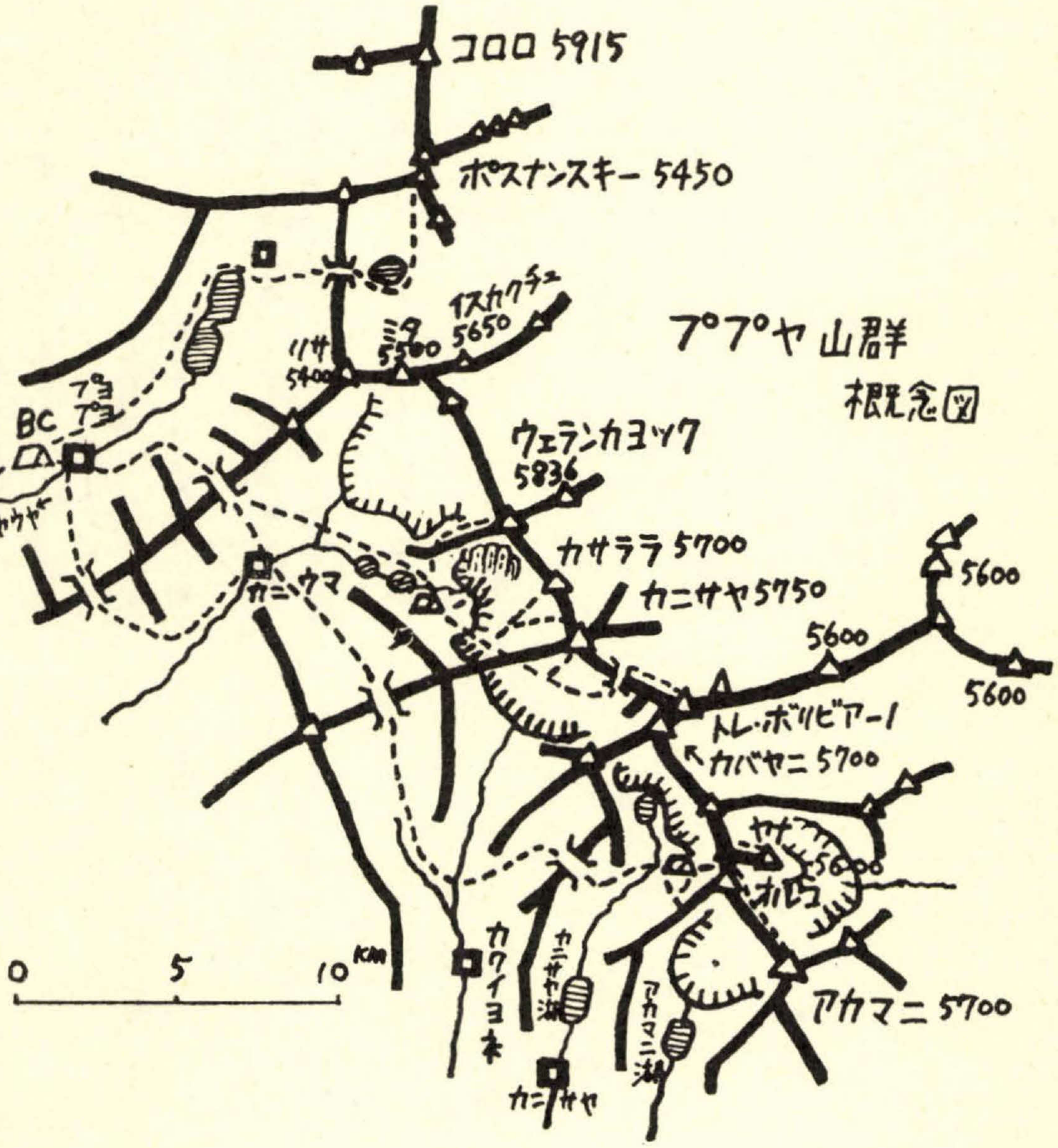
翌朝はミカンのカンヅメをあたためて食うことから始める。下の雪渓まではさほど急でないが、スタカットで降りることにする。硬ばった手足を伸ばし出発。岩場を慎重に一ピッチで雪渓に降り立つ。続いて雪渓を二ピッチ。さらに急なガレ場を八ピッチ程下ると、ようやくふもとの草地が近づいて来た。うまい具合に階段状になった草付バンドを伝って、とうとう危険地帯から脱出。平地を歩くことが訳もなくうれしかった。

ザックを投げ出して、しばし放心する。丸二四時間の悪戦苦闘もよき想い出となった。紺碧の空、白い雪、黒い岩、平和なアンデス。

一つ尾根を回って、きのうのビヴァーク・サイトに戻ったら、荷物が無かったので、ベナンシオが持ってかえったらしかった。がっかりして、空腹をがまんしながらベースキャンプへ重い足を運ぶ。

アパチェタを越えた所で、マルチネスとセンテーノの出迎えに会った。彼等の持って来てくれた飯はうまかった。聞けば、ベナンシオとフリオは昨夜ビヴァーク地点まで来たが、我々のライトが点滅し落石の音が激しかったので、落ちて死んだにちがいないと思って、荷物をまとめ帰ったのだそうだ。苦笑いさせられたが、思えば実際危い話だった。

翌日は、いよいよスチェスあたりまで馬をさがしに出かければならんかナ、と観念していたら、突然トラックがやって来た。丸山が乗っていた。やっと先の開けたことに小踊りしながら、今度ばかりはサッサと荷物を積み込んだ。長らくお世話になったチョクニャコータにもこうして別れをつげプヤに向う。そして夕方にはとうとうプヨプヨ部落に幕営している先発隊に合流した。


ポスナンスキー 5450
イスカクチュ 5650
ミタ 5560
リサ 5400
ブヨ アヨ
BC
ウヤウヤ
ウェランカヨック 5836
カサララ 5700
カニサヤ 5750
カニウマ
5600
5600
5600
トレ・ボリビアー1
カバヤニ 5700
アカマニ 5700
カワイヨ本
カニサヤ湖
アカマニ湖
カニサヤ
0
5
10 km
プヨプヨヤ 山群
概況図

■第六章■

ププヤ∧その一∨果つるところ

中島寛

プヨプヨ部落へ

所はチョクニャコータBC、時は一週間程さかのぼる。七月三〇日の朝が明け、アルパカの群がゾロゾロと山へ向う。毎日、傍に住んでいる牧夫が山間の草地に放牧に行くのだ。

今日は出発の予定なので、起床時間が早い。早々と朝食をすませ準備を整えた。しかし、約束の七時になつても、トラピチェのトラックはやって来ない。そんなことになるんじゃないかと思ってはいたが、何しろ、気長に待つより仕方あるまいと、パッキングの仕上った荷物の上に腰を落着けた。

丁度一時間程して、やっと山の陰にホコリが舞い上り、その中から案外がんじょうそうなトラックが姿を現わした。着くや否や、あいさつは抜きにして、遅れたことをなじったら、

「オー、ちゃんと時間通りに来たではないか。」

「馬鹿言うな。ソラ、一時間も遅れたゾ。」

そうであった。アシェンダ・トラピチェはペルー領、従ってペルー時間。我々の方はボリビア時間。一時間早いのである。

早速、先に決めた通り隊長以下五人が乗り込むと、小型トラックはもういっぱいだった。住みなれたチョクニャコータに別れをつげて、砂塵をまいて出発する。山道からパンパへ降りると、今度はドレが何山と指摘出来るアポロバンバの山々が後ろに並んでいる。どんどん遠く小さくなるのがちょっと惜しかった。

道が悪くて時間がかかるのを、運転手はブツブツいいながら、それでもちゃんとウヤウヤまでやって来た。ここでうまくボリビア山岳会のピーターと落合うことが出来たので、この野郎、今まで何をしていた、と五人で食ってかかった。話を聞いて見ると、何とボリビア山岳会の連中は来たことには来たが、プエルト・アコスタ付近で車がエンコしてしまって動けないで居るという。ピーター君は御苦労にも、ここまで歩いて来たのだそうだ。

それではどうにも仕方ないので——と、何度譲歩しなくてはならないことよ——このトラピチェのトラックをどこまでも利用することにして、ププヤへ向け出発する。

低い丘稜をいくつも越えて行くと、やがて小さな川に出た。それがプヨプヨ部落へ続くらしいので、その流れに沿って登って行く。広くなだらかな氷河を落している平べったいウェランカヨックが、グッと近くにせまって見え出した。まもなく前方にひどく殺風景な部落が現われたが、それがプヨプヨだった。

プヨプヨは、ウェランカヨックに登ったドイツ隊がベースキャンプとした所。我々もそこにベースをもうけることにして、貧弱

な流れのそばに荷物を降ろした。トラックはすぐ次の便を頼んで返させる。だがイマイマしいことには帰りに車軸を折ったとかで、二度とウヤウヤへはやって来なかった。

ププヤ初見参

最後の目標であるププヤ山群が山があるのかないのか、我々はひどく不安な気持だった。もちろん、ボリビア山岳会の連中は何も知っていなかった。また、山へ向うトラックの上から目を皿のようにして探しても、さっぱりそれらしいものは見当らなかった。いざベースキャンプをつくっても何となく落着けない。

一九五七年、この一帯に入ったドイツのヴェルナー・カルルが Jahrbuch des Deutschen Alpen-Vereins 1958 の中でたった数行触れているだけが、われわれランカヨックの頂上から、更に南に伸びた氷雪の峰々を見付けたのだ。誰も踏み込んだことのないパンパの果ての氷雪の王国―そんな神秘的なイメージがわれわれを魅了した。しかし、夢が夢を呼ぶとともに、不安が募ってきたことは隠しようもなかった。すぐ麓の広大なパンパを通って来たのに、その姿を見られなかったのは何故なのか？

この不安は実際にこの目で見るまで消すことは出来ない。三一日朝早くから、三人はバラバラに別れて広く偵察を試みた。甘利はプヨプヨ部落の上に見える鞍部に登って南部を偵察する。中村はプヨプヨ部落の奥にある湖を北に回レチュコの方面を探る。そして中島はボリビア山岳会のピーターを連れ、ベースキャンプから見える唯一の白いピーク・リサ峰の、前衛峰に登ってみることにした。

我々のパーティ（中島とピーター）は、ヤーマの踏跡をたどって赤い岩のガラガラした斜面を攀じ登った。不安と期待の交錯した不思議な気持の高ぶりが、自然に歩を早める。四時間も単調な登りをつづけたあと、最後の急なガレ場に神経を使いながら登り切り、ホツとして眼をあげたとたん、真白な世界が跳び込んで来た。正にとびこんで来たのだ。

ズタズタに切れた氷河の舌端、そのまた岩峰も見える。それはチャウピオルコ群で見て来たゆるやかなピークみたいに突き立ったソクみたいに突き立ったのようなピークが連らなっている。ロで異る男性的な世界だった。氷河とのどかな女性的な山塊とは、丸た。雪というよりは全く氷でおおわれた感じがする。カチンとこたえてくる硬いヒビキがある。チャウピオルコのあのふっくらした白とは異る鉱物質の白なのだ。

〝ププヤ〟があったのだ。ワクワクする気持をおさえてシャッターを切り、見取図を書きながら、自分が世界の主人になったような陶酔を覚えた。しかし、一つ一つのピークと自分という点をつなぐ線を、威圧的な氷河の中に求めて行くに従い、それぞれの登攀が相当手強いものになるであろうことが、はっきりして来た。今までの成功におぼれていてはとても登れないぞ、と自分に云い聞かせ、ベースキャンプへ戻った。

他の二人は既に帰っていた。二人とも興奮して話し合ってい

る。いよいよ、ベースキャンプに新しい緊張と闘志がみなぎりはじめた。後続する中川達の到着までに、プランを確定しておかねばならない。あくる日も、利はウェランカヨックからキャラバンルートを確認するため、甘側との分水嶺にあたる峠まで落ちる氷河末端まで、中島はアマゾンで足を伸ばした。

我々は、後続部隊がすぐにやって来るものと思って、五日分位の食糧しか持って来ていなかったので、三日も経つとそろそろ心配になって来た。それに、素晴しい処女峰が魅惑的な容姿を見せて待っているのに、指一本触れられないとは、なさけなかった。地形の概念は大雑把だが一応把握出来、登攀の方法も確定した。だが、結局の所、あと五日もようは日を追って簡単に記そう。

八月二日。ボリビア山岳会のマリオが、食糧を持ってウヤウヤに来ているという情報入る。早速、中島がウヤウヤへ向かう。

マリオの報告——(1)ボリビア山岳会のトラックは修理不能。(2)別の車に頼んでマリオがウヤウヤまで運んだ。(3)ウヤウヤから馬を雇う予定なるも、未だ集まらず。

中島はこれを聞いて二〇キロ程の食糧と共にプヨプヨのベースに戻る。

八月三日。トラピチェのトラックも、ラパスへ打った電報も、もはや頼れずと思い、自らとかすべく丸山と中島が大任を負ってベースを出る。

ウヤウヤにてマリオ、ピーターと善後策を相談する。その結果、丸山、マリオはウヤウヤにて情報待ち、中島、ピーターはコハタまで行きトラック調達を試みることにした。

八月四日。コハタで火事突発。中島の活躍めざましく町民に感謝される。だが肝心のトラックは皆、ボリビアの独立祭、コパカバナのお祭りなどに出ていってしまって見込みうすし。

だが、天は自ら助くるものを助く。ラパスから来たトヨタのトラックが、夜になってやっとウヤウヤに到着した。

八月五日。丸山、マリオ、トヨタのトラックでチョクニャコー如し。

一方、コハタでは、途方にくれていたら、ウヤウヤへラパスからトラック来るの情報入る。こんな広いパンパでも、田舎は話の伝わるのが早いらしい。二人ウヤウヤへ戻る。

八月六日。中島、一〇時にプヨプヨベースキャンプへ帰る。かくて全員無事にベースに集合す。

馬を集める

たった一週間程はなれていただけなのに、会ってみると実になつかしい。お互いに話したいことが山程あったものだ。いいたいことを皆はき出してしまうまで、かなりの時間がかかった。

八月六日は丁度ボリビアの独立祭だった。マルチネス達は馬鹿でかい国旗を持ち出し、皆を集めて演説をぶった。こういう所は、ボリビア人は妙に形式張るのが好きだ。半分からかい気分だったが、一応整列し脱帽して、独立記念セレモニーに七人の日本代表が参加した次第である。

プヨプヨ部落でも、旗を先頭に笛と太鼓を鳴らして、ドンチャンやっていた。部落の一画に設けられた臨時宴会場は着かざったり（代りばえしないが多分そのつもりなのだろう）老若男女が踊ったりしている。アルガディエンテと呼ぶ、とうもろこしでつくった酒をガブガブやってるのも居る。今日一日の楽しみが一年の苦労の代償なのだと訴えているような、思いつめた表情をしていた。

ものうい笛の音が、単調なメロディーをせかされるようにくりかえし、酔眼はすわって異常な輝きを見せる。我々の方は、遅れた日程をとり戻そうと、キャラバン用の馬集めに来たのだが、饗宴に熱中した彼等に、現実的な頼みを持ち出すのは気が引けた。

馬を雇えることは確めてきたのだが、部落に居る馬を全部集めても一〇頭をいくらも越えまい。おそらく我々の予定を進めるためには、一頭残らずかきあつめねばならないだろう。しかし、こんな地のはてでは貨幣の流通など殆どないし、貧富という相対概念すら持っていないのではないか、と思われる。そんな彼等にとって、現在所有するものを大事に守ることが、最も妥当なやり方だろう。得ることが考えられない以上、失わないことがすべてなのだ。馬においても然り、いくら金額をあげても大して彼等は動揺しなかった。もっとも数ある馬を知らんということもあろうが。

要するに、唯一の財産である馬を貸すのが不安なのである。それを説きふせるのだから並大抵でなかった。最も効果あったのは、アルファ米とか缶詰などの、彼等の日頃口に入れられない食糧だった。こちらも一つでも多く欲しかったものだが、そこは思い切って気前よく分け与えやっと予定の数を集めることが出来た。

冷いプヨプヨおろしの風がテントをはたく。星がきらめき、闇の深さをいっそう感じさせる。メス・テントに全員集合し、最終的な計画案が決められた。今度も、チョクニャコータの時のように、隊を二つに分けて、別行動をとることになった。ほぼ南北に連らなるププヤを、北と南に二等分し、それぞれ、そのナワバリの中で片っぱしから登りまくろう、というモクロミである。

隊の構成は次の様にした。

北方隊――吉沢隊長、甘利、丸山、中川、マルチネス、センテーノ。

南方隊――中村、中島、倉知、ベナンシオ、フリオ。

どちらに加わるかは、大体各自の好みで自由に選んだ。北方隊は、ププヤのほぼ真中にそびえるローソクのようにとがった岩峰がお目当てだった。それに、オッパイそっくりの形をしたピークにも、抗し難い誘惑を感じて盛んに色目を使っている。一方南方隊の方は、ププヤの最南端に城砦のようにいかめしくそびえている山が第一の目標であるが、何しろ遠いし近づく道も不確かで、その山の登攀そのものよりも前に、まずそこまでたどりつくことが興味あることだった。

だから、どちらかというと、北の方は登攀隊、南の方は探検隊といった色彩が強かった。そういうことを考慮して、各自、自分の好きな方を選んだのだ。

アマゾンの分水嶺を越えて

八月七日、苦労して交渉した馬が集ってくるのを待って、八時半プヨプヨのベースキャンプを発った。我々南方隊の目標はププヤ山群の南端にいかつく肩を張った城砦のようなアカマニ（五七〇〇㍍）である。

三人の隊員に加わるに、ポーター二名が同行し、北方隊との連絡に当ることになった。それに馬五頭、アリエロのインディオ三人の一行である。

三頭の馬に、食糧一〇日分、三人用冬テント、ツェルト、登攀用具等一五〇㌔を積んだ。登攀の機動性を考慮して天幕は一つだけで、すべて移動して歩くことにした。

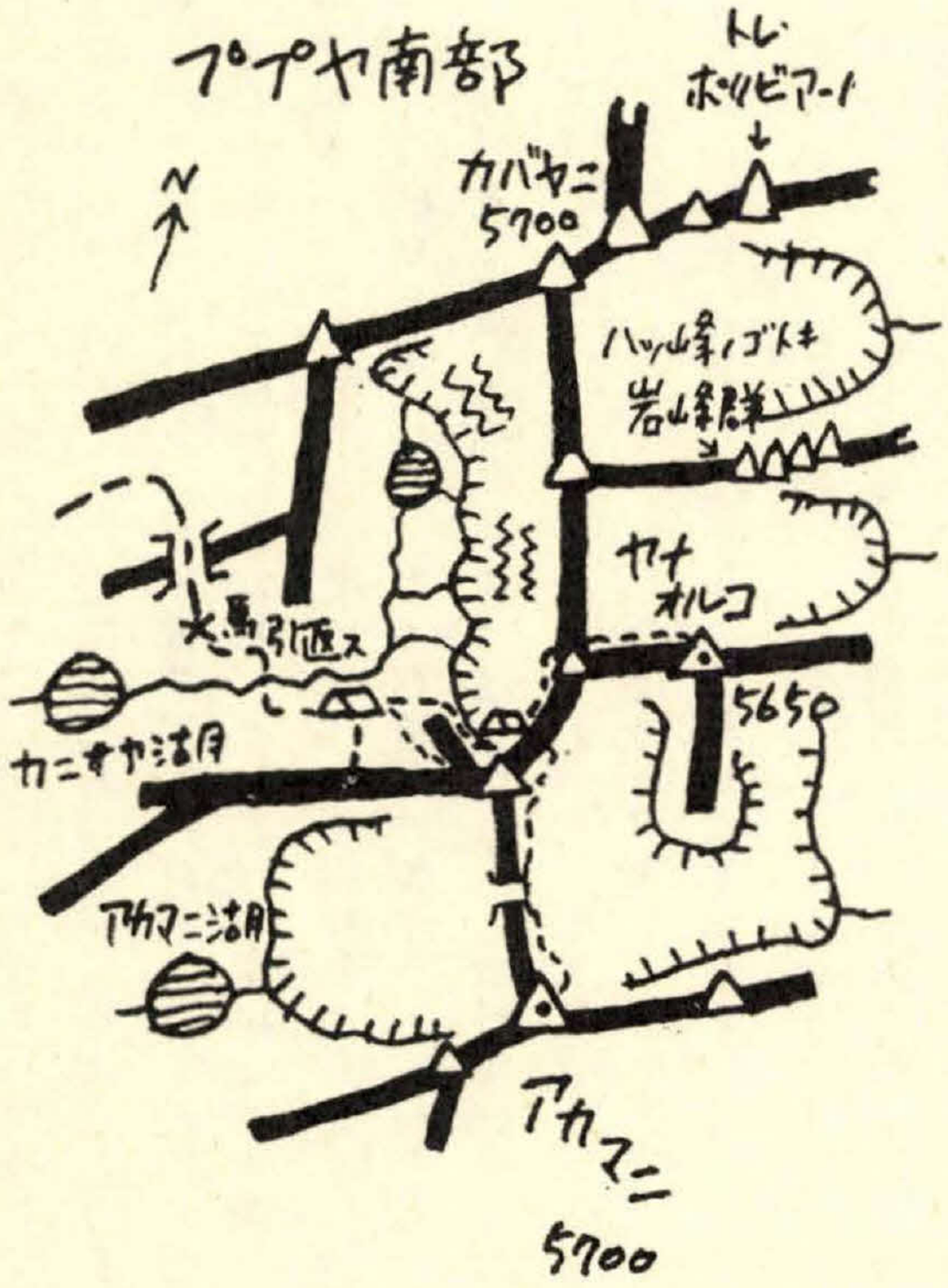
プヨプヨ峰から延びる広く大きな尾根へ向けて、広い谷を登る。この辺りは五〇〇〇㍍付近までアルパカの放牧場になっているので、四方八方にこの高山性動物の踏跡が続いている。パストを喰みながら遊んでいるアルパカは、ふさふさした毛をゆすり長い首を持ち上げては、その愛くるしい小さな眼で我々を歓迎してくれる。小さな流れの横で昼食。北方隊のキャラバンに追いつかれた。

峠（カニウマ峠）を越え、むこう側の谷底にあるカニウマ部落へ下るが、その下りは急な草付の斜面だった。無理矢理、いやがる馬を降ろしたが、全く冷汗ものだった。アルパカの踏跡はあったが、高山性の敏捷なアルパカにくらべ、荷を積んだ馬にしてみれば空身で降りるにもやっとの所だったかも知れない。

それにしても、この辺りのアルティ・プラノの馬は馬力がない。最初は馬の調子が悪いのかと思ったのだが、何しろ本来力が無いのだと判って来た。荷物は五〇㌔どまり、人間一人乗ると坂を登れない始末だ。その上、よほど尻をたたかねば動き出そうともせず、径に対する勘も鈍い。業をにやして大声で叱咤し尻をたたくと、あわててインディオが泣き声を出し、

「マエストロ（御主人）、どうか御勘弁を。」

と馬の首をさすって情けなさそうな顔を向ける。彼等の貴重な運搬用動物なのだから、その気持もわからんではないが、何しろ一刻も早く目的地へ着かねばならない今の立場では、それを認めることは出来ない。冷く厳しく彼等をしかりとばし、先を急いだ。



カニウマから谷を横切り、今度はカニサヤ峰から伸びる大きな尾根・アマゾンとの分水嶺を越える。ゆるやかに開けた支谷をたどって分水嶺の峠へ登った。峠の上に出るとププヤの峰々がグッと間近かにせまって見えた。右の端には、まだはるか遠くアカマニがそびえている。先日、中島はこの峠まで偵察に来たのだが又改めてアカマニの豪快な姿に感激した。

峠には大小とりまぜて多くのケルンが並んでいた。大抵との峠にも見られるが、これは決して本来の道しるべ用のケルンではなく、石を積み上げておくと自分の家に幸福をもたらすという、インディオ達のまじないである。逆にこれらのケルンをつくらないと禍が起ると信じていて、手をふれたりくずしたりするようなことは絶対しない。中島がケルンの一つをつくりなおそうとしたら、インディオが血相をかえてとんで来た。こんな強い態度が気弱な彼等にもとれるとは意外だった。

分水嶺からの下りはなるべく馬の歩きやすい様にと、谷筋のガレ場をさけて岩尾根を選んだが、かえってそれが大失敗だった。岩尾根は意外にけわしく馬がおじけづいたが、その上悪いことには大きなガレ場に行き当ってしまった。インディオ達はとても馬には下れないといってストライキを起した。一〇〇㍍も降りれば谷底なので、

「ナニ、もうすぐだ。頼む、頼む。」

となだめたりすかしたり、なんとか通過させようとしたが駄目だった。下手くそなスペイン語で説得するより、何語だろうと大声とこわい顔でせかした方が効果あらんと思って、中村が江戸弁のタンカまで切ったが、さっぱり通じなかった。

日も暮れかけてうす暗くなったので、遂にあきらめて全員で谷底まで荷を担ぎおろし、馬は上に留めおいて、翌日遠まわりをして馬を降ろすことにした。案外簡単に荷を降ろすことが出来たのて、すぐ谷の中央の草地に幕営し、インディオ達にはツェルトとキャンバスバッグをあてがった。ポーター達は馬の見張りに寝袋を持って再びガレ場を登る。もう真暗なのでどうするかと思ったら、周囲に生えている枯草に片っぱしから火をつけて回り、明かるく照らされた中をサッサと登って行った。なるほど生活の智恵とはすばらしい、と感心したものだった。スイガラを捨てるにも山火事の心配をしなくてはならん日本人には、とても思い付かぬことだ。火をつけ出した時には、何と無茶なことをすると思ったが、まばらに枯草しか生えてない荒野では火事の心配などする方がおかしい。

アカマニの足下に

翌朝起きると、インディオ達が居なかった。こいつは逃げられたかと思っていたら、間もなくポーターと共に馬を連れて、谷の上の方から下って来た。

今日はもう先へ行かぬとごねるインディオ達も、こちらが高飛車に出たら非常におとなしくなったので、強制的に承知させてしまった。多勢の力を借りて少々後味の悪い感じだったが、キャラバンは進めなければならなかった。ここまで来るためには一頭につき二〇〇〇ボリビアーノ（六六〇円）という高い馬賃を払って

いるのだし、こちらの食事を分けてやったり機嫌をとって来たのに、したでに出るとつけ上るのだ。彼等に対する同情を表面に出したら、決して言うことを聞かないだろう。

キャンプサイトから谷底の草地を谷に沿って下る。まもなく行った所で、放牧のために登って来たアルパカと羊の群に会った。先導役のアルパカにつけた鈴が澄んだ音を谷に響かせて楽しかった。

「ブェノス・ディアス」

という牧童のあいさつもさわやかだ。

アマゾン側の谷は、アルティプラノのゆるい谷とはまったく対照的に深く入り込んでいる。アポロバンバの西側は「南米のチベット」と言われるくらいあって、南米でも最も高い四六〇〇～四八〇〇㍍位のパンパがゆるやかな降起を見せて拡がっている。ところがアマゾン側はというと、ゴツゴツした幾つもの岩尾根が谷を造っていて、急激に高度を落している。そして顕著な岩峰が随所にそびえ、その狭い谷をおし包むように厚い雲海が地平線をふさぐ。今まで、一点の雲もない碧空、枯草ばかりのパンパ、蜃気楼のように浮ぶ澄んだ氷河湖などを見慣れた我々には印象的な変化だった。

谷の途中にあるカワイヨネ部落を通り過ぎ、一旦谷を降り切ってから、今度はカバヤニ峰からの支尾根を越えて、ププヤ主稜線に近づく。その尾根の上に出ると、足元にオアシスを思わせる氷河湖が見え、心を潤された。アカマニから落ちる氷河は、この氷河湖のある谷の一つ向う側にあるのだが、もう一つ谷を越えるのは大変なので、目の前の谷をつめ、カバヤニとヤナオルコの間に懸る氷河の下の台地に入ることにした。ところが、またしても登りで馬が動けなくなってしまった。無理にも登らせようとしたが、とうとうインディオの一人が本当に泣き出してしまったのでお手上げだった。彼等の大事な財産の一つである馬を思う心情に負けた、と言えば体がいいが、実際のところが、我々のヒューマニティーを殺し切れなくなる。おセンチなことだと頭で思っても、感情は相手を同情してしまうのだ。

一人二〇〇円位のチップをはずんでやったら、手の平をかえすように愛相笑いを始めたので、一杯食わされたような気持だった。だがとにかく文句を云われながらもよくここまで来てくれたものだ。我々にしたって、彼等の気持を素直に受け入れられないとは因果な役回りで、バツの悪いことである。

覚悟を決めてエイと重荷をかつぐ。急なガレ場をふらふらしながら一時間も登ると、上の台地に出た。九〇〇㍍位、こんな高い所にもアルパカの径があり、アイマラ・インディアン達が放牧に来る。アルパカの糞のない所を選んでテントを張る。

日暮れまで時間があったので、中村はアカマニ氷河をさえ切る支尾根へ、中島はその支尾根と主稜線のジャンクション付近へ偵察に出た。アカマニ氷河はクレバス多く、登降困難のようだ。結局ジャンクションあたりまでもう一日テントを伸ばすことに決めた。

晩はベースキャンプから大事にもって来た卵で卵どんぶりを作って食った。実にうまかったが、惜しいことには、いつものよう

に「量」が足りなかった。遅くなって濃いガスがわいて来たが、風は東から吹いているのに、ガスは西から湧いて来るのは、面白かった。流石はアマゾンの中のアンデス、訳のわからん所が気に入った。すごく遠い所に居る気分だった。

マルクスという男

八月九日、いよいよ最後の高処キャンプを建設する日である。きのうの偵察の結果、氷河と岩尾根のコンタクト・ラインを登る予定だった。

テントをたたんで居ると、のっそり一人のインディオが現われた。どこでどうかぎつけたか知らないが、突然の現われ方で一瞬ギョッとした。たぶん下のアカマニ湖付近に住む牧夫であろう、アルバイトに雇ってくれという。少しでも荷の軽くなるのは歓迎なので、早速承諾した。名を聞くとマルクスと言うんだそうナ。カール・マルクスというドイツ人が居ることは知っていたが、インディオにもマルクスがいたとは驚いた。ニコニコしながらコカをかんでいる。重い荷をかついでくれるとは、インディオでもマルクス君はさすがヒューマニストである。ハイ、これだけ頼むぜ、と差し出した荷物を、かぶっていたポンチョにクルッとくるんで、ヒョイとかつぎあげる。かくして出発。

彼のはき物は、例の自動車のタイヤの切れ端で出来たゴムのわらじであるが、それで岩場をいとも軽快に登っていくので感心する。ガレ場から岩のガリーをつめると、垂直な岩壁にぶつかったので氷河に入る。ところがマルクス君は我々の登山靴と自分の足元を見くらべて、コレではオレはもうイヤだ、と云う。そこで一寸考えて、ためしに穴のあいた毛糸のソックスを一足与えたら、驚く程反応があって、たちまち機嫌がなおった。その上は、安全を期して、丁寧なステップを切りザイルを張って、ルートをつくってから登る。

しかし氷河はなるべくさけて、又すぐに岩場にもどった。ところが今度はポーターが、岩場が難しいから登るのはイヤだとごねい、我々のやや軽い荷と交替させて登った所、何も云わず彼等だけスタコラと先に登って行ってしまったので驚いた。ヤレ、返せもどせ、大声で呼んだが、彼等を止めるまでは大変だった。後からようやくの思いで彼等に追いついたが、つるつるした急な岩場で、このガリーの登攀は苦しかった。

「イギリス隊もドイツ隊も、こんなに苦しくて危いことはさせなかった。もう先へは登れない。きのうの晩も寒くて眠られなかった。待遇が悪い。」

と、ペナンシオはブツブツ文句を言い出した。

そんなことを言われては我々も腹にすえかねた。大体彼等は、キャラバンの時はアリエロの先頭に立ってよく働くが、実際の山登りの方では殆ど役に立たぬ。一ヵ月も一緒に居るのに、ベナンシオをボッカさせたのは、チャウピオルコ・ノルテの時とこの日と、わずか二日に過ぎなかった。

やり場のない怒りをどうやらおさえ、彼等に登ることを納得させて、又登り始める。少しガリーを登り続けると、あとは傾斜の

落ちた雪の斜面だった。主稜線へ続くジャンクションの少し手前に手頃な平坦地を見付け、そこにテントを張ることにした。高度五三五〇㍍。ポーター二名とマルクスはすぐ引き返させた。マルクスには五〇〇〇ボリビアーノ（一六五円）払った。アイマラという高地民族の筋肉と肺を見直させられた一日だった。

ベナンシオには北方隊の前進キャンプまで行き、我々の行動の連絡をし、一三日に再び馬を連れて、下のカニサヤ湖まで我々を迎えに来ることを命じた。一方、フリオにはプヨプヨのベースキャンプに戻り、テントキーパーをするように云った。

テント設営の後、主稜線上まで偵察に行ったが、跳び出た所は丁度アカマニの前衛峰の肩だった。そこからアカマニとヤナオルコへ主稜線伝いに登れることが判った。翌日はいよいよアカマニをねらうことにして、テントへ引き返した。

アカマニ・最高の登攀

苦労してここまで来たのだから、我々のアカマニによせる期待は大きかった。又、アカマニは充分それに答えてくれそうな、素的な姿を見せていた。その周囲に堅固にそびえる岩と雪の壁は、むしろ不安さえをも呼び起させる。

暗い内に起きて朝食をとり、夜明けと共に出発した。金属的な感じを与えるように固くしまった朝の雪を踏んで、寒さに硬ばった体を運ぶ。キャンプからゆるい登りを少しつづけ、それから前衛峰を左に捲きにかかった。いくらも捲かない内に、かなり急に落ち込む巾広い尾根がアカマニへ続いているので、それに従って降りて行く。顕著なニエベ・ペニテンテが足にひっかかって歩きにくかった。

尾根の最低鞍部から、波形に起伏した稜線を少し行くと、平らな尾根が左に傾斜して来て、いつの間にか尾根の腹をトラバースするようになった。右側は雪庇となって切れ落ちている。所々露出した岩伝いにかなり行くと、もうステップカットしないと楽に歩けぬ程、尾根の傾きが急となった。一寸した岩の上でジッヘルして、スタカットで登る。ようやくその頃になって、陽がそこまで当るようになり、少し暖かさがただよい出して来たのは有難かった。中島トップで二ピッチトラバースを続けると、頂上を取り囲む急な壁の下に着いた。アカマニのふところに跳び込んだ感じだった。

そこからは、尾根の左に落ちている赤茶けた岩のルンゼを登る。ルンゼに入ると又日陰に入ってしまうので、ブツブツこぼしながら、中村がトップで登り出す。時々、カラカラと冷い音を立てて氷の破片が落ちてくる。ステップをきざむ音が絶え間なく続く。このルンゼは浮石多く、氷も硬く張っていて、思ったより手強かった。

ルンゼは氷のひさしで終っているので、次のピッチはルンゼの右、浮石だらけの無気味な岩を登って岩のテラスに出た。空間に突き出たようなそのテラスに、その晩御厄介になろうとは、夢にも思わなかった。そのテラスへの登りで、一寸サングラスを岩角に引っかけたかと思ったら、アッという間にサングラスが岩の間に消えていった。自分が落っこちなかったのがせめてものなぐさ

みと強がりを云って、大して気にもしなかった。この頃は、毎日カラッと晴れても太陽はモヤにかすんだような光り方をして、あまり日射しは強くなかったので、サングラスなしでも平気だった。

テラスからは、中島トップで氷壁にとりつく。傾斜は五〇度位だろうか、そんなに急でないがひどく硬くて、一歩一歩ステップを切るのがつらい。頂上までペロッとした一枚の氷壁が続いている。地道にステップカットすることだけが登攀だった。数えて見たら一つのステップを切るのに二〇数回ピッケルを振っていた。下降のことを考慮してなるべく大きなステップを切るように心がける。

この硬さで途中にテラスを切るなんてやり切れないので、アイスハーケン一つを頼りのジッヘル。危くてとてもトップの交代などという微妙な動作は出来ない。棒のようになった腕で、ハネかえす氷に何度もピッケルを振り降ろしては、一歩上がる、という単純で根気の要る仕事を続ける。

四ピッチ、一五〇㍍を登った所で、ななめにさけたせまいクレバスに突き当った。そこに体を押し込み、ようやくステップカットから解放された。奥の方が広くなっており、ピッケルで整地すれば、ようやく三人もぐり込むことが出来た。もう午後二時過ぎだったから、このクレバスあたりでビヴァークなんてことになりそうな予感だった。そうなればフランスのアルパマヨ隊並みだナ、などとロマンチックな気持になった。

それにしてもこのクレバスは有難かった。おそい昼食をすませてから、トップを倉知が変わって登りにかかった。このクレバスの真上は雪庇で終っているので、左寄りに登る。左利きの倉知は利き腕が外側になるのでステップカットに都合よい。左利きよ、万才である。氷壁の左寄りは下部が垂直な岩壁なので、高度感がすばらしい。空中に浮き出たような壁を軽快に登って行く。正に登山の醍醐味につきる一瞬である。

頂上に続く雪庇の切れ目に向かって、四〇㍍いっぱいをななめに登ったが、五㍍程足りないので例によって斜面でジッヘル。次は出口にアイスハーケンを打ち、それを頼りに体を持ち上げるようにすり上ると、あとはゆるい雪原となって頂上まで続いていた。やっと——という感じがこの時ほど身にしみたことはなかった。

てこずった氷壁の上に三人が集まってから、あとはコンティニュアスでふらふらと頂上まで歩く。ここもひどいニエベ・ペニテンテで歩きにくい。

頂上から南の眺望は一種異様だった。これまでキラキラ輝くまばゆい白峰ばかり見て来たのに、ここは赤茶けた岩ばかりだったからだ。アカマニはもはやアマゾンの源流に囲まれている。つまりププヤはアンデスからアマゾンへ突き出た半島みたいなものである。東には今まで一度も見えなかったププヤ最奥のピークが望まれた。

頂上のすぐ下の雪庇の陰で、二度目の遅い昼食を摂ってから、下降を始めた。けわしい山では、下降は一つの独立した「登攀」に匹敵するほどのつらいアルバイトである。登攀と同じ位の時間を必要とすると考えねばならない。ビヴァークはもう必至だった。それでもなるべく下の方まで降りておきたいので、出来るだけ急いだ。

例のクレバスの所まではスタカット、うしろ向きで慎重に降りた。そこからは時間を考慮してアップザイレンにした。小次郎の物干竿みたいなスノウ・バーの活躍する時が来た。狭いクレバスの中で、クレモナ八ミリの補助ザイル六〇㍍と、ナイロンのメインザイル四〇㍍及び三〇㍍のアップザイレンである。この六五㍍の長いのを二回繰り返すと、氷壁下の岩のテラスにもう少しでとどく所まで降りることが出来た。このアップザイレンもひどくやっかいなものだった。第一全体にルートが右へ寄っているので、降りながら調節しなければならぬし、細いクレモナは互にからんでしまって操作が難しい。一度降りてからも、ザイルが引けずに又途中まで登らなければならなくなったりした。

それが終る頃にはもうすでに真暗、それからテラスに三人集まるまでも大変だった。結局ザイルを全部引っぱり切れずに、一部は氷壁にぶらさげたまま、ビヴァークの用意を始めた。防寒具はヤッケとセーターだけしか持ってなかったので辛かったが、雪の上でないだけましだった。三人並んで腰かけるには少々せまずぎたので、横の氷を削ってやっと三人分のスペースを作った。端にすわった者はもう少しで滑り落ちる所だった。

ツェルトを引っかぶって落着いたのがもう午後九時近く。夜中ひっきりなしに風が吹いてとても眠れなかったけれども、あすの天気も晴れに決まっているから、落着いて居られた。夜半から中島は眼が痛み出し、雪盲にやられたことに気付いた。大して日射は強くなかったが、紫外線がうんと強いのを忘れていた。倉知が何回も横の氷をくだいては手ぬぐいに包んで渡してくれたので、冷し続けた。割合軽症ですんだが、翌日いっぱい痛みがとれなかった。

翌朝は引っ掛かっているザイルをはずすことから始まった。落着いて丁寧にやったら、案外簡単にはずれてホッとする。中島は雪盲のために手ぬぐいで目隠ししているので、アップザイレンで降りるより仕方なかった。傍の岩に二本のハーケンを打ち込んで支点にし、きのうと同じ様に六五㍍の長いのをたらす。出口の所が垂直の壁で一寸こわかった。細いクレモナが体重でグット伸びるのも気持悪い。

アップザイレンで降りついた所からはスタカットで行く。中島は両側から確保されてどうにか下った。二ピッチ、スタカットで続けてから、コンティニュアスに切りかえ、しばらく降りると尾根の最低鞍部に着いた。ようやく危険から解放されたのはうれしかった。疲労と眠けにもうろうとしながら、前衛峰を越えテントに戻った。

中島の雪盲は本人の不注意による失態だったが、思えばこの登攀はすばらしく充実した「手ごたえのある」ものだった。

ヤナオルコ登頂

二日にわたるアカマニ登攀の疲労と、中島がかかった軽い雪盲のため、散歩のつもりでゆっくりとテントを出たのだが、割合スムーズに頂上へ立つことが出来た。

しかし、堅氷あり、鋭い雪稜あり、その変化に富んだ登攀は、五月上旬の剣岳八ツ峯を思わせるものがあり、フィナーレを飾るにふさわしい快適なクライムだった。

各ピッチごとに凹みがあったり、小さなクレバスがあったりして、格好のアンカーレッヂを提供してくれたし、確保のアイスハーケンもよくきいた。また雪稜の右側は堅氷だが左側（南面）は日射を受ける時間が少いためか軟雪になっており、雪稜でピッケルによる確保が確実に行えたので、急傾斜の氷壁登攀を思いきり満喫することができた。

ヤナオルコ峰はププヤ山群の主稜線からわずかに北側にはみだしたピークである。従って、テントから、それに出て主稜線を北西にたどり、ヤナオルコに通じる尾根とのジャンクションから北西斜面をからみ、頂上に立った。

主稜線とのジャンクションまでは、四〇度位の氷壁と短い岩場を二ピッチ、スタカットで越え、あとは雪壁をコンテでとばして約一時間で着く。トレ・ボリビアーノ（ボリビアの塔）と呼んだ岩塔を中心とする鋸の歯のようなカバヤニの支稜が目の前に連らなって、壮観である。

このジャンクションから氷壁の登攀が始まった。中村がたんねんにステップをきざんでは、一歩一歩慎重に身体を持ち上げていく。カラカラという音をたてて落ちてくる氷のかけらが光を受けて輝き、まるで踊るように自分に振りかかってくる。

氷はあくまで堅く、パイプ型のアイスハーケンの頭部がつぶれてしまうほどだった。せっかくアンデス用につくったアイスハーケンだが、これも特別につくってもらったコの字型のアイスハーケンには遠く及ばない。

三ピッチで頂上に通ずるゆるい雪稜にたいでドッカと腰を降ろし、ピッケルでピッチ、バケツのようなステップを掘ってどった。ジャンクションから頂上まで約二時間の登攀だった。

頂上は雪稜の一部で狭かった。南側にやふりかけが、ザックの中でころげまわじんで実にうまい。ずいぶん調法だった。

主稜線から東に伸びる、カバヤニ峰支〇〇㍍の立派な山容の白嶺が三つ望まれたのどかな氷河の圏谷とともに、どこかある。まだ誰も入ったことのない地域で近付くことは不可能だろうが、一旦アて迂回してアプローチすれば、あの妖精でした圏谷は、格好の根拠地になるだろう山に遠征隊が訪れる日も、遠い将来のこ

帰路は一歩一歩を、正にかみしめるようにた。黙ったまま、それぞれの感慨を込めじ時間をかけてテントに戻った。

帰　路

丁度登りと同

明けて一三日、高処キャンプを撤収する。今度の遠征の山登りもこれで全部終ったかと思うと名残り惜しかった。登路にとった悪い岩のガリーは避けて岩のリッヂを少し降り、あとは反対側のガレのつまったルンゼを一気に馳け降りた。

前進キャンプを張った所で昼食。食べている間に大ワシがとんで来て、頭上を行ったり来たりした。うまく気流に乗って旋回するのに感心する。アンデスの冬も終りに近付いたのであろう、このごろは、午後になると必ず薄いカスミがかかりガスが出る。

カニサヤ湖まで下ると、約束通りベナンシオが馬四頭をつれて迎えに来ていた。四人のインディオも一緒に来ていた。我々の姿をみると、途中まで登って来て、荷物を代わって担ぐと言い出したのにはうれしくなった。

馬の待っている所まで降り、早速キャラバンを始めた。ガスの濃くなった中を下り、アマゾン分水嶺へ伸びる谷を相当登った所まで行く。放牧されたアルパカの横に幕営する。ここで、またしてもインディオ達が荷を放棄して帰ると云い出したので、ひともめして留まらせた。

一四日は、ゆっくりとインディオの云うように歩き、かつ休む。ほぼ北方隊と前後してプヨプヨに帰り着き全員揃った。

■第七章■

ププヤ∧その二∨

―氷壁に囲まれた山々

甘利仁朗

前進キャンプへ

手に長い鞭を持ち、古タイヤのゾウリに羊毛製のポンチョ、といういでたちのアリエロが奇声を発すると、馬がトボトボと歩き出す。五頭の馬には荷物が積まれ、残りの三頭に吉沢隊長達がまたがった。死んだ父親の代りという、六、七才位の可愛いい子供もまぜてアリエロは五人、つまりこの八頭はこの五人の持馬なのだ。顔つきはあどけなくとも、その子供の馬扱い振りは、大人に負けない程、堂に入ったものである。

閑散としたプヨプヨ村をマヤやアルパカの踏み跡が横切り、緩やかな登りにかかる。ヤーて単調な行進が続く。貧相な草と、岩と土、それ以外になにもない世界。やがて、左手にプヨプヨの奥手の湖が見え出す。そしてその向こうにとがったコロロの頂上が顔をのぞかした。

チョロチョロと小さな流れが横切っている草原に出る。そこで中村達が昼食を摂っていたので、我々もリュックの紐を解くことにする。馬方達も馬の荷を降ろし、アルファ米を素手でパクつき出した。ペルーでは馬の荷を道中で降ろして馬を休ませることは一度もなかったが、ここではそうはいかぬようだ。牧草の乏しいボリビアの高原では、少しでも馬を疲れさせないようにしなくてはならないのだ。実際、坂道をいささかヨロヨロと喘ぎつつ登り降りする様子を見ると、馬にまたがってても、とても「馬上豊かに」という気持にはなれなかった。

カニウマ峠へ出ると、ププヤの山並が一望の内に望まれる。北から、リサ、ミタ、大きく拡がるウェランカヨック、それに続いてカサララ、オッパイそっくりのカニサヤ、岩と雪の双子山のカパヤニ。ここまでが本隊の受持である。後の、南の端のアカマニまでは中村達の分け前だ。これだけの山域がまったくの処女地だと思うと強い感慨がわいてくる。

思い思いに写真を撮ると、今まで馬に乗っていた者も馬から降り、徒歩で峠を下る。この方がはるかに速く楽だ。広々とした谷底に降りつくと、アルパカが愛嬌ある大きな目を一層キョトンとさせて珍客を迎えてくれた。流れを横切り、そしてもう一つの尾根を今度は真直ぐに乗越すと、キャンプサイトに予定していた湖が見え出した。

何という名か知らぬが、真黒な水鳥が静かな水面に波紋を残して、泳ぎ回っている。我々は岸を回って湖を通過し、上の草地に出た。ここは恰好のキャンプ地と思っていたのに、来てみると意外にもジメジメした湿地でとても役に立たなかった。そこで、キャンプはさらに上方の氷河末端のモレーン地帯に建てることにす

る。道が悪いから、といってアリエロがツベコベ言いだしたけれど大声を上げて叱りとばし、さっさと馬を先導して行く。

氷河の端に適当な平地を物色し、荷を降ろす。（五一〇〇㍍）食糧は欠乏していたが、アリエロにチョコレート、マシュマロなどのボーナスをはずんでやった。ほんの少し前には口を揃えて道が悪い、日当が少ない、と文句を云っていた連中が、大金とほうびをもらうと、今度は帰りのキャラバンに又雇ってもらおうと先を争う仕末である。だがそこは心得て、紙切れに適当なサインをさせ、帰りの契約も結んでおく。このサインというオマジナイが事を確実に運ぶために実に効目があるのだ。

キャンプサイトが決まると、隊長は例によってすぐ小高い所に登り、あちこち写真を撮り始めた。アリエロと馬は丘の向うに消え、こうして再び仲間だけの楽しい山登りが始まる。

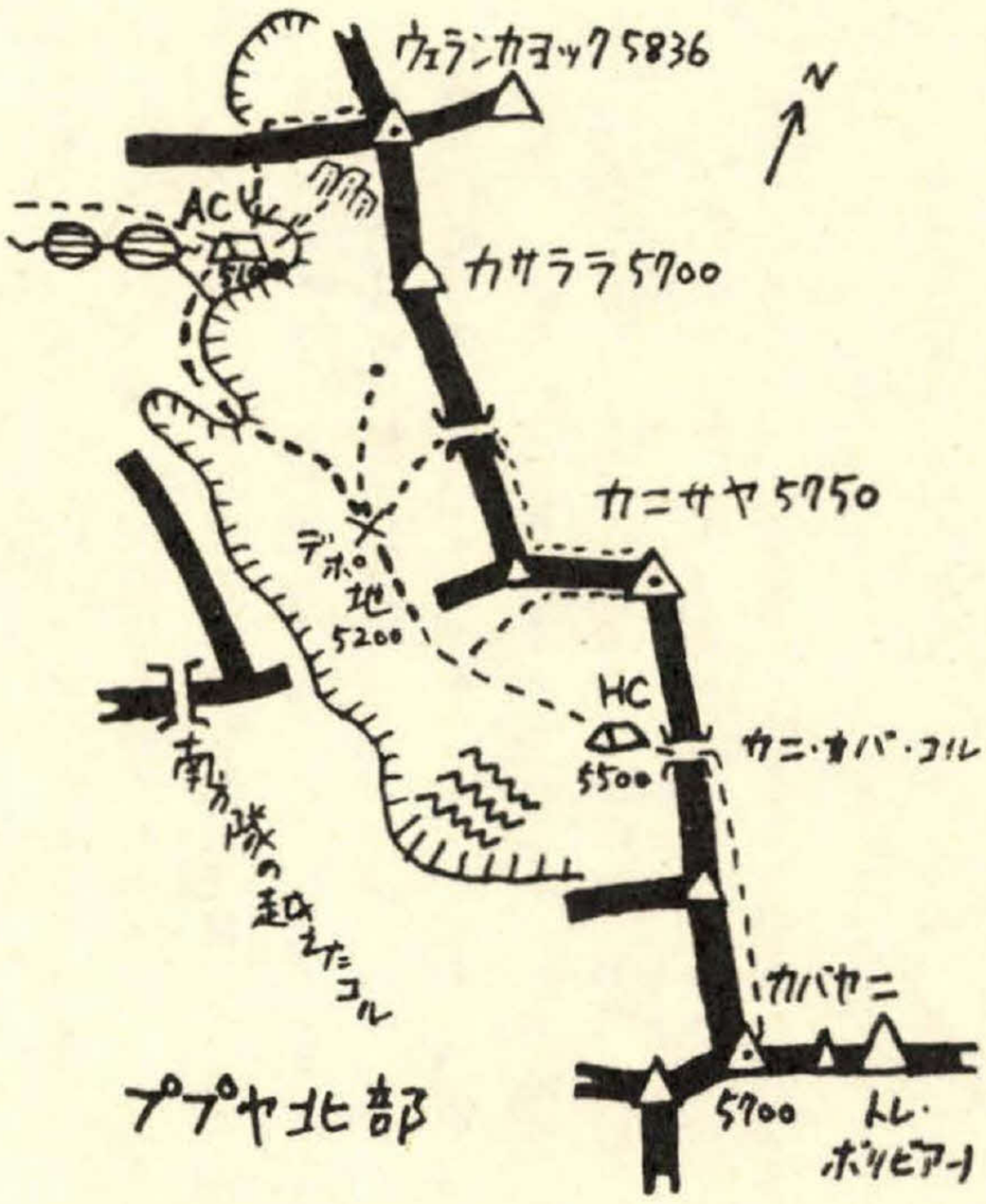
カニサヤ登頂

我々の領分には五つのピークがあった。

五つとは、ウェランカヨック、カサララ、カニサヤ、カバヤニ、それにトレ・ボリビアーノと名付けた岩峰である。この五つの内、後の三つは地理的に集まっているので、我々は最初の目標をこの三つにおいた。これを能率的に登るには、カニサヤとカバヤニの間のコル（仮にこれをカニカバ・コルと呼ぼう）にテントを出すのが一番であるが、そうするとテントが三人用なのでセンテーノを連れていけなくなる。チャウピオルコでもあまり登らせなかったし、あまり冷遇するのは日ボ親善によろしくない。さりとて、この氷河の端のキャンプから毎回出かけるのではやり切れない。

結局無い知恵をしぼって考えた末、両者の中間をとって、最初はセンテーノを入れた四人で、高処キャンプ用のボッカをしながらカニカバ・コルに登り、その両側のどれかに登る、それが成功したら次の段階にはカニカバ・コルに高処キャンプを建て、残りの山を片付ける、ということに決めた。

翌八日、まずカニカバ・コルに向かう。時間のかかるのを見込んで七時出発の予定にしていたが、結局出たのは八時半だった。快晴で手足の冷え込みが激しい。素手でアイゼンをつかむとピッ



タリ吸いついてしまう。氷河にとりつくまで、モレーンの上を行くが、途中細い流れを数回渡る。二回目に、中川は氷を踏み破り、片足をズブ濡れにしてしまった。流石は中川だ。蒼い氷の壁を乗り切り氷河の上に立つ。上は広々とした雪原、見事なニエベ・ペニテンテの大エプロンである。一尺程の鱗を敷きつめたようなこのささくれ氷は、見た目に珍らしくとも歩くにはやっかいこの上もない。しばしば体勢をくずしてころびそうになりながら、足を早める。

一一時、雪原を三分の二位来た所で昼食にする。右手前には、カニカバ・コルからのびた蛇腹のようなアイスフォールが見える。先は深く谷へ落ち込んでいる。ここからは尾根にさえ切られ、カニカバ・コルもカニサヤも見えない。カニサヤは前日カニウマ峠で遠望したきりなので、まだこの先どの位距離があり、又正確にはどの方角にあるか、ということすら、おぼつかなくなって来た。それに、ここに来るまでに予想以上の時間がかかっているので、これから予定のピークをコルまでいってから登るのは、どうやらとても望みなしに思えて来た。そこで、目標をカサララとカニサヤに変更し、ルートはここから直接主稜線に出るコースをとることにした。丸山と中川がカニサヤに向い、甘利とセンテーノがカサララを目指す。ボッカした装備他はそこにデポして置いた。次に丸山によるカニサヤ登頂記を記そう。

午後一時、アンザイレンしデポ地を後にする。頂上へ続くと思われる尾根をめがけて登る。尾根へ続く雪壁はクレバスやアイスブロックでひどく荒々しい様相を呈しているが、うまいことに一筋だけ、削り取ったようにきれいな雪壁を行果してこの雪壁を登り切り稜線をたどれば頂上へ行けるか、確信はなかったが、とにかく頂上に近付くことだけは間違いない。頂上に着けなきゃ引き返すだけサ、と腹を決めて登り出す。

登るにつれてカニカバのコルがはっきりと見え出し、そこへ到るルートも確められた。コルとの相関的位置からも大体頂上はこの先だろうという憶測は出来た。

最初三〇㍍程はゆるい斜面、次に三〇㍍のザイルで五ピッチ登る。傾斜は五〇度位、前に突き出たアイゼンのツァッケを二、三度蹴込むとしっかりした足場になる快適な硬雪である。だが、上に行くに従ってこの硬雪は表面だけになり、その下に硬い氷が現われ出した。足先のツァッケに全体重をかけ、微妙なバランスクライムをしなくてはならない。足首の疲れる仕事である。

易しそうに見えた雪壁にも、やはり難所があった。たった二㍍程なのだが、全くつるつるの蒼氷の壁が行く先に現われたのだ。右側はオーバーハング、左は又急な壁で手がつけられない。やむなく、真中をつり上げで強引に突破するとうとうと、トップはザックを降ろし慎重に取り付く。アイスハーケンを打とうとすると、氷は脆くてなかなか喰い込まない。苦労してやっと二本を打ち込み、体を捻るようにして吊上げる。たっぷり四〇分程の苦闘をしたあげく、どうにかこうにかこの二㍍を越えることが出来た。

更に、傾斜のゆるくなった雪壁、というより雪面を、こんどはもまでもぐるラッセルに苦しみながら這い上ると、待望の稜線だった。今まで急な壁に圧迫されていた為か不安感が、ここで目の前に開けた素晴しい光景にさっぱりと消えた。巨大なオッパイが、

それもお椀をふせたような実に形よい奴が、手に取る様な近さに盛り上って居る。非常に快よい気分にひたり、しばしぼんやりとながめていた。

だが気がつくと時間は既に五時近く、もう日暮れまでに二時間しかない。せかせかとザイルを巻き、コンティニュアスで巾広い稜線を頂上に向う。雪はあくまで硬く、アイゼンは小気味よい音をたてる。そして五時四〇分、我々はゆっくりと頂上をふんだ。

日本から作って来た旗はあちこちの頂上に置いて来て使い果してしまっていたので、紙箱の端で作った粗末なボリビアと日本の国旗をそれでも型通りにピッケルにくっつけ、交代で写真に収める。高度計は全然不正確なので、ウェランカヨックとの高度差を目測して、標高五七五〇㍍と見当を立てた。北には遠くチャウピオルコが望まれた。目の前のカサララは、ここから見ると恥デンとすわっている。その手前はウェランカヨックの大きな図体がしそうに一寸隆起した小さなコブでしかない。

一方南を振り返ると、カバニとアカマニが一際抜きん出ている。例の岩峰は思ったより小さく見ばえしない。それより左に伸びた刃物のようなヤセ尾根つづきに素晴しく美しい雪峰が見える。少々低いが、本当にイイ山だナ、と思う。

周囲のパノラマをカメラに収め、タバコを一本吸い終った頃には、太陽はもう大分西にかたむいていた。急いで下山開始。今日は隊長にビヴァークはしないという約束で来ているので何としても戻らなくてはならない。帰りは、主稜線を北にたどりカサラとのコルまで行って、そこから尾根を下る最短コースをとることにする。しかし稜線は意外に悪くて、稜上の小ピークをまくのに相当な時間をついやしてしまった。コルへついた時にはもう日没も近く、一ピッチ降りた所でとうとう暗くなった。そこから下は相当急なのでアップザイレン。所が五ミリのサブザイルがからみ合って容易に解けない。雪は夜に入ってますます硬い。ピッケルで足場を切り、ハーケンを打って体とザックをアンカーし、ライトを頼りに作業するのだが、すっかり解くのに一時間もかかってしまった。足がしびれて困ったが、ヤッケを着ていれば寒くはなかった。

クレバスをさけ左に寄りながら下降、カチカチの氷にピッケルで足場を切り、かろうじて右に振り戻されそうなのを防ぐ。次はクレバスを越えて真下へ降りる。クレバスの上端まで降り、さらにアップザイレンする方角を見定めていた中川が決心したように

「宙吊りになるから頼みます。」

と声を掛けて来た。次の瞬間ザイルにすごいショックがかかり、支点のハーケンがきしむように下へ引張られる。丸型のアイスハーケンが二センチ位跳び出た。ハラハラするが、容易にザイルの張りは弛まない。

後で中川から聞いた話によると、宙吊りの体を振って対岸に渡ろうとしたが幅が大きくて一旦足がとどいても又振り戻されてしまう。そこで一段下の出張りに見当をつけてゆっくり、体を近付け、とっさにピッケルを突き刺してこれに静かに体重を移し、からくも渡り切った、ということだ。ヘッドライトもすっかり光がうすくなっていたし、この五㍍程の闇夜の空中懸垂は相当スリリングなものだった。

しかし幸いにして難所はそこで終り、あとは軟雪に足をとられ

ながら、クレバスを左に右に避けつつ雪原を下っていけばよかった。テントに戻ったのはもう夜半を回った一時、すでにみんな寝て居たが、起き出してミルクとオジヤをつくってくれた。

一方、デポ地で丸山達と別れカサララへ向かった甘利とセンテーノの様子を次に記そう。

カサララの頂上と思われる扁平なスカイラインは真上に仰がれたが、頂上からデポ地に向かっての側面は数十本の大クレバスによって分断されたものすごい大氷壁になっていた。問題はクレバス群の突破であるが何しろ今日の相棒はあまり登山経験のないセンティーノなので無理なことは出来ない。まあ行ける所まで行ってみようという気軽な気持で登攀を開始した。デポ地から一〇〇米も行くと相当な雪壁となってきたのですぐアンザイレン。四ピッチ程登るとピッケルがやっとささる位の硬雪の急峻な壁が現われた。傾斜は七〇度近いのでステップを切るにも眼の高さを少しだけしか切れない。一二本爪アイゼンの先の二本を蹴込み、アイスバイルを左手のホールドとしながら、右手のピッケルで慎重にステップを切りつつ三〇米程登ると果せるかな、幅五米程の大クレバスにぶつかった。どうやら渡る部分はありそうだが、対岸には一〇米程の大きくオーバーハングした氷壁が真蒼にきらきら光っていた。センテーノに、登れると思うかと聞いてみたらイエスと答えたが、今の硬雪の壁を考えると、とても言葉通りには受け取れない。それにそれから上も素晴しく悪そうに思われたので、今日はここから引き返すことに決定した。快晴にきらめく大氷壁のテラスでのんびりおやつを楽しんだ後で、カニサヤの頂上に立った丸山達の話を聞くと、カサララはウェランカヨックとカニサヤを結ぶ主稜線上の小さなコブに過ぎないというので、まあ無理して登らなくてよかったということになった。

カバヤニ登頂

八月一〇日、センテーノがゴソゴソと起き出し、ラジウスに火をつけ朝の準備を始めた。それをシュラフの中で聞きながらウトウトする。彼もやっと我々のペースに慣れてきたようだ。六時に起きて朝食。今日は、甘利、丸山、中川三人でカバヤニに向かってキャンプを進める予定だ。八時出発。氷河の末端までのモレーン地帯、皆考古学ヅイて、化石の採集に夢中になる。三人共、好き勝手な所を歩いて、目を皿のようにして、すばらしい掘り出し物はないかと、石をひっくり返しながら、採集に励んだ。丸山などは他人から見れば、何んでもない石コロを、さも大事そうに左手にかかえて興奮している。化石を帰りがけに持っていくため氷河の末端の岩棚にデポしてから氷河の真中に出た。荷物は六、七貫。一一時、一昨日のアタックの帰りにデポした荷物を取りに行き、帰ってきた所で昼食。ここからは各自一〇貫の荷。

氷河を東へ東へと進む。黙々と歩いてカバヤニとカニサヤとを結ぶ稜線直下の台地に着く。単調ではあったが、神経の疲れない

楽なルート。甘利、丸山は明日のルートの偵察、中川はキャンプ建設。ラジウスの調子悪く、シュラフにもぐり込んだのは一〇時を廻っていた。

翌朝は八時出発。カニカバ・コルに登る。雪原をトラバース、ちょっと下って岩尾根をまたぎ、反対側の谷に入る。遠くアマゾンの密林が、ボーッとかすんで眺められる。反対側から、カニサヤに、せり上っている谷をルートにとり、雪の斜面をアイゼンをきかせながら登る。途中、一六ミリの撮影をやりながらのんびり登る。隊員三人という心強さからか、〝アンデスズレ〟したのかきびしい緊張感など全く感じない。

クレバスにぶつかる。おもむろにザイルを取り出し、比較的幅のせまい所を選んで乗越す。完全な蒼氷で、ピッケルを振るたびにキラキラと氷のしぶきが太陽光線にきらめき誠にきれいだ。硬雪のかなりの斜面のトラバースを五ピッチ。雪がささくれ立っているので、さほどイヤな感じはしない。このころわかったのだが、目当てだったトレ・ボリビアーノはあまりにも遠すぎて、今日はとても登れそうになかった。かえって気持が落着いてくる。トラバースは危険になってきたので、尾根に向かって直上、二ピッチ八〇㍍位で尾根に出た。

頂上はほんの五〇㍍位先の所にあるが、尾根に出た所でゆっくり昼食にきめこむ。ガスが出始めた。もう春が近いせいなのだろう。ゆっくりと頂上を踏む。東側に派生した尾根を、一ピッチたどって見るが、完全にガスがたちこめ視界がきかないので頂上にて、頂上にいることにして、三人でヨーデルの練習をする。甘利が先生、寒いので馬鹿でかい声をはり上げる。

四時頂上を後にする。往路で使ったアイスハーケンは、大方グラグラなので打ち直しつつ往路をたどった。のんびりとした楽しい山登りだった。この未登の山も又格別な味があった。

トレ・ボリビアーノの方は、横から見ると幅広い岩峰でトレ(塔)の名にはいささか恥しい程だし、大して欲がわかないので、手をつけずに下のキャンプへ戻ることにする。一二日、午後からゆっくり動き、氷河の端のキャンプに戻った。

一一日には、調子悪くベースキャンプにとどまっていたマルチネスも、この前進キャンプにやって来たので、この日、テントには六人そろった。翌日は全員で、二手に別れ、ウェランカヨックへ登ってみることにした。

ウェランカヨック

昨夜のテント内の情景を思い起しながら、アイゼンをつける。ププヤでの最後の登攀、ウェランカヨック(五八三六㍍)に吉沢隊長と誰が一緒に行くか、もめた。吉沢さんは誰でもいいから早く決めろと云わんばかりに、テントの奥で時々こちらをにらむ。結局ジャンケンで負けた丸山に決まった。センテーノとマルチネスもそれに同行する。そして残りの二人はウェランカヨックの西壁へ行くことに決めたのだ。

突然「雪崩だ!」という声。はっとふり返ると、左手の尾根の

一角が、丁度屏風でも倒れる如く崩壊して来る。片アイゼンでピッケルをつかんで反対側に逃げる。ズシンという腹にひびく音。そして爆風と吹雪。しかし思ったより小さかったので、引き返した時には何事もなかったような静寂に戻っていた。いやな気分で西壁を見上げる。登攀中に落ちて来たらひとたまりもないだろう。黒々とした岩、そしてその上の雪壁。

登攀は予想以上に厳しかった。甘利が主として岩、中川が氷雪を受け持ち、ハーケンを連打しつつ各々三ピッチ登る。傾斜が緩くなったと思ったら、大クレバスにぶつかる。時間は午後四時、明日は撤収なのでビヴァークは許されない。又この上どの位登ったら主稜線にでられるかもわからない。クレバスの迂回ルートは左手に求められそうなのだが、退却に決定。スノウバー、アイスハーケンを用いて変則アップザレイン、一〇㍍四回にして岩場。ここからは真暗闇の中をライトを頼りにサブザイル三〇㍍をダブルにしてアップザレイン二回。登攀中、最も手強かった岩場の下から更にもう一回三〇㍍の下降をしてやっとスタカット開始地点に到る。カラビナをフルに利用した。手持のアイスハーケン、ロックハーケンも一、二本になっていた。アイスハーケン七本、ロック八本使用。

日はとっぷりと暮れ、我々の照らすヘッドランプだけが頼りだった。トボトボと往路を帰る。ヴァリエーションルートのむつかしさ（特に未知な場所の）、を思い知らされた一日だった。

しかし、心は晴ればれとしていた。とにかく、西壁にわれわれの足跡を残すことが出来たのだ。一昨日とは打って変った、激しかった登攀をかみしめながらテントに帰った時は、すでに夜の一二時を過ぎていた。

同日、吉沢隊長、丸山、マルチネス、センテーノの四人は西尾根から広い大きな氷河を登りウェランカヨックに登頂（第二登）した。

次に吉沢隊長のウェランカヨック登頂記を引用しよう。

ある意味では大きな賭博（カケ）のようにも考えていたアンデスへの遠征も、一四日にはプヨプヨのベースキャンプに集合して山に関する限りは無事終了するのである。ププヤ山群の南部にあるアカマニとヤナオルコへ行った中村、中島、倉知の三人は、多分成功して戻っていることであろう。ここ、前進キャンプではその他の連中が、それぞれの目標を片付けて、一息ついているところである。残すは明日の一三日、一日だけ。私自身は八月七日にここへ来てから五日間、五二〇〇㍍の氷河の上でゴルフをやったり、氷河の擦痕（ストライエー）（Striae）の拓本をとり、又、魚や大はまぐりの化石を拾ったりしているだけであった。尤も五二〇〇㍍の氷河上でのゴルフは、一つの世界記録ではある。モン・ブラン（四八一〇㍍）より三〇〇㍍も高いところで、レッキとした九番と八番のアイアンを使い、正式な球（見つけ易いように赤く塗っておいた）を打ったという話は、ディレンフルトやクルツのクロニクにも出ていない。

擦痕の拓本は田中薫さんのアドバイスから、銀座で買ってきた道具一式でとった。これはいい記念になる。

それやこれやで五日間は瞬く間に過ぎてしまったが、自分としても心残りのないわけではない。そこで最後に一山お土産をとい

う訳で、ウェランカヨックの第二キャンプを考えたのである。幸い丸山があいたのでこれを後見役とし、マル（マルチネス）とポヨ（センテーノの愛称）をラッセル車に使うということで計画は出来上った。甘利と中川の二人は、隊長のような年寄りに、ウェランカヨックなんかとても、という意見を秘かに持っていたらしい。

八月一三日、五時半に眼が覚めたが、ボリビアのマルはもう起きていた。六時になったので皆を起すが、例によってなかなか袋から出て来ない。一番奥にねていた私は、隊員達の頭や足を踏んづけながら外に出る。

今日も天気はいいらしい。西のペルーの低い山々が霞んでいる。八時にテントをあとにした。甘利と中川の二人はウェランカヨックの西壁をやるんだと張りきっている。だが明日はBCへ戻るんだから、ビバークは絶対相ならんと、一本釘をさしておく。

歩き悪いモレーン丘を越して少し登るともう西尾根の南斜面のザグに登って岩の突起の上に腰を根本につく。かなり急な雪渓が一〇〇〇㍍位おちてきている。ジグおろす。ここでリュックに入れてきたお札の袋を岩と雪の境目にある凹地に隠した。今日は下のテントが無人だから、盗難を恐れて運び上げてきた訳だ。テントにいる時に気がついたのだが、遙か下の部落のアイマラ族が、時々四、五人で氷河の氷を採集に登ってくる。ものの冷蔵用にでも使うのであろう。

ここからアイゼンをつけ、少し上でアンザイレン。先に登ったポヨを見上げると肩に何もつけていない。皆マルに背負わせているのだ。私は早速ストップをかけ、マルの荷物を半分持たせる。あとでわかったことだが、彼は、へった。全く怪しからん男である。

陽が漸く岩場の上に射すようになった。長いラッセルの後に岩の稜線に辿りつく。稜線の南側、岩場の陰には二尺位のニエベ・ペニテンテが生えている。ここはもう五二〇〇㍍位かと思うが、北側の斜面は陽当りがいいとみえて全然雪がない。全く不思議な地形である。

稜線上の岩に腰をおろして北方を眺める。プヨプヨ部落からみえるプヨプヨ峰（W・カルルのいうリサ、ミタ、各々五四〇〇米位）の南面には幅広く懸垂氷河がかかり、眼下の氷河はズタズタにクレバスが走っている。コロロ峰（五九一五㍍）の尖峰は何処からみても印象的である。

雪のない北斜面を斜め上にトラバース、ガラガラの岩が摺りおちて歩き悪い。スレート状の岩が多く、その間に小さな貝の化石が沢山挟まっている。

正午過ぎ一〇分、再び雪稜に戻ったが、これからは頂上までずっと氷河の上に積った雪の世界となる。高度を損しないようにクレバスを巧みに避けてウェランカヨックの広大な西斜面に出た。南側は西壁の一部をなしているが、稜線部には茸状の雪塊が今にも崩れんばかりの様相を示しながらつっ立っている。

広い雪の斜面だ。春の天狗平や立山の姿が思い出された。左手の稜線は長い。一九五七年にヴェルナー・カルルが辿ったのはこれであろう。高度が高まるにつれて斜面の傾斜も少しづつ急になってくる。それに反してラッセルの角度が次第に直登に近くなっていった。先頭に立つマル公に下から大声で叱鳴りつける。

「シーシー、ペルメソ。」
と一応はあやまって角度を緩めるが、又直ぐ忘れてしまう。
五七〇〇㍍位のところへ来ると私の歩数がだんだん少なくなっていった。一〇歩は歩けたものが、しまいには五歩、そして最後には二歩歩くと立停ってしまう。緩んでいたザイルが直ぐピンと張ってしまうのが、しまいには五歩、そして最後ばって来たな、というようなおとしてしまう。緩んでいたザイル立停っても彼は嫌な顔一つしなかった。顔をして見降ろしている。然し何遍頂上に近付くに従ってガスが湧いてきた。五八〇〇㍍と覚しきあたりに平らなところがあった。私のリュックはもうトウに丸山の肩に移っている。持っていたのはピッケルとカメラだけ。それでもこのカメラが癪に触るほど重かった。
ガスに巻かれた雪の上にドカリと腰を降ろす。ドカリというといかにも勇ましいが、勇ましいところは少しもなかった。胸が締めつけられるように痛む。年のせいかも知れない。頭は少しも痛くない。だから高度馴化の不足ではない。
兎に角、もう頂上は、感じからも近い。しかし私はこれ以上歩けない。俺はここで待っているから皆で登って来いというと、丸山は、隊長が行かないなら私も行きませんという。じゃあ、マルチネスとポヨとで登ってみろ、と命令する。
元気な二人はガスの中に消えていった。……そして約二〇分経過、二人が走っておりてきた。何処まで行ったんだ。勿論クンブレまでだという。もう一〇〇㍍位だから隊長も登りなさい、という。丸山もさかんに奨める。折角ここまで登っておいて頂上を残すなんて勿体ないですよ、さあいきましょう、立ちなさい、とけしかける。
私も最後に決心、後悔は先に立たない。よピッケルだけもって立ち上り、丸山とアンザう。不思議だ、胸の痛みも消えた、足にもダ
私はシャンとしてやわらかい雪面を踏みしい。暫らく登ると一〇㍍ばかり先の高みに色い雪面にさしてある。近づいてみるとマルし込んでいったものであった。ハハー、ここの方をみていると、ガスの晴れ間から直ぐ前ており、それを左に迂回した先にここより高た。先の二人は濃いガスの中で頂上を見誤っ山と私は占めたとばかりに、雪庇の左側（こている）を辿って最高点に達した。勿論危いガスの晴れ間からみるとこれから先には高に五八三六㍍の頂上に立ったのである。ああこで戻ってしまったら途中の苦労が水の泡にた。第二登とはいいながら私としては夢にもある。丸山も喜んでくれたが、私としても今満五七年九カ月と七日に当り、恐らく日本人高登頂記録を樹てたのであるから十分満足
唯、残念なのはガスのために頂上での展望である。だが足許の雪庇から落ち込む西壁のあった。この下の壁のどこかに甘利、中川のいる筈なので、大きな声で呶鳴ってみたが、応答は全然なかった。

いよいよ下りにかかる。これが今度の遠征行では最後の山だ。この一歩からわれわれは帰国への旅に入るのだ。食いものは余り腹に入っていないが、下り一方となると元気は出る。さっきの休み場へ戻って四人一緒に、登りのシュプールを辿っていく（六時五分）。ところどころに赤旗を残す。西壁の二人のためだ。間もなくガスの領分から解放され視界が一度に開けてきた。

広い雪の斜面も終り、西稜に移る。北側の雪の急斜をアイゼンを利かせてチャカチャカと降りる。丸山のジッヒェルがあるので気は楽である。ポヨはこんなところでも足がすくんで歩けないらしい。へっぴり腰はよろしくない。

登りに苦労したガラガラの斜面も下りには一向苦にならない。六時三五分に、朝、稜線に辿りついたところにつく。そろそろ夕闇も迫って来た。そのまま雪渓のグリセード、金を隠してあるところについたら真暗になる。今度はヘッド・ランプのご厄介になりながらまたしばらくはグリセードが続く。モレーン地帯は歩きにくい。大小の石につまずきながらテントにやっと辿りついたのは七時四五分。約一二時間の山行であった。参ったとはいわないが、かなり疲れたことは事実である。

プヨプヨから馬が二頭とアリエロが子供を連れて、もう来ていた。あとは明日の朝までにくるという。二人用のテントを張って寝かせてやった。

夜更けの一二時〇五分、西壁の二人が戻ってきた。約束通りビバークせずに帰って来たのは感心だ。明日はいよいよBCへ戻るのだ。山上での最後の眠りは深い。

【後記】帰国してから大阪の水野祥太郎氏（阪大外科部長）に会い、苦しかったこの山行のことを話したら、とんでもない野郎だとおこられてしまった。富士山でさえ医学的には、酸素の補給が必要なのに、その年でその高さでは胸が痛くなるのは当然である。もう一〇〇〇米登ったら君は死んでいたろうとおどかされたり、たしなめられたり、全く盲目蛇におじずをやってのけた訳である。この警告にもかかわらず、またいつの日にか同じことをやると思うが、ひと様のご参考までにつけ加えておく。

一路ラパスへ

八月一四日。朝八時に約束の馬五頭が上って来た。一〇時に来いといっておいたのに、約束通りに来たためしのないアリエロ達が二時間も早く姿を現わしたとは、全く驚いてしまった。きのうは西壁パーティのもどったのが真夜中で、誰もくたびれていたが、早速テントをたたみ朝食のオジヤをつくった。

二つの処女峰と第二登、それに沢山の貴重な（？）化石をお土産に下山の途につく。山での活動はこれで終りかと思うと、さっぱり足がはかどらない。化石を拾ったり植物を採集したりして気を紛らしながら、ゆっくりと往路を引き返した。

カニウマ峠から振り返ると、ププヤは雲の間に隠れ、切れ切れにのぞいている。今年はもう乾期も終りなのだろう。雲の多い毎日である。最後のお別れをして、一寸さびしい気持におそわれるのを振り切ってプヨプヨへ向う。ベースキャンプのダイダイ色の

点が、少しづつ大きくなって行く。

ベースキャンプに着くと、別隊の連中はすでに戻っていた。山もこれで終った。とうとう全部終ってしまったのだ。そう思うと心に空虚な穴が空いてしまったようなうすら寒さを感じる。その気持を打消すように、その夜はメステントに勢揃いし、とっておきの缶ビールで乾杯、苦心して手に入れたヤーマのモモ肉をかじって、夜遅くまでさわいだ。ヘッドライトが近付き、迎えのトラックがやって来た。そこで運チャンも宴会に引きずり込み、又ひとしきり大さわぎが始まった。

翌朝、朝めしをすますともうほとんど食糧は何も残っていなかった。アルファ米二、三袋と調味料だけだった。実際考えてみれば何もかも本当にうまく行ったものだ。時間と持物をフルに使ってとにかくこれだけのことがやれた。皆それぞれに満足してトラックに乗り込んだ。

だが、最後に又々トラックのパンクという事故が起って大分待たされる羽目におち入ったが、今度ばかりはみんなゆうゆうとして故障のなおるのを待ったものだ。ペルー領の部落までパンクタイヤをころがして修理に行く数時間というものも、満ちたりた我々にはもう苦にはならなかった。暗くなっても車はどんどん走りつづけ、真夜中も過ぎたあくる日の午前二時頃、とうとう光きらめく都会、ラパスに到着した。

〈ラパス到着以降の行動概略〉

八月二三日。ラパス発。ジープとトラックに分乗してプーノまで行き、プーノより汽車でクスコへ向う。二四日夕、クスコ着。

クスコに二九日まで滞在し、サクサイワマン、マチュピチュなどの遺跡を見学、アマゾン方面（ワドキーニャまで鉄道、後、トラックでキアバンバまで行く。）へも足を伸ばす。

八月三〇日。クスコ発。乗合バスにのり、アバンカイ、ナスカ経由、九月一日リマに帰着する。

九月一六日。吉沢、甘利は空路リマを発つ。残った五人は、一〇月入港の定期船待ち。この間、各方面へ経済調査旅行に出る。（海岸地方のトルヒーヨ、山岳地方のカラス、ワンカイヨ、アマゾン地方のティンゴマリア方面へ）

一〇月一日。全員再びリマに集結。ペルー出国の準備をする。

一〇月二〇日。川崎汽船・第五真盛丸に乗船、カイヤオ港を出る。

一一月三〇日。横浜着。

アンデス・ノート

一　言
アンデスへの招待
アンデスの農村を訪ねて
海岸地帯のアシェンダとインディオ

一言

吉沢一郎

一橋大学の山岳部も生まれて四〇年、私もその誕生の日から山岳部とともに歩んで来た幸運な山男の一人である。大正一一年（一九二二年）に燕から槍へ縦走したのを皮切りに、私は山に登るために一橋へ入ったような幸福な黄金時代を過して社会に出た。このような生活を許してくれた両親はもう墓の下で眠っている。

勉強は余り好きな方ではなかったが、山の本を読むことだけは例外だった。山へ出かける時には必らず、その山についての文献を克明に調べた。調べることは好きであった。そしてその対象は自分のひた向きな未知への好奇癖から、いつしか欧州のアルプスからコーカサスへ、アラスカへ、最後にヒマラヤへと向けられていった。アンデスをフィリップ・ボルヒェルスの〝南米〟によって調べたのは昭和一五年（一九四〇年）頃のことである。

その結果は昭和一七年の暮に三省堂から出して貰った「北の山、南の山」に掲載されている。但し、その中にはプカヒルカ山群もないし、ボリビアの中にアポロバンバ山群はあっても、一々の山名は一つも書き入れてない。

話は跳ぶが、昭和三四年の暮も迫ったある日の夕方、中村保（タモツ）が

「吉沢さん、アンデスのワイワッシュの何処だね。」

「ワイワッシュの何処だね。」

「カルニセーロ（イェルーパーハーでイェルパーハー（六六三四㍍）の東稜です。」

「金はどうする？」

「それは、吉沢さん、一つ骨折って頂けませんか。」

「そいつはどうも……」

アンデスへ行くということは、それ自身にも意義はある。そして又将来の飛躍のための第一ステップとしても観念的には一〇〇〇㍍低アンデスはヒマラヤの平均高度に比べバークの経験などは可なりい。氷河の技術や高い高度における気楽な条件のもとに、且、他の悪条件に煩わされることなく身につけることが出来る。

然しながら「それ自身にも意義がある」ということは、唯行けばよいということではない。若しあれば六〇〇〇㍍以上の未踏峰か、全然人の、つまり遠征隊の入っていない未踏の処女地かの、いずれか一つが目標の中に入っていることの方が望ましい訳である。これは又、体協（日本山岳会）から登山のための外貨の枠を分けて貰う理由としてのメリットにもなるのである。

その意味で、可能性の有無は別問題として、N・B・クリンチ等のいうプカヒルカの中央峰（六〇五㍍、後に北峰と判った）と、どうせ行くなら一つだけでなく、余り一般の日本人には知られていないボリビアに行き、而もその中に未探地域として残されているプヤ山群を加えれば、われわれのアンデス行きの条件は一層完璧なものになる。（私はこれが決定されてから世界の主な

山岳会に宛てこの旨を連絡した。）

その上、幸いなことに、昭和三五年はわれわれの学校の前身の前身のその又前身位の創立八五周年、山岳部も生まれて四〇年だ。この両方を記念してということにすれば、募金の名目も一応は立つ。

まだあった。折角大枚のお金を、而も人様のお金を使って地球の裏側へまで行くのであれば、何か学校に関係ある、例えば経済調査といったようなものを計画に入れる。そうすればわれわれのアンデス遠征に対する大義名分は完璧に立派なものとなる。

私の一つの決心はついた。なければならない重大な事がまだそこには、もう一つ決意しで買ったボロ家と山の本がいくらかあるだけで恒産らしいものは全然ない。それにいくらなんでも五ヵ月の有給休暇を会社に申出ることはとても出来ない。余り委しくこの辺の事情を述べると、公安に差支えの生ずる恐れもあるので遠慮しておくが、兎に角、最後には山岳部その他有志からの心からなる援助によって、家の方の大部分は何とかなる見通しがついた。私は行くことにした。専務殿が非常勤嘱託になったのは当然である、というよりも僅かながら首が繋がっていたことの方が不思議である。大バカ野郎殿も遂に前進あるのみとなったのも訳だ。

それから次は資金の問題である。一橋だから金を集めることなど訳はない。と多くの人は言っていた。私もはじめはそう思ったが金は向うから歩いて来るものではなく、こっちから貰いにいかなければならないものだ。余り集まりが悪いので一度は遠征の取消しまで考えた。ノイローゼになって、夜、床につくのが恐ろしくなったことも夜中の三時に必らず眼が覚め、夜の明けるまで輾転反側、それが何日続いたことか。糞野郎、負けるものか、私は頑張った。

それにしても学校のバックというものは有難いものだ。先輩その他の温かい支援により三六年一月に入って銀行協会が決定すると、あとは加速度的に集まって来た。私達の努力はゴール寸前になって遂に実ったのである。

国の内外を問わず遠征隊長は誰でもいうように、昭和三六年五月九日、羽田でJAL機に乗り、犬吠岬の白い灯台を最後に日本の陸地をあとにした時、今までの苦労は雲散霧消、窓から見るものが海と空よりなかったせいもあろうが、私はガックリとして伸ばした寝台椅子に頭をのせ眼をつぶって太い息をフッともらした。たとえ何かが見えていたとしても、それは同じことであったろう。

そして……

× × ×

昭和三六年一〇月二日午後五時三分い雲海に突込んだと思った途端にドスンと滑走路を走っていた。雲の下は雨だった。

私は最後に出発して、最初に日本に戻って来た。丸五ヵ月から七日を引いた長い旅路であった。

ペルーアンデスに、最後まで残されていた六〇〇〇㍍以上の峰の一つであるプカヒルカの北峰は、遂に一九六一年の一橋大学アンデス遠征隊の足下に俯した。いささか劇的に大袈裟に言えば、エドワード・ウィムパー等がマッターホルンの頂上に立った一八

六五年にアルプスの黄金時代が終ったと同様に、プカヒルカ北峰や、同時にイタリア隊によって登られた中央峰の過去帖入りを以ってアンデスの黄金時代もその幕を閉じたのである。

だがそれ以後アルプスにおいてはフィアタウンゼンダー以下の難峰が、そして一層困難なバリエーション・ルートによる新登頂が狙われ、最後には技術と道具の異常な進歩と相俟って、例の北壁その他の岩登り競争までが出現するようになった。

アンデスにおいてもプカヒルカ北峰の陥落によって一応六〇〇〇㍍以上の登攀史に記念すべき終止符が打たれはしたが、ここではそれ以前から五〇〇〇㍍級の峻峰攻撃が始められていて、いうなれば古典派とネオ・アルピニズムが平行して行われていたのであるから、黄金時代とそれ以後の形式のものとが重なり合って来たという感じがないでもない。これはアルプスと較べて、その開拓がずっと遅れていたことに依るものと思われる。

一方、延々七〇〇〇㌔に及ぶアンデス山脈の中において、相当の高峰を持っていながら遠征隊が入っておらず、最近まで残されていた山群としては、コヨリティ山群とアポロバンバの南端のプヤ山群がある。前者は竹田（吉文）隊が一九五九年にビルカノータのアウサンガテに行った時に発見したものであるが、一九六一年にスペイン隊が関学川村隊に先んじて入ってしまった。後者は一九五七年ドイツのW・カルル隊によって発見され、一九六一年一橋隊によって西面から、これと思われる峰四つが初登頂された。従ってそこの東側面は未踏査のまま残されている訳である。ここにも幾筋かの大きな氷河が流れているし、五八〇〇㍍のものが一つと五六〇〇㍍の未登峰も数座は残っているので、遠征隊の目標としては決して小さいものではない。

それはそれとして私達は日本を出る時の目標、あれを登りこれを登りあすこを探ると予定していたものを全部完遂して帰って来た。而も一人の死傷者も出さなかったことは、一生涯忘れることが出来ない思い出となった。これは大きな儲けものであった。それに各地の在留邦人或いは日本人からは心からなる歓待を受け、人間の善意の豊かさに感激のし続けであったことは、何処の国へ行っても若干

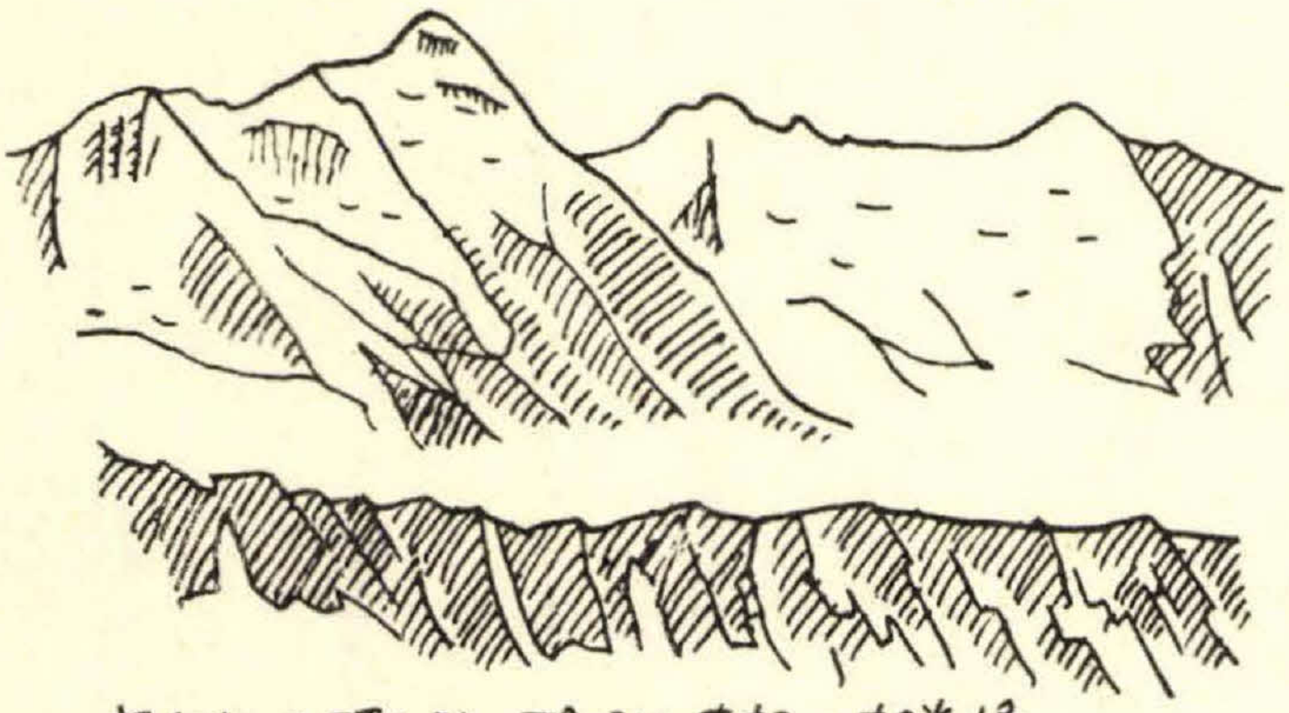
山へ登ることだけを目的にした遠征隊にも勿論意義はあるが、われわれのような形式の、遠征というよりは寧ろ大旅行といったものにも大きな価値があると思う。ロンドンやパリーやニューヨークに渡って用だけ足すのも又よろしい。然しわれわれとしてはそれよりももっと知られていない国、そしてそこにあるもっと珍らしい土地々々を歩いて、われわれと格別に異った人情風俗に接し、われわれの経験を豊かにするとともに、ハポネスのいいところも見て貰ったり感じても、らうことも必要なのではあるまいか。

現にリマのサン・マルコス大学の学生ラウル・パトルコ君などは、今までは本や映画などを通してだけしか日本人というものを知らなかったが、今度皆とここ（プカヒルカ）に一緒に来て、特に日本の大学生の本当の姿に接することが出来、こんな嬉しいことはないと述懐していた。そういう本人がまたとても感じのいい男で、水洟をいつもかんではいたが、忘れることが出来ない。

人間といえば勿論悪い奴にもあつた。何処の国へ行っても若干

の悪いのがいるものだ。日本に限ったことではない。だが平均してみれば何処の国でもいい人間の方が多い。自然を相手にすると随分ひどい目に遇うこともある。が、自然には悪意がないのだから、どんなに痛めつけられてもわわれれは我慢が出来る。然し人間の世界ではそうはいかない。善意のように見えてその裏に悪意が潜んでいる場合もあるし無茶な阿呆が山を愛する所以のものでもない。油断も隙もあったものではない。世渡りの上手でない私のようなものの一つがありそうである。その代り、山に打ち込む山の男で大金持になったり、位人身を極めたりしたヤツのあるなんていうのは聞いたことがない。どっちが勝ちか、どっちが得か、いずれは誰かが墓石の上にこの結論は書いてくれよう。

兎に角、遠い国へ行って知己を得るということはいいことだ。目的の山へ無事に登れたことも勿論嬉しい。が、それにも増して地球の反対側にも立派な人間が沢山いることを知ったことの方が、われわれにとっては一層大きな収穫であった。



ヤナオルコ頂上より　ププヤ東部の未踏峰

アンデスへの招待

中村保

長い雨期が明けて五月も半ばを過ぎれば、冬の訪れとともにアンデスの高原に碧空が拡がり、各国の登山隊がやってくる。ブランカ山群を望むサンタ渓谷の街・ワラスの民家の白い土塀には強い日射がそそぎ、石畳の路地を行くブーロの足どりは軽く、ンディオの表情も心なしかなごんでくる。中央広場から見上げる氷の峰々は、澄みきった空気を通して、氷河のクレバスや頂稜の雪庇の陰をも見落させないほど鮮かに屹立している。インカ伝説の地ビルカバンバの深く切れ込んだ谷に、そして茫漠たる不毛の大高地プナに、重くたれ込めていた雲のベールが消えていくのもこの頃である。

茶褐色の涯しない隆起、山腹をよこぎる直線的なインカ時代の公道の跡、色彩をそえるユーカリの緑とインディオの家の白壁と赤い尾根、これ等が濃紺の大空を画す氷雪の峻峯と渾然一体となって調和し、アンデス特有の愛らしいヤーマやアルパカと共に、旅する者にとって忘れ難い風物誌になっている。それ以上に心に残るのは、一見いじけて猜疑心の強いインディオの、素朴な心情とのふれ合いである。

「セニョール、来年もまた来てくれ。」

「十年経ったらまた来るから、それまで覚えていて呉れよ。」

車の通わぬ山奥の街ポマバンバを去るとき、門ごとに別れを惜しんでくれた彼等は生涯思い出に残るだろう。

アンデスとはペネズエラからチリーの南端までの七〇〇〇㌔を越える大山脈であり、ペルーアンデスはその間約二〇〇〇㌔に亘ってペルーを縦貫している。かつてこの帝国が築かれ、クスコを中心に遠く現在のコロンビアに至るまでその統治は及んでいた。近代的な通信機関のなかった当時、行政治安のためにインカの公道には日夜飛脚が走り、また、平和な谷間のアンデネス（段々畑）には豊かな収穫の歌が絶えなかった。

スペイン人の征服後、激しい掠奪と圧政のため長い間農奴的生活を余儀なくされてきたインディオの故郷にも、ようやく国土開発のための道路建設、灌漑工事、鉄道の敷設等、教育の普及と相俟って近代化のつち音が聞かれるようになった。今はラテンアメリカ共同市場の一翼をになって、工業化に一歩踏み出したペルーの将来がかけられているのは、無限の地下資源の宝庫と云われるアンデスとその東側に拡がるアマゾン上流の地域である。

かつてインカの太陽神が権力を誇っていたころ、飛脚は数日にして現在のエクアドルからクスコまで走り急を知らせ、或いは海岸地方から生きた魚を国王に献上したというが、今日でも飛行機を使わぬ限り、このアンデスの広さは、想像に絶するものである。

ペルーアンデスの分類

一口にペルーアンデスといっても、その地形は相当複雑であ

る。北部は比較的低い山でコルディエラ・ブランカまでは見るべき山群はない。このブランカ山群から中部にかけて幅は狭いが高山地帯が続き、南部に行くに従ってその幅は六〇〇㌔にも及び不毛の大高原地帯となって、ボリビアとチリーにつながっている。

この広範な山岳地帯の中に、細分すれば数多くの山群が存在するが、登山の対象、即ちアルピニズムの対象となり得るのは可成り限定されてくる。それを大別すると（付図参照）、

一、北部アンデス
- コルディエラ・ブランカ（Blanca）
- コルディエラ・ワイワッシュ（Huayhuash）
- コルディエラ・ラウラ（Raura）

二、中央アンデス
- コルディエラ・ビウダ（Viuda）
- ネバードス・デ・コチャス（Cochas）
- コルディエラ・ワイタパヤナ（Huaytapallana）
- ワガルンチョ・グループ（Huagaruncho）

三、西部アンデス
- コルディエラ・オクシデンタル（Occidental）
- コルプーナ（六六一五）、アンパート（六三六〇）等のペルー南西部の沙漠地帯

四、東部アンデス
- コルディエラ・ビルカバンバ（Vilcabamba）
- コルディエラ・ビルカノータ（Vilcanota）
- コルディエラ・ウルバンバ（Urubamba）
- コルディエラ・アヤカチ（Ayacachi）

五、ペルー・ボリビア国境地帯
- コルディエラ・アポロバンバ（Apolobamba）
- コルディエラ・レアル（Real）

これらの内でも、いわゆるアンデスらしい熱帯の氷雪の美しさをもって外国からの登山隊をひきつけるのは、ブランカを筆頭に、ワイワッシュ、ビルカバンバ、ビルカノータ、ワガルンチョ、といったところで、他の山群にもそれぞれ魅力的なピークはあるがスケールは小さい。

ペルーの最高峰ワスカラン、南米のシニオルチュ・アルパマヨ、鳥の嘴にもたとえられた難峰ヒリシャンカ、伝説の地ビルカバンバの名山サルカンタイも皆、この地域にある山々であり、この数年の間、残された未踏峰をめぐって各国の岳人が競ったのもこの地域である。

アンデスの魅力

近代文明がこの大陸に渡って来た時期は、アジアに比べて決して遅くはなかった。しかし、山岳地帯の測量は、今日に至るまで系統的組織的には行なわれておらず、一部を除いては山の標高すら極めて不正確で、権威あるものはない。それぞれの登山隊が当てにならない高度計で記録した高さが、そのまま通用している例もある。

インド測量局の如く、英国人の手で、或いはその指導の下に、あのヒマラヤの広大な山域の測量作業をなし遂げたような地味な

80°
75°
70°
CORDILLERAS
OF PERÚ AND BOLIVIA
ECUADOR
IQUITOS
RIO AMAZONAS
RIO MARAÑON
RIO UCAYARI
PERÚ
BRAZIL
5°
Notes:
Principal roads
Principal railways
Cordilleras
Main rivers
Andean high-land
International boundaries
TRUJILLO
CHIMBOTE
CARAZ
HUARAZ
PARAMONGA
CERRO DE PASCO
JAUJA
CALLAO
LIMA
HUANCAYO
ICA
NAZCA
CUZCO
AREQUIPA
PUNO
LAGO TITICACA
LA PAZ
ARICA
BOLIVIA
CHILE
10°
15°
20°
1. Cord. Blanca
2. Cord. Huayhuash
3. Cord. Raura
4. Huagaruncho group
5. Cord. Viuda
6. Cord. Huaytapallana
7. Cord. Vilcabamba
8. Cord. Urubamba
9. Cord. Vilcanota
10. Cord. Carabaya
11. Cord. Apolobamba
12. Cord. Real
13. Cord. Occidental
14. Cord. Ayacachi
15. Cochas group
1 : 10,000,000
0
300 km

努力は、一獲千金を夢見て侵略と掠奪を繰返して来たコンキスタドーレスの末裔には出来ることではないかも知れない。従って現在でも地図は不完全で信頼出来る資料は少ない。

現在では、ペルーアンデスの地図の上で未探検という地域は殆どなく、東面の森林地帯は別にして、登山に関する限り、町から車で二日もあれば行け、探検的興味の対象からは遠い。どんな奥地にもインディオが暮しており、鉱山もしくはその跡もある。標高四八〇〇米の高所で生活を営んでいるインディオも居る。

われわれ日本の登山家にとって、地球の裏側の遠い感じのペルーアンデスは、一九五八年に竹田氏がビルカノータの偵察に入るまでは全く未知のところであった。ペルーの歴史的背景と相俟って事実以上に幻想的なあこがれを懐かせていたが、今やペルーアンデスの登山的探検の時期は過ぎ去り、登山史的にいえば鉄の時代を迎えている。と同時に、ペルーに渡るまでの距離的障害を取り除けば、クライミングゲレンデとして広く親しまれても良いところである。

熱帯アンデスの美しさは筆舌に尽しがたい。雨期に降る多量の雪が、乾燥期の強烈な日射と夜間の厳しい寒気による融溶と凍結の繰返しの結果、急斜面に付着した氷雪に結晶体を拡大したような美しい花模様を形造り、ペルーアンデスの魅力的な個性の一つとなっている。ペルーアンデスの名峰は皆この個性がそれぞれの山容とマッチして独特の美しさを保っている。ペルーでは、乾燥期に入れば、五月下旬から八月下旬までは天候は安定し、風雪による楽しい行程である。ボリビアの場合更に近く、ラパスから見舞われるようなことは殆んどない。東のアマゾン側から湧きあがる水蒸気が雲となって、午後にはアマゾンに近いアンデスに定期的にかかるが、登攀を妨げることはない。むしろ焼けつくような熱帯の日射から保護してくれるので、氷河の登降にはかえって好都合のこともある。ただしルートファインディングはやはり午前中の仕事である。いずれにしても天気は良い。強風が吹くことはないので日中はカッターシャツを腕まくりして、氷にアイスピトンをたたき込みながら登れるので気分的に極めて楽で、登攀は、高度による影響を除けば、快適そのものである。日本の冬山で鍛えられていると、何か遠征隊の大義名分には申し訳けがない程である。

とは云え、全てが安易に行えると云う訳ではない。ペルーアンデスでは日較差は非常に大きく、日中の三〇度から夜間にはマイナス二〇度に下り、暑さの中の行動に疲労困ぱいした体をテントの一夜で回復しようとしても、二重の寝袋でも寒さのため安眠できぬこともまれではない。ビバークのときは一層こたえる。また巨大なブロック雪崩や頂稜の雪庇の崩落の危険にさらされていることの負担は大きい。

ペルーアンデスを知るものにとって、ペルーアンデスが親しみやすい要素は、山の個性もさることながら、アプローチがヒマラヤに比べて比較にならぬ程簡単なことである。南米の真珠と云われる美都リマから登山の根拠地の地方の街ワラスやクスコ等までは交通が相当発達しているし、その根拠地から目指す山のベースキャンプまで、遠くて四日ぐらいのトラックとロバのキャラバンによる楽しい行程である。ボリビアの場合更に近く、ラパスから車でベースに近い所まで入れる。もっとも、ラパス自体、世界で最も高い所にある首都であり、海抜三八〇〇米の高原にあるのだ

から。

毎年十指を越すチームが渡秘し、北米からは数十人の半ば観光グループ的な規模で、コルディエラ・ブランカを訪れる様になっている。このような傾向にペルー政府も着目して、ブランカ山群を国立公園に指定し観光客誘致の宣伝をする一方、登山隊の通関は無税とするなどの、便宜を与えている。「ハイヒールをはいてアンデスへ」と云う言葉は、ペルーアンデスの一部には既に実践されているのである。

アンデスの未踏峰と云えば、ヒマラヤの八千㍍のレベルに対して六千㍍に線が引かれてマークされて来たが、ここ二、三年の内に全て残りを消してしまった。遠征隊が処女峰をねらうとすれば、五七〇〇～五八〇〇㍍の極くわずかのピークがあるに過ぎない。われわれの登頂したプカヒルカ北峰も、その中央峰や、同じブランカのチャクララフ東峰およびビルカバンバのサクサラヨックと共に、残された最後の六千㍍峰の一つであった。

とはいえ、アンデスは広い。未踏の山がなくなったからといって、失望するには当らない。幾多の熱帯アンデスの秀麗峻嶮なピークが殆ど無限にクライマーの意欲を満してくれるだろう。ヴァリエーションルートの開拓といっても、それはヒマラヤにおけるような強大な組織力を要するものでなく、あくまでも古典的アルピニズムの夢を実現させてくれるものであるし、ペルーアンデスの独特な雰囲気と相俟って、ライト・エクスペディションには絶好の舞台である。

その登攀史

ペルーアンデスの登山史は比較的新しい。新大陸であるせいもあろうが、やはりこの地を支配して来たのが、黄金を求めてヨーロッパから渡って来たスペイン人達であるためだろう。ヒマラヤでは英国人によって地味な探険が一九世紀から始められていたのに比べて、ペルーアンデスの登山史が始まったのは二〇世紀に入ってからである。

一九〇八年、北米の女性ジャーナリストのワスカラン北峰初登頂の真偽をめぐる議論がたたかわれた後、ドイツオーストリア隊の一九三二年、一九三六年、一九三九年と前後三回にわたる、ブランカ及びワイワッシュ山群での、ワスカラン南峰（六七六八）初登頂を始めとする登攀と科学的踏査を迎えるまで、あの美しいアンデスは世界の登山家から忘れられていた。H・キンツルとE・シュナイダーによるこの遠征隊の精力的活動は、地域は北部に限られていたにせよ、特筆すべきものである。ブランカとワイワッシュの殆どを踏査し、三〇座を越える六千㍍峰の半数近くを初登頂し、現在でも広く利用されている唯一の地図を完成した。

その後、第二次世界大戦の終るまで、ペルーアンデスは再び静寂を保っていた。戦後、一九四八年スイス隊がブランカ山群を訪れ、サンタクルス（六二五九）を初登頂したのをもって、ペルーアンデスの黄金時代が始まった。

一九五一年、アメリカ隊がワイワッシュ山群の盟主・ペルー第

二の高峰・イェルパッハ（六六三二）を、コーガン夫妻のフランス・ベルギー隊がアルパマヨを、一九五二年、アメリカ・フランス隊がビルカバンバ山群のサルカンタイ（六〇八一）を、オランダ隊がブランカ山群のワンツァン（六三九五）を登り、イタリア山岳会の長老ギリオーネがビルカノータ・グループと西部アンデスを探った。

一九五三年、ハインリッヒ・ハラーのドイツ隊はビルカノータ山群に入り最高峰アウサンガテ（六三八四）をはじめ、多くの六千㍍峰を登った。以後、一九五四年と一九五七年の二回に亘って、ハインリッヒ・クリーアの率いるオーストリア隊がワイワッシュで相当大規模な活動を展開して、難峰ヒリシャンカ（六一二六）を征服した。

他方、一九五六年にはテレイのフランス隊がブランカの鋭峰チャクラフ（六一一三）と岩と氷の城砦タウリラフ（五八三〇）の登頂に成功した。その後テレイは、オランダ隊を率いてビルカバンバに入り、有名なインカの遺跡マチュ・ピチュに近いベロニカ（五七五〇）とウマンタイ（五七八〇）を物にした。

一九五七年、ドイツのグンター・ハウザーの一行は、アルパマヨの最高峰を初登頂した後、ビルカノータ山群に足を伸ばし、残された未登峰の殆どを登った。同年、英国のケンブリッジの学生チームが、ビルカバンバの知られざる山、プマシーヨ山塊を探り、その最高峰プマシーヨ（六〇七〇）を登った。

この間までに、ビルカバンバの奥地や、カラバヤ山群、他のマイナーグループを除いては、ペルーアンデスの未知の地域は急速に開拓された。記録に残るような規模の大きいクライムや踏査活動は、殆どがブランカ、ワイワッシュ山群程麗峰には恵まれていない山群も、一部の登山家によって地味に登られていた。

即ち、一九五六年、ジョージ・バンデ・ビウダ・グループ、一九五八年、ギリオーネが登ったラソンタ（五八〇〇）を盟主とする中央アンデスのワガルンチョ・グループなど、世界の登山界から脚光を浴びるワイタパヤナ・グループなど、世界を持った登ってみたい山ことはなかったにしても、それぞれ個々である。

一九五九年には、関学の竹田隊がビルカノータ山群に入り、アウサンガテ南峰（六二〇〇）に登り、日本人として初の足跡を印したのは御承知の通りである。

以後、ブランカ山群及びワイワッシュ山群を訪れた遠征隊は、一九六一年一橋隊のプカヒルカ北峯（六〇五〇）、イタリア隊のプカヒルカ中央峯（六〇〇〇）、一九六二年フランス隊の危険以外の何ものでもないといわれたチャクラフ東峯（六〇〇〇）、一九六三年トゥルパラフ（五七八一）等である。ワイワッシュでは一九六一年英国隊のカリニセロ（五九八二）、ボナッチーのイタリア隊がロンドイ（五八八九）等々を登った。

一方、ビルカバンバとビルカノータ、ビルカバンバに限られていた訳だが、これらの山群程麗峰には恵まれていた。

即ち、一九五六年、ジョージ・バンデ・ビウダ・グループ、一九五八年、ギリオーネが登ったラソンタ（六〇〇）を盟主とする中央アンデスのワガルンチョ・グループなど、世界の登山界から脚光を浴びるワイタパヤナ・グループなど、世界を持った登ってみたい山ことはなかったにしても、それぞれ個々である。

一九五九年には、関学の竹田隊がビルカノータ山群に入り、アウサンガテ南峰（六二〇〇）に登り、日本人として初の足跡を印したのは御承知の通りである。

以後、ブランカ山群及びワイワッシュ山群を訪れた遠征隊は、主なものを拾ってみると、ブランカでは、一九五八年ドイツ隊のアグハネバダ（五八八六）、一九六〇年ニュージーランド隊の尖峯カエッシュ（五七二一）、一九六一年一橋隊のプカヒルカ北峯（六〇五〇）、イタリア隊のプカヒルカ中央峯（六〇〇〇）、一九六二年フランス隊の危険以外の何ものでもないといわれたチャクラフ東峯（六〇〇〇）、一九六三年トゥルパラフ（五七八一）等である。ワイワッシュでは一九六一年英国隊のカリニセロ（五九八二）、ボナッチーのイタリア隊がロンドイ（五八八九）等々を登った。

一方、ビルカバンバとビルカノータ、ビルカバンバに限られていた訳だが、これらの山群も、一部の登山家によって地味に登られ

ビルカバンバ最後の大物を落した。
ビルカノータでは一九六一年、スペイン隊がアヤカチ・グループの大半のピークを、関学隊がカィヤンガテ三峯（五九六九）二峯（五九三一）の初登頂をした。
カラバヤ山群には一九六〇年、英国のオックスフォード隊が入り、アリンカパック・グループを中心に開拓に終止符を打った。そして最後に、ボリビアとの国境にまたがるアポロバンバ山群は、一九五七年のドイツ隊、一九五八年のイタリア隊、一九五九年の英国隊、そして一九六一年の一橋隊によってその全貌が明らかにされ、主なピークの登頂がなされたのである。

アンディニストとアンデス

こうして各国から訪れた登山隊の性格が、アンデスを舞台にした場合、如実に表現されているのは面白い現象である。遠征とはいえ割合気軽に僅かの費用で来られるので、国家的な、或いは山岳会の名誉を背負うような壮挙ではなく、アンデスを楽しむために訪れるグループが多い。そのため大義名分にしばられた画一的なものでなく、グループの個性なり国民性を反映した山登りになる。
アメリカ隊は、勿論未踏峯も狙うが、アルプスでも行くような気分で、たとえ初登頂でなくとも繰返し登り、自由に休暇を利用している感じである。従って地域も交通に便利なブランカ山群が殆んどである。
ドイツは確固とした組織のもとに、科学調査を含めた統率的かつ精力的な活動が目につく。英国隊は若いアドベンチャーの精神に燃えた大学生達が、残り少ない未踏査の地域を求めて南米に渡り、地道な活動を行ったケースが多く、英国の伝統的なパイオニア精神を感じさせる。
フランスは、テレイ等のクライマーが、ジャーナリスティックにマークされるような難峯を、彼等の洗錬された高度の技術をもってさらっていくような、派手な登山が印象的で、ペルーアンデスの探査的な活動には殆んど貢献していない。
イタリヤも移民で関係深い南米のこと故、イタリヤ山岳会の支部単位の遠征隊が活躍しているが、どうも自己顕示型が多く、地名もいたずらにイタリヤ名を付けてしまうのには辟易させられる。その他、スイス、ニュージーランド、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ等からも訪れ、年々にぎやかになってきている。これに対し、地元ペルー山岳会の活動も、ささやかではあるが、行われている。しかし登山人口は非常に少なく、その上ラテン特有の形式主義が支配的で、実際の登山活動は二の次になりがちである。
高処ポーターについては、勿論シェルパ程の歴史と実力は持っていないが、戦後幾度か訪れた遠征隊の需要を満すためか、ここ十年いらいの間にある程度、副業としてではあるが、養成されてきている。数は少いがアンヘレス兄弟のように技術も相当しっかりしている者も現われている。彼らは遠征隊のキャラバンのリードや料理等の雑務に結構慣れていて、遠征隊から引張りだこになっている。底抜けに陽気で、くったくがなく、そのくせ少々照れ

屋で欲張りな彼等は、一緒にテント生活をするには、まったく愉快な仲間である。登頂に成功し、一夜キャンプファイアーを囲んで祝杯をあげた時、エミリオ・アンヘレス達は、酒の勢いも手伝って、

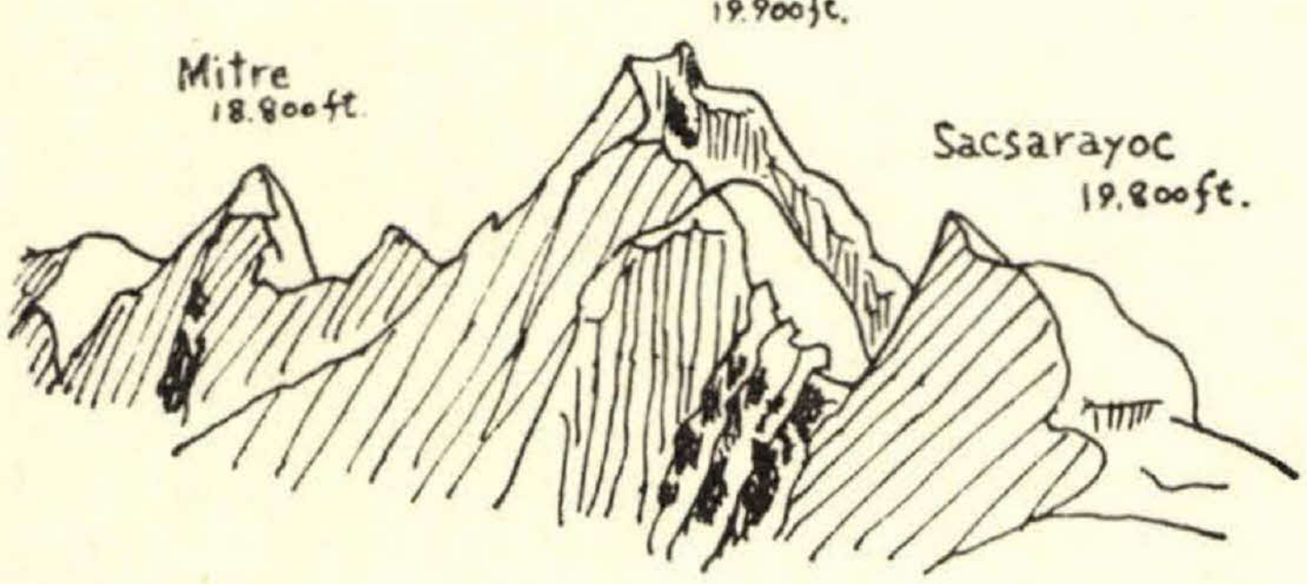
「ヴィーバ（万才）日本隊！」

「ヴィーバ、プカヒルカ登頂！」

を繰返し、涙を流さんばかりに喜んでくれたものだった。

日本からはボリビヤのコルディエラ・レアルを含めて、一九六四年までに既に六つのパーティーが訪れて、日本の登山家にとってもアンデスは身近な存在になってきた。しかし何か通り一辺の記録しか残していないのはさびしい。それに、アンデスの個性はヒマラヤへの前段階的なトレーニングのゲレンデとして考えるには惜しい。

今では未踏の山はなくなったとは云え、アンデスの持つ魅力はいささかも失われた訳ではない。日本の山がヒマラヤへの訓練場ではなく、それ自体立派に心ある登山家の心を満たしてくれるのと同じように、アンディニスト にとっては、アンデスもまたかけ替えのない個性をもっているのである。



アンデスの農村を訪ねて

プロローグ

倉知敬

我々の遠征の基となった「アンデス登山探検計画書」なるものを見ると、その中の「目的」という項に、①未登峰の登頂、②未探検地域の調査、③経済地理学的調査、と書いてある。

①と②については、前の方を見ていただければ判るように、プカヒルカを初めとする未登峰の登頂と共に、ププヤという未探検地域を踏査してほぼその全貌を明らかにすることが出来た。そして③についても、これから述べる様なことをやったのであるが、その題目が他と比べて極めて広範にわたるものだけに、仲々難しい課題だった。

未踏の地を足にまかせて探るといった、いわば単純な作業と違って、人間の社会を探るこうした調査は、対象への深い理解と、そこから生じる自分の課題をよくわきまえていないと、何事もなし得ないものである。それだけに一層面白いものだが、少くとも易しいことではない。

南米という自然的歴史的な背景を持つこの地域で、経済のありかた方を見学するにあたって僕等が視点を置いたのは、一つには、これを世界の後進地域たらしめている一つの大きな原因である所の土地と人の関係――土地所有と社会組織の問題であり、更には、その中から生まれるべき土着勢力の下からの動き、という二つの点であった。

ところが、僕等にとって致命的だったのは、実際に与えられた条件が極めて限られたものだったことだ。そのため、正しく「調査」と云える程の集中的な研究をする余裕は持てず、逆に、広く見て歩く乃至は調べて歩くといった、いうなれば「何でも見てやろう」（往きの船の中で小田実著のこの本は僕等の愛読の書だった）式の、分散的なやり方を採る方が賢明だった。

それは調査よりむしろ一種の探検であり、経済より広く社会一般が対象だった。「探検」は現在ではもう単に発見するためのものではなく、地域の内容を探りその目的とする課題を追求するより高次なものになったと云われるが、それ以前の段階の、素材を蓄積し課題を生み出さんとする探検も欠かすことの出来ないものと云えよう。大体、いきなり現地へ行って短期間の調査で或るヴィジョンの下に打ち立てた仮説を証明するなどという高度のことをしようというのは、そもそもおこがましい思い上りだろう。

そんな訳で、僕等は何も今回で何か完結した一つの体系を創りだそうなどという大それたことは考えてなかった。それよりも、今後とも行なわれるであろう、こうした遠征にあって、我々学生が為すべき調査乃至は探検の方法論的なアプローチを試みるのだと思っていた。ともかく、これは何より長い時間と多くの同志が、そしてなかんずくそれを可能にする「組織」が必要だった。

大学四年間の生活はやりたいことが一杯あって案外いそがしい生活だが、ただ教養や理論に拘泥する愚はさけ、たとえ留年する

位は覚悟で、一年間位はこうした実証的な態度を持ってフィールドワークに専念する機会を持ちたいものだ。それには何より「組織」というバックが必要であるが、それ位のエネルギーは、うまく育てれば今の山岳部に生まれてくるに違いない。学問と岳道の統一化はいつも我々の夢だったのではないか。半恒久的に学究的な目的を兼ねた大規模な「避地合宿」の流れを持つことこそ、理想である。

毎年入部する人数がへるという事実も前向きに考えれば、十年一日のごとく同じことを繰り返している発展性の無さに誰も魅力を感じなくなったからなのであって、今や壁にぶつかっている山岳部が考えなければならないことは、今の時点に立って大学生がやるべきことは何か、という歴史的な反省である。

さて、いささか話はそれたが、今回僕等がやったのは、中島が後述するペルー海岸地方の大プランテーションの調査と、僕の方の山岳地方の古いラティフンディオの調査だった。僕の方は、短い期間にあまりにも異る多くのものを見たので、どうもその各々の正確な位置づけをするに困惑した。それでも参考文献を頼りに一応は何とかまとまったものにして、卒業論文という形で仕上げたが、どうも単に素材の羅列というだけに終ってしまってはなはだ自信がない。それを与えられた枚数にまとめろというのは、話が多岐にわたるだけに至難の業でもあり、また同じ様な繰返しも面白くないので、思いきってここではルポの形にして大分省略させてもらった。この本の読者の層を考えると、かえってその方がよいかも知れぬ。もし幸いにしてこれに多大なる興味を感じ、より深く知りたいという人があったならば、どうかその別稿を見ていただきたい。そして、共に問題をもっとつきつめて行き、第二第三のより本格的な調査の為の遠征を試みたいと思う次第である。

アシェンダ・コルカス

山登りが終った後、僕等に残された期間はわずか一ヵ月足らずしかなかった。気分は重いが、ともかく、許された一ヵ月に、僕は出来るだけ農村の実態を見て歩くことにした。後進国に一般的な二重構造――輸出を目当てにした外国資本のプランテーションと土着民族の原始的な食糧生産のための農耕――にあって、国民経済の正常な発展の為には後者の進歩が、すなわち食糧の自給が不可欠である、というテーマがある。農村の社会経済的な実態を知るということは、こうした後進国を理解するのに何より必要なことであろう。

一ヵ月の調査旅行は、二回に分けてペルーの北部と中央部の山間の村を訪れた。最初は北へ、砂糖工場を見に行く中島たちと途中まで一緒に行き、途中（カスマ）で別れ一人再びワイラス渓谷へ入りアシェンダ・コルカスとカラスの農村およびヴィコスのコムニダを見て回った。次には、今度は中島たちと一緒に中央山地のワンカィヨやハウハをめぐった。ここで僕の関心をそそったのはムキヤウヨのコムニダだった。その後、リマ周辺の農場も見ることが出来た。

さて、最初はアシェンダ・コルカスである。アシェンダとは、普通スペイン系の金持の所有する巨大な農地のことであり、その

中に、経済的にも身分的にも領主に拘束された貧しいインディオが住み込んで、農耕牧畜に従事している。だが一口にアシェンダといっても、いろいろな形があって一様ではない。巨大な農地といっても、単に畑だけ持っているものもあり、又このコルカスのように、森あり草原あり山ありで、アルパマヨやサンタ・クルスの六千米峰も領地の内にあるというバカでかいのもある。コルカスの領地はサンタ河の右岸から実にプカヒルカの主稜線あたりまでで、公称三五〇〇〇粁、その向うにあるアシェンダ・ヴィニアウアと境を接している。このヴィニアウアはプカヒルカを終えたあと、中島達が少し調べている。

一方、そこに従属している農民も、ひどく封建的な拘束を受けているものから、単に労働者として、賃金契約によって働いているのもある。地方によってこの農民はコロノとかペオン、ヤナコーナ等と様々に呼ばれている。とにかく、このようにアシェンダというのは一様でないのだ。

さて、コルカスの所有者はE・R・ロマーニャという男でリマに住んでいる。このアシェンダを訪れる羽目になったのは、彼を知っている在留邦人が居て、その人に連れられて彼の家を訪ね、見学を承諾してもらったからだ。でっぷり太った栄養満点の彼氏は心よく僕らを迎え、早速電信で（私設の無線設備がある）アシェンダに連絡してくれた。そして、一〇年程前彼のアシェンダからアルパマヨに出かけていった、フランス・ベルギー隊の話などを聞かしてくれた。又、今自分の所は資本と優秀な農業技術を必要としているが、それをぜひ日本から得たい、と言い出し、どうにかなりませんか、などと頼まれて何とも面はゆい思いをした。

あとで知ったが、フランス隊の本などで読んでロマンチックな想像をしていたこのコルカスは、今はロマーニャ氏が弱音をはくだけあって経営状態は良くなく、殆ど新規の資本投下はされず、荒れ放題のままだった。大体、大きなアシェンダの領主などは、貧乏な日本人には想像も出来ぬ程の大金持で、普通ヨーロッパやアメリカの大都市に住んでいるのが通例なのに、彼氏はリマのあまり大きくない家に住んで居るのだから、彼の言い分もある程度真面目なのかも知れない。

ワラスで、ブラブラして居たエミリオを引張り出し、彼を案内に勇躍アシェンダ・コルカスを訪れたが、屋敷には彼と会計のじいさんしか居ないらしく、ひっくれたが、貧相な管理人が歓迎してしてできたない所だった。陽の光ばかりがキラキラと輝いていた。そり閉としていた。農地は大麦の刈りとりが終ったあとだが、広い畑には殆ど人影が見えない。家のカベは欠け、ほこりは積り放題に怒った。またこの広い地域に住んでいるのはたったの四〇〇人余り、一二〇家族だそうだ。いくら山地とはいえ、その少ないのには驚いた。

管理人にアシェンダの土地や人間に関する細かい数字を聞き、現在の経営状態など調べてみた。彼はちゃんとしたノートを出して来て、これを見よ、この通り今月は赤字だ、と顔を赤くして僕

元来、昔この新大陸へやって来たスペイン人は主に下層階級の人々だった。彼等は新大陸に来て独立小農民になろうとしたのではなく、ここに地位や権威を求めて来たのだ。だから権威の象徴として大土地所有者を目指したのであり、土地などその用益的価値よりも権威の象徴としての意味の方が大きかったのだ。その好

例が今も尚この山奥に残っていた。赤字に悩むロマーニャ氏は、さりとて新規に事を起す気力も欲もあまりなく、権威の象徴として土地をもったいなくとも遊ばせているという訳である。

アシェンダ・コルカスは谷から山に向かって何段かの階段状の土地を持って居る。上の方では牛と羊の放牧がおこなわれ、アルファルファが一面緑のジュウタンをしきつめていた。真中にある小屋には別の若い管理人が居て、牛乳からバターを作る作業を監督していた。ここで作ったバターと肉用の牛や羊を売って得るものが、このアシェンダ唯一の収入である。

周囲にはコロノ達の家が散在している。彼等は一ヘクタール程の土地を与えられ、邦貨にしてたった三〇〇円位の月給をもらう代りに、一ヵ月の内三週間はアシェンダの農地や牧場で働かねばならない。小柄でいかにも活気のない風体の彼等は、浮かぬ顔をして牛の間で働いていた。彼等の家の方を訪れると、数人が一枚の畑を、短いクワで耕していた。聞くと、順番に労務提供をして働き合い、今イモを作っている所だという。いろいろ根掘り葉掘り聞き出した所、賦役のない暇な時には付近の町カラスへ行って働かないととても食っていけないとか、一旦病気になるともうお互の助け合いがあるし、特別の飢饉でもない限り、だまって領主の言いなりになっていれば何とか生きて行けぬことはない。いわゆるサラリーマン根性である。（もっとも、輝く太陽と新鮮な空気にめぐまれた点では下手なサラリーマンよりよっぽど幸福だ。）

事実、見方によればアシェンダの暮しは一種の生活保障であるとも言える。貧しいが少くとも先祖代々知り合った縁者のお互の助け合いがあるし、特別の飢饉でもない限り、だまって領主の言いなりになっていれば何とか生きて行けぬことはない。いわゆるサラリーマン根性である。（もっとも、輝く太陽と新鮮な空気にめぐまれた点では下手なサラリーマンよりよっぽど幸福だ。）

まことに可哀そうな彼等の生活だが、これから逃げ出そうという気をおこさないのは、外の生活がこれ以上に苦しいからという理由なのだろうか。古来アンデスの民は、インカ帝国以来、「アイユウ」という社会的集団を基礎的よりどころとして、山岳地の制限された土地から最大の生産をあげるべく集産的な組織を創り上げた。そして、その依存する組織の中に自己の安全と保障を求め、土地に結びついた暮しをして来た。土地に生活の安定を求める彼等のこうした歴史的生活意識が、彼等をこんな退屈なみじめな生活に沈澱させて居るのだろうか。

いや、退屈だとかみじめだという概念は彼等の思考の中には現れすらしないのかも知れない。外界の事情を殆ど知らず疑うことを知らないなら、いまの生活が全てで、それ以外のものは念頭に入り得ないだろう。それをうなずかせるような、素朴で空ろな表情を彼等の顔に見ることができる。

だが、少くとも今は、海岸地方に出て大プランテーションの中で賃金労働者になれることは大体知っているだろうし、実際に出て行く者も他の地方では多い。しかしそれは殆ど季節的な出稼ぎである。結局の所、彼等をして労働者になるのを逡巡せしめるのは、それが確実な生活の安定を保障してくれないことであり、土地に密着して生きることの安定性、土地への執念といったものを捨てきれないことにあるのだと思う。

事実、見方によればアシェンダの暮しは一種の生活保障であるとも言える。貧しいが少くとも先祖代々知り合った縁者のお互の助け合いがあるし、特別の飢饉でもない限り、だまって領主の言いなりになっていれば何とか生きて行けぬことはない。いわゆるサラリーマン根性である。（もっとも、輝く太陽と新鮮な空気にめぐまれた点では下手なサラリーマンよりよっぽど幸福だ。）

だが問題は人間らしく生きられるかどうか、ということだ。現状のみじめさの何たるかを知って、彼等が何んとかせにゃならん、という問題意識を持つ時、ペルーは後進国から脱皮する第一歩を踏み出すであろう。近代化にはいくら外資を導入しても、底辺の自

覚、民族意識の発露がなくては駄目だ。それにはまずコロノ達の教育、これが必要であろう。

さて、これはここでは余計なことだが、見学が終った後一日暇をとって、アシェンダで馬を借り、エミリオを連れて、アルパマヨを見に裏山へ登った。クリコチャ湖まで馬の背にゆられ、その後横手の岩山に攀じ登った。大きな岩の重なったような変った山だった。頂上から目の前にサンタ・クルスが大きく見えたが、アルパマヨは雲にかくれ駄目だった。この山、高度にしたら五〇〇〇米以上あろう、他に誰もこんな所に登りにくる用はなかっただろうから、多分これは初登頂にちがいない。だからあえて述べさせてもらった次第。

アシェンダ・サンミゲル

アシェンダ・コルカスに別れをつげてから、僕はその付近の町カラスに立寄り、何かコルカスと比較して見ることの出来るものを探した。ところが丁度おあつらえ向きなのがすぐ郊外にあることを知って、早速訪ねてみた。

それは、リマ向けのナランハ（オレンジ）を大量生産している、近代化された形のアシェンダだった。その名をサン・ミゲルといい、海岸地方にもナランハの大プランテーションを所有している大金持、エリサルデ兄弟の所有するものである。管理人はハリウッドの性格俳優のようないかつい顔をした大男だったが、僕が日本人だと知ってオオ、ハポネス、よく来た、と大そう愛想よい。この理由はあとで判ったのだが、このカラスの郊外に一人だけ古くから住み込んでいる日本人が居て、彼はその親友だったのだ。丸野松蔵さんというこの同胞に、僕はその後会いに行ったが、（そのことは後でふれる。）彼はこの付近では、その誠実で勤勉な人格ゆえにとても尊敬されていた。

さて、アシェンダ・サンミゲルは、管理人の話によると、かのエリサルデ兄弟が、自分の領地のナランハの不作だった時に、これではいかん、というので、遠くこの山の中に土地を求め、一九五五年から徐々に河岸の肥沃な土地を買い占めて、現在の約三〇〇ヘクタールの農園をつくったことだ。そして、トラクターや発電機を使い化学肥料を施してナランハの単一栽培をし、専用のトラックではるばるコノコチャ峠を越えてリマへ出荷している。

使っている労働者は一〇〇人余りで、その内四〇人はアシェンダ内に家と一枚の畑を与えられ住み込んでいるコロノである。彼等のための学校や教会もあって、管理人は、何と厚生施設の整ってること、すごいだろうと、いばっていた。のこりの六〇余人は外からの季節労働者で、いわば日雇い、付近の貧しい農民が多いとのことである。彼等は何ら身分の拘束を持たない完全な労働者で日給二〇〇円位だという。これだとコルカスから出て来て三日も働けば、連中はあとは遊んでくらせる勘定になるが、どうも考えてみるに、コルカスのような古いアシェンダの賃金は、ほんの名目的なものに過ぎないらしい。

ともかく、僕は彼等がナランハをもいだり、化学薬品を散布したりしているのを見せてもらい、また彼等の家というのも中まで入って見学して来た。たしかに、このカラスの郊外に一人だ

うすだ。あまり時間がなくて、くわしいことは見たり聞いたりできなかったが、あんまり離れていない所にこれだけ異質なものが存在しているのは不思議な気がした。

思うに、サンミゲルはまだ出来たのは新らしいし、こうした営利的な資本の利潤追求の原則が支配している所は山岳地方ではごく珍らしいことだからなのだろう。アシェンダ、ということばの中には、古い歴史をもつ由緒ある農園という意味があるので、サンミゲルのような新らしいのは、もうアシェンダの範疇には入らないのかも知れない。だが、このような形のものが身近かに存在すれば、周囲の古式豊かな農村も少なからぬ影響を受けるだろうし、又、そうでなくても外からの刺激は時代を経る程強くなるし、一方絶えざる農村人口増加の明確な傾向もあって、食糧増加のための生産力増強の変革手段はいやおうなしに浸透していくだろう。その意味でサンミゲルなど一つの面白いモデルだと云えよう。

丸野さんを訪ねる

もう一人居た日本人も去年死んでしまって、今は全く一人だけなのだが、彼はマヌエル・アルテアガというこちら式の名前を持ち、インディオの妻と子供と一緒に、泰然と腰を落ち着けて土地の人になり切って居る。流石に淋しそうな影があるけれども、今はもう淡々と生きているといった感じだ。遠くから日本人が来たからといって手離しで喜び迎える風もなく、かといって別に僕の訪問を迷惑がってる様子もなかった。

話を聞いてみると、やはり昔は相当苦労をしたそうだが、今では努力の結果、暮し向きも良くなって、約一二ヘクタールの土地を持ち、八人の助手を使ってトウモロコシやアルファルファを作っているのだそうだ。また、彼は完全な自作農であるばかりでなく、近所の農民達の技術面の指導者でもありインディオの良い意味でのボスであった。聞くと、生活の面でもイ

のような小農（リンコナダと呼んでいた）が多勢居り、彼の計算ではカラスの周囲にはこうしたリンコナダが約八〇〇〇人程は居るだろうということだ。その殆ど、七割位は約一、二㌶位の土地しか持たず、彼のように一〇㌶以上も持つのは少ないとのこと。真面目に働いてもうければ一〇㌶位の土地は持てるのに、皆一生懸命に働こうとはしない、二㌶ではやっと食うや食わずで、時々は外へ働きに出なくてはならないのだ。

カラスのようなかなり交通の便の良い開けた所に、アシェンダに組み入れられていない農民がこれだけ多く居る、というのは少し予想外のことだったが、彼等は丸野さんのように全く独立した小農民という訳ではなく、「コムニダ」という昔からの古い彼等の共同体の中に一種の原始共産制の下に暮しているのだった。

その後、僕は管理人に勧められるままに、車で一時間位行った所に住む丸野さんを訪ねた。とうもろこしの畑にかこまれた小じんまりした家がそうだった。丸野さんは、目の細いいかにも穏和な感じの、小柄な老人だった。顔色こそツヤツヤしていたけれど、額には深いしわがより口元はきっとしまって、長い間の苦労を物語っていた。話し合っていた二時間位の間中、確か一度も笑顔を見せなかった。

昔、インカ帝国の興る以前から、血縁的なつながりを通して出来上った生活共同体である「アイユウ」という社会組織があったが、それがインカ帝国の統治の下にその精巧な行政組織に組み込まれ、末端の行政単位とされることによって、一つの土地共有性と集団労働をたてまえにした自治的団体に形造られ、今「コムニダ」と呼ばれているものの基をつくったのだ。それが、インカ帝国以後、スペインの植民地支配の下にあって、大抵の「アイユウ」はスペイン人の土地囲い込みに人間もろとも押し込められて、土地を奪われ強制労働に刈り出され惨々な目にあった。インカ帝国は絶対主義に貫かれていたが、同時に計画経済と社会保障の完備した社会主義国家でもあった。「アイユウ」は支配の単位とされたけれど、中での自治が保障され国家からその生活を保障されて、安心して共同作業による生産をして居れた。それを、新来のスペイン人達はそのまま搾取の単位に切り換えて、さんざん働かせたけれども、代りに何を与えるというものもなかったのだ。

従順なインディオ達は、だからといってどうする訳にもいかず、ただわずかに持つことを許された辺境の土地にすがりついて、昔ながらのやり方で土を耕しては細々と生きて来たのだった。山の奥の方の交通の便の悪い、又地味の悪い土地などでは、殆ど昔と変わらぬ「アイユウ」の生活が繰り返されている所が多いようだ。だが、交通が開け、外との接触が多くなるにつれ、又一方では絶えざる人口増加の圧力のため、昔ながらの共同体を維持出来なくなって、外界へ流れて出る者も多く、又生産力を増加させるための何らかの手段を講じなければならない羽目におち入っている。

コムニダ・ヴィコス

こうした新しい局面にあって、それに積極的に対応して新しい行き方を進んでいる特異な「コムニダ」の例を、僕は二つ見ることが出来た。それは一つは、このワイラス渓谷の中にあるヴィコスであり、もう一つは第二回目の旅行で訪れたムキヤウヨであった。

コムニダ・ヴィコスは、やはりコルディエラ・ブランカの山麓にあって、元はワラスの教会の所有になるアシェンダの土地だったのだが、これを労働省の肝入りでコムニダに長期延べ払いでゆずり渡すことになり、その後労働省の指導の下に計画的な生産活動が行なわれている。土地は約八〇〇〇ヘクタール位で、この価が約二千万円、内半分を政府が払い、のこりを無利子二〇年払いで働いて返すのだそうだ。

このコムニダは政府の試験用の特異な一例で一般的でないが、ペルーにはかなり強い勢力を持つ野党があって、キューバのような革命を恐れる政府はこういう近代化もしぶしぶながらやり出しているのである。

ヴィコスで、実際の指導に当っているヴァスケスという学者に会い、又アメリカから研究にやって来たという学生などにも少し顔を合わせたが、殆ど話をする機会はなかった。エミリオを通訳に、二人でコムニダの中を少し歩いてみたが、インディオ達の家は他と同じように汚く貧しかった。暮しはどうかね、と会う者ごとに尋ねてみると、みんな浮かぬ顔して、苦しいと答えた。時々

町へ働きに出ている、と云う者も多かった。ある奴のごときは、質問をすると、手を出して、いくらかくれれば答えてやる、と云うので驚いた。何がしかを与えてもらったが、その時何をどう答えたかは忘れた。

あまりにも急速な変化であり、又あまりにも無知であるために、今自分の回りに起っていることの意味の重大さを認識し得ない、ということは、何時か致命的な欠陥として表われてくるに違いない。ヴィコスが他の多くのインディオを目ざめさせ、彼等を起ち上らせるのは、まだ遠い先のことかも知れない。

コムニダ・ムキヤウヨ

ところが、これとは全く別のやり方で発生した新しい「コムニダ」が、ペルー中央部の高原にあるとになった。こんどは中島、中川と僕の三人で、中央部の旅行の途中、その「コムニダ」、ムキヤウヨへ立寄った。

ハウハの町の在留邦人に連られて、まずその村の広場にある事務所みたいな所を尋ねた。ちゃんとした洋服を着た婦人が居て、それなら、畑などを見て歩いてもつまらんだろうから、学校へ行って先生にあってくれ、というので、我々はゾロゾロと小学校へ行った。

一〇位の教室を持つ小じんまりした学校でコムニダ経営のものだそうだ。丁度授業中の一年生の授業を参観してから（考えてみたら参観するというのは生まれて始めての経験だった。）校長先生たちと少し話をした。話をしたといっても、主に先方が、いかに我がコムニダが出来たか、というような質問をするのを、いささかあっけにとられた感じで半分判らぬまま、こちらが聞き入っているというようだった。

流石に先生だけあって、問題意識だけはっきりつかんでいるちがうとはいえ、その態度や意識の大しかた違い方に驚かされた。先生達は皆ここ育ちのインディオか混血（メスティソという）で、故郷へ帰って来たインテリである。コムニダ・ムキヤウヨが都市へ出て働きながら色々社会勉強をして近代化した他に卒先して近代化したのインテリだった。

ムキヤウヨはかなり前から、その革新的なやり方故に、世に広く知られていて、数年前にはアメリカの社会学者が一年ばかり住み込んで研究したことがある。一日ばかりの見学では大したことも判らなかったので、その後その学者アダムスの書いた報告書を読んで、ムキヤウヨの成り立ちを調べてみた。詳しい内容は省略するが、その巻頭に「ムキヤウヨの共同体組織が注目すべき重要な意味を持つのは、それが古いインカの共同体（アイユウのこと）を存続させているからではなく、ペルー中、いやラテンアメリカの歴史上初めて、その成員の要求にそうように自ら計画し管理する政治的組織を持ったからである。」と、いみじくもその歴史的意義を指摘していることを報告しておこう。

このコムニダの基もやはり「アイユウ」ではあるが、ヴィコスの場合などと違って、バラバラに分散していたのを一ヵ所に集めて上からの行政組織と政策的に合致させた、レドクシオンという制度の下に組織化されたものだった。それがムキヤウヨでは、単

に強制労働や課税のために出来たこの組織を、たまたま隣り村に政府の役人が居ていじめる所から、貧乏なインディオも、彼等のボスのメスティソもまとまって反発して、自治的な組織をつくりあげ、下から行政組織をつくりかえたという特殊な事情があった。アダムスの本を読むと、こうした自治的な組織の形成は別に長期的なヴィジョンをもってやったものではなく、一つ一つのコムニダの問題を解釈していこうとしている内に徐々に創り出されて来たものだということが詳しく述べてある。せまりくる人口増加と土地不足という内部条件と、それを解釈するために余儀なく接触した外部社会との交渉の結果、漸進的に情況適合のための方式を求めてなされた変革だったのだ。

こうした諸々の動きのイシニアチブをとって、全体をリードしていったのは、コムニダの人口増から外へ押し出された若い者達であり、外で新しい意識を吹き込まれ、戻って来た連中であった。彼等はそれと共に、経済的にも外で儲けた金を村に環元して、大いにコムニダをうるおす結果にもなった。ムキヤウヨの近くには世界的に有名なセロ・デ・パスコという鉱山があり、そこで働き口はいくらでも見付かったのだ。

コムニダの住民の殆ど全員がその広さは一様でないが土地を持っている。だがそれは一家族当り平均一㌶余りと、やはり他と同じように貧しく、住民が外へ働きに出なくてはならないのは決定的な運命だった。住民の間を結びつけているのは、お互の共同労働であり、またコムニダとして為す共同体維持のための活動、例えば共有地の耕作、道路とか提防の保全、であり、コムニダに課せられる税・賦役の実施である。それに加えて、ここでは他に見出来た。だが、よく理解するためにはまだ見るべきものも多

エピローグ

短い期間だったが、それでも大分いろなものを見ることが

いだろうし、見たものの一つ一つの意味を知るためにはもっとそれを深く知らなければならない。

古い歴史を持つアンデスの住民の社会は、わずかな見聞のみでは殆ど理解し得ない程深く複雑なものだ。

彼等の、素朴だが悲しい運命に縛られた生活には、見る者の心をとらえ離さないものがある。高原と谷間の生活の場としての「アンデス」、人間と共に、今後とも僕の興味あるテーマとなろう。

＜ペルーの経済・社会に関する参考文献＞

R. N. Adams: A community in the Andes——Problems and progress in Muquiyauyo. 1959, Seattle

T. R. Ford: Man and Land in Perú. 1955, Gainesvilie.

National Planning Association: Casa Grace in Peru. 1945, Lima.

U. S. Depertment of Commerce: Basic Data on the Economy of Peru. 1960.

U. S. Depertment of Commerce: Investment in Peru. 1957.

J. C. Mariategui: 7 Ensayos de Interpretacion de la Realidad Peruana. 1958, Lima.

V. Roel Pineda: La Economia Agraria Peruana. 1961, Lima.

Banco Central de Reserva del Perú: Actividades Productivas del Perú. 1961, Lima.

Banco Central de Reserva del Perú: Renta National del Perú. 1960, Lima.

C. A. Reinaga: La Fisonomia Economica del Perú. 1957, Cuzco.

Peruvian Times : Vol. 21. No. 1092. Nov. 17. 1961

Comision Para la Reforma Agraria y la Vivienda : La Reforma Agraria en el Peru. 1960, Lima

M. C. Vasquez : Hacienda, Peonaje y Servidumbre en los Andes Peruanos. 1961. Lima

W. W. Stein : Hualcan—Life in the Highlands of Peru, 1961. New York.

ピエール・ショーニュ，大島正訳：ラテン・アメリカ史　白水社

泉　靖一：インカ帝国　岩波書店

寺田和夫：アンデス教養旅行　東京大学出版会

海岸地帯のアシェンダとインディオ

――グレース商会の砂糖農場を中心として――

中島　寛

山岳地帯の幾つかの農場をまわって、我々はスペイン植民地時代の形骸たる大土地所有制、封建的生産関係の一端に触れることができた。またそこには、インカ帝国時代の土地制度を受け継いだコムニダ・インディヘナ（インディオ共有地）が歴史的変化をとげながらも今日まで生き続け、生れ変ろうとしていた。しかし、そのいずれもが、いわば歴史の発展からとり残されて、澱み、ペルーの経済社会の底辺に重く停滞している姿であった。

一方、海岸地帯では主に輸出向農産物である綿花と砂糖キビが、機械化された大農場で生産されている。また、殊に砂糖農場では、外国資本の手になるプランテーション的な農場が全体をリードしている。

幸い、我々は、グレース商会の御好意で、一週間にわたって、その二つの砂糖農場を見学させていただいた。不充分だらけだが、ここで、㈠海岸地帯におけるアシェンダの性格、㈡アシェンダにおける労働問題とインディオ、㈢外国企業のペルーでの位置、の三つの問題を中心に、その概要を報告したい。

Ⅰ　ペルーにおける製糖業とグレース商会

ケーン・ベルト

ペルーの海岸地帯は太平洋岸を北上するフンボルト海流の影響を受けて、一年中あまり変化のない温暖な気候が続き、晴天日数も多い。この自然条件が、砂糖キビ栽培にとってこの上ない好適な条件を提供している。

ただ、砂糖キビ耕作には豊富な水が必要である。しかし、海岸地帯は一年中ほとんど降雨がないので、砂糖キビ耕地は灌漑によって水が十分供給される地帯に限られる。これは、砂糖キビだけではなく、綿花、米等ペルーにおける海岸地帯の農業全般に共通する最大の条件である。

海岸地帯はほとんど砂漠で、結局アンデスの雪どけ水に源を発する約三〇の河川の流域に農耕地は集中しているのだ。ペルーの海岸線は約二七〇〇㌔だから、ペルーを縦断しているパン・アメリカン・ハイウェイを走ると平均して九〇㌔に一耕作地帯があり（同時に集落も）、その間は砂漠という勘定になる。事実、海岸地帯の全面積は一四五、〇〇〇平方㌔で、そのうち耕作面積は五、二〇五平方㌔だから、もっとも開発の進んでいる海岸地帯でも耕作面積の割合はたった三・五％にすぎないのである。ちなみにペルー全体の耕作面積の割合は一・四％である。

これら海岸地帯の耕作面積のうち約六〇％が輸出向の綿花と砂

糖キビの農場にあてられていて、そのほとんどが幾つかの大アシェンダに占められている。その内特に砂糖キビの農場は、トルヒーヨの北にある幾つかの河川の流域に集中していて、この地帯の約一五の農場だけで実に砂糖キビ耕地面積の八〇%を占めているのだ。

その中でも、チカマ川流域はペルー最大の耕作地帯であるばかりでなく、ペルーの中でもっとも土地所有の集中化が進んだ地帯である。ここには五つの古くからの大農場が集っているが、ペルー最大のカサ・グランデ農場（一八七三年独人ヒルデメイステル氏が創始）は耕地面積約三万ヘクタール（約三万町歩）、その所有地は一〇万ヘクタールをこえると云われ、「海岸からアマゾンまで」と冗談まじりに語られるほどである。少くとも東京都の半分よりは大きいわけだ。

この隣には、グレース商会の経営するカルタビオ農場があって、耕地面積の広さは約四二〇〇ヘクタールとカサ・グランデの八分の一だが、ここはペルーでもっとも合理化され、労働者に対する福祉の進んだ農場を誇っている。

チカマ川流域は、いわば、ペルーのケーン・ベルト（砂糖キビ地帯）ということができるだろう。

耕地と工場

山岳地帯の農場にはどこか澱んだ無気力な空気が感ぜられたものだが、海岸地帯の砂糖農場には活気がみなぎっている、といった感じだった。

農場といっても、土との対話を楽しむといったのんびりした雰囲気はない。機械が動き回る広い耕地を背景に、立派な製糖工場からは終日黒煙があがり、ゴォーンというあの工場地帯特有の轟音がうなりをあげている。おびただしい数の貨車とトラックがこの間をあわただしく往き来している。耕地で働く農業労働者も工場労働者も、決められた同じ労働条件の下で働き、賃金をもらい、農場内に造られた町で賃金に基く生活を送っている。要するに資本主義的な一企業なのである。

しかし、その反面現在でもアシェンダといういい方が生き続けている。例えば、カルタビオ農場は正式にはカラバヨ農業株式会社というが、そう呼ぶ人はいない。アシェンダ・カルタビオが普通である。アシェンダという言葉にはどこか封建遺制を感じさせるものがあり、殊に山岳地帯で我々は農奴制的な大土地所有制度が巾をきかせている様を見てきたので尚更である。それが、まるで雲泥の差がある資本主義的大農場でも普通に使われていることが、とても奇妙だった。

これはあとでも触れるが、どうやら、農業株式会社はアシェンダ的要素を包みこんでいるのである。例えば、山岳地帯のアシェンダでは苛酷な賦役に苦しめられながら、インディオ達はそれでも主人に世話になっている安心感をもっている。家を与えられ、食糧を与えられ、家族を養うことができる安定生活を維持するためのやむをえざる主従関係だが、それだけに根強い。

砂糖農場の進んだ社会・教育制度を見て、非常に感心しながら、一方で、そのようなアシェンダの基礎にある封建的な関係を巧みに利用した労働政策がとられていることを理解することが出来た。アシェンダという言葉には経済的な基礎としての農園の意

味と農園を通じての主従を中心とした単一社会の意味との二重の意味が含まれているのだ。その点からみれば今日の海岸地帯の大農場では、経済的には資本主義的に近代化されたけれど、社会的には形をかえてアシェンダが存続しているといえるようだ。

それに加えて、原則として一つの企業は砂糖キビ耕地と製糖工場を併せ経営しており、革命前のキューバ等で一般的であったという、多数の砂糖キビ耕作者とそれを買い集める工場設備をもった大アシェンダとの支配・隷属関係は、あまり見られない。その理由には、国際市場での激烈な競争に打ち勝つための合理化、企業の集中化があったという歴史的背景がある。

しかしながら、自然条件に恵まれてこういったノーマルな形態が発達しえたという点も忘れられないだろう。即ち、ペルーでは一年中安定した温暖な気候が続くので、一八カ月かかる砂糖キビの生育も季節的影響を受けることがまったくなく、常に適量の砂糖キビを収穫できるよう工場の生産計画に合せて耕地を回転させている。従って、砂糖キビ耕地と製糖工場を密接に有機的に結びつけ、同一資本の下で一緒に経営する方が有利だからである。

輸出産業とモノカルチュア

しかし、ペルーの製糖業が輸出産業であるということは、砂糖農場の性格を大いに左右している。

砂糖といえばキューバを連想し、更にモノカルチュアの輸出向農業を思い浮べる人も多いにちがいない。実際、砂糖とモノカルチュアは結びついて発達してきた。ラテン・アメリカの諸国では好適な自然条件を利用して、一六世紀以来チリーを除いて全部の国が砂糖を生産してきた。しかし、ほとんどは自給用で、意外に輸出向生産を中心にしている国は少ない。キューバ、ドミニカ、ペルーを数えるのみである。

その意味ではペルーは、モノカルチュアとともに砂糖の生産に邁進してきた代表国の一つであるが、この後進国の特徴としていつも引き合いに出されるモノカルチュアは、ペルーでは割合に目立たない。

モノカルチュアとは単一生産の意味で、一国の経済が、極めて少数（純粋には唯一）の第一次生産物に依存している偏倚性ないしは偏倚的な経済構造を指している。ところがペルーの場合、輸出額の上位を占める生産物を調べてみると、一九五九年の統計では綿花（二二%）、魚粉（一四%）、砂糖（一一%）、銅（八%）、石油（六%）、と特にずばぬけた輸出商品は見当らない。いわば平均した多くの輸出商品をもっている。工業化が遅れ、経済発展をはかるにはまず第一次産品の輸出伸長に頼らざるをえない後進国経済にとって、これは大きな強味である。その点で、ペルーの経済は先進国の市場規制、物価問題等で攻められながらもラテン・アメリカの中では比較的豊かで恵まれた地位を保ち、また順調な発展を遂げる足がかりをつかんでいた。

しかしモノカルチュアを統計上だけで判断することはできない。モノカルチュアとは経済構造まで内包する概念であり、何よりも歴史的なものである。しかも先進国の資本支配を通じて外から与えられたものが国民経済の中にはすっかり根を下してしまっている状態を包括している。

そう見ればペルーの社会経済の根底にはやはりモノカルチュア

が居すわっていると言わざるを得ない。実際にペルーの中を歩いてみるとそのことをひしひしと感じる。山岳地帯に前近代的な土地所有制度が広く残っていることもその一つである。また旅行中、ある青年がコカコーラの看板を見ながら自嘲的に云った言葉を思い出す。

「ペルーは二度征服された。一度はカソリックに。もう一度はアメリカ帝国主義に。」

国内のすみずみまで浸透している外国資本の支配力も、モノカルチュアと大いに深いつながりがあるのだ。従ってペルーの輸出品構成においてモノカルチュア的な偏倚性が薄いということは、モノカルチュアの経済構造がないのではなく、単に、ラテン・アメリカの他の国に較べて、ペルーでは、農業でも鉱業でも、資源的に開発し得る商品に恵まれていることを示すに過ぎないのである。

モノカルチュアの根源

戦後ペルーは徐々にではあるが工業化を着々と進めてきた。しかし農業生産の方は輸出向の綿花、砂糖キビを除いて概して停滞しているので、年二・五%の割合で伸びていく人口増加とそれを下まわる食糧生産のアンバランスが、ゆゆしき大問題として一貫して政府の課題となってきた。そのためにさまざまの穀物生産振興策がうち出されてきたが、抜本的な改革はなかなかなされなかった。一九六一年四月に国会を通過して実施に移された農業改革法案はその意味でもっとも期待されている。この法案の内容は㈠耕作面積の拡張、㈡増産をはかるための農業技術の改善、㈢自作農の増大と三つの目的から成り立っている。

新しい植民地の開拓は一億五百万ソーレスの政府資金によって直ちに始められているが、なかでも注目されるのは、諮問委員会の報告が土地分配の不平等を是正する必要を述べていることであり、土地私有の原則の上で公正な基準を設定して土地の再分割を行い、零細農の救済によって農業人口の質的向上をはかることが急務であると答申している。

この法案は、構造的な問題に着手しているだけに今後の成り行きが注目されるところだが、それだけに多くの難しい問題を抱えている。

例えば海岸地帯と山岳地帯の相違についてだ。この相違は、今日単なる地理的なちがいにとどまらず、文化的・社会的にも著しいへだたりを見せている。近代的な都市や工場のある海岸地帯、未だにインディオ中心でインカ帝国時代の風俗や習慣が残っている遅れた山岳地帯。ペルーを旅行していると、このような印象のちがいを誰も持つにちがいない。このちがいは実に大きい。

経済的に見るなら、山岳地帯は海岸地帯の犠牲になっていると言える。いわば両者の間には二重構造的な関係が見られるのである。海岸地岸では資本主義的大農経営によって輸出向農業生産をおし進めているのに対して食糧生産はもっぱら山岳地帯にまかされている。しかも山岳地帯では零細農が多く、ペルー全体の耕作面積の約八〇%、農業人口の八〇～九〇%が食糧生産に向けられているにもかかわらず、生産額では農業生産額の約五五%を占めているに過ぎない。

綿花や砂糖キビは、あらゆる部門の資本投下と技術革新が進

み、世界でもっとも高いレベルにまで生産性をあげているのに、穀物やジャガイモの生産はまるで振わない有様である。土質の改良や施肥によって生産力をあげることができるし、機械化によって生産性もあげられるのはわかりきったことで、実際にSCIPA（アメリカ食糧生産協力機関）が活躍しているが、その網の目からこぼれる大多数の零細農が問題なので、結局この問題は土地所有の格差に帰着してしまうのだ。

近年になって大農場に耕地面積の二〇%は食糧生産にあてるよう義務づけたりしているが、一九世紀後半からずっと、英米資本の借款をとりつけるためにも砂糖や綿花の値上りに政府は穀物畑をつぶしてどんどん砂糖や綿花の畑をふやしてきた。それはとりもなおさず、土地の集中化であり、山岳地帯の犠牲による海岸地帯の繁栄であった。

現在農業生産物の輸出だけでペルーの総輸出額の三五%を占め、輸出額だと一〇五百万ドルに達する。しかし一方で小麦等の穀物の輸入額が年間二六百万ドルにものぼっており、益々ふえる見込みである。

このような食糧自給度の低さが、人口増加と工業化という二つのインパクトを通して表面に浮んできているが、その裏にはこのようなモノカルチュア経済の長年にわたるひずみの蓄積が見られるのであって、そこにこそペルーの悩みの源があると云えよう。

プランテーションとグレース商会

グレース商会の砂糖農場に入る前にここでもう一つプランテーションの問題に触れておきたい。プランテーションとは、主として植民地で外国資本が原住民の労働力を利用して略奪的に特産物の単一生産を行うものだ。従って多くの場合モノカルチュアとプランテーションは重なり合うことになる。

今日のペルーの砂糖産業では少なくとも略奪的なものは存在しないが、外国資本によるプランテーションと呼び得るものはグレース商会の二つの農場、カルタビオ農場とパラモンガ農場、及びカサ・グランデ農場の三つを数えることができる。数では少いけれど上位の三つがともに外国資本による経営であることは特徴的である。

ペルーでは反米感情が強く、アメリカ資本は憎悪の的になっているので、どんな悪どいもうけ方をしているのだろうと我々自身興味津々だった。グレース商会の砂糖農場を訪ねる場合にも、そんな気持がかなりあったのだが事実はむしろ逆だった。グレース商会は砂糖生産における合理化の推進者であるばかりか、労働条件でも、労働者インディオの教育や福祉でも、常に先端を行き、ペルー社会の近代化に貢献している面が多いのに驚いたほどである。今日では前近代的な搾取、略奪的なもうけなんてあり得ないのだというのは見た上でならあたり前だ。これは第二次世界大戦前の話に過ぎないのである。憎悪の的というのは、方法にではなく、強大な資本力をもってペルー経済の首根っこを支配している存在そのもの、及びそれに結びついて買弁的な役割を果たしているのだ。

そもそも外国資本が砂糖の生産に着手したのはいわば偶然的、ペルーの大地主たちの失態に基くといわれている。即ち一九世紀

後半以降、大地主たちは産業資本家への脱皮をはかるべく、工場設備を充実さたり、生産を増大したりという形で設備投資に意欲的だった。しかし、それまで土地貴族的に資本蓄積を怠っていた彼らは、自分の土地を抵当に入れて英米資本の貸付けを受けざるをえなかった。

ここから英米資本の支配力は確立していくのだが、経営の失敗から抵当流れの形で大農場が外国資本の手にわたった例が多かった。グレース商会が一八八四年にカルタビオ農場を手に入れたのも、独人ヒルデメイステル氏が一八七三年カサ・グランデ農場の経営に乗り出したのも皆そうである。しかも、それら外国資本の進出によって初めて、ペルーの製糖業は企業性をもち、技術的水準を高め、世界市場に仲間入りできたのだ。

だから、砂糖農場の上位が外国資本のプランテーションに占められている事実は、単に外国資本の支配を意味するだけでなく、大地主たちが外国資本の支配を許し、しかも外国資本と大地主との支配階級がモノカルチュア経済をおし進めることでペルーの発展の契機を摘んできた歴史的停滞を意味している。こういう考え方はマリアテギという若くして死んだ社会主義的思想家のモチーフでもあり、サンマルコス大学の学生たちからは何回も聞かされたものだ。すでに古い考え方だという見方も多いが、今でも大きな影響力をもっていて、カフェテリアでの楽しい討論の中でも、これはしばしば議論の中心に引き出された。

これまで、砂糖農場の性格を見るのに一般的、歴史的な問題をくどくどと述べすぎたかもしれないが、いわば「陽のあたる場所」である砂糖農場を見学しながら、こうしたその背後にある重さを、絶えず考えざるを得なかったからだ。そして実際に、グレース商会の活動を追っていくことによって、ちょうどネガのフィルムを見る時のように、ペルーの経済がかかえている問題の大きさと今後の方向を垣間見ることができたように思えるのである。

グレース商会における砂糖農場

今日、ペルーの砂糖生産はグレース商会の三つの農場を除外してはまったく考えられないほどだが、「商会」と砂糖農場とのつながりに奇異の感をもたれる人も多いにちがいない。

グレース商会（Casa Grace）は通称で、正式にはW.R.Grace & Coと云う。本社をニューヨークにおき、同じくニューヨークに本店をもつグレース銀行を併せ持ち、約六〇の小会社を通じて生産、輸送、貿易のあらゆる分野に活動しているアメリカの大企業、大コンツェルンである。

主に南米の太平洋岸を根拠地にしているが、ペルーでの事業だけでも紡績、砂糖、ラム、製紙、化学工業、塗料、食品工業、鉱山、輸出入、国際航空、海運と実に一〇の部門に及ぶ。

日本の大商社が原子力からラーメンまでを取扱っているという なら、グレース商会は南米を股にかけて飛行機から酒までやっているという訳だ。

さて、先にも述べたように、グレース商会が砂糖の生産に着手することになったのは、いわば予期せぬ形からであった。

一八五四年、W・R・グレース氏（一八三二～一九〇四）がペルーの或る会社と共同でカィヤオに小さな船会社を始めたのが今日の「グレース帝国」の出発であった。その後、グレース・ライ

ンという南米の太平洋岸とアメリカを結ぶ航路を独占し更に貿易事業を拡大していった。この貿易事業拡大の過程ではじめて砂糖を生産する大地主との関係が生まれ、資本的なつながりから土地がころがりこんできて、結局砂糖農場の実際の経営に関係するようになったわけである。

しかし、今日の大コンツェルンから見る時、この出会いは二つの意味で重要である。第一はグレース商会が生産活動に着手したこと、第二に砂糖の生産の不安定性に鑑み、副産物の生産、例えばラム酒、アルコールの生産などの多角化という道が生れ、今日の各種工業部門への進出の基礎となったことである。ちなみに本格的にグレース商会が工業部門に手を染めたのは一九〇四年綿紡績工場の建設が最初であった。

グレース商会は二つの農場で砂糖を生産している。一つはケーン・ベルトの項で述べたカルタビオ農場。もう一つはパラモンガ農場。リマからカルタビオまでのほぼ⅓の距離、リマ北方約二百キロのところにあり、パティビルカ、フォルタレッサという二つの川にはさまれた地帯を独占している。ケーン・ベルトとは距たっているけれど、もう一つの豊かな砂糖キビ生産地である。

両農場を合せた従業員は六三〇〇人、ペルーの農場としてはカサ・グランデ農場の八五〇〇人に次いで多い。また両農場を合計したグレース商会の砂糖キビ耕作面積は約八千㌶とペルー全体約六万二千㌶の一三%にあたる。生産量は両者あわせて精糖で一九五九年約一一万㌧、これはペルー全生産量七三万㌧の一五%に相当する。

このようにシェアーで見たら目立たないけれど、グレース商会の経営する砂糖農場の特徴をあげれば、第一に生産の合理化が進んでいること。第二に労務対策が進んでいることの二つであり、その点において、ペルーの経済・社会に与えている影響は非常に大きい。

それがどのようなものであり、どういう形で影響を及ぼしているか、以下具体的に農場の中に入って検討してみよう。

尚、両者に共通する要素も多いので、ここでは我々が主に見てまわったパラモンガ農場の場合について見てみようと思う。

Ⅱ　パラモンガの砂糖農場

砂糖キビ耕地と機械化

今から三五年前（一九二六年）、グレース商会はカルナバール家という旧家からパラモンガの土地を買い取った。当時は土地もやせ、使いものにならぬ工場がポツンとあるきりだったが、グレース商会は長年かかってこれを立てなおしたのであり、いわばこれはグレース商会生え抜きのアシェンダだった。

パラモンガは二つの特色を持っている。それは一つには首都リマに近いこと、もう一つには、二本の河にはさまれて水の豊富なことである。砂糖キビのしぼりかすを利用しての製紙工業やアルコール製造業などをはじめ、パラモンガの地でグレース商会が果そうとしている総合工業地帯の造成にとって、首都リマに近い有利性と水の豊富さは非常に重要な契機となっているのだ。

それはともかく、パラモンガ農場も他と同じように、やはり北

と南は砂漠、東はアンデス、西は太平洋に囲まれ、周囲の荒々しい自然の中に浮び上った独立した王国の様相を呈している。単なる農場でもなく、単なる工場でもなく、また単なる辺境の町でもなく、いわばそれらの総体であり、有機体でもある単一社会がそこにある。

全面積は約六八〇〇ヘクタール、このうち約三七〇〇㌶が砂糖キビ耕地、約一〇〇〇㌶が豆、穀物、野菜、そして家畜の牧草地にあてられている。残りは製糖工場、製紙工場、化学工場等の工場施設。あるいは事務所、住宅、学校、さまざまのレクリェーション施設とぎっしり建物が立ち並んでいる。

従業員はオブレロ（労働者）三、三〇〇人、エンプレアード（事務管理者）四五〇人であり、家族を含めた町としての農場の人口は一万八千人に達する。約一〇〇〇㌶の農耕地は、これら農場の全人口の食糧を自給するために特別に割りあてられた土地である。それはチァカラとよばれる借地農によって耕作されており、我々もさながら独立国のその自足的な体制に感心したものだが、事情はいささか異っていた。

この農耕地はグレース商会の政策に基くものではなく、政府が食糧穀物の増産のために海岸地帯の資本主義的な企業形態をとっている大農場に義務づけたものもあり、農場ではその法令によって土地の二割を生活必需的農産物の生産にあてなければならないのである。

それでも砂糖キビの耕地はさすがに広く、全体は五つに分けて管理されているが、中心にある工場から耕地のはずれまでは三〇㌔近くある。この間は立派な道路も出来ているが、私設の鉄道が敷かれていて、鉄道の長さは農場内全体で六〇㌔に及ぶ。

耕地での作業は機械化が進んでおり、耕地内はにぎやかである。山積みされた砂糖キビの側で、クレーン車から腕が伸びる。カニのはさみのような爪で砂糖キビがつかみとられては三㌧積のトレイラーに投げ込まれていく。更にこのトレイラーは大型トラクターにひかれて近くの駅に運びこまれ、今度はドンキーと称する蒸気クレーンで一気に貨車に積みかえられる。かくして一日約二千㌧の砂糖キビが工場に送り込まれるわけである。

戦前までは、砂糖キビを手で牛車に積みこんでは駅まで運んだそうだが、想像もつかない。そして集約的な手労働を見なれている我々には機械が、縦横に動きまわるスピーディーで大がかりな耕地風景がとても珍らしい。

しかし想像した程完全に機械化が行き渡っているわけではなかった。植えつけ、刈りとりという耕地労働の大事な部分は依然として手労働に頼っているからだ。

砂糖キビは生育期間が一八ヵ月で一回植えつけると五～七回刈りとることができるから約一〇年育ち続ける。しかも一年中いつでも刈りとれる安定した気候と来ては、実に手間のかからない、大量生産向きの作物なわけだ。

植えつけの仕事は軽労働で、われわれが訪れた時はすでに、プランターがそろそろ利用できる見通しがついたとのことだった。これによればこれまで一〇〇人以上でやっていた仕事が五人で出来ることになる。

刈りとりについては、これがそうだと云いながら、ちんぷんかんぷんのわれわれにカッターを見せてくれたが、回転刃がうまく

作動しないため、手労働の方が確実で安いから当分まだ手労働によるだろうとの話だった。

砂糖キビはイネ科の多年性植物で、稲をゴツく、大きくしたような感じである。高さは約三㍍でまるでジャングルのように密集して生えるが、熟成する三ヵ月前になると給水を止められてしまう。不必要な葉を焼き払うのに乾燥させるためである。

かくして二ヵ月がたち、無駄な葉が焼き払われるとその翌日、今度は耕地労働者たちが刀のようなナタで茎の出来るだけ根元の方から切り倒していくのである。灰の中の砂糖キビ畑で腰をかがめての切りとり作業は重労働だ。

ペルーの日本人は多く砂糖耕地で働くための移民としてペルーに渡った。砂糖耕地での労働は酷しく、待遇は半奴隷的で大半がそこを飛びだしたといわれている。だから砂糖耕地という名を聞くだけで身ぶるいするという話を聞かされたことがある。今日のパラモンガに昔日の苛酷な奴隷労働はないけれど、刈りとり重労働は相変らず続いているわけだ。

それでも五年間に砂糖キビ耕作面積が一三%減り、しかも生産が二〇%も増え、一方で労働者数が二百人程減少している。絶えざる合理化の結果である。従って、技術的に満足いかないとか安いからという理由で手労働に頼っている刈りとり作業も直ぐに機械化されてしまうだろうと思われるのだ。

砂糖の出来るまで

手労働は砂糖キビを刈りとって並べるまで、あとは機械がフルに動く。ドンキーで貨車に積みこまれた砂糖キビは次から次と工場に運び込まれ、直ちに回転切断機で五㌢程の長さに切られたあげく、コンベアー・ベルトでトラピチェの中に吸いこまれていく。水と混ぜられた大きな砂糖キビが五台連続するロール粉砕機を通り抜ける間に粉々になってしまうトラピチェの光景は壮観である。

このしぼりカスはバガッセと呼ばれてパルプ工場に運ばれる一方、搾出された砂糖汁は更に濾過機を通り、煮沸され、煮つめられ、真空のタンクで結晶が分離されて砂糖となる。

これが粗糖であり、更に漂白、精製されて白糖になるものもある。パラモンガ農場は、二五ほどあるペルーの主要砂糖農場のうち、精糖工場を備えている六つの中に数えられており、白糖の生産が盛んである。

この間、結晶が分離された残りの蜜糖は、アルコール工場に運ばれる。技術的な面に弱い我々には、熱心に案内してくれる主任さんに申し訳けなかったが、正直な所、この辺の機械じかけはよくわからなかった。ただ、ほとんどの機械設備がアメリカ製（わずかにドイツ製が見られた）であり、工程のほとんどが自動化され、計器による管理が行われていたため最後に多くの労働者が袋詰めの作業に忙しく立ち働いている様がひときわ印象に残った。

パラモンガ農場では一日に約二千トンの砂糖キビを砕いて、精白糖の生産が二〇〇トン、粗糖が二三トン、またアルコール工場へ運ばれる蜜糖（モラッセ）が七〇トン、バガッセが六〇〇トンとのことであった。

この長い工程を半日がかりで順にたどりながら、次のような二つのことを考えていた。

第一は、あの広い耕地が工場の原料供給地として実に密着していて、両者が何とスムーズにつながっているかということである。工業と農業とはそもそも異質の産業部門だということはすぐわかっても、集約的零細農業しか見たことのない我々にはそれが結びついている接点は感覚的にわかりにくいのだ。だから、我々日本人は資本主義形成期のマニュファクチュアや囲いこみ、農工分離といったドラスティックな展開を、論理的にではなく歴史的に把握できにくいのじゃないか、なんてことを考えていた。

それはともかく砂糖農場は空間的にも時間的にも農業と工業が密着している。本来の資本主義的企業形態ではこの二つは綿花畑と紡績工場とが別であるように別の企業下でなされるにちがいない。

それが一つの資本の下で経営が行われるにはそれなりの立地条件もあったけれど、封建制が根元から崩されることなくその土壌の上に資本主義経済が生れた歴史の歪み、そして一方で強大な外国資本の支配力といったものを感ぜざるをえないのである。一貫生産というもっとも合理的な形をとっているこの砂糖農場を見てかえってそのことを強く感じさせられた。

第二は、生産工程が機械化され、合理化されているばかりでなく、砂糖キビの成分がそのカスの繊維質まで一滴、一片まで何と無駄なく利用されているかということだ。バガッセとよばれる砂糖キビのカスは多量の繊維質を含んでいるので、これからパルプをつくり、紙を製造することが出来る。

この方法はグレース商会が一九三八年に世界ではじめて完成したものといわれ、今日紙の生産量は包み紙、段ボール、砂糖袋等を合せて年産三万トンでペルーの全製紙生産量の七〇%を占めている。グレース商会の砂糖は自家製の袋に詰めて世界中に売られているわけだ。またモラッセという砂糖のエキスをとり出した残液からはエチル・アルコールがつくられ、生産量は年三五〇万リットルに及ぶ。

更には近くの塩山から運び出される岩塩を利用して、苛性ソーダ、塩酸がつくられ、この自家製苛性ソーダがパルプ工場でパルプの製造に利用されるといった具合である。

水が不足しているため、このような化学工業を興せないグレース商会のもう一つの農場、カルタビオ農場でもやはり副業は盛んだ。ウィスキーペルアーノとペルー中に知れ渡っているロン・カルタビオという名のラム酒、これがモラッセからつくられるカルタビオの特産であり、バガッセは燃料としてモーターを動かす貴重な力にもなっている。

砂糖キビは他の農産物に比べて、たしかに有用な産物にちがいないが、しかし、このあくなき合理化は、やはりアメリカ資本の手ではじめて可能であったのだと思う。

当初、こういった新分野の開拓は、不況と国際値段の動揺のため、砂糖農場の自衛策として開発された。それが今日の多角的な、前進的な工業化へと進んだわけだが、注目すべきは、常にペルーの新しい市場形成に目を向けていたことである。ペルーの民族資本家が土地貴族的保守性に閉じ込っている間に、外国資本が新しい市場を開拓してしまった。グレース商会は常にペルー資本主義のパイオニアであった訳だ。だからこそ、これを除いてはペルー経済を考えられないし、その進歩性を認めない訳にはいかな

いのである。

Ⅲ　パラモンガの労働者たち

農場とインディオ労働者

労働者の労働、農場内の生活はどのようになっているか、今度は角度をかえてその面からパラモンガ農場を検討してみよう。

農場にはインディオ労働者があふれている。実際問題としてさまざまな程度の混血が行われているから、正確な区分は出来ないが、三三〇〇人の労働者のほとんどは山岳地帯出身のインディオ及びメスティソである。

耕地労働者は古く植民地時代にはアフリカから売られてきた黒人奴隷が主力であった。しかし独立後一八五五年に奴隷制度は廃止され、中国人がかなり使われるようになった。だが、これも太平洋戦争（一八七九～一八八三、チリー・ボリビア・ペルー三国間の領土をめぐる戦争）で杜絶し、その後は労働力源をもっぱら山岳地帯のインディオに頼ることとなり、それが今日まで続いている。

これら耕地労働者の募集は労務担当者が山岳地帯に出かけ、インディオ達に前金を与えて普通三ヵ月の雇用契約を行う形がとられている。

しかし、契約を更改して居ついてしまうのは最近まで少なかったそうである。何故なら、たとえ猫の額ほどの小さな小作地でも土地は彼らの宝であり、収穫のときには山の家に帰らねばならないからである。また単にそればかりでなく、山岳地帯の環境に慣れないため、きまとっている。例えば、長い間海岸地帯で生活すると結核になるという迷信がまともに信じられているからだ。

いわば短期出稼ぎのこのようなケースの一方、若い年代にあっては、海岸地帯特に都会への憧れが強く、山岳地帯から海岸地帯への人口移動が著しい。

その契機になるものは、単純なる都会への憧れもみじめさからの逃亡もあるけれど、その媒介をなすもっとも大きなものは兵役服務だといわれている。ペルーの法律では高校卒以上の学歴をもつ人間には徴兵がない。従って、二〇才になり都会に出てきて一定の軍事教練を受けるのは、学校へも行けなかった山岳地帯のインディオが多い。

彼らは服務の一方で都会生活の華やかな一面に触れ、山岳地帯の単調で貧しい生活を嫌ってそのまま都会に居付き、職を求めることになる。これらの人間が重要な労働力市場を形成する。

しかも近年のめざましい経済発展に伴って求人も多く、山岳地帯から海岸地帯への人口流入が著しい。いい資料がないが、例えば一九五〇年から五九年の間に全人口は二三・二%増えているのだが、この間農村人口の増加は一二・七%、それに対して都市人口の増加は四三・一%で、農村から都市への人口移動が激しいことを示している。この傾向が、都会の周辺のスラム街の膨脹となっているが、それは同時に近代化への過渡期という歴史的現象でもあるだろう。

そんな状況からして、砂糖農場の耕地労働者も、出稼ぎからそ

のまま農場に居付いてしまう例が最近は多くなってきたようである。山を捨て、家族を呼んで、彼らはアシェンダの住人になってしまう。耕地労働者の大半がこうしたケースである。

このように、リマを中心とした労働市場はもっぱら買手市場だが、問題は労働力の質なのだ。国語であるスペイン語さえ満足にわからない人が多いのだ。そこで、豊富な労働力を擁しながら単純労働にしか着かせ得ない。だから企業内の職業訓練が盛んである。日本における社内教育の隆盛を思い出して、これは同じ後進国的現象なのだろうと思った。

パラモンガ農場では専任の社会教育機関があって、彼らのオリエンテーションにあたり、またさまざまの機会をとらえて技術講習がもたれ、上の職階へ進む道が開かれているし、基本的な教育にも注意が払われている。

農場の経営する小学校は法律によって教科書も施設も教師もすべて農場の負担となるが、パラモンガ農場には男女別々に合計七つの小学校があり、二二六〇人の七才から一二才までの子供たちが教育を受けている。

更に中堅の技術者を育てるために生徒数四〇人の職業学校が設けられていて、彼らは集中的な技術教育を受けていた。ちょうど日本の企業における技能養成所といったところであろうか。

山岳地帯農場を見てきた我々は、農場主から、インディオは怠けもので、不潔で、ずるいと語られるたびに、インディオとはインカの末裔であり、滅びゆく種族であって、近代社会に入りこめないのだろうかなどとさびしく思ったが、パラモンガ農場を見て本当のところホッとした。ここでは山岳地帯のインディオが次第に工業労働者として脱皮していく過程がよくわかる。自信を与えられ、技術を与えられ、それを生かす機会が与えられているからだ。実はこれがあたりまえなのだが……。

賃金と労働条件

賃金水準がどのくらいかということは興味のあるテーマの一つであったが、なかなかはっきりしたことをつかみ得なかった。正確な賃金統計を見ることができなかったし、さまざまの附加給付がついているので基準がわからない。

しかし、少くともパラモンガ農場での現金給与は、耕地労働者の平均日給二三ソーレス（一ソーレスは約一三円）、工場労働者の平均で二五～三〇ソーレス、熟練工、監督職で四〇～五〇ソーレスといったところであった。賃金は原則的にはなされた仕事の量に応じて支払われる建前だが、日給で支払われる。

政府で生計費指数を考慮して職種毎の最低賃金を決めており、労使間でそれに基いた賃金協定が結ばれ、日給は決る。我々が訪ねた当時、農業労働者の最低賃金は二一・一五ソーレスということであった。

パラモンガ農場のこの賃金は考えていたより低く、びっくりした。例えばチンボテの国立製鉄所では最低四五ソーレス、またペルー最大の企業セロ・デ・パスコ鉱山では最低三九ソーレス、リマの工場地帯では、職種によっても企業規模によっても異なるが、日給三〇ソーレス以上だった。

農業労働者が低いのは当然だが、それでも全体に低すぎるように思えて聞いてみたら、パラモンガ農場では附加給付が多く、現

金給与だけでは賃金水準を正確に知り得ないとの答であった。
案内してくれた主任さんは、附加給付を日給に勘算して次のように説明してくれた。
肉、米、塩の配給、その他食品、衣料の割引を含めて衣食費は一日一人あたり一〇ソーレスと社会保険、有給休暇等、家賃その他施設の恩恵が五ソーレス加えて考えてほしいというのだ。
たしかに、パラモンガ農場では賃金に対する不満は少く、全体に明るい雰囲気である。しかし、現物給与が実質的に賃金の一部とみなされる賃金のあり方は農場側にとっては有利だろうが、けっしてノーマルではない。また現物給与を理由に賃上げが抑えられることも考えられる。
しかし、実際にはもっと前の段階の問題として現物給与あるいは附加給付は存在理由をもっていた。農場側では経理面で有利であるばかりか、家族ぐるみ、従業員の全生活の世話を見るという形で、農場内の労使一体感を強める上で目に見えない大きな役割を果しているからだ。
労働者側にとっても、古くからアシェンダのならわしになっている現物給与が彼らの生活意識にピッタリするようで、彼らの安心感、信頼感の基礎になっているように思われた。少くとも現在の段階ではこの現物給与が労使協調のシンボルであった。
我々は、パラモンガ農場では耕地労働者でさえ資本主義的企業の一翼を担う労働者ではあるけれど、賃金生活者・市民としてはまだ独立しきっていないのだ、と考えた。

共同社会と未来への青写真

資本家であると同時に町としてのアシェンダ・パラモンガの統治者であるグレース商会は、その観点からも従業員の生活に深いかかわりをもっている。
グレース商会は、農場内に従業員の住宅を建て、学校をつくり、病院を完備させた。農場でつくる作物を配給したり、安く売ったりする市場を設けた。教会をつくり映画館も常設した。これら街の中心部の町造りもし管理し、調査の上で幾つかの店や食堂の営業を許している。更に広い敷地を利用してサッカー場、プールをはじめとするさまざまのレクリェーション施設を建設した。
こうやって数えあげたらきりがない。こうして町の社会生活はすべてグレース商会が運営している。云うなればここは「グレース社会」なのだ。
考えるような町とか都市の自治体としてはここでは、我々が普通に
っかり埋没してしまっていた。
その一つ一つをとり出してみた時、パラモンガの住民（または
パラモンガ農場の従業員）は実に恵まれた、豊かな社会生活を送っている。例えば食事。耕地労働者の昼食は工場の厨房でつくられ、トラックで農場の
る。
更に食糧の配給券を配られて、一人一日あたり肉、米ともに一ポンド（四五〇瓦）塩一オンス（二八瓦）が無料でもらえる。また市場では市価よりも安く野菜や穀類が売られている。
そればかりではない。医療施設はパラモンガの自慢の一つであ

る。明るい、きれいな病室、八〇のベッド、七人の医者。ここでは一年に三五〇〜四〇〇人の諸手術が行われ、一ヵ月に四五人の割合で赤ちゃんが生れている。これもすべて無料。

しかし、これらの進んだ施設を見せてもらいながらも、そのあまりにもかけ離れたすばらしさにペルーの異境、ユートピアといった考え方からなかなかぬけきらなかった。

要するに海外に窓をもった、ペルーの歴史と社会の歯車とはかみあわない、別の国といった感じである。そしてこれもアメリカ流の労務政策ではないかと考えた。

ところが、住宅建設計画を聞きながら、このパラモンガ農場には生き生きとしたヴィジョンが描かれていることを知ったのである。グレース商会では第二次大戦直後から新しい住宅建設計画を立案し、着々と実行に移して、パティビルカ村の計画を完成しようとしていた。また、新しい工場を誘致するためにすでに発電所の水道の完備した四人〜八人用の家族住宅が、建てられ、我々の訪ねたときには、約一八〇〇戸の労働者用住宅の半分以上が新しい住宅に変っていた。

アドベ造りの暗い、小さな家に代って、ブロック建築、電気・

面白かったのは、新住宅への入居基準である。年功制度のとられている国だから年長者順に入るのだが、もう一つ、清潔感、公共心が入居基準にあげられていた。オブレロを雇うとすぐ、知らぬ間に山岳地帯の家族や親戚をよびよせ、狭い住宅でごろ寝生活をはじめる悪習があるというのを聞いた。

山岳地帯を旅しながら、インディオのさびしげな、それでいて疑い深い目にあっては驚き、そこに長い間虐げられてきた歴史の痕跡を見たように思ったことがあったが、たしかに彼らが市民としての社会生活に入るには何段もの階段を登らねばならない。まずスペイン語、読み書き、そして自覚的な生活意識：。こう考えると、パラモンガ農場のさまざまの社会、教育、文化施設が、労務対策の意味だけではなく、インディオが市民へ脱皮していくための布石であると思えてきたのだった。

一方、パラモンガ農場には新しい町造りの計画が生れていた。それは隣のパティビルカ村に隣接した地域に新しい住宅地帯を創設し、それを労働者自身の持ち家にしようというものである。一九六一年当時、それは新しい機運として、パティビルカ村の計画となった。また、新しい工場を誘致するためにすでに発電所の建設計画が始っていた。インディオ達にとって一つの未来への展望を与えるこのプランは、その段階にまでインディオ労働者が社会の中核を担う階層として生れ変ったことを示すものといえる。

そのような眼で見る時、パラモンガ農場の信用組合（クレディット・ユニオン）は大きな意味をもっているだろう。これは農場側の労使関係近代化の試みによって作られたもので、組合員一三〇〇人。一九五八年に出来て以来、三年間で資本金も五万三千ソーレスから一九万ソーレスに伸びて町の発展に大きな力となっているし、労働者の間にも農場の温情主義から脱け出て、自分たちの生活と社会は自分たちで、という動きが強くなってきた。

このあたりに、農場の社会的性格と経済的性格のアンバランスを是正し、封建的な残滓を洗い流して、近代的な農場に変えていく青写真が描かれていると見てよいと思われる。それは同時にインディオ労働者の生活向上と社会意識の高揚、町の発展といった

見取図でもある。

労働関係と労働問題

後進国において労働組合の力が一般的に強いことを聞いていた我々は、砂糖農場を通じてその実態を知りたいと思っていた。しかし、大分様子がちがっていた。一言でいえば、それは意外に穏和だった。

パラモンガ農場の労働組合は、トルヒーヨにあるペルー砂糖労働者同盟に属し、更にペルー労働者総同盟（C・T・P）に属している。

さまざまの政治的主張が入り乱れているようだが、主流はアプリスタ党（アメリカ革命人民党）が握っており、社会主義を目指すけれど、現実的、具体的に資本家と話しあっていくというのが執行委員長の立場であった。

アプリスタ党は云うまでもなく一九二四年ジャーナリストであり学者であるアヤ・デ・ラ・トーレが亡命先のメキシコでつくったもので、その綱領の骨子は反帝国主義、土地改革、工業化、進歩的社会労働立法、インディオの生活向上である。度々非合法化され、コミュニスト以上に激しい闘争を展開したこともあり、また実際に戦前は二回も大統領選挙に勝ちながら排除されてきた。

一九六二年の大統領選挙で、勝ちながら軍部のクーデターに会ってひっくり返されたことは、まだ記憶に新しいところである。その前の大統領選挙では、プラード大統領がアプリスタ党の抱き込みに成功して再選したのだが、アプリスタ党は右傾化したといわれながら、労働法の改正等で示されるように与党にあって労働関係の改善に力を尽したといわれている。

実際にはペルーでは労働条件の主なる項目が法律の上で決められているため、団体交渉での問題点は主として先任権の問題、具体的な労働量、生産水準、賃金の分配、処罰に関する問題といったところで、その点からも個々の組合での闘争が激化することは考えられない。

しかし、砂糖農場の場合には、やはり経営者側の力の方が強いといえそうである。一九五三年秋、賃上げシーズンを迎えてグレース商会のカルタビオ農場では平均日給一～一五ソーレス値上げを自主的に組合側に打ち出し、ストライキを回避するとともに賃上げにおける主導権を握った。これはいわゆる長期安定賃金の布石のようなもので、それ以来賃金交渉の主導権は相変らず経営者側が握っているのが実態であった。

いわば、賃金水準も生活水準も高い農場がリードすることで円満な労使協調が行なわれているわけで、ここから一般的な問題を引き出すことはできなかった。

Ⅳ グレース王国

グレース王国の周辺

グレース商会は広く深くペルー社会の中に入り込んでいるが、その活動領域はペルーにはとどまらない。南米各国の輸出入にグレース商会の名は欠かせず、この貿易商社としての広汎な活動を基礎に各国でさまざまの生産部門に巨額の投資を行っている。

例えばチリーでは食用油、亜麻油、塗料、砂糖、綿織物、銅山の経営。またボリビアでは鉱山の経営、製紛、セメント、建築材。エクワドルではココア農場、コロンビアではコーヒー、更に経済発展のかなり進んだブラジル、アルゼンチンでは各種化学工業、といった具合である。

このような南米における多様かつ大規模な活動にもかかわらず、グレース商会はあくまでもアメリカ資本である。アメリカでは、石油化学、肥料等の化学工業会社として、また太平洋岸最大の屋外広告会社として知られている。また一九一五年にはニューヨークにグレース銀行が創立され、銀行資本としての地位も高い。

しかし何といっても南米の大コンツェルンとして名高い。約一〇〇年前にペルーに進出した、グレース商会は、南米を股にかけて、生産・輸送・貿易とあらゆる分野にわたる一大王国を築きあげたのである。

資料は古いが、一九五四年の南米における投資総額（固定資本）は六千万ドル、アメリカ本国では一億四千万ドルといわれている。

従って今日ではその南米における投資額が確実に一億ドルをこえていると思われるが、その六千万ドルの半分は一九四五年以降に投資されたものであり、そのまた半分はペルーにおける投資であることを考えると、グレース商会にとっていかにペルーが重要な意味をもっているかがよくわかる。

グレース王国とは目に見えない形で南米ないしはペルーの社会、経済、及び国民生活を支配している広さ、深さを形容した言葉だが、王国といえば、中米を中心として国家そのものをも支配するほど大きな勢力を振っているユナイテッドフルーツ会社があまりにも有名である。そしてこの二つの企業はラテン・アメリカの経済・社会がアメリカに牛耳られていることのシンボルともいえるのだ。

だが、少くとも今後、このような企業が新しく生れることはあるまい。またラテン・アメリカの諸国が、これまでのように支配下におかれ続けることもあるまい。いわばこのような王国的な規模の企業は過去の存在であり、半植民地状態の産物なのだ。

その意味では今日、ラテン・アメリカ諸国は経済・社会的に発展の緒についたばかりと考えてもあながち誇張ではないだろう。

グレース商会のペルーでの位置

グレース商会はユナイテッド・フルーツと異る。資本を投下した国々の国民経済へのかかわり方に大きな差があるのだ。

ユナイテッド・フルーツ会社は主として中米においてバナナ、コーヒー、ココア、砂糖等の典型的プランテーションを経営し、生産のみならず輸送・販売にわたる独占的な地位を占めているのだが、国民経済に対しては常にモノカルチュアを強制する役割を果してきた。

それに対して、グレース商会は、同じプランテーションの経営から出発しながら、新しい分野の開発・工業化のために利潤の再投資を行ってきた。その点で、ペルーの国民経済に対して果してきた啓蒙的な役割は十分に評価する必要があるだろう。

この違いは労働者の扱い方にもはっきりと現われていて、ユナ

イテッド・フルーツでは安い労働力を利用する見方が徹底しているのに対して、グレース商会では安い労働力に依拠しながらも、賃金水準の向上、福祉政策の拡充による労資協調、安定した経営基盤を重視しており、また国内市場の可能性に目を向けている。

これはそもそも両者の成り立ちのちがいによるところが大きいが、アメリカにおける相反するラテン・アメリカ観を代表するものであろう。ケネディの「進歩のための同盟」が後者の見方に拠っていることはいうまでもない。ラテンアメリカの諸国を自分の属国の如く考えているアメリカにとっても、その基本的な見方を前者から後者に変えつつあるといっていいのだが、ここではこの問題には触れないで、グレース商会がペルーの経済・社会に与えてきた影響を具体的に検討してみよう。

まず第一にあげられるのは工業化の推進ということである。海運及び貿易会社として出発したグレース商会が一八八四年に砂糖農場の経営によってはじめて生産活動に足を踏み入れたことについてはⅠで述べた。

しかし、本格的に生産会社としての地位を築いたのは更に二〇年後のことである。グレース商会は農場経営の傍ら、市場、労働力、立地条件等を十分調査した上で、一九〇五年にリマで綿紡績工業に着手した。これが今日ペルー最大の綿紡績工場、インカ紡績の前身である。この後、一九一七年にはヴィタルテ綿織物工場を新設し、更に二工場を加えて現在四工場で綿紡織の生産を行っており、グレースの商標名「デュラ・マス」（長もちすることの意）は広くペルー中に知れ渡っている。

今日、この四工場でつくられる綿織物の市場占有率は四五%、プリント地等では七〇%とペルー第一位の位置を占めている。しかし、グレース商会の真価はこの高いシェアにあるのではなく、常に技術革新をリードし、新製品をペルーでもっとも早く紹介してきたことにある。綿紡工業はペルーで一番、工業らしい工業であって、競争も激しく企業数も三〇〇を数える。それだけにグレース商会がこの分野にいち早く注目し、全体をリードし、新しい市場をつくり出していった力は貴重といえる。砂糖農場での化学工業部門の開発についても同じことがいえるし、また塗料工業についてもそれがあてはまる。

このように砂糖からはじまったグレース商会の工業部門への進出は、単にグレース商会の発展過程であるだけでなしに、軽工業中心のペルーの経済発展の経過であり、グレース商会はそれを推進してきた大きな原動力であったことに気付くのである。

第二は砂糖農場の生産性向上と近代化を通じて、生活水準の向上に一つの目標を与えるとともに、歴史の流れの中に澱んだものの、あるいは封建制の残骸をのりこえる展望を与えたこと。これはⅡで詳しく述べた。

第三は販売網の確立による市場開拓。内に一八の代理店をもっている。海岸地帯のみならず山岳地帯を含めた販売網は、商社の活動としては当然かもしれない。しかし、この代理店を中心とした充実した販売網が、いわば工業化の一つの支えになっている点は特に大切だと思われる。

ペルーにおける輸入業者としてのグレース商会は、ジェネラル・エレクトリックをはじめとするアメリカの大企業の製品を独占販売する権利をもち、しかも販売網をがっちり握っているので、

他の追随を許さない。

しかしグレースは海岸地帯偏重を避けて山岳地帯での積極的な市場開拓にも力点をおいており、新しい工業分野への進出にあたってはこの商社としての販売網が大きくものを云う。この辺にグレース商会が単に労働力を搾取して利潤を海外に運び出すだけではなく、ペルーの現実に根を下した長期的な見通しの上に立つ資本進出を行っている姿を見るのである。

第四は合理的な経営方針と人材の開発をあげることができる。グレース商会の経営原則は次の六つに要約される。

㈠経営陣への現地人の積極的登用、㈡現地資本との提携、㈢政治への不干渉、㈣その国の法律、習慣、宗教を重んずること、㈤従業員の要求を積極的にとりあげること、㈥利潤追求の動機を合理的に利用すること。

いわば後進国への資本進出の六ヵ条ともいえるものであるが、わずか一週間の農場見学と数回のリマ本社訪問の印象でも、この六ヵ条がきびしく貫かれているのはよく判った。例えば、人材の登用には国籍とかコネによる差別は一切排除され、実力と業績だけが決め手であり、また後進国と外国資本との間に必らずといってよい程生れる腐敗した政治的なつながりはまず見られない。また上に立つアメリカ人の割合で、こんなことさえなかなかできていないのでも日常語はスペイン語であることを当然と考えているモラルはこれはかなり異例のことといわれ、積極的グレース商会の考え方をよく示している。

この点でもグレース商会の活動を推進する裾野の広さを知らされるのである。

グレース王国の一つの側面

このように、グレース商会の活動はペルーの経済・社会の動きに深く食込んで、様々のインパクトを与える役割を果してきた。我々が資本輸出イコール・ユナイテッド・フルーツ的なものと考他のアメリカ資本ではだ。

我々がパラモンガ農場でお世話になったエチャンディア氏はお父さんがリマ本社の部長で二代にわたるグレース社員。農業技師だがリマのサン・マルコス大学を卒業して二年間アメリカ留学をしてきた。このアメリカ留学はペルーではかなり尊重される一種の箔だが、エチャンディア氏はそんなにいばっているようでもない。

グレース商会には会社からアメリカ留学させてもらった社員が実に多い。他のアメリカ資本がアメリカの技術者を連れてくるところをグレース商会ではペルー人技術者を留学させる。エチャンディア氏もその一人である。農業技術、機械・電気等の技術者、セールス・エンジニア、管理職等ペルーの法律では外国企業は八割以上のペルー人を雇用することという規制があるが、グレース商会はむしろ積極的にペルー人のエンプレアードを教育してきた。だから、グレース商会の一二〇〇〇人の従業員のうちエンプレアードは二二〇〇人、そのうち米人をはじめとする外人はわずか一〇〇人弱である。グレース商会のペルーでの事業のトップ・マネジメントは半数はペルー人、半数はアメリカ人の割合で、これはかなり異例のことといわれ、積極的な人材養成の結果と考えられている。

えがちであったのに、グレース商会はまるで対照的であった。
反米感情は根強くグレース商会への反感も強いが、それでも彼らは一様にグレース商会にペルーの経済・社会の歴史の上で果してきた啓蒙者としての役割を評価している。グレース商会がペルーの企業だと考えている人すらいる。
しかしながら、たとえ機能の上ではペルーの企業であっても、結局は外国資本であることに変りはない。戦争とか革命とかの状況を想定してみればよい。
そして又、たとえグレース商会がペルーの経済や社会にプラスの役割を果したとしても、ペルーのかかえている根本的な問題は厳然として残っている。例えば海岸地帯と山岳地帯の大きな経済的社会的落差の問題について考えてみよう。
山からパラモンガ農場に移りすんだインディオはそこでよりよい生活水準を得、市民としての生活を知り、将来に対する希望を与えられる。それはさまざまの形で故郷の生活にも影響を与えるだろう。一つの前進である。
しかしその故郷生活は、学校もなく、主人の賦役に縛られ、あるいは不在地主から借りた小さな小作地にすがっているものだとしたら、そこにはその前進が根を下す土壌がない。むしろその落差は拡がるばかりである。ここに問題がある。
我々が最初に農場に入っていったときの奇妙な感じは、今でもはっきり覚えている。砂糖キビの畑の中に街並が見えてきてもうじき農場に着くぞと思ったら、運転手にとっくに農場の中ですよと云われた。見るものすべてが農場という冠を戴いている。町とか都市とかが本来もっている意味あるいは歴史がここにはない。すべてがつくられたものなのだとした自然と隔絶し、周囲の貧しさと無気力とから隔絶している異和感と結びついて次第にグレース〝王国〟というイメージになっていった。
それは目に見えない糸で繰る巨大な支配網という意味とともに、すべてが外からもちこまれたものであって、平均値の中から、あるいはカオスの中から生み出されたものではないということでもある。グレース商会の提起した幾つかのテーマは「ペルーは黄金の椅子に腰かけた乞食である」ことを繰りかえし主張したものである。
しかし、そのテーマ、例えば工業化の可能性、世界でもっとも生産性の高い農場、高い生活水準、優れた人材の開発等が根を下し、ペルーの底辺となるには、もう一度そのかかえている現実に立ち帰らなければならない。
そこには後進国特有の古いもの、遅れたものが歴史的に変転することなく、不消化のまま、くすぶり、澱んでいる現実がある。山岳地帯そのものがそうだし、過半を占める山の国民が疎外されている事事もその一つ。封建的な土地所有制度が残っていることもその一つ。相変らず軍のクーデターが政治についてまわることもその一つ。
これらの問題にメスを入れていくことによってしか、グレース商会の提起した問題の解決はない。その段階においてこそ、工業化ということがアメリカナイゼーションと離れてくるだろうし、その時こそ別の新しい歴史が創られる時となるであろう。

■装備■食糧■梱包■

×××装備×××××××××中島　寛××

㈠　登攀用具について

アンデスを登るということは、すなわち雪と氷との闘い、といってもよいと思う。そのため、我々は、特に雪や氷に対して入念な用意をした。

まず最初に述べなければならないのは〈スノウ・バー〉であろう。これはジュラルミン製パイプ（直径三㌢、長さ七五㌢）の特大ハーケンであり、比較的軟い雪の登攀や、アップザイレンの支点として絶大な威力を発揮してくれた。東日本アルミKKに製作していただいたこのスノウバーは出来上りの時は長さ一㍍程だったが、これではいささか実用には長いし重いので、先の三〇㌢位を切り落して使った。

〈**アイス・ハーケン**〉はいろいろな種類を用意した。一番有効だったのは、コの字型のものだった。これはシモンの最新型をモデルにして門田に製作を依頼したものだが、軟氷でも硬氷でも非常に有効だった。長さ二三㌢と二八㌢の二種をつくったが、氷の硬さに応じて使いわけることが出来て便利だった。パイプ型ハーケンも大量に作って持参したが、概ね有効であった。ただ非常に硬い氷の時にはリング取付部分で曲ってしまった。直径二㌢程の太さでは細すぎたのかも知れない。又、市販されている平型とV型のハーケンも持っていったが、いずれもすぐ曲ってしまって殆ど役に立たなかった。

〈**アイゼン**〉は、前に二本突出した爪のものを、共和運動具に作ってもらった。この二本の先ヅメは氷壁の登り降りに非常に役立った。特に少し気になる程長いツメだったが、それだけに有効だった。これがなくては大分登るのに難渋したことだろう。ただ失敗だったのは重さである。がんじょうさを重視しすぎたためひどく重いものになった。アクロバチックな登攀を助けるためには、もっと軽さを重視しなければならない。

その他、普通内地では使わない特殊なものはというと〈**縄梯子と掛梯子**〉がある。いずれもジュラルミン製の軽いもので、簡単にセット出来、ボッカの時に非常に役立った。四台づつ持っていったが、途中で盗まれたりして、結局使ったのはプカヒルカでの三ヵ所だけだった。機動性を要したボリビアの山ではBCから持出す機会はなかった。

㈡　露営用具、その他について

〈**テント**〉はナイロン（東洋レーヨン提供）製ミード型の二人、三人、四人、六人用をそれぞれ一張、ビニロン（倉敷レーヨン提供）製夏用テントの一〇人用三、八人用二を用意した。すべて吉田テント製作である。種類、個数とも大体丁度よい程度であった。特に少人数でアチコチ移動することの多かった我々にとって、この内最も調法だったのは三人用のものだった。性能については文句なく満足だった。何しろ最大の敵たる強風と殆ど無縁だったのだ。強いていうなら、アンデスでは極力薄手の生地、簡単な構造にして軽重化をはかるのが得策であり、その点では改良の余地がある。

〈コンロ〉は主にスベアとプリムスの石油用コンロを使った。ベースキャンプではカミシマの家庭用コンロを用いた。調子はおおむね好調だった。石油は1㍑入カンに密閉して持参したが、大変便利だった。高処でも石油はよく燃えた。

〈寝袋〉はダブルにして内袋は羽毛、外袋はエクスラン綿をつめた。羽毛工業KKに製作を依頼したが、モデルが南極越冬用のだった為か、大きさがかさばって、アンデス用には失敗だった。それは〈防寒服、上下〉にも云えることだ。タフタ地が足りなくてツイールを使用した点が最大の失敗で、何よりもっと軽量化を考慮しなくてはならない。

〈酸素吸入器とボンベ〉は住友軽金属KKと川崎航空機KKの御好意によって、医療用の一式を整えることが出来た。アンデス登山では登頂に酸素を必要とすることは考えられず、われわれもあくまで医療用に携行したが、高山病に非常に有効だった。実際の使用量は1㍑そこそこだったが、これだけあるということで、先ず心理的に非常に気が楽に行動出来た。とにかく高山病には不可欠なものであろう。ただこれもやはりもっと軽量なものが普及することを望んでやまない。

㈢ まとめ

我々の使用した道具の内特筆すべき主なものは前記の通りであるが、その内アンデスでもどうしても不可欠なものはといえばアイスハーケン（スノウ・バーとコの字型）と酸素吸入器位のものであろう。その他は普段日本の冬山で使っている物以上の特別なものは強いて必要としないと思う。アンデスはどちらかというと、

××××食糧××××××××××××××中川滋夫××

㈠ 方針

日数は遠征前半のコルディエラ・ブランカに三〇日、後半アポロバンバに三〇日、計六〇日、人員は隊長以下隊員七名、ポーター三名、計一〇名を計算基準とし、延六百日人分の計算をたてた。

現地での調達は、野菜・果物・肉・卵類だけとし、残り全て、国内で調達・梱包した。

国内で調達したものは、普段我々が内地の山で使用しているものと、ほとんどかわりがない。特別なものを強いて述べれば、米は全てα米、昼食はセンベイ類にしたこと、高温かつ乾燥した空気を考慮し、飲料物を多量に持っていったことぐらいであろう。七、八千㍍を越すヒマラヤと違い、五、六千㍍程度のアンデスでは、さして食欲減退は考えられないし、隊長を除いて、全員二〇代の若い隊員であるから、その体力に応じて、無味乾燥になりがちなレーション・システムを排し、「ウマイモノヲ作リタラフク食ベル主義」に徹した。梱包の内分けは、時期、場所に関わりない基本食梱包と、それを補う副食物の梱包、その他ジュース・ビール・タバコ等の梱包の三種類に大別した。

我々の遠征は一つの山だけが目的ではなく、アポロバンバに於

いては、隊が二つに分れてそれぞれ別の地域で登攀を試みる性質のものであったので、融通性、弾力性に富んだ仕分けの必要があったのである。

副食物の梱包は、キヤラバン用、B・C用、中間キャンプ用、ハイキャンプ用、とそれぞれ推定日数より割り出された数字から、梱包数を計算した。この場合、高処用食糧として、軽量化、高カロリー食、消化し易さの諸点に留意したことはいうまでもない。

要するに、米・ラーメン・センベイ・ビスケット等の基本食に適当な副食と、現地で調達した生鮮食品とをかみ合せた、アットホームな料理を作ることに心掛けた次第である。

㈡ 結　果

我々が一番心配したのは、センベイ・干物・海苔等の湿気やすい食糧であったが、ポリエチレンの袋を三、四重にかぶせ輪ゴムで結んでおいただけで開梱して何んら変質していることもなく、日本の味を、アンデスで充分堪能できた。現地食の調達も、果物・野菜は都会で、卵・肉（羊・鶏）は現地で手軽に入手でき、キャラバン、ベースキャンプでは、まずまず動物性タンパクの不足はなかったといっていいだろう。失敗したことをあげるなら、チキンラーメンの油が変質して少々鼻についたこと、飲料があいくらあっても足りない程であった事位であろうか。

×××梱包×××××××××××倉知　敬×××

㈠

数量九〇個、総重量三六一八・一キロの荷物が、横浜から船積された我が遠征隊の全財産であった。CAUHのマークもあざやかにズラリと並んだ所をながると、これは相当な壮観だった。

数と重さから割り出せば明らかなように、一個の梱包単位の平均の重さは四〇キロ見当である。外装木箱をはづすとこれが三〇キロ位になり、丁度二個を馬に振分けにして積める重さに当るのである。又、人が背負う時には一個が単位となった。この梱包単位は概して丁度よい大きさと云える。しかしブーロの積載量四〇―五〇キロという半端な例外もあって、苦労させられたこともあった。

個々の梱包の形態は、カートンボックス（C・BOX）、キャンバスバッグ（C・BAG）、ワイヤバンド（W・BOX）等を組合せ、内容により次の四種にした。

(1)　∧C・BAGのみ∨テント、寝袋など変形の恐れのないものは、そのまま袋につめて細引でしばっただけだった。少々強度が心配だったが、幸い事故はなかった。

(2)　∧C・BOX＋C・BAG＋W・BOX∨殆どの物はこの三重梱包を用いた。内にC・BOX（使用上の分類用）、中にC・BAG（キャラバン用）、外にW・BOX（輸送用）を使った。

C・BOXは一個一〇キロ（主に食料用）と一五キロ（装備用）の二種を用い、それぞれ三個、二個が一つのC・BAGにつめ込め

る大きさにした。箱の内側には日本加工製紙ＫＫ提供のＶＰＩ防錆紙を、さらにその中にはライフファン工業ＫＫ提供のポリエチレン袋を使い完全な包装をした。そのため内容物は二ヵ月近い赤道を越える旅にも殆ど変質しなかった。

Ｃ・ＢＡＧは底が五〇㌢四方、高さ一㍍の大きさの袋。吉田テント製。なかなか調法で、馬方用の寝袋にまでなった。番号を付け、四色に色分けして使った。キャンバスでも結構丈夫だから、殆ど外装はこの袋だけでよい位だ。

Ｗ・ＢＯＸは三度ベースキャンプを変えたわれわれにはいささか強度の点で不満足だった。軽便さには秀れていようが、再三の使用に耐えないところは致命的である。帰りに使えたのは六〇個の内二八個だけだった。

(3)〈Ｃ・ＢＯＸ＋木箱〉乾電池、石油、酸素ボンベなど特殊なものは日本荷造工業ＫＫにパッキングを依頼し厳重な木箱包装とした。

(4)〈ワク組み木箱〉背負子、旗竿などは直接木箱へつめた。荷造は(3)と同様に日本荷造工業に依頼した。

(ニ)

梱包上一番やっかいだったのは、荷の分類でである。それが要る時に応じて、同じ情況で使う物をまとめることと、紛失盗難によって支障をきたさぬ様適当に散らばすこと、という矛盾した至上命令を満足させねばならないのだ。結局、同じ様な組合せのものをいくつか作るしかなかった。

用いる物と食べる物を大別し、あとは土の上で使うか雪の上で使うかで分けた。どちらかというと、少々細かく分けすぎて必要なものを探し出すのが大変だった。だがたまたま盗まれたピッケルが分散させてあった内の一部だったのは助かった。たんねんに分けて詰めたお陰である。

荷物は、出来上りのおくれたスノウ・バーを除いて、すべて川崎汽船キューバ丸で輸送した。貨物としてでなく、手荷物として送ることが出来たが、パッキングリスト、領事インボイス、ＢＬ等総ての船荷書類が要った。船積までの事務手続は日本通運ＫＫを通して行った。特に日通の宝田氏には梱包から事務全般にわたって大変お世話になった。

そして又、実際の作業にあたってくれた岳友達の献身的な援助こそ、この繁雑な仕事をなし遂げるに最も力あったものだった。

行動概要

凡例・・隊員・Y＝吉沢・A＝甘利・T＝中村・M＝丸山・S＝中川・H＝中島・K＝倉知・
現地参加・RP＝パトルコ・EM＝エミリオ・PB＝パブロ・DE＝デメトリオ・（以上ペルー）
MA＝マルチネス・CT＝センテーノ・PT＝ピーター・
MO＝マリオ・（以上ボリビア）
キャンプ・BC＝ベースキャンプ・AC＝前進キャンプ・HC＝高処キャンプ・VE＝ベナンシオ・JU＝フリオ・CI＝第一キャンプ・

××××××

六・一	六・二	六・三	六・四	六・五
曇のち晴	晴 夜、雨（BC） 雪（C1）あり	曇のち晴	晴のち曇 夜、雨（BC） 霙（C1）あり	晴のち曇
C1偵察（H、EM） 解梱作業	C1建設 △C1入る（A、T、H、RP） △ボッカ（M、S、K、EM、PB、DE）	北氷河偵察（A、T、H、RP） C1ボッカ △C1入る（M、S、K） △ボッカ（EM、PB、DE）	北氷河偵察（T、M、S、K） C1ボッカ（EM、PB、DE） BC下る（A、H、RP）	C1は休養 C1ボッカ △C1入る（A、H） △ボッカ（PB、DE） 下山（RP）
BC（九・三〇）→氷河末端（一二・〇〇）→氷河登る（一四・三〇）→BC（一六・〇〇）	BC（八・五〇）→C1（一四・三〇） BC→C1→BC（一七・三〇）	C1（九・〇〇）→大雪原（一四・〇〇）→C1（一五・三〇） BC（一〇・〇〇）→C1（一四・三五） BC→C1→BC（一六・〇〇）	C1（八・二〇）→クリンチ尾根（一五・三〇）→C1（一八・〇〇） EMはC1に入る C1（一一・〇〇）→BC（一三・三〇）	BC（一二・〇〇）→C1（一四・三〇） BC→C1→BC（一六・〇〇）

六・六	六・七	六・八	六・九	六・一〇
霙のち曇	曇（C1） 晴（BC）	晴	晴	晴一時曇
C1は停滞 氷河湖・ハッソンガイコ往復（Y、DE）				
北氷河偵察（T、M、H） 南氷河偵察（A、S）				
デポ地へボッカ（K、EM、PB） C1ボッカ（PB、DE）				
C1（七・一五）→五四〇〇米地点（一五・一〇）→C1（一八・〇〇） C1→クリンチ尾根横断→C2予定地（一五・〇〇）→C1（一八・〇〇） 北氷河中段の大雪原まで二回往復する PBはC1入る	C2建設 △C2入る（T、H、S） △ボッカ（AM、EM、PB） C1入る（Y）	C1（九・〇〇）→C2（一四・〇〇） C1→C2→C1（一六・三〇） K、BCまで下り、Yと共にC1へ入る	C2（九・三〇）→C3予定地（一五・三〇） →C2（一七・三〇） C1（九・二〇）→C2（一四・〇〇） 氷河末端にナワバシゴかける C1→尾根上（一四・四〇）→C1（一七・三〇） PBはA達と共にC2へボッカし、Y達とC1に戻る	C3建設 △C3入る（A、H、K）
				C2（一〇・三〇）→C3（一四・〇〇）

	六・一一	六・一二	六・一三	六・一四
	晴一時曇	曇一時雪	晴のち曇	晴のち曇
ボッカ（T、EM）				
C1↑↓C2（M、S、PB）				
アイスフォール試登（A、H、K）				
C3入る（T、S）				
BC↑↓C2（PB、DE）				
C2→C3→C2（二・三五―一三・〇〇）→C1（一四・三〇）→C2（一五・三〇）	C3（六・〇〇）→氷柵（一四・〇〇）→C2（一八・〇〇）	C3（五・三〇）→頂上（一八・一五―四五）→ビヴァーク点（二一・〇〇）	C3（五・二五）→頂上（一三・二五―一五・五五）→C3（一八・五〇）→ビヴァーク点（六・一〇―一五・〇〇）→C2（一六・〇〇）→BC（一一・三〇）	C3（一六・〇〇）→C2（一七・〇〇）
PBはMと登り、Sと下る	フィックス一二〇米張る	EMはC2へ入る	EMはC2より	PBはBCより

一時雪	六・一五	曇			
BCへ下る（H）		時々雪			
中央峰方面へ（M、K） C1へ下る（S、EM、PB）	六・一六	晴、のち曇			
イタリア隊BC往復（M、K） BCへ下る（A、S、DE、PB、EM） C1入り（H）	六・一七	曇時々雪			
中央峰↓C2（M、K） C1・C2撤収（T、M、H、K） C1↑↓BC（EM、PB、DE）	六・一八	晴			
裏山往復（Y、K） ハンカパンパへ下る（S、H、PB）	六・一九	晴			
ヤナハンカ谷つめコル・デ・ハポネスまで往復（Y、K、DE） 氷河湖ハツンガイコ往復（M、EM）	六・二〇	晴			
ポマバンバへ下る（T、EM） ハンカパンパよりBCに戻る（S、H、PB） 梱包作業					
EM、PBはC1からC3へ登り、C2へ下る 登頂成功の伝令					
C3（八・四五）↓大雪原（一七・〇〇） C2（一三・〇〇）↓C1（一四・三〇）					
大雪原（九・三〇）↓伊BC（一三・〇五―一四・二〇）↓大雪原（一八・〇〇） AはC2より、他はC1より					
（七・三〇）↓C2（九・〇〇） C2（一一・五〇）↓C1（一五・三〇―一七・〇〇）↓BC（一九・〇〇）					

(月 日)	(天 気)	(記事)
六・二一	晴	馬を連れBCに戻る（EM） 梱包作業
六・二二	晴一時曇	キャラバン第一日
六・二三	晴	キャラバン第二日
六・二四	晴	キャラバン第三日 パサカンチャ→ワヤンカ （トラックにて）
六・二五	晴	ワヤンカ→ワラス（トラックにて）
六・二六		ワラス集結
七・一四	晴	ラパス→スチェス（T、H） （ジープにて）

××××××

七・一五	晴		ラパス↓ウヤウヤ（トラックとジープにて）
七・一六	晴		ＢＣ設置
七・一七	晴		リティ・パタ登頂（Ｓ、ＣＴ） 偵察 △チョクニャコータ方面（Ａ） △ルスニ方面（Ｋ、ＭＴ） △カカワイチョ方面（Ｍ、ＶＥ）
七・一八	晴のち曇		馬引連れＢＣ到着（Ｔ、Ｈ） ＢＣ南の岩山往復（Ｙ、Ｋ）
七・一九	晴のち曇	キャラバン第一日	ＢＣ（一〇・〇〇）↓ルスニ（一六・三〇）
七・二〇	晴のち曇	キャラバン第二日 ＡＣ建設	（八・一五）↓国境峠（一四・三〇）
七・二一	晴のち曇	偵察（Ｔ、Ｋ、ＣＴ）	ＡＣ（八・〇〇）↓ジャンダルム下（一六・〇〇）↓ＡＣ（一九・〇〇）

〈2－A〉 オコルルニ方面・・北方隊・・Ｔ・Ｍ・Ｋ・ＣＴ・ＶＥ・

			ラパス（八・〇〇）↓ウヤウヤ（一九・四〇） Ｔ、Ｈはスチェス滞在
			ウヤウヤ（七・三〇）↓スチェス（一〇・〇〇） ↓チョクニャコータ（一三・三〇） Ｔ、Ｈはスチェス滞在
			ＢＣ（一〇・二〇）↓頂上（一六・五〇）↓ＢＣ（一九・一五）
			スチェス（一〇・三〇）↓ＢＣ（一五・三〇） ＢＣ（九・〇〇）↓岩山（一六・〇〇）↓ＢＣ （一七・〇〇）

七・二二	晴一時曇	HC建設（T、K、VE）	AC（一〇・〇〇）→HC（一四・〇〇）VEはACに戻る
七・二三	晴	チャウピオルコ・ノルテ登頂（T、K）	HC（六・三〇）→頂上（一四・一〇）→HC（一九・一五）
七・二四	晴	プイナ・パタ登頂（M、CT）HC撤収（T、K）	AC（九・一五）→頂上（一二・三五）→AC（一九・〇〇）HC（一二・〇〇）→AC（一六・〇〇）
七・二五	晴のち曇	北方偵察（K、CT）停滞（T、M、VE）	AC（九・〇〇）→ロス・トレス・オンブレス西尾根（一四・〇〇）→AC（一七・〇〇）
七・二六	晴のち曇	ロス・トレス・オンブレス登頂（T、M、K）	AC（九・三〇）→頂上（一五・三〇）→AC（一八・一五）
七・二七	晴のち曇	ネバドK登頂（M、K）	AC（七・一〇）→コル（一一・〇〇）→頂上（一五・〇〇）→AC（一八・三〇）
七・二八	晴	AC撤収・BC帰着	AC（六・〇〇）→BC（一七・三〇）
〈2—BV チョクニャコータ方面・・南方隊・・A・S・H・MT・JU・			
七・一九	晴	AC建設	BC（一一・一五）→氷河末端AC（一七・一五）
七・二〇	曇のち雪	チョクニャコータ登頂（H、MT）	AC（九・三〇）→コル（一二・二五）→イチ

七・二一	晴	
七・二二	晴のち曇	チョクニャコータ東の氷河偵察（A、S）
		HC建設
		チャウピオルコ登頂（H、S）
		パロマニ・グランデ登頂（A、MT）
七・二三	晴	サユヨ登頂（A、S、H）
七・二四	晴	HC撤収
七・二五	晴	AC撤収・BC帰着
七・二六	晴	停滞
七・二七	晴	カカワイチョ登頂（Y、H） カイェホンAC建設（S、MT、JU）
		コヨ（一四・一〇）→頂上（一六・五五）→AC（一九・一五） AC（一〇・〇〇）→コル（一三・〇〇）→HC（一七・三〇）
		HC（八・〇〇）→頂上（一五・一〇―一六・一〇）→HC（一九・一五） HC（八・三〇）→頂上（一五・一〇―五〇）→HC（一七・四〇）
		HC（九・二〇）→頂上（一七・一〇）→HC（二一・一五）
		HC（一二・二〇）→AC（一六・三〇）→AC（一五・三〇）
		AC（一二・〇〇）→BC（一四・三〇） JUはBCよりAC往復
		BC（八・三〇）→頂上（一六・〇〇）→BC（二〇・四五） BC（一〇・〇〇）→AC（一四・三〇） JUはBCに戻る

七・二八	晴		
七・二九	晴	・・北方隊BC帰着後・・	
		カイェホン試登（S、MT）	AC（八・三〇）→頂上直下（一六・三〇）→ビヴァーク点（一九・〇〇）
		AC撤収・BC帰着（S、MT）	ビヴァーク点（八・〇〇）→AC（一二・〇〇―一五・〇〇）→BC（一八・〇〇）
七・三〇	晴	ププヤへ先発(Y、A、T、M、H)	BC（八・〇〇）→プヨプヨ（一五・〇〇）
七・三一	晴	停滞	トラック待つも、来ず
八・一	晴	アナネア往復（S、MA、CT）	トラピチェ経由、馬の調達成らず、トラピチェ泊、翌日BCに戻る
八・二	晴	ネバドNK取付点へ（S、K、VE）	BC（一七・三〇）→取付（一八・三〇）→ビヴァーク点（二〇・〇〇）
八・三	晴	ネバドNK登頂（S、K）	取付（七・三〇）→頂上（一二・三〇）

××××××

八・三	晴	停滞	
八・四	晴	ヌビ方面偵察（T）	M、H、コハタへ下る
		トヨタのトラック、ウヤウヤ着	BC（一〇・一五）→ヌビの湖（一四・〇〇）→BC（一八・三〇） M、トラックに会う
八・五	晴	チョクニャコーター→ウヤウヤ（トラックにて）（M、S、K、MT、CT、VE、JU）	ウヤウヤ（七・〇〇）→チョクニャコータ（九・三〇―一三・〇〇）→プヨプヨ（一八・三〇） H、コハタよりウヤウヤに戻る。PT、MO、ラパスに戻る
八・六	晴	停滞・梱包作業	H、ウヤウヤより戻る
八・七	晴	キャラバン AC建設	BC（一〇・二〇）→AC（一四・三〇）
八・八	晴	カニサヤ登頂（M、S）	AC（八・三〇）→頂上（一七・四〇）→AC（二五・〇〇）
		カサラ試登（Y、CT）	
八・九	晴	停滞	
八・一〇	晴	HC建設（A、M、S）	AC→HC（一七・〇〇）
八・一一	晴のち曇	カバヤニ登頂（A、M、S）	HC（八・〇〇）→頂上（一四・三〇）→HC

八・一二	晴のち曇		
八・一三	晴のち曇		
		ウェランカヨック登頂（Y、M、MT、CT）	
		ウェランカヨック南壁試登（A、S）	
八・一四	晴のち曇	ＡＣ撤収・ＢＣ帰着	

八・一〇	晴		
			アカマニ登頂（T、H、K）
八・一一	晴のち曇		
			HC帰着
八・一二	晴のち曇		
			ヤナオルコ登頂（T、H、K）
八・一三	晴のち曇		
			HC撤収
			キャラバン第一日
八・一四	曇		
			キャラバン第二日・BC帰着
・・両隊BC帰着後・・			
			HC（七・一五）→頂上（一五・〇〇）→ビヴァーク点（一九・三〇）
			HC（一〇・〇〇）→HC（一一・三〇）→頂上（一三・一五）→HC（一八・〇〇）
			HC（一二・〇〇）→カニサヤ湖（一四・〇〇）VE、馬連れカニサヤ湖へ来る→カワイヨネ（一八・〇〇）
			（八・〇〇）→BC（一五・〇〇）
八・一五	晴のち曇		
			トヨタのトラック来る
八・一六	晴		
			プヨプヨ→ラパス（トラックにて）
			BC（七・〇〇）→ラパス（二・三〇）
八・一七	晴		
			ラパス着

（附記）本遠征の概要については、別に吉沢一郎「コルディエラ・ブランカとアポロバンバ」（「山岳」第五七年）及び中村保「ペルーアンデス・ネバドプカヒルカ」（第二次RCC編「登攀者」）がある。

会計報告

＜収入の部＞

法人関係　寄贈金	¥ 5,355,000
針葉樹会会員　〃	240,300
如水会会員　〃	194,000
昭和15年会会員〃	25,000
一橋大学援助金	150,000
隊員負担金	1,055,600
現地装備売却金	120,000
合　　計	¥ 7,139,900

＜支出の部＞

準備費（注1）	¥ 377,300
渡航費（注2）	1,656,800
荷物輸送費（注3）	598,500
装備調達費（注4）	1,132,800
食糧調達費	311,680
傷害保険掛費	132,200
現地滞在費（注5）	908,640
現地交通輸送費（注6）	958,500
人夫・馬・雇用費	348,480
通信費	166,520
現地雑経費	144,880
整理費（注7）	403,600
合　　計	¥ 7,139,900

（注１）

事務諸経費	¥	191,500
交　通　費		131,800
通　信　費		54,000
計	¥	377,300

（注２）

航空運賃（２人分）	¥	1,078,500
船舶運賃（５人分）		550,000
渡航手続諸掛		28,300
計	¥	1,656,800

（注３）

船積諸掛	¥	130,700
海上運賃（３トン分）		69,200
通　関　費		152,000
梱　包　費		158,000
スノウ・バー別送運賃		88,600
計	¥	598,500

（注４）

防寒服・寝袋	¥	224,000
アイゼン・三ッ道具類		136,000
テント製作費		50,500
石油コンロ		50,000
クツ加工費		22,500
ザ　イ　ル		90,000
写真材料費		370,400
タイプライター		29,700
地図・資料		20,200
その他小物雑品		139,500
計	¥	1,132,800

（注５）

リマ宿泊費	¥	221,700
ラパス宿泊費		121,000
旅行中宿泊費		50,000
ペルー食費他諸掛		295,000
ボリビア食費他諸掛		155,000
雑　支　出		65,940
計	¥	908,640

（注６）

ブランカ方面	¥	173,100
アポロバンバ方面		636,400
（リマからラパス交通費含む）		
経済調査旅行		149,000
計	¥	958,500

（注７）

事務整理費	¥	80,300
通　信　費		118,700
交　通　費		30,000
写真展費		54,100
贈呈用写真		94,500
雑　支　出		26,000
計	¥	403,600

遠征を援助して頂いた法人・個人一覧

（ABC順）

朝日新聞社
味の素KK
中外製薬KK
大和証券KK
同和鉱業KK
第一製薬KK
大協石油KK
江崎鉄工所KK
古河鉱業KK
古河電工KK
古河アルミニウム工業KK
富士通信機KK
富士電機KK
富士写真フィルムKK
藤倉ゴム工業KK
ゼネラル物産KK
一橋大学
服部時計店KK
日立製作所KK
東日本アルミKK
伊藤忠商事KK
出光興産KK
十条製紙KK
キリン麦酒KK
神田精養軒
共和運動具KK
花王石鹸KK
川崎汽船KK
小西六写真工業KK
川崎航空機工業KK
倉敷レーヨンKK
近藤商事KK
キャノンカメラKK
ライオン歯磨KK
ラテンアメリカ協会
ライファン工業KK
三井物産KK
丸紅飯田KK
三菱商事KK
三井船舶KK
三井造船KK
三井金属鉱業KK
三菱金属鉱業KK
三菱造船KK
三菱日本重工KK
森六
松坂屋KK
丸善石油KK
明治製菓KK
森永製菓KK
明治製糖KK
明治乳業KK
ニッカウイスキーKK
日東証券KK
野村証券KK
日興証券KK

日本損害保険協会
日本信託協会
日産自動車KK
日本鉱業KK
日清製粉KK
日本郵船KK
日本電気KK
日本皮革KK
日本甜菜製糖KK
日本加工製紙KK
日本油脂KK
日本放送協会
日本ビクターKK
日本ペルー協会
日本エクスラン工業KK
大阪商船KK
王子製紙KK
パイロット万年筆KK
住友商事KK
住友金属工業KK
日綿実業KK
日商KK
日本軽金属KK
日本団体生命保険KK
住友軽金属工業KK
住友化学KK
生命保険協会
三楽酒造KK
サントリーKK
三共KK
KK山晴社
新日本電気KK
シチズン時計KK
塩野義製薬KK
東洋棉花KK
東洋高圧工業KK
東京銀行協会
東京電力KK
東京瓦斯KK
トヨタ自動車工業KK
東洋レーヨンKK
東京食品KK
東京製綱KK
東綱商事KK
東京芝浦電気KK
東洋紡績KK
武田薬品工業KK
帝人KK
太平洋貿易KK
大洋漁業KK
東京光学機械KK
山崎証券KK
横浜ゴムKK
安田生命保険SK

如水会々員(東京及び大阪)
昭和一五年会々員
針葉樹会々員

1. プカヒルカ北峰（6050m）の頂上。（左）
The Summit of Pucahirca Norte.

2. プカヒルカの主稜線より西方を望む。（下）
左より，キタラフ，アルパマヨ，サンタクルス。
Quitaraju Alpamayo Santa Cruz. (left to right)

プカヒルカ東面
左より，プカヒルカ北峰（6050m），アメリカン峰（6030m），アンヘレス峰（5800m）。
The Eastern Side of Pucahirca. Pucahirca Norte, Americans' Peak, Angeles Peak.(left to right)

プカヒルカ西面
左より，アンヘレス峰，アメリカン峰，プカヒルカ北峰。
The Western Side of Pucahirca. Angeles Peak Americans' Peak Pucahirca Norte. (left to right)

5. アンデス高原の紳士・ヤーマとチャウピオルコ山群。
Llama on Andean Highland and Chaupi Orco group.

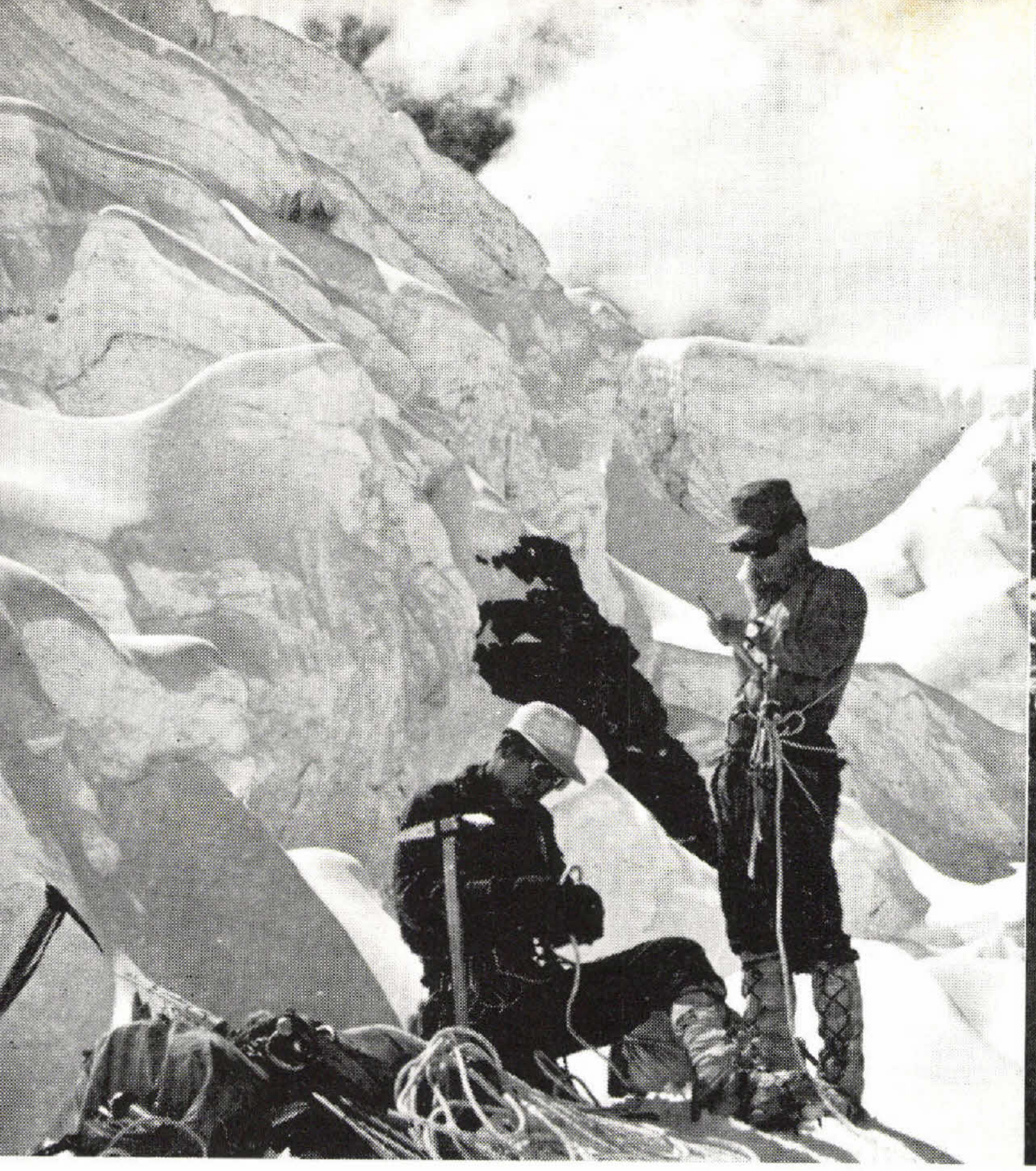
6. ププヤの全貌・左より，ウェランカヨック（5836m），カサララ，カニサヤ（5750m），
カバヤニ（5700m），アカマニ（5700m）。
Pupuya group. Huerancayoc Casalala Canisaya, Cabayani Acamani, (left to right)

中村，中川，丸山，倉知，背後は，ウェランカヨック氷河とコロロ峰。

1961. Huerancayoc gracier and Cololo in the background.

7. プカヒルカ南氷河，後方はアメリカン峰。
The gracier of the Eastern Side of Pucahirca Norte. Americans'Peak in the background.

8. 前列左より，甘利，吉沢，中島，順次上
The 7 members of the Andean Exp



10. プカヒルカ南氷河にて

On the gracier of Pucahirca.

9. プカヒルカ北氷河末端の第一キャンプ

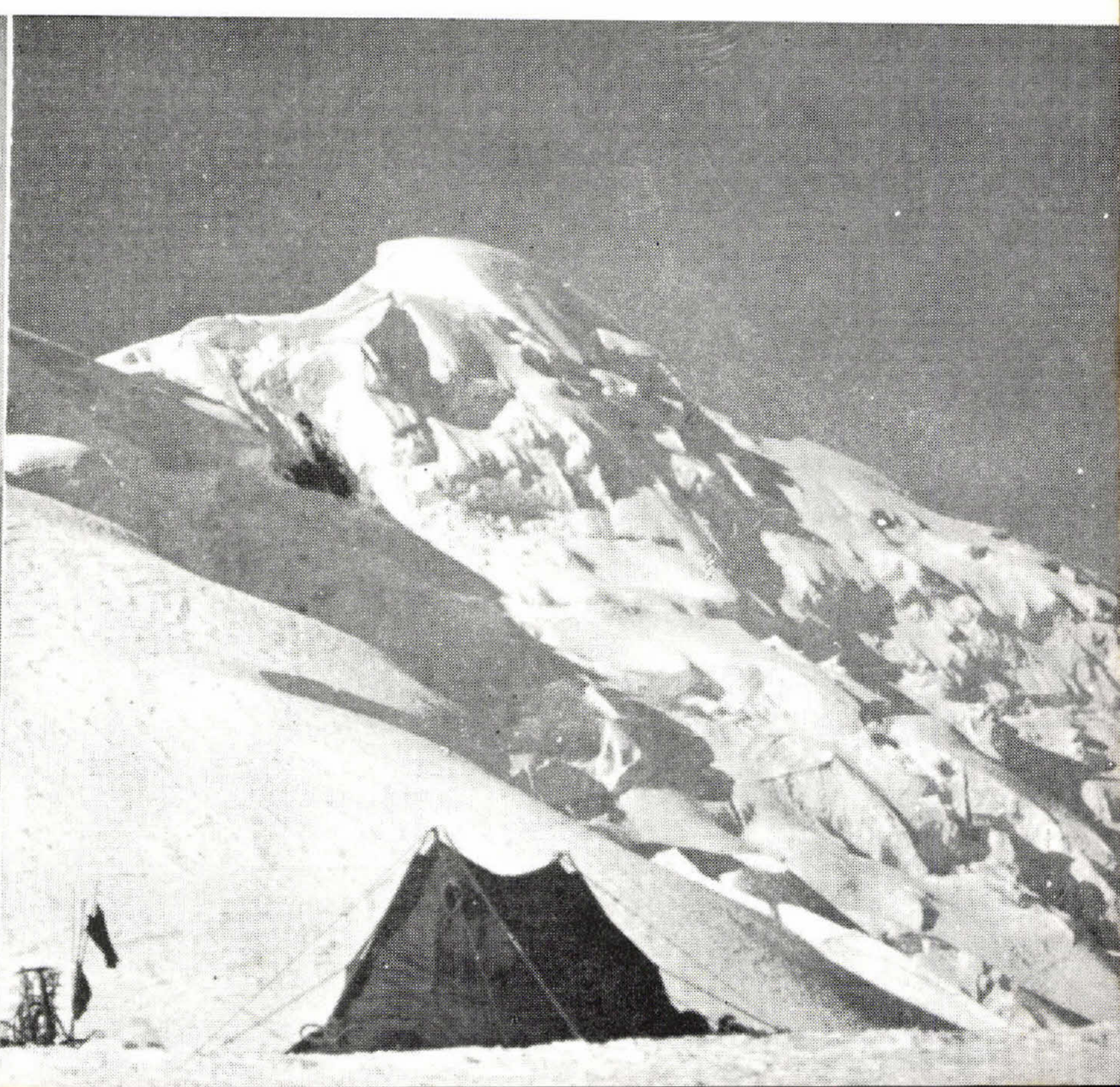
The first Camp on Pucahirca.

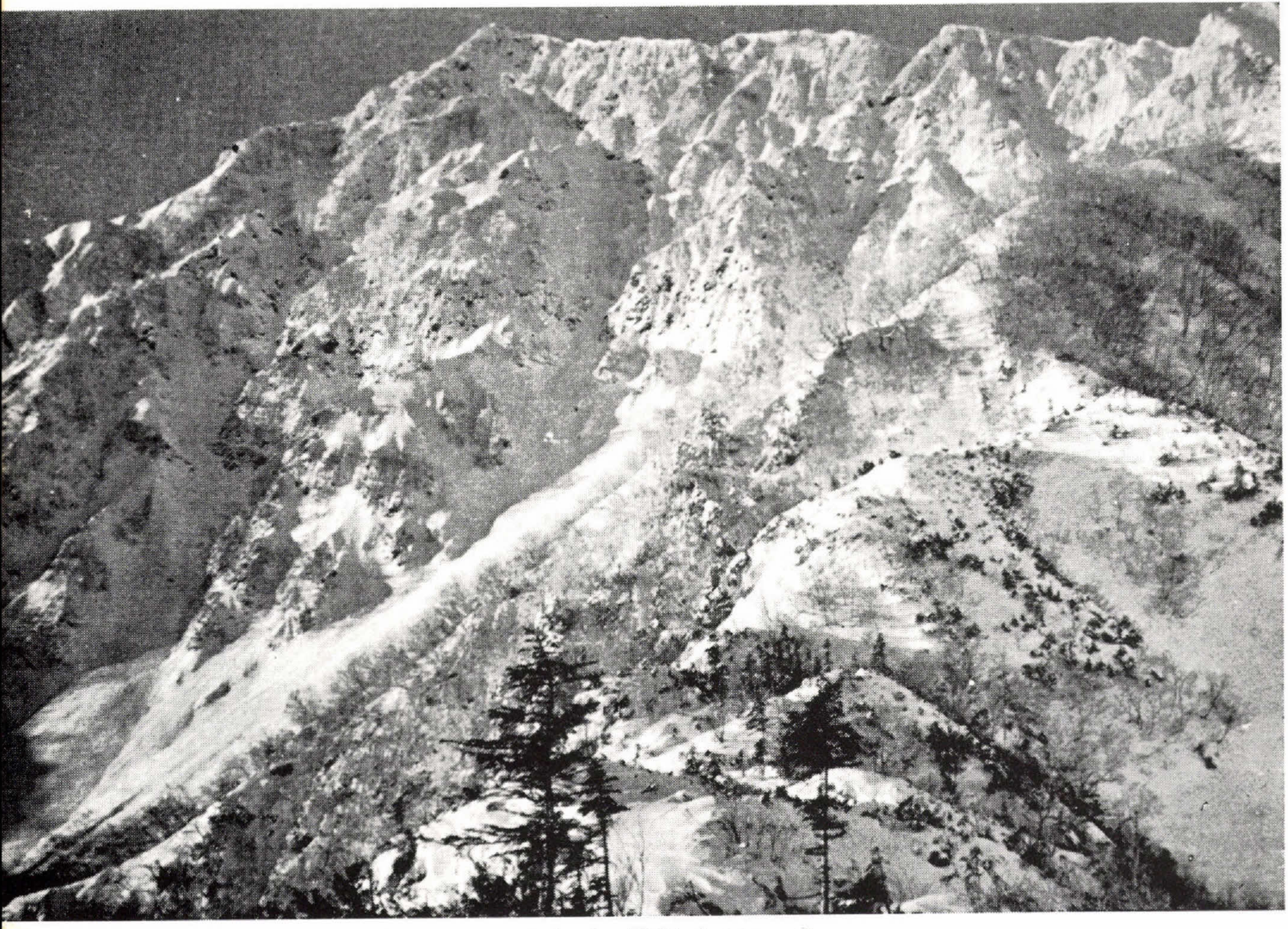
12. アカマニ（5700m）の頂上にて。

The Summit of Acamani.

11. チャウピオルコ・ノルテ（6000m）と高処キャンプ。

Chaupi Orco Norte and The high Camp.



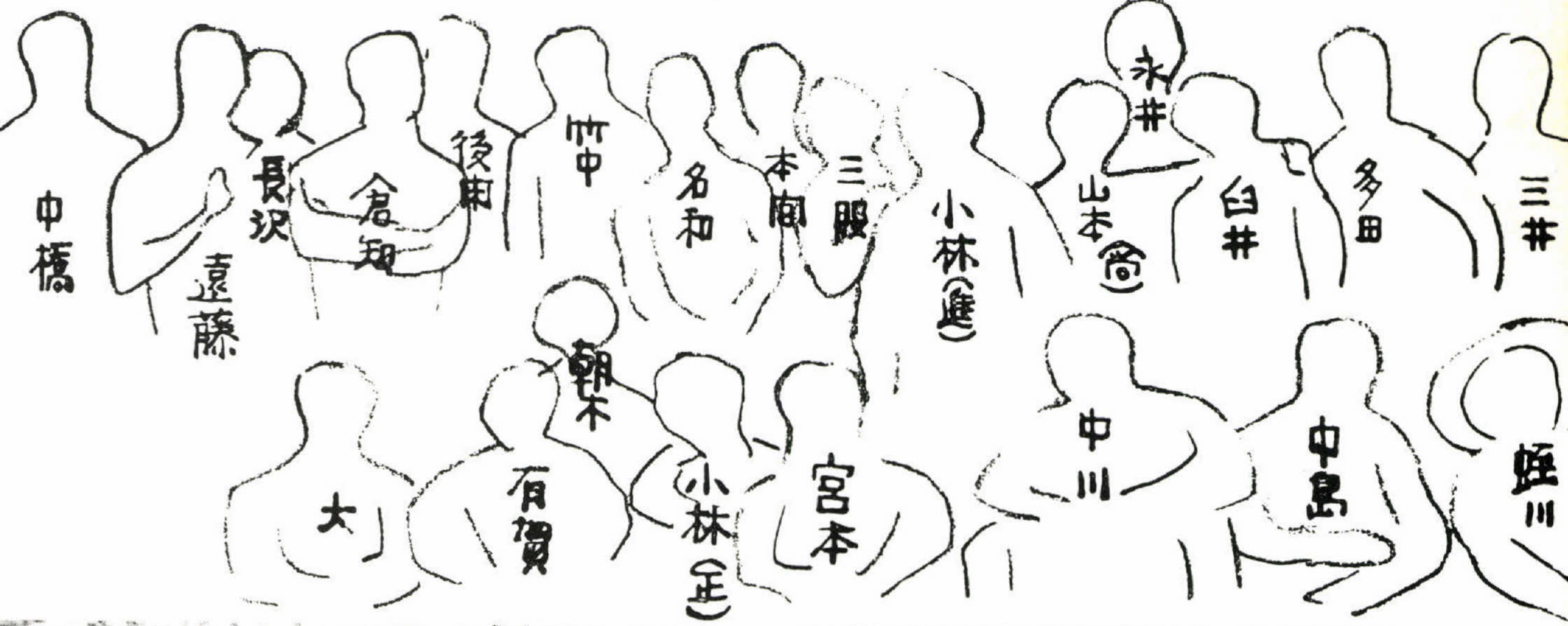


13．（上） 遠見尾根より，五竜東面の岩場（1961．4）

14．（下） 赤岩尾根・高千穂平より，爺岳・西俣奥壁（1960．12）

15. 栂池より，唐松岳，白馬岳，連華岳（1962．3）

16. 涸沢にて（1960．7）



■ 鹿島槍の集中登山

■ 爺岳をめぐって

■ 白馬と中央アルプス

■ 穂高にかえる

四年間の合宿をめぐって

四年間の合宿をめぐって

一九六〇年から一九六三年までの四年間に、一橋山岳部はどのような活動方針に基づき合宿を行ったか、その概略をここに紹介した。

倉知敬

一、はじめに

一橋山岳部、という旗の下に集まった我々は、いろいろな変革を経ながらも常にこの愛すべき集団を通じて、山岳に接して来た。そこには、単に山がそこにあるから登る、という以前に、一橋山岳部の仲間が居たのである。このことは我々が山と自分との結びつきを考える時、いつも一番大きな意味をもつ極めて重要な要素なのだ。

仲間が大勢で山に出かけるには、まず何よりある種の「まとまり」がなければならなかった。仲間が集まっても、各自が好き勝手なことをやっていたのでは最早仲間ではなくなるだろう。何か共通の意識を持ち、まとまって何かを成す所にこそ、仲間が生まれ、そして又、「部」というものが成立つ素地があるのだ。

こうしてまとまった集団が山へ登る時、そこに或る共通の「目標」が生まれる。どこかの遠い山の頂きをはるかなる目標として、みんなで力を合わせ何とかしてそこへ達しようとする、その極めて単純にして明解な「目標」である。しかし、我々の「目標」は昔から変わらぬ一貫性をもったものである訳ではなかった。「目標」は時代を経て千変万化して来た。昔、「山」と「自然」が同一視され、自然に帰れと叫ばれた時があった。又、登攀の困難さの内に或る価値を見出し、それを究極的につきつめていった華やかな頃もあった。そして今、又、一橋山岳部は或る一つの「目標」をかかげ日々山に登っている。

山を愛し、真摯なる態度をもってそれに登ろうとする者は誰でも、未知なものへあこがれ、困難なものを困難が故にやってみたいと思う、根源的な本能を持っていると云えよう。だが、殆ど開拓されつくした日本の山しか与えられていない我々にとって、この純粋な本能を如何にして満足させればよいのだろうか。

その一つの解決方法は、或る山域に様々な角度から接し、その多様な面を知ってそれを自分なりに新らしく理解する、という方法である。一つの山を綜合的に把握するというのは極めて困難であり、全部知り尽すなどというのは、およそ不可能なことであろう。しかし、その知りつくそうとする過程において、今まで知らなかった新しい発見を導き出すことは可能である。或る山域は、一連の山々でもよいし、一つの山の或る部分でもよい。それは、自分達の力に応じて選ぶべきものであろう。

こういう具合に、自分達のハイマート・ゲビートを持ちその包括的理解の為に努力を重ねること、これが現在の我々の「目標」である、ということが出来ると思う。出来ると思うとあいまいに結んだのは、このことが我々の仲間が熟考の末創り出したものでなく、ただ暗黙の内に自然に方向が定まったという性質のものだったからだ。「目標」は決して上から強制的に押しつけられたものであってはならなかったのだ。だから、まとまりの中にも、各自の嗜好に応じた多様性が貫いているのだ。

かつて、積雪期の劒岳が「目標」の的になったことがあった。それは決して完全な形で成し遂げられはしなかったが（成し遂げ得るものであってはならないのだ）、自分等なりに満足出来る所まで到達し、そして終了した。その努力の結果は針葉樹十二号に表わされている。それは、いくつかの失敗や道草の試行錯誤の連続で、まとまったものには見えないかも知れない。その成果も成功したとは云えないかも知れない。強いて云うなら成功にしようと云うべき筋合のものであろう。他人は、それは逃避である、と云うかも知れない。だが時代は移り変わったのだ。新しい状況に応じた新しい目標を探す必要があった。そう思って、劒にはあれで終止符を打ち、新しい飛躍への準備段階に入ったのである。

さて、我々の次の行動領域は、後立山、なかんずく鹿島槍と爺岳に置かれた。それから二年間、我々は様々な形で後立山へ通い、そしてこの山を終えねばならない時を迎えた。人が変わり考え方が変わると共に、山の魅力も変わり、「目標」へのアプローチの仕方すら今や変わるべき運命にあるのだ。しかし、その間には多くの仲間がいろいろなことを考え様々な体験をした。その結果は成功とも失敗とも一口では云えないが、それは皆が各自の胸に聞いて判断すればよいものである。

これから、後立山を中心に何度も山へ出かけていったここ数年間の我々の動きをまとめてみよう。決して理路整然とした「目標」の追求はなされなかったが、とにかく、いろいろな考えを持った人間が集まって何かを一緒にやったのである。今度はこれをやったと誇り得ることは成し遂げられなかったのだ。だから、まとまりの中にも、各自の嗜好に応じた多様性が貫いているのだ。

かつて、積雪期の劒岳が「目標」の的になったことがあった。それは決して完全な形で成し遂げられはしなかったが（成し遂げるために厳しい反省をともなうものとなった。我々が大学山岳部の中で考え、互に切磋琢磨してつかんだその結果は、強い問題意識と共に次の針葉樹のテーマとなるであろう。その努力の結果は針葉樹十二号に表

二、鹿島槍の集中登山

中川滋夫

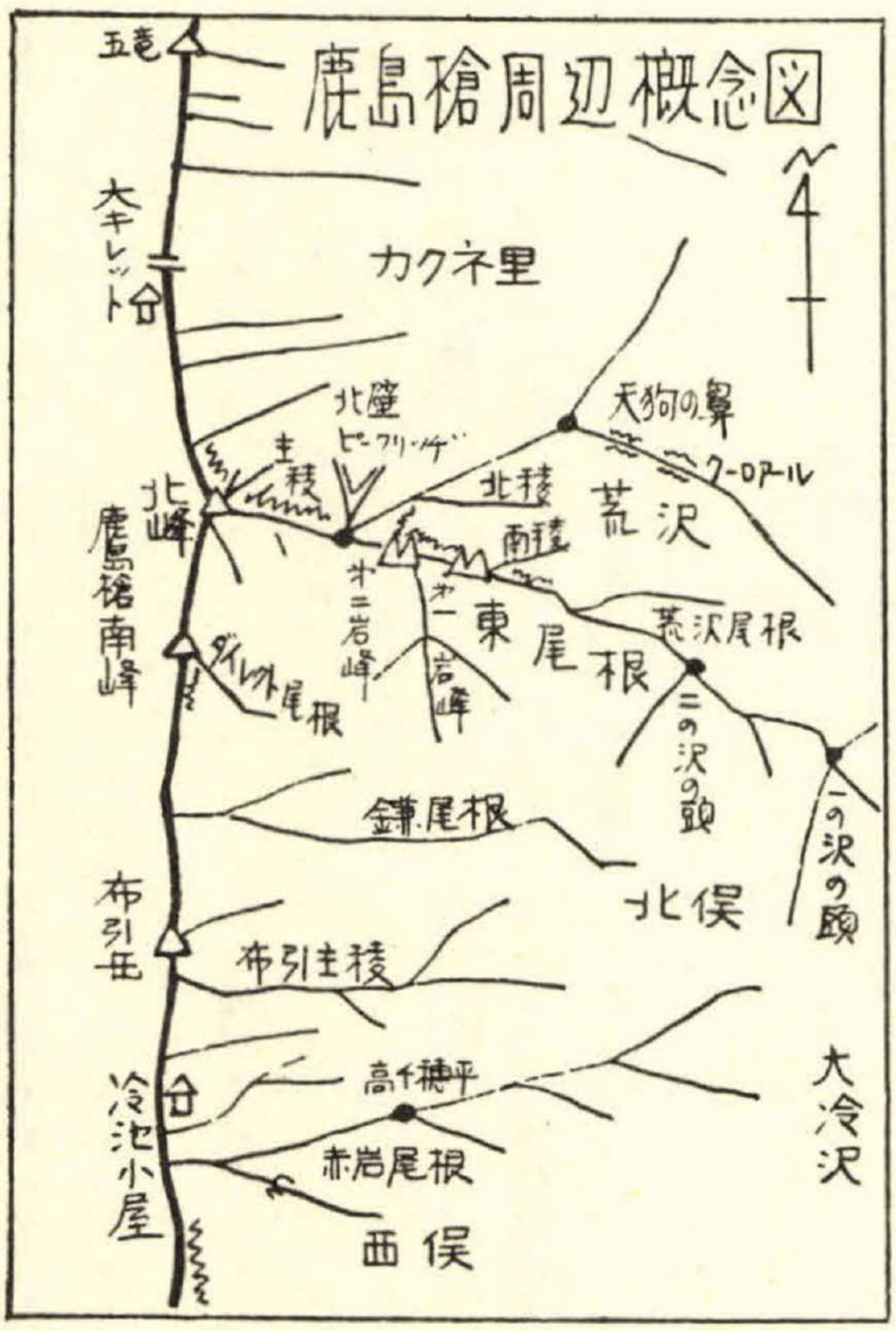
A　五月の偵察行

一九六〇年五月、来るべき冬季合宿の準備のため鹿島槍に出かけることになった。「鹿島槍」という目標は一応定めたものの、どういう形でそれを実現するか、まだはっきり決まってはいなかった。ただ、今までの合宿形態が団体としてのまとまりを重視したやり方だったために、ともすれば非常に単調な山登りになり勝ちであった。それで、一人一人が厳しい気持で冬山に対応するといった心構えとか、千変万化の山の情況に順応して機動的に行動する態度といった面で、各々が大いに不満を持っていた。そのために、出来るだけ各人が独立した一つの山登りを体験出来るよう、少人数のパーティに分けることを考えた。

鹿島槍には、そんなにスケールは大きくない、中級程度の手頃な尾根が幾つか派生している。これらを機動性ある少人数で当ってみたら相当面白い結果が得られるのではないかと思われた。差し当って、五月には天狗尾根と東尾根を選び、一応トレースしてみることにした。

〈東尾根〉へは小林進二以下宮本、倉知、臼井の四名が四月二九日向った。二日間でこの尾根を登りつめたが、雪がクサっていて雪の状態如何では相当手強いことを知った。東尾根は第一岩峰、第二岩峰の二つのギャップがキーポイントなのだが、この偵察行では二つ共三ノ沢側をまいた。もしまかなかったら二日で抜けるのは難しかっただろう。小林はこの五月の東尾根の登攀そのものの面白さをとって忠実にこの尾根を登ることを考えていたのだが、三年の倉知等が、これからのより大規模な山行の為に広くこの山域を知る方が大局的に見て肝要だと主張したので、東尾根は早く終え、カクネ里の方へ転進することにした。

近頃、偵察というと、本番の合宿の前にその場所を何度も通り最大もらさず知りつくしてしまうようなやり方をとるのが多いが、それは単に安全性が増すという点でのみ価値があることで、元来、偵察行というのは、いろいろな角度から山を見、綜合的に山を把握して、中から最良の登路を選定するのがその役目である。偵察行は又、未知の山へ登る時に、限られた状況で素早くル



ートを見付ける為のトレーニングでもなければならない。その意味から云えば今はいつまでも東尾根にのみかかづらわっている時ではなかった。

五月一日、八峰キレットを越え、キレット沢からカクネ里へ降りた。そして翌日遠見尾根へ抜け、大体のこの辺の地形を頭に入れることが出来た。

鹿島槍の北壁と結びついたカクネへの降路は、このキレット沢と天狗ノ鼻へ伸びるS状ルンゼなのだが、どちらも大迂回コースであまり楽でなさそうだ。遠見尾根と北壁を結びつける計画も将来考えていたのだが、問題ありそうだった。それよりも、多大の興味を引き起してくれたのは鹿島槍と五竜の間の、長短相混ざる変化に富んだ雪稜だった。面白そうなのをいくつか選んで登りまくるのもよいし、長大なのを採って極地法を展開するのもよい。さし当って手頃なのを一つ登ってみるつもりでいたら、他のパーティの怪我人救助に駆り出されて、結局これは見ただけで終ってしまった。

〈**天狗尾根**〉には中島寛以下、大賀、三股、大の四人が向った。四月三〇日に取り付き、翌一日には北峰頂上まで往復した。下部の方はやや地形が複雑だが、大体尾根の概要は判った。

翌日からは天狗の鼻から北壁と荒沢のヴァリエーションをトレースすることにした。来るべき積雪期の合宿にこれらの内の一つを最終目的に選ぶつもりもあったし、これらのルートがどれ程のものか、一度は体験して置かねばならないことだった。

三日、中島、大はピークリッヂP3を登った。

四日、大賀、大は北壁主稜を登攀しトレースした。

六日には荒沢北稜を中島、大賀、三股の三人が登った。（これらの詳細については記録欄参照）

北壁主稜や荒沢北稜の登攀に一応成功したことは、今後の合宿計画立案に大きな可能性ある目標を定めることとなった。四年生の三人が最後に登った北稜を、すぐさま次の厳冬期の目標にするにはいささか飛躍があったけれど、次の春の合宿の主体となるべき三年の大が北壁をトレースしたことは、大きな意味があった。しかし、ここで変に気負って張切ってしまうのも行き過ぎだろう。まだ来たるべき時までに考えなければならないことは、沢山あった。

B　冬季鹿島槍集中合宿

「目的地、鹿島槍ケ岳。天狗尾根、東尾根、赤岩尾根の三パーティにわかれる。各々全員登頂を第一目標とする。次に、第二目標として、天狗尾根、東尾根隊は、隊員の体調、天候、積雪状態などの諸条件を考慮し、余裕ある場合には、頂上を越えて赤岩尾根隊に合流する。いずれにしても、食糧のゆるす限り、合宿生活を継続する。」

一九六〇年冬合宿計画書の巻頭に、その目的がこのように述べられている。極めて簡単な趣意だが、これだけのことを決めるまでには、メンバーの顔ぶれや初めての冬の後立山に対する知識などのかねあいから、いろいろ紆余曲折があって、やっと決まった結果だった。

まず合宿の形態が問題だった。今まで雪山というと忠実に極地法方式をとって来た。変化のはげしい冬山ではこれが最も安全な方法であり、又スケールの大きい登山をするために不可欠のやり方だと思って、その技術の体力増強、全員のレベルアップ、チームワークの養成などという点に力を入れて来た。極地法でなければ単調な尾根縦走だった。終始するきらいがあって、山のことにもなりかねなく、評判は悪かった。

それぞれ、その特徴と効果はあっても、やはり欠点があるのはまぬがれない。極地法や縦走は団体のまとまりをバックボーンにした、いわば純団体登山だが、逆に団体の中の個人個人をとりあげてみると、各々完全な登山の本質的な価値たる、山への主体的な対面、適切な判断に基づく正しい登り方、などといった面を重視するべきだ。我々はこのように考え、ここに初めての経験である集中登山を試みることにしたのである。

幸い、後立山の山々は比較的奥行が浅い。小人数で充分対処し得るスケールである。それに非常に変化に富んだ恰好な尾根が数多くあり、取組むに不足はない。こうして、前述の三つの尾根が選び出された。

だが、問題は、はたして三つに分けても充分やっていけるリーダーとメンバーが今居るかということだった。これは最後まで懸案であったが、最終的には、四人、四人、六人のパーティで、東、天狗尾根の二つの尾根を全装備を運び上げ、登り切るという計画は第二目標として、やはり自信は持ち切れなかったのが何とか出来上った。ただ、実際、この第二目標は殆ど実行し得ず、ばらに頂上を踏むという中途半端なものに終ってしまった。その代り、というのはおかしいかも知れないが、余った日数を利用して、爺岳東面のヴァリエーション、大冷沢西俣の奥壁を登ることが出来た。

その位置から「左稜」と名付けた雪稜を登ったが、どうやらあまりパッとした位置にないために未だ誰も手をつけていないらしく、ささやかながら初登攀であったようだ。赤岩尾根から見ると、雪のヒダのきれいな仲々りっぱな稜である。最後にこうした望外の登攀があり、これが又、その周辺のヴァリエーションにも目を向けさせることになり、爺岳という新たな「目標」を生んでくれた。このことは今度の合宿では何より捨て難い収獲であったと云えよう。

次にその時の各パーティのもようを簡単に述べれば、まず、〈**東尾根**〉隊は五月の時とほぼ同じ小林進(4年)、倉知(3)、三井(3)、臼井(2)の四名。一二月一四日から三日でアタック体制を整えた。もっとも第一岩峰下へ第二キャンプを建てるという当初の計画は捨て、一ノ沢頭の第一キャンプからのラッシュタクティックで頂上をねらうことにした。というのは、まだ冬も浅く雪がよく下となじんでいないので、このフワフワの変な雪の状態でヤセ尾根をボッカする危険をさけたのだ。

一七日には一気に頂上をめざし暗い内にテントを出たが、やはり懸案の二つの岩峰で予想外の時間を食ってしまった。特に第一岩峰の深い雪には消耗した。第二岩峰にかかる頃から天候が悪化し出したが、ここでくずれると後は大分悪天が続きそうな予想だ

ったし、又ひどいラッセルをくり返すのはつらかったので、そのままのぼりつづけ、吹雪の中の頂上に立ち、帰路は赤岩尾根をとった。途中天狗隊とは出会って打合せはしておいた。後、冷小屋と赤岩隊のC1で一泊づつして、二日後の晴天の日に東尾根のキャンプに戻った。

結局の所、いささか早まり過ぎたようだった。天気も比較的早く回復したし、一度トレースしたルートは二度目にはウンとやさしくなる。頂上までテントを上げるのは難しいとしても、正常な頂上往復は出来ただろう。

〈天狗尾根〉隊は中島(4)、三股(4)、大(3)、多田(2)の四人。一三日に尾根取付きにキャンプ、一四日には尾根上一八〇〇m地点にC2、一五日には二日分の食糧を持って天狗の鼻にC3を建てた。C2、C3間の二つのクーロアール突破がこの尾根の圧巻だった。深い雪のルンゼを直上しなければならず、緊張のし通しだった。とりわけ第二クーロアール上部の逆層の岩場を回り込む所は最も緊張させられた。幸い全員好調で、すべてはうまくいった。

一七日、芳しくない天気だが、もし意外にもつようなら一気にアタックすることとして出発。薄日がもれてトレースのない尾根が金色に光る。北壁は早くもガスに包まれ、ちらっちらっとピークリッヂがのぞく。小舎岩の上の露岩の登りにザイルを使っただけで、どんどんとばす。途中、東尾根パーティが第二岩峰を登っているのが見えた。「どれ、連中の技術を拝見」と言っているうちにガスの中に消える。吊尾根では吹き飛ばされそうな強い風に悩まされる。ストックで身を支えると、エビのシッポがカラカラと乾いた音をたててとんで行く。

かねての打合せ通り、北槍頂上の竹竿に連絡用紙を結び、引き返す途中、東尾根パーティが登って来る。皆元気で、この風では下るのはつらいから冷池の小屋で本隊に会うゾと言いのこし、われわれのめぼしい食糧をみな集めて（楽しみにしていたヨーカンまで）持って行った。下らねえ連中だなどとしゃれをとばしてテントへ帰った。

一方〈赤岩尾根〉には中川(4)、石(4)、遠藤(3)、後閑(2)蛭川(1)、伊藤(1)の六人が登った。一四日に高千穂平にC1をはり、一七日には三人が冷小屋へ入り、残り三人は爺岳頂上まで往復した。この日東尾根から降りて来た連中が冷小屋に来る。彼等から天狗尾根隊の登頂も確認する。そして、入山してから六日目の一九日に三人が、そして翌二〇日には残りの三人がそれぞれ鹿島槍北峰まで登り、かくてこの合宿に参加した全員が頂上に立つことが出来た。雪が未だ少ないのと天気が割合よかったせいでこうして予想以上に早目に目標の第一を終えてしまったが、やはり皆何となくもの足りない感じをまぬがれ得なかった。だが赤岩隊の当座の主目的だった、他のパーティのサポートと一年部員の訓練という点では大体役目をはたすことが出来たといえよう。

だがこの尾根での活動の真価はこれから始まる。すなわち、予定の行動を終えた後は余裕あらば全員高千穂平に集まり次のヴァリエーションルートを試みるというつもりだったのだが、その時がこうして予想外に早くやって来たのだ。二〇日には早くも天狗尾根から中島達が到着し、二一日我々も冷小屋から下って集合した。翌二二日には、主に爺岳の方へ足をのばし、東面のバットレ

スの偵察をした。この日昼過ぎには遅れて東尾根グループもやって来て全員そろった。

〈西俣奥壁の登攀〉　これからどうするかということは、当初からその時の状況を予測出来ないので確定的な線は考えられていなかった。こうして皆が集まった時与えられた条件というのは、食料の都合で切りつめられたほんの二日の期間と、ほとんどが未だ力の余裕を持っている、という状態だった。そのために次の対象はなるべく近い所、多勢が一時に登れる所、というのだったが、これを満足してくれるのが赤岩尾根のすぐ南にひろがる爺東面のバットレスだった。

冷尾根と赤岩尾根にかこまれた西俣の源頭にあるこのバットレスは、いろいろな呼び方ができるだろうが、今ここでは爺の西俣奥壁と呼ぼう。高千穂平からこの西俣奥壁をながめると、主稜線の吊尾根方面から三本のきれいな雪のヒダをもったリッヂが派生しているのがわかる。我々はそれをそれぞれ右稜、中央稜、左稜と呼んだ。右稜は赤岩尾根から派生している小じんまりした稜で、中央稜は中央に黒々とした三角形の岩壁を持つ急で短い岩稜、左稜は下部に広い雪壁をもつゆるやかな雪稜だった。その向うにも冷尾根の支稜が複雑な様を見せているがこれは目下考えない。いずれも高差二、三〇〇㍍位の小さなものであまりスケールはないが、雪におおわれたその姿は我々を充分引きつけてくれた。

一日の停滞を置いて、最後に残された日は天候悪化の兆しある芳しくない日だったが、我々は前記の三本を三つに別れて取り付いた。その結果は単に左稜のみの完登というものだった。二年を主体にした右稜パーティは途中の岩峰で撃退され、中央稜は下部岩壁のルートを発見出来ず取付くことも出来なかった。右稜は五人がほぼ一二時間の苦闘の末登り切ったが、下部のブッシュにおおわれた急峻な雪壁を登るのに苦労した。二年をかけてのこの冬の合宿は、皆が各々の力に応じていろいろな体験をしたという点でまずは成功の部類に入れてよいと思う。単なる形式のみを重んじる従来の合宿の行き方を改めて、実質的な各自の体験の累積を主眼にし、その基盤に立って部全体の目標の追跡をなす、という方向は今後ともとられるべきであろうと思う。

三、爺岳をめぐって

大　建二郎

A　春季五竜岳東面合宿

鹿島槍の集中山行が終り、その時のリーダー達が卒業した後、次に我々の世代がなすべきことは何であるか、という問題は難問だった。やりたいことはいろいろあったが、我々だけの力でなし得る範囲をよく見定める必要があった。

ところが、長い間の懸案だった海外遠征がようやくこの春に出ることになり、情況は大きく変わって来た。恐らくいろいろな準備の手伝いをするために春の休みの多くをさかねばならないだろうし、六人しかいない次期リーダーの内、一人二人は遠征へ参加するだろうということを考えると、とても普通の春合宿は出来そうにもなかった。とにかく層が薄いということはこの場合致命的だった。こういう面から考えて、もし春合宿を行なうとすれば、基本的なトレーニングを主眼にした小規模なものにならざるを得なかった。

そして実際に、遠征隊の出発が四月二日と決まり、春休みは荷物の梱包作業などに追われていそがしい日を送った。その間、春の合宿は出来ないのではないかという考えは変り、春山合宿を一回やらないことは、部員にとって誠に大きなロスだ、従って遠征隊を送り出してから、短い期間に、充実した晩春合宿をやりたい。が、新入部員歓迎会だ山行だといっているうちにすぐ五月だから、五月の初旬に冬山の偵察を兼ねてやればやりたいということになった。時期的には、むしろ春合宿は中止というに近い。しかし準備も大体終えて三月初旬にかかると、大体のメドがつき、遠征隊の準備と併行して春山の準備を進めて行くゆとりが出来て、遠征隊出発直後の一〇日間を春山合宿に充てることができる見通しとなった。

すぐさま一橋講堂の地下の遠征隊事務室でリーダー会を開き、目標を五竜岳東面のヴァリエーションと決定し、三井と遠藤が偵察のため遠見尾根に向った。一方、部員は初級部員の遠見から八方尾根への縦走と、そのサポートを兼ねた五竜東面の研究、四月の気象と雪崩の検討をささやかながら行ない、準備を整えた。そのときの意見では、三年の倉知を遠征に出して今の上級部員は手薄になっているものの、五竜東面は一部を除いて決して困難な所ではなく、また四月ともなれば雪もしまって登り易くなっているはずだ。この冬に爺岳東面のヴァリエーションを狙うとすれば、どうしてもここで積雪期の岩登りの技術を向上させる必要があるということだった。私達は春山の楽しさと山登りの充実感をとことんまで味わうことを夢見て、四月三日新宿を発った。

五竜東面隊は一〇日間に、G0、G1、G2、G3、G6と五本の雪稜を登り、八方尾根縦走隊も無事目的を達した。結果からみると、二、三遺憾な点があったけれども予期以上の成功を収めたといえよう。事実、当初立てた登攀計画は五竜東面のG5を除いてすべて完登出来た。そして時間さえもう少しあればG5にしろG7にしろ、あるいは遠く北尾根やG4の岩壁さえ必ず登り得るであろうという自信と意欲に溢れていた。限られた時間内で、

我々は確かに持てる力を充分に発揮したと思う。

しかし、我々はどの程度ゆとりを持って登ったであろう。本当に我々はそんなに実力があるのだろうか。ここに今合宿の反省のポイントがあった。我々はギリギリの力を出したのだ。決して裕々と登って来たのではないのだ。幸運も多かった。最終日近くのG1γ稜やG6を登ってのG1β日没後の帰途。ましては蛭川のスリップ等々。天候も比較的ついていた。この事実を正しく認識し、我々はこれ以上のことをやる力は今はまだない。これが限度だということをはっきりとキモに銘ずる必要があるのだ。

そう我々が考えた合宿の概要は次のようなものであった。

〈八方尾根〉隊は大(3)、朝木(3)、高橋(2)、村上(1)、長沢(1)、伊藤(1)の六名、大遠見までは東面隊と合同。入山は春の太陽が残雪に輝き、頭がぼんやりとする好天だったが、それ以後、快晴には恵まれなかった。五竜小舎から全員五竜岳へ登り、唐松小屋へ縦走、不帰二峰まで往復して八方尾根を下る。六名中新人が三名、リーダー層も経験浅く、慎重を期しての計画であったが、平凡な山行だった。むしろ五竜岳から八峰キレットを越えて鹿島への縦走をとるべきであったかと思う。この山行中、鹿島槍北壁で名古屋山岳会が主稜を登攀中遭難という言葉を聞いた時に胸を横切ったもしや、という不安が今も忘れられない。

〈五竜東面〉隊はそうした八方隊の心配をよそに連日登攀に大わらわだった。まず入山三日目の四月八日、宮本、遠藤、竹中がG0へ、三井と臼井がG2左稜へ。G0は長大な雪稜でとり立てていう所はない。宮本、遠藤という腰の重い連中だから「のんびり行くべえ」とばかり取付いて五時間もかかったのであろう。

G2は五竜東面で最も長く困難とされる。G2の三本の稜も中央稜はハングした大岩壁の横にルンゼが喰込んでおり、それを登れば容易そうである。このG2の登攀が今合宿の一つのヤマであると思われた。リーダーの三井と、経験の深い臼井とでアタックした事は登攀を非常にスムーズにさせた。とに角、ルンゼを登攀中の雪崩の恐怖が大きかったが、苦闘四時間にして左稜の主尾根へ出た。全く雪をつけない大広場を横切り、寒さにふるえながらテントに戻ると、日はとっぷりと暮れていた。

翌日は沈澱。一〇日、宮本、臼井でG1βへ、三井、竹中でG3をアタック。

G1βは、G1を構成する三つの岩峰の真中にあり、この岩壁帯は未登であるようだ。いかに冬のヴァリエーションの訓練であるとはいえ、我々が現時点で最高の戦いを組む事（遠藤の一つ覚えである）が我々の使命であるならば、五竜東面の全貌を知る必要がある。あわよくば初登の感激を味わえるこのG1βを登らぬというテはない。そこまでは良かったのだが、実際に取付いてみるとオーバーハングの連続、岩はもろくハーケンがさっぱり歌わない。結局、時間切れで途中より引返した。

G3は五竜岳頂上へ向ってキレット寄から伸びている鋸状の三本の小さな岩尾根からなる。そのうち一番長くむずかしそうな稜に取付こうと三井が主張し、取付いてみたら案外容易で二ピッチで岩場を終え、二時間で縦走路へ出た。

翌一一日は宮本、遠藤でG6をアタック。入山一週間でからだも慣れて調子は上々、所期の目的も今日で大体終るので大いにハッスルして出かける。

G6は五竜東面でもキレットに寄っており、G5と並んでヒマラヤヒダをつけたナイフリッヂである。雪の状態が悪くトンネルを堀るようなラッセルが続く。雪壁が二ヵ所あり、ハングした雪をたたき落して進む。稜線一八時。五竜頂上で道を誤って一旦黒部側へ降りかけてもどり、テントへは二三時着。天候の悪化がわかっていたのでビバークは絶対にしたくなかった。合宿最後のヤマとしては手ごたえが充分であったが、くさった雪のラッセルがいかに体力を消耗させるかがよくわかった。

一三日、一度アタックして失敗しているG1を何とか登ろうと三井、臼井で再度アタック。β稜はやめ、γ稜から取付き、ブッシュ混りの雪稜を登って難なく抜けた。夕方、そのまま徹収して神城へ下った。

二、五月の爺岳東面偵察行

四月の春合宿を一応予定通りに終えて部室に集まった我々は登攀意欲が溢れんばかりであった。海外には遠征隊を送り出し、先発隊はすでに現地ペルーに到着していた。又五竜東面の主なルートを登り得た自信は、昨年冬以来の未知のルートを開拓して行こうという意欲に火をつけた。

春合宿を終えて立てた計画では、五月に爺岳東面の偵察行、夏山は合宿後北海道日高へ一、二パーティ出して二、三年後の春合宿の可能性をさぐろう。夏山定着合宿では池の谷、東大谷を中心に岩登りをやる。冬は爺岳東面の残されたルートの登攀をとりあげようと風呂敷を広げていた。我々は、この計画をかなりの飛躍とは全然考えていなかった。いずれも昨年からの活動の延長線上に沿って立てられたものであって、このこと自体、三六年に卒業して行ったいわゆるヤロー会のエピゴーネンにはなるまいという三七年のリーダー層の自覚にも拘らず、受けつがれた雰囲気に包み込まれて行ったともとれよう。即ち、五月の偵察行は前年の五月に鹿島槍を中心として行なわれた偵察行と同型式のものであり、夏合宿計画しかり、冬もしかりであった。

この年の部員は総数二一名、四年生六名（うち一名遠征参加）三年四名、二年六名、一年生五名であり、部員数はかつてなく少なく、かつリーダー層の経験が例年よりも不足していた。この不足した力をもって、後立山登攀計画の一翼を担うには、何よりも慎重と忍耐が必要なのである。はやり立つ登攀意欲を抑え、一歩後退して出直す気持、部活動のデプレッションの時期には、何よりもこれが必要だったのであった。

〈**爺岳東面偵察行**〉は大、以下三井、後閑、高橋、竹中の五名が参加した。入部間もない新人を北八ケ岳へ案内するので残った遠藤、朝木に見送られ、四月二八日新宿を発つ。

三〇日、爺岳東尾根二四三〇㍍の白沢天狗尾根との分岐点にBCを張り、翌日沈澱、二日、大、高橋で小冷尾根を分生させて、井、後閑、竹中で同主稜を登攀した。

北稜は爺岳北のピークから派生し、途中冷尾根から派生しているように北稜の側面に消えている。BCから少し小冷沢へ続く長い尾根である。妙なことに、長大な冷尾根は北稜下った東尾根からやや隆起している尾根を小冷沢三の沢へ下る。雪は堅く、ほとんどもぐらない。主稜末端を回りこんでさらに二の沢を下り、一〇分程の所で北稜に這い上る広いルンゼを見つ

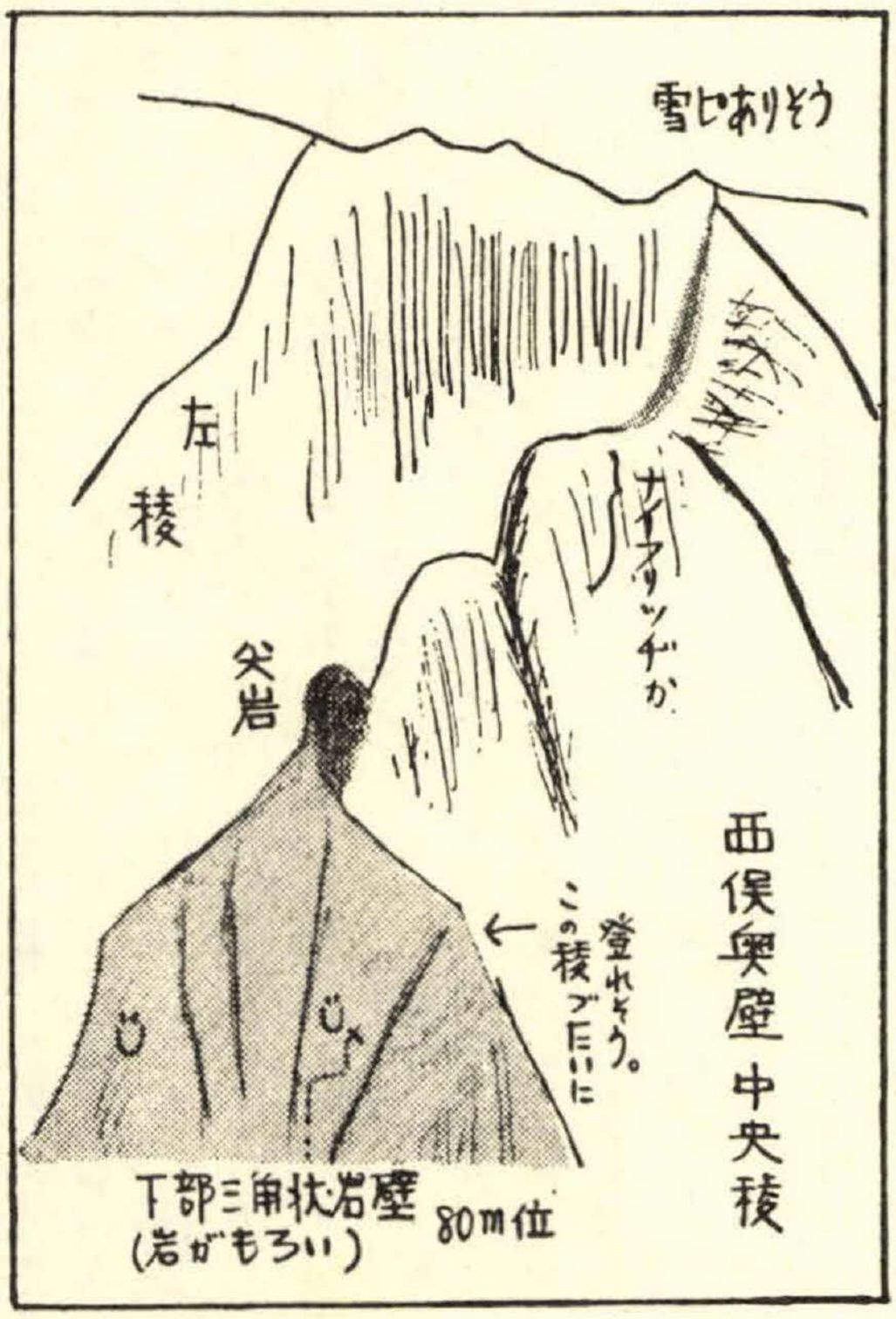
け、そこから登ることにする。ルンゼというよりも沢といった方がよく、雪が所々切れてシュルンドが開いている。

一ピッチで北稜上に出た。ここから見た北稜は、下部は大きな木や岩がごちゃごちゃと見える近寄り難い所であり、上部は途中に城砦を思わせる岩壁帯をもち、一見手ごわそうな岩が所々に見えて、中々時間がかかりそうであった。雪稜ははじめての高橋はバランスよく岩を登り、雪壁を攀じてくれた。大体小冷沢側を捲き、城砦もいったん大冷沢側へ出て、横に喰込んでいるルンゼを登り、出口にハングしている雪をたたき落して登り切ると案外容易に上へ出ることが出来た。あと二、三小さな岩を越え、冷尾根との分岐点直下の急な雪壁を登ると北のピークはすぐそこにあった。

一方、**主稜**パーティは、北稜パーティと取付まで同行し、三の沢へ下った所で主稜を二つに分けてくい込んでいるルンゼに入り、左側へルートをとる。ルンゼも雪がつまって登り易く、途中から右の壁へ抜け出て二ピッチ、主稜稜線上へ出て、あとは容易な雪稜慢歩。北稜とほとんど同時に縦走路へ出た。

この日の登攀は予想外に早く終った。二四三〇㍍のジャンクションに建てたテントへ正午に戻ったあと、徹収して赤岩尾根を下り、高千穂平にベースを移した。天候は夕方から崩れて雨となった。

翌三日は朝から曇り、一日持つだろうと判断して出発。大、三井で西俣奥壁中央稜、後閑、高橋、竹中が右稜に取付いた。この西俣奥壁は、中川が概に書いている通り、昨年冬の合宿で左稜、右稜を試み、今年の大きな目標になっていた。従って今回の偵察



に行き当る。その上はバンドにな っていた。岩がもろく、ハーケン二本を打つも利いていない。スタンスが細かいので足にミシンが来る。追い立てられるようにふみ切るとスタンスが崩れた。ほとんどダイレクトに雪の上へ落され、自力でストップしたが、確保用のハーケンが抜けて引張られた三井は不幸にも頭部を打ち、かなりの傷であった。すぐさま右稜登攀中のパーティにアップザイレンで下ってもらい、後閑を連絡に鹿島へ降ろす。ついで赤岩尾根を通りがかった朝霧山岳会に救助を求め、タンカを作製して来た臼井達のパーティに出会く栂池から後立山稜線を縦走し、そこから車で大町病院へ入った。い、合同して大谷原まで運び、

この事故の原因は、まず第一に不注意が挙げられよう。ルートの見通しの誤り、ホールド、スタンスの確認不足、ジッヘル体制の不完全はまず指摘出来る。そして、そのような不注意を犯しながら登攀を行った裏にある登攀意欲過剰からくるあせり、遭難の発生はいくつかの不注意が重なって起るということが現象的に云えるならば、そのような登攀をずめ構造的といえるだろうか。であれば〝意余って力足らず〟が、当事者がリーダー層であるとすれば、それはもはや根本的な問題につながっているといわざるを得ない。そしてその根本的な問題というのは、とりもなおさず山岳部の主体性の問題――ワンダーフォーゲル部やスキー部の新設に伴い、山岳部は従来の多面的な活動内容及び人員構成を廃し、山岳部独自の活動を行い、山登りプロパーの人間によって構成されるべきではないかという問題――であった。

即ち、我々は岩登りをする時間があまりに少なく、平凡な山歩きをする時間は結構多い、又そうしないと部活動を十分行うほど人数が集まらない。もっと少数精鋭で岩登りプロパーの人間を主体として行くべきではないかというのである。これは一面の真理を含んでいると考えられる。が、避けなければならないのは、こうした理念をもって現在の部員全員に強制することである。それは必ず人的、技術的フリクションを引起さざるを得ない。強制する前にまず人を見極めなければならない。山岳部の主体性を明確にするのであれば、構成員を統一した目的をもった者のみに限る。それが出来なければ、明確にする必要はないが第一に全体のレベルを落すことをしなければならないのである。

この事故の後再びリーダー層が集まって活動の構想を練った。そして冬合宿は爺岳東尾根から針の木岳への縦走ということに決めた。これは我々の爺岳への執着と、自己の力の評価から生れた妥協の結果であった。

C　爺岳より針の木岳へ（冬季合宿）

登山を構成する要素は人と自然であるが、山岳部の合宿の運営に当っても、この人と自然とのつり合いをよく分析し、バランスのとれた合宿計画を組まなければならないのはいうまでもない。しかし良く考えてみると、合宿の成否に寄与する人と自然とのウェイトには、毎年少しずつの違いがある。例えば、昨年から今年にかけて、部の力が盛り上っていた頃には、まず登る山やルートを目標にすえ、技術、体力等は後から追って行ったという感が深

い。しかるに、さらに前の年次では、登る山の目標設定は、まず部員の登攀技術、体力を考えて、我々のやれる範囲はこの位だろうという決め方をされていたように思う。要するに人が先か山が先か、むずかしく言えば、帰納的か演繹的かといった差が少しづつではあるが毎年の合宿目標決定に当って出ているように思う。

三六年五月の爺岳西俣における事故を境に、合宿の山行の基本的性格に変化があったとすればそれはこの事故以後、爺岳という目標をすえて我々をそれに向って鍛練させていた各山行計画が、どうしても我々の実力の限界というものに行き詰り、そして人に合わせた合宿計画の遂行という方向に性格を変えていったことだろうと思う。

即ち、当初私達の考えていた冬合宿計画は爺岳東面のバリエーションの登攀であった。爺岳東尾根または冷尾根を登って小冷沢奥壁および西俣奥壁の五本のルートのうち何本かを登る。また、初級部員は鹿島槍を往復する——五月の偵察行が順調に行けば、北稜、主稜、中央稜、右稜の様子がはっきりすると考えていたが、不幸にもそれは出来なかった。

この五月の事故の反省から、現在の主目標は多数の卒業生を送り出して一時的に低下した部の力を、次の発展のために鍛えることと、即ち、中堅部員が冬山の雪と風に耐え抜く力をつけることと考え、技術的に高度ではあるが、最上級生のみが脚光をあびる形となる東面のバリエーションをやめ、容易ではあるが、全員一丸となって風雪に耐えねばならぬ縦走型式を採り、爺岳東尾根から針の木岳までの縦走を行うことにした。一一月には大と朝木が再び偵察に出て合宿の準備を進めた。

一二月一〇日、我々は新宿を発った。入山して三日間は順調だった。鹿島の狩野氏宅をBCにしてテントを伸ばし、四日目には二四三〇㍍の白沢天狗尾根とのジャンクションに全員集結出来た。もっとも、雪も少なく冬山というにしては少々物足りなかったが。第一の試練は種池小屋へ入る日であった。朝からチラホラ雪が降っていたが、東面であるために偏西風はほとんど感じないぞと出た大のパーティは、まず腰までの雪に音を上げた。つづいて稜線上はすさまじい地吹雪。何しろ一㍍前の者が見えない。

ラッセルはたちまちかき消され、ルートも定かならず、一時は途中でビバークかなと案じたが、距離があまりないのと、下りであるのでしばらく歩き続ける。ボオッと黒い小屋の姿が浮び上った時は本当に嬉しかった。約二時間遅れて宮本パーティも着いた。

第二の試練は一週間の沈澱生活である。新越乗越にC4を出した翌日から季節風が吹き出した。この年は上層の寒気がかなり南下し、大陸からの移動性高気圧が九州南方を東進するという片寄った気象であったためか、いっこうに吹雪が止まない。来る日もテントをたたく風雪の音を聞きながらラーメンを作り、歌をうたい、乾バンやクラッカーをかじる。わずか一畳余の空地に六人の人間が一週間寝ているということは、ある人の言によれば気違い沙汰で社会学的に興味あることだそうだが、当事者は「風がテントをたたく夢を見る」ほど切実な問題であった。登攀意欲を持ち続ける限度を越えたと言ってよいのかも知れない。おまけにストックに通しておいたアイゼンやワッパが雪に埋まって行方不明になってしまっては、お手上げである。

まだまだ続きそうな西高東低に食糧も乏しく、一二月二六日に徹収して無念の涙をのんで岩小屋沢岳から山を降りた。

この合宿で我々が得たことは、第一に後立山稜線の冬の気象の厳しさについてであり、第二には全員縦走という型のむずかしさであり、第三には登攀意欲を持ち続けることの必要性についてである。

まず、第一に後立山の冬は、一週間以上にわたって季節風が吹き続け、雪は降らない場合でも地吹雪になり、行動が困難になる。また、これは今年だけのことかも知れないが、移動性高気圧が南へ偏り、気象の回復する時間が極めて短かかった。また時には剣岳方面に暗雲が押しよせていながら一時的に後立山が晴れることがあるが、これも長続きせず、必ず本格的な荒天になる前ぶれといってもよいと思われた。少なくとも後立山稜線の縦走を行なおうとするならば、地吹雪の中を平然と行動出来る逞しさを持たねばならないのである。

第二に全員縦走という型式は、何よりもスピーディな行動が要求される。テントの数は出来るだけ少なくし、荷物を軽量化し、全員が一致したペースで行動することが必要である。この点では計画通りスムーズに行ったが、個々の行動では徹収時のもたつきが目立ち、各人が自分が何をどうすればよいのかという自覚をまだ身につけていないように思われた。

第三の登攀意欲を持ち続ける点に関しては、今回は一週間を越える停滞が響いたこともあるが、上級生自身、何となく登攀意欲を失いかけていた。むしろ毎日テントが埋没せぬように気を配り、二つのパーティ間の連絡をどうしてとろうかということに腐心して計画の完遂まで心をめぐらすゆとりを失っていたといえるのかも知れない。

多くの改めるべき点を含みながらも、たという感じを持ちながら、支尾根を大葛温泉へ向った。

爺岳を我々ほど一生懸命登ることは、いかも知れない。この二年間に山登りの一橋山岳部ではもはや無を与えてくれたこのささやかな、しかし芯の強い山を持ち得たことは、我々の望外の喜びであった。と同時に、計画で立派なことをうたいながらも、それを完全に実施出来ずにこの一年間を終えた我々リーダー層の力の至らなさを痛切に感ずるのである。今後数年は部員の数からみても、またそのレベルから見ても、一橋山岳部の流れの中では雌伏期となるかも知れない。その間にあって活動する者は、前の活動レベルを意識する必要はない。自分達独自の活動目標を設定し、地味にこつこつと登る態度が何よりも要求されると思うのである。

四、白馬と中央アルプス

—新しい活動の場を求めて—

臼井弘

A 白馬岳（春季合宿）

六一年五月の爺岳での事故が我々に与えたショックは大きかった。長らく忘れていた山の恐さというものが、急に目の前にその巨大な姿を現わしたようで、登山の安全性や自分達の実力について深く考えさせられるようになった。

こういう立場におかれて考えなくてはならないのは、何より登山の基本的なあり方を振りかえり、正しい登り方で地道な基本的トレーニングをくり返し行なって、ゆるぎない自信を身につけることだろう。足元の状態を見ずに高い所ばかりあこがれていてはならないのだ。未知の領域の開拓というのは、どんな容易そうな所でも、それ相当の危険がともなうものである。それを行なうのは、激しい訓練で習得された高い実力を有する者にのみ許される、至難の業である。我々はもっと謙虚にならねばならない。

我々はあえて爺岳に執着することはやめ、自由な気持で、我々の希望を満してくれる山を探し、オーソドックスな登り方を忠実に守ろうと思った。そして、まず春には、後立山ではまだ我々の部であまり接触していない白馬岳付近を選び、極地法登山を試みることにした。ルートは、栂池から白馬三山を経て唐松岳の登頂という、やや長いが比較的容易な場所を選んだ。

この極地法登山は別に取りたてて云うべき特別な点もない平凡なものだが、ほんの一〇人そこそこで、テントを四つのばし第四キャンプから登頂隊を出すという操作をなすのは、微力な我々にとって力一杯の仕事だと思った。

我々は三月六日に入山、二七日まで二二日間かかって唐松岳往復をなしとげた。人数は一二人で、内四人は途中からの参加だった。参加人数が出発まぎわまで確定せず、又決まっても途中からの参加などもあって、最初から恥ずべき醜態をさらしたのは残念だった。

山では、変化激しい自然の中で極地法を運営するむずかしさを身にしみて痛感させられるいろいろの事件が待っていた。何より一番苦しめられたのは不順な気候と強い風だった。快晴にめぐまれたのは二〇日程の内三日のみで、それも一日中続いた日は一日もなかった。毎日強風にフラフラしながらボッカをした。小連華岳手前のコルに張ったC2では三日も続いた強風と悪天のための停滞で大分神経を消耗させられたし、それにこりて天狗池横に張ったテントでは大雪にテントをうめられ、吹雪の中をにげ出さねばならない苦い目にもあった。軽度だったが凍傷にかかって山を下りなければならない者も出た。幕営に関する生活技術などまだまだ研究しなければならぬことが多々あることを痛感させられた。

登攀そのものに関しても学ばねばならぬことは多い。悪天の中で正しくルートをとって登るという点で我々は全く落第だった。迷い易い所では充分な赤旗を完備するという、根本的な準備すら不充分だった。実際に再度危機におち入る寸前まで行き、何といいかげんであったかと痛感した。恥をさらすようだが、こういう

落度から逃げようとしないで正面から凝視することこそ次の進歩へつながるものだろう。

合宿の大体の経過は次の様だ。三月六日入山し、翌七日C1を梅池小屋付近に出し、それから四日たった一一日には小連華手前にC2をたてた。ところが、中に一日好天を置いてそれから一週間にわたって悪天が続きしまった。しかしその後、後発の四人が入山してから再び士気を取り戻して、C1建設以後実に一一日目にしてやっとC3を白馬頂上に出すことが出来た。そして一八日には待望のC4を天狗小屋付近にのばし四人が唐松往復のために残った。あくる一九日は、幸いにして絶好の快晴の日和にめぐまれ、何事もなく目的の唐松頂上を踏んで、この山行を成功に終らせることが出来た。

予定の日数の二五日に三日程の余裕をもって、こうして合宿を終ったのだが、C2で風と雪にいためつけられたり他の数々の試練にむち打たれたりしながらも、我々は次の飛躍への基盤が出来たのではないかと、希望に満ちて山を降りて来たのだった。もちろん、ここ当分は少なくともオーソドックスな基本を重視したやり方をとっていく方針をとろうとする程うぬぼれはしなかったが、今や後立山に変にこだわっていることなく、広く対象を求めて我々に一番適当な活動場所を探してみた。その結果来るべき冬には槍の北鎌尾根に再びポーラーメソッドを展開しようということになった。

しかしながら、こんな希望や自信は、不幸にも再び直面しなければならなかった事故の前に、無残にもくだけて消えてしまったのだ。夏の合宿で岩登り中おこったこの事故は大きな波紋をたてた。我々は、やっぱり、という挫折感に打ち上る気力すら失ってしまいそうだった。

この事故のもようは次の様なものだ。我々はひどく体勢をくずされてしまった。しかしその後、後発の四人が入山してから再び士気を取り戻して、C3を白馬頂上に出すことが出来た。そして一八日には待望のC4を天狗小屋付近にのばし四人が唐松往復のために残った。あくる一九日は、幸いにして絶好の快晴の日和にめぐまれ、何事もなく目的の唐松頂上を踏んで、この山行を成功に終らせることが出来た。

予定の日数の二五日に三日程の余裕をもって、こうして合宿を終ったのだが、C2で風と雪にいためつけられたり他の数々の試練にむち打たれたりしながらも、我々は次の飛躍への基盤が出来たのではないかと、希望に満ちて山を降りて来たのだった。もちろん、ここ当分は少なくともオーソドックスな基本を重視したやり方をとっていく方針をとろうとする程うぬぼれはしなかったが、今や後立山に変にこだわっていることなく、広く対象を求めて我々に一番適当な活動場所を探してみた。その結果来るべき冬には槍の北鎌尾根に再びポーラーメソッドを展開しようということになった。

しかしながら、こんな希望や自信は、不幸にも再び直面しなければならなかった事故の前に、無残にもくだけて消えてしまったのだ。夏の合宿で岩登り中おこったこの事故は大きな波紋をたてた。我々は、やっぱり、という挫折感に打ち上る気力すら失ってしまいそうだった。

この事故のもようは次の様なものだ。三月六日入山し、翌七日C1を梅池小屋付近に出し、それから四日たった一一日には小連華手前にC2をたてた。ところが、中に一日好天を置いてそれから一週間にわたって悪天が続きしまった。しかしその後、後発の四人が入山してから再び士気を取り戻して、C3建設以後実に一一日目にしてやっとC3を白馬頂上に出すことが出来た。そして一八日には待望のC4を天狗小屋付近にのばし四人が唐松往復のために残った。あくる一九日は、幸いにして絶好の快晴の日和にめぐまれ、何事もなく目的の唐松頂上を踏んで、この山行を成功に終らせることが出来た。

予定の日数の二五日に三日程の余裕をもって、こうして合宿を終ったのだが、C2で風と雪にいためつけられたり他の数々の試練にむち打たれたりしながらも、我々は次の飛躍への基盤が出来たのではないかと、希望に満ちて山を降りて来たのだった。もちろん、ここ当分は少なくともオーソドックスな基本を重視したやり方をとっていく方針をとろうとする程うぬぼれはしなかったが、今や後立山に変にこだわっていることなく、広く対象を求めて我々に一番適当な活動場所を探してみた。その結果来るべき冬には槍の北鎌尾根に再びポーラーメソッドを展開しようということになった。

しかしながら、こんな希望や自信は、不幸にも再び直面しなければならなかった事故の前に、無残にもくだけて消えてしまったのだ。夏の合宿で岩登り中おこったこの事故は大きな波紋をたてた。我々は、やっぱり、という挫折感に打ち上る気力すら失ってしまいそうだった。

この事故のもようは次の様なものだ。三月六日入山し、翌七日C1を梅池小屋付近に出し、それから四日たった一一日には小連華手前にC2をたてた。ところが、中に一日好天を置いてそれから一週間にわたって悪天が続きしまった。しかしその後、後発の四人が入山してから再び士気を取り戻して、C3建設以後実に一一日目にしてやっとC3を白馬頂上に出すことが出来た。そして一八日には待望のC4を天狗小屋付近にのばし四人が唐松往復のために残った。あくる一九日は、幸いにして絶好の快晴の日和にめぐまれ、何事もなく目的の唐松頂上を踏んで、この山行を成功に終らせることが出来た。

予定の日数の二五日に三日程の余裕をもって、こうして合宿を終ったのだが、C2で風と雪にいためつけられたり他の数々の試練にむち打たれたりしながらも、我々は次の飛躍への基盤が出来たのではないかと、希望に満ちて山を降りて来たのだった。もちろん、ここ当分は少なくともオーソドックスな基本を重視したやり方をとっていく方針をとろうとする程うぬぼれはしなかったが、今や後立山に変にこだわっていることなく、広く対象を求めて我々に一番適当な活動場所を探してみた。その結果来るべき冬には槍の北鎌尾根に再びポーラーメソッドを展開しようということになった。

しかしながら、こんな希望や自信は、不幸にも再び直面しなければならなかった事故の前に、無残にもくだけて消えてしまったのだ。夏の合宿で岩登り中おこったこの事故は大きな波紋をたてた。我々は、やっぱり、という挫折感に打ち上る気力すら失ってしまいそうだった。

この事故のもようは次の様なものだ。三月六日入山し、翌七日C1を梅池小屋付近に出し、それから四日たった一一日には小連華手前にC2をたてた。ところが、中に一日好天を置いてそれから一週間にわたって悪天が続きしまった。しかしその後、後発の四人が入山してから再び士気を取り戻して、C3建設以後実に一一日目にしてやっとC3を白馬頂上に出すことが出来た。そして一八日には待望のC4を天狗小屋付近にのばし四人が唐松往復のために残った。あくる一九日は、幸いにして絶好の快晴の日和にめぐまれ、何事もなく目的の唐松頂上を踏んで、この山行を成功に終らせることが出来た。

予定の日数の二五日に三日程の余裕をもって、こうして合宿を終ったのだが、C2で風と雪にいためつけられたり他の数々の試練にむち打たれたりしながらも、我々は次の飛躍への基盤が出来たのではないかと、希望に満ちて山を降りて来たのだった。もちろん、ここ当分は少なくともオーソドックスな基本を重視したやり方をとっていく方針をとろうとする程うぬぼれはしなかったが、今や後立山に変にこだわっていることなく、広く対象を求めて我々に一番適当な活動場所を探してみた。その結果来るべき冬には槍の北鎌尾根に再びポーラーメソッドを展開しようということになった。

しかしながら、こんな希望や自信は、不幸にも再び直面しなければならなかった事故の前に、無残にもくだけて消えてしまったのだ。夏の合宿で岩登り中おこったこの事故は大きな波紋をたてた。

第四尾根パーティは後閑、名和、小島の三人で、八時半スノーコル。名和がトップでAカンテの下に取付く。普通のルートは右寄りにあるが、名和は左寄りにルートをとる。傾斜がきつくなりしばらく止まっていたが、再びザイルが伸びたときスリップ、C沢へ転落。ザイルにジッヘルされて、途中で岩に頭を打って重傷を負った。事故発生は九時頃。

第四尾根パーティは後閑、名和、小島の三人で、八時半スノーコル。名和がトップでAカンテの下に取付く。普通のルートは右寄りにあるが、名和は左寄りにルートをとる。傾斜がきつくなりしばらく止まっていたが、再びザイルが伸びたときスリップ、C沢へ転落。ザイルにジッヘルされて、途中で岩に頭を打って重傷を負った。事故発生は九時頃。

第四尾根パーティは後閑、名和、小島の三人で、八時半スノーコル。名和がトップでAカンテの下に取付く。普通のルートは右寄りにあるが、名和は左寄りにルートをとる。傾斜がきつくなりしばらく止まっていたが、再びザイルが伸びたときスリップ、C沢へ転落。ザイルにジッヘルされて、途中で岩に頭を打って重傷を負った。事故発生は九時頃。

第四尾根パーティは後閑、名和、小島の三人で、八時半スノーコル。名和がトップでAカンテの下に取付く。普通のルートは右寄りにあるが、名和は左寄りにルートをとる。傾斜がきつくなりしばらく止まっていたが、再びザイルが伸びたときスリップ、C沢へ転落。ザイルにジッヘルされて、途中で岩に頭を打って重傷を負った。事故発生は九時頃。

京の石先輩等六人が松本へ出発。一八日、ボッカを頼んで涸沢のテントに収容、名和の兄や吉田先輩等が涸沢の本隊に連絡すると共に、雲稜会その他多くのパーティに援助を求め、いったんスノーコルまで名和をおろしてからC沢左俣を引上げる。北穂の小屋に収容したのは夜半だった。医者はデスプ（desperate）だという。月が晃々と照っていた。その日東

京の石先輩等六人が松本へ出発。一八日、ボッカを頼んで涸沢のテントに収容、名和の兄や吉田先輩等が涸沢の本隊に連絡すると共に、雲稜会その他多くのパーティに援助を求め、いったんスノーコルまで名和をおろしてからC沢左俣を引上げる。北穂の小屋に収容したのは夜半だった。医者はデスプ（desperate）だという。月が晃々と照っていた。その日東

京の石先輩等六人が松本へ出発。一八日、ボッカを頼んで涸沢のテントに収容、名和の兄や吉田先輩等が涸沢の本隊に連絡すると共に、雲稜会その他多くのパーティに援助を求め、いったんスノーコルまで名和をおろしてからC沢左俣を引上げる。北穂の小屋に収容したのは夜半だった。医者はデスプ（desperate）だという。月が晃々と照っていた。その日東

京の石先輩等六人が松本へ出発。一八日、ボッカを頼んで涸沢のテントに収容、名和の兄や吉田先輩等が涸沢の本隊に連絡すると共に、雲稜会その他多くのパーティに援助を求め、いったんスノーコルまで名和をおろしてからC沢左俣を引上げる。北穂の小屋に収容したのは夜半だった。医者はデスプ（desperate）だという。月が晃々と照っていた。その日東

京の石先輩等六人が松本へ出発。一八日、ボッカを頼んで涸沢のテントに収容、名和の兄や吉田先輩等が涸沢の本隊に連絡すると共に、雲稜会その他多くのパーティに援助を求め、いったんスノーコルまで名和をおろしてからC沢左俣を引上げる。北穂の小屋に収容したのは夜半だった。医者はデスプ（desperate）だという。月が晃々と照っていた。その日東

ぶ。三時、信大病院へ入る。彼は長い療養のつぎ、下山。気流の関係で上高地におりたへとになった。

この事故の直接的な原因は、苦しい入山のたが、その傷は未だ完治せぬ深いものだったその疲労の抜けぬ前に、微妙な技術を要するボッカの直後、まだ岩場に軽率にも取付

ぶ。三時、信大病院へ入る。彼は長い療養のつぎ、下山。気流の関係で上高地におりたへとになった。

この事故の直接的な原因は、苦しい入山のたが、その傷は未だ完治せぬ深いものだったその疲労の抜けぬ前に、微妙な技術を要するボッカの直後、まだ岩場に軽率にも取付

ぶ。三時、信大病院へ入る。彼は長い療養のつぎ、下山。気流の関係で上高地におりたへとになった。

この事故の直接的な原因は、苦しい入山のたが、その傷は未だ完治せぬ深いものだったその疲労の抜けぬ前に、微妙な技術を要するボッカの直後、まだ岩場に軽率にも取付

いた、ということだと思う。もっと慎重になればさけられ得た人災であった点は深く反省しよう。そして再びこの愚をくり返さない様あらゆる手段をつくすことこそ、今我々のしなければならないことだった。そう思って、その後は一にも二にも何より絶対に事故はおこさぬ様、過度に思われる程用心深く行動した。全員が充分な経験に裏付けられた強い自信を持てる迄、長くじっくりと地道な基礎的な力の養成を続けるつもりだった。

こうした方針は何も今急に始めた訳ではなく年初からの変わらぬ方針であり、今後一そう強力に推進されるべきものであった。決して冒険的な飛躍的なことをなそうと思ってやったのではなく、始めから基本的なものを重視してやって来たのにもかかわらず、皮肉にもこうして大事を引き起してしまったのはそれだけにいっそう深刻なことだった。年々その構成員が着実に新らしく入れ変わっていく学校山岳部にあって、それまでの先人の積み重ねた成果の上に立ってより高度なものを追求するという至上命令は、顕著な飛躍のあった後ほど重い負担となってはね返ってくる。そのレベルの維持ということすら非常なる重荷である。

我々は確かにあせっていたと云える。決して足元を見ずに無謀なことをやったとは思わぬが、やはり客観的な冷静な自己の観察が欠け、その正しい対処の仕方を誤まったのだ。我々は憶病なほど慎重な行動を続けたつもりだったが、これは、ややもすれば単に消極的な没意欲的な中途半端なものに終り勝ちな危険性を内在していた。我々の仲間のつながりが今極めて重大な試練を経ているのだという危機感を呼びおこす必要があった。

こうした不安定な精神状態のまま、我々は次の試練の場たる冬の合宿を迎えねばならなかった。そして我々は冬には中央アルプスの縦走をやってみることにしたのだ。ここなら我々だけの力で充分処理出来るだろうという自信があったからである。そして幸いにもこの山行は、予定通りの木曽駒ケ岳間を強風にたたかれながら踏破してどうやら無事に終った。

B　中央アルプス縦走（冬季合宿）

参加したのは四年二人、三年が三人、二年が五人と計一〇人。ピラミッド型の構成であるのは一見ノーマルな形のように見えるが、実際は上級部員の多くが不参加だったためそうなったに過ぎない。どのような事情があるにしろ、出発間ぎわになって有力なメンバーがバタバタと不参加を宣言して背を向けてしまうのは残念なことだ。自由な気風を重んじるのだと云って、これを黙ってがまんするより仕方のないことにこそ、我々の弱点なり問題点がある。

一二月一三日、東京を発ち、大樽小屋に入ってから三つ目のキャンプを張った極楽平までは、ポーラー形式でテントを進め、そこから縦走に移った。中央アルプスは概して高度差のあまりない山脈であり、技術的にもさほど困難でないが、問題は天候の特異性と入山下山の際のルートファインディングだった。後半の縦走は悪天候にたたられ、須原へ下る際には悪い沢にまぎれ込んで、きびしい目にあった。食料燃料とも一片一滴も残さないギリギリの脱出だった。

中央アルプスは我々の仲間には殆どなじみのない場所だった

が、まずは期待にそってくれたいい山だ。楽しい、そして有益な山登りをした。なかでも、若い連中の活躍はめざましく、頼もしい限りだった。岩と雪と、そして風に対する経験を、期待していた以上に得ることが出来たと云えよう。難をいえばもっと機動性ある動きに充分慣れて欲しかった、ということであろうか。

短かかったが波瀾に富み身も心も焦燥した一年はこうして終わった。不慮にして起した事故のため各方面に及びもつかぬ迷惑をかけ、本当に詫びるべき言葉も知らない。そして、殆ど何事もなし得ないまま無情な時は経ち、今苦悩に満ちたままの一橋山岳部を若い世代へ残して行かねばならない。だが長い伝統に培われた我々の部がこのままに終ってしまうはずはなかろう。近き将来、新しい力によって再び光輝ある業績が刻まれることを信じて疑わない。

五、穂高にかえる

蛭川隆夫

A　春の横尾尾根（春季合宿）

一九六二年度春山合宿ほど問題を多く抱えている合宿はないであろう。この合宿の前後をはさむ二つの事故との関連の上でなければ、この合宿を考えることは不可能である、という事実にそれはあらわれている。

六一年度の、栂池から唐松岳往復の春山が終わって、一応後立山山域での積雪期合宿に終止符がうたれ、対象を穂高山群に移すことになった。この移し方については、種々議論されたが、極めてあいまいなものがあった。しかし、剣→後立山→穂高とわけて順々にそれらを登るというシステムそのものがすでに機械的であってすっきりしていない。ある山群をえらんで数年間それに集中するということは、大きな意義があり、もちろん三者が対象として不足のあるわけもないが、それにしても上記の三つは対象とするには大まかすぎて漠然としている。その上、近年処女ルートとしての魅力に乏しくなってきたという事情もあってこれまでのような合宿――特に積雪期――の持ち方には反省が加えられてしかるべきであろう。行きあたりばったりに合宿をもたないためにこそ、これからはもっと慎重に考えたいことである。

いずれにしても次は穂高だと「あいまい」に決ったのが四月。五月には、唐松岳往復合宿の反省から滝谷へ入ろうということで

偵察が行われた。すなわちポーラーシステムの欠陥についての配慮と、さらに一層我々が向上したいということもあって、雪山での岩登りをしようというのが我々の希望となっていた。

偵察は諸々の事由で満足に出来なかったが、この時点で次のようなプランが出された。滝谷アタック隊が若干のサポートを受けつつも自力で北穂南稜から北穂頂上にアタックキャンプを出す。他方それに合うように主力隊が横尾々根からキレットをへて奥穂往復を狙い、滝谷隊の登攀をサポートして後、それを収容するーーこれがそのプランである。この計画は、それなりに意欲に燃えた、しかも希望にみちた計画ではあった。

これがどれほど甘いものであったか——それを知らされたのが夏山の事故であった。この事故そのものについては前年の活動報告で触れられてあるので多言しないが。とにかく、我々は反省したというより、むしろ打ちのめされた。精も根もつきはてて滝谷なんぞは消しとんでしまった。少なくとも春山のリーダーたるべき私はそうであった。(私が受けた衝撃によって翌年の春山が何か安易なものになったとすれば、その責任はもちろん全部私が負うべきものである。例え事故の反省という大義名分があろうとも。)

事故の後の九月、我々がリーダーシップをまかされてから春山までは、反省の上に立って山岳部を再建しようとする努力の連続であった。我々の努力はあるいは的はずれのものであったかもしれないが、我々としてはともかくも一生懸命であった。また、後になって反省過剰との批評も受けたが、それも我々は甘受したい。

冬山は「レベルダウン」ということで、北鎌尾根から中央アルプスの縦走にきりかえられた。この合宿については少しもレベル的に全うなものではなかった。反省とかレベルダウンとかいうもっともらしいものではなく、事故を経験した我々の畏縮であった。持てる力を謹慎の意味でセーブするというのならまだ話はわかる。我々のはそうではなくて、単なる恐怖心によるものであり、実に情けないことであった。

勿論滝谷を強行した方がよかった、というのでなく、そんな力は我々にはなかったのであるが、そうかといって、安易に山行を計画してよいということにはならない。充分しすぎる程に反省した積りであったのが、実はそれは極めて甘いものであった。あるいは、反省などというりっぱなことでなく、相も変らず安易な後退であった——ともいえる。

春山は結局、極地法によって横尾々根から奥穂高岳、槍ケ岳を往復するという線で計画された。方法も場所も古典的なもので、大学山岳部の合宿としては何等新味のあるものではない。光輝ある先輩の業績には遠く及ばないものである。

その概要は次のようなものであった。

出発は三月三日。既に本間、小島、高崎の三名は先発隊として二八日に発って、横尾のベースハウスまでのボッカを進めていた。七日、蛭川以下一四名全員が横尾BHに集結。いよいよ横尾尾根にとりかかる。まず村上三名がP5に第一キャンプを設営する。横尾尾根の取付は横尾本谷と涸沢との合流点から五〇㍍ほど手前の樹林帯である。樺の木のある急斜面を登り切るとP5の一角に至るルートに出る。ついで一二日、天狗の池のコルに第二キャンプLを出す。これまでの調子が良いので、第二キャンプは天狗の池コルC2Lを、そしてアタック用のテントをC2Hとして南岳避難小屋前につくることにした。第三キャンプはA沢のコルに出す予定である。C2Hには村上、小島、本間の三名が入る。一四日には、村上、本間の二人がC2Hを出てキレットを越えA沢のコルまで偵察、ついで一五日には上級部員による第三キャンプ建設とボッカを行ないアタック態勢は整った。

一六日は沈澱し、一七日、夜来の降雪も止んだので村上、小島の二人で奥穂高岳のアタックへ出発。ラッセルが消耗で、A沢のコルから北壁側に寄って斜面を大きく迂回して進むが胸まで埋ってはなはだしくばてる。北穂直下、B沢のコルで検討の結果、アタックは困難であり、また偵察も強風のためトレースがすぐ消えるので意味が薄いと判断して第三キャンプへ戻った。ついで十八日、再度アタックへ出発。全くの新しいトレースをつけながら、風も収まった好天の中を行動一三時間、途中滝谷側を捲くヤセ尾根、唐沢岳の下りがやや悪かった。北穂直下で日没を見、ライトを照らしながら第三キャンプへ下る。出発六時半、奥穂一二時二五分、帰着七時二〇分。合宿第一の目標であった。

一九日、第三キャンプを徹収してC2Lに入る。この日C2Lのメンバーは全員槍ケ岳を往復した。二〇日には長沢と半場が中岳から槍沢におちる小さな雪稜を経て槍ースハウスに下った。二十二日、徹収し、日数の許すかぎり山に移し、翌日、蛭川他五名で西穂高岳往復、に入って登りまくろうという意気込みであったが、二四日はひどいボタン雪が降っており、食糧も終りに近く、下山と決め、木村さんの所でコンパ。二五日、下るほどに雪よりも土が多くなり、沢渡あたりも入山の頃とはうって変った春らしさに陽炎が燃えていた。

今から思えば何の波瀾もなくて、いわばソツなく終えてしまった。アタックの当日は、コンディションは思わしくなかったが、アタック隊の健闘によって無事奥穂の頂上は踏まれた。

この合宿は、事故の反省の上に立って山岳部らしい行動をするということを目的とした。即ちリーダーシップを満足いくように行なうというのである。これがなしとげられたかどうかはおいそれとは言えない。大学山岳部としてあるまじき行動が顕著であったとは言わないが、他方事故の教訓を充分身にしみて体得したとも考えることは出来ないと思う。

右のことと関連して、技術的な問題として再び極地法の欠陥が大きく浮び上ってきた。何らかのヴァリエーションルート登攀を加味しない極地法は、例え運用の妙をもってしても、ともすると安易になりがちなものである。特に我々の場合、安全のみが強調されて意欲を爆発させることのない、おとなしよそ登山のもつ魅力とは

程遠かったのが、春山であったのである。

B　五月の穂高周辺偵察行

春山は終ったが、何となく充実感が乏しかった。新年度に入っての五月の山行はそのことを考慮して少人数の分散合宿を行ない、岩尾根を力一杯歩くという方針の下で行なわれた。そして、不幸にも我々はここでもまた事故に遭遇した。

即ち、六三年五月の分散山行は冬山合宿を西穂または明神岳の稜線で行なうこととして、その偵察のために、西穂高岳から槍ケ岳までの縦走に一パーティ、明神岳東南稜に一パーティを出した。どちらかといえば明神の方に冬の興味が強かったので上級生は明神が主で、西穂は四年二人、二年二人、のパーティであった。リーダー竹中他五名、五月二四日に東京を発ち、二五日は西穂小屋、二六日は天狗のコルに泊り、二七日は奥穂小屋までの予定でコルを出た。雪の状態が意外に悪く、特にロバの耳からジャンダルムまでの稜線でスタカットで行動したため意外に時間がかかり、奥穂高に着いたのが五時近かった。

全員かなり消耗しており、奥穂の頂上に天幕を張ることも考えたが、何としても穂高小屋までは下り一方。三〇分もあれば着く。もう一息なので下りはじめ、沢が稜線へ突き上げている所で一寸、止まる。ガスで全然視界が利かず、沢をトラバース気味に下るのか、稜線づたいに岩を越えて行くのか迷ったが、岩を越えて行くことにする。すぐ三〇㍍先で一緒になるので竹中、中橋が沢のルートをとった。途中一五㍍程の所で突然中橋がスリップ、沢をストップの体勢のまま流されたが、すぐあお向けになり、そのままガスの中に消えた。時間も遅く、でとりあえず穂高小屋まで下り、佐藤（之力）を連絡に上高地の木村さんの所へおろし、あとは明朝にすべてを託する。

二八日、竹中、半場の二人で捜索、スリップした沢をおりて行くと、約一五〇㍍ほど下って、左から沢が一本入る地点の岩棚に中橋がビバークしているのを発見。傷は思ったよりも浅く、足と顔面に擦り傷を負っている。半場を木村さんの所まで連絡に下ろし、この日は現場で竹中がつきそって再度のビバーク。明神隊の蛭川、村上、佐藤（之）の三人が佐藤の連絡を受けて小屋まで上る。東京の石先輩の本部から朝の急行で大賀、大、小島の三人が救助に向う。二九日、朝から現役で引上げを開始、右手の支尾根づたいに、中橋を背負って、ジッヘルしながら上る。稜線へ出た時、大賀、少し遅れて大パーティが着き、夕刻七時半穂高小屋に収容。三〇日、タンカでおろし、上高地に夜着き、車で中橋の故郷の富山大学病院に運んだ。

幸いにも中橋の傷は大したことはなかった。三ヵ月の入院の後退院し、元気なっては居る。事故そのものは、夕刻でなければ直ちに捜索し発見して、あまり大きな騒ぎにならないで済んだ性質のものである。しかしこれは我々の年代が責任ある立場に立って初めて直面した事故であったが故に、又過去二回にわたる事故の反省が、一体我々にどれだけ実のあるものとなっていたのかという疑問を持たざるを得なくなったがために、一層我々は深刻に考えさせられたのであった。

春山が終ったあと先輩への報告書に次のような一節を書いた。

「我々としては、これで事故で露呈した諸欠点をすべて克服し

たとは毛頭思うつもりはなく」未だ我々の克服し得てない「欠陥を認めるにやぶさかではないのですが、今後は一応事故の反省期をすぎたという所でやってゆきたいと考えています。」

ここにあらわれているものは、一つは事故の反省の甘さであり、もう一つは早く反省期を終えて意欲的な山行を行いたいというファイトとあせりであった。山を厳しくみつめながらも意欲を忘れない、という登山家としても山岳部としても決しておろそかにしてはいけない二つの原則が奇妙に混在していた。我々は安全にしかも意欲的に山へ向わねばならない。どちらに偏してもいけないが、両者を統一してりっぱな山行をやることは大変むづかしいことである。しかしこのむづかしいことを我々はやらねばならないのである。

一九六二年度をふりかえってみると、山岳部は二つの両極端をゆれている。一つは反省と安全との美名のもとに退嬰的な意欲を欠いた山行である。一つは、山をなめて意欲のおもむくままに邁進しようとする山行である。いずれにしても安易なることに変りがなく、山岳部の歴史としては情けないとも云える一時代であった。そしてこの時代が一橋山岳部の歴史の上で後世に何等かの意味を持つとすれば、これまで述べてきたことを充分かみしめて両極端に偏しない合宿を行うように強く呼びかけているこの我々の声であろう。

以上述べてきた事態については、リーダーとしての私の能力の至らざる所による所が多いことは今更言うまでもない。しかし、単にそれだけでなく、山岳部があの事故をきっかけに新しく生れかわるべき時代にあったとも言えるのである。時と共に物事は移り変るのであり、山岳部だけがその例外たり得る筈がない。そうでなかったなら、二つの事故は何の意味をも有しない犬死（――別に当人は死ななかったのであるが）であったわけであるが、果してそうであろうか。両極端をそのまま具現しているような夏と五月の事故の反省をよくかみしめて、これからもりっぱな合宿を行ってほしいし、またそうであることを確信している。そして一橋山岳部の素晴らしい伝統が形は変えても受けつがれてゆくことも確信している。

事故は確率の問題だ、というが如き暴言が大学山岳部の間ですら聞かれる昨今である。だからこそ私は一層声を大にして右のことを訴えたいのである。

針葉樹十三号に記される四年間の活動の流れは以上のようなものである。前にも書かれているが、私達の活動は決して理路整然としたものではない。しかしこの活動報告の中から、自ずと当時の状況なり、流れている一橋山岳部の伝統なりを汲みとれるものと思う。私達の後に来る人、又私達と同じ活動を行っている人達の何かの参考になれば幸いである。

■ 記　　録

■北海道・東北■

八甲田・岩手山・八幡平

一九六〇年八月　蛭川　隆夫

八月二一日　曇のち雨

八戸の親戚宅に泊って、種差の有名なウミネコをみたり、十和田湖を一周したりして、昨晩は酸ケ湯温泉泊。ついでに八甲田大岳を往復して、八戸に戻った。ガスで道に迷いかかった。

八月二二日　晴

朝の汽車で南下し、東北線滝沢駅で下車。眼前に岩手山の雄姿をあおぎながら、ゆっくり畑道を辿る。人が「神」とあがめた山だけはある。そういう感じだ。麓の神社についたものの単独とて気がせかれて、結局、頂上近くの測候所までがんばってしまった。さびしくて、一〇時近くになって灯が見えたときはほっとした。

八月二三日　晴

頂上まで一時間足らずだったが、カール底のような御苗代湖に下る道がわからなくて、三時間もうろうろとした。湖からは八幡平へ続く尾根道に登りなおし、黒つく山をいくつか越えて、三ツ石山荘についた。小さな湿原の一角に立つ好もしい小屋だが、水が茶色の沼の水とあって残念である。

八月二四日　晴

今日はすごく稼いだ。人にも会わず、追われるような気持で殆んど休まない。一時半八幡沼に入ってハイカーの群に出会うと、今度は急に嫌になって、八幡平を一日ゆっくりぶらつく予定を変えて、急いで下山することにしてピッチをあげ、前にもましてピッチをあげ、ふけの湯におりた。最終バスにはあわなかったがトラックで八幡平駅に出て、臨時で翌朝東京についた。その後、北アルプスばかりに入っていると、こういう東北の山旅が懐しくなることがあった。

大雪山

一九六〇年八月　遠藤　晶土　他二名

高校時代の友人と二人で六人用テントをかついで阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖、美幌峠と型通りの北海道観光を済ませて上川から大雪へ入る。

八月三日　曇

上川駅（八・三〇）―バス―層雲峡（九・三〇）―バス―赤岳中腹一三五〇㍍（一一・〇〇）―白雲石室（一五・三〇）

今まで廻っていた観光地が矢張り「観光地」で、なにも北海道迄来なくたってよかったと思っていたが、曇っていて見晴らしがきかないにもかかわらずこの大きな高原ではじめて内地とちがう

「北海道」だと感じたわけ。夜は単独行の自衛隊員が泊る。
風の音を熊じゃないかと冗談に一人が云いだしたら三人共急にこわくなって急いで眠った。
八月二二日　晴のち曇のち雨
白雲石室（八・一五）―忠別沼（一一・〇〇）―忠別頂上（一二・〇〇）―五色原（一五・三〇）―化雲分岐点（一七・〇〇）
三六〇度の展望を楽しみながらのキジは仲々印象的。忠別沼でサンショウ魚とリスに会う。五色原の花の真中にテントをはる。
八月二三日　晴
五色原（八・〇〇）―化雲分岐点―化雲頂上―天人峡温泉（一七・〇〇）
今迄登った山では山の花はわざわざ探すものだったのだがここでは一面の花で色どりも五色どころではない。帰ってさっそく高山植物の本を買った程。おまけに鹿に会った。一生懸命写真を写す。化雲頂上で来し方、ゆくすえの山々の眺望を充分に楽しんで天人峡に降り営林署に泊めてもらう。
八月二四日　晴
天人峡温泉（六・〇〇）―ユコマン別温泉（八・〇〇）―旭岳姿見の池（一二・〇〇）
友人が都合でおりたので一人歩き。ヘビにチョイチョイ会うのでこわい事この上ない。昨年、大と倉知が重荷にあえぎガヤガヤさわぎながらゆくハイカーに追いぬかれてカツカツした道を同じ悲哀を味わいながら登る。
八月二五日　快晴
姿見の池石室（三・〇〇）―旭岳頂上（四・三〇）―間岳―北海岳―美ケ平―雲の平―黒岳石室―層雲峡―旭川
同宿のオジさん三人が御来迎を拝むというのでついて行く。頂上で丁度日の出。平野におちる山の影が見る間に短くなって行き「暗夜行路」のラストシーンを想い出す。オジさん達が御神酒だといってくれた一杯の冷いトリスがえらくうまかった。それから又単独行。ノンビリと写真をとり、冷い流れにミカンのカンを漬けクツをぬいだ足を冷やし、日陰に寝転んで風に吹かれ、夏山合宿縦走中にやりたいと思った事を全部やって黒岳石室。又今朝の三人に会う。
そのオジさんの一人がよかったら泊れというので旭川の自宅へ。御馳走になり下着まで洗ってもらって恐縮する。
この人の家には翌年日高に行った時も訪れたがその時も山の話に花が咲いた。年の頃六〇才という年輩の人達が近所の人とかたらって山に登る―北海道には真の意味での「大衆の山」がまだある。

利尻岳

一九六〇年八月　遠藤　晶士、他一名
八月二九日　晴のち雨
オシドマリ（四・〇〇）―頂上（一二・〇〇）―沓形（一六・〇〇）
昨日札幌のおじと稚内から礼文島に渡り礼文ウスユキ草を一輪つんで利尻島の旅館に泊った。頂上では岩をやってる早大のパーティ二人に会う。頂上から物凄い雨。川となった道をおりる。
この雨は台風の影響だそうで次の日も天気晴朗なれど浪高く連

絡船は欠航。やる事なくてタクシーで島を一周する。
やたらにデカイ犬がいる一軒しかない宿屋の女中さん三人ばかりといっしょに行ったのだがこの人達島を回るのは今がはじめてだそうだ。この何もない町で一体何をして暮しているのだろう。夜になって映画がはじまったので見に行く。美空ひばりやら正月映画やら三本立てが三時間で終る。
次の日、漸く船が出る。ホッとした四〇才の叔父の顔が面白かった。

石狩岳よりトムラウシへ

一九六一年八月　南　亮進（OB）、遠藤晶士、大　建二郎

日高から一週間の旅を終え、帯広の大加十全堂の支店の二階にくつろいで次の計画の用意をする。ジャガイモやカンヅメを仕入れ、士幌線に乗ったのが二八日である。

八月二八日　晴

ディーゼルカーは糠平ダムをすぎて十勝三股へ着く。夏とはいえ、さすがに吹き抜ける風は冷たい。小型トラックをチャーターしてユニ石狩岳登山口まで行く。そう云えば小生、士幌線に乗るのはこれで三度目で、年々開けて行く感じである。はじめは廃道になった車道を行き、途中から登山道になる。水場に一一時半着、うっそうと茂った原始林の沢で、南さんが三股で買って来たキビダンゴを桃太郎の猿よろしく食べる。ほどなく尾根に出てハイマツが現われ、一二時四五分、ユニ石狩分岐点につく。道はきれいに切りわけられている。稜線上に小さな汚い池を持つブヨ沢幕営地に一時半着。四人用テントを張った。

八月二九日　晴

石狩岳を往復して音更山から層雲峡へおりるという南さんを、こんないい所は二度と来れませんゾと説得して沼の原まで御一緒することとなる。実はクマが怖かったのである。遠藤はクマのような顔をしているから、俺は絶対喰われないと云う。彼の云う通りであろう。快晴のブヨ沢をあとに、音更山を登る。左手には遠くニペソツ山がその尖峰を突き上げて原始林の向うにそびえている。一時間一〇分で頂上。そこからガタガタ下り、ハイマツの間の道を急登すると、石狩岳だった。あこがれのこの山も、すぐ下まで林道が入り、チェンソーの音を響かせて切り出しをやっている。めしをたべて沼の原へ。この下りで始めて三人の登山者に会う。一週間の旅でこれが最初で最後の他人だった。南ア、間の岳と北岳の間のような快適な稜線を歩いて越の耳に一〇時一五分着。六百㍍ガタリと下って沼の原入口。にわか雨の中をひとしきり又登ると沼の原だった。二年ぶりの再来である。大沼の水は以前と変らず静まり返っていた。（大沼着一三時）

八月三〇日　曇

今日は沼の原からトムラウシまで。南さんは、クチャウンベツ川から層雲峡への道を下る。今日は大雪山連峰の中でも最もすばらしいと云われる沼の原―いちょうケ原―五色ケ原―いちょうケ原を見るコースなのだが、あいにくのガスで何も見えない。トムラウシはどの辺なのか全然わからず「北海道の山」や大雪山案内図を出して何度も思案する。この辺がトムラウシだろうと棒キレの立っているピークで休み、下って行くとガスの中からとてつもなくでかい山が現われ仰天する。それが本物のトムラウシだった。（一二時着）

岩を積重ねたようなゴツイ頂から三〇分下った頃、左手に池が現われ、テントを張った。（一・二〇）

八月三一日　曇

夜、星がまたたいていたが、朝になるとまたガスである。今日は双子池までの予定。硫黄沼への分岐点まで一時間、草原の道だ。スマヌプリはどの辺なのかさっぱりわからない。はい松の間の道を露にぬれながら歩く。カブト岩一〇時三五分。道は不明瞭になりクマザサの中のかすかな踏み跡をたどる。延々と続いた笹が一線で切れて山が現われた。このオプタテシケ山の手前に双子池のテントサイトがあった（一一時一五分）。ナタででっかい木を切ってたき火をする。歌をうたい、干物をし、北海道の山の静寂をたんのうした。

九月一日　雨

停滞。おととし倉知と大雪山を訪れたときは島倉千代子の「忘れな草」を歌って歩いた。今度はザ・ピーナツのラジオ歌謡「月夜の庭のテラスです」を毎日ラジオで聴いて歌う。遠藤と二人じゃムードも出ないがしょうがない。

九月二日　曇

うまい物を昨日皆食べてしまったので沈澱している気にもならず、白銀温泉へ下る。まずオプタテシケ山の六百粁の大斜面を登る。石垣山をまいて、十勝岳との分岐点まで来て小舎をさがす。ガスが晴れると目の前にあった。晴れていれば十勝へ行くのだが、あいにく何も見えなくては行く気になれない。分れて三時間のゆるい下りを経て四時四五分に白金温泉に着く。みやげ屋で安い宿は無いかと聞くと、あそこと指差しは呉れたのが食堂兼バーの二階。二食付いて三百円という。温泉は双子池への分岐点まで一時間、草原の道だ。スマヌプリはどの辺なのかさっぱりわからない。はい松の間の道を露にぬれながら歩く。カブト岩一〇時三五分。道は不明瞭になりクマザサの中のかすかな踏み跡をたどる。延々と続いた笹が一線で切れて山が現われた。このオプタテシケ山の手前に双子池のテントサイトがあった（一一時一五分）。ナタででっかい木を切ってたき火をする。歌をうたい、干物をし、北海道の山の静寂をたんのうした。

九月一日　雨

停滞。おととし倉知と大雪山を訪れたときは島倉千代子の「忘れな草」を歌って歩いた。今度はザ・ピーナツのラジオ歌謡「月夜の庭のテラスです」を毎日ラジオで聴いて歌う。遠藤と二人じゃムードも出ないがしょうがない。

九月二日　曇

うまい物を昨日皆食べてしまったので沈澱している気にもならず、白銀温泉へ下る。まずオプタテシケ山の六百粁の大斜面を登る。石垣山をまいて、十勝岳との分岐点まで来て小舎をさがす。ガスが晴れると目の前にあった。晴れていれば十勝へ行くのだが、あいにく何も見えなくては行く気になれない。分れて三時間のゆるい下りを経て四時四五分に白金温泉に着く。みやげ屋で安い宿は無いかと聞くと、あそこと指差し

朝日連峰

一九六〇年八月　本間　浩

八月一〇日　晴　山形―白滝―島原小屋

夏合宿後、一週間、そろそろ山が恋しくなる頃だった。で、念願の朝日を越えて、郷里に帰る計画をたてた。昼頃、白滝でバスを降り、草息れのムンムンするような谷間の道を、三時間程登ると、島原神社だった。同宿者が一名いた。

八月一一日　曇のち雨　島原小屋―大朝日小屋

七時半に小屋を出て、一ピッチで小朝日。月山、鳥海等の山々が雲間に薄く眺められた。ところが、大朝日小屋に着く頃から、雨が降り出し、とうとう登れなかった。しかし、雨の中、西朝日、竜門、寒江と、元気よく、ひとり口ずさみながら越えていくのも、又、乙なものだ。伊東岳からは、一気に、七〇〇粁を下る。急な沢であったため、かなり消耗だった。大鳥池は、全く静かな、東北らしい、落着いた、いまだ俗化されていない所だ。

八月一二日　晴　大鳥池（七・〇〇）―繁岡より三粁手前（一二・〇〇）―鶴岡

山全体が、お花畑のようなれば、快調な縦走になるだろう。

日高山脈

一九六一年八月　南　亮進、石　弘光(以上OB)、大　建二郎、遠藤晶土

日高へ行こう——僕は部へ入った時から、これが夢だった。ポロシリ岳（二〇五二・四㍍）を最高峰としてトッタベツ岳、カムイエクウチカウシ岳、エサオマントッタベツ岳等南北に連なる連峰を坂本直行描くところの日高連峰のスケッチから想像してあこがれていた。舌をかむような名前もなめらかに口をついて出るようになった頃、幸い南さんが行こうぜと云ってくれたので内地の山は歩きあきた石さんと、去年北海道を廻って味をしめた遠藤とを口説いて仲間に入れ、久我山の南邸に度々集まって打合せを行い、三井信託の札幌支店長の望月達夫先輩にも問合せたりしてコースを決めた。静内から新冠川を遡って幌尻岳へ登り、再び二股からエサオマントッタベツ岳に登って、尾根を南下し、コイカクシュサツナイ岳に登って九の沢を札内川に下るコースである。今は新冠川の奥に北電が奥新冠発電所を建設中で、だいぶアプローチが容易になったとのことであった。最終目標はいつか将来には日高で春山合宿をやることだった。夏合宿が終ってすぐさま郷里の函館へとんで帰り、札幌の姉の結婚式に出たりして後続を待った。

八月二〇日　晴

札幌（七・一四準急第一千歳）—静内（九・五六～一三・四〇）—岩清水—北電奥新冠発電所（一七・四〇）

所定の時間に札幌駅に集結し、いよいよ日高入りである。日高本線に入ってディゼルカーは原野のまっただ中を走る。隣の学生風の男が、どうしてこの辺は何も無いんですかと尋ねて来る。どうしてたって、そりゃ何もとれないからですよと知ったような答をしていると、車は海岸に出た。静内はその海岸に面した広々とした街である。北電の事務所に行くと、ジープが故障で朝から修理しているという。出されたリンゴをかめているうちに皆寝てしまう。昼になって駅前食堂でラーメンを食べて帰ってくると、岩清水からトラックを出すから、そこまでバスで行って呉れと云う。乗ってしばらく行くと、バスの前をトラックが走っている。説明を受けて来たのか、車掌があんたたちのトラックだという。訳がわからなくなったがとにかくそちらに乗移る。牧場にかこまれた道を抜けて新冠川に沿った道に入る。さすがダービー馬の産出地だけあって馬が方々に遊んでいる。トラックはスピードをあげ、我々は後ろの荷台でピョンピョンとび上る。途中、事務所らしい所で一度止りして休憩する。そこから一時間ほど、計四時間で鬱蒼とした谷合いの建設現場へ着く。清潔な出来たばかりの飯場にとめていただくものを食べる。車によっぱらって夕食後早々に床に入ると、しばらくしてビールを一ダースかついで来た人がいる。事務所で一橋の人が来たと聞込んでとんで来たそうだという先輩。がっちりとした体格に温和な顔が笑っている。飯野ゼミを出て鹿島建設に入り、ここに来ているという。話相手になるような人もいなく、インテリコンプレックスになりそうだとかで、国立かいわいや学校の話、仕事の話、山の話で本当に夜の更

けるのも忘れて話込んだ。こんな山奥にも先輩が来て働いているということは感激だった。昨冬には雪崩の後の鉄砲水で他の飯場の者が十数人も亡くなったとか、人夫相手は酒の一升は飲めなくてはなどと話しているうちにワラジや足袋も、ドシャ降りの雨と共に看護婦さんとやらが呼びに来て戻って行った。今日のビールは今までで一番うまかったとは石さんの弁である。

八月二一日　晴のち曇

飯場（七・一〇）―二股（一一・〇五）

晴れた空の下に幌尻らしい山並みがそびえている。プイラルベツ沢を左に見て、いよいよ新冠川の遡行が始まる。出だしがまず沢の中を歩いて渡らねばならないが、次第に徒渉が多くなり、めったくなる。ビッシリと生えたハイマツをこいで上へ上へと行くんどうくさくなる。ところどころ広々とした平地が開け、何ともない。一一時、二股着。キャンプ美しい。沢は浅く幅広く、滝となって入り、本流は左折して続の跡があり、正面から沢が滝く。少々早いがここで落着くことにした。タキ火だけは、豪快に燃して楽しむ。最近ひどい洪水があったのか、とてつもなく高い所に木が何本もひっかかっている。雨の時は細心の注意が要るようである。

八月二二日　曇

二股（六・四〇）―ポロシリ岳南尾根（一一・三〇）―カール（一三・三〇）―二股（一七・二五）

本流を遡行し、七ツ沼のカールを経て幌尻岳を往復せんと出かける。時々地図を出してはウンウンとうなずきながら行く。なにしろガヤガヤワイワイ歩くので目は足もとを見るのに勢一杯である。右側に黒々としたスラブがあり、水が美しく舞い落ちている。なおもどんどん進むと、ゴルジュがあり、高捲いてしばらく登ると水が細くなる。帰りに冷えたのを食べようぜという石さんの提案でモモカンを沢に沈め、目印を置き、ついでにワラジや足袋も、どうせ帰りにひろって行けばいいんだから、と置いて、又、登り始める。今考えると、カールにも着かぬのに沢が涸れるとは変な話なのだが、その時は気がつかない。草付きの急斜面をヤブを頼りにどんどん登ると尾根に出た。ガスって良く見えないが、カールの手前に尾根があるなんて話は聞いたことがないから道を間違えたんだということになる。足袋を置いて来た南さんは渋い顔をしているが、こっちだってモモカンを食い損ねたのだからムクレたくなる。ビッシリと生えたハイマツをこいで上へ上へと行くが、ガスにつつまれて中々山が姿を現わさない。クマはハイマツの実を常食とするという動物図鑑の一節が、こんな時だけヤケに頭に浮んで、皆、浮かない顔付きだ。そのうちにガスがスーッと晴れて、目の前にポロシリ岳が姿を現わした。木の全然生えていないすっきりとした山容、頂上から手前に広々としたカールが広がっている。頂上には棒が立っているが、その棒がやけに小さく見える。あと高度五〇㍍くらいの所で、時間が遅いから帰ろうやということになった。大体、下り道がまだわからないのである。尾根からまっしぐらにカールへ降りる。池があって水が流れている。何やらの足跡がたくさんある。水の流れに沿ってどんどん下って行くと、やがて本流らしい流れにぶつかった。とにかくこうというジャングルみたいな所を歩くのはあまり気持のいいものではない。踏み跡が出て来たので勇気百倍。すごい絶壁の上を倒木一

本でわたる所もある。二時間ほど下ると、右から大きな支流が入り、本流は左折する。見たような所だと思ったら、案の定、朝は間違えて右の沢をつめたのである。ここは本流がぐっと狭くなって右折しているが、どう見ても見落す所ではない。一体何をしていたんだろうとブツブツ云いながら、にわか雨がタヤミにまぎれて降り始めた沢を下った。

八月二三日　晴のち曇

二股（七・〇〇）―エサオマントッタベツ岳西カール（一二・〇〇）

朝めしはビーフンのピーマンいため。こいつが中々いける。前の晩から水にほおり込んでおくのである。今日も良い天気である。昨日の失敗でワラジの数が少いので一度捨てた奴をひろって来てはく。同じ様な小さな滝が時々出て来る正面の沢をどんどんつめる。やがて水が涸れ、右手のヤブの中に入る小さな沢に沿って進むとカールが眼前に開けた。空はすでに曇って一雨来そうである。中段の台地まで登ってテントを張る。円型劇場のようにぐるりと山がとりまき、前方だけが広々と空いている。我々四人以外は何物も居ない静寂の世界だが、クマのフンが生々しいのでその辺の茂みに隠れているに違いないと、キジを打つにも豆腐屋から借りて来たラッパを抱えて行く。やがて雨となった。

八月二四日　晴時々霧

西カール（七・一〇）―エサオマントッタベツ岳（八・三〇～九・〇〇）―北のカール（一五・〇〇）―分岐点（一二・四〇）―エサオマントッタベツ岳（一九〇一㍍）はあたかも涸沢と岳沢のように、西と北の二つのカールをかかえている。晴れ上り、雲海を沈めた北日高は実にすがすがしい。エサオマンに続く稜線がかすかな踏跡を水の流れの跡に追い、ハイマツをこいでエサオマンの頂上に着く。いかにも頂上らしい所である。イドンナップ、カムイエクウチカウシ、札内、トッタベツの峰々が手近にそびえている。遠く南のんびりと陽光を楽しんでから踏跡をたどって分岐点へ。途中に設営の後があった。まだ高山植物が咲いてカーペットのようである。分岐点で鳩首協議の結果、食糧不足なのでトッタベツ川を下ることにし、まだ時間があるからちょっと札内岳まで散歩しようと、ナタを片手に四人で出かける。道をつけながら行こうと、交代でハイマツ伐りをやるが、一時間やって一〇〇㍍ほどしか進まない。最初の意気込みはどこかへ消えて、ハイマツの上で昼寝をして戻る。

北のカールへ下る沢も、えらく急で消耗だった。清水が音を立てて流れるカールボーデンに一橋山岳部五七―Aテントを張る。と間もなくブヨの襲来だ。虫よけのリッペとかいう薬を顔中ぬっているのだが、その上から刺す奴もいる。火をたいて煙を出すと少し静かになる。不思議なもので夕方になると全然居なくなるのである。重畳とした山並みの彼方に十勝平野が広がっているのが望まれる。

八月二五日　雨　停滞

朝から小雨。沢を下るのだから雨はよそうやと、南さんのアカデミックな話や遠藤のアカデミックでない話などを聞きながら一

日を過す。

八月二六日　快晴

北のカール（六・三〇）トッタベツ川飯場（一四・一〇〇）―本名木材事業所（一四・五〇～一五・〇〇）―八千代―帯広（一六・三〇）

北のカールを源流とするエサオマントッタベツ沢は大きな滝も無いおだやかな沢である。大へん赤いペナントが時々出てくるので気が楽である。南さんが、今日中に帯広へ出るのは無理だというので、とぼしい食糧にいささか心細い思いをする。例によって沢を徒渉しながらどんどん下ると、にわか雨が来る。リャンピンと称する乾パンしか残っていないので、雨の中で食べる。沢方に奇妙なものがあるのを発見。よく見ると、今は廃道になった道にかかっている橋が、壊れて半分だけ川につき出しているのである。やっと道を歩けるという喜びは本当に大きかった。ほどなく広々とした沢に出合う。トッタベツ川本流である。この辺は昔林道でも作ったのか、飯場の跡が所々残っている。トッタベツ川を何回か徒渉し、夏の草いきれと蟬の合唱の中を下ると右岸に幅一尺ほどの道が現われた。やがて新しい林道建設現場が現われ、人のいる伐採事務所があったという。又砂利道を炎天に焼かれながら歩くと、右から大きな濁った沢が入って来た。見ると岸辺に家があり、本名木材事業所と書いてある。玄関にジープが一台いるではないか。バスのある八千代まではまだ三時間はかかる。当ってくだけろと石さんと遠藤という心臓二人組みが交渉に行く。どうせ断られるだろうと思っていると二人が躍り上って走って来る。南、石の御両人は前へ、遠藤と大は後につけてくれたトレーラーに見せ物のクマよろしく乗り込んで、雄大な（南さんは景色を見るたびに口癖のように雄大だナァと云っていた。）日高の山々に別れを告げ、茫洋と拡がる十勝平野へと山を下った。

×　×　×

日高は当山岳部ではあまり登っていないが、北大山岳部はほとんどあます所なく登っている。現在ではそう未開の山でもない。ただ道が無いので本当の山の実力が要求される。岩登りやハイキングも良いが四年に一回位はこういう原始の山に触れてもよいと思う。ちなみに、ワラジは一日一足、あと熊よけの笛と、ナタは必ず用意すること。テントやシュラーフは無くても登れそうである。

（大）

朝日連峰

一九六一年八月　高橋信成　他一〇名

八月一七日　晴　左沢―鳥原山

うまくガソリンカーに便乗出来て、古寺鉱泉まで楽に入れた。登山路は幅が四尺近くもあり、山径という感じがしない。鳥原山の湿原を越えた小池の畔に幕営。

八月一八日　晴　鳥原山―大朝日―西朝日

ハゲ頭のテッペンの様な小朝日を越え、熊越の急降下をドンドン下ると大朝日の登りになる。お花畠、池塘の点在する稜線を行き西朝日岳を越えた所に幕営。

八月一九日　晴　西朝日―以東岳―大鳥池

だらだらとした登降を何度か繰り返すと、だだっ広い以東岳につく。大鳥池が脚下に見える。池畔に幕営。

八月二〇日　晴　大島池―鶴岡

皿淵までは樹林の中だが、そこからは炎天下、全く暑い下山だった。

（高橋）

安達太郎連峰

一九六一年八月　小島　和人

八月三一日　晴

岳温泉（七・四五）―安達太郎岳・箕輪山・鬼面山（十一・〇〇～一一・三〇）―野地温泉（一四・〇〇）

東北の山々は、女性的な穏やかな魅力を持っている。この安達太郎群も又、同じ山々である。東北線、二本松からバスで二〇分の岳温泉が一般に登山口とされている。森林帯を一時間半ほどで抜けると勢至平に着く。ここは、すばらしいススキの原で、秋の美しさは、又格別である。安達太郎山から鬼面山への道は、さほどの高低はなく、左に磐梯山を見ながらの漫歩は楽しいものである。聞く所によると、近年中、安遠太郎山頂まで、バスで登れるようになると言う。より多くの人々がこの山の美しさに接することが出来るようになるのは、大層喜ばしいことには相違ないだろうが、私は、何か複雑な気持にならざるを得ない。

ボクだけは何とか都合がついたので、二人より一週間程先に東京を発つことにした。十勝岳のふもとの白金温泉で二一日に落合うことを約束して、一四日夕方芝浦桟橋発の釧路行定期船で、北海道へ向った。同じ船出でも、華やかに海外遠征に出かけるのとは大分勝手が違う。それでも、折りからの快晴に国会議事堂がはっきり見えて、東京から脱出するという事実を実感として認識することは出来た。

翌日は終日のんびりと船旅を楽しむ。海はかなり波があって、大分ローリングが激しかったが。一六日朝釧路着。一日経ったらってしまうものだ。今年の春合宿は、敬遠したのだか敬遠されたのだか知らないが、結局大学院と五年生の我々は合宿にはそっぽを向いて、果敢にも大雪山のスキー縦走を企わだてることにした。フリーな気持で、こんな大計画をやろうとする余裕が出来たのは、これが初めてだった。考えて見れば、呪うべき「合宿」は実に多くの関門を立ちはだからせて、伸び伸びと人生を楽しもうとする者をワクにおし込めてしまう。もっとも、それが故に、今こうしてマトモな山登り――と云えないまでも、とにかく曲りなりにもマトモに、登ることが出来るようになったのだろうが。

始めは半月程の大計画をたてて胸をふくらませていたのだが、いつの間にか用事やら何やら、例によって浮世の泡沫に足をすくわれる者が出て来て、計画は一週間程にちぢまってしまった。たった七日で十勝岳と石狩岳をスキーで滑り越えようという、いささか無責任な、勇ましい計画である。ガス・クッカーや軽量食を用意し、雪洞用のりっぱなスコップなど買い込んで、準備おさおさ怠りなかった。

石狩岳とニペソツ

一九六三年三月　南　亮進、石　弘光（以上OB）、倉知　敬

合宿々々と追われて居る内に、四年そこそこの年月などすぐ経ってしまうものだ。今年の春合宿は、敬遠したのだか敬遠されたのだか知らないが、結局大学院と五年生の我々は合宿にはそっぽを向いて、果敢にも大雪山のスキー縦走を企わだてることにした。フリーな気持で、こんな大計画をやろうとする余裕が出来たのは、これが初めてだった。考えて見れば、呪うべき「合宿」は実に多くの関門を立ちはだからせて、伸び伸びと人生を楽しもうとする者をワクにおし込めてしまう。もっとも、それが故に、今こうしてマトモな山登り――と云えないまでも、とにかく曲りなりにもマトモに、登ることが出来るようになったのだろうが。

始めは半月程の大計画をたてて胸をふくらませていたのだが、いつの間にか用事やら何やら、例によって浮世の泡沫に足をすくわれる者が出て来て、計画は一週間程にちぢまってしまった。たった七日で十勝岳と石狩岳をスキーで滑り越えようという、いささか無責任な、勇ましい計画である。ガス・クッカーや軽量食を用意し、雪洞用のりっぱなスコップなど買い込んで、準備おさおさ怠りなかった。

ボクだけは何とか都合がついたので、二人より一週間程先に東京を発つことにした。十勝岳のふもとの白金温泉で二一日に落合うことを約束して、一四日夕方芝浦桟橋発の釧路行定期船で、北海道へ向った。同じ船出でも、華やかに海外遠征に出かけるのとは大分勝手が違う。それでも、折りからの快晴に国会議事堂がはっきり見えて、東京から脱出するという事実を実感として認識することは出来た。

翌日は終日のんびりと船旅を楽しむ。海はかなり波があって、大分ローリングが激しかったが。一六日朝釧路着。一日経ったら

もう単調な船旅もあきてしまっ
である。汽車の時間待ちに、雪
園などを訪ねた。「しらじらと
の月かな」という釧路の海も、
はずれの流氷が間の抜けたよう
た。

午後の急行「狩勝」で釧路発
の日は駅前の宿に泊る。

三月一七日　晴

早朝バスで白金温泉へ、すぐ
と一緒に望岳台まで行く。バス
近かに拡がって居て、そのフト
だが、全部よく見える。この夏
ふれる噴煙がモクモクとわき出
し。

だだっ広い硫黄山のスロープ
クポク越えて白銀荘に向った。
なかば埋もれて瀟酒な姿で待っ
別棟に寝泊しているので、一ツ
った。

三月一八日　晴のち雪

目がさめるともう太陽は高く
朝。腹の調子が何かおかしいの
る。この瞬間、自分ほど幸福な
ながら……。

午後から三段山へ向う。途中まで行ったらガス
て来たので引き返した。夜は退屈して、小屋番氏の所へ無駄話を
しに行く。十勝が噴火した時の話から始まって、彼の若かりし頃
の企業家としての活躍とその失敗の顚末、そして北海道へ十勝へ
と流れ来た過程など、夜ふけるまでしんみりと身上話など聞かさ
れたものだ。

三月一九日　小雪、一時晴

怪し気な天気だったが、富良野岳へ向う。気温高く雪ベタつい
て気分よからず。最初はずっと樹林帯をまいて、一本川を越して
から尾根にとりつく。かなり急で、しかもヒザ近くまでラッセル
があるので、一人ではとてもしんどい。それでも、小雪ちらつく
中に深閑としてそびえる樹々のたたづまいに、とても満足しなが
ら、しゃにむに登った。

午後二時頃になって、ようやく樹林帯をぬけた。それと共に雪
もしまって来、傾斜もぐっと急になって来たので、スキーをデポ
し、アイゼンにはきかえる。樹が見えなくなると周囲は丸で真白
で何もわからない。ただ目前に見える急な斜面をどこまでもポコ
ポコ登りつづけた。その内に段々と尾根が広くなり、傾斜もゆる
くなって来て、とても帰りに道を間違えないで下れる自信がなく
なって来たので引き返すことにした。

下りは楽しかった。斜面を思うままに切ってドンドン滑った。
尾根を下りきった頃、どうした訳か見る見る内に雲が上がって、
青空が見えて来た。その内に稜線の方まで晴れ上って、今登った
尾根が手にとるように見えた。頂上が夕日に光ってきれいだっ
た。しかし、それもつかの間、又ガスがかかって小屋に着く頃に

はまた小雪が降り出して居た。

三月二〇日　曇

明日、後発の二人と白金温泉で会う約束なので山を降りる。重い荷物のせいで七転八倒しながら温泉へ滑り降りた。白樺荘泊。

三月二一日　曇のち雪、一時晴れ

約束通り、一番のバスで二人がやって来た。いろいろ変転があったけれども、どうやら出発点にそろった訳で、うれしかった。

美映川沿いに林道が通じているので、車を雇ってその終点の営林署事業所まで行くことにする。きれいに除雪された道を三〇分もゆられて行くと、巨大な丸太がゴロゴロして居る作業所に着いた。車を降りると木の香がプンと匂って来た。その辺に居た人夫に聞くと、それから上流へは道も、踏跡もないそうで、いきなりスキーをはいてラッセルをしなくてはならないことになった。

雪は大分しめって重く、そんなにもぐらないが進むのはあまり楽でない。木の少ない所を選んでずっと右岸をたどった。その内に朝から大分怪しかった空からポツリポツリとやって来た。重荷とくさった雪にてこずっているまけに川岸もせまって来てかなり急な斜面をへづらなくてはならなくなった。スキーをはずして手渡ししたり苦労していたら、一人が川の中へ落ちてしまった。雪にかこまれてしまったし、こうはかどらなくては雪洞を掘るのも楽でないので、結局一度引返すことにした。半分程引返した所で、やや天気好転したので、今度は左岸を見てみようと、荷物は置いて左岸をのぼってみた。左岸もひどく木が多くてあまり楽ではなかった。

そうする内に、先程までの雨空は一かきしたように晴れ上り、一時は全く快晴になった。林の間からオプタテシケがきれいに見え、これは又登るに限ると思ったが、それもつかの間又ドンドン雲が厚くなって今度は大ツブの雪が降り出した。誠にあきれた変わり様で、あっけにとられたものだった。一昨日もかなりはげしく変化したが、どうもこの時期はこういう不安定な天気が続くらしい。

結局サッサと営林署事業所に戻り、色々考えたが、日数と天気の様子から縦走はやめた方がよさそうだったので、残念ながらあきらめることにする。そしてどうしてもこれだけは登りたいと決めていた石狩岳だけでガマンすることにして、音更川の方へ回ることにした。帯広に出、士幌線の終点の十勝三股から登るのである。この日は再び白金温泉に戻り、白樺荘泊り。

三月二二日　晴のち曇

一番のバスで美映へ下り、汽車旅行。狩勝峠付近から真白な日高の山々が望まれ、ひどく登りたい衝動にかられた。十勝の方はまだ雲におおわれていても、南の日高や平野部ではいい天気だった。

十勝三股に着いたのは午後三時頃。最近まで樵夫達が入って居たそうで、石狩岳のフモトの音更川が三方に分岐する所まで車が入るので、駅前の商店に頼み込んで車を回してもらった。文明の利器は有難いもので、アッという間に雪にかこまれた世界にとび込むことが出来た。川の合流点には一寸した広さの平地が開けていて、その真中にりっぱな営林署の小屋が建って居る。

山小屋というには一寸不適当な程のその家屋に入り、その内で一番上等なタタミの入った部屋におさまった。ストーブもマキも完備している。この小屋は俗に本流御殿と呼ぶらしいが、正に

御殿もむべなるかなと思う。
暗くなるまでに一時間のヒマがあるので、着いてすぐ偵察に出かける。ドンヨリ曇り、稜線はガスにかくれ見えないが、大体山のかっこうは判った。登路を確認し引き返す。

三月二三日　高曇り

うす明るくなる頃、小屋を出、石狩岳に向う。広い沢を一時間余りもつめて行くと、石狩岳と音更山の間の丁度フトコロともいうべき奥まった所につく。この二つの山をつなぐ尾根から似たような側稜がいくつも派生しているが、その中のやや音更山寄りのものが従来登路にとられている様なので、その方がまちがいあるまいと思ってそれを選んだ。本当ならば石狩岳へ直接突き上げているものをとるのが手取早いのだが、比較的急でそれだけスキーの使える余地が少ないし、ザイルも持って居ないことなので、まあ安全を期した訳である。

樹林の中の急な斜面をジグザグに切って登っていくと、雪面が固くしまって居るので、ある程度以上傾斜が強くなるとシールもきかず、エッジを立てて横向きに登らなければならなくなった。しかし、一寸したはづみでエッヂをはずすと、バランスをこわしたまま、せっかくかせいだ斜面をツルツルと滑り落ちてしまって何することも出来ない。スキーをぬぐのはもったいなかったが、仕方ないので木の陰にデポしていくことにした。雪は、クラストして居るのは表面だけなので、歩き出すとひどくもぐって非常に登りにくいことだった。

樹林帯をぬけ出すといよいよヤセた尾根状になり雪も落ち着いて来た。主稜線も手にとるように近づき、上方は濃い雲におおわれて居るものの、大分遠方まで視界がきいてた。特にこの方面から見るニペソツは、ピラミッド型をしてそびえて居るので、とても印象的である。

やせてはいるが取り立てて難しい所もなくどんどん高度をかせぐことが出来た。石狩岳の近くの方は丁度バットレス状になって居て登ったら一寸骨のようだ。音更山の腹をまく所からアイゼンを着用し、予定よりかなり早く主稜線上に達することが出来た。十勝から旭岳に至る雄大な山々、というより広々した雪原が一望のもとに見わたせた。これを見て、やっと、はるけくもやって来たワイ、という実感がわいて来たものだ。

そこからは広いゆるやかな尾根が頂上まで続いて居り、ゆっくり登っていけば、ヤセ尾根の連なりみたいなあまり頂上らしくない頂上に着くことが出来た。石狩川の源流の名高い山にしては一寸ばかりお粗末な風体であった。だが流石に位置がよいので、展望はなかなかりっぱである。高曇りだったから決してケンランたる絶景ではなかったが、おうように広々とひろがった中央高地の山々は、味わい深いたたずまいがあって、見て居てあきない。すべてが箱庭式の日本にあっては、まず出色の景観である。

ヒマがあったので、デコボコと連らなっている頂上の一端から他端まで五分間で歩けるかどうか、カツドンだったか何かを賭けて歩いて見たら、見事に勝った。

帰りはだんだん薄日などもさして来て、非常にのんびりした気分だった。一寸雪がやわらかくなって居たが、スキーの滑降もゆかいだった。下に降りてから適当に斜面をとって練習などする余裕もあった。薄暗くなる頃、大いに満足して小屋にもどった。

三月二四、二五日　雪　停滞

とにかく一つ頂上をふんで一安心したが、次は石狩岳からよく見えてひどく登攀欲にかられた、ニペソツに登ることにした。登るルートは石狩の頂上からはよく見定めておいたので間違いはない。ただ距離がかなりあるので途中雪洞を掘って泊り、二日がかりでやることにした。しかしながらそれから二日間絶え間なく雪が降りつづき、ラジオで聞いた所によると、釧路あたりではかなりの被害がでた程だったので、どうしようもなくその間は寝てくらす羽目になった。

三月二六日　晴のち曇、風強し

雲がとぶように流れていって落着かない天気だった。風のせいかひどく降った割にはそれ程積もっていない。小屋の前から南に入っている沢を、切り開きした道に沿って行く。始めはちゃんとした道があってはかどるが、その内に沢もせばまり登りの傾斜も強ってくると、雪が深くなりヒザ位までもぐって進み具合は遅々として来た。沢の真中より尾根の上の方がもぐらないだろうと思って、右岸の林の中を行くことにしたが、雪の状態には大してかわりなく、かえって重なる木々に行方をはばまれて迂回したり、しんどいことだった。

小屋から三時間も行くと沢は浅くなり、左岸は広い林の斜面となって居た。そこをジグザグに登りながら、沢の源頭に向って進む。

やがて沢をつめ切ると、二つのコブの鞍部になった展望のよい場所に着いた。ゆるやかな樹林になってひろがった平らな林の絶えた所から、雪の大斜面が天狗岳に登っている。大斜面には東から西へと黒々としたマッシブな雲のかたまりが次から次へと流れていって、雄壮この上ない景観だった。登りまで登って雪洞を掘ることにする。

雪は堅からずやわらかからず、雪洞を掘るには丁度よかった。三人ならんで横になれる広さのものを掘るに二時間程かかった。

三月二七日　曇のち薄晴

夜は風がおさまり、雲は消え、星がキラキラかがやいて本当にきれいだった。遠く帯広の灯も望まれた。意外に空にはウス雲がかかって、それも段々厚くなるもよう。とにかく急ぐことにした。スキー明るくなると共に雪洞を出る。意外に出ると、パッと、ニペソツの全貌がとび込んで来た。ウネウネとかなりやせた尾根がつづき、最後にグイとピラミッドがそびえている。とても長そうだったが、歩いてみるとそれ程でもなかった。奥行があるせいか、かっこうの割には難所もなくやさしい尾根である。ただ左側はスッパリ切れていて、赤黒い岩を露出したニペソツのバットレスはなかなか迫力がある。

いそいだお陰で、結局雪洞から二時間余りで頂上についた。十勝岳の噴煙のためであろう、雪が変によごれていて灰色を呈している。灰色のシュカブラが又奇妙な様子である。ひどく寒かったので、記念写真もそこそこに頂上をあとにした。なかなか悪くなり相でならなかった天気は、帰る頃になると意外にも好転のキザシを見せてうすく晴れ間も見えだした。それですっかり気分ものんびりして、ゆっくり景色など充分賞玩しながら下ったものだ。

雪洞からは深い雪に思うまならぬスキーをなんとかそろえて往路を忠実にたどって下る。いくらころんでもスキーというものは早いもので、夢中になっている内に小屋にもどることが出来た。ただし下の方ではほとんど傾斜がなくなると、普通のラッカー塗りのスキーと、近代科学の粋をあつめたポルロンソールとの差は如実に現われて、先頭と最後が小屋につくには大分間があった。

小屋で少し休んだ後、そのまま、十勝三股へ下る。夕やけに石狩岳が赤くそまって、我々を見送ってくれた。後を何度も振返りながら歩く。十勝三股の駅についた時にはもうとっぷり日がくれて居た。

（倉知）

■剣・黒部周辺■

涸沢―笠ケ岳―針ノ木岳（夏合宿縦走）

一九六〇年七月　中川滋夫、永井新也、有賀盈、三股宏、朝木大統、遠藤晶士、名和泰三、長沢道彦、熊谷　弘、竹中　彰、蛭川隆夫、中橋寿雄

七月二四日　晴

涸沢―上高地―中尾峠下テント場

きのうで定着合宿は終り、いよいよこれから待望の縦走である。

岩登り中落石で負傷した倉知を背負子でかつぎながらの行軍で上高地についたのが三時半であった。ここで縦走用の荷物を加えてさらに歩くこと一時間、林間の砂地に設営した。

七月二五日　晴

テント場―中尾峠―槍見温泉

中尾峠の登りといい、槍見までの下りといい、意外な時間をくってしまった。前方の笠の雄姿が歩くたびに高くなっていき、明日あれを登るのかと思うと気が重くなった。蛭川は靴ズレをひど

くしてここからバスで下山と決った。下山する本人はうれしいやらくやしいやら、複雑な心境であった。残る他の一年生の顔はこれまたうらめしそうでもあり平気そうでもあった。

七月二六日　曇のち雨

槍見温泉―笠ケ岳―テント場

標高差二〇〇〇㍍。六時間半の苦闘で稜線に出れば、追い討ちをかけるように豪雨の来襲。一年生は皆やけくそである。頂上から一〇分も下った所に設営。「小舎に入らないのですか」と真顔で訴える一年生もいた。

七月二七日　曇のち雨

テント場―抜戸岳―双六池

期待していた裏穂高の眺めもおがめず残念であった。

七月二八日　晴のち曇

双六池―雲の平

久し振りの青空に半日行動とあって、自然に楽しい気分になる。雲の平は夕日に美しく映えていて、我々はその中を心ゆくまで散策した。

七月二九日　晴のち雨

雲の平―野口五郎岳―烏帽子岳四十八池

今日は某女子大のけたたましい矯声で眼をさまされた。裏銀コースにガスときては、飛ばすしか能がない。快調のピッチであった。

七月三〇日　晴

四十八池―船窪小屋幕営地

腹の調子がおかしい中橋は単身下山。久々の快晴に気をよくしたのか、トップはむやみに飛ばす。縦走も終りに近づき、ビール、ビフテキ等々が現実性を伴って眼に浮ぶ。皆はソワソワ、ニヤニヤである。

七月三一日　晴

幕営地―北葛岳―針の木峠―大町

針の木泊りの予定が、帰心矢の如しで一二時に着いてしまったので下山と決定。足どりも軽く針の木雪渓を下って下界へ向った。

（中川）

黒部川横断（夏合宿縦走）

一九六〇年七月　中島　寛、小林進二、小林正直

七月二八日　晴のち曇

双六池（七・五〇）―雲の平（一二・二五）―薬師沢出合（一六・三〇）

三俣連華小屋で裏銀隊と別れ、雲の平に入る。剣沢へのボッカも兼ねて、余分の食糧を背負っているので荷は重い。高山植物の咲き乱れる草原にのんびりできないのが残念だ。雲の平から黒部川への下りはかなりの悪路。湿原帯からは、涸沢の苔むした石や倒木の多いよく踏まれていない道が続く。最後はブッシュをつかんで滑り下り、薬師沢の出合いに立つ。その頃、雨が降り出す。渡渉して、直ちに対岸に幕営する。電源開発の仕事で近くに来ている山案内人から、岩魚を御馳走になる。

七月二九日　曇

太郎兵衛平（六・三〇）―薬師岳（一〇・〇〇）―スゴ乗越（一二・三〇）―越沢岳（一五・三五）―五色ケ原（一七・四五）

相変わらず天候はよくならない。ガスの中を薬師沢遡行。渡渉を七、八回繰り返す。すっかり冷えたところで今日もまた午後の雨。ポンチョをかぶって太郎山からの尾根にとりつく。太郎兵衛平に着いた時には一〇㍍先も見えず、直ちに幕営。

七月三一日　晴

五色ケ原（九・四〇）―一の越（一三・五〇）―雄山（一四・五五）―剣沢（一七・三〇）

友田先輩の碑に参ってから、一面のガスの中をともかく出発。ザラ峠の登りの頃から次第に晴れ上り、立山・剣が近づいてくる。にぎやかな一の越から雄山の風情を横目でにらみつつ、一路剣沢に急ぐ。最後だと思うとかえって力が入り足が軽くなる。剣沢は相も変らぬ盛況で、仲間を見つけるのに一苦労する程だ。やっと、食糧を待ってスキ腹をかかえていた二、三年生を見つける。次から次へと話がはずんで実に愉快だった。明日からは又岩が待っているゾ。

（中島）

涸沢―剣岳（夏合宿縦走）

一九六〇年七月　大　建二郎（リーダー）、宮本英治、三井博、多田伸治、後閑勉六、臼井　弘

七月二四日　晴

涸沢―北穂高岳―中岳

一昨年五時間もかかった南稜も今年は調子よく抜けられた。

七月二五日　晴のち雨

中岳―槍の肩―双六池

双六小屋の見えるあたりから豪雨の襲来を受けて、池のほとりにさっさとテントを張ってしまった。

七月二六日　曇のち雨

双六池―三俣蓮華岳―五郎平

そろそろ食糧に対する文句が出てきた。今日もまた午後の雨となる。

七月二七日　曇一時晴

五郎平―薬師峠

昨夜の雨で道はさながら泥沼と化し、某君の転倒すること限りなし。

七月二八日　快晴のち雨

薬師峠―スゴ小屋

今日も雨に見舞われる。雨の中を一向に軽くならない荷物―延長戦の岩登り用具があるからだ！―をうらめしく思いながら黙々と歩いた。

七月二九日　曇のち雨

スゴ―五色ケ原

相変らず雨とガス。景色もろくに眺められない縦走は苦痛この上もなし。おまけに道はすっかりぬかってかなり不快である。

七月三〇日　快晴

五色ケ原―一ノ越―雄山―剣沢

久し振りの青空。それに今日が縦走の最後の日。それなのに心がはずまないのは、穂高で岩登りをたんのうした後のこのさえない縦走に気が滅入ってしまっているからだ。

七月三一日　快晴　停滞

延長戦のリーダーがまだ現われない。食糧も底をついて、仕方

なく一日拾い屋になる。夕刻、縦走の中島パーティーが到着して一安心。翌日から三の窓にテントを出して延長戦が始まった。

剣岳・チンネと池の谷（夏合宿延長戦）

一九六〇年八月

夏合宿の延長戦は、従来、気ままな個人山行として行われたり、あるいはやりたくともパーティが不揃いで流れ解散に終ったり、どうも思わしくなかった。そこで今回は、二、三年部員の強化合宿としてキマリを付けようという計画が立てられた。

強化合宿のリーダーには本合宿に参加できなかった大賀が当り、単身東京から出向いて縦走あがりの二パーティと剣沢で落ち合う手はずを決めた。

結果として、シゴかれた側の二、三年部員には、穂高で充分登ってきたためもあってか、あまり評判がよくなかった。が、彼らの実力は、チンネでも、合宿として初めて取り付いた池ノ谷奥壁でも立派に発揮され、部全体の立場でみれば、収穫もあがったし危険防止にも役立ったと思える。

その後、縦走後の強化合宿というものが行われなくなったのは、はなはだ残念である。（大賀）

大賀二郎（リーダー）、大建二郎、三井　博、臼井　弘、多田伸治、後閑勉六、中島　寛、小林進二、小林正直、宮本英治

七月三一日　晴

中島以下九名剣沢入り。宮本風邪が、それでもその日の内に二本登った。大賀がまだ来ないとモンクを言いながら三ノ窓入りした連中だで休養。

八月一日　晴

中島、大、三井、多田、臼井、後閑、三ノ窓設営。小林（進）、小林（正）ボッカを手伝い剣沢に戻る。大賀離京。

八月二日　晴

左稜線・g・c・d（中島、後閑）

北条新村ルート・a・b（三井、臼井）

左下カンテ・g・c・d（大、多田）

中央チムニー・g・c・d（大賀、三井）

左方ルンゼ・aバンド・bクラック（大、臼井、後閑）

中島は登攀後剣沢へ下る。小林（進）大賀剣沢入り。宮本風邪伝った後　剣沢へ戻る。小林（正）休養。宮本下山。

八月三日　ガス、時々晴

左稜線・g・c・d（三井、多田）

北条新村ルートg・c・d（大賀、大、後閑）

昨夜食いすぎて腹をこわした臼井は沈澱。後閑は、岩登り一年生だが、北条ルートをカラキジを打ちながらゆうゆうと登った。

この日、数々の名作を残したギューちゃんのカメラ・パールⅡ型は、中央バンドから三ノ窓の雪渓へ消えた。

中島、小林（進）、小林（正）下山。

八月四日　快晴のちにわか雨

剣尾根主稜（大賀、後閑）

池ノ谷右俣奥壁右岩稜（三井、臼井）
池ノ谷右俣奥壁左岩稜（大賀、多田）
池ノ谷奥壁には、これ以前に当部で取り着いたことはなかった。したがってその悪さは、ガイドブックに盛られた沢山の形容詞から推測するしかない。そのため、リーダーとして、パーティの編成に苦しんだ。三人ずつで三年生と二年生。経験の多い大を若干むづかしいと思われるドーム稜へ行かせる。三井パーティでは時間がかかる。二人ずつで三年稜へ行かせる。難易自由にルートをとれる右岩稜へ行ってもらう。そこまでは良い。だが、大賀、後閑組は弱くなった。後閑は、前日の登りからみて信頼できるというものの、岩登りは一年生である。アブミも奥壁組に二コずつ持たせたので、大賀の手には一コしか残らなかった。あとはファイトで何とかしようというわけだ。

〈剣尾根主稜〉　大賀、後閑組（六・二五）―コルE（七・〇〇～八・一〇）―Ⅱ峰フェース（一〇・一〇～一〇・二五）―ドーム（一二・三〇）―Ⅱ峰（八・一〇～一〇・一〇）―三ノ窓AC（五・四五）―コルC・昼食（一二・一五）―コルE（一三・二〇～一三・四五）―帰幕（一六・三〇）

池ノ谷のコル（一四・三〇）―この岩場でも分りにくいものだ。剣取り付きというものは、どこの、判然としないルンゼ状の密尾根もご多聞に洩れない。我々は、三ノ窓から四〇分ほど下り、そろそろ二股が近くなったあたりの、ヤブにもぐり込んだ。実はRの10（ふつう取り付きに使われる）とおぼしき比較的明瞭なルンゼがあったのだが、できるだけ剣尾根末端から登りたかったので、故意に見送ったためでもある。ヤブと云ってもラクではない。握力に頼った草付きのトラバースなど、イヤな思いかし、我々はこのヤブこぎでうまい具合くことができた。この長大な尾根で一番ずに済み、ホッとする思いでピッチを上げる。

コルEから大木の間をすり抜け、這松の波乗りを繰返すこと一時間で、PⅢを越える（八・一〇）。このような」ボリュームがある。

PⅡのフェースで初めてザイルを出す（八・五〇）。三〇米の容易な登攀。後閑がトップで、二人合わせて二五分で通過（九・一五）。

PⅡからドームを仰ぎ見ると、主稜線の左フランケの感じに、白っぽい巨大な壁が見える。そしてルートは、その上端をなぞるように思える。ところがコルCへ下るにつれ、いつの間にかこの壁の真正面に導かれ、今まで「すげえなァ」と感嘆していた他ならぬその壁の、まん真中を登らなければならないことが分る。

コルCを覗く位置に立つと、跳べば行けそうな近くに壁がある。緑ゆたかな剣尾根の稜線はここでプツリと終り、ガチガチに固そうな、のっぺらぼうのフェースがほとんど垂直に立ちはだかり、その上は見えない。

折柄、先行パーティのラストが登っている。三つかかったアブミを苦心しながら撤収している所だ。いかにも悪い。（やっぱりアブミは三つ要るのか！）ショックである。たった一つで、こんなスラブをどう登るのか？……

乾ブドウを噛りながら一五分ほど眺めている内に、先行パーテ

ィのラストは、右上のカンテの向うへ消えた。あとには壁が静かに残った。今までここを人が登っていたとはウソのように思える。コンクリートの高い塀にポツリポツリと釘が刺してあるような感じだ。（これまで、かな）装備と相棒の技倆との不安から、バックすることも本気で考えた。

それでも、じいっと岩をにらんでいると、ルートが壁の上に見えない線ではっきりと示されているのが読みとれる。（いけるぞ）とは思ったが、念のため、池ノ谷左俣側をからみ気味に登るルートも覗いてみる。こちらは、傾斜はややゆるいが頼りない細い草付バンドが一本斜めに走っているだけのスラブで、不安定なトラバース気味のクライムになりそうである。魅力も自信もないので、やはり正攻法でゆくことにする。即ち、壁の中央を五米ほど直上し、右上へ辿ってカンテ上のテラスに出るのだ。

後閑にガッチリ自己確保させ、第一歩（一〇・二五）から吊上げである。アブミを使って一長身かせぎ、自分でアブミを回収する。傾斜がキツク、壁のくぼみとハーケンしかスタンスがないので、慎重なバランスと突っぱりを利かせ、残置ハーケンを利用して右上へ、右上へと吊り上がる。と、後閑がザイルをゆるめた。あっと云う間もなく、スラブを駆けるように、左下へ振り戻される。怒鳴り、ボヤき、又貴重な高度を稼ぎ直す。ザイルのすべりを考え、できるだけカラビナからザイルを抜いてゆく。ハーケンが良く効いているし、「振り子」の支点的な使い方が多いので、その方が良いのだ。

いよいよ、右上のカンテにある小テラスが近くなったが、ハングしていて踏み出せない。ここでとっておきのアブミをかけ、両足とも乗っかってテラスの端に手をのばし、一気によじ登る。ヤレヤレ、と思わず声が出る。これでフェースの右の縁に出たわけで、狭いが安定したテラスである。積雪期にも好適なテラスとして使えるようで、ここでワンピッチとするのがふつうらしい。が、セカンドとの直線距離にすると一〇㍍ほどしか来ていないので、我々は更にザイルを伸ばすことにした。

ルートは池ノ谷右俣側へ五㍍ほどまわり込み、フェースに刻まれたクラックを、高度感十分な一が、下部フェースを通ったあとなので余り感じない。ホールドが豊かで、ハーケンも三本ほどあって快適なクライムである。（但し、下部フェースでカラビナ五ケを使い果したので、ここのハーケンにはザイルを通せず、一寸コワかった。）四〇㍍ギリギリ一杯、重いザイルを引っぱって主稜線上の這松に達し、ビレー。このピッチに四〇分を要した。セカンドは、アブミを回収し損って落してしまったが、二五分で上ってきた（一一・三〇）。なかなか調子が良い。

コンティニュアスで這松の頭を越え、「門」に出る。堂々たる灰色のエギーユ。先行パーティーは右俣側のトラバース・ルートに入ったが、そちらは脆いと云われているので、我々は左俣側に入った。草付きバンドを三、四〇㍍トラバースし、行き止りで怪し気なビレー・ピンを打ち、スタカットに移る。もろい瓦屋根状のスラブに入ったクラックを登るが、傾斜は四五度位だが、逆層で湿っているので、滑り落ちそうで感じが悪い。心細い顔の後閑を下に、八㍍ほど登るとルンゼ状になり、更に一〇㍍で滝の落ち口のような、ハングにぶつかる。ハングの下に赤錆びたハーケンが

あるが、余り利いていない。一本打ちそえるが、岩が脆くてダメだ。古いハーケンで吊り上げ、ハングの上に顔だけ出すが、アブミをさっき失くしたので、足を踏んばる所がない。反り返った姿勢から腕力だけで、必死の思いでずり上る。上ってしまえば傾斜は落ちる。後閑を迎え、このピッチを二五分で終える。（一二・一〇）ここからはコンティニュアスで巨岩の間を綴うガレ場を進み、這松のリッジに出てドーム頂上に達する（一二・三〇）。取付より六時間であった。

奥壁左岩稜パーティとコールを交わしながら、コルBに出る。今朝彼らがR2を登ってこのコルを横切ったかと思うと、何か懐しい。まだ時間も早いので、剣尾根上半へと足を進める。ザイルもしまい、急速に脆くなった逆層の稜線を慎重に辿る。前年Yたちがこの辺で落石事故を起していたので緊張する。大体左俣側をからみながら剣尾根の頭に着き（一三・二〇）、しばらく待っているとドーム稜パーティが抜けてきた。右岩稜パーティは先きに抜けたらしい。一応別行動とし、四人で長次郎の頭へ向う。一四時一〇分、長次郎の頭で主稜線に出、七時間四五分で剣尾根完全トレースを終えた。

〈附記〉この登攀記録当時（一九六〇年）、剣尾根（無雪期）はふつう下半上半に分けて登られていた。下半だけでもビバークする例がよくあった。そして、ドームの登りの悪さは、熟達したクライマー以外は寄せつけないとさえ云われていた。

しかし、すべてのルートは年月と共に容易になる。今ではドームの登りは残置ハーケンによる連続吊上技術をためす絶好のゲレンデになった。したがって、岩壁登攀の妙味は乏しい。だが、剣尾根全体は一つの「山登り」であり、池ノ谷の底から剣の主稜線にぐうんとのし上げ、長次郎の雪渓を脚下に見おろす気分の良さは、将来とも変りがあるまい。この意味で、合宿むきのルートと云えよう。

〈池ノ谷右俣奥壁右岩稜〉　三井、臼井

三ノ窓AC（五・四五）―長次郎のコル（六・四五）―取付点（一〇・〇〇）―剣尾根の頭（一二・三〇）―帰幕（一四・〇〇）

池ノ谷右俣を下ると間もなく懸垂下降の所があり、先行のパーティがあって時間を喰う。この谷は陽がまだ当らず、雪渓がカチカチに凍っていて下降には神経を使った。

取付を確かめる為、北西バットレスに登り登路を偵察する。ヤブの中に踏跡をたどると、取付の下に出た。岩まじりのヤブの中をコンティニュアスで進む。傾斜が急になった所でスタカットにし、二ピッチで赤い垂壁の下に出た。軽い昼食をとり、すぐそばに見える左岩稜のパーティとコールを交わし、登路を確かめてもらう（一一・一五）。

胸をおどらせてハングした赤い垂壁を右にまわり込むと、意外にも広場の如き大テラスに出た。右俣よりのルンゼに登路をとり、落石の多い大凹角を慎重に登ると剣尾根の頭に出た。（一二・三〇）。岩登りらしい気分になれたのは最終ピッチのみであった。赤い垂壁から中央の奥壁へ出れば、若干登攀価値のあるルートをとれるかもしれない。

〈池ノ谷右俣奥壁左岩稜〉（ドーム稜）　大、多田

三ノ窓AC（五・四五）―コルB取付（八・〇〇）―剣尾根の

（三井）

頭（一三・二〇）―以下剣尾根主稜パーティと同じ。

夏山合宿も入山以来すでに二五日になる。岩登りも何本も登っているうちに調子が出て、今では充分自信がついたと思っていたが、さすがにドーム稜となると少々命が惜しくなる。高瀬氏の「剣岳」には、クライマーとして傑出している人しか登れないと書いてあることも不安をかもし出す。大賀リーダーの張り切った顔を見てはそんな文句もいえず、朝五時四五分、テントを出る。紺青の空が地平線近くまで続いて、富山湾がその下にかすんでいる。剣尾根に行く大賀、後閑パーティと一緒に出て、左俣の雪渓で別れ、R2とおぼしきところをつめる。

七時三〇分コルB着。下り道のαルンゼはひどく狭く落ち込んでいて、落石があったら必中のところ。慎重に右や左を巻いて下り、ザイルなしでF3の上に出る。左手に池の谷中央壁がそそり立っているが、ツルツルのフェースの真中に赤い布切れのついたハーケンが打ってあるのが印象的である。ドーム稜にこんな所があったら厭だなあと多田とぼやいて登攀開始。

大がトップでヤブや草のついたフェースを三〇㍍登る。草付きが不安定で、大きな岩角が抜け落ちて、下の多田をヒヤリとさせる。テラスから一〇㍍ほど、リッヂを廻りこむと成城大の報告にあるスッキリした二〇㍍ほどの凹角の下に出る。左を捲いて居心地の良いテラスへ出た。右上へはい上ると、第一の難関のオーバーハングである。五㍍ほどの凹角の上がハング気味で右に一本、左に一本、ハーケンが見える。右足をわずかなスタンスに乗せ、吊上げてハングを越す。仲々手強い。

すぐ上がスラブになり、真中に冬季初登者の打ったとぼしいオレンジ色のアイスハーケンがガッシリと利いておりそれを使ってその上のテラスに出る。多田が苦労して登ってくる。右手の中央ルンゼに入った九大パーティの声がこだまする。偃松帯の中を三ピッチ登り昼食。

ゴム管と称するソーセージも二〇日も喰っていると鼻についてうんざりする。一時半再び登攀開始。ヤブのついたフェースを一ピッチ、そこから快適なリッヂに出て二〇㍍でテラスへ出る。このテラスの辺はつるべで時間をかせぐ。次のチョックストーンのつまったチムニーが一五㍍ほどあり、半分折れそうな槍のような岩に立って今にも落ちそうな岩の下を左へ抜け出る。赤茶けたガラ場を左へ出てF2の続きとおぼしきルンゼに取付く。極度にアンサウンドな岩をだましながら一〇㍍ほどで左に入り、ハーケンを一本利かせ、稜上へ戻る。

右に右岩稜、左に剣尾根が岩のゴツゴツした姿を見せている。快適なリッヂに取り付いて一ピッチ行くと容易に剣尾根の頭直下の大フェースの下へ出た。剣尾根パーティはすでに下半を終ってコールをかけてくる。われわれの方は、ガスが一面にかかってひと雨来そうな気配と、目前の黒々とした三段の大スラブを横たえたフェースを前に、いささか心細く、怒鳴り返す元気もない。

右にあるチムニーを登ることにする。入口は赤茶けたボロボロの岩だが、上に行くほどサウンドになる。上はホールドがなく、バックアンドフートでずり上る。二〇㍍ほどである。出た所でビレイして多田に登ってもらったが、登ったという喜びとこれで合宿が終ったという喜びが胸にあふれる。あとワンピッチ快適に岩を登ると剣尾根の頭であった。一三時二〇分。ほとんど同時に大

賀パーティが登ってきた。雷におどかされながら一緒に三の窓へ下った。（大）

八月五日　晴

撤収。早月尾根経由下山、帰京。（大賀）

剣岳（夏合宿）

一九六一年七月

大　建二郎（リーダー）、宮本英治、臼井　弘、多田伸治、高橋信成、後閑勉六、長沢道彦、名和泰三、門田衛士、伊藤重道、村上泰介、蛭川隆夫、竹中彰、本間　浩、小野　肇、半場三雄、藤沢恵一、山本溢弘、佐藤　力、小島和人。

七月一一日

高橋、本間、伊藤、村上の四名、テント地確保等のため、本隊に先行して上野発。

七月一二日　晴

富山―雷鳥沢。

七月一三日　快晴

雷鳥沢―剣沢三田平。

この日、本隊は急行「北陸」で上野発。

七月一四日　晴

富山駅で米を加え、中橋と別れて千寿ケ原へ。荷物を計る時にあまりの重さに地鉄のハカリの針がとんでしまった。四・二〇雷鳥沢着。

七月一五日　晴

雷鳥沢の登り一ピッチで先発隊の出迎えに会う。一二・四〇剣沢三田平着。未だテントはいくらもない。今日で梅雨があけた。

七月一六日　晴

宮本、臼井、高橋、蛭川、竹中、本間三の窓入り。左股側にテントを設営。

大、他一三名は剣ケ御前下の雪渓にてグリセード練習の後、縦走路より本峰へ。帰りは平蔵谷を下降。

七月一七日　晴

八ツ峰下半（大、長沢、伊藤、小野、小島、山本、藤沢）

源治郎尾根（多田、名和、村上、門田、佐藤、半場）

チンネ

中央チムニー・aバンド・bクラック（宮本、本間）

左方ルンゼ・gチムニー・c・dクラック（臼井、蛭川および高橋、竹中）

後閑は後発の朝木を雷鳥荘まで迎えに行くも、朝木は腹痛のため下山する。午後、中橋が弟と一緒に三田平のテントに立寄る。

七月一八日　晴

八ツ峰上半（大、村上、伊藤、長沢、小島、小野、藤沢、山本）

八ツ峰下半（多田、後閑、門田、名和、佐藤、半場）

チンネ

左フェース・a・b（宮本、本間）

左稜線下半・上半（臼井、竹中）

中央チムニー・a・b（高橋、本間）

ジャンダルム・Aチムニー（高橋、本間）

七月一九日　晴

八ツ峰六峰Aフェース（多田、名和、村上）

八ツ峰六峰Cフェース（後閑、伊藤、長沢）
チンネ
　左下カンテ・a・b（宮本、蛭川）
　中央チムニー・a・b（臼井、竹中）
　日嶺ルート・a・b（高橋、本間）
ジャンダルム三本クラック（臼井、竹中、大）
他八名は休養。
七月二〇日　晴
剣沢↓二股↓三の窓↓長次郎谷（大、伊藤、半場、門田、山本、佐藤、小島）
三の窓メンバー・チェンジのため、多田、後閑、名和、長沢、村上の五名A・C入り。宮本を除く今迄のA・Cのメンバーは剣沢へ下る。
チンネ
　左フェース・a・b（臼井、蛭川、竹中）
　左稜線下半・a・b（高橋、本間）
　左方ルンゼ・a・b（宮本、名和、後閑）
　中央チムニー・a・b（多田、長沢）
七月二一日　晴
源治郎尾根（大、蛭川、伊藤、小野、小島、山本、藤沢）
八ッ峰上半（臼井、高橋、竹中、本間、門田、佐藤、半場）
池の谷・剣尾根下半（宮本、長沢）
チンネ
　日嶺ルート・g・c・d（多田、名和）
　中央チムニー・g・c・d（後閑、村上）
ジャンダルムCクラック（多田、名和）
七月二二日　晴
八ツ峰六峰A・Cフェース（臼井、竹中、本間）
本峰南壁A1・A2・A3（高橋、本間）
大日岳往復（大、伊藤、門田、半場、小島、小野、佐藤、藤沢）
チンネ
　左フェース・a・b（多田、名和、長沢）
　日嶺ルート・a・b・（後閑、村上）
宮本、山本はそれぞれ三の窓、剣沢のテント・キーパー。
午後、三の窓A・C撤収して、全員剣沢に集結。
七月二三日　晴
全員休養。明日からの縦走の準備をする。伊藤下山。
七月二四日　雨　停滞
七月二五日　雨　停滞
七月二六日　縦走出発。
両日共、北海道南部で洪水が起った程大きな低気圧が日本海北部を通過したための雨。

「夏合宿は天候次第だ」と毎年いわれるが、幸い今年は昨年以上に好天に恵まれた。昨年は縦走中天気が良くなかったが、今年は縦走中も好天が続いた。好天が続くと今年の様に三、四年の少ない事は、定着合宿での岩登りに大きな障害となる。池の谷の剣尾根やチンネの左稜線上半を登り得たとはいえ、昨年にくらべて二、三年生の登る機会が少なかった事および上級生同志のパーティを組む余裕のなかった事などの弱点があった。最近、剣でもどんどん新ルートが登られ、技術もハーケンやボルトを連打し、ア

ブミを連続的に使用して行くというアクロバティックな面が強調されている。その反面大学山岳部員の数は次第に減り、山行日数も徐々に少なくなる傾向にある様である。われわれはこの二つの相反する状態の中でどの様にすれば事故を起す事なくレヴェルを上げていくことができるかを一人一人が自覚を持って解決、実行して行く時期に来ているようだ。

部の活動にも景気循環のような幾つかの波動があるように感じられる。そして今年は波の底と頂点との過渡期であると解釈して無理な日程を組まないように努めた。部全体の力が向上している時にはある程度の無理は支えられるようであるが、逆の場合は少しの無理がすぐ表面に出てくるようである。

夏合宿も無事終り、今年の一、二年に大きな希望が持てるようになった。アンデス遠征隊もまもなく帰るので、その成果を部に生かして来年度、再来年度は益々充実した合宿が行えることを確信する。

（大）

剣―槍ケ岳―大滝山（夏合宿縦走）

一九六一年七月

大　建二郎（リーダー）、長沢道彦、名和泰三、小野肇、半場三雄、藤沢恵一、山本溢弘

七月二六日　ガスのち晴

剣沢（八・五〇）―大汝頂上（一一・三五）―一の越（一二・一〇）―五色ケ原（三・〇五）時間はサマー・タイムである。

五色ケ原までは三パーティ一緒である。思いがけぬ三日間の沈澱にうんざりして、ガスの立ちこめる剣沢を発つ。剣沢のヌシ的存在になっていたわれわれの発つのが名残り惜しいというのか視界は一〇以位で風も相当なものだ。寒さに感覚の薄れた腕をおさえて一の越の小屋に飛び込んで昼食。

ザラ峠からの登りで東女大山岳部のパーティに会う。「あら〇〇さん」てな調子に気を良くして五色ケ原へ。夕刻全員で友田先輩の碑を訪れて讃山賦を歌う。天候も回復し、たき木を捜すと切った這松が何本も落ちているので、ツイテルなとニコニコ木を引きずって行くと案の定、営林署のコワイお兄さんが二人もきておしかりになる。

七月二七日　晴のちガス　（一・四〇）

五色ケ原（七・〇五）―スゴの頭（一〇・三五）―スゴのテント地（一・四〇）

他のパーティが景気良く別れていったので負けるものかと飛び出したものの登りの悲しさ、一、二年が代る代るバテて予定の薬師の上まで行けず、スゴ止りとなる。まさにスゴスゴとテントを張る。

この分では他の連中もさぞバテているだろうと思ったら案の定そうだったらしい。この狭いテント場に何と五〇ものテントが張られた。槍ははるか彼方にある。常念、大滝はかすんで見えぬ。剣がすぐ後ろにある。前途遼遠の感を深くする。

七月二八日　快晴

スゴ平（七・〇五）―薬師岳（九・二五～三五）―黒部五郎岳（四・〇〇～一〇）―カール（四・二〇）

有峰にダムができた。薬師から太郎兵衛、上の岳へ進むに従って姿を変え、実に美しい。薬師の登りで八パーティ追い越す。北

アルプスも、全く人間が多くなったものである。例によって上の岳を下った所でアイス・クリームを食う。例によって腹をこわす。青い空、白い雲、咲き乱れる花、そしてまぶしく輝く雪渓。わがうるわしき青春の一日は、かくて過ぎゆく。夜カールで花火大会を開く。

七月二九日　晴一時雨

カール（八・一五）―三俣蓮華岳（一〇・三〇～一一・四五）―双六池（一・一〇）

五郎平に小屋が建った。槍がどんどん近くなる。双六池辺りで裏銀からのパーティに会えるかと思ったがだめだった。

三俣蓮華の頂上で暫くのんびりと休む。剣から槍迄泊り場は多いけれどもやはり第一は黒部五郎のカールであろう。五郎平が近くにあるためか、あまり泊る人がないのも良い。そろそろ食い物が話の主題となる。

七月三〇日　晴

双六池（七・一五）―槍の肩（一〇・二五～一一・一〇）―西岳（一・〇〇）―大天井岳（四・四〇）

釣竿を持った子供が樅沢岳の辺りを歩いていた。父親らしい男が時々立止りながら相当前を歩いていた。なんとなくうらやましかった。槍の肩は市をなす大にぎわい。槍の穂は長蛇の列。槍沢を眼下にして、いつもなら帰れるのだがとしばし望郷の念に駆られる。

表銀座コースに入ると、もうハイカーの世界である。背広と短靴姿に驚かされる。大天井岳頂上にテントを張ったが連日の晴天に小屋にも水が無く、クラッカーを少ない水でつまんで寝る。槍へ向う人は多いが槍から大天井の方へくる人は殆どいなかった。

七月三一日　快晴

大天井岳（六・四〇）―常念岳（九・五〇）―蝶ケ岳（一・〇〇）―大滝山（三・〇〇）―徳沢園（六・〇〇）　（大）

剣―笠ケ岳（夏合宿縦走）

一九六一年七月

宮本英治（リーダー）、後閑勉六、村上泰介、門田衛士
佐藤　力、小島和人

七月二七日　快晴

五色出発（七・三五）―平の小屋（九・二〇）―平の渡（一〇・三〇）―南沢出合（一一・三〇）―枝沢直登（一四・一五）―稜線（一八・三〇）―南沢岳下ビバーク地（二一・〇〇）。

五色から鳥帽子迄、一、〇〇〇㍍の下りと登りで、今日が縦走中の一番しんどい日。覚悟を決めて出発。五色の末端部は、花も木も自然のままの美しさを残している。刈安峠を過ぎ平の渡迄快調にとばす。心配した橋は新設されていた。学芸大女子パーティの渡るのを河原から眺めてから黒部と別れ、針ノ木谷の補強されたボッカルートを進む。南沢出合で臼井達の後立山パーティと別れた。

南沢は倒木ひどく踏み跡不明。半分程登った頃、右からの沢へ踏み跡があるので続くと、先行していた高校生パーティが道を失い止まっていた。ルートは南沢を最後迄離れずに行くらしいが、この沢をつめ、南沢岳から平の渡迄のびている稜線に取りつくことにした。沢はモロイ岩の滝が続き苦労した。稜線迄予想以上に

時間を消費した。南沢岳直下の這松で進路を断たれビバークした。水がないので飯もくわず、月を眺めて寝た。

七月二八日　快晴

出発（七・三〇）―南沢岳（八・一〇）―池（八・五〇～一二・三〇）―鳥帽子岳（一三・〇〇）―三ツ岳（一四・五〇）―三ッ岳テント場。

昨夜這松の下でもがいたが、簡単に抜け出し、縦走路に出た。道は歩き易いことを痛感、門田は一夜の中にすっかり消耗してやつれてしまった。南沢岳の砂地は喉が喝き、砂漠を歩く思いであった。山を越すと下に池を発見駈け降りて炊事とする。昼寝をしてのんびり出発。

鳥帽子、三ッ岳とゆるい登りを通過する。三ッ岳直下に雪渓がある絶好のテント場あり。

七月二九日　晴

出発（七・三〇）―野口五郎（八・三〇）―水晶岳分岐点（一一・〇〇）―祖父岳（一二・一〇）―雲の平テント場（一四・〇〇）

荷も軽くなり、体力も回復したので、新人の小島、佐藤は元気にとばす。稜線は砂地で変化に乏しいが、五色から薬師、赤岳の連山を右にし、燕岳から大天井岳、槍を左に眺めて歩く気分は爽快である。夢の楽園と評判の高い雲の平も、ただの草原で、薬師沢からの人も多く通りつまらん所であった。

昨夜、雲の様子から降ると思われたが、雨はなく、今日も晴、祖父岳の右側を巻き、三俣蓮華小屋下へと出る。この付近は黒部の源流の始まりで岩魚も多いらしい。三俣小屋に最近熊が出たとかの話を聞く。雪渓の雪をスキムとまぜ、乾パンの昼食とする。

七月三〇日　晴

出発（七・一〇）―黒部源流（八・二〇）―三俣蓮華（一〇・〇〇）―双六（一一・〇〇）―秩父平（一四・三〇）

双六池から、大ノマ乗越へと近道を進む。笠岳の稜線は通る人も少なく、お花畑がきれいで本当に快適だ。奇妙な岩峰に囲まれた秩父平に泊る事にする。草原で村上、門田、佐藤等が合唱をしている。初日以外はテント地へ早く着き楽な縦走である。

七月三一日　快晴

出発（八・一五）―笠岳（一〇・二五～一一・一〇）―槍見温泉（一五・〇五）

いとも簡単に笠の頂上に着く。三〇〇〇㍍の稜線歩きもこれで終りなので、周囲の景色を頭に入れるべく一時間の休憩とした。剣の頭がやっと見え、立山、薬師が重なっている。滝谷を一眺にしているが、各尾根の区別は明らかでない。昨夏の登攀を思い出したり、乗鞍をスキー登山したいなど考えている中に、時間がたち、見あきぬ北アルプスの山々に別れをつげて駈け下りる。先頭の後閑の早い事、ついてゆくのが大変だった。槍見で最終バスに間に合う事が判り、村上達は帰りたいと主張したが予定通り上高地迄行く事にした、風呂に入れて下さいと温泉の女中に頼んだ

ら、河原の露天風呂に入って下さいと言われてしまった。湯上りのビールのうまかったこと、いつもながら感激の味だ。宿の飯を食い、河原のテントで寝た。

八月一日　晴

出発（七・二〇）―中尾峠（一〇・四〇）―上高地（一二・二〇）

「やけに遠いな」、などと言いながら中尾峠迄の静かな山道を行く。峠から上高地は人の行列。帝国ホテルの木村さんに挨拶し、午後のバスで帰京した。

（宮本）

剣・黒部

一九六一年七月　中橋寿雄、他一名

七月一七日　晴

弥陀ケ原（一〇・〇〇）―雷鳥沢（一二・二五）―剣沢（一四・三〇）

夏合宿の陣中見舞を兼ねての足ならし。正午頃、身体の故障のため下山してくる朝木に出会う。剣沢のテント場では、登攀を終えて帰幕した部員達が日なたぼっこの最中。テントに割り込み泊めてもらう。

七月一八日　快晴

テント発（七・一五）―前剣（八・一五）―剣頂上（九・一九）―剣沢（一二・〇〇）―二俣（一四・〇〇）―仙人池小屋（一六・一五）

剣往復後、剣沢の雪渓を下る。二俣から、仙人新道へ入る。木が生い繁っていて、うだるように暑い。途中は誰とも会わず、実

仙人池小屋（七・〇〇）―阿曽原峠（八・〇五）―阿曽原（八・四五）―檜平―宇奈月

黒部の急流を眼下に見ながら、駈け降りる。雪渓はかなり下の方まで続いていた。阿曽原から軌道に便乗。途中、猿飛、釣鐘に遊ぶ。

（中橋）

黒部源流

一九六二年八月　丸山　則二（OB）、倉知　敬

八月一一日　晴

前夜上野を発って、その日の夕方には黒部源流のやさしいせせらぎを聞く、というかっては信じられなかったようなことが出来るようになった。

富山から立山線で小見駅まで、そこからマイクロバスで有峯ダムまで、更にタクシーにのりつぎ、一〇時には折立峠に降立っていた。

青い人造湖を下に見ながらゆっくり登って行くと、一時間もして、もう池塘散在する草原に出た。あとは緑のジュウタンのプロムナードを散策し、太郎平小屋で昼食にする。

小屋から山腹をまくようにして薬師沢へ下り、よく出来た沢ぞいの道をどんどん降りて行く。午後五時半、薬師沢出合着。

八月一二日　晴のち曇

岩苔谷出合までのつもりで出かける。名だたる黒部もこの辺り

はまだ何の変啓もない広い明かるい沢である。それでも青く光る水がトウトウと岩をかみシブキを上げて狂う様を所々見ることも出来る。

五度程渡渉をした。いずれも腿ぐらいの深さだった。岩苔谷に近くなって、沢はローカ状になり、フミ跡は右岸の急な草付き斜面をへづっている。カンジンな所は全然さけてしまうのは一寸つまらない。

高まきを終え再び河原へ降りた所が、岩苔出会であった。時間が早いので更に下りつづける。少しく行った所でローカに出る。やはり右岸をまくが、フミ跡も確かに残っておらず、ササがボウボウ茂っていて気分悪し。とうとうあきらめて引返す。当初はスゴ沢付近まで遡行するつもりであったが、準備悪く、荷物もかさばって、予想以上に高まきに頼らなくてはならないけど、どうも高まきは楽でなさそうなので、今回は中止してここより日帰りで行ける所まで往復し、帰路は岩苔谷をとることにした。この日はローカ手前の右岸の砂原上に泊る。

八月一三日　晴

金作谷出会いまで予定していたが、長いのと、あまり風景変化ないのにいたく失望して午前中で引返してしまった。

午後より岩苔谷を登る。高天原を越え、水晶池まで足を伸ばす。池畔で暮営。静かな所、ウグイスの声もよし。

八月一四日　曇のち雨

ワシバ乗越に出、祖父岳を回り雲の平へ出る。三俣蓮華で雷雨に襲われビショぬれになった。双六池泊。

八月一五日　曇のち晴

丸山は槍岳を経て上高地へ、倉知は小池新道を経て新穂高へ下る。

（倉知）

七倉―笠ケ岳

一九六二年一〇月　高橋　信成

一〇月一八日　晴

七倉―七倉岳―船窪―船窪岳―不動岳

ビバーク覚悟で行けるところまで行くつもりで来たが、不動岳の登りあたりで陽はとっぷり暮れてしまった。頂上の岩かげにもぐり、シュラフをかぶって一夜を明かす。

一〇月一九日　晴

不動岳―南沢岳―烏帽子岳―烏帽子小屋―三ツ岳―野口五郎岳―東沢乗越―鷲羽岳―三俣蓮華小屋―双六小屋

今日もまっくらになるまで歩きつづけやっと双六小屋へたどりついた。

一〇月二〇日　ガス

双六小屋―大ノマ乗越―抜戸岳―笠ケ岳―槍見温泉

抜戸から笠ケ岳までのハイマツの間に、雷鳥があちこちにいる。こんなに沢山の雷鳥を見られるとは思いもよらなかった。うっすらと積っている雪の上の雷鳥が非常に魅力的だ。

一〇月二一日　晴

宝温泉からバスに乗り飛弾の高山へ出る。

■後立山連峰■

八方尾根スキー

一九六〇年三月　宮本英治

三月二七日　雪

細野部落白馬館泊。咲花スキー場で滑る。

三月二八日　晴

薬大附近に設営、風強く設営中に吹き飛ばされそうになった。

三月二九日　晴

出発（六・三〇）―第二ケルンスキーデポ（一〇・二五）―唐松岳（一三・四五）。

スキーは上手だが山登りは素人の仲間と唐松岳を往復した。上の樺からラッセルあり、稜線迄一人で苦戦した。不帰の岩場に魅せられるもこちらはスキー気分で、登攀とは縁遠い。スキーヤーが、俺達のラッセルを使いストックで頂上迄来たのにがっかりした。

三月三〇日　晴

冬テントに二人、居住性は良いが朝の冷込みが厳しく寝ていられない。第二ケルンからリーゼン迄滑降。下手くそなスキーながら充分楽しんだ。立教の二人連れが隣りにテントを張り、煙草をもらいに来た。黒部の春山合宿の後だとか、同じような連中だ。

三月三一日　晴　撤収

冬テン一式を分担して持つと立派な荷になった。横滑り、斜滑降するも高度下らず兎平迄悪戦苦闘。ケーブルで荷を降ろした後は快調にリーゼンを楽しみつつ滑降した。

五日間の快晴に恵まれ、春スキーの楽しさを満喫した。帰京して「眼がね猿」の顔を大分笑われてしまった。

鹿島槍・天狗尾根および北壁・荒沢奥壁

一九六〇年五月　中島　寛、大賀二郎、三股　宏、大　建二郎

四月三〇日　曇のち雨

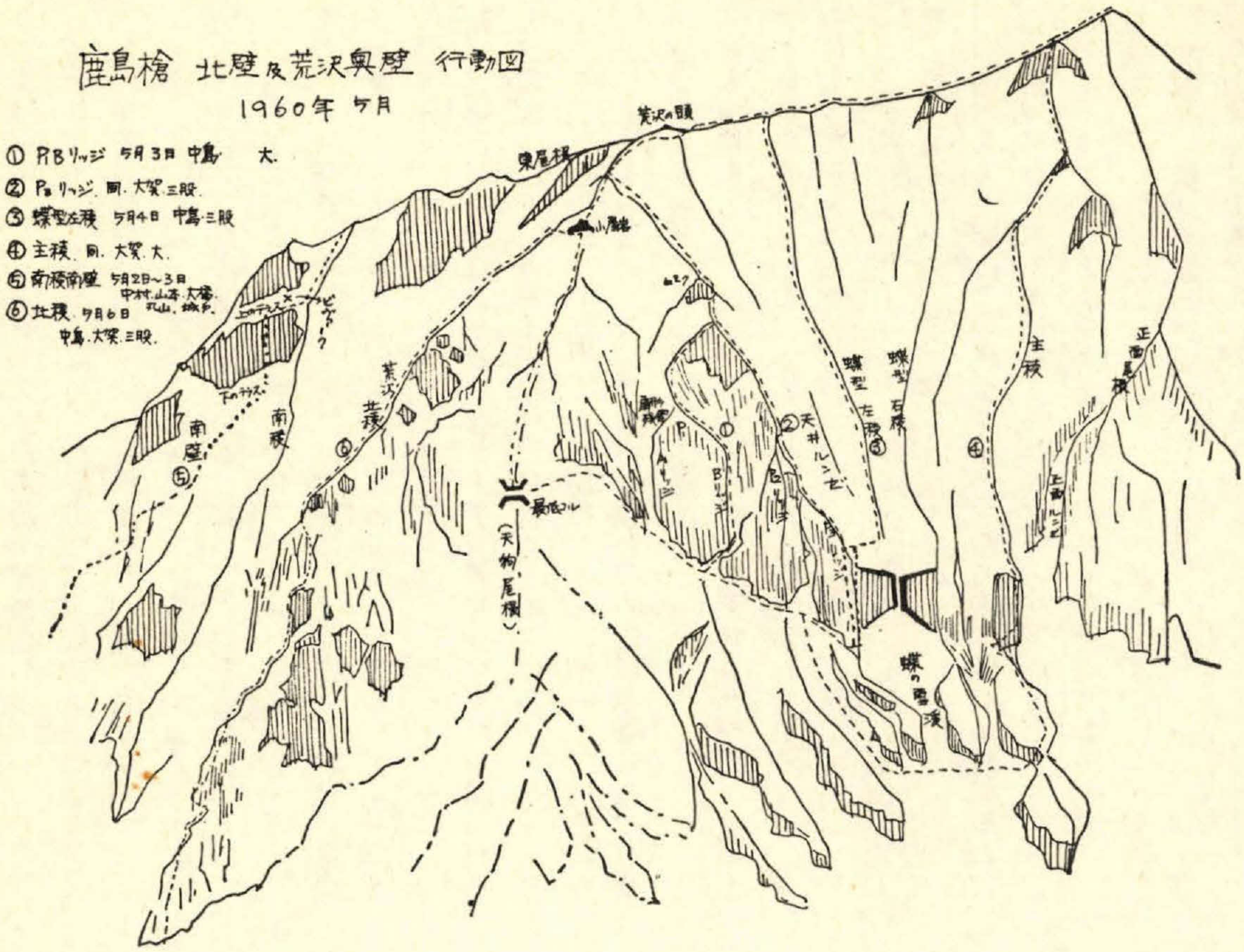
大谷原（八・〇〇）―大川取入口（九・三〇）―荒沢出合―天狗尾根取付（一〇・四〇）―一八〇〇㍍、幕営（一三・〇〇）

五月一日　曇時々薄日さす

一八〇〇㍍（八・〇〇）―天狗の鼻（九・〇五～三〇）―北峰頂上（一一・四五～一二・五〇）―帰幕（一四・二〇）

天狗尾根の概要を知るため、及び大賀の風邪のため、テントを天狗の鼻に進めることを中止し、北峰往復を行った。大賀は停滞。

五月二日　小雨のち雪



一八〇〇㍍（八・〇〇）―天狗の鼻想像以上に複雑なこの尾根の地形に驚きつつ、雪の中をAC建設。鼻にはJRCC・神戸大など五、六張り。

五月三日　晴

〈ピークリッジ（P1Bリッジ）〉

AC（八・一〇）―取付（九・四〇）―扇形残雪を覗くコル（昼食、一一・二〇～五〇）―荒沢の頭（一三・〇〇）

天狗尾根最低コルの次の小ピークを一つ越えた地点から、北壁へ向って下り気味のトラバースをする。前夜五～一〇㌢つもった新雪が、旧雪層からめくれるように、かなり頻繁に落ちてくる。急ぎ扇形残雪ルンゼの下を抜け、P2間ルンゼ出合附近でP3リッジへトラバースを続ける大賀ら中島、大ルンゼを少し入り、アンザイレンするる。這松まじりの急な雪壁を二ピッチで、Aリッジと合するあたりのメインリッジ上に出る。（一一・二〇）。味わいに乏しいルートだ。扇形残雪を左下に見ながら昼食。

ピークの岩場で又アンザイレンしたが、右側をまき気味に登って一ピッチのみだった。（中島）

〈ピークリッジ（P3リッジ）〉

取付（九・三〇）―天井ルンゼ右岸（昼食、一二・一五～四五）―ピーク（一三・四〇）―荒沢の頭（一四・〇〇）

中島らをP1リッジに送り込み、更に急傾斜のブッシュと雪面のトラバースを続ける。P1テールリッジとの交点、アンサウンドな草付きの急斜面に出る。蝶の左羽根の底辺と同高度ぐらいで、覗き込むと足もとは蝶の雪渓へ落ち込んでいる。丁度テール

リッジから登ってくるパーティがあるが、わざわざ下ってこの脆い草付を下から登り直す気はしないので、眼前の斜面に取り付くことにする。傾斜は七〇度位のが多いが、這松登りなのでザイルを使わず、三股とヤブ漕ぎ競争のようにまっすぐ登る。小一時間で、ハングした岩場にぶつかる。右裏にまわり込むと、五米余のチムニーがある。入口の雪上でアンザイレンし（一〇・三〇）雪のつまったこのチムニーを抜け、左に出て這松と岩の容易な小リッジを二ピッチ登ると傾斜が落ちる。ザイルを外して（一二・〇〇）右上にブッシュを辿るとメインリッジに出る。（一二・一五）。蝶岩壁の落口より百㍍ほど上で、天井ルンゼの右岸に相当し、雪面とほとんど高差がないので、昼食をとっていると、早くもピークを抜けた中島たちがコールをかけてくる。彼らもこちら同様失望しているらしい。今回の山行は春合宿の偵察とは云え、もう一寸手応えが欲しい処だ。

ともに角腰を上げ、一旦蝶形左稜へ向って天井ルンゼのトラバースを始めたが、五〇㍍ほどルンゼに入ると急激に雪質が変り、不安になって引き返した。

もとの所に戻ってピークリッジを辿ったが、荒沢の頭までノーザイルでスタコラ歩ける。

中島たちと一緒に天狗尾根を下ってゆくと、荒沢南稜南壁の初登を狙ってOB五人がぞろぞろ登っている。下のテラスから「ここでビバークだ」と怒鳴ってくる。声援を送ってテントに戻る。

（大賀）

五月四日　曇

〈主稜〉　大賀、大

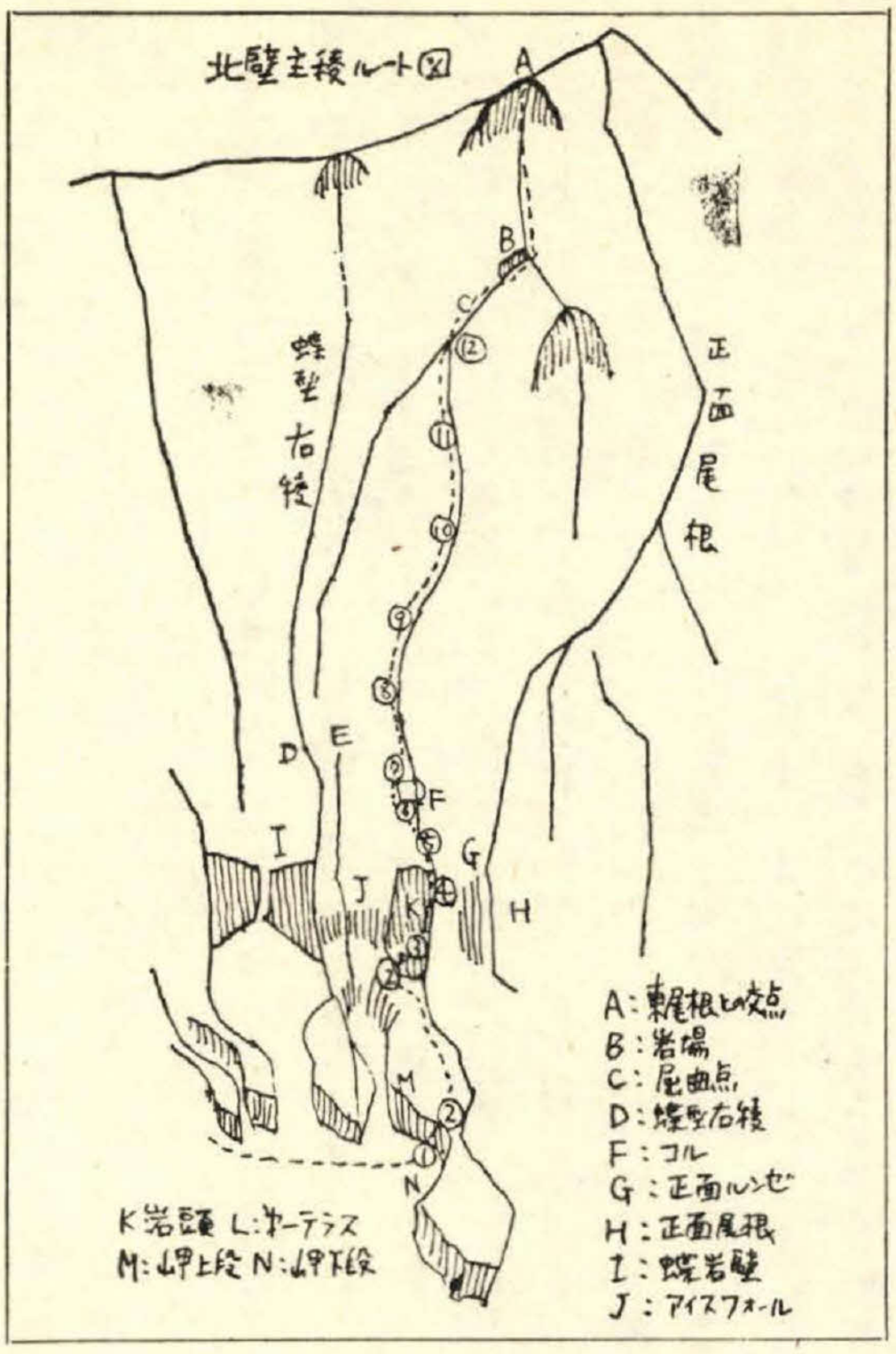
AC（六・〇〇）―下降に失敗して最低コルに戻る（八・三〇）―取付（①九・一五）―岩頭取付（②一〇・三〇）―主稜上のコル（⑦一三・三〇）―東尾根（一六・三五）

お恥かしい話だが、近道をしようと思って最低コルからカクネ里めがけてまっすぐに降り、失敗した。懸垂を二回やり、カクネの雪渓がすぐ足もとに見える所まで行けたが、四〇㍍ザイル一本のため、最後を隔てる凍結した滝が越せそうもなく、最低コルに登り直した。どこをどうやって降りたのか（後で聞いた処では、三五㍍の懸垂三回で三時間かかった由）神戸大パーティがカクネの底を北壁に向っている。それを横目でにらみながら、苦り切った気持でコルに戻る。丁度、サポートがてら蝶型左稜に行く中島たちが後発してきたのにバッタリ会い、恥かしいやら済まないやら、既に八時半では今日のアタックは中止と決め、蝶型左稜・右稜を並んで登ることにしてもらう。今までのアタックで、こんなションボリしたことはなかった。

ところが、前日のP3リッジ行きのトラバース、シュプールを辿りながら見ると、P3テールリッジ手前の雪渓が簡単に下れそうである。しかも、例の先行者はまだ岬の上にあがったばかり。それっとばかり、ルンゼを下る。テールリッジ末端の小尾根を二本まわり込むと、蝶の雪渓出合あたりの本谷に容易に出られた。出られたからには主稜へ行くぞと中島に声をかけ、急ぎに急ぐ。

蝶岩壁の下を横切りながら見上げると、近すぎるためか「蝶」には見えない。黒い大きなオーバーハングだ。

右稜末端の岬をまわって、いよいよ主稜に近付く。本谷一面、



雪面にうねりのような起伏があり、クレバスがあちこちにあいている。主稜の岬の末端は二段になっている（図のMとN）が、我々のアプローチは自然MとNの境い目あたりに導かれたので、N部分は省略することにし、Mの末端に左側から取り付く。

ラントクルフトが大きく口をあけ小滝が出ているので、五㍍ほどだが大事をとってアンザイレンする。これを乗越してヤブに入り、一応ザイルを外す。ブッシュを抜け、三〇㍍ほど雪面を登ると岬の上に立ち、視界がひらける（②九・四五）。ここから、右側の切れ落ちたゆるい雪稜が数十㍍続き、その先に問題の岩頭（K）がほぼ垂直にそびえている。例の先行した神戸大パーティも岩頭の直登に決めたという。大体ぼくは稜線をまっすぐ登る主義で、主稜登攀実は中間小尾根のその又向うのルンゼルートなんてのは大嫌いだから、異存なく彼らの後に従うことにする。

②でビレーピンをガッチリたたきこみ、腹ごしらえしながらゆっくり順番を待つ。一〇時半、アイゼンのまま雪のない側壁に取りつく。右上へバンドを辿り、四〇㍍一ぱいにのばす。浮石だらけの急斜面を二隊三人が登るので、四人目の大は落石でヒーヒー云う。大が③に来たとき遂に人間まで降ってきたが、大事に至らず登攀続行。しかし、次ぎに落ちてきた石でメガネを割られた。メガネがなくては盲同然のぼく、用意のスペアを取り出して大に安心してもらう。

③からヤブの中を右上へ登って主稜正面に落ちるリッジに戻り、正面ルンゼ側に少し入って八〇度近いスラブにつき出たブッシュを喘登、四〇㍍で小テラス④に出るが、神戸大でふさがっているので、一段下の木の枝に乗っかって空くのを待つ。右上を見ると、正面尾根のものすごい雪壁の上端に、信じられないようなトラバースの跡が付いている。思わず感嘆の声が出る。又、すぐ右の氷結したチムニーには、正面ルンゼの融雪が集って、たたき

追い着いてしまう。

夏ルートは普通この岩頭の直登をきらって、中間小尾根左右のルンゼに入り、㈠主稜上のテラスに戻るか、㈡蝶型右稜Dを登ってB点附近で主稜に戻る場合が多いようだ。しかしその末端に落ちるルンゼはI点でアイスフォールとなり、その上をひっきりなしに重い融雪雪崩が落ちてくる。到底登路にはならないので、神戸大パーティも岩頭の直登に決めたという。大体ぼくは稜線をまっすぐ登る主義で、主稜登攀実は中間小尾根のその又向うのルンゼルートなんてのは大嫌いだから、異存なく彼らの後に従うことにする。

つけるようなシャワーが続けざまに落ちる。

④からの出だしが登りにくく、ピン二本を使い這松の大枝に乗ってゆらりと吊り上げて越す。ブッシュに入り④から四〇㍍で岩頭上に出る（⑤一二・〇〇）。雪と這松のやせたリッジがほぼ水平に続いている。左右とも下は見えないが、四〇㍍で雪庇の発達したコル⑥に出る、その手前で一個所だけ東尾根の稜線が僅かに見える所がある。そして、嬉しや中島と三股がコールをかけてくるではないか。だが彼らの居る場所は、うんざりするほど頭上はるかだ。「夜になるぞ！」と怒鳴り返す。コルに出ると、彼らの姿は再び蝶の右稜に隠れてしまった。

コルには茸雪とも雪庇ともつかぬ厚いブロックが乗っていて、その左下をくぐらねばならない。ここが無雪期のいわゆる「主稜上のテラス」Fらしいが、左の中間小尾根側はザラザラした草付きの急斜面で、トラバースできなくはなかろうが、確保点は皆無であろう。又、右側には、独標登高会によって拓かれたルンゼがあるはずだが、上からは全く覗き見ることができない。

雪庇をくぐると、再び急な這松のリッジになる。ここからC点までの主稜は、向って右が深く切れ落ち、左は雪のルンゼに接している。ルンゼは全面ラビーネンツークとなり、稜上のブッシュとの接線のみが安全な雪面になっている。神戸大は稜上のブッシュを忠実に辿り、我々は一ないし数㍍左の雪面を平行して登る。当然のことながら、キックステップの我々の方が早い。同じ天狗の鼻を三時半に出た組を、出戻りのために実際には八時半に出たぼくらが抜いてしまっては申訳ないが、まだ先きが長いことと、スピードを楽しみたい誘惑とから、お先きに失礼することにした。

先きがつかえてないとなると、マイペースで気持よく飛ばせる。スピード自体も楽しいが、今朝からずっと人の後ろを歩いたためのウッ積した気分が晴れて、ようやくスポーツ登山のダイゴ味にひたれることが嬉しい。⑦から五ピッチ二百㍍、C点から五十㍍ほど下の、ルンゼが主稜に吸収される地点で稜上のブッシュに入り、ザイルをとく（⑫一五・一〇）。這松と岩を登って、ほどなく主稜の屈曲点Cに出る。左から上ってきた支稜がここで合流し、主稜は右に曲っての岩場までゆるやかな雪稜に変る。下部で見た時あれほど急峻だった正面尾根が、ここではこちらと同じようなただの雪稜になって右に見える。すでに天狗の鼻も八峰のキレットも足下である。

Bで右から大きな支稜が合流する。ここの岩場は容易に越せ、以後は這松と雪稜が交互に続く。最後を飾る五〇㍍ほどの美しい雪稜を抜けると、まさに直角に、東尾根に飛び出す。

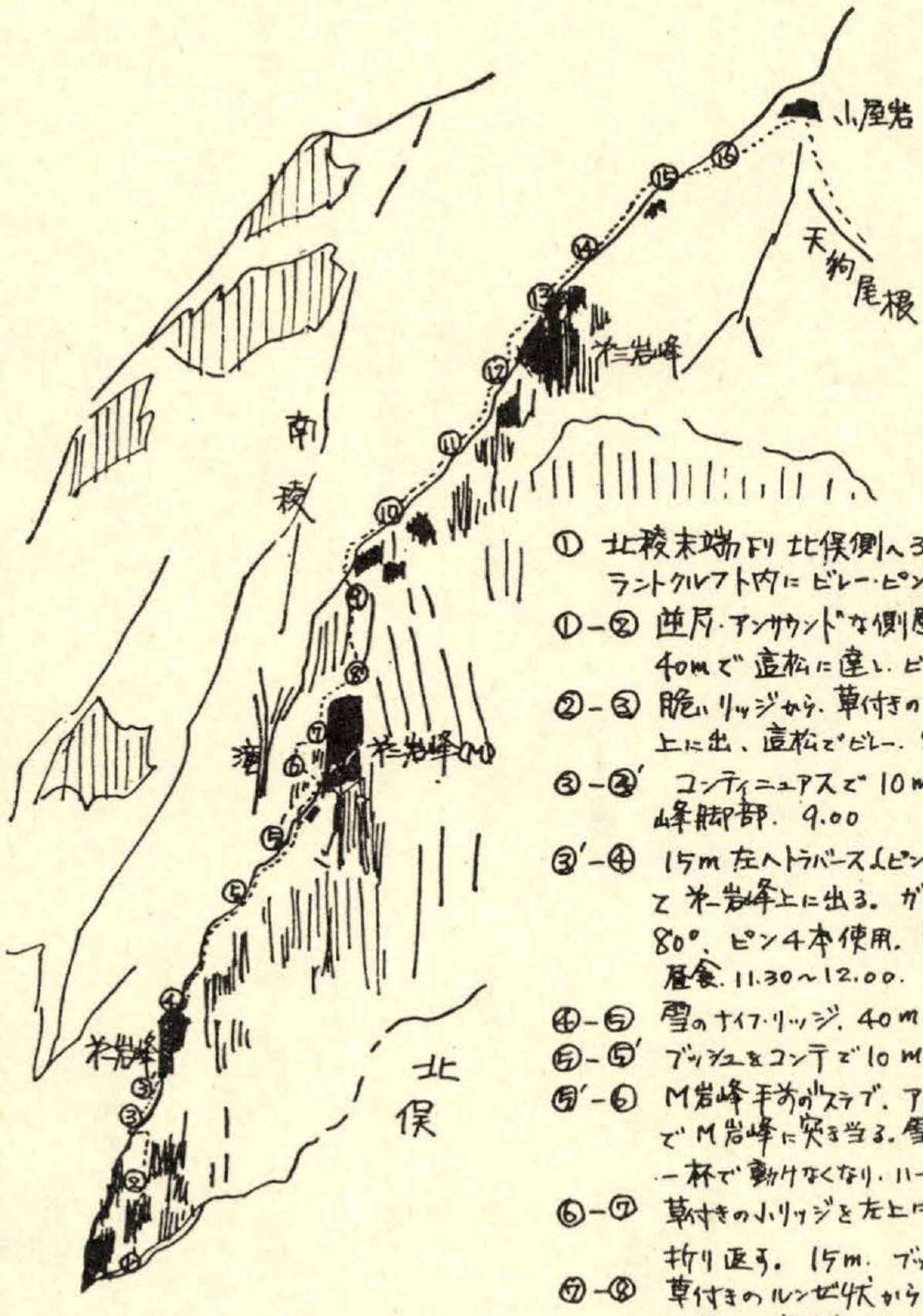
夕闇せまるカクネを後に、明かるい東尾根を北槍に向う。初めての山頂をこういうルートから登れて、心から満足だった。

（大賀）

〈蝶型岩壁左稜〉　中島、三股

AC（八・二五）—B3リッジ取付（九・四五）—天井ルンゼに出る（一一・〇〇）—蝶型左稜（一一・二〇）—東尾根（一三・〇〇）

前日のP3取付点を越し、草付きの緩傾斜帯を右上して天井ルンゼに出、蝶型左稜へ取り付く。主稜パーティのサポートが主目的なので、主稜パーティの行動をうかがいながらゆっくり登る。



① 北稜末端より北俣側へ30m上った点.
ラントクルフト内にビレー・ピンを打ち取付く. 7.30

①-② 逆片・アンサウンドな側壁. 見かけより登りにくい.
40mで這松に達し. ビレーピンを打つ. 8.00

②-③ 脆いリッジから. 草付きのトラバースが悪い. ③で稜上に出、這松でビレー. 8.40.

③-③' コンティニュアスで10m余移動. ③'はM岩峰脚部. 9.00

③'-④ 15m左へトラバース(ピン1)、ガリーを15m直上してM岩峰上に出る. ガリーはアンサウンド. 傾斜80°、ピン4本使用. ④でビレーピン1本. 11.30
昼食. 11.30~12.00.

④-⑤ 雪のナイフ・リッジ. 40m. 這松でビレー.

⑤-⑤' ブッシュをコンテで10m. 小クレバスに入りピッケルビレー.

⑤'-⑥ M岩峰手前のスラブ. アイスハーケン2本使用して30mでM岩峰に突き当る. 雪面から左の草付へ入り. 40m一杯で動けなくなり. ハーケンビレー.

⑥-⑦ 草付きの小リッジを左上に越し. 右の草付きのクボ地に折り返す. 15m. ブッシュでビレー.

⑦-⑧ 草付きのルンゼ状から. ハングした岩場にぶつかり. 木登りで乗っ越す。M岩峰上に出てカンバの木でビレー. 14.30

⑧-⑨ ブッシュを5m抜けて雪稜に出. 40mで稜を横断する大きなクレバスに入る. 昼食. 14.45~15.15

⑨-⑩ クレバスを左側から越え. 上のブッシュ10m. 更に雪稜を30m. でピッケルビレー.

⑩-⑪ 容易な雪稜 30m. ピッケルビレー

⑪-⑫ 雪稜から左寄りに雪のルンゼ. 40mでピッケルビレー.

⑫-⑬ 草付きのルンゼから最後の雪面に出る. 40mピッケルビレー.

⑬-⑭ 雪面を右上、小さな岩稜をまわりこみ. クレバスに入る. 40m.

⑭-⑮ 雪稜から草付き、這松を辿り、小屋岩に続くなだらかな最後の雪稜に出る. 40m. 17.10

⑮-⑯ 雪稜を40m. ザイルをとく. 17.25. 小屋岩着 17.35.

荒沢奥壁 北稜 ルート図

5月6日　中島. 三股. 大賀

蝶型左稜は四〇度ほどの雪稜に終始し、携行したザイルは使用しなかった。

五月五日　晴　休養

ゼミの関係で大は単身下山。三名這松の中に横になり、終日荒沢奥壁を眺め想いにふける。

（中島）

五月六日　曇時々晴、一五時頃より小雨

〈荒沢奥壁北稜〉中島、大賀、三股

AC（六・四〇）―取付（七・三〇）―第一岩峰（昼食、一一・三〇～一二・〇〇）―第二岩峰まき終り（一四・四五～一五・一五）―小屋岩（一七・三五～五〇）

周知のように、この稜の積雪期初登は、我々にとっては神様のような小谷部先輩が行っておられる。しかも、兵隊の位で云えば天皇と呼ば（？）れた甘利先輩が、第三登をされている。残雪期とは云え、我々駆け出しには畏れ多いようなルートである。

勿論、小谷部先輩が二二時間の苦斗を強いられた茸雪もなく、甘利先輩のように荒沢出合から長駆ラッシュするものでもなかったが、一〇時間、一六ピッチの息もつかせぬ登攀は実に楽しく、やり甲斐があった。

登攀の詳細はルート図に記すが、岩場はすっかり雪から出ていた。第一岩峰左ウラのガリーが最悪で、第二岩峰手前のスラブとそれに続く草付きが次ぎに悪かった。雪はくさっていて蹴り込みで登れたので、大賀・三股は全部ビブラムで登った。中島は第一岩峰までアイゼンをつけて登ったが、かえって邪魔だった。

駆け出しは駆け出しなりの充足感をもって小舎岩に腰かけ、暮れなずむカクネと荒沢を見おろす気分は格別だった。

五月七日　吹雪のち雨

AC撤収（九・〇〇）―荒沢出合（一三・〇〇）―鹿島（一五・〇〇）

吹雪の中を下山決行。雪がくさっているのに難渋した。

大川沢は雪解けの濁流が渦をまいて河幅一ぱいに溢れ、ゴロゴロと石が流れる。桜が一本、静かに花を咲せていた。

五月八日　帰京

（註・以上の記録中、ピークリッジと北稜に関しては、「岳人」一四八号記録速報に発表済。但北壁主稜、北壁主稜を北稜と誤記してしまった。又、荒沢奥壁南壁と北稜は手ちがいで未発表）

（大賀）

鹿島槍・荒沢南稜

一九六〇年五月　山本健一郎、中村保、丸山則二、城戸剛、大橋喜治（OB）

昨年の夏、奥又白に入った時、次の春の連休には荒沢へ入ろう、という暗黙の約束が出来上っていた。東尾根の第一岩峰より荒沢へ二段になって切れ落ちた壁に、皆、魅せられていたのである。

四月三〇日

早朝、大町の駅に五人が集合した。ところが、つい最近例の壁は登られた、という噂がどこからともなく入って来て、何となく不安な気持だった。

大町より大川沢出会いまでトラックをやといい、一気に入る。九

時、荒沢出会いに暮営。後、大滝まで偵察に出た。
五月一日　雨　停滞
五月二日　晴のち曇
荒沢出合い（六・〇〇）―大滝上（八・〇〇）―取付点（一一・〇〇）ビバーク
せっかく早発ちしたのに大滝の高巻きに意外に時間がかかり、滝の上の広い雪渓に出た時には陽は高く上っていた。朝陽を一ぱい浴びながら、我々は眠くなるような長い雪渓を一歩々々つめる。あえぎあえぎ南稜の取付点に登りつき上をあおぐと、ねらっていた例の二段の岩壁には、赤い布をつけたハーケンが一筋、見事に並んで打ちつらねてあった。
やっぱり、登られていた。期待が音をたてて崩れていき、すべてが空虚なものに感じられた。だが、それにしても見事に打たれたハーケンだった。拍子抜けしたまま、アンザイレンし、その壁と南稜ルートの間の不明瞭な岩稜に取付く。
五月の荒沢は、強い陽光を浴びてしきりに残雪をゆり落す。我々もしばしば頭からシャワーを浴びせられた。
不安定な雪稜、岩場、そしてブッシュと、バラエティに富んだルートである。つるべ式にどんどんかせいでいくが、流石はスケールは大きく、なかなか岩壁まで達しない。いつの間にか陽は落ち、身体に登攀の心地よい疲労を感じるようになる。下のテラスへ続く細い雪稜を辿っていると、天狗尾根の方よりコールがかかった。天狗尾根の中島達のパーティだ。
下のテラスにたどりついた所で、ビバークする。例の並んだハーケンの真下のシュルンドを、ビバークサイトに選び、二つのツェルトに分れてもぐり込む。
五月三日　曇のち晴
ビバーク点（七・三〇）―東尾根上（八・五〇）―三ノ沢を経て大冷沢
テラスより、南稜ルートに入る。ブッシュと腐れ雪の急峻な壁を登り、東尾根上にとび出た。所期のははたせなかったが、とにかく一つのルートを完登したので満ち足りた気持になり、三ノ沢を下った。
（大橋）

鹿島槍東尾根より遠見尾根

一九六〇年五月　小林進二、宮本英治、倉知　敬、臼井　弘
四月二九日　晴のち曇
大谷原（七・〇〇）―二ノ沢頭（一一・〇〇）
かなりヤブが出ている。特にササが群生している所に出るとたまらない。こういうのとアルピニズムとは一体どこか関係あるのだろうか。
上の方に出ると尾根はやせてくるので、少しは命の心配もしなくてはならない。シモフリの肉のようにべったりササの上に付いた雪が汚なく方々に散乱している。著しく感興を呼ばない景観だ。まだ慣れない体が空腹のせいもあって悲鳴をあげる。二ノ沢頭へかろうじて明るい内に着いた。
四月三〇日　曇
二ノ沢頭（七・〇〇）―頂上（一五・〇〇）
主に冷沢側をまくようにして、一体もぐるのかもぐらないのかはっきりしない不安定な雪の斜面を登る。一歩足を出す前に、今

度のステップはもぐるかもぐらないだろうか考える。よし、もぐらないだろう、と決めてヤッと身をのり出すと、ところがもぐってしまうんだナ。逆の方に賭けると、今度は裏目が出るのだ。

その度に重心がぐらっとかたむき、危く身を立てなおす仕末。何となくしまりのない緊張感を保ちながら、我々はやっと第一岩峰の下までやって来た。

見ると他の連中が登っている最中。面倒くさいからまいてしまう。三ノ沢へ下り、ついでに第二岩峰も省略することにして、岩峰左手にのびているルンゼを登る。急で長い単調な登り。五五分でコルに到着。

丁度我々のすぐ後から同じ所を登って来た連中が、コルへつくと我々にあいさつに来た。手に持ったつつみを差し出し、どうも、お礼です。何の？　ラッセルのである。聞くと京大の人達であった。流石に京大の人は義理固い、と何が流石だか判りもしないのに感嘆し、好意の塊りのそのうまいまんじゅうをほおばった。

その後はなだらかになる広い雪稜を頂上までたどり、北峰と南峰の間にテントを張った。

五月一日　曇

頂上（九・〇〇）―ロノ沢出会（一六・〇〇）

アイゼンを置くと、そのままズルリと滑っていく。そこを何とか止めて一歩一歩下る。こんな急だったかいな、とブツブツ言いながら八峰キレットまで降りた。

キレットの底から登る所が、雪の状態が悪く気持悪いので、荷物だけはつり上る。八貫ばかりなのに、引っ張り上げるとなると何と重いことよ。やっとそれを越えてから、稜線を右に、キレット沢を降りる。思ったより広く、感じよい沢だ。ブロック崩落が怖かったが、何事もなかった。

下りは早い。うしろの北壁を振り返り振り返り広いカクネを一路走り降りる。ここなら、冬でも雪崩は大丈夫だろうと思われるロノ沢との出合いの端にテントを張った。

五月二日　雨　停滞

五月三日　晴

ロノ沢（七・〇〇）―大遠見（一二・〇〇）

白岳沢を少し登ってから遠見の支稜に出て、踏跡をたどって遠見尾根へ登った。のどかな風景にゆったりした気分になってテントを張っているうちに、遭難だ、助けてくれ、と言ってくる人があった。尾根からカクネへ滑落した、ということなので、御苦労にも来た道を又引返す羽目になった。

人一人上げるというのも並大低のことでない。ソリをつくってそれをザイルで引張り上げたのだが、気をゆるめるとすぐずり落ちてしまって片時も気を許せない。精も根もつきはてた感じだった。

五月四日　曇

きのうですっかりバテてしまったし、ラジオも明日は大荒れというので、予定していた五竜東面はあきらめて、下山する。

撤収前に白岳まで往復する。主稜線に出た所で、ヤァ、剣に黒雲がかかってる、午後は雨だ、と確信して帰って来たが、実際はなかなか悪くはならず、次の日も悪くはなかったらしい。ラジオに一杯食わされた下山だった。

この山行は、この冬と来春の合宿のための偵察が目的だったが、いささか通り過ぎるスピードが速すぎた感じだ。でも、この辺のようすをある程度は知れたし。いくつか登ってみたい所が目にとまった。何れを選ぶかこれから決めなくてはならない。（倉知）

針ノ木岳―朝日岳

一九六〇年一〇月　大建二郎、朝木大統、遠藤晶士、中橋寿雄、伊藤重道

一〇月一〇日　晴（秋合宿）

夜一〇時四五分、穂高にて新宿発。食糧係の後閑が出発間ぎわに叔父さん死すの電報を受けとり取りやめるという心細い出発。

一〇月一一日　晴

大町―針の木峠。

大町着は六時、駅を出て扇沢行きのバスをさがしたが、バスは夏だけ。今はタクシーさえ関電の許可が無ければ通れないとタクシー屋の客引きが言う。ままよと公衆電話から関電の大町事務所へ電話すると、そこは一橋の有難さ、タクシー会社へ早朝なら通ってよいとの電話を入れてくれる。五人でトヨペットに乗り、扇沢の鉄橋の手前まで行く。雪の無い針ノ木への道は低く見える割には長かった。一時小屋到着。蓮華岳往復。

一〇月一二日　曇

針ノ木峠―種池

黒四ダムを眼下に見ながら時々霧の吹き上げる道を快適に飛ばす。新越乗越では完全にガスで何も見えない。種池小屋三時着。誰もいない。やれやれとラジオをつけた途端、臨時ニュースで浅沼委員長刺殺されるときた。一同大いに怒った。

一〇月一三日　ガス

種池―冷池

ガスって何も見えないのでいったん停滞と決めたが、良くなりそうなので冷小屋まで行くことにする。こうからメッチェンが二人来るぞと騒ぐので歓迎しようと朝木が向て待っていたら何と小屋番で一人二百円ずつ請求される。責任を感じた朝木の奮闘で一人百円にまけさせて冷小屋へ急いだ。

一〇月一四日　晴

冷池―五竜小屋

きれいに晴れ上がった。秋山らしく色づいた黒部の谷を左に、キレットを越えて五竜へ。ほとんど人に会わない。

一〇月一五日　晴のち曇

五竜小屋―白馬

午前中は快晴、天狗の登りまで飛ばし過ぎ中橋が調子悪くなり、天狗岳で大休止。午後はガスで何も見えず、三時頂上小屋の下に着きテントを張る。

一〇月一六日～一七日　風雪　停滞

今年の初雪が降った。北大の山岳部の歌を皆でガナッて時を過すも、夏テンだけにポールが折れやしないかと思う程の荒れ方だった。

一〇月一八日　快晴

白馬岳―朝日岳

素晴らしい一日だった。バリバリのテントを日に乾かす間、旭岳を往復、八時に白馬を出て雪倉岳を経て朝日へ。紺碧の空に上

半分真白な白馬が鋭角的な姿を見せ、下は緑が果しなく拡がる。遠くには剣岳がピラミダルな姿で控えている。朝日の頂上で雷鳥とたわむれてから「こんなキレイな景色は見たことネェゾ」とブツブツ言う伊藤をせかして小舎へ下った。

一〇月一九日　晴

朝日岳―小川温泉

あんまり景色に見とれてピッケルを置き忘れてきたという伊藤の言葉にネム気も吹っ飛び、朝日の頂上まで駈け登る。すぐ見つかったので又良い気持になり、皆で鼻歌をうたいながら急坂を北又川へ下った。

（大）

鹿島槍ケ岳集中（冬合宿）

一九六〇年一二月　中川滋夫（リーダー）、中島　寛、小林進二、石　弘光、三股　宏、倉知　敬、大　建二郎、三井　博、遠藤昌土、臼井弘、多田伸治、後閑勉六、蛭川隆夫、伊藤重道

〈一、天狗尾根〉　中島　寛、三股　宏、大建二郎、多田伸治三隊のうちで最も行動半径の大きい天狗尾根の目標は、①天狗尾根を荒沢出合付近の末端から登り、北槍を経て南槍の登頂を目指し、登頂後、直ちに下山して高千穂平にて本隊と合流する。②東尾根隊と連絡をとり、第二岩峰通過に際し、出来得れば東尾根隊をサポートする。この二点であった。当初東尾根隊と同様、天狗尾根から北槍、南槍を通って本隊に合流する縦走案が立てられたが、時間的制約のため、この計画は前記のように変更された。

一二月一三日　曇のち小雪

炭焼小屋発（一一・五〇）―発電所取入口（一三・〇〇）―荒沢出合（一三・三〇）―C1（一三・四五）

機動性をもたせるため食糧等、かなりの軽量化をはかったが、それでもビニロン製五人用冬テント、ザイル四〇㍍二本、七日分の食糧とあわせると、合計でやはり一五〇KGをこえてしまった。荒沢出合から荒沢に少し入った天狗尾根取付点にC1を建設。この付近積雪ほとんどなし。設営後、中島、多田二名にてラッセルを兼ね、C2予定地の稜線上まで偵察。

一二月一四日　曇のち小雪

C1（七・〇五）―デポ地点（八・一〇）―C1跡（八・四〇）

デポ地点（一〇・三〇）―C2（一一・五〇）

積雪は足首がもぐる程度。一八〇〇㍍の稜線上C2予定地に着くあたりで新雪がすねまでもぐる程度だから荷上げもはかどる。四人がフルに行動するため、中間地点の独立樹までとそこからC2までの二区域に分割し一往復半で独立樹まで全部の荷物の荷上げをすませ、しかる後、四人でC2を建設し、中島、大は第一クーロアールまでの偵察、三股、多田は独立樹までの逆ボッカを行い、一八〇〇㍍の稜線上に一日でC2を建設し、ルートの見通しもたち、ここに本格的な冬山の生活が始った。

一二月一五日　晴のち風雪

C2発（七・一五）―第一クーロアール下（八・三〇フィックス工作）―C2跡（九・五〇）―第一クーロアール下（一一・二五）―第二クーロアール下（一三・四五フィックス工作）

—天狗の鼻（一五・四〇）

相変らず荷は重い。第一クーロアール下まで二回に分けて荷上げ。同所に荷をデポして、二日分の食糧をもって天狗の鼻にC2を建設した。第一クーロアール、第二クーロアールは、ともに約八〇㍍程の深い雪のルンゼで、その真中に直登するルートをつけねばならず、ザイルを固定するまでは、緊張のし通しだった。クーロアール内で膝上までもぐるラッセルがあったが雪崩の心配はが。下って北俣を過ぎた頃、やっと東尾根パーティのギューちゃる。南槍の上についてもやれやれ、もう目的を達したかという落語的気分になってしまりがない。確か今日は偵察のはずだったんや倉知、三井、臼井が姿をあらわした。ひでえんだからとボヤク連中に心づくしの食糧を与え、運命だよ、冷小屋へ行けばアンリ親分がいて暖かいコーヒーをわかしているよというと、本気にしない顔で別れて行った。小屋岩上でアップザイレンを二回やって下る。別れた連中のことが気になったが、うまいものを作って早々に寝た。

一二月一八日　雪、夜風強し　停滞

一二月一九日　晴

C3（一〇・四五）—第二クーロアール上（一一・〇〇）—同下（一一・二五）—第一クーロアール上（一二・一五）—同下（一三・〇〇）—C2跡（一四・一五）—C3（一六・五五）

一二月二〇日　快晴

C3発（八・〇〇）—小舎岩（九・四〇）—荒沢の頭（一一・三五）—北槍（一二・一五）—南槍（一二・四五）—小舎岩（一五・四五）—C3（一六・五五）

芳しくない天気だが、一日はもつと判断してこのチャンスを逃さぬようアタックに出発した。北槍から南槍への吊尾根上ではふき飛ばされそうな強い風に悩まされた。荒沢の頭で東尾根隊の消息をうかがったが不明。かねてのうち合せ通り北槍頂上に竹竿に結んだ連絡用紙をおき、次の晴で下山する旨を伝えた。東尾根隊のサポートはこの悪天ではとても考えられない。北槍から南槍までは約三〇分。剣、立山が薄灰色の雪空の下に真白にそびえている。南槍の上についてもやれやれ、もう目的を達したかという落語的気分になってしまりがない。確か今日は偵察のはずだったんや倉知、三井、臼井が姿をあらわした。ひでえんだからとボヤク連中に心づくしの食糧を与え、運命だよ、冷小屋へ行けばアンリ親分がいて暖かいコーヒーをわかしているよというと、本気にしない顔で別れて行った。小屋岩上でアップザイレンを二回やって下る。別れた連中のことが気になったが、うまいものを作って早々に寝た。

一二月一八日　雪、夜風強し　停滞

一二月一九日　晴

C3（一〇・四五）—第二クーロアール上（一一・〇〇）—同下（一一・二五）—第一クーロアール上（一二・一五）—同下（一三・〇〇）—C2跡（一四・一五）—C3（一六・五五）

下山にうつる。第二クーロアール、第一クーロアールとも四〇㍍ザイルを二本つないで、主要部にラッセルをつけた上で下山するのように渉る。雪は深いが、登った時の苦労がうそのように渉る。翌日、高千穂平まで着くために大冷沢出合まで頑張って幕営。星がきれいだった。

一二月二〇日　快晴

テント地（八・〇〇）―西俣出合（九・三〇）―高千穂平（一二・五五）

天候が完全に好転したのに、低い所で行動しているのは辛い。ともかく高千穂平に急ぐ、かくして赤岩尾根隊と合流した。

（中島）

〈二、東尾根〉　小林進二、倉知　敬、三井　博、臼井弘

一二月一三日　小雪

ベースハウス（一二・二五）―デポ地（一四・二〇）―ベースハウス（一六・二〇）

午後から約六貫程の荷をかつぎ、ラッセルとボッカをする。大谷原より三〇分程登った所、丁度防砂堤のあるあたりより尾根に取付き、一時間程登る。雪は深い所でヒザ位、ラッセルよりヤブコギの方が大変である。

一二月一四日　曇のち雪

ベースハウス（五・二五）―一ノ沢頭（一一・二五）

残りの荷物を全部かついで、一ノ沢頭まで登りC1を建てる。昨日のデポより三〇分も登ったあたりよりワカンを着用した。テントを建ててから、デポまで戻り、再度荷上げ。きつかったが、これで一日得をした。

一二月一五日　晴のち曇

C1（八・〇五）―一ノ沢頭（九・〇五）―第一岩峰（一一・四〇～一三・三〇）―C1（一五・三〇）

第二岩峰まで偵察のつもりで出発。尾根上は雪少なく、非常に不安定。足を置くと所々ポカッと穴が開き体ごと落ち込んでしまう。やせた尾根なのでやっかいである。第一岩峰の下部の岩壁を一ピッチ登り、ザイルを固定する。その後少し登り、時間不足と天候悪化のため退却した。

一二月一六日　曇、終日ガス濃し

停滞。午後から、体ならしのため二ノ沢頭まで往復。

一二月一七日　晴のち風雪

C1（三・五五）―第一岩峰下（七・三〇）―第二岩峰（一〇・五〇～一三・二〇）―北峰頂上（一四・二〇）―冷小屋（一五・五五）

二時起床。頂上往復のつもりで出発。第一岩峰の下で夜明けを待つ。第一岩峰は、下部の岩場を越えるとあとは急な雪壁。しかし雪のつき具合は不安定で、一々下のハイ松を掘り出し手がかりにしないと登れない。結局、雪のトンネルを掘るようにして登らなければならないので、ひどく時間と体力を消耗してしまう。ただ陽が照りだし、極めて上天気なのがせめてものなぐさみだった。

三時間程かけてこれを登り切ると、すぐ続いて第二岩峰である。右手に天狗尾根隊の登っているのが見え出した。この頃、天気は急速に悪化して、小雪さえちらつき出した。雪と岩とのやせ尾根を一ピッチ、ザイル一ぱいに登ると垂直の岩壁の基部へたどりつく。これを荒沢側をまきながら登り切って、岩峰の頂上へと再び出た。だが、この岩壁には一寸手こずった。岩は非常にもろく、うっかり触れた浮石が落ちて、危くセカンドに当る所だった。

上にぬけると、もうあたりは風雪もよう。しかし、引返すのは残念だったし、又あの雪深い第一岩峰をこえてここまでやってくるのはとても難儀に感じたので、思い切って頂上まで行ってしまうことにした。ガスで上の方は定かに判らないがそんなに遠くもなさそうだ。だが、次第に悪化してゆくこの天気では、帰りに悪い岩場を下るなどという細かい仕事は出来そうもなかった。もし天気がもてば幸い、悪くなる一方だったら、冷小屋へ避難する覚悟だった。ゆるやかに伸びた雪稜をもくもくと進む。しばらく行った所で、上から降りて来た天狗尾根隊と会った。互に情報をかわし、どうやら確実になった冷小屋行きを彼等に伝えて、尚も頂上へ向う。

頂上へ出ると、もう完全に吹雪。ためらわず南峰へ向う。横なぐりに吹きつける風に体がとびそうである。殆ど真横を向くようなかっこうでフラフラと下る。どうやら牛首の方へは迷わずに主稜線をたどり、やっと冷小屋へころげ込んだ。小屋には赤岩尾根パーティが居た。

一二月一八日　風雪

冷小屋（九・〇〇）―高千穂平（一〇・五五）

相変わらず続く吹雪の中を、赤岩尾根のC1に向う。大雪に深くうもれた赤岩隊のテントに泊めてもらう。

一二月一九日　快晴のち曇

高千穂平（八・二〇）―C1（一三・〇〇）

打って変わって素晴らしい快晴。再びここへ来ることを約して、赤岩隊と別れる。防砂堤の取付点まで下り、東尾根を登りなおす。一ノ沢頭には、出た時とまったく変わらず、しっかりとテントが建っていたのでうれしかった。

一二月二〇日　晴のち雪

C1（一一・二〇）―冷沢留岩（一四・四〇）

テント撤収。我々だけの静かな、居心地よい所だった。

一二月二一日　雪　停滞

一二月二二日　晴のち曇

留岩（九・〇〇）―高千穂平（一一・四〇）

赤岩尾根を登り、赤岩尾根隊と合流する。天狗尾根隊はすでに登って来て居た。

（小林）

〈三、赤岩尾根〉　中川滋夫、石　弘光、遠藤昌土、後閑勉六、蛭川隆夫、伊藤重道

一二月一四日

高千穂平C1建設。

小舎を出てから西俣まで三時間、赤岩尾根に取付く。尾根の積雪は、ひざ程度で、予想以上に楽だ。高千穂平まで六ピッチ三時間で登り切りテント設営。石、後閑、蛭川がC1に残る。初日の行動にしては、ややきつかったが、まず好調なスタートを切った。

一二月一五日

C1の三人は主稜線までの偵察、下の三人はC1入り。天気もよく、重荷を背重っていても、心は晴ればれとして気は軽い。午後にはキャンプに到着し、偵察隊の帰りを待つ。二人の一年生も、始めての冬山で張り切っている。

一二月一六日　冷小舎まで偵察

全員で冷小屋に向う。赤岩尾根は、尾根自体危険な地点はないが、雪の状態如何では、雪崩の可能性を備えた地点は随所に見受けられる。主稜線に抜け出る個所は、勿論尾根筋をたどる。天気が怪しくなってきたが、小屋まで行く。主稜線は、さすがに黒部側から吹きつける風は冷たい。小舎は雪に埋っていることもなく、完全に使えることがわかった。

一二月一七日

石、後閑、蛭川三名は冷小屋へ入る。残り三名は冷小屋までボッカし、帰り爺岳に登る。天気は午前中しかもたない。午後になると、曇りだし、小雪がぱらつき始める。烈風の中を這うようにして爺岳頂上にたどりつく。寒さでモノがうまくいえない。頂上は早々に引揚げて、逃げるように高千穂平に帰った。入山以来、加部員全員頂上に立つことが出来たと考えながら小屋に向う。何まだ誰にも会わない。我々だけの尾根だ。かもの足りなさを感じた。

一二月一八日

一二月二一日

風雪激しく停滞していると、外で声がする「お前等まだ寝ていた。るのかよー。」聞けば小林（牛）東尾根パーティの連中だ。今時ここへ現れる訳がわからず、一同狐につままれた感じでテントを開くと、雪だるまになってころげ込んで来た。昨日頂上を越え冷小屋に泊り、今日ここまで降りてきたという訳だ。今晩はここに泊めることになる。

一二月一九日

第一隊は今日登頂しているだろうと思うと冷小屋入りも、自然と足取りが早くなる。

久し振りの好天だ。赤岩尾根にも、すっかり馴れたが、昨日のミックスした壁にぶつかり、その上は傾斜の落ちた雪稜で主稜線まで続いている。右稜は技術的に容易そうなので二年生の訓練雪は場所によっては腰までもぐった。冷小舎で、石隊の帰りを待ちながら明日のアタックに備えた。

一二月二〇日

朝のうち小雪がちらついていたので、出発を遅らす。晴間が見え始めてから出発。ゆっくりと稜線をたどり、二時間半で南槍に到着。天気もすっかりよくなり、サングラスを取ると、ギラギラとまぶしい。北槍に向う途中、初めて他パーティと出会う。頂上に天狗尾根隊が残した標式が風になびいていた。これで、合宿参

一二月二二日

天狗尾根隊は、赤岩尾根を経て鹿島槍へ。赤岩隊の石他三名は爺を経て種池まで。中川、遠藤は爺東面バットレスの偵察。昼過ぎ東尾根隊も着き、高千穂平に全員集結した。

一二月二三日　風雪　停滞。

一二月二四日　晴

爺岳西俣奥壁には、高千穂平から見て、三本の顕著なリッジが、主稜線へ突抜けている。右稜は、赤岩尾根が、主稜線に達している僅か手前で、赤岩尾根に吸収されていると思われた。中央稜は、中央部に黒々とした三角形の岩壁を持ち傾斜も急で一番手強そうに見えた。左稜は始めは雪稜で、それが一旦切れて、雪と岩のミックスした壁にぶつかり、その上は傾斜の落ちた雪稜で主稜線まで続いている。右稜は技術的に容易そうなので二年生の訓練

の場とし、残り二つの稜に部の持てる力をぶつけて見ることにした。

〈爺岳西俣奥壁右稜〉

中川滋夫、石　弘光、臼井　弘、多田伸治

三パーティ一緒にテントを飛び出す。沢に下ると、昨日の降雪で腰までもぐり、今日のラッセルが思いやられた。各パーティ共初めての地域なので取付点に苦労する。右稜の末端は断崖となって本谷に落ちているため、断崖の上にトラバースし、急な雪壁に取付いた。

雪壁の上は、オーバーハングした岩がかぶさり、トップの臼井は多田のショルダーを借りてヒイヒイわめきながらトラバース気味に、上に抜けて行った。そこから上は雪稜と雪壁の連続で、コンテまたはスタカットで、約二時間登った所で昼食。他パーティはと振り返れば左稜の中央部の壁で悪戦苦闘しているのが見られる。相当時間がかかりそうな気配だ。健闘を祈って先へ進む。

相変ずのラッセルに消耗する。雪稜がガスの中に下に降りている所を、確実なジッヘルに導びかれてコルまで下る。前方はガスが晴れて見ると、黒々とした岩峰が現れた。非常に手強そうで、どこから登ってよいか困惑する。我々のメンバーで少ない道具で前進することは時間的に見ても無理だと思われたので引返すことにする。

三〇分程引返し、赤岩尾根側に降りている沢を下る。赤岩尾根に出、高千穂平に着いたのは三時を廻っていた。遠藤と後閑は左稜のサポートに行く。彼等は日没後元気に帰って来た。（中川）

〈爺岳西俣奥壁左稜〉

中島　寛、小林進二、倉知　敬、大　建二郎、三井　博

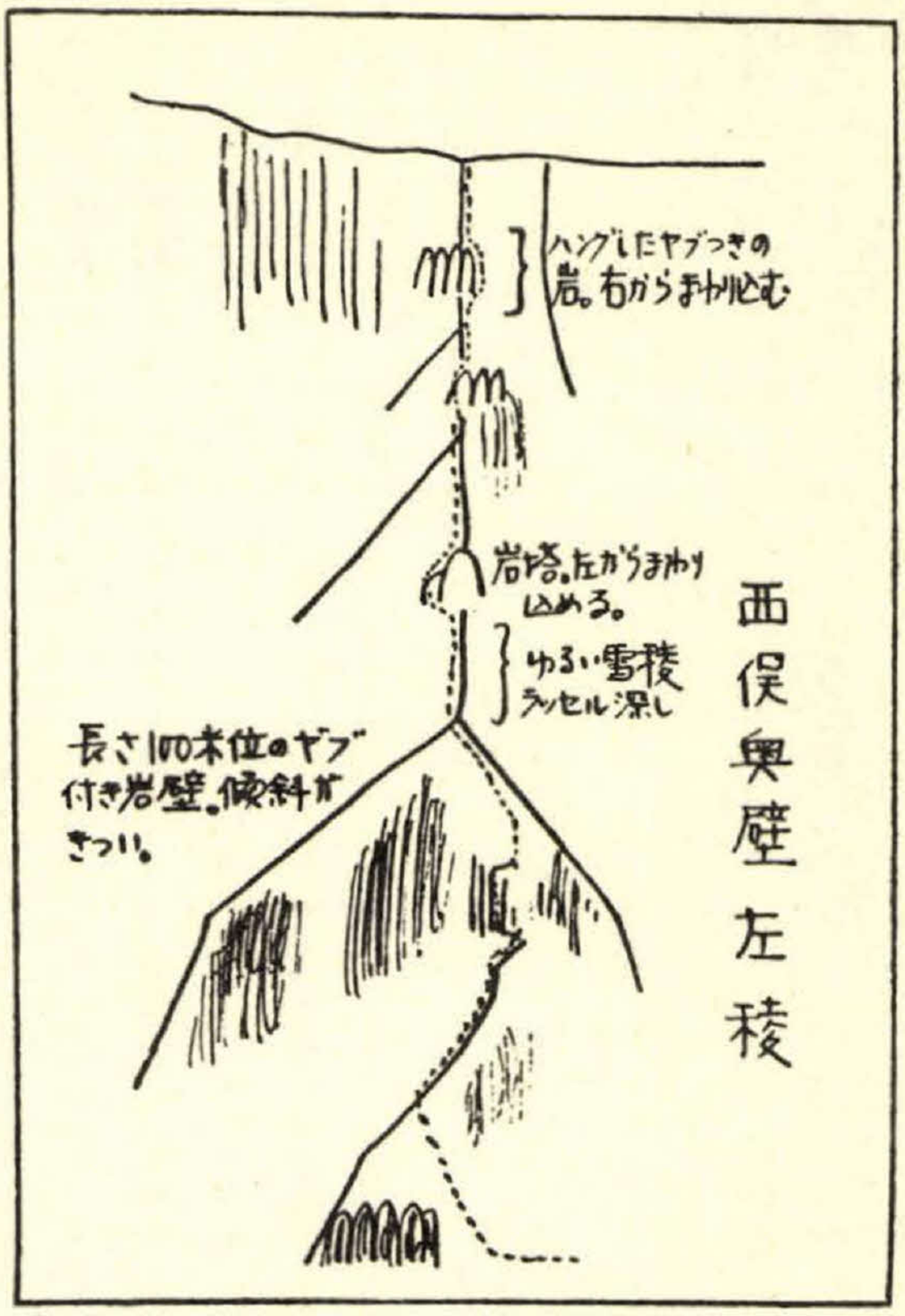
不安が胸にある時は気が重い。朝二時半に起きるまでに度々目がさめた。雪は降っていないかと見ると星がまたたいている。

計画よりもずっと早く、各尾根のアタックが終って全員が高千穂平に再結集したとき、リーダーの中川は、爺岳北のピークから赤岩尾根にかけて派生している三本の尾根に盛り上った力をぶつけてみようと云った。そうスケールは大きくないが、途中黒々と岩を露出させた部分はかなりむずかしそうだ。計画にも無く、偵察も十分ではないが、今ならやれる、これをやらないで下山すれば、力を出し切らずに終えたという意味で成功とは云えないだろう——。

五時、サポート隊と共に三パーティ一緒に出発。高い所からはあれとあれだなどと各々のとりつく尾根がわかったつもりだったが、雪崩の出そうな沢を大急ぎで横切るうちに混乱し、取付いたらそれは中川パーティの登る奴だといわれ、気をくさらせてもう一本沢を横切り中島パーティに追付くと、お前等の尾根はあれだと指さされる。見るとなるほど三角状の岩壁が黒々と立ちはだかっている。しかも沢を百㍍ほどさか登った所だ。こんな雪崩の恐い時に又あんな所まで行けるものか。とうとう中島パーティと一緒に登ることにする。

この尾根は西俣奥壁の三本の支稜のうち、一番左のもので一番長い。雪稜を五〇㍍ほど登ると、顕著な一〇〇㍍程の岩壁の下に出る。尾根はこの岩壁に吸い込まれるように消えている。

中島と倉知、小林と大と三井が各々アンザイレンする。倉知ト



西俣奥壁左稜

ップで登り出す。右へ回り込んで岩のルンゼを登るが、岩が不安定で中々高度が上らない。左へ回り込んでも登れそうなので、小林パーティは大がトップで左へルートをとる。不安定な岩をなだめて雪をはらい、ヤブを頼りに直上、四〇㍍伸びてわずかな足場でジッヘル。小林、三井が二〇㍍ほど登ってから再び登攀開始。這松に雪がかかっているが、凹角なので強引に登ろうとして果せず、右へトラバースしようとしたら、ハイ松の上の雪がドサッと落下、投げ出されそうになって手を伸ばすと幸い一本の木に手が触れて助かる。ハーケンを打ち、手ごろなハイ松にカラビナをかけてのザイルトラバース、アイゼンが金属的な音を立てて、お前のやっていることは危いことなのだぞと警告してくれる。一五㍍ほど右へ移り、傾斜の落ちたところで直上、草付きなので雪がしまっていないのでわずかな草を堀り起し、根元をおさえるように一五㍍登ってジッヘル。ミッテルの小林が姿をあらわす頃は、ラストの三井もさすがに我慢しかねたか、早くしないと凍え死ぬぞと怒鳴ってくる。

そこからは下からつき上げてくるルンゼに入って約三〇㍍、雪が急に深くなって傾斜の落ちたことを知らせてくれる。大きな木が現われて尾根が次第に広くなる。急に傾斜が落ちて広々と視野が開けた。めしにしようや、と五人が腰をおろして時計をみると既に午後二時。緊張の連続で全然時間の経つのがわからなかった。そこから上に、岩峰が見え、左右がスッパリと切れている。こりゃビバークかなとラッセルして行くと、幸い左へまわり込んで捲けた。左に広い沢が登っている。右は切れ落ちている。

さらに二回、ザイルを使ったが、たいしたことはなく、ラッセルだけが延々とつづく。突然遠藤と後閑の頭が妙な具合に行手に現われた。サポートに来てくれたのだがやっと終りかと肩の荷がおりた感じがした。爺の北のピークから一〇〇㍍ほど赤岩尾根へ寄った地点が終了点、雪庇も全然なく風だけがビュービューと音を立てて頭の上を流れていた。

稜線へ出るとたちまち手袋がバリバリに凍る。午後五時であるボタン雪がはらはらと肩や背に降り積る。長かった冬合宿を終け赤岩尾根を下った。今合宿も、これで終った。あとは東京へ帰るだけ、皆、黙々と下っていった。

一二月二五日　撤収

茶に感謝し、ライトをつけ、一人一人思い出を胸に鹿島の狩野さんの家へ向かった。

（大）

白馬岳主稜

（中川）

一九六一年一月　丸山　則二（OB）、中島　寛

一月二日　雪　猿倉山荘入り。

一月三日　雪　一日雪の様子を見るために停滞とした。

一月四日　雪　夜明け頃主稜取付に到着。同じく主稜に向うパーティーが先行していて大雪渓までのラッセルを助けられた。以後あとになり先になりして進む。三峯の辺を越えると、雪の状態がひどく悪く頂上の雪壁まであと五〇㍍という所で考えこんでしまう。稜線の真上に縦に亀裂が走っている。中島が思い切って数㍍進むとにぶい音を立ててバサリと雪面が動く仕末であり、あきらめて引返した。

一月五日　記録的な豪雪の年で今年の雪はかなり異常だったらしい。未練を感じつつも下山した。

（中島）

栂池（スキー合宿）

一九六一年一月　大　建二郎（リーダー）朝木大統、遠藤昌土、臼井　弘、高橋信成、竹中　彰、中橋寿雄、名和泰三、南　亮進（OB）

一月八日　晴　松本で臼井と竹中が合流、森上で落ちあうはずの小林正直さんは大雪で来られなくなる。郷津長平氏宅に余計なものを置き八時半出発。トレースはあったものの、長いものを背負っているので道ははかどらず、御殿場小屋が午後二時半スキーをつけた方が早いだろうと、はかせたのが間違いのもと。早大の小屋の少し前で生れてはじめてスキーに触ったという者もいて、坂でもないのに転ぶ奴がいる。暗くなって午後五時半にやっと成城小屋にたどりついた。

一月九日　晴　宮本など四人が御殿場小屋へ昨日のデポをとりに行き、あとは練習。南さんのコーチはこれで三年間同じボーゲンしか教えてもらえない劣等生が多い。スキーばかりは上級生も権威がない。

一月一〇日　晴　天狗原までツァー。多少自信のつきかけていた連中も新雪の急斜面とあっては腕の振いようがない。夜は不気嫌な顔が多かった。

一月一一日　地吹雪　乗鞍岳へツァーを試みたが、風が強く地吹雪になっているので天狗原で引返す。番付によれば、コーチの南さんは別格、次は大、これは北海道生れなので除くと、一位は高橋か朝木、次いで遠藤、竹中が山回りパラレルまで、少し落ちて臼井、うんと落ちて中橋、名和、但し熱意と素質は臼井が一番という噂。

一月一二日　雪　一㍍も雪が積ってスキーが見えない。雪洞を掘る練習とワッパ

の練習をする。

一月一三日　晴

美しく晴れ上り、絶好のツァー日和。乗鞍岳へ向う。頂上へはスキーをデポして往復、下りは快適な大斜面を八ミリを撮りながら滑った。

一月一四日　曇

下山。郷津氏宅でコンパ。南さんのヨーデルを一同初めて聞く。

（大）

遠見尾根から五竜岳

一九六一年三月　三井　博、遠藤　昌土

三月一七日　快晴

下川又寛氏宅へ寄り、春合宿の連絡所設置を依頼する。遠見小屋まで四時間。午後、小遠見まで登り、快適なスキーを楽しむ。

三月十八日　地吹雪のち晴

遠見小屋（四・〇〇）―五竜岳（九・五〇）―遠見小屋（一四・〇五）

Eが故障したので、単独で五竜往復する。風が強く、猛烈に寒かったが、陽が高くなるにつれて楽になる。注意すべき所は、白岳の大斜面の雪崩と白岳と五竜岳間のルンゼのトラバース及び頂上直下の急斜面の登降であろう。雪が柔らかいので足場の確保に苦労した。帰路西遠見付近で、五竜東面の稜の写真を撮ったりスケッチをしたりし、各稜の登路の見通しをたてる。G2、G5が最も難かしそう。G7、北尾根はアプローチ、帰路が長いのでかなりのスタミナを要求されそうである。

（三井）

三月九日　雪のちみぞれ

遠見小屋（九・三〇）―下川氏宅（一一・三〇）

遠藤の足をかばいながら、ゆっくり下った積りだったが、意外と早く下山した。

遠見尾根から八方尾根へ

一九六一年四月　大　建二郎（リーダー）、朝木大統、高橋信成、長沢道彦、村上泰介、伊藤重道

四月四日　晴

神城（八・〇〇）―遠見小屋（一二・三〇）―小遠見先のコル（一五・〇〇）

神城で下川又寛さんのお宅へ寄る。スキー場は人影なく、デブセルは全然なく、もうけたなあ、などと遅い春山に感謝する者もリ出ている。強い陽射しがいかにも春山らしく、頭が鈍く感じられる程だ。

（春合宿）

四月五日　風雨強し　停滞。

小屋をすぎる頃から天気がくずれ、夜は暴風雨となった。ラッいたが、雨まで降るとは御存知ないようだった。

天気図で見ると日本海中部にある九九〇ミリバールの低気圧が時速四〇キロで東進し、南風が吸い込まれての雨だとわかるが、冬テントのために水通しのよさは格別、テントのド真中に池が出来て、コッヘルで二〇杯もくみ出す仕末だった。

四月六日　晴のち吹雪

テント発（八・〇〇）―西遠見山（九・四五）―白岳小屋（一二・〇〇）

やかましい五竜隊と大遠見で別れて白岳沢を登る。昨夜の雨でクラストしており、雪崩だけは心配ない。稜線へ出る頃から天候一変、猛吹雪で視界ゼロ。小屋は右だったか左だったかな、ここで間違えたらちとしんどいぞ、昔通った頃を思い出し、左へ行ったら屋根が出て来た。どうだ俺のカンは、などと威張りながら逃げ込む。寒冷前線の通過であった。

四月七日　快晴

白岳小屋（八・四五）―五竜頂上（一〇・〇五）―白岳小屋（一一・一〇～一二・五五）―唐松小屋（三・四五）―不帰二峰

今日は朝五竜を往復した後唐松小屋へというスケジュール。下から五竜隊が登って来て東面の偵察に向かう。少し後から追いかけたら、竹中がいて、蛭川が滑って三井が追いかけたという。ギョッとして見ると、歩きながら二人で登ってくるので安心する。五竜から降りて撤収し、唐松へ向かう。夏道が三分の一ほど出ており、牛首も左にまいて難なく小屋についた。

四月八日　晴のち雨

唐松小屋（七・五〇）―不帰岳二峰（八・四五）―唐松小屋（九・五五）―黒菱（一二・三〇）―細野（二・三〇）―四谷―下川又寛氏宅

朝不帰へ行く。雪がちょうどよくついているので歩きやすい。二峰の下りもこの調子では難なく抜けられただろう。又、雲の出はじめた空を後に、スキーヤーの姿が目に入る八方尾根を下った。下川さん宅でコンパをやる。寝ていたらガヤガヤという声がして遠見で遭難だという声が聞える。下川さんの声が聞えて足音が近づき、障紙がスーッとあいた。一瞬さては、とギョッとしたが、下川さんが、「鹿島槍で遭難があってね、警察の人が上の雪の状態を知らせてくれといっているので」と言うのを聞いてホッとした。

（大）

五竜岳東面（春合宿）

一九六一年四月　三井 博（リーダー）、宮本英治、遠藤昌土
臼井 弘、蛭川隆夫、竹中 彰

四月四日　晴

下川氏宅（八・〇〇）―スキー場（九・〇〇）―遠見小屋（一二・〇〇）―小遠見（一四・四五）

行動は八方パーティと全く同じである。

四月五日　風雨、停滞

四月六日　曇のち風雪

小遠見（八・〇五）―大遠見テント場（九・四〇）

大遠見のテント場まで三ピッチ八方尾根隊と行動を共にする。テント設営後、雪が降り出したので、五竜頂上行きを中止する。三井、宮本で偵察に行ったが、風雪が強くなり視界が全くなったので、西遠見にて引き返す。

四月七日　晴

大遠見（七・〇五）―白岳小屋（八・一〇）―Aルンゼのコル（八・四〇）―スリップ（九・〇〇）―縦走路（九・五〇）―白岳小屋（一〇・五五）―大遠見（一三・〇五）

今日は折角の快晴であるが、一日費やして宮本、遠藤、臼井は白岳沢へ下って各稜の登路の偵察を行い、三井、蛭川、竹中で五

竜東面の上部偵察を兼ねて、一年生（実際は二年生だが）の五竜登頂を行うこととした。頂上パーティは白岳小屋まで前日の雪に膝までのラッセルがあり、かなり消耗する。Aルンゼのコルで小休止をとり、G1の壁の登路を観察する。コルから蛭川―竹中―三井のオーダーにしたが二本目のルンゼのトラヴァースで蛭川スリップする。ストップの体勢に入らぬまま、ピッケルをはなし、すべるような格好で墜落。一度小さなガレに乗り上げ、雪渓の比較的緩く見える部分で自然に止まった。竹中にその場を動かぬよう命じて三井下る。目測実に二〇〇㍍のスリップであるが、蛭川は腰を打撲した他外傷もなかった。丁度八方隊が五竜登頂中であって心配してコールをかけてきたが、充分歩けるので、カッティングで階段を作りながらゆっくりもとの縦走路に戻った。五竜頂上行きを中止して竹中―蛭川―三井のオーダーでアンザイレンし、ゆっくりテントに戻った。

四月八日　曇のち雪

G0（宮本、遠藤、竹中）、G2（三井、臼井）

蛭川は腰を痛めたため休養させた。

〈G0〉

G0は五竜東面の右端にあり、ゆるい雪稜で這松帯が中央部にあり、岩は上部に少し出ているだけである。西遠見から充分偵察出来、登攀は簡単なので、初心者の雪渓訓練に調度良いところである。僕等も五竜東面登攀の一日目なので、足慣らしのつもりで登る事にした。西遠見のコルから白岳沢へ適当な支稜を下降する。アイゼンのツァケ八本が完全にきいて気持良い斜面を楽しみ、デブリの多い白岳沢をトラバースする。朝日が五竜を照らしはじめたが、雪はしまって雪崩の危険は前の心配を完全に吹きとばし、以後の登攀に安心して白岳沢をトラバースする自信が出来た。G0末端から延びているゆるい雪稜をたどる。末端の這松でアンザイレン。簡単に登れるつもりなので、胸をしめつけられるような緊張感もない。遠藤トップで登りだす。ピッケルを深くさし、一歩毎にキックステップして進む。後に続く者はすたすた歩いて登れる。右側はすぱっと切れているので左側の斜面をトラバース気味に登る。宮本にトップ替り竹中をミッテルにする。確保の為埋め込んだピッケルは、抜くのに苦労する程完全にきき、竹中と遠藤に続いて来てもらう。二羽の雷鳥に会ったところで昼食とする。大遠見の自分達のテントを眺めつつ、フランスパンをかじる。次のピッチはG0では比較的急なきくので、万一バランスをくずしても、四〇㍍ザイル一杯にのばす。後は稜と云うより尾根で、左は這松帯になっている。のんびり春山の気分を味わいつつ登る。GIのα・β岩壁を良く見ておく。遠いのでルートの判別は出来ないがおもしろそうな岩壁に思える。登攀もそろそろ終了に近づく頃、岩と雪のミックスした所があり、遠藤が適当にルートファインディングして行く。竹中もすっかり慣れ、確実な足取りで続き、安心して見ていられる。一㍍程の雪壁を乗越すと稜線でG0の頭はすぐそこにあった。ザイルは一〇ピッチ使用、コンテは真中と最後の場所で使った。偵察通り技術的に困難な場所は無いが、のんびりと雪稜の登攀を満喫するには適当なところである。（宮本）

〈G2〉

大遠見（四・一五）―白岳沢（五・〇五）―取付下シュルンド（五・五〇）―G2左稜主尾根（一〇・二五）―GⅡの頭（一二・〇八）―大達見（一三・三五）

真暗いうちにテントを出る。この四月という時期に恐いのは何といっても白岳沢の雪崩である。西遠見よりしゃにむに下り、白岳沢のデブリの中を、目標のGⅡ左稜の取付へ急ぐ。ここから見ると中央稜のハングした大岩壁の横にルンゼが喰い込んでおり、それを登れば容易そうである。シュルンドを越えてアンザイレンし、急峻なルンゼ状の雪壁を登る。雪がしまっておらず、恐怖の雪壁であった。三ピッチ登り、灌木帯に逃げたが、不安定で急峻な雪壁はいつ果てるともなく続き、厚い雲におおわれた空は今にも崩れそうなので、先を急ぐ。六ピッチ目、小ルンゼのトラバースに移るが、この急なルンゼは腰までもぐって生きた心地がしなかった。八ピッチ登り、苦闘四時間で左稜の主尾根へ出た。軽い昼食をとる。やがてハイマツ帯へ入りそれを過ぎると全く雪をつけないガラ場となる。この大広場が全く雪をつけていないのは不思議だが、余程陽当りがよいのだろう。再びルンゼに入ってつめるとGⅡの頭に出た。寒さにふるえながらテントに戻ると、残っていた連中が、今日は陽が照らないのに焼けたなと抜かしやがった。雪が横なぐりに吹きつけて来て、やがて夜となった。（三井）

四月九日　雪

蛭川は腰の痛みの為アタックパーティに入れそうもないので、遠藤をつけて降ろす。宮本は遠見小屋まで往復。遠藤は下川氏宅に泊る。一方鹿島槍北壁で名古屋パーティの遭難があり、援助を依頼され、炊き出しを行なったが、夜に入り、大川沢より救援隊に救助されたことが伝わり、ホッとする。

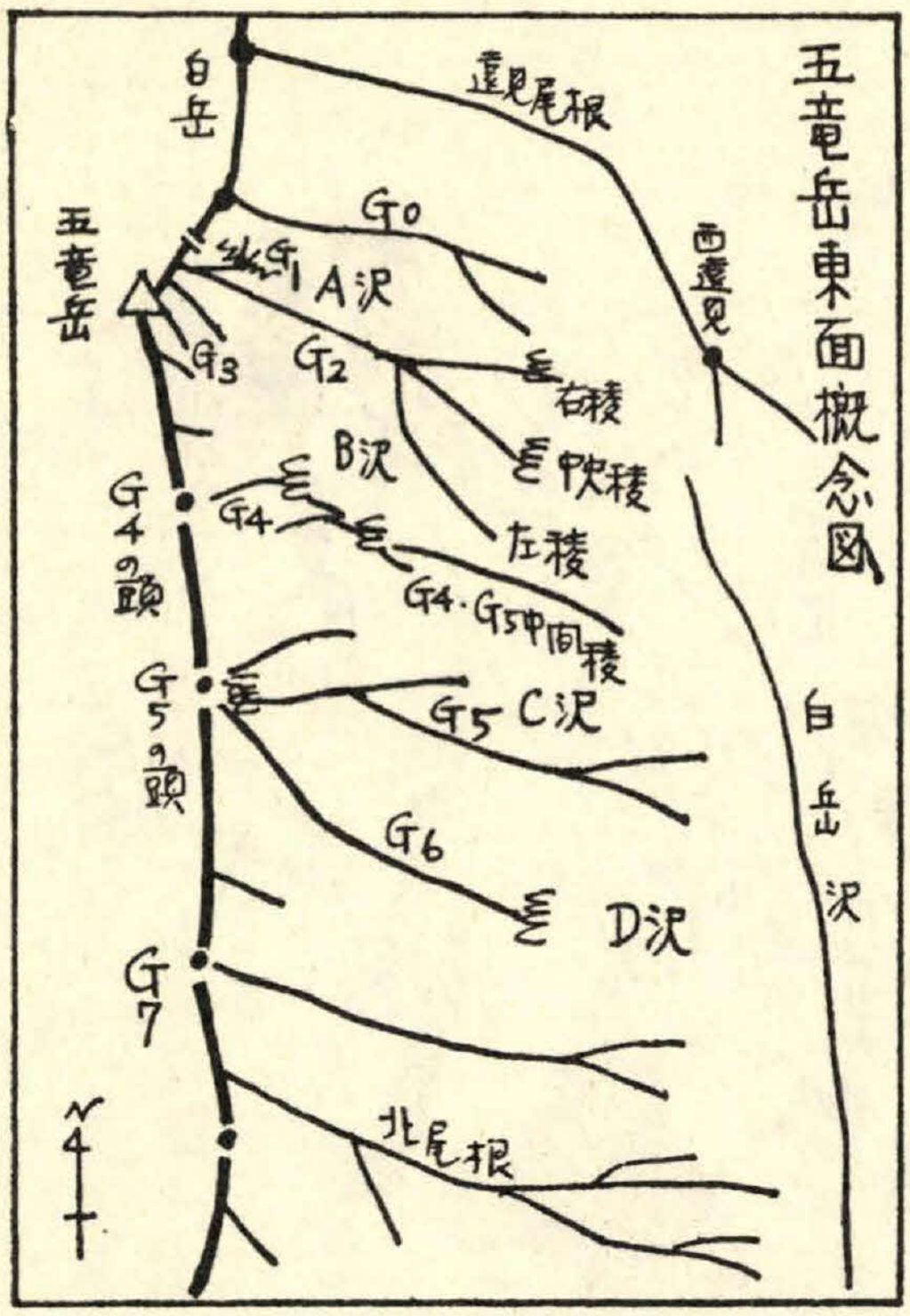
四月一〇日　晴

G1（宮本、臼井）　G3（三井、竹中）

〈G1　β岩峰〉

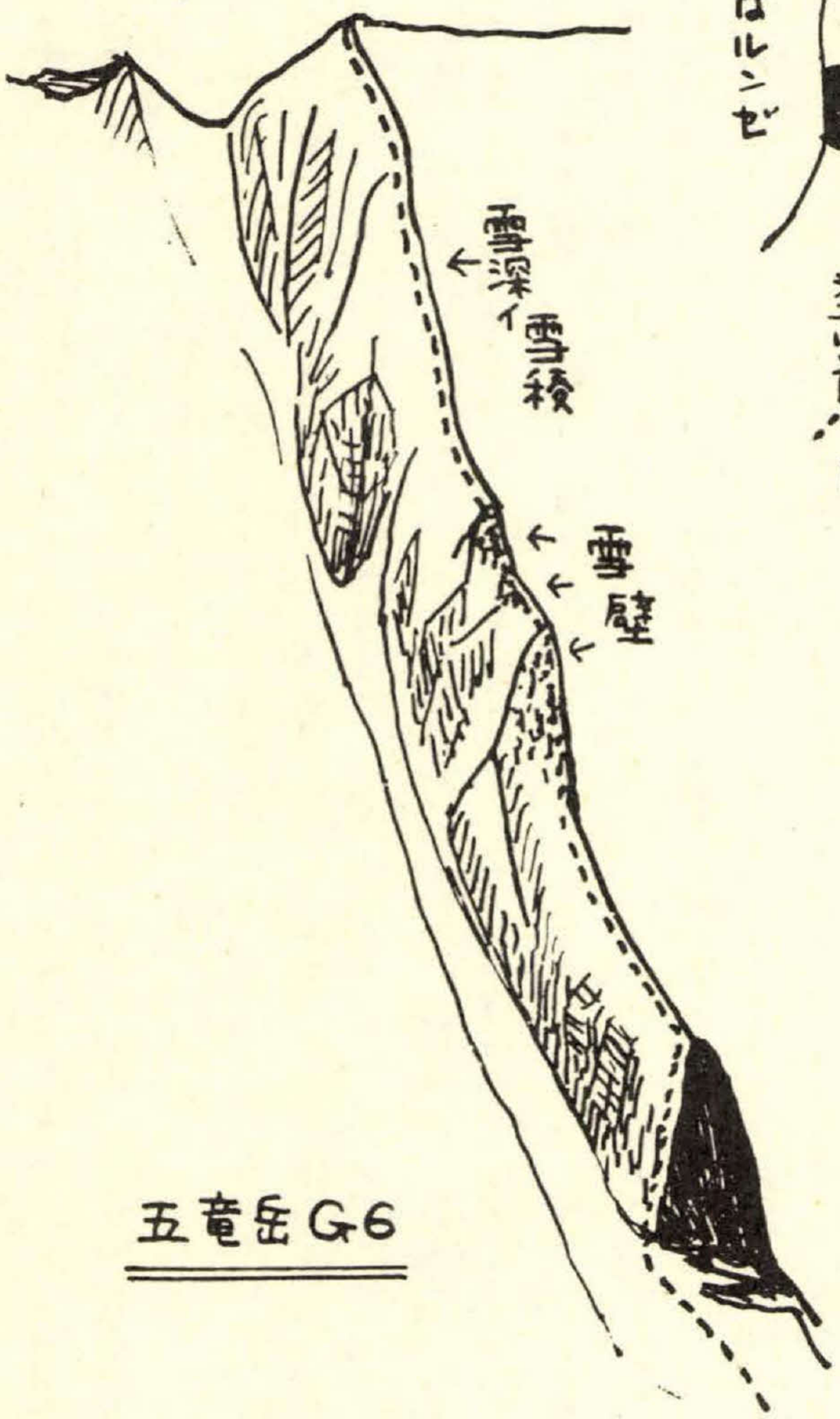
テント出発（六・三〇）―A沢コル（八・〇〇）―取付（九・〇〇）―下降開始（五・三〇）―ルンゼ（七・〇〇）―A沢コル（七・二〇）

G1は上から、α、β、γと名付けられた三つの岩峰よりなりいずれも岩壁は未登攀のようである。α岩峰は接近してみると、岩の積み重ねであり、A沢側の岩壁も登攀価値はないようだ。β岩峰はA沢に切れて、登る価値あり、あわ良くば初登頂になろう



ガレ場
G
II
左稜
潅木帯
急なルンゼ
浅くつづく谷状部
G II 中央稜
G II 右稜
G I
ミユルンゼ
中央稜末端壁
白岳沢
Aルンゼ

五竜岳G2


雪深イ
雪稜
雪壁

五竜岳G6

と期待して取付く事にした。γ岩峰は小さく、G1の末端部に過ぎない。臼井と二人、張り切って出たが、出発時間が遅かった為、A沢コル到着が八時、既に四月の太陽がA沢を照らしている。昨日は鹿島北壁パーティの雪崩遭難救助隊に参加したばかりなので、雪崩に対する恐怖感が大きく一瞬ためらう。とに角下降することにしてこわごわ行く。腰迄もぐり一歩毎に囲りの雪が動く。クラストした旧雪の上に新雪が積っているので、雪崩の最も起き易い状態である。今さら引き返すのも残念なので恐怖で胸をドキドキさせながら下り続け、β岩峰にあわてて取付く。すぐオーバーハングがあるので良いルートではないが、このまま沢を下るよりはと登攀開始する事にした。宮本トップで一〇㍍直上、ハーケン二本打ち、ハングを乗越そうとした時、左足のアイゼンが滑り墜落、次の瞬間五㍍下にぶら下っていた。一本目のハーケンが抜け、二本目で止ったのだ。「大丈夫ですか」と聞く臼井の声に励まされ、登攀意欲を取戻す。墜落でかえって度胸がつき落着く。ハングは越せそうにないので左へ一〇㍍程トラバースし、臼井を呼ぶ。ザイルが動かず苦労する。最初から現在ジッヘルしている下から取付けば極めて簡単にここ迄登れるのに、雪崩の恐怖であわてたものである。ルンゼを雪に埋まっている岩や這松の根を掘り出して直上し、右へ転じて樺の木でジッヘルする。臼井はトップの落す雪や小石をジッヘルの間中あびて苦情を云うが、直下に居るのでどうにもならない。β岩峰の岩はもろくハーケンを打ち込むと割れてしまい、必要な所に打つのが難しい。細紐を三本用意してきたので、木の根に結びカラビナを通して、ハーケン替りのビレイとした。三ピッチでテラスに達し昼とする。既に一四時になり、この先どうなっているかわからないので不安である。テラスを左へトラバースすると、完全な岩壁となり、右に凹角、左にルンゼが走っている。一〇㍍の凹角にチョックストンに頭をルンゼを選ぶ。岩を掘り出し慎重に登る中は手掛りがなく、左のルンゼを押えられた。周囲は完全な氷でホールドがない。ハーケンを打つリスも無くアブミも使い様がない。一時間程あれこれやってみるが、RCCの長いアイゼンのツァッケ一なれずどうしても乗越せない。臼井にこ迄登って来てもらい二人で試みるがだめ、埋込みボルト一本打てば楽に越せる。だが今回持参せず、やむなく下降する事に決めた。五時半下降開始、G0の頭で三井達のコールがする、遅いので心配して来たらしい。コールを返し、アップザイレンしている旨知らせる。βとγの中間ルンゼに着いて安心したのが一九時、既に真暗になっていた。A沢のコルで三井達に逢いテルモスのしるこを食った。

残念乍らβ岩峰の初登は出来なかったのだから、二人とあのチョックストンを越える事が出来なかったのが非常に残念だった。も終って後悔する気持はなかった。ただ

（宮本）

〈G3〉

大遠見（六・三〇）―五竜頂上（九・五）―縦走路（一一・四〇）―Aルンゼのコル（一三・三〇）―大遠見（一四・三〇）

G3は五竜頂上へ向ってキレット側から伸びている鋸状の三本の小岩尾根である。そのうち一番長くて難かしそうに見える稜に取付いた。しかし、この岩稜も傾斜が比較的緩く極めて容易であ

り、二ピッチで岩場は終り、コンテニュアスで縦走路に出た。Aルンゼで G1パーティにコールをかけるとまだ取付から三分の一くらい所で苦闘しているので、一まずテントに帰る。テントには遠藤が下から登ってきており、夕方遠藤と共に G1パーティをサポートに行く。夕闇せまる頃、彼等は登攀を中止し、アップザイレンで下ってAルンゼを登ってきた。

（三井）

四月一一日　曇

G6（宮本、遠藤）、サポート（三井、臼井、竹中）

〈G6〉

G6は五竜岳の左肩へ、白岳沢から突き上げている、五竜東面では最も長い尾根である。G5のように岩壁が稜線直下で行手を遮ることもなく、途中急な雪壁が二ケ所あるだけで、雪の状態が良ければ簡単にトレース出来る。

テント（四・四〇）―白岳沢（五・一五）―G6取付き（六・三〇）―登攀開始（八・二〇）―稜線（一八・〇〇）―五竜岳（九・一五）―テント（二三・四五）

遠藤は蛭川の下山を手伝いアタックのチャンスが少なかったし、僕は昨日GIのβ岩峰で敗退しているので四時間しか寝てないが、G6を登ろうと、朝飯も食わずにテントを出た。西遠見から支尾根を下っていると兎が飛び出て来た。白岳沢からG6の末端までかなりの高度があり、デブリを乗り越えて登っていく。朝日の輝きとともに、こぶし大の雪がころころ転がり落ちて気味悪し。前日の疲労が残り息切れがひどく弱ったが、なんとか末端を左側へ回り込み、斜面へ取りつく。アンザイレンし、ピッケルで雪と氷の傾面にカッティングしていく。二ピッチでG6の稜線へ出た。雪崩の心配から解放され朝食を食う。移動性高気圧の二日目だが、大きいから今日一杯は天気が良いだろう。よしやるかとラッセル開始。四月の雪は腐って全く手こづる。トンネルを掘って進むようなラッセルをしたり、ステップを作るのに、まず両手で周囲の雪をかき集め、膝で押し、足で固めてから、体重をかける。一歩毎にこんな有様なので、四〇㍍トップが進むのに三〇分はかかってしまう。這松のハングを苦労して乗越し、急なルンゼを慎重にカッティングして太い樺の木でジッヘル。遠藤はいとも簡単に階段を登って来る。次の二ピッチが急な雪壁となり、登攀興味湧く。充分踏み固めても体重をかけるとスタンスが崩れ、元の位置に落ちる事繁々。亀裂が途中で大きく横に走り、右へ回りつつ登る。東面の各尾根とも左は比較的緩傾斜で、右は壁となって切れている。従って右側の縁を登る時は高度感がある。雪壁を登り切った所でピッケルをはめ込み、その上に座って遠藤をジッヘルしながら、気楽に遠見のテントや、鹿島の北壁に見とれる。大部時間をかけて登って来た遠藤が真剣な顔をしている。スタンスが崩れ数メートル落ちたのでショックだったと語る。しかしナイロンザイルの伸びで、僕には何も感じられなかったので平気なものだった。その後三ピッチ登ってからコンテで稜線へ出た。二人で無事を祝し、六時なのでビバークしようかと相談したが、明日の天気は必ず悪いので無理しても今日中にテントへ帰る事にした。五竜岳へ登る途中から暗くなり、岩にアイゼンが当って火花が散っている。五竜の頭から黒部へ道を誤り往復一時間ロスした。白岳小屋への下りは蛭川がスリップしているので慎重に下った。テントまでの長かったこと、疲労困憊で十分歩いては雪の上にひっく

り返って休んだ。テント着二三時四五分。皆僕等がビバークしたものと考え寝ていた。朝から一九時間行動、全くくたばったが、G6を完登し得た事の満足で心地良かった。（宮本）

午後三時過ぎに臼井と竹中がG6パーティのサポートに行くも、まだ取付より三分の一くらいの所にいるといって、西遠見から戻ってきた。彼等がビバークするかどうか注視するも暗闇の中に消えた。天候が悪くなりそうなので心配していたが、彼等は二三時頃帰幕した。（三井）

四月一二日　雨　停滞

連日の行動で、さすがに皆、疲労はかくせない。

四月一三日　晴

GIγ稜　三井、臼井

〈GI・γ稜〉

大遠見（五・五〇）―GIγ取付（七・五〇）―GIの頭（一〇・三五）―大遠見（一一・四五）

宮本、臼井がGIβ稜の初登に失敗したので、容易に見えるγ稜に取付く。テントを出たのが少し遅れたので、γ稜を取付いた途端今下ってきたAルンゼの雪が静かに滑り落ちてきたのには全く肝を冷やした。γ稜は取付の雪壁を登ると極めて容易になり、以後はコンテ、ノーザイルで簡単に抜けた。（三井）

大遠見（一四・〇〇）―下川氏宅（一八・〇〇）

帰幕後、食糧不足とやるべきことはやったという満足感から徹収下山することとし、電光石火に荷物をまとめ、転げる様に下山して三時には我々を探して遠見小屋付近を双眼鏡で眺めていたという下川又寛さんをあきれさせた。（三井）

爺岳東面

一九六一年五月　大建二郎、三井博、高橋信成、後閑勉六、竹中彰

爺岳東面の概念は前述の〝合宿をめぐって〟に記載した通りである。縦走路さえ黒部側を捲いて通るこの一見目立たない山は、信州側におおらかな、雪をまとわなければあまり魅力的とは言えない尾根を何本も伸ばし、北から赤岩尾根、冷尾根、東尾根、白沢天狗尾根、南尾根と並んでいる。

ピークは三つあり、南峰、主峰、北峰と呼ばれるが、南峰（二六七〇㍍）が一番高く、次が主峰、北峰は小さなコブ程度でそのため遠くから見ると、双耳峰に見える。

尾根と尾根との間には広い沢が入り、その奥は壁となって、そこに幾本かの小さなリッジを派生させている。そのうち登攀価値のあるものは、西俣奥壁と小冷沢奥壁のリッヂである。白沢の奥壁はヤブとリッヂが短かいことのため、登攀の対象とはならないだろう。

【小冷沢奥壁】

冷尾根と東尾根にかこまれ、大谷原の百㍍ほど上流で大冷沢に合している小冷沢を溯ると、その奥に二本の大きなリッヂが稜線から派生しているのにぶつかる。右が北稜、左が主稜と呼ばれ、すでに記録がある（岳人一二二号。現代登山全集4）。**北稜**の初登は三十四年五月三日熊本の吉田氏等で、冷尾根一九七一㍍峰にベースキャンプを置き、取付後九時間の後完登したとある。**主稜**は同じく三四年の四月一日、熊本大学の橋本氏等がやはり冷尾根

から小冷沢へ下って登っている。東尾根あたりからながめると、北稜はほぼ真中ごろにある岩峰が、主稜は下部の岩壁がむずかしそうに見えるが、実際に登ってみると、主稜はほとんどルンゼたいに岩を避けて登ることが出来て容易であり、北稜も雪がしまっていれば、岩の切れ目を利用して登攀できるので困難という程ではない。ただ雪の付き方次第で様子ががらりと違ってくるであろうと思われ、我々が短時間で登攀出来たのも、堅く締った雪のおかげという他はない。おそらく厳冬期ならばラッセルにつぐラッセルで、相当のアルバイトであろう。

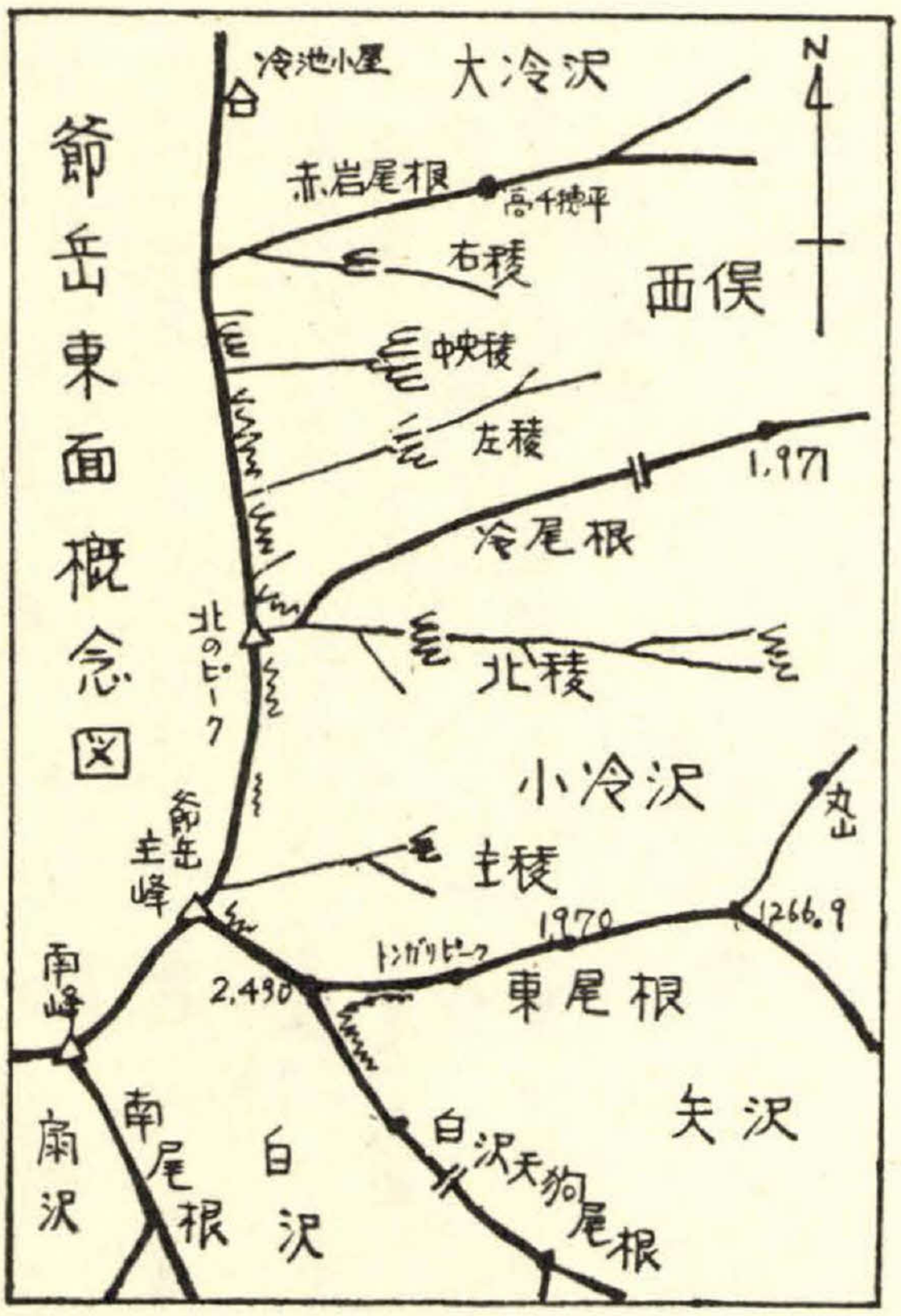
【西俣奥壁】

大冷沢西俣の奥壁は、その手近さにもかかわらず、現在までほとんど記録がない。わずかに岳人一二六号で紫岳会の阿部和行氏が、爺岳東北壁と呼ばれて記録を出されているだけである。無雪期にはヤブがびっしりと生え、スケールの点でも鹿島槍に一歩もニ歩もひけをとることが、この地域を忘れられた存在にさせたのであろう。しかし赤岩尾根からの取付が容易であり、途中必ず岩壁をもち、主稜線に吸い込まれるように消えて行く何本かのリッジは、結構登攀意欲を満たしてくれる。

西俣奥壁には三本の顕著なリッジがある。我々は右から右稜、中央稜、左稜と呼んでいる。

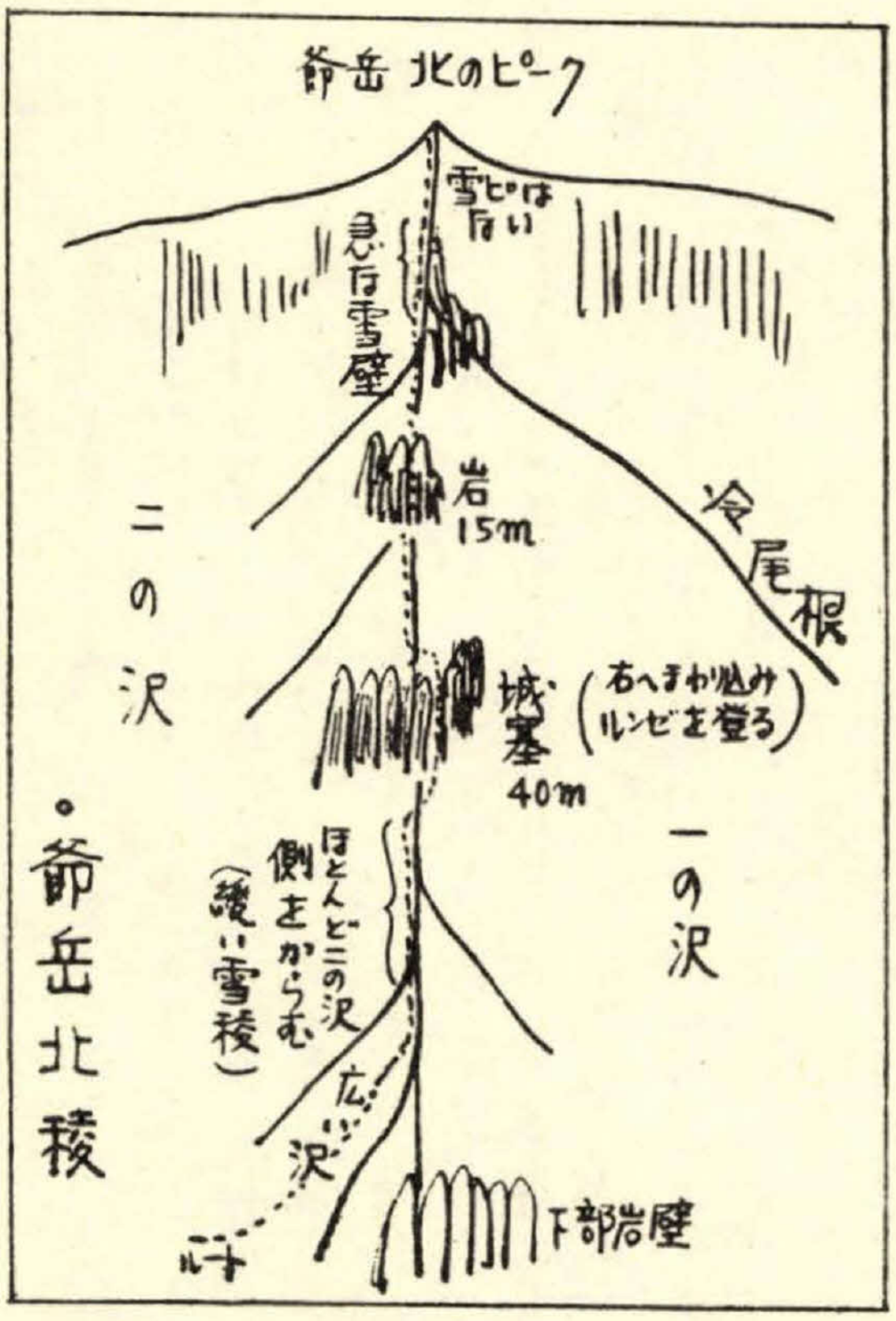
≪右稜≫は赤岩尾根上部から派生してほぼ中央に三〇〇㍍ほどの岩壁をもち、しばらくなだらかに下って、再び急に落ち込んで消えている。三本のリッヂの中では一番容易であるが、三ツ道具は持って行かねばならない。

≪中央稜≫は下部に三角状岩壁を大きく張出しているのですぐわかる。他の二本のリッヂよりも短かく、取付は一〇〇㍍ほどさらに沢を遡らねばならない。この末端の岩壁は長さ約一〇〇㍍強、ルンゼが左右に走り、相当凹凸のある壁である。壁が終ると大きな岩が突き出ている。壁のあとは未登で不明だが、相当やせたナイフリッヂとなっており、最後が稜線の下に消えているのでここって行かねばならない。



四月二九日　晴
大町（五・三〇～七・〇五）―狩野さん宅（八・三〇）―東尾根稜線（一一・〇〇）―一七六七㍍地点に幕営（一五・〇〇）
取付は狩野さん宅の裏。急登五ピッチで尾根に出る。ワッパをつけても結構ラッセルがありバテた。
四月三〇日　晴
テント（七・三〇）―トンガリピーク（一〇・〇〇）―二四三〇㍍地点（一二・〇〇）
東尾根はここの幕営地点からやや下って再び広く緩く登り、トンガリピークに達して一気に登りとなる。シラビソ平と呼ばれるあたりはスキーが出来そうで気持の良い所である。トンガリピークの登りは、五月には所々岩が出ていて白沢寄りにからんで登る所もある。トンガリピークは下から見るとピークのようだが、そこから下るわけではなく、ゆるいヤセ尾根が続いて白沢天狗尾根との分岐点二四三〇㍍地点の直下へ達する。この登りが又、急で、ヒザまでのラッセルに悩まされた。
ここ二四三〇㍍地点は短いハイ松にかこまれた広々とした所で実に気持のよい所である。右には爺の主稜、北稜が、左には扇沢から蓮華、さらには槍穂高が見える。今登って来た東尾根も眼下に見渡せ、白沢が名前の通り白いハダを見せている。午後から、大、後閑、竹中は爺岳往復。三井、高橋は主稜へのアプローチを偵察する。
五月一日　曇時々小雨　停滞
五月二日　曇時々晴のち小雨

〈北稜〉　大、高橋
厳密に言えば、稜というよりも尾根に近い。あの長大な冷尾根は、この北稜のドテッ腹に吸い込まれるように消えているのだ。初登者は四月に九時間を要しているので、我々もそれ相応の覚悟で出かけた。朝三時半起床、くもり。四時半ライトをつけて出発。東尾根を二〇〇㍍ほど下り、小冷沢へゆるく伸びている支尾根を下り、途中から左の沢に入り、簡単にクラストした三ノ沢に立つ。ここで主稜隊と別れてさらに沢を三〇分ほど下ると、はっきりこれとわかる広いルンゼが北稜にはい上っている。この入口付近で神戸岳窓会の赤いペナントをひろう。東尾根から流れて来たものであろうか。結構人臭いなと高橋と話しながらルンゼを



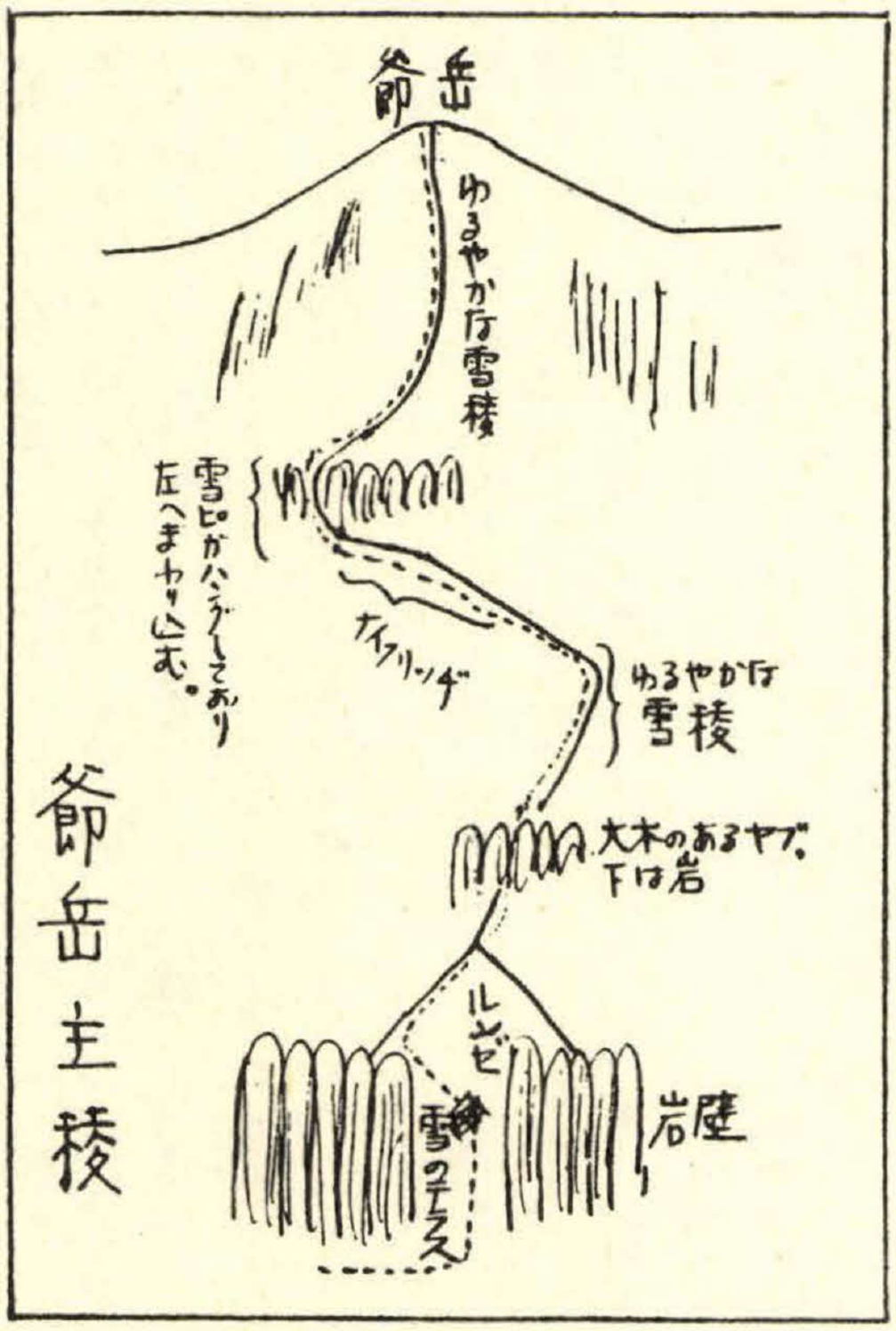
詰める。クラストしているためどんどん高度をかせぐ。一五分程登って北稜上に出る。クレバスが所々口をあけた広い尾根が伸び、その先に城砦のように黒々と立ちはだかる岩峰群がある。しばらくノーザイルで登る。大体小冷沢側を捲く。二ピッチで城砦の下へ出る。この直登はハイ松と岩のミックスしたハング状の所で、我々はずっと右へ回り込んで、上へ伸びているルンゼを使う。下の傾斜がないので高度感は全然出ない。ハイ松にぶら下って登ると雪ピが出口にかぶさっている。ピッケルを振って叩き落し、やっと登り切った。この上で食事。ここからは岩の混じった雪稜で傾斜は又落ちる。主稜パーティは我々よりかなり高度が低い。アンザイレンし、高橋にジッヘルさせて、岩場でのアイゼンはこう使うんだと手本を見せて登ったところがスリップダウン。一回転して高橋のところへ逆もどり。ニヤニヤッと笑って次には無事登り切り、二ピッチで城砦の上へ出てザイルを解く。ここは冷尾根が消える地点で、北のピークまでえらく急な雪壁が続いている。下は小冷沢へスッパリ切れ落ち、何となく雪崩れるんじゃないかという気がして恐怖感に打たれる。急いで登ると、そこが北のピーク、主稜隊と同時に抜けられた。取付いてから四時間、一〇時半にはテントへ戻った。北稜は特に困難な所はないが、積雪の多い時頃にはラッセルが大変であり、又城砦の下部のルンゼも出口がかぶって使えないだろうからルートを探すのに相当時間がかかるのではなかろうか。

テント（四・三〇）―ルンゼ取付（五・一五）―主稜線（五・四五～五・五〇）―城砦下（七・〇〇～七・一〇）冷尾根とのジャンクション（八・五〇）―北峰（九・三〇）―テント（一〇・三〇）

〈主稜〉　三井、後閑、竹中

三の沢まで北稜パーティと一緒、別れてから主稜の末端を二つに分けている大きなルンゼをつめる。このルンゼは上で二つに分れるが、左側に入り、すぐ尾根に取付く。ちょうど雪が盛上ってテラスになったところがあったのでそこでアンザイレン、三井・竹中・後閑のオーダーで登る。急な雪壁一ピッチで尾根に出た。しばらくコンテで行くと雪を全くつけないヤブの中に突入。このヤブ登りは急な木の上をアイゼンをはいて伝って行かねばならないのであった。その後、雪田となり、ザイルを再び出して登るも、すぐ又ヤブの中に突入、猿の如き姿で木を登って、やっとルンゼの右側を走っていた尾根とのジャンクシ

（大）



（大）

ョンに出た。朝日に輝く爺の各尾根や壁をながめながら、ゆるいナイフリッヂをコンテニュアスで行く気分は素晴しい。このナイフリッヂは大きな雪ピの下に消え、これはこれはと思っていると、トップの後閉が左側にまわり込んで何なく上へ出てしまった。あとは全くの稜線慢歩となり、爺岳頂上直下の雪ピをピッケルで切って登攀を終えた。

この日は午後徹収し、赤岩尾根の高千穂平へベースを移した。天候は悪化してみぞれとなった。

（三井）

五月三日　曇のち雨

〈西俣奥壁中央稜〉　大井

前日、かなりのアルバイトだったため、ゆっくりとテントを出る。昨冬左稜を登ったときの経験から、中央稜は八時間前後で抜けられようと判断する。右稜パーティとともに八時一〇分、テントを出る。まだ知られざる岩稜を登るということが、何か非常に湧き上るファイトを感じさせ、早く行きたいという気持にかられる。二〇分登って支尾根を西俣に下る。雪はしまってほとんどもぐらない。沢をトラバースしてまず右稜隊が取り付き、さらにも一本、沢をトラバースして中央稜末端の三角状岩壁の下へ着く。赤岩尾根や左稜から見えた時はすっきりとした岩場のように見えたが、近づくと案外凹凸があり、奥穂高岳の涸沢側の正面壁のようにルンゼありヤブありである。右側の雪稜からも登れそうだが、やはりダイレクトに行こうと三角形底辺のまん中でアンザイレンする。時に九時。一五分休み、三井トップで登攀開始。アイゼンはつけなかった。

右上に走るバンドを五㍍ほど登り、凹角に入り、ボロボロの岩をおさえるように一〇㍍登る。オーバーハング気味の岩にハーケンを打ち込みながら試みること一時間。逆層でもろい岩を越えられず、三井のいる所は外傾したテラス状になっているので、さらに一本ハーケンを打って、そこでジッヘルをとる。大は一本目のハーケンを抜きに一〇㍍登り、小さなハングにぶつかる。岩がもろく一〇㌢位のスタンスに乗ってリスを求めるが岩がもろくて全然ない。足にミシンが来る。追い立てられるように踏切ろうとした時、左足のスタンスが落ちた。ハッとすると共に、何、左寄りに直登する。二止るさ、というような感じがする。目の前を岩が過ぎたと思ったまま五〇㍍ほど雪の上をすべる。夢中でら激しいショック、その後に捜す。いない、変だなあ、と思った。そしてやっぱり助かったのかなという感じがした。

三井は確保したが、ショックが激しく、又ハーケンが抜けて引きづられる。三井の方が下の岩場の傾斜がゆるかったため、傷は重かった。頭部負傷二カ月、出血多量、雪で冷しながら右稜を半分ほど登っていた高橋等にコールをかけてもらった。

〔救援〕西俣に五人が集まった。一人の重傷者と一人の軽傷者と三人の元気な者。すぐ後閉を鹿島までおろして東京の篠原（OB）さんのところへ連絡させる。残った三人ではどうしようもないので、折よく赤岩尾根を登るパーティがあったのでコールをかけて、近くの木を伐る。朝霧山岳会の方一行一〇名で、早速駆け付け、三井をシュラーフの中に入れ、傷の手当をすってタンカを作り、三井をシュラーフの中に入れ、傷の手当をする。サラサラと流れ出すアワに神経を消耗しながら降り始めた雨

の中を西俣の出合まで下った。そこには栂池から縦走して来た臼井のパーティがいて、全員で大谷原まで運ぶ。後閑の連絡によって大町から医者と看護婦が西俣の出合まで来てくれる。大谷原からは大、高橋も一緒にタクシーに乗り、夜の七時に大町病院へ着いた。

事故はおそらく一〇時半頃起ったと思う。それから八時間近く、ほとんど休まずに我々のために働いてくれた朝霧山岳会の方々には、本当に頭の下がる思いだった。（大）

栂池―鹿島槍ケ岳

一九六一年五月　臼井　弘、多田伸治、名和泰三、長沢道彦
村上泰介

四月二九日　信濃森上よりバスで切久保着。二時栂池につき設営。

四月三〇日　乗鞍岳、小蓮華岳を経て白馬岳頂上近くにテントをはる。

五月一日　国境稜線を縦走して唐松小屋わきに泊る。

五月二日　五竜をこえてキレット小屋まで。

五月三日　赤岩尾根を下降中西俣奥壁取りつき点に人影が見え「もしや我々の遭難では」と思ってコールするも判然とせず、そのまま西俣出合まで下る。そこで事故を知り設営。四人で西俣つめんと五分も歩いた時下ってくるタンカに会う。大谷原まで三井を運んでその日は西俣出合に泊る。寒くて一睡もできなかった。

五月四日　鹿島まで出ると関部長、ＯＢに会い、指示によって全員帰京した。（村上）

剣沢―唐松岳（夏合宿）

一九六一年七月　臼井　弘、多田伸治、高橋信成、蛭川降夫
竹中　彰、本間　浩

七月二六日　ガス　剣沢―五色ケ原　縦走の初日とて重い荷物に足も心も重くなる。ミルクパン一箱の四年生がむやみに飛ばす。おまけに雨が時々降ってきて、定着になれた体にはきつい一日であった。

七月二七日　快晴　五色ケ原―平の渡―針の木峠　このコースでは南沢出合までが一日行程であろう。針の木峠まで足をのばしたのがかなりの強行軍となってしまい。二年の一人がケイレン、吐き気を伴うひどいバテの状態を示す破目になった。しかし彼のがんばりはすごいもので、とうとう最後まで「大丈夫です」と押し通してしまった。このくさい精神主義といって馬鹿にしてはいけない。

七月二八日　晴　休養とて一日中のんびりとする。

七月二九日　晴　針の木峠―新越乗越―種池

全員が元気を回復して、一つのピークをワンピッチの割で飛ばす。種池の少し手前、稜線からはずれたお花畑の中に設営した。雪渓も残っていて気分のよい所である。

七月三〇日　晴

種池―冷池―鹿島槍吊尾根

パーティの調子は良いのだが、なにしろひどい暑さでやりきれなかった。

七月三一日

吊尾根―キレット―唐松岳―細野―四谷

台風情報に驚いて、八方尾根から下山してしまった。このパーティだけラジオがなく、人伝えに他校の人から聞いた話にごまかされてしまったのだが、反省をさせられることである。それにしてもよく歩いた。夏山の下山日にこんな苦しい思いをすることも、めったにあるまい。ちゃんとケーブルのある所を、草いきれにむせかえりながら、やけくそになって下ったものである。おまけに「この辺マムシに注意」の立て札。「マムシに喰われりゃ運んでくれるだろう」などと坐りこもうとする者まで現われる仕末であった。大町で下界の食べものを腹につめた時は、なんともいいようのないうれしさであった。

（蛭川）

爺岳から蓮華岳

一九六一年一一月　大　建二郎、朝木　大統

一一月一〇日　晴

種池（六・二五）―新越乗越（八・二五）―針木岳（一四・三〇）―針木峠（一五・二〇）

一一月一四日　快晴

針木峠（八・三〇）―蓮華岳（一〇・五〇）―支尾根分岐点（一一・〇〇）―ビヴァーク地（一六・〇〇）

うって変わった快晴に北アの山並が白銀に輝く。蓮華の東尾根を下ってみるのが今回の偵察の眼目である。上部は踏跡あり。しかし次第に不明瞭になって支尾根に入ると消えてしまった。

ヤブをこいでいくと尾根は岩壁になって切れ落ちているので、左の沢に入る。地図に丸石沢とある奴らしい。ヤブをどんどん下っていく。と、滝だ。二〇㍍位。悪そうだ。登りかえすのがイヤでそこでビヴァークと決め込む。

一一月一五日　快晴

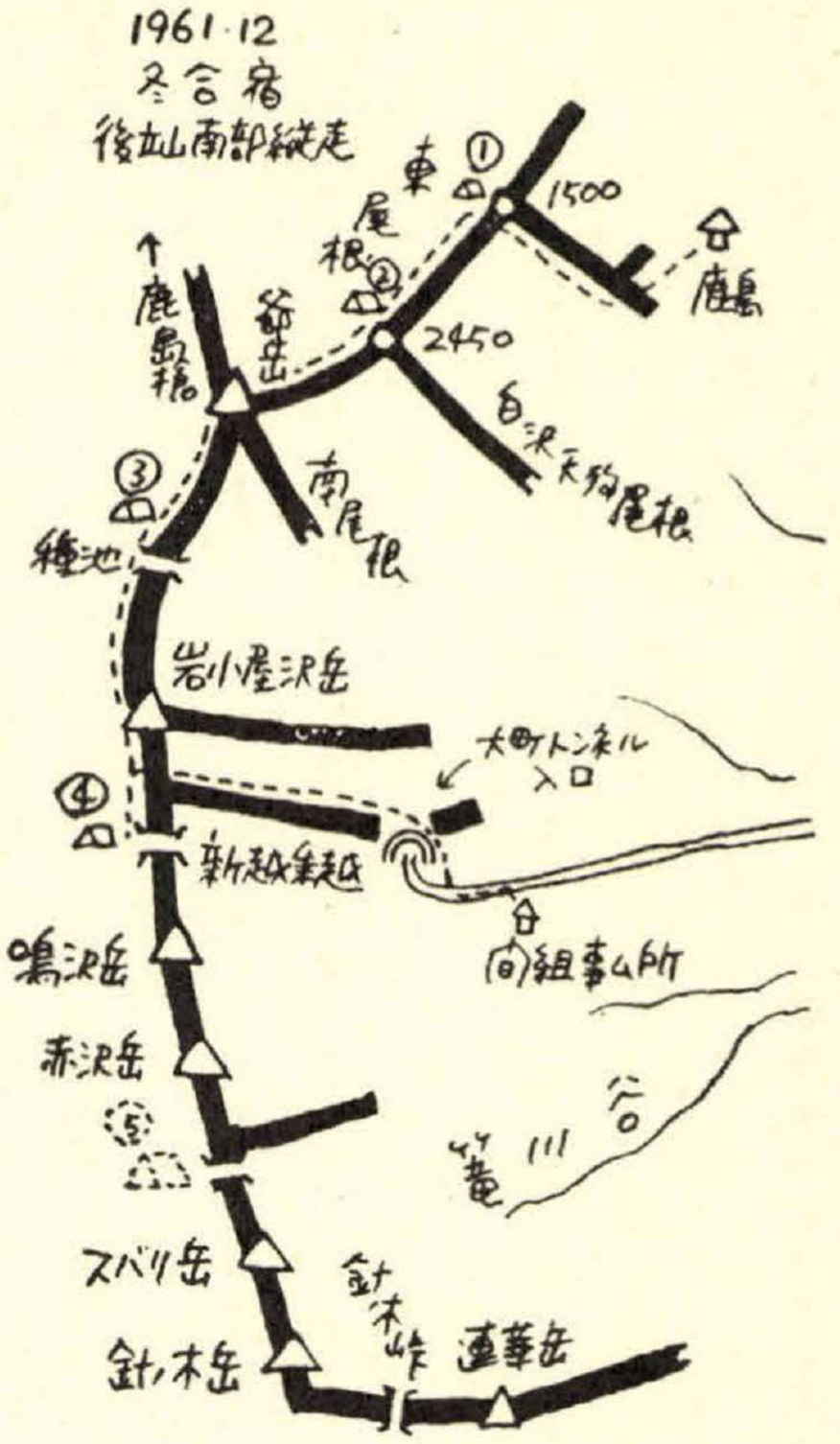
ビヴァーク地（八・三〇）―扇沢（一三・三五）―葛温泉

五〇㍍程登り返してから右岸をまく。何とか、滝の下へ出られて一安心。あとはゆっくりと、景色をながめながら葛へ向った。

（朝木）

爺岳東尾根―針ノ木岳（冬合宿）

一九六一年一二月　大　建二郎（リーダー）、宮本英治、遠藤昌士、臼井　弘、多田伸治、高橋信成、蛭川隆夫、竹中　彰、村上泰介、名和泰三、倉知　敬



一二月一一日　快晴

大町（六・〇八～七・〇五）―狩野氏宅（七・五〇～九・一五）―取付（九・二〇）―東尾根稜線（一一・一五～一一・四五）―デポ地点（一三・一五～一四・〇〇）―狩野氏宅（一五・〇〇）

真暗な大町の駅に立つと、又やって来たかという感が駅前の寒々としたロータリーやバスの待合室から感じられる。次第に明るくなり、鹿島槍や爺が真白な姿を見せる。平地の雪は去年よりや多い。バスを降りて早速狩野さんのお宅へお邪魔する。ここがベースになると思うと気が楽である。隊を先発と後発との二つに分ける。宮本以下の先発隊は荷上げしてあった米と石油を持って八時半に出発。大以下のボッカ隊は約一時間後に後を追う。

取付は狩野さんの家の裏を一〇〇㍍ほど登った沢の左岸。今冬の東尾根は我々がトップであった。胸をつく急坂を木につかまりながら不明瞭な踏跡を三ピッチ登ると主尾根に出る。ここから見た東尾根は、トンガリピークや二四三〇㍍地点が高く長く続いて仲々立派だ。ゆるやかな尾根を三ピッチ登ってデポ。宮本パーティは丸山から来る尾根とのジャンクションにC1をおいた。

一二月一二日　快晴

鹿島狩野氏宅（七・三〇）―C1（一三・一五）

C1の宮本、倉知、臼井はC2予定地の二四三〇㍍地点まで偵察し、倉知と臼井は爺岳頂上往復、高橋、竹中はボッカ地点とC1を三往復して荷物をC1に上げる。村上はカゼをひいて寝込む。大パーティはC1に入る。食糧を軽量化し、テントを二張りに切りつめたので一日早くC1に集結できた。

一二月一三日　曇のちみぞれ

C1（七・〇五）―トンガリピーク（九・一五～九・二五）―C2（一〇・三〇～一一・二〇）―C1（一二・四〇）

宮本のパーティ五名C2入り、大のパーティ六名C2ボッカ、村上停滞。さしもの高圧帯も東へ去り天気は下り坂、C2を二四三〇㍍の白沢天狗尾根とのジャンクションから一〇〇㍍下に設営。昨日トンガリピークの登りに二カ所宮本パーティがフィクスザイルを張ってきたが、特に困難な所でもなかった。トンガリピークは下から見るとピークのように見えるが、尖っているわけではなく、上は平ですぐまた登りになっている。村上のカゼがひどいので明日下山させることにする。

一二月一四日　晴のち風雪

C1（八・一五）―トンガリピーク（一一・一〇）―C2（一二・〇五）―C2停滞

C1を撤収して全員C2へ集結。荷物の一部はC1地点にデポしておく。倉知、村上は下山。C1から見るとC2付近はガスで見えなかったが、案の定、朝から吹雪いており、C1の連中がぞろぞろ行くと驚いて出て来て申し訳なさそうに幕営を手つだう。

一二月一五　風雪　停滞

一二月一六日　晴

C2（八・一五）―爺岳（一一・二〇）―種池小屋（一二・〇五―一三・〇〇）―爺岳（一三・五〇）―C2（一四・五〇）

宮本パーティはC1へ逆ボッカ。爺岳までは深い所でモモまでのラッセル、剣岳が良く見えるのに針ノ木岳から赤沢岳あたりまではガスっている。アイゼンワッパで種池小屋へ。二階の窓から入る。稜線の雪は去年より少な目で、小屋の近くでもあまりもぐらない。

一二月一七日　風雪

C2（七・四五）―爺岳（一〇・三〇）―C3（一一・三〇）

全員C3へ入る。朝方C2では雪がちらついていたが風はないので行動にする。上に出ると風は強そうだが、ラッセルのあるうちにと考えたのだが、甘い考えで、二四三〇㍍から上は風でほとんどラッセルの跡が消えていた。宮本パーティは三〇分ほど遅れて出発。地吹雪で視界利かず、ラッセルは膝までである。東側とはこうも違うものかと認識を新たにする。爺岳頂上からはカンカンを頼りに下る。風のある間は一〇〇㍍先も見えないので腰を落して過ぎ去るのを待つ。止むと目をこらして昨日のラッセルの跡とおぼしきものを探して進む。少しでも遅れるとすぐ前の人の姿も踏跡も見えなくなる。ポツンと小屋が見えた時はホッとした。

一二月一八日　風雪　停滞

一二月一九日　曇時々晴のち風雪

C3（七・一五）―岩小屋沢岳（九・四五）―C4（一〇・三〇～一一・〇〇）―C3（一三・二〇）

宮本パーティ新越乗越にC4建設、大のパーティ4名C4へボッカ。雪煙をバックに遠藤カメラマンの注文に応じながらC4へ。のんびり歩いていたら雪庇にバリッと音を立ててひびが入り、肝を冷やす。

一二月二〇日　風雪　停滞

一二月二一日　風雪　停滞

一二月二二日　風雪　停滞

一二月二三日　風雪　停滞

天気図を見ると、揚子江下流に出来た高気圧が東へ動き始めた。明日は動けるだろう。

一二月二四日　曇のち風雪

C3（七・一〇）―岩小屋沢岳（一〇・四五）―C4（一一・二〇）

C4へ全員集結。C4からは宮本、臼井が下降ルートの偵察に向う。残りは停滞。期待の移動高はあまりにも南に下り、前線が日本海を南下しているが、風がいくらかおさまったのでC4へ向う。この前の時とはうって変って腰までのラッセル。剣方面には黒い雲が押し寄せている。岩小屋沢岳への登りでは、バケツを掘

っても壁のようになってしまうので閉口する。宮本と臼井が来てくれたのでホッとする。彼等の話では、立てたストックが雪にうまり、ワッパやアイゼンもそれに通しておいたので出てこないと言う。C4に着いて全員で掘ってみたがわからなかった。

一二月二五日　風雪　停滞

一二月二六日　地吹雪のち曇

C4（八・四五）―大町トンネル（一三・三〇）―大出―葛温泉

冬型の気圧配置はあと二～三日は続きそうである。アイゼンやワッパの無い者が出たことも痛い。食糧もほとんど尽きた。すでに下山予定日に達している。下山と決める。新越乗越から一〇〇㍍ほど戻った所、岩小屋沢岳から二つ目のピークからゆるやかな尾根が籠川谷へ伸びている。宮本の偵察では一カ所フィクスを張れば大丈夫だろうという。バリバリになったテントを背負って一歩稜線を下ると、そこはもう風のない天国だった。下り切った所は大町トンネルのすぐそばであった。相変らず見えない山々に別れを告げて大出へ下った。

（大）

栂池より唐松岳（春合宿）

一九六二年三月

積雪期合宿の場を後立山連峰に求めてきたここ数年の例にならって、この年の春山合宿もリーダー会に於ける討論の末、後立山連峰のポピュラー・コース、栂池―白馬岳―唐松岳を極地法で行う事になった。合宿の目標として、唐松岳往復及び白馬、杓子岳東面のヴァリエーションが考えられていたが、合宿前半の悪天候及び計画の不手際の為、前者のみに留まった。

臼井　弘（リーダー）、多田伸二、高橋信成、蛭川隆夫、名和泰三、長沢道彦、竹中　彰、村上泰介、小島和人、半場三雄、三森茂充、倉知　敬

三月三日　先発隊多田、半場入山。

三月四日　快晴

信濃森上（七・〇〇）―郷津氏宅（一〇・〇〇）―落倉発電所B・C建設（一一・四〇）―郷津氏宅（三・二〇）―B・C（四・四五）

発電所迄の良く踏み固められた道を二往復半ボッカしてしごかれる。

三月五日　快晴

B・C（一一・四五）―切久保（一二・一五～一・〇〇）―B・C（一・五〇）

切久保で米四斗五升調達しB・Cへボッカ。春の陽を浴びてトカゲをする。

本隊（臼井、高橋、倉知、竹中、長沢、小島）OBの見送りを受けて新宿発。

三月六日　曇一時雨

郷津氏宅（七・三〇～九・〇〇）―B・C（一〇・一五～一一・〇〇）―郷津氏宅（一一・三〇）―B・C（一・三五）

本隊が森上に到着し、以後先発隊も合流してB・C迄一往復半ボッカする。帰幕後スキー練習を行い、今後に備える。

三月七日　曇のち雪

B・C（七・三五）―御殿場小屋（一〇・五〇）―C1（一二・五〇）―B・C（二・三五）

全員で成城小屋前にC1建設に向う。トレースはしっかりしていたが荷は重くピッチは上らなかった。それでも予定通りC1を建設し五人入り、三人B・Cに降りる。蛭川が入山しB・Cに入る。

三月八日　快晴

ベースキャンプの四人は第一キャンプまでボッカに行って帰る。第一キャンプではスキーの練習に一日を費す。

三月九日　曇のち晴

ベースの四人は成城小舎前のC1に入り、C1の五人は白馬大池の第二キャンプまでボッカし、荷物をデポして帰る。

三月一〇日　晴のち吹雪

全員で第二キャンプまでボッカに行く。乗鞍岳の手前にデポして下る。

三月一一日　晴のち雪

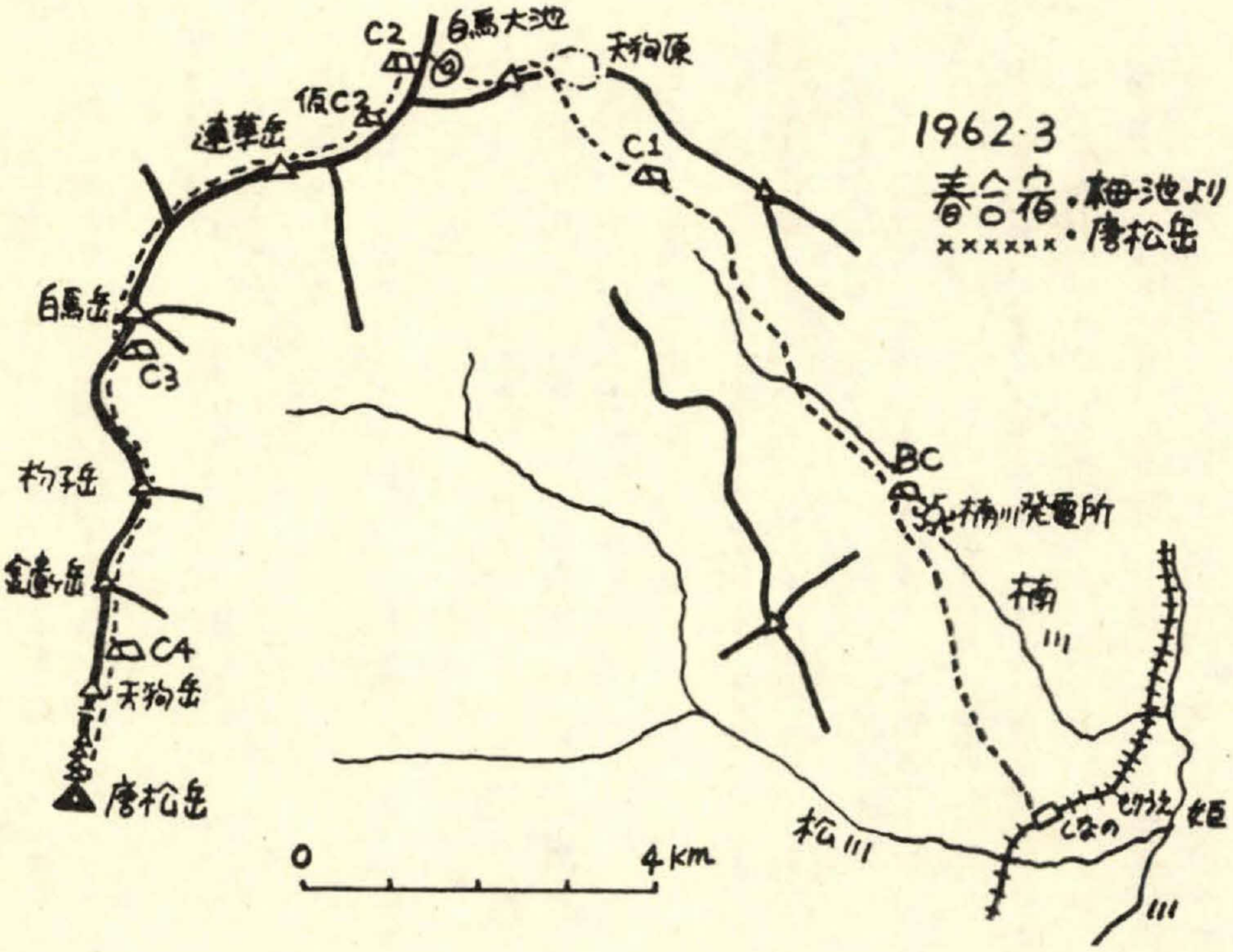
昨日は重荷で行動がはかどらなかったので今日は荷を軽くし、一気に小蓮華岳の仮C2まで運び上げ、そこにナイロンテントを張って五人が入り、あとの四人はC1へ戻る。

三月一二日　風雪、停滞

三月一三日　風雪、停滞

三月一四日　晴

二日の沈澱に気をくさらせていたので勇躍出発、仮C2のうち二人は白馬頂上の第三キャンプ予定地まで偵察、あと三人はC1へ逆ボッカ。C1の四人は撤収して大池のC2に入った。



三月一五日　風雪　停滞
三月一六日　風雪　停滞
三月一七日　風雪
　C2では除雪不能でテントが埋没し、かろうじて雪洞を掘って難をのがれる。仮C2から2人がC2へ連絡に降りて来た。
三月一八日　晴のち雪
　久々に朝から好天。C2にいた者全員が仮C2に入る。これで全員仮C2に集結したわけである。
三月一九日　晴のち雪
　凍傷の悪化した半場をおろす。入れかわりに後発隊四人が一気にC2に入る。仮C2からは3人がC2まで逆ボッカした。
三月二〇日　曇のち雪
　仮C2から白馬岳へボッカ。天候が悪化したため途中でデポして帰る。C2のうち三人がボッカに加わり、二人はC1に戻って、昨日来る際デポしたものをとりに行く。
三月二一日　風雪
　C2、仮C2ともに沈澱。
三月二二日　快晴
　C2（七・五〇～八・五〇）―デポ地（一〇・三〇）―C3（一一・四五）―C2（二・一五）。
　快晴に恵まれ、仮C2を撤収してC3建設に向う。一昨日デポした荷物を回収し、白馬頂上ホテル横にC3建設。ボッカ中見られる長い雪稜と頂上直下にかなり急傾斜の雪壁を有する白馬岳主稜に登攀意欲をそそられる。倉知、多田、竹中、高橋C3入り。
三月二三日　快晴
　C2（七・三〇）―C3（一一・〇〇）―C2からは、相も変わらぬ強風に悩まされつつサブザックでC3に連絡に向う。
　C3隊は杓子、白馬鑓と縦走路を辿り天狗ノ頭（一〇・四三）―唐松頂上（一一・三〇～一二・〇〇）―C4（三・二〇）。
　絶好のアタック日和に勇躍C4を後にする。天狗の大下りで、昨夜の新雪不安定の為、一人が三〇米程流されたが無事止ってホッとした。Ⅰ・Ⅱ峰のコルまでシャニムニとばす。さて、と見上げるこのコース最大の山場Ⅱ峰は立派である。ここでアンザイレンして、雪壁をコンテ1ピッチ。2ピッチ目はスタカットで夏道の左のチムニーに入る。日陰になる為氷化していて案外悪い。トラバースでA・B峰のコル。B峰の登りは15米程の垂直のリッヂで完全な岩登りを強いられる。残置ハーケンを利用して登り切り、ナイフ・リッヂを1ピッチ歩いてC峰基部。C峰はコンテ2ピッ

チ、スタカット2ピッチ、コンテ1ピッチでルンゼの登攀終了。あとは容易な斜面をラッセルにしごかれて、Ⅱ峰の頭に着く。ここからⅢ峰を経て唐松迄は稜線慢歩という所であるが、帰途を考えてドンドンとばす。今日の予定の半分は唐松岳であるという事で景色ナンゾは夢の中という所である。唐松の頂上は八方尾根からアイゼンもはかない連中が登ってきて非常な盛況である。五竜岳がすぐ近くに見え、唐松がアタックの目的といわれても余りピンと来ない。然し兎に角ここまで来たという事で、ヨーカン等を出して休む。帰りの長いのを考えるとこのまま八方尾根を下りたい誘惑に駆られるが、しぶしぶ重い腰を上げる。

Ⅱ峰のC峰の頭迄、無中で急ぐ。正午を過ぎているので、そこここの斜面、ルンゼから南股に雪崩が落ち、コースの雪も腐ってきて気味が悪い。C峰の下りからアンザイレンし、スタカット3ピッチで慎重に下る。B峰をアップザイレンで下降し、A峰は夏道の鎖を利用してⅠ・Ⅱ峰のコルに着く。夢中で降りている間に天候が悪化して、ガスが濃くなり、雪も降り始めた。天狗の大上りでしごかれてガスの中にやっとテントを見出す。これでモタついていた今合宿も一応恰好がつき、ホッとする。（竹中）

三月二五日　晴

C2―（九・〇五）―C3（一〇・四〇）―C2（一一・一五）

臼井、長沢、三森でC3を通過してC2迄往復後、村上下山。高橋、竹中食糧その他の関係でC3を通過してC2迄下る。C3隊はC4の撤収に向うがガスが出てきた為、C4は沈澱であろうと考え、杓子迄で引返す。C4隊はサポート隊の到着を待ち切れずに、余った食糧をデポして撤収。C3に二名入り、二名はC2に下る。

三月二六日　雪、濃霧

C3（七・〇〇）―C2（一一・朝は時々晴れ間もみえたので下山ぬれたボタン雪が舞う。あわてたCリングして冷汗をかいた。

三月二七日　快晴

C1（八・〇〇）―森上（一二・〇〇）

スキーで下る連中が、ワッパをはきスキーは肩にかついでいる連中を、あわれみに満ちた目で見ながら滑り降りる。それぞれにいろいろな思い出を残し、山は幕を閉じた。

発電所に着いたのは、スキー組もワッパ組も同じ頃。こんどはワッパがスキーをあざ笑う。（臼井）

冷尾根

一九六二年三月　石弘光（OB）、大建二郎

三月二八日　新宿発一〇・三五

三月二九日　曇

大町（七・〇五）―大谷原（九・〇〇～九・一五）―取付（九・四五～一〇・一五）―雪洞（一〇・四〇）

バスは期待空しく源汲まで。トボトボ歩いていたら親切な小型トラックにひろわれ、大谷原まで直行。一〇〇〇㍍ほど大冷沢を遡って右岸に渡り小冷沢に入る。発電所の取入口をすぎて沢は右に曲る。二〇分ほど行くと、小さな沢が入っており、踏みあとからここが取付きと思われる。ワッパを使ってもヒザまでもぐる。一七〇〇㍍地点の大きなブナの木の根元に雪洞を掘る。

三月三〇日　小雪のち晴
雪洞（六・三〇）―一九七㍍の頭（七・一五）―ジャクション下（一一・〇〇）―雪洞（一三・五〇）
雪洞から二ピッチ目にやっと展望の開けた一九一七㍍の頭に出る。そこから一たん下り再び登ると北稜とのジャンクションの下に出る。大きなキノコ雪が登路に張り出し、その上にはいかにもい。やせたリッジ状の尾根をしばし考えた末、ザイルがないことを雪崩の出そうな沢が続く。決定的理由として、引返すことにする。気温は高く、雪崩の音が不気味にひびく中を下る。
三月三一日　快晴
雪洞（九・〇〇）―鹿島（一四・五〇）―取付点（一〇・〇〇）―黒沢峠（一三・四五）―鹿島（一四・五〇）
快晴だったので再び一九一七㍍の頭まで行ってみる。紺碧の空に白銀の鹿島槍。はるか下に大谷原の飯場が見える。
学生時代最後の山行、その最後の日の今日。山を下って黒沢峠に遊び、芸大ヒュッテのそばで寝ころぶ。きらめく陽光に、我が青春の山、爺と鹿島が映えるのをぼんやり眺めていた。横の相棒がメッチェンであればもっと幸せなんだが、と思いつつ。
（大）

■槍・穂高■

穂高岳（冬合宿延長戦）

一九五九年一二月　大賀二郎、小林進二、倉知　敬
一二月二〇日　曇のち晴
上高地で、山から降りる皆と別れ、梓川畔に幕営。
一二月二一日　雪のち晴
西穂に登ることにして七時出発。西穂小屋まではヒザまでのラッセルで二時間半。小屋からは西風が強く、フラフラしながら独標次のピークまで登った。帰りは風にとばされながら二時間で上高地まで馳け降りる。
一二月二二日　晴のち雪　停滞
一二月二三日　快晴のち曇
重太郎新道より前穂へ登る。頂上までラッセルあるのみだった。好天の、最高の穂高を見せてもらった。見わたす限り人ッ子一人見えず、足あともなかった。いい気分になって降りて来た。
六時半テント発、二時頂上着、五時半帰幕。
一二月二四日　雪

クリスマス・イブを、浅間温泉で、ささやかな豪遊をした。

穂高岳（夏合宿）

一九六〇年七月

合宿前半に行われる定着合宿の目的が二、三年部員の岩登り訓練と新入部員の初歩的な岩登りと雪上の技術の向上に重点が置かれることには今年も変りない。今回、涸沢定着合宿の方針としては、パーティの出し方を一方面に集中すること、即ち滝谷の場合、その日は滝谷だけにパーティを出し、新人は北穂東稜、涸沢槍東稜等をやる、又、奥又の場合は四峯正面、前穂東壁に集中し、新人は又白からA沢前穂コースをたどる、といった具合に各パーティの連絡を密にし尾根歩きパーティはサポートを兼ねて登攀パーティを見守り、万一の事故に備えて迅速な処置が取れるように計った。又この事は積雪期登山のアタックとサポートの関係を各部員に意識的に泌みこませる目的をもっていた。

もう一つの方針は他パーティよりも先んじて取り付き点に達し、それによってムダな待ち時間を排除することである。と同時に開拓されつくした穂高の岩場にせめて自らの力でルートを見定めるように考えていた。

合宿後半の縦走は今年は三パーティに分散した。縦走では少人数の方が機動性に富み互いの親密感が強まることから、三年部員による穂高・剣パーティ、一年部員を中心とした笠・針の木パーティと少しでも未知の場所を歩いてみたいという気持から黒部川横断パーティ、この三つを編成し、各々スケールの大きな山登りを目指した。

最後に、今年は剣に向う二、三年部員を中心として強化合宿を試験的に設けてみた。例年、定着合宿は雨にたたられるため、岩登りがやや不足する者が縦走後個人的に延長戦を行っていたが、合宿ではない、という気持からくる安易感、又縦走後のしめくくりがつかなくなる点等、色々と問題を含んでいるので、いっそ多くの岩にふれてみたいと言う必要性、又来年の合宿のためと考え、一つの合宿にしてこれを夏合宿の一環に組み入れたのである。

中川滋夫（リーダー）、中島　寛、小林進二、山本尚禎、石弘光、小林正直、有賀　盈、永井新也、三股　宏、三井　博、倉知　敬、朝木大統、遠藤昌土、大　建二郎、多田伸二、臼井弘、後閑勉六、熊谷　弘、本間　浩、蛭川隆夫、中橋寿雄、長沢道彦、名和泰三、竹中　彰、山本靖彦、吉川　勲

七月九日
先発隊離京（倉知、大）

七月一三日
本隊（中川以下二〇名）離京。

七月一四日
上高地。ホテルにて縦走用の食糧を降ろし米を加えた。平均一二、三貫か。一年吉川合流する。新村橋は破損がはなはだしく横尾まで足を延ばす。三時ごろより雨が降り出し相当消耗する。

七月一五日　晴のち雨
中川高熱のため休養。有賀、遠藤が残り、中島他一六名が涸沢に入り先発隊と合流。

七月一六日　晴

滝谷第二尾根（大、多田）
滝谷第三尾根（倉知、臼井）
涸沢は三・四のコルで雪上訓練。のち北尾根奥穂ザイテン（石
宮本、名和、竹中、中橋）。

七月一七日　晴
滝谷クラック尾根・第一尾根（小林進、大）
第二尾根（三井、
第三尾根（山本尚
第四尾根（倉知、
北穂東稜（石、名和、
北尾根（中島、蛭川、
中川、有賀、遠藤、涸
七月一八日　晴
滝谷クラック尾根・第一尾根（中島、倉知）
第三尾根、ドーム中央稜（石、宮本）
第四尾根（大、臼井・三井、多田）
東稜（山本尚、朝木、遠藤、蛭川、長沢、吉川、本間）
ジャンダルム飛騨尾根（小林進、後閑、熊谷、中橋、名和、竹
中、有賀）
ザイテン―奥穂（中川、山本靖）
七月一九日　晴
奥又白四峰正面新村ルート（中島、三井）
明大ルート（石、臼井）
三峰リッジ（大、後閑）
前穂東壁北壁Aフェース（倉知、宮本）
又白谷からA沢を経て前穂（中川、
飛騨尾根（山本尚、朝木、遠藤、蛭
北尾根（小林進、多田、山本靖）
七月二〇日　晴　全員、休養。
七月二一日　晴
滝谷クラック尾根（中川、三井、多
第二尾根（有賀、宮本、後閑、
第三尾根（小林進、朝木、中橋
第四尾根（山本尚、遠藤）
涸沢槍東稜北穂（石、熊谷、本間、
滝谷D沢―A沢（中島、名和、竹中
奥穂正面壁（倉知、大、臼井）
七月二二日　晴
奥又白四峰正面新村ルート（小林進、倉知）
奥又白四峰松高ルート（中島、大）
前穂東壁北壁Aフェース（中川、多田、石、有賀）
奥又白からA沢前穂（山本尚、朝木、蛭川、吉川、本間、熊谷）
涸沢槍東稜（三井、宮本、名和、竹中、中橋）
奥穂東北稜（遠藤、臼井、後閑）
帰幕中、三・四の雪渓で人工落石により、倉知ヒザに怪我を負
う。永井、小林正、三股、入山。
七月二三日　晴
屏風岩第一ルンゼ（中島、大）
屏風の頭へサポート（蛭川、名和、
滝谷第一尾根（三股、宮本）

滝谷ドーム中央稜（小林正、臼井）
石、吉川、山本靖下山。他は明日からの縦走に備えて準備、休養。
七月二四日　晴
縦走出発。

（中川）

北鎌尾根

一九六〇年一〇月　有賀盈、三股弘、永井新也、他一名

一〇月七日
信濃大町に着くと雨、七倉でバスを降りると更にひどい。荷物を発電所までトロッコで運んでもらい雨中を行く。発電所の側の製材所で昼飯とし、濡れた着物を干して出発。更に四キロ程崩れた軌道を越え、河原を上ったり下ったりして湯俣につく。小休止の後、小さな取入口を突っ切り、水俣川のつり橋を渡って左に折れ、対岸を行くと道は上りとなり、雨のため岩がすべって時々緊張させられた。約一時間半程行ってつり橋を渡り、右岸をしばらく行くと千天の出合に出た。小さな小屋があり、焚火でぬれた衣類を干す。外はすごい雨だ。
一〇月八日
四時頃は雨だったが急に上ったので、あわてて出発する。小屋の裏の道を天上沢に沿って二〇分程でつり橋を渡り、左岸に出る。少し行くと北鎌の基部から上る道がある。そこには上らずに沢に沿って一ピッチ程で道を間違え二時間ロス。ここから一〇分程行くと無名の沢に出、二人がここをつめていった。あとの二人で天上沢をつめていくと二〇分程で河原にケルンを発見、棒先が北鎌沢を指している。更に一〇分程上った。製材所のあとばかり気にしすぎの二人を待ったりして三時間のロス。
一〇月九日
北鎌沢をつめるとすぐ二つに分れているが右俣をいく。北鎌のコルのちょっと下は急な土の斜面で緊張した。コルに着くと丁度赤岳の上に陽が昇ってきて、雲が金色に輝き大変美しい眺めであった。ここからはハイ松をこぎ、独標の下でメシを食う。一〇時二〇分に出発してすぐチムニーと千丈沢側のまき道があるが我々は後者を行く。途中千丈沢側に大きく切れた所がある。更にハイ松帯をつめると尾根に出る。尾根通しに小さな上り下りを繰り返し、ごろごろした岩の上を行くと小さな土の所に出た。北鎌平である。頂上にいる人がよく見える。ここから二ピッチ程天上沢側を行くと小さなチムニーがあって、荷物のつり上げをする。更に五分程岩稜を登るとひょっくり槍の頂上の祠の裏に出た。槍の穂から肩の小屋への下りは荷物のせいかと思ったよりしんどい。
一〇月一〇日
三股と有賀の両君は更に西穂に向い、永井と一名は槍沢を下った。

（永井）

北鎌尾根

一九六〇年一〇月　中川滋夫、石弘光
部の運営も三年生にゆずったので二人でのんびり個人山行を楽しもうということで意見一致。最初滝谷を下からつめることを考

えたが日数不足と経費の点で北鎌に目標を変更した。

一〇月一三日

一〇・四五で中川と二人で出発、極力荷を軽くしたつもりなのに、六、七貫になってしまった。

一〇月一四日　快晴

大町（六・二〇～七・一〇）―七倉（八・一〇～八・二〇）―濁（九・四五）―東沢出合（一〇・二〇）―軌道終点（一一・〇〇～三五）―湯俣（一二・三五～四五）―千天出合（一四・〇〇）―北鎌沢出合（一四・四五）

紅葉の真っさかり。その中を荷物だけトロッコで運んでもらって空身で、快ペースでとばす。空身だと四キロメートルを四〇分で歩けることを発見し、今更に重荷はつらいと再認識する。高瀬川沿いの道もなかなか快適で、途中から荷物を背負ったのに快ペースで進む。伊藤新道の分岐点より沢筋に入り本格的山道になる。五万分の一の地図の上から下まで歩いて夕刻迫る頃、北鎌沢出合につく。日大小屋は猛烈に汚れて入る気にもならないので外でツェルトを張る。槍の穂先だけ一寸顔を出していた。

一〇月一五日　晴

出発（六・三〇）―北鎌沢出合（六・四五）―北鎌コル（九・〇五～四〇）―槍頂上（一六・二〇～二〇）―北鎌平（一四・五〇）―独標（一〇～二〇）―殺生小屋（一七・二〇）

ねむい目をこすりながら、一息に北鎌沢をつめる。専修大の遭難碑が目につく。雪のない地形から判断しても雪崩の巣になるであろうことが容易に想像された。コルの直前まで水が流れており、コルは絶好なテント場であることを発見。そこからは完全な松こぎとなり、所々に新雪の残りが見られる。独標は千丈側を大きくトラバースし、その後は忠実に稜線をトレースする。途中で中川の後輩の大泉高校山岳部の連中が槍の方から下ってきた。稜線上は踏みあともあり、荷が重いにも拘らず、のんびりと歩けた。槍直下のチムニーもザイルを出さず、その余勢で一息に肩まで下った。夕やみ迫る頃、殺生小屋の前でツェルトをかぶる。猛烈に冷えこんだ。

一〇月一六日　曇

出発（八・〇〇）―槍沢小屋（九・四〇）―一ノ俣（一〇・四〇）―横尾（一一・二〇～五〇）徳沢（一二・四〇）―明神（一三・一八）―上高地（一四・〇〇）

天気がよかったら表銀座を縦走して中房へ下るつもりであったが一面のガスなので中止にする。そのまま一路歩き馴れた道をとばして上高地へ。途中朝木先輩御夫妻に会いチョコレートをもらう。

小生のみ夜茅野で下車、翌日一番バスで蓼科へ上る。（石）

ミスター・レイキンと北アルプス

一九六〇年一〇月　フレッド・レイキン、中川滋夫、小林進

二

吉沢一郎さんからの紹介で、今度オーストラリアのタスマニヤから、レイキンという人が来て日本の山を登りたいそうだから、お前案内してやってくれとの話があった。一人では心細いので、比較的英語に強そうな牛ちゃんと共にお引受けした。

新宿を後にしたのが一〇月二三日の朝、上高地の木村さんの所に着いたのはその日の九時頃であった。翌日快晴、僅かばかりの噴煙を上げている焼岳に向うレイキン氏は彼地で国立公園のレインジャーをしている人で、普段から山は歩き馴れているから滅法早い。大きなストライドでぐんぐん登る後を、二人の日本人が小股で遅れじとついて行く。オーストラリアでは、活火山がないので、涸沢ヒュッテに移る。翌朝、日本人がらしく、物珍らしげに噴穴をのぞいたり、溶岩を拾ったり大変な御機嫌である。頂上で昼食。眼下に大正池、紅葉の上高地、薄化粧の穂高、「ベリーグッド」の連発に、牛ちゃんと顔を見合せてニヤニヤする。帰りにウェストンレリーフに立寄り、清水屋の座敷に上り、ビールを飲みながら、その昔ウェストンが記帳したノート等を拝見する。

一〇日二五日　晴

涸沢に向う。レイキン氏は香港で仕入れたアサヒペンタを休みなく撮る。槍に行く頃にはフィルムがなくなってしまうのではないかと心配すると、五百ショット用意してきたとのこと、まずは写真を撮っていてくれるとしてごかれなくてすむわいとのんびり歩く。

涸沢はめずらしくテントが一張りもない。夏の雑踏はウソの様、我々だけのテントに入る。夕食で「貴方達は帝国ホテルのコックになれる」とほめられたが半分お世辞にしても悪い気持はしない。

一〇月二六日　快晴

多少の岩登りもやると聞いたので、先日の馬力から判断して北尾根から登ることにした。三峰の登り頃から何か様子がおかしいので尋ねると、「酸素が少なくて、呼吸がくるしい」という。聞けば、三〇〇〇㍍以上の高い所に登ったのは六年程前だったらしい。牛ちゃんと顔を見合わせ、「そういうものかなあー」とおどろく。

テントに帰って来ても、軽い高山病にかかったらしく食欲もないので、涸沢ヒュッテに移る。翌朝、日本のレインジャー小林銀さんと、いろいろ仕事の比較話に熱中するらしく食欲もない。

一〇月二七日　晴

彼氏、高山病より快復はしたが風が強いし、荷物があるから主稜線は止めようと言うと、仲々強気で、大キレット越えを主張して止まない。説得するのに三〇分位かかった。槍沢小屋に泊る。

一〇月二八日　晴

出発の際、レイキン氏、手編みの毛糸の帽子がないと騒ぐ。一緒になって探すが、仲々見つからない。あんな「薄汚れたヤツ」どうだっていいじゃないかと我々には思える代物だが、彼にとっては、特別のメモリーがあるのか、ご執心だ。時間が遅くなるので、帰りに又探すということで取りあえず出発。

途中、殺生小屋付近で、直立した岩が道端にあったので、脱帽しひざまづいて、手を合わせておじぎをすると、レイキン氏も真似して神妙な顔付で合掌する。岩に書いてある漢字を見て、何と書いてあるかと問う。曰く「アグリカルチュアル・デパートメント・フォレストリ。」彼、一杯食わされたと知って笑いながらつかみかかって来る。我々逃げ回って大笑い。

人気のない槍に着く。「スペキュタキュラス」又々カメラの速

写が始まる。「槍と穂高とどっちが好きか？」と聞けば、言下に「槍！」と答える「なぜ槍か？」「槍の方がより魅力的だし、マッターホルンに似ているから。」と答えた。

よほど槍が気に入ったらしく今度は大槍ヒュッテの方に回ろうというので、よかろうと東鎌を下る。ヒュッテで又パチパチ。相当風がきつく寒い中を精力的に撮りまくった。

帰路槍沢小屋で、彼はついに、たたんだふとんの間から帽子を発見する。うれしそうな、無邪気な顔、思わず我々も喜びの言葉がほとばしる。天気には恵まれ、お目当の槍にも登れ、帽子も見つかり何一つ思い残すことなく彼は充分満足した様子だった。

夜、木村さんのストーブを囲んで、ビールを飲みながら夜のふけるのも忘れて語り合った。

（中川）

西穂高岳

一九六一年四月　村上泰介　他一名

四月一一日

前夜半、新宿を発って、此の日はバスで例の如く沢渡まで入る。途中、左右よりデブリが多く道は悪い。四ピッチ、四時間で中ノ瀬の木村氏宅に到着。天気は良くない。他に一パーティ同宿。

四月一二日　小雨

六時半起床。意を決して、七時半出発。途中、バテ坂上部で道を失い、小一時間浪費して、一〇時一〇分西穂山荘着。アイゼンを着けて五〇分に出発。天候さらに悪く、飛騨側よりたたきつけるみぞれ様の風強く、左半身がグショ濡れとなる。一二時独標に着く。視界きかず、稜線はかすんで無気味に見える。議論の末、降り始める。一二時四〇分、山荘着。着替えて、一時一五分出発。一ピッチで二時五分、中ノ瀬着。雨止まず。ゼライスなど固めて憂いをつなぐ。夜半雨上がる。

四月一三日　晴

下山の日だが、暇つぶしに霞沢岳に登ろうと提案するも相棒は、そっけなく拒絶。やむなく九時、単独で出発。同一五分、デブリ末端を通過。雪は、陽を受けて、くさっている。トレース皆無。一〇時三〇分、インゼルで小休止。傾斜は弱いが、ひとりなので急ぐ。一一時五〇分、北側のピークより、頂上に立つ。笠岳が近くに見えて、高度感大。ひざまでもぐりながら、四五分で小屋に戻る。昼食後、一時三〇分、出発。三ピッチで四時二五分、沢渡着。八時、松本駅で、春山から降りた臼井さんと会い、此の日、信大が起こした、滑落事故の無事を祈りつつ、一緒に汽車で帰阪。

（村上）

滝谷

一九六一年六月　臼井　弘、多田伸治
竹中　彰

六月二〇日

入山、涸沢に設営。

六月二一日　晴

南稜の登りきる直前で設営した後三尾根を下りドーム中央稜へと二時頃とりつく。臼井、多田、高橋、竹中の四名で楽しみながら登る。テントへ帰り、ラジオで一橋山岳部アンデス遠征隊のプ

カヒルカ初登頂のニュースを聞き、皆喜ぶ。後閑が入山した。

六月二二日　晴

六時起床、八時出発

クラック尾根へ臼井、後閑、竹中、取付九時半頂上一時。

第一尾根へ多田、高橋、取付九時二五分、頂上一時一五分。

六月二三日　曇

撤収、三時半上高地につく。

（竹中）

滝谷・グレポン

一九六一年八月　大賀二郎（OB）、大　建二郎　他一名

七月三〇日　晴

大賀他一名（以下Oと書く）離京、小梨平に幕営。大は夏山合宿の剣、槍縦走班のリーダーとして、大天井泊り。

七月三一日　晴

大賀、O涸沢入り。大は常念・蝶経由徳沢で解散コンパ。

八月一日　晴のちガス

前穂北尾根――大賀、O。学生時代登れなかった北尾根を初めて登り、満足。

大、徳沢より涸沢入り。

八月二日　ガス、時々晴

グレポン――大、大賀、O

C沢のコル（八・一〇）―取付（九・二五）―トサカ岩・昼食（一一・五〇～一二・二〇）―縦走路終了点（一三・一五）―縦走路（一三・五〇）

足ならしのために三尾根か四尾根へ行く予定だったが、C沢右俣に入ると両尾根とも満員の盛況。一方グレポンは誰も居ない。大賀のまる一年のブランクと、岩登りは初めてのが居ることが一寸不安だったが、大が前日からグレポン行きを希望していたので、これに決めた。

大賀トップで、末端に向って左側の赤茶けた階段状の大きな岩に取り付く（九・三五、以下O、大の順（オーダー））。階段を五㍍登ると、ハングになる。赤いペンキを塗った残置ハーケンで吊り上げ、稜上に立つ。左側の凹角を伝って四〇㍍、容易だが脆い。テラスから広くなったガリー状を一〇㍍コンテで登り、傾斜が急になったところでスタカットに戻る。（一〇・〇〇）第二ピッチは快適な凹角の登り。途中で一回残置ハーケンを使い、四〇㍍一杯で広いテラスに出る。（一〇・三〇）取付からも見える白いスラブの右下である。

第三ピッチは最悪だった。冬季にかの優秀な成城大パーティが三時間を要した所である。テラスからスラブ状を一〇㍍で凹角に入る。どんどん傾斜が強まり、二〇㍍でほとんど垂直になる。ホールドが乏しく、岩が泥と草でヌルヌルして居り、非常に登りにくい。ハーケンを打とうにもリスが大きすぎる。ぐらぐらの残置ハーケンがあるが、全体重をかける気になれずカラビナだけかけてホールドにし、一段上のハーケンに一本打ちそえ、一㍍かせぐ。凹角がハング気味になり、苦しい姿勢だ。右上にホールドを探ると、四〇㌢に二〇㌢、厚さ一〇㌢ほどの岩がはがれかかった。ま下に大とOの心細そうに見上げる顔がある。左手のホールドと正面のハーケンを頼って吊り上げた瞬間、右肩が最前の浮き石に当り、落ちかかった石を抱き止めたが持ち切れず、思いきり外側へ

ほおり出し、かろうじて墜落を免れた。しかし、石の一片が大の右肩に直撃した様子だ。落石が落石を呼んで、三尾根側のルンゼに轟音と土煙が舞い上る。

「ぶつかった！眼鏡がとんで登れない」

大が苦しい声で怒鳴ってくる。だが、こちらは逆傾斜のハシゴのてっぺんに居るような姿勢で、降りるに降りられない。懸垂できるようなピンも打てない。上へ抜けるしか途はない。左上のハーケンにザイルを通し、祈る気持で体重を托し、吊上げで上のスタンスに立つ。頭上は又してもハングだ。ファイトが猛然と湧いてくる。登るしかないんだ。右上の残置ハーケンにビナをセットし、更に一本打ち加え、ホールド不足に悩まされながらも吊り上げ、バランスクライムと最後は泥に抱きついて必死にずり上がる。三回目に、墜落寸前で成功、リッジに出る。握力の回復を待ってリッジを越し、傾斜の落ちた斜面を左上に、五㍍、小さな尖岩で曲った残置ハーケンを利用し、ビレーする。大がセカンドに入り、左手一本で上ってくる。セカンドの手もとにアブミを残してよかった。ラストの0が、初めての岩登りとは思えぬ軽快さでアブミを撤収して登ってきた。

次ぎのピッチは同じような、だが前ほどに悪くない凹角である。セカンドが登り易いようにアブミを一回、ピン四本を使い、凹角上部で左へ踏跡をたどり、又上へ出て四〇㍍一ぱいで確保する。ここから広いルンゼにまわりこみ三〇㍍でトサカとローソクのコルに出る。

トサカ岩のてっぺんには容易に登れる。メシを喰いながら見ると、右俣奥壁がルート図どおりに目の前にあり、四尾根のツルムが霧に見え隠れする。さすが「岩の殿堂」らしい豪快な眺めだ。

さて、腰を上げた途端、トサカに乗ったたみ一畳ほどもある岩がぐうっと滑り出し、あ、あ、あと息を呑む。だが大丈夫。胸なでおろしてコルにくだり、ローソク岩裏側のガレをつめた所でアンザイレンする。

中央のクラックを四〇㍍、ほぼまっすぐに登る。結構むずかしいが、ようやく岩が締って気持が良い。ハーケン四、五本、アブミ一回使ってリッジ上のテラスに出、登攀終了。

涸沢診療所で大を診てもらう。打撲だけで済み、何よりだった。しかし、岩登りはムリのようだ。

八月三日　曇

大は下山。折角来てもらったのに気の毒した。大賀、0は休養。

八月四日　ガス

大賀はグレポンで落したカメラ探しに北穂に登る。ガスと風が強く、滝谷へ降りるのは断念。午後、撤収して養魚場泊り。大橋先輩は大飯を喰うと、おじさんが話してくれ、Y中さんの親友という逞しい女性に会う。

八月五日　曇

帰京。貴重な夏休みを、自分の落石と相棒の風邪のため、グレポン一本だけに終った。帰りの汽車での会話は、全くはずまなかった。

（参考　グレポンのルート図は、「岩と雪」一号、「岳人」一五五号のものが分り易い。）

（大賀）

槍穂縦走

一九六一年九月　朝木　大統　他一名

九月二三日　晴

上高地―槍沢―槍山荘

九月二四日　晴

槍ケ岳―北穂―穂高山荘

九月二五日

奥穂―岳沢―上高地

紅葉も上に行くに従ってだんだん終りになってくる。徳沢から一時間程行ったところの河原で昼食し、水を飲んでいる小熊を見て大あわて……。

（朝木）

燕岳から餓鬼岳

一九六一年九月　大　建二郎　他一名

九月二五日　晴

有明（八・二〇）―中房温泉（九・〇〇）―燕山荘（一二・一〇）

有明で二時間半も待たされ、ブウブウ言いながら中房へ。かつて秋山で宮城から一日がかりでたどった道も四〇分で到着。あれよあれよというちに燕山荘についていた。

九月二六日　曇

一面ガスって視界がない。東沢乗越まで一気に下る。冬はラッセルがつらそうな森林帯を行くと剣スリにつく。左から大きく捲いて稜線へ出る。あとは常盤までの下りだけと楽しみに小屋へつくと、ゾロゾロと小屋番と女の子が出て来る。聞くと常盤への下り道はこの前の台風で通れなくなったという。ゾロゾロと麻雀みたいな連中は明治生命の山岳部とか。小屋番の案内で近道とやらを高瀬川の方へ下ったが、ひどい道であった。七倉まで歩いてバスで葛温泉へ。まっ暗な中をライトを頼りに軌道の上をたどった。

（大）

西穂・焼岳

一九六一年九月　高橋　信成

九月八日　晴

小梨平（七・〇〇）―岳沢ヒュッテ（八・三〇）天狗岳と間の岳のコル（一一・〇〇）―独標（一二・五五）―西穂山荘（一三・〇〇）―ウェストン碑（一五・三〇）

奥又白で合宿を終え明神で一夜を明かした後初秋の上高地へ、ひとり周囲のいつもは素通りしてしまう山々を歩き回ってみようとテントをかついできた。今日はコブ尾根へいくつもりで岳沢ヒュッテのウラまでやってきたがヤブが多いので天狗沢を登ることにした。西穂の稜線を歩きのんびり上高地へ下った。

九月九日　晴

小梨平（九・一五）―中尾峠（一〇・四五）―焼岳頂上（一一・二五）―西穂小屋（一・三〇）―上高地西穂登山口（二・三〇）

誕生祝いに自分の歴史を大きく変えた山、焼岳へ昔（小学校六年の時）親父と登った時のことを回想しながら足を運ぶ。思えばあれから十年になるがこわくてぶるえながら登った焼と、

上高地のテント村、島々でみたザイルをもった勇ましい男達の印象が強く頭にこびりついて長い間山への憧憬をいだかせ山岳部で生活するに至ったのであろう。

九月一〇日　晴　下山

涸沢

（高橋）

一九六一年八月　村上　泰介

八月六日　曇のち雨

夏山の疲れもなおって、のんびりと高校山岳部の夏山定着合宿に参加しようと、出掛けた山行だったが、どうやら考えが甘かったようだ。記録が無いので、詳細は記せないが、テクテク歩いて、上高地より三ピッチで、涸沢ヒュッテ着。横尾あたりから雨。涸沢に目指す母校テントは発見できず、やむなく、小屋泊り。

八月七日　曇

八時起床。あらためて、母校パーティーの不在を確認した後、九時、小屋を発って、一時間で前穂北尾根五六のコルに到着。ガスの為、不愉快な岩尾根を上ったり下ったりすること約一時間半、ひょこんと、前穂の頂上に立つ。北にまいて下り、三四のコルの雪渓をスイスイと下って、正午、小屋に戻る。待てどくらせど、彼等は来ない。超満員の小屋の中で、ひとり、連中の怠慢に腹を立て、日本の過剰人口を嘆く。

八月八日　快晴

九時、小屋を出発。北穂東稜末端から、登り始めて、一時間弱で、一一時頃、頂上を通る。続けて、稜線づたいに、涸沢槍を経て、一二時半、穂高山荘に着く。昼飯を食って奥穂に向う。頂上では、余りに多勢の登山者にびっくりする。前穂側に下り、三四の雪渓を下る。小屋着二時半。又しても、彼等が入っていないのを発見、又しても耐えがたき人口圧を忍ぶ。明日は、槍まで迎えに行こうと考えながら時を過す。

八月九日　終日雨

前日の意欲は、すっかり雨に流されてしまった。そそくさと、小屋を飛び出し、一目散に上高地に下る。ところで、この山行には、高校パーティーとは松本で出会うという話のオチまでついているのだから恐れ入る。夏の涸沢は、確かに、楽しいが、ひとりだと、何も出来ず、なんとなく苛々してしまう。パートナーの有難さを知る——この山は、そんな山であった。

西穂稜線（OB合宿）

一九六二年一月　山本健一郎、瀬田　宏、城戸　剛、市川陽一、大橋喜治、中島　寛、小林進二、石弘光、有賀　盈、大賀二郎、倉知　敬

一二月三一日　快晴

松本（一三・三〇）—坂巻までトラック—坂巻（一五・五五）—帝国ホテル（一六・三〇）

一月一日　曇のち雪、夜暴風雪

ホテル（八・三五）—西穂山荘（一三・三〇）

老いも若きも、元気に登る。山荘附近にようやく空地？　を見付けて二張り設営。

一月二日　雪　停滞
　午後、独標基部まで軽い足ならし。
一月三日　雪　停滞
　山本、市川、中島、倉知下山。意地悪爺さんがなす処なく帰るので残留組は快哉を叫ぶ。瀬田下痢、城戸足痛、小林不調。トシの順にガタが来る模様。
一月四日　快晴のち風雪
　出発（五・三〇）―独標（六・三〇）―西穂山頂（七・三〇～四〇）―間の岳（八・四五～五五）―天狗のコル（九・一五）―タタミ岩の頭（九・三〇）―ジャンダルム（一一・一五）―ロバの耳とのコル（風雪となり引返す、一一・三五）―天狗のコル（一二・一五～二五）―間の岳（一三・三〇）―西穂（一五・〇〇）―独標（一五・四五）―帰幕（一六・三〇）
　待ちに待った快晴。夜明けの寒風の中を、幾パーティものライトが続く。
　七人を三組に分け、大賀、石は奥穂登頂を目ざして急ぐ。大橋、城戸、小林はサポートし、天狗のコルにアタック隊の為に雪洞を堀って帰る役目だ。瀬田、有賀は西穂に登るだけ。大賀、石組は先行パーティを片っ端から追い抜いて飛ばしたが、いかんせん、出発が遅すぎ、目標は遠すぎた。ジャンを通過した地点で降雪が激しくなり、ロバの耳、奥穂間だけは夏も経験がないので、涙を呑んだ。天狗のコルには小林が雪洞を既に堀っていたが、悪天候になると永そうなので、ACに戻ることにした。風雪の西穂稜線を四時間かかって帰った長さとにがさ。しかし、この日から数十年来という豪雪が続き、もし奥穂まで行っていたら大変な目に遭ったろうと思えば、少しは慰めになる。
一月五日　雪
　撤収（一一・〇〇）―ホテル（一二・四五～一三・一五）―沢渡（一七・一五）
　瀬田、城戸は一足先きに下山。残る五人は前記のペースで沢渡まで下り、二一時半、松本の丸山宅に転げ込む。有賀の親戚で、ウェストンと登山したことのあるご主人に深夜まで昔話とカクテルのご馳走になる。
一月六日　快晴
　大橋、大賀は四時半に起き、六時二分松本発で穴山に行く。穴山着九時三六分。平川峠周辺の雑木林を散策すること五時間、穴山橋からバスで韮崎に出て帰京。
（大賀）

槍ケ岳ダイレクト・リッジ

一九六二年五月　大橋喜治、中島　寛、大賀二郎（OB）

　OBの山行はとかく面倒が多い。どうしても山行回数は多く持てないから、短い期間に盛り沢山の内容を欲ばることになる。他方、忙しい仕事は山行前に余計忙しくなり、その合間にトレーニングに励む。速達での連絡は次第に金額を無視した長距離電話の往復になって山行の計画がまとまる。
　かくして、日本中のあちこちから久し振りに会う山キチガイが重いキスリングを背負って集ってくる。
　こんな面倒はあるけれど、というよりはあるからかえって、OBの山行は得がたい充実した山行を持てることが多い。
　五月の槍ケ岳ダイレクト尾根登攀も、そんな楽しい山行の一つ

だった。

三人とも「岩と雪」三号の雲稜会の記録に魅せられていた。何よりも頂上へ直上する鋭いリッジであることが楽しく思われた。われわれの計画では、槍ケ岳ダイレクト・リッジから北穂まで縦走し、滝谷をもねらってみようという遠大な希望をもっていた。

四月三〇日　晴

中島は島根県の安来から大橋は京都府舞鶴から、そして大賀が東京から夜明けの松本駅で落ち合った。まるで昨日別れて今日会ったように落ち着いた気持で会えるから不思議だ。

七倉（八・二五）―湯俣（一四・二五）―千天出合（一六・〇〇）ビバーク。

五月一日　うす曇のち雪

千天出合（六・二五）―取付点（一一・〇〇）―第一岩峰（一二・四〇）―第二岩峰（一六・〇〇）―ビバーク地へ下降（一八・〇〇）ビバーク。

五日分の食糧と防寒装備を入れたキスリングはそれぞれ約二五キロ、ダイレクトリッジを真正面に見る天丈沢のカールで上を仰いではため息が出た。

カールに入ってから二時間半を要して一一時、アイゼンを着けていよいよダイレクト・リッジに取り付く。

灌木まじりの急な基部岩壁をぬけると傾斜五〇度ほどのスノーリッジに出る。ラッセル深く体力を消耗した。約一〇〇㍍をコンテで進み、第一岩峰にかかる。

第一岩峰はまっすぐ登る。初登の南氏の記録では吊り上げて越したとのことだが、ハングというほどではない。ツメは確かに急で、ハーケン二本を用いトップは空身で登ったが、ザックの引き上げに難渋した。セカンド以下は荷に振られながら苦労して担ぎ上がる。

ここからやはり五〇度ほどのやせたスノーリッジが続いて息をつく暇もない。慎重に確保して第二岩峰にかかる（基部で昼食、一四時取り付き）。ルートは右の雪稜を容易に巻くが、ザックが又しても天井沢側に振り落され、ハングに引っかかってどうにもならない。結局荷物係りの大賀はこのピッチを三回上下してヘトヘトになる。終了一六時。

この頃から降雪が激しくなり、曲折した雪稜にルートを深す不利を感じた矢先き、左下に格好のビバークサイトを発見したので、アップザイレンで下降し、ビバーク。

五月二日　快晴

出発（八・二五）―リッジ上に集結（九・一五）―七ピッチで昼食（一二・四〇～一三・二〇）第三岩峯―頂上（一五・三五～一六・〇〇）―肩の小屋

凍った七〇度の雪壁からハイマツを堀り出し、喘登してリッジ上に戻る。九時十五分登攀再開。

五〇㍍ほどのコンテをはさんで、六ピッチの間急なスノーリッジの登攀が続く。荷は重く、三人集結する場もない急な雪稜が続き、確保にかなり注意を集中する。美しい、危険な、激しい体力を必要とする雪稜。複雑な雪庇を切り崩し、アンデス帰りの中島が終始精力的に見事なルートを拓いてゆく。雪稜が左に曲る地点で昼食をとる。ここからコンテと一ピッチで第三岩峰に達する。

第三岩峰は正面やや左寄りのガリーに、中島がトップで取り付

く。浮き石と凍土がつまり、その上午後の陽に雪が融けて流れ出し、最悪のピッチであった。ハーケン一本用いようやくにして抜けると、いくらか傾斜の落ちたスノーリッジになり、一五〇㍍ほどコンテで時間をかせぐ。かくしていよいよ槍の穂先の登攀となる。

東鎌尾根と北鎌尾根を左右に従え、すべての線を槍の頂上に向けてせりあがる岩稜。仰ぐ頂上はすぐ近くだが高い。この岩と雪と氷のたくみにミックスされたすばらしいリッジの登攀――フィナーレを飾るにふさわしい穂先の登攀だ。

雪田をつめ、ピナクル基部にビレイピンを二本たたき込み、満を持していた大賀がトップを代る。

最初のピッチはピナクルを左からまわって上の広い雪のバンドに出る。次ぎは二〇㍍ほどの急なチムニー。日が西にまわってこちら側は日かげになり、チムニーの中は凍って、暗い。しかし快適にバックアンドフットで抜け、小テラスに立つ。三ピッチ目は更に傾斜の増した岩壁を、クラックとチムニーを伝って登る。確保する中島ごしに、もう一ピッチ下の大橋さんが久しぶりに見える。チョックストーンを利用して最後のチムニーを懸命に抜け、北鎌尾根のルートと合する。にわかに見るアイゼンの跡に失望となつかしさを感じつつ、最終ピッチをまぎれもない槍の頂上で終える。大賀にとっては初めての頂上であった。

頂上でのパノラマは、久しく忘れていた登山の喜びを味わせてくれた。それには、充実した登攀によるものも大きかったが、何よりも、頂上めがけてまっすぐにつきあげているルートの故に、われわれが、いかに技術的に高度なものを要求されるルートといえども頂上へ登る一つのアプローチとしてとるのだというプリミティヴな登山のありかたを、逆に、しみじみと味った故にその喜びが大きかったと云えようか。

〈名称について〉

雲稜会は「槍ケ岳東稜」と呼び、「現代登山全集」では「大槍ダイレクト・リッジ」となっている。我々は後者に従った。

〈登攀記録〉

大正元年ウェストンが上半部を登ったと云われる（「現代登山全集」）。

末端からの積雪期初登は一九五八年三月、東京の雲稜会（「岩と雪3」）。第二登は六一年春、紫峰山岳会（大賀仄聞）。第三登は六二年五月の我々か（「岳人」一七二号記録速報で報告済）。全体で一八ピッチ、使用ハーケン一〇本であった。

五月三日　曇のち晴

肩の小屋（七・五五）―横尾（一一・一五）―明神養魚場（一四・三〇）

天気が悪い。大橋さんが風邪で夜中にウナリ出し、ブルブル震える。中島も膝の調子悪く、北穂への転身を断念して下山と決定。

五月四日　曇のち晴

養魚場（七・五〇）―徳本峠（九・二〇）―イワナどめ（一一・三〇）―取入口（一二・〇〇～四〇）～島々の宿（一三・五〇）

大橋、大賀のみ徳本を越えて下山。この時期の徳本の登りは、夏道最後のジグザグにぶつかるところまで沢通しに行ける。峠か

らの下りは、熊笹が完全に埋り、大きな雪面になっていてグリセードで下れる。

（大賀）

北鎌尾根

一九六二年五月　多田伸治、本間　浩、半場三雄

五月二日　晴

大町―七倉（九・〇〇）―湯俣（一五・〇〇）―千天出合（一六・三〇）

残雪多く湯俣から出合までのへつりが意外に悪い。苦心の天プラに満腹し、草小屋の中でツェルトをかむる。

五月三日　晴のち曇

出合発（六・三〇）―主稜線（九・〇〇）―P11・P12のコル（一四・三〇）

多門治新道を傾斜感に圧倒されながら、薄氷のついた草つきや、ハシゴ等変化にとんだ踏跡をたどる。稜線よりアイゼンをつけ、P15・P14を越し、、P13・P12はクサッた雪のいやらしいルンゼをつめると途中より目立ったラクダのコブP11の下に出る。

P11は天丈側へアンザイレンして、大きくトラバース。雪がクサッている上、シュルンドがあいており、最悪のピッチとなった。

コルが絶好のビバークプラットとなっている。樅の小枝をきつめ、三人でツェルトをガッチリ張る。狭いが快適であった。

五月四日　小雨のち風雨

コル発（七・三〇）―北鎌沢コル（八・三〇）―P8の頭（一〇・〇〇）

霧ションのような天候だが、先の見通しが立たないため出発。P10を千丈沢側へまわりこみ、すててあるフィクスザイルにすがって雪壁を登り、P9を越すとようやく北鎌沢コルに出た。コルより長い雪の急斜面をハイ松を頼って登ると、P8に出た。独標がボンヤリとバカでかく見える。この頃より風雨強く、ヤッケを通して全身をぬらす。狭い岩陰の雪をならし、ツェルトをハーケンやハイ松で固定する。夜、増々雨はげしく、シュラフの中まで完全に水びたし。ただ風でツェルトがとばぬよう祈るだけ。夜明けが馬鹿にまちどうしい一夜だった。

五月五日　雪のち晴　停滞

水浸しの上に、狭いツェルトでは、動くのにずいぶんしごかれる。雨が雪に変りホッとする。夕方青空と日の光が霧のあいまにのぞいた。ぬれたシュラフをしぼり、ツェルトを張りなおし、圧倒的にそそり立つ独標に明日のルートをさぐる。「天狗の腰掛」の名どうり、豪快な眺望であった。

五月六日　快晴

P8発（六・〇〇）―独標（八・〇〇）―北鎌平（一二・〇〇）―槍（一四・〇〇）―肩（一五・三〇）―二の俣（一八・〇〇）

待ちに待った快晴。しまった雪にアイゼンが快よい。変化にとんだ岩稜でいよいよ核心部独標の登りだ。千丈側よりチムニーは、つらで完全にコンクリートされ、ルートを天丈側の雪壁にとり、スタカットで登る。取付き以来初めて見る穂先が遠くに迫力をもって立っている。ピッチをあげ、P5・P6を通過し、P4を千丈側へルンゼを下り、トラバースで稜線に出る。P3は天

丈側をまきぎみに、すてられたフィクスをたよって登る。P2・P1はまだ新しいフィクスがハーケンに結ばれているが、かなり悪い岩場で残置ハーケンを使って、スタカット四〇いっぱいのばして登りきる。独標以来初めて平地らしい北鎌平からは、四日ぶりで登山者の姿をホサキに遠望した。ルートを慎重にさぐって、スタカットで最初の雪壁にピックをうちこみながら登り、三ピッチ程で雪は終り、つきあたりのチムニーをさけて、右に走る氷のつまったクラックをカッティングとつり上げで越すと、ちょうど祠の裏に出た。さっそく喜びの声をセカンドに送り、ほこらしい気持でザイルをひく。三〇分ほど展望を楽しみ、けっこう悪いホサキの下りを鎖をつかって肩の小屋に下る。槍沢を尻セードですべり、雪の消えた二の俣で快適なビバーク。

五月七日　晴

二の俣発（一〇・〇〇）―横尾（一一・〇〇）―上高地（一四・〇〇）

計画の北穂縦走は出来なかったが、内容はかなり充実した山行であった。松本で横尾隊と合流し帰京。

（多田）

穂高・横尾々根

一九六二年五月　蛭川隆夫（リーダー）、村上泰介、中橋寿雄、小島和人、小野肇

五月三日　晴のち曇

上高地―横尾―二のガリー

本谷右岸の登山道から二のガリーに入り、三分の一位つめて、雪渓の平坦部に設営した。対岸の屏風岩第二ルンゼには、ブロック雪崩が絶え間なく、あたりにすさまじい響きをとどろかしていた。

五月四日　霧雨

テント地―P3・P4間コル―P4直下

たいした雨でないし、ガリーに落石の心配もあるので出発した。横尾々根には意外に早く出た。樹林帯の急登に若干手こずり、雨も強くなってきたので、P4直下に設営する。

五月五日　雨　停滞

五月六日　晴

テント地―P5

相変らず大木をこぎながら、小ピークをいくつか越えてゆくと、ハイマツが出てきて、P5の登りとなった。ここで小野がクラストをふみぬいた瞬間、バランスを失ってアイゼンを反対の足のスネに突きさしてしまった。予定より遅れていること、かなりの出血、それに化膿することも考えられるので、キレット越えの計画を放棄し、その場所に設営した。その後、蛭川と中橋は、横尾々根を天狗のコルまで往復し、村上、小島はP5から本谷へおちる支尾根を偵察した。

五月七日　晴

テント地―横尾―上高地

小野を空身にして、前記の尾根を下った。充分積雪期のボッカルートになりうる、快適な尾根であった。最終バスで上高地を離れる。

（蛭川）

明神岳五峰東南尾根

一九六二年五月　倉知　敬、高橋信成、竹中　彰、三森茂充

五月三日　曇

上高地（明神池までは横尾尾根隊と同道）―養魚場テント場（五・三〇）―養魚場テント場（一〇・〇〇～一〇・五五）―養魚場で先発隊のテントを撤収さすがに連休の山行だけあって上高地周辺で、OBの、中村、城戸、山本尚禎氏に御会いした。養魚場で先発隊のテントを撤収し宮川のコルへの分岐点で主峰東稜へ向う中川、有賀両OBと別れ、下宮川をアイゼンをつけてつめる。

登りながらザックを置いて取付を捜すが適当な所がなく、結局奥壁の下まで行ってしまって雪渓も急になったので、偵察を行ないながら下る。振出しに戻って養魚場にテント設営。

五月四日　曇

天気図と空模様から判断して停滞する。午後、高橋と竹中で取付点を偵察に行きほぼ確認して来る。昼頃、昨夜ヒョータン池でビヴァークしてビショ濡れになった中川氏達が撤収して来る。

五月五日　雨のち晴

朝から雨が降り止まぬので停滞。中川、有賀氏は下山。午後、下からルート偵察の為、徳沢まで往復する。途中大阪の小峰OBに御会いした。

五月六日　快晴

テント（四・五〇）―V峰（九・〇〇～九・三〇）―主峰（一〇・〇〇）―奥穂（一二・二五～一・〇〇）―前穂（一一・三〇）―本谷出合（四・〇五）―帰幕（七・〇〇）

日数も少なくなったので当初の計画を変更してビヴァーク覚悟で奥穂を往復をする。一昨日見ておいた所へ宮川のコルへ別れる所から左へ林の中を登って行くことによって簡単に出る。あとはルート通りに東南尾根をV峰へ抜ける。ところどころに福岡大のテント跡を見る。Ⅱ峰の下降を少々モタついたが無事梓川側にルートを見つけて、予定通り穂高の稜線を奥穂まで駆け歩き、涸沢、横尾を経て、一四時間の行動の後フラフラになって帰幕。

五月七日　晴

倉知、三森は徳本越えで、高橋、竹中はバスで下山。東南尾根は予想外にV峰まで時間がかかる。途中岩ありラッセルありでヴァラエティに富んではいるが。これを積雪期にやる場合にはポーラーは若干苦しいだろう。小人数でラッシュでアタックを行う方が良いと思う。

（竹中）

穂　高

一九六二年五月　長沢　道彦

五月四日

涸沢ヒュッテ入り。連休山行に途中から入るつもりで出かけたが、涸沢に着いても誰も居ない。変な形の個人山行になってしまった。

五月五日

涸沢―北穂―奥穂―ザイテングラード―涸沢

あちこちでヤッホーヒトーツのコールをかけども山霧に声なし。

五月六日
長駆北尾根三・四のコルから、前穂奥穂を経て北穂南稜を下る。ヤッホーヒトーツのコールは依然として空しい。
五月七日
再び南稜から北穂に登り、祈る思いでヤッホーヒトーツと叫べどもせんかたなしや、あわれ一人で上高地に下る。（長沢）

燕―槍ケ岳縦走及び穂高岳沢（前期合宿）

一九六二年六月　小島和人（リーダー）、半場三雄、佐藤力、三森茂充、小野　肇、山本溢弘、高崎俊平、原　博貞、池知昭洋、石田信隆、佐藤久尚、他三名

六月一四日　曇のち晴
一の瀬（八・五五）―合戦小屋（一七・〇〇）
有明に着く頃より、一面の厚い雲の間から青空が見え、かすかに希望を与える。バスは前夜の豪雨の為、中房迄行かず、一の瀬より歩く。中房からの急登に、バテル一年生が続出。拡がった青空の事も忘れて、ほうほうの呈で合戦小屋に着く。
六月一五日　晴
合戦小屋（七・四五）―燕山荘（八・五五）
朝、ガスが濃かったが、燕山荘に着く頃にはすばらしい天気となる。山本が腹痛を訴え、山荘で休んだがなおらず、熱もあるので、下山させる。藤沢が松本迄、三森が中房まで送る。残りは、燕を往復し、近くの雪渓で訓練。梅雨時の好天で、槍穂の雄姿を間近にして、はやる心を押え難い。
六月一六日　快晴
燕山荘（六・四〇）―常念岳（一四・三〇）―テント地（一六・三〇）
前日にも増して好い天気である。全北アルプスが見える。全員おおいに張切って調子が良い。無理もない、すばらしい眺望であり静寂が支配している。縦走の良さの全てがある。だが強い太陽に照らされて、常念の登りの頃より頭痛を訴える者が多くなる。全てが、うまく行く事を望むのは無理である。
六月一七日　快晴
テント（七・〇〇）―蝶ケ岳（八・三〇）―ヒュッテ（九・三〇）―徳沢（一二・三〇）―上高地（一五・〇〇）―岳沢（一七・三〇）
今日も快晴。快調に蝶へ。槍穂の稜線が手に取る様だ。蝶ヒュッテからの下りは、良い道だが、一年生はヒーコラヒーコラ。上高地で藤沢に会い山本は大した事ないと言うので安心する。岳沢に入り、鉄門山岳会の遭難遺体が発見された事を知る。安らかな永眠を祈る。この夜、無気味な音を聞いたが、疲れのため誰もテントの外に出る者は居なかった。
六月一八日　晴
半場、三森、藤沢がコブ尾根へ、他は、天狗沢から西穂に向う。西穂隊は、天狗沢で訓練の後、昨夜爆発した焼岳を眺めながら稜線を辿る。「サブはすてき」一年生の言葉。帰りは西穂沢をグリセード。一年生もうまい。コブ尾根のパーティも途中でルートを外し、扇沢側の岩を楽しむ等、好調であった。
六月一九日　晴一時曇

小島、小野がコブ尾根へ。半場、佐藤力が南稜へ、他は、重太郎新道より前穂、奥穂を目指す。テントを出る時は、雲一つ見えなかったが、二時間と経たぬ間に、雪が舞い始める。ラジオの故障で天気図が書けず、予想もしなかった。奥穂に向ったパーティは前穂から引返す。コブ尾根パーティは、予定通り行動、稜線で南稜パーティを待ち、共に帰る。稜線は吹雪であったが、岳沢に着く頃、又青空が見え始めた。天候は下り坂らしい。

六月二〇日　快晴

又々快晴。小島、小野はジャンの飛騨尾根へ。他は、再度奥穂を目指す。ジャンのパーティは天狗沢から行く。飛騨尾根そのものは何の問題もない。出来るだけリッジ添いに登る。T2に居る頃、仲間がコブ尾根の頭にやって来る。今日で合宿も終りである。まったく天候には恵まれた。一、二年のみの山行であり、梅雨時でもあるので、ずいぶん種々の不安があったが、幸いにして全ての心配が外れた山行であった。

六月二一日　曇

今日はどんより曇っている。だがそんな事は問題ではない。全員意気高々と上高地へ下る。二年生は、三年生と合流、奥又に向うのだが、これ以上の期待はどだい無理。

（小島）

穂高・奥又白

一九六二年六月

蛭川隆夫（リーダー）、竹中彰、村上泰介、長沢道彦、名和泰三、中橋寿雄、倉知敬、小島和人、半場三雄、三森茂充、小野肇、高崎俊平　他一名

六月二一日　曇のち小雨

上高地―徳沢―又白池

前期合宿を終えた前期の面々と上高地で会い、一緒に、中畠新道を池へ上った。

六月二二日　曇のち雨

三峯リッジ（名和、半場、高崎）

東壁CBAフェース（倉知、小野）

同右北壁コンタクトライン（蛭川、長沢）

同右北壁（竹中、三森）

四峯明大ルート（村上、小島）

暗黒の空模様なのに強行し、結局、雨の中を登った。おまけに、A沢と下又白谷をまちがえるという破目になり、ここは、やはり停滞するべき日であった。リーダーの判断のまずさであった。

六月二三日　雨　停滞

午後から、中橋、他一名が入山した。

六月二四日　晴

四峯明大ルート（名和、小野、他一名）

同右北条、新村ルート（竹中、中橋）

同右商大ルート（倉知、村上）

同右甲南ルート（長沢、小島、三森）

五峯側稜（蛭川、半場）

高崎は下山。

六月二五日　曇

北壁コンタクトライン（倉知、竹中）

三峯リッジ（村上、中橋、他一名）

右以外の者は、揃って下山。

六月二六日　曇

残りの者も、撤収、下山、帰京した。

（蛭川）

前穂―北穂高岳

一九六二年八月　小島和人、佐藤力

八月二日　晴

最終バスで松本を出発。夕刻上高地到着。岳沢への道を三〇分。手頃な平地を見つけ、夕食後シートをかぶって眠る。小梨平の喧騒がここまで響いて来る。

八月三日

朝食の焼ソバがうまくできない。その為十分に食えず、苦戦が予想される。案の定、前期合宿で通い慣れた重太郎新道もキスリングではちょっとこたえる。佐藤がアゴを出してしまう。吊尾根からの景観に気分を一新するもピッチは上らず、到々奥穂直下で大休止。結果的にはこれがまずかったかも知れないが、ともかく体力を回復して奥穂を快調に下る。この頃から台風の影響が顕著となり、天候が崩れ出す。悪いことに涸沢鑓の下りの鎖場では一時間も待たされてしまった。風いよいよ強く、雨が降り出す。滑る岩場を重荷を背負って、やっと北穂の北峯直下に到着。大きな岩の陰で露営。強風に屋根にしたシートがあおられて、押えの岩が体の上に落ちて来る。雨で寝袋も濡れてしまう。明け方、ようやく風が弱まり、小降りとなる。気の毒にも小島は殆んど眠らなかった模様。

八月四日

穂高岳

一九六二年八月　高崎俊平　他三名

八月一〇日　曇

相変らず美しい岳沢に見ほれ、その下を歩く人の多さにはがっかりしながら出発。徳沢を過ぎた頃、朝メシを食っていなかったのに気づいて急にペースがにぶる。横尾の少し手前で三日前から居る友人が迎えに来るのに会い、ボッカ小屋の前の河原のテントに着く。

八月一一日　晴

今日は娘さん同行なのでゆっくりと登る。本谷橋も涸沢小屋も順調に過ぎたと思ったのもつかの間、ザイテンの登りでバテ出し、白出のコルでは、「もう歩けないから一人で行って来て下さい。」なだめたりすかしたりして、やっとの思いで奥穂往復。下りになると今までの疲れ面はなんのその走るようにして下る。

八月一二日

昨日のザイテンの下りで少しヒザを痛めたようなので、娘さん達の世話を友人にまかして河原に出て昼寝をして過す。

八月一三日

横尾↓徳沢↓明神と快調なペースで来たので、明神からは梓川

の右岸の道を行く。途中倒木やら押し出しやらがあって、意外に時間がかかる。上高地からのバスは超満員であった。（高崎）

槍ケ岳

一九六二年一〇月　長沢道彦、村上泰介、他一名

一〇月一三日
大町―七倉―湯股
からっと晴れあがった秋山、の予想は早くもはずれた。例によって湯股までの長い道をショボショボと歩く。湯けむりを望む河原にシートを張って一夜の宿とする。終日、雨。

一〇月一四日　停滞
のんびりしたいと意見がまとまった所で憂うつな天気の朝を迎えた。湯股の湧泉を探索。

一〇月一五日
湯股―天上沢―槍―天上沢
天気も回復。さて、と歩き出した。千天の出合いを経て天上沢を上部へと直上する。途中に再びシートを張り、槍を往復。デポ用シートの仮りの宿りに秋の夜風は冷たいが、寝返りをうてば満天を飾る豪華な星くずだ。めったに食えないカンヅメ料理をたらふく食って、岩蔭に身をかがめるようにして、さあ心地よい疲労をいやそう。

一〇月一六日
天上沢―西岳コル―槍沢―上高地
ゴロゴロした沢をいくつか横切って西岳のコルへ突き上げている沢をつめ、霧雨の痛いコルに出る。ただちに槍沢へ下り、駈けるようにして横尾、徳沢を経て上高地へ。歩きながら、この山行は楽しかった、と思い、どうもズサンな山行だった、と言いあい、帰って報告したらどえらく叱られるぞと観念しあってバスに乗った。後日、やっぱり、お小言を食ってしまった。（村上）

穂高岳（秋合宿）

一九六二年一〇月　蛭川隆夫、竹中彰、小島和人、三森茂充

一〇月一七日　晴
木村氏宅にてオーション会時代からの、荷物（といっても、ガラクタ）を整理する。昨今は、山にも泥棒が横行するとの話に、荷上げ用品の一部を置いて行く。横尾では、新雪のラッセル腰までと聞き、計画変更。

一〇月一八日　晴
春山偵察のため、横尾尾根に向う。本谷橋の上手、二股のあたりから、支尾根に取付いたが、やぶこぎに悩まされて、夕暮の迫る頃、P5の一角に着く。

一〇月一九日　晴のち曇
どうもピッチが上らない。しかし、周囲の素晴しい景観に慰められて、南岳の稜線に出る。ガス濃く小屋の所在地がつかめず、やむなく中岳の下にテントを張る。雪の上の夏テント。夕方には小雪も舞ったが、風がないので助かる。

一〇月二〇日　曇
南岳の避難小屋まで進んで、キレットを往復。夜は雪が降る。明日が心配だ。

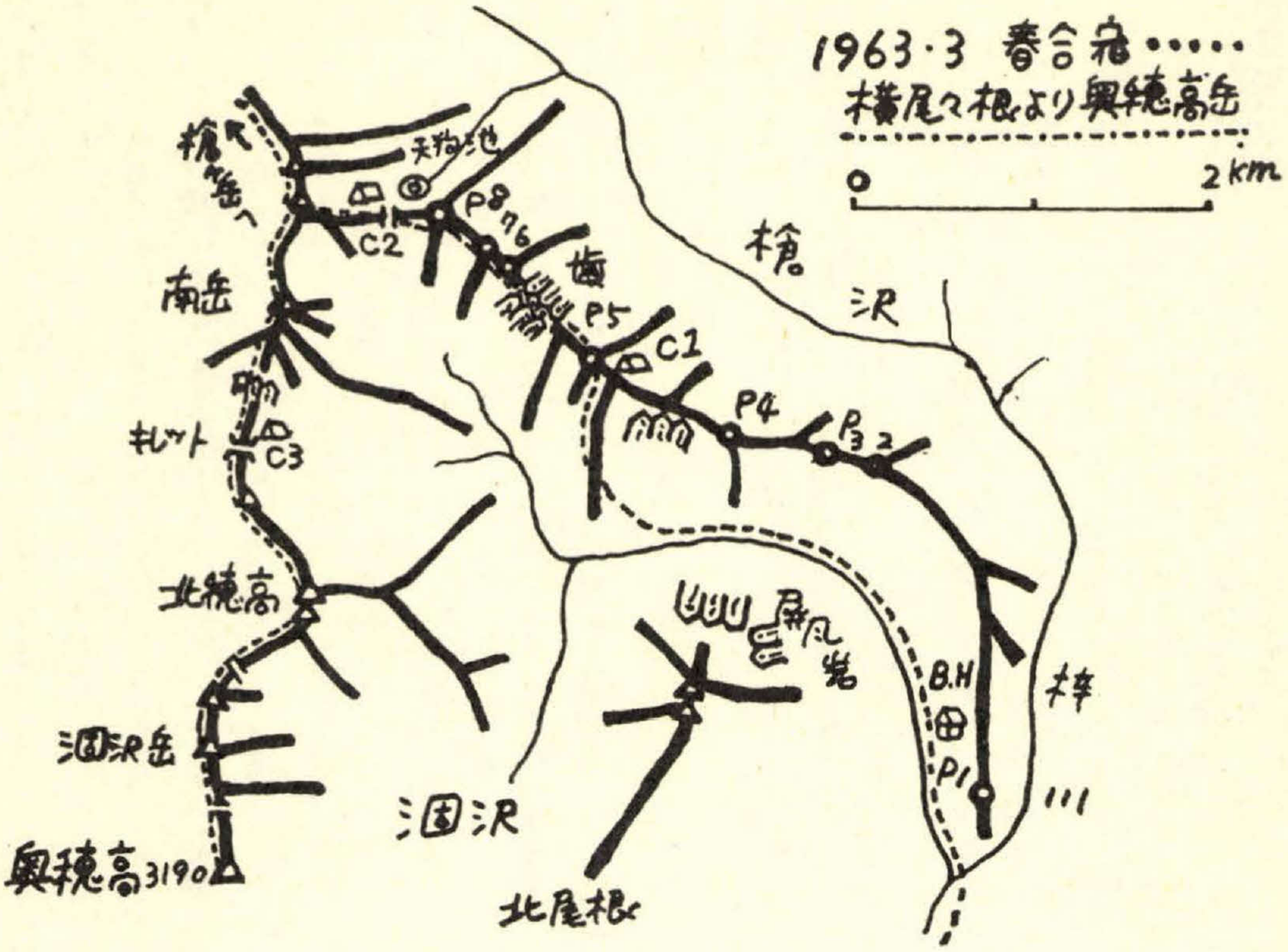
一〇月二一日　晴
　案の定、所によっては、ひざまでもぐるほどのラッセルとなる。その上、今日のキレット通過の先陣である。冷たい手足に苦しみながら歩いて行く中に、後から空身の人々がやって来る。キスリングの僕等にかわろうともしないで、ついてくる。北穂小屋では、小山さんから、ずい分遅いねと笑われてしまう。そこで、頂上に天幕をはる。
一〇月二二日　晴のち曇
　さすがに、ここらは人が多い。その人々が出払った小屋でドーナツなど食べながら、そのまま、すっかり腰を落着かせてしまい、あわてて撤収する。涸沢岳の登りが意外に悪い。奥穂まで来てやっとアイゼンから解放され、前穂経由で岳沢へ。ところが、水がないので、上高地まで、と一挙に里心がついてしまった。明日はもう帰ろう。
一〇月二三日　曇
　短かかったわりに、満ちたりた山行だったと思いつつ、バスに乗り込む。
（蛭川）

横尾々根から奥穂高岳（春合宿）

一九六三年三月

蛭川隆夫（リーダー）、竹中　彰、村上泰介、長沢道彦、本間　浩、小島和人、佐藤力、半場三雄、小野　肇、佐藤之敏、高崎俊平、池知昭洋、石田信隆、原　博貞

二月二八日
　先発隊の三名離京。
三月一日　雪
　先発隊の中の湯まで。
三月二日　晴
　先発隊は木村氏宅まで。
三月三日　雪
　先発隊は横尾B、Hまで往復してボッカ。本隊離京。
三月四日　曇
　先発隊B・H入り。本隊は、バスの一時不通によって湯川渡泊りとなり、ボッカに専念した。
三月五日　晴
　先発隊上高地まで逆ボッカ。本隊は三名が上高地入りをし、残りは一日中ボッカで動きまわり、坂巻に泊る。
三月六日　晴
　五名が明神に泊った他は、全員B・H入り。
三月七日　晴
　残った五名もB・H、に入り、これで横尾にかつぎあげた。
　荷も、B・Hからの逆ボッカである。竹中以下三名横尾々根のP5までラッセルをつける。秋にボッカした赤のナイロンザイルが盗まれていることを知り、悲しい気持になった。
三月八日　晴
　竹中は膝を痛めて沈澱（結局一一日に下山した）。村上以下三名は横尾々根にC1を設営し入った。残りはそれのためのボッカをした。
三月九日　曇のち雪



村上以下三名は横尾々根をトレースして南岳避難小屋まで往復した。横尾の歯は若干やせた岩のリッジが凹凸をなしてつづいている所である。すでに先行パーテーのフィックスがあって、我々は屋上屋を架す愚をさけてそれを借用することにした。一方、P5にさらに天幕を一張出して、長沢以下四名が入った。

三月一〇日　雪

降雪でもあり、休養ときめて沈澱とした。

三月一一日　晴

C1の七人のうち四人は天狗池コルまでラッセルした。一昨日のトレースは完全に埋ってしまい皆苦労した。二人はB・Hまで逆ボッカ。B・Hに残っていた笹川以下四名は、P5の一角に三張目のテントを設営して入る。夜リーダー会を開き、竹中下山に伴って村上をかわってアタックメンバーとすることに決定した。

三月一二日　曇

今日は、後発の者を迎えにゆく一名をのぞいた全員でC2Hを建設地までボッカをし、無事C2Hを建設した。C2Hには村上、小島、本間の三名が入った。

三月一三日　地吹雪

（C2H）

正午に総出で積んだブロックは強い東風でたちまちに崩壊してデブリの如き惨状を呈している。風向は一定せず、主として東風であるが、天幕は常に揺れ動き、入口からは出入りの度に雪が飛びこんで次第にせまくなる感じである。風邪気味のメンバーだが、気力は旺盛で、西に真紅の夕映えを望んで明日の好天を期待した。サポートには小野に代って本間

にやってもらう予定だ。就寝七時。風は衰えない。

（C1）

すごい地吹雪である。槍沢から吹きあげる雪がC1の二つのテントを埋めようとする。全員総出で雪かきをやってもおいつかない程であった。除雪を夢中でやっているうちに失神する者まで出る有様であったが、夕方近くになってさしもの強風も収ってきたので一安心してテントに入った。停滞とはいえクタクタであった。

三月一四日　晴

（C2H）

小島が風邪で不調の為、村上、本間で偵察に出る。八時四五分出発。三ピッチで一一時三五分A沢コル着。キレットは朝方のみクラストして悪いが、途中の尾根は案外楽にボッカできる。A沢コルの直前に普通ならフィックスが必要と思うが、メンバーに上級部員が多いのでなくても良いようだ。一時三〇分C2H着。長沢がC2Lより入った。

（C1）

蛭川以下五名天狗池コルにC2Lを建設した。

三月一五日　曇のち晴

（C2及びC3）

七時半C2H発。用心しながらキレットを通過、ごくあっさりと、正午すぎにC3を建設した。C2Lより来る蛭川、佐藤を伴って、これに長沢、本間のサポートが加わって北穂を往復。村上、小島は奥穂往復に備えて休養と準備に費す。サポートの報告によるとトレースは完全であってハイウェイのようだ。早大岳友会は我々と入れ違いに撤収を始めたらしい。

（C1）

停滞。

（C2L）

蛭川、佐藤（力）の二人でC3建設のサポートをした。C3地は予定通りA沢コルである。時間があったので北穂頂上を往復したあと、C3隊の健斗を祈りつつC2Lに戻った。

三月一六日　雪

（C1・C2L・C3）

降雪でともに停滞。

三月一七日　地吹雪

（C3）

夜来の降雪で一㍍余り積った。六時半出発。北穂の直下、B沢コルで、検討の結果、アタックは困難なことはトレースが直ちに埋まって偵察の意味も薄い、これだけ強い風でC3へ戻る。二時半。除雪はすれどもすれどもすぐにやり直しだ。食糧事情も芳しくない。ルとはすっかり変ってしまった。これが本当だ、と判断して、Cを新たにし明日こそ晴れると祈りつつ眠る。風がゴーゴーとなる。

三月一八日　快晴

（C3）アタック隊の記録。

アタック隊（村上、小島）六時一五分C3発。サポートは余りの器具をC2Lに戻し、アタック終了翌日にC3を撤収できるべく、横尾々根へ。さてアタックの行動は次の通りだ。

八時〇〇分北穂―八時三〇分北穂南峰―九時四五分涸沢コル―一一時五分唐沢岳―一一時三〇分白出沢コル―一二時二五分奥穂―一時白出沢コル―三時涸沢コル―五時北穂―七時二〇分C3帰着。

かくして合宿の第一目標を達した。行動一三時間、全くの新らしいトレースで本当にアタックらしくなった。使用ザイルはナイロン四〇㍍、すてなわ一本、三ツ道具は使用に及ばなかった。北穂直下の斜面で日没を見、ライトを照らしてC3へ下った。途中、滝谷側をまくヤセ尾根、唐沢岳の下りがやや悪かった、と言えようか。C3帰着後、サポートの用意してくれたメシとシルコを食い、C2Lに交信して無事往復を伝えた。九時就寝。

（C1・C2L）

三月一九日　曇のち晴

（C3）

快晴とてアタック成功まちがいなしと思いつつテントで待機した。夕方になって北穂がガスで隠れる頃交信で成功を知った。

七時半起床。残飯整理でゆっくり朝食を取り、雪に埋もれたテントを倒し、一〇時半A沢コルをあとにする。キレットでGACの捨て残しの食糧など見つけ、重い荷にあえぎながら南岳を経て一時半、C2Lに下る。久し振りに皆と会い、楽しい夕食となった。

（C2L）

三月二〇日　晴

C2Lのメンバーは全員で槍ケ岳を往復。槍は大分雪も少なく鎖も出ていたので、アイゼンを岩にひっかけないよう注意すれば問題はなかった。むしろ途中で中岳の下りの方が緊張させられた。

三月二一日　快晴

C2Lも撤収し、全員B・Hに集合と半場は、中岳から槍沢に間はC2Lから槍を往復した。尚長おちる小さな雪稜を経て槍を往復した。

アタック隊と昨日槍を往復した五人とはC2L・C1各一張りを撤収してB・Hに下った。横尾々根取りつきの支尾根は雪が大分少なくなっており、春の訪れをかんじさせた。

三月二二日　晴

上高地中の瀬にテントを移した。明日から西穂高岳往復をこころみるためである。

三月二三日　晴

膝を痛めたので佐藤（之）は村上に伴われて下山。蛭川他五名が西穂を往復。トレースがあったのでなんということもなくテントに戻った。

三月二四日　雪

ひどいボタン雪が降っており、第二回目の西穂往復は断念した。テントをたたんで木村氏宅に入り、コンパを挙行した。こんどはよく歌がはやったことをおもわせた。

三月二五日　晴のち曇

新雪がかなりつもったのでスキーをつけて下山したが、やはりペースがそろわず依然としてワッパの方が威力を発揮した。

（蛭川）

■南アルプス・中央アルプス■

甲斐駒・仙丈ケ岳

一九六〇年四月　中川滋夫、有賀　盈、朝木大統、遠藤昌土
後閑勉六、蛭川隆夫、中橋寿夫、名和泰三
本間　浩、長沢道彦

四月三〇日　夜、新宿発
五月一日　晴　伊那北―北沢峠
五月二日　曇　仙丈往復
五月三日　晴　仙水峠―甲斐駒往復
五月四日　晴　往路を下山

新入部員にとり、初めての山行。じっくりと山に馴染めるようにというわけで、南アルプスを選んだ。深くて大らかな山々に、目的は充分に達せられたようだ。

（有賀）

甲斐駒・仙丈ケ岳

一九六〇年五月　小島　和人

五月一〇日　快晴

戸台―丹渓

昼頃知人の車で伊那を発つ。戸台部落から少し戸台川を溯った所で車を降り、戸台の河原につけられた平凡な道を進む。真夏を思わせる太陽が照りつけ、河原の反射と相まって、日射病寸前の状態で丹渓山荘に着いた。河原でツェルトをかぶって寝る。

五月一一日　晴

出発（五・五五）―長衛小屋（八・三〇）―北沢峠（一三・一〇）―仙水峠（一七・四五）―北沢小屋（一八・二〇）―仙丈（一一・一〇）―北沢峠（一三・一〇）―駒津峰（一五・四〇）―甲斐駒（一六・四〇）―仙水峠（一七・四五）―北沢小屋（一八・二〇）

一夜の熟睡で元気回復、一人喜々としながら北沢峠に向う。長衛小屋に荷を預け、仙丈を目指す。頂上には誰も居なかった。北岳の雄姿が、甲斐駒の峻峰が間近に見えた。なんとなく淋しくもあったが、まわりの山々が全て自分のものになった感じがして、しみじみと喜びが湧いて来た。北沢峠に下り、直接駒津峰に向う。稜線伝いに甲斐駒に登る。夕暮近く折重って近づいて来る雲が明日の悪天の兆を思わせた。僕しか居ない頂上に風が容赦なく吹きつけ、淋しく雄大な自然の中に、余りにも小さな自分の存在を感じて長衛小屋に駈け降りた。

五月一二日　雨

出発（八・〇五）―戸台（一〇・五〇）

雨天を予想して小屋に泊った事はよかった。夜半より激しい雨が屋根を打っていた。北岳行の計画は中止。学校のことがずいぶん気になった。躊躇することなく、雨の中に小屋を飛び出し、もと来た道を伊那に向った。

（小島）

北岳バットレス

一九六〇年九月　大　建二郎、遠藤昌士、倉知　敬、臼井
弘、蛭川隆夫、名和泰三、伊藤重道

九月一七日　晴のち雨
甲府―芦安―鷲住山（一五・〇〇）―池山小屋（一九・〇〇）
早朝立川を発ち、甲府からバス、トラックと乗りついで、野呂川林道から鷲住山へ入る所から歩き出した。荒川小屋に着いてもまだ時間が早かったので、暗くなるのも覚悟で池山小屋まで足を伸ばすことにした。池山尾根への急な登りで相当にバテたのも居たが、暗くなっていくらもしない内に小屋に着くことが出来た。池は涸れていて水は下の水場へ取りに行かねばならなかった。炊事する元気もなくポソポソとパンとジュースを流し込んで、すぐ寝てしまった。

九月一八日　雨一時曇
池山小屋（一〇・〇〇）―幕営地（一二・〇〇）
小雨なので出発の準備をして待つことしばし。やや空が明るくなったので出発した。一時止んだものの、しばらくして又降り出した。しかし折よく一人がからきしのびてしまったのをきっかけに、樹林帯の中にテントを張ってもぐり込んだ。フライで雨水をため、又付近の急な沢を苦労して降りて水をくみに行き、ようやくゴハンにありつくことが出来た。夜になって木の枝の間に星が見え出した。天気図によれば日本南岸の前線が南下し、華中の高気圧が張り出して居る。明日の好天が科学的に予想出来るというわけだ。

九月一九日　晴のち雨
幕営地（七・一〇）―バットレス
風は強いが、空はカラッと晴れている。八本歯からの大樺沢への降り口もすぐわかった。バットレス沢出会のテント場跡に幕営。
偵察方々、大と倉知は第一尾根へ向った。その頃から、層雲が北へどんどん流れ出し厚くなって来た。第一尾根に取付いたら、アッという間にガスに取りかこまれてしまった。さっぱりルートがはっきりしないが、適当に稜線めがけて登り出した所、一ピッチ目にしてオーバー・ハングにぶつかった。大が再三試みるも、その度にハデに落ちるわ、石は落すわで、結局早々に退却。バットレスとはすごい所だワイ、と思ったが、後日普通のルートはもっと右のやさしいルンゼだとわかって落胆した。
今回、我部では初めてヘルメットを着用したが、正にその使い染めのこの日、取付の所でトップが落した夏ミカン大の石がラストのヘルメットの真上にゴツンと当り、ヘルメットはそのデビューをかざった次第である。

九月二〇日　ガス　停滞

九月二一日　曇一時晴
テント（九・一〇）―第四尾根取付（一〇・二〇）―頂上（一四・三〇～一五・〇〇）―テント（一六・三〇）
臼井、名和、伊藤は池山尾根を下山。他の四人は一緒に第四尾根へ向った。この日、緩傾斜帯入口で一寸晴れたきり、あとはずっとガスにまかれたままであった。大と遠藤、倉知と蛭川に分けて登る。お互に他のパーティの登攀ぶりを批判などしつつ、我々

だけの静かなガスの中の岩場を楽しんだ。いささか張りつめた緊張感のない登攀だったけれども。

九月二二日　快晴

テント（九・一〇）―取付（一〇・二〇）―頂上（一三・〇〇～一三・三〇）―テント（一五・〇〇）―撤収（一六・〇〇）―北岳小屋（一九・〇〇）

第一尾根を大と倉知、第三尾根を遠藤と蛭川で登る。きのうは打ってかわったのどかな日で、温かさにひたるような気分。移動性高気圧の後面に入って、ようやく晴れたわけだ。第一尾根は慎重に普通のルートをたどり、右に派生する支稜を登って尾根上に出た。先日は下半部右の側壁のスゴイ所を登ろうとしていたことがわかった。尾根上に出れば小さなオーバーハングの乗越しだけが岩登りらしい所で、あとは容易なガレガレの稜。一時間位で登ってしまって拍子ぬけしてしまった。べんとう岩の所で三尾根組を待つ。一年生の蛭川君の健闘よろしく第三尾根も三時間足らずで登り切った。

頂上で明日の行動について喧々囂々議論したが、結局「山登りは歩くが基本」の論が勝って、白根三山縦走をすることになった。テントに帰ってからアタフタと片付けて北岳小屋へ急いだ。暗くなって着いて見れば小屋番氏ががんばって居た。

九月二三日　晴

小屋（六・〇五）―間の岳（七・五〇）―農鳥岳（一〇・〇五）―大門沢小屋（一三・〇〇）―奈良田（一七・二〇）―西山温泉

蛭川は一人、池山尾根を下る。天候悪化の兆しあり。残る三人は西山温泉目指して、馬車馬よろしく歩め、急げや急げとグングンとばし、登って下って暑さにうだって、いいかげんうんざりして何やら工事にざわめく奈良田に着いた。バスで温泉へ。

九月二四日

西山温泉―東京。

（倉知）

鳳凰三山

一九六〇年九月　石　弘光

大学院の入試も終り将来の方針も確定したとたん、今まで抑圧されていた登高欲がもりもり湧いて来た。仲間もいないので白根三山の縦走を目指し一人で出発。しかしトレーニング不足でドンドコ沢の登りでアゴ。鳳凰三山の縦走になってしまった。

九月一六日　曇、むし暑い。

韮崎（四・四〇～六・三〇）―穴山橋（七・〇五）―平川峠（八・二〇）―青木湯分岐点（九・三〇）―青木湯（一一・〇〇）―南精進の滝（一三・四〇）

バス連絡悪く駅でひと寝入り。途中一人同行者を得たが一ピッチも行かないうちに悲鳴を上げだしたので、先に行くことにする。御座石湯の親爺にさそわれたが、予定通り青木湯廻りでドドコ沢をつめることにする。河原の道を誰にも会わず汗を流し流しトボトボ歩く。しばらく体を動かさなかったので、ドンドコ沢の急登にかかるととたんにピッチが落ちる。南精進の滝でついにダウン。ツェルトを張って早々昼寝とする。

星のきれいな晩で、唯一人でドンドコ沢を独占し滝ツボの音を耳にしながら一夜を送る。

九月一七日　晴のち曇
南精神の滝（六・三〇）―白糸の滝（八・一〇）―五色の滝（八・四五）―北御室小屋（九・二〇～一〇・一〇）―地蔵岳（一一・二〇～三〇）―観音岳（一二・五〇～一三・二〇）―薬師岳（一三・五〇～一四・〇五）―南御室小屋（一五・〇〇）
地蔵岳で、北岳へ登るために広河原へ下るべきか否か、大分考える。結局、まったくファイトなく一八〇度逆方向へ足は向いてしまった。ガスがかかり展望悪く何も見えない。その中を重い体を引きずりつつ、いくつかのピークをこえて、南御室小屋へ到達。と、同時に雨が降ってきた。小屋番の女の人は、国立高校の出身で話がよくわかる快適な山女であった。（後日談、くるみをもって部室を訪問してくれたのだが、小生北鎌へ行っていて不在、証拠にわずか二ケのくるみが手渡された。畜生!!）
九月一八日　雨
小屋（八・三〇）―夜叉神峠（一一・三〇）―芦安
朝から雨、その中をとび出して夜叉神峠に向う。雨の中の峠も、なかなかよいものである。芦安へ向う途中トラックを見付ける。
（石）

三伏峠―光岳（秋合宿）

一九六〇年一〇月

一〇月一二日　曇
伊那大島―釜沢（一一・〇〇）―三伏峠（一八・二〇）
バスで大河原まで。そこから運よく通りかかったトラックに便乗させてもらって釜沢部落まで歩かずにすんだ。釜沢は谷の中腹の開けた所にあって、景色のよい落着いた部落だ。村人は皆働きに出ていると見えて人かげもない。真中を通りぬけて谷ぞいにしばらく行った所で、道は民家の庭へ入っていってしまう。門をたたいて尋ねてみると、道は正にコレだということで、ついでにすすめられて、その縁側で食事をさせてもらった。お茶など出してくれて恐縮することしきり。このままここらでボンヤリして居たいな、と思うがしぶしぶ腰をあげて親切なオバサンに別れをつげる。ここから樹林の中のゆるい登り。道もよい。しかしそれは樹林を伐採中の所までであった。伐採用の小屋を越えた所からは倒木多く、道は不明瞭、しかもダラダラと長い。鹿塩から登る道にくらべ、こちらの登りは比較的楽なので、どうしてこちらの道をあまり使わないのだろうかと初めは話し合っていたのだが、ここでわけが分った。三伏峠に着いた時には、鹿塩からの急な登りをはたした時以上に疲れはてて居た。三伏小屋には、意外や小屋番氏が居られたので、ケンヤクすることにして小屋横に幕営。

一〇月一三日　曇
小屋（九・二〇）―烏帽子岳（一〇・一〇）―小河内岳（一一・三〇）―日影山（一二・四〇）―高山裏（一四・一〇）
この山行で新調した石油コンロが調子悪くさっぱり点火しない。くさりながら前夜の雨でしめった木の枝を集めて苦労して炊事。お蔭で出発も遅れてしまった。
ガスの中を登る。冷い風が吹いて気の滅入る日である。しかし小河内岳を越えて樹林帯の中に入ってからは風もやみ空も明るくなって、どうやら南アルプスの静かなふんいきを味わう余裕も

出て来た。

そもそも、こういう所へ来るようになったのは、今年の夏合宿に岩登りを充分することが出来たので、秋には幅広い登山を目指すという意味で、部の方針として縦走をすることになったからであった。しかし、黙々とこうして歩きつづけていると、何とも物足りない空洞が胸の中に出来たようでわびしき限り、さりとて速さを競ってしゃにむに長時間とばすというのもセンスのない話だろう。三年二人、二年一人、一年一人のパーティーではもう少しましなことも出来そうな気がする。そんなに計画性のあるようにも思えない部の方針より、個人個人の好きな行き方を自由に伸ばしてくれるような大らかさが部に欲しいような気もする。

この日は荒川岳を越えるには時間不足のようなので高山裏露営地泊りにした。

一〇月一四日　晴一時曇

テント場（七・二〇）―百間洞小屋（一五・〇〇）―荒川岳（九・二〇）―赤石岳（一二・一五）―百間洞小屋（一五・〇〇）

いい天気なので足も伸びる。この日は荒川と赤石の二つの大きい山を越えた。どちらもスケールの大きいりっぱな山容を持つ山だが、石を積んだでかいボタ山みたいな気がせんでもなく味気ない。でも高いということはいいことだ。遠くまで続く山なみをながめながら行けばそう快な気分である。休憩の時にはトランジスタ・ラジオで日本シリーズなど聞きつつ。

百間平を下った所から稜線を左にはずれて沢ぞいに下り、谷にひっかかるように建っている百間洞小屋に入った。

一〇月一五日　晴のち曇

小屋（七・三〇）―聖岳（一二・〇〇）―聖平小屋（一三・三〇）

大沢岳は省略して、次の中盛丸山手前のコルに出る。機械的に足を運ぶことにも大分なれて来て、かなりのスピードで歩くことが出来る。いくつも続くコブもさして苦にならない。目前にバカに大きくそびえていた聖岳も一気に登ってしまった。それにしても、荒川、赤石、聖と同じような大きな山が三つもよくそろったものである。聖平小屋に泊る。

一〇月一六日　曇のち雨

小屋（六・三〇）―仁田池小屋（一〇・三〇）

光小屋まで行くつもりで早立ちした。しかし、しばらく行くと小雨が降り出し、また道もこの辺りから倒木多くなってはかどらない。まき道がある小河内岳に登ってしまってくさった。

小河内岳を越え、五万分の一の地図の上で「御花畑」の印のある所まで来た時であった。折から雨もやみ、ガスも晴れて目前に草地の窪地が現われたが、その真中に一匹の褐色のカモシカが立っていてジッとこちらを見ているではないか。りっぱな角のはえた大きなカモシカだった。思わずアーッと見とれてしまったが、気をとりなおして急いでザックを降ろしカメラをとり出そうとした。しかしカモシカはそんなひまも与えてくれずに、スローモーションの一コマを見るごとく優美な跳躍をして木の間に姿を隠してしまった。あわてて追っても無駄だった。開拓時代の猟師にでもなったような気でその深閑とした窪地を通りぬけたものだった。

仁田岳に近付いた頃から雨足が激しくなって来たので、仁田池

のオンボロ小屋に泊ることにした。三井は用事で池から井川に下った。

一〇月一七日　風雨強し　停滞。

一〇月一八日　曇時々晴

小屋（七・一〇）―光岳（一一・〇〇）―柴沢小屋（一六・〇〇）

ガスの中を出発。聖平あたりから出て来た倒木が激しくなって来た。道も所々不確かである。木の幹に黄色いペンキをぬった貧弱な道標をたよりに歩く。光小屋から、木を伐って空地をつくってある光岳のケチな頂上まで往復してから、寸又川に向って降りる。ここからはもう道など消えてしまった。枯れた木が折り重なって倒れている。まるで倒木の海だった。その腹立しい枯木の山をくぐりぬけたり、よじのぼったり、ひどいアルバイトをつづけなければならなかった。それでもうまいことにはどうやら道をはずれないで、寸又川にかかっているいまにも落ちそうなツリ橋に出ることが出来た。これを渡って少し行けば、これまたくずれかかった柴沢小屋に着いた。

一〇月一九日　晴

小屋（八・一〇）―釜ノ島橋（九・一五）―軌道車に乗る（一三・三〇）―千頭（一六・〇〇）―金谷

寸又川ぞいの軌道の跡をたどる。所々くずれてなくなっている。釜ノ島橋を渡ってから一度山腹を高まきして、再び沢に下ると軌道も整備されて居た。飯場でうまく軌道車に便乗させてもらうことが出来た。あとはいい気持でガタゴトとゆられながら、寸又川の渓谷美を楽んで山を降りた。

（倉知）

荒川岳―北　岳（秋合宿）

一九六一年九月　臼井　弘（リーダー）、本間　浩、蛭川隆夫、佐藤　力、藤沢恵一、小野　肇、小島和人、半場三雄

九月二八日　曇

新倉―転付峠―二軒小屋

小雨の時々パラツク中を意気の上らない八人が峠を越えた。この夜、テントの中に置いといた肉をごっそりイタチに食われてしまった。うらめしいこと限りなしである。

九月二九日　晴

二軒小屋―悪沢岳

肉が消失したわけでもあるまいが、パーティーの足なみが少しもそろわず、遅延に遅延を重ねて、ついに悪沢岳頂上直下で半分ビバークのような形で露営。わずかに残った水を分けあい、ヨーカンを口に入れるが喉を通らない。せめてもと口にくわえた煙草のおかげで吐き気がしてきた。この時に至ってもリーダーが一滴も水を飲まなかったのは、さすがであった。

九月三〇日　晴のちガス

露営地―荒川岳―高山裏露営地

荒川岳の頂上で桃缶を開けているパーティーがいた。空になったかんが岩に落ちる音を複雑な気持で聞く。寸又川の軌道の跡をたどる。所々くずれてなくなっている。釜ノ島橋を渡ってから一度山腹を高まきして、再び沢に下ると軌道も整備されて居た。飯場でうまく軌道車に便乗させてもらうことが出来た。あとはいい気持でガタゴトとゆられながら、寸又川の渓谷美を楽んで山を降りた。

（倉知）

一〇月一日　晴のちガス

高山裏露営地―小河内岳―三伏小屋

時は、やはりうれしくなった。

我々もやっと調子が出てきた。適度のスピードで楽しい一日であった。晩秋の南の静かなたたずまいに打たれた。

一〇月二日　雨　停滞

一〇月三日　晴のち曇

三伏小屋―塩見岳―熊の平

塩見岳はさすがに大きな山だ。しかし、すっかり元気になってしまった我々は、なんとも思わない。熊の平はジメジメしていてあまり快適な所ではない。

一〇月四日　曇のち雨

熊の平―北岳小屋―北岳往復

再び三〇〇〇㍍の稜線に出るとひどく冷いガスの世界であった。北岳の頂上は雨の中で早々に引き上げる。それでも小屋に落着いて、残った食糧を次々に平げているうちに、再び元気がよみがえってくる思いである。

一〇月五日　曇

北岳小屋―吊尾根―荒川小屋―芦安―甲府

吊尾根は自然にかけ足になってしまう。それでも一年生はぴったりとついてくるので、強くなったものだと妙な所で感心した。帰りのバスで、あそこでバットレスが見えたの見えなかったのと議論したが、天候のことを考えても、見えなかったのは下ばかりむいて懸命に歩いていたからであろう。

（蛭川）

荒川岳―光岳

一九六一年一〇月　遠藤昌士、宮本英治

一〇月一五日

静かな秋の山歩きを楽しむべく、遠藤と二人で南アルプス南半の縦走をした。

一〇月一六日　晴

身延（五・一〇）―田代発電所（八・四〇）―転付峠（一五・一〇）―二軒小屋（一六・一〇）

バスで、身延山に登るというおばあさんの話を聞き、信仰の力とはいえ、その意気に感心した。転付峠迄のゆるい登り、他の登山者もなく、静かな山の雰囲気に満足しながら歩く。紅葉には少し早い。二軒小屋泊。

一〇月一七日　晴

出発（六・四〇）―マンボー沢の頭（一〇・四〇）―千枚岳（一二・四〇）―東岳（一三・五〇）―中岳―荒川小屋（一五・三五）

小屋の主に、明るい内には荒川小屋に着けないよ、と驚かされて、吊橋を渡ってからの急傾斜を一時間半ピッチで頑張る。マンボー沢の頭を越える付近から、赤石岳、聖の連山が見え出した。ほぼ山日記通りの時間で荒川小屋に着いた。他に三パーティいた。北岳から単独行の奴、荒川岳付近で熊にあったとか。

一〇月一八日　晴のち雨

出発（七・〇〇）―赤石岳（八・四五）―百間洞（一〇・二〇）―中盛丸山（一二・二〇）―聖岳（一五・三五）―聖小屋（一七・三五）

雄大な赤石岳を簡単に越えると、百間洞迄は平坦な這松帯、中盛丸山、兎岳、聖岳は登り下りの稜線、聖岳からの下りにガスで道を失い時間をロス、雨に追われて聖平小屋に逃げ込んだ時は暗

かった。

一〇月一九日　雨　停滞

昨日、二日行程分を頑張ったので今日の雨は丁度良い。小屋はガタガタ、他に二パーティ。夕方「にいちゃん、飯を炊かしてくれ」とでかいナベを持込んできた山梨大学山岳部の連中、一度炊いた飯を一日中食ってるとか。

一〇月二〇日　曇

出発（六・五〇）―上河内岳下（八・三〇）―お花畑（九・二〇）―仁田池（九・四五）―易老岳（一一・一〇）―光小屋（一三・五〇）

上河内岳はガスで視界きかずカット。お花畑は草のみ「雪島」と呼ばれる亀の甲状の雪どけ跡もはっきりしていなかった。ここ迄来ると紅葉の真盛りできれいだ。稜線の木は台風にやられ根こそぎに倒れている。今日のコースはいわゆる南アルプスらしい雰囲気のところで、縦走中で一番良かった。

一〇月二一日　雨のち雪　停滞

小屋の丸木にはえているきのこを食おうとしたが、遠藤が止めた。彼とケンカし、半日口をきかない。二人きりで一〇日も山にいれば一度位こんな時もあるものだ。

一〇月二二日　曇のち雨

出発（八・〇〇）―釜の島小屋（一六・〇〇）―金谷（一〇・四〇）―千頭（九・〇〇）―東京（一六・〇九）

通勤用のガソリンカーに乗車、渓谷沿いを進む。終点千頭で料金はと聞いたら「無料です。」最後の感激であった。（宮本）

甲斐駒ケ岳

一九六一年一一月　長沢道彦、本間浩

一一月一八日

韮崎から穴山橋に至るも、豪雨で一歩も動けず。橋のそばの公園内の堀立小屋に泊る。

一一月一九日

雨模様なれど出発。平川峠を越す頃より雨足が激しくなりずぶぬれになって御座石鉱泉につき、そのまま沈となる。

一一月二〇日

聖、兎岳連峰を振り返ると、昨日の初雪を纏って朝日に輝いている。感激の一瞬、これで山ともお別れだ。光岳の這松は丈が二、三位のもあり特別発育がよい。沼平へ下らずに、柴沢小屋の方へ

遅れをとり戻すために夜明けと共に出発し、けっぱって歩く。五時半暗くなって早川尾根小屋につく。

一一月二一日

アサヨ峯を経て甲斐駒頂上着三時。富士山合宿に参加せんと長沢はここで本間と別れ、尾白川に下る。尾白川は台風で荒れていて行程はかどらず、夜になって雨が降ってきたので、今日下るのをあきらめてビバーク。手持の「一橋論双」を燃して暖をとり歌を唱ってつらい一夜を過す。

一一月二二日

雨は依然としてやまず、荷物はすっかり水を吸って三倍位の重さとなっている。下降中徒渉に際して足をすくわれ、ついに寒中水泳。戻るべきと判断して五合目小屋に至ると本間に再会する。水をしぼって一緒に横手経由で帰京した。台風後の沢道の危険に対して充分な判断をなしえなかったことが、今回の山行の大きな弱点であったといえる。それにしてもいい経験であった。

（長沢）

鳳凰三山と白根三山

一九六二年八月　石田信隆、他三名

八月一二日　晴

新宿発（七・〇〇）―夜叉神荘発（一二・一〇）―南御室着（一七・五〇）

朝七時の準急で出発する。超満員の列車で甲府まで立ち通しだったのが響いた為か、たいして起伏のないのにこの日は皆大いにバテた。南御室へ着いたら既に暗くなり、他のパーティは飯を終っていた。

八月一三日　晴、夕立あり

出発（五・二〇）―地蔵岳着（八・二〇）―高嶺着（九・五〇）―広河原峠着（一一・三〇）―広河原着（一四・〇〇）

昨日は恥しかったからと三時に起床、暗いうちに出発する。快晴の空の下を、右後方の雲海に浮ぶ富士山を見、左下方に日陰になった今日の目的地広河原を見ながら、快適に鳳凰三山をこえ、昼前に広河原峠へついた。ここで夕立に会い、一気に広河原へ駈け降りた。雨はまもなくやんで、河原にテントを張り、水あび、たき火などして遊ぶ。

八月一四日　曇、夕立あり

出発（五・三〇）―御池着（八・〇〇）―北岳頂上着（一二・三〇）―北岳小屋（一四・四〇）

白根御池までは急な支尾根上の登りである。御池小屋で犬にむかえられ、追いたてられて草スベリの急登にかかる。曇り空に助けられ、真後に見える観音岳を高度の目安としながら登りきる。登頂祝いに何もないのでキウリをかじっていると、雨がポツリポツリときてまもなく大雨となる。細引のようなかと思いながら北岳小屋へと駈け降りテントをはった。

八月一五日　晴、夕立あり

出発（五・四〇）―間の岳着（七・五〇）―西農鳥岳着（九・三〇）―大門沢分岐着（一一・一〇）―大門沢小屋着（一二・五〇）―幕営（一七・五〇）

冷たい風が吹く稜線を大きな富士山を見ながら歩く。中央アルプスの方にポツンとある積雲を見て今日も恒例の夕立が来るゾと

急いだ。案の定雨がきたが、我々は寸前に大門沢小屋へすべり込みセーフ。猛烈な雷雨の中をゾクゾク逃げてくる人達を、お茶を飲みながら見るのも楽しいものである。夕方、雨が静まった頃出発し途中でテントを張った。

八月一六日　晴

出発（五・三〇）―奈良田発（七・一五）―甲府着（一〇・二〇）

四〇分も歩くと発電所へ着き、一番バスへ乗ろうと奈良田へ急いだ。

荒川岳―光岳（秋合宿）

一九六二年一〇月　長沢道彦（リーダー）、本間　浩、小野肇、石田信隆

一〇月一四日

新宿を夕方発ち、甲府駅でステーションビヴァーク。

一〇月一五日　晴

甲府発（五・一〇）―新倉発電所（九・〇〇）―保利沢小屋（五・五〇）―転付峠（一四・〇〇）―二転小屋（一七・一〇）

前夜、甲府駅で寝たにもかかわらず、転付越えはなかなか長い。

一〇月一六日　晴

発（六・五五）―マンボー沢の頭（一一・五五）―千枚岳（一四・五〇）―荒川小屋（一九・五〇）

マンボーの登りは全くこたえる。行けども行けども森林帯である。更に千枚、悪沢と登りが続くのでいやになる。しかしどうにか暗くなって荒川小屋に到着し、ビバークは免がれた。

一〇月一七日　晴

発（一〇・〇〇）―大聖寺平（一〇・一〇）―百間平（一四・四五）―百間洞山の家（一六・一〇）

前夜遅かったため、出るのが昼近かったが、楽しい南の山歩きだった。大聖寺平は、広々とした草原で、赤石岳が眼前に迫っている。

一〇月一八日　晴

発（六・二〇）―中盛丸山（七・二五）―兎岳（九・〇〇）―聖岳（一一・四〇）―聖平小屋（五・四五）

聖平小屋は倒木に囲まれた絶好の位置にあった。仁田池までは少々遠く、早いが泊ることにする。

一〇月一九日　晴

出発（七・四〇）―上河内岳（一〇・五〇）―茶臼岳（一三・二〇）―仁田池小屋

ぼかぼかした太陽の下のお花畑で昼寝をし、草原情緒を味わう。仁田池畔の夜は素晴らしい。

一〇月二〇日　晴

出発（九・四〇）―仁田岳分岐（一〇・〇〇）―易老岳（一一・二〇）―三吉小屋跡（一三・〇〇）―光小屋（一四・二〇）

今までと違った、じめじめとした縦走路であった。倒木の為、道がわかりにくい所もある位である。赤い三角屋根の光小屋は、水場が少々遠いが、仲々良い小屋だ。

一〇目二一日　晴

出発（七・三〇）―光岳（七・四五）―百俣沢の頭（八・五〇）

—柴沢小屋（一〇・三〇）—大根沢軌道連絡点（一四・一〇）
光の頂上からもどって、ムギウネボツを下る。大根沢の飯場では、じいさんに風呂に入れてもらい、この辺りの山の事などいろいろ話してもらう。
一〇月二二日　晴
出発（八・〇〇）—千頭（一五・〇〇）—帰京
八時発の軌道に乗り、バスの終点の大間まで行く。（小野）

甘利山

一九六二年一〇月　大建二郎、他三名
一〇月二日
韮崎（五・五〇）—頂上（一一・二五）—韮崎（一七・二〇）
高校時代の友人達とぶらりと出かける。奥秩父と八ケ岳がよく見える。頂上は広い尾根の一部みたいな所で、これでも山というのかい、とブツブツ言う奴がいた。（大）

空木岳

一九六二年一〇月　倉知敬
一〇月二三日　快晴
一人淋しく駒ガ根駅で夜を明かしたあと、カサコソと鳴る落葉をふみしめ尾根道を行く。ひどく気のりのしない頼りない気持のまま、それでも着実に高度を稼いでいった。
毎度のことながら、森林帯を抜け出た時は爽快である。だが惜しむらくは、食糧が乏しくて（北岳行きの帰りがけなので）、腹がへってたまらない。頂上付近では、少し登ると息が切れアシがもつれて、どたりと腰を降ろすといったていたらくだ。見てる人が一人も居なかったのは幸いだった。
キラキラ光る流れの横に、ぽつねんと建つ空木小屋を横に見ながら、やっとのことで頂上に立つ。午後三時。丁度下から六時間。遠く、紫にかすむ飯田の盆地を見降ろして、いや、よく登ったナ、と自画自讃した次第。
下りは早い。木曽殿越えでやはり淋しそうな単独行氏に出会った。これから南駒まで行くという。中央アルプスは縦に歩く山でなくて横に越えるにいいところがある、という自説をちょっぴり述べて別れをつげ、一路木曽谷へ下った。暗くなる頃、河原に出て、ツェルトにもぐり込む。
一〇月二四日　快晴
空は抜けるように澄み切っている。紅葉はあくまで赤く、路にはカラーフルな落葉のジュウタンがしきつめられている。
峠を越え、倉本へ降りる。胸をしめつけられる様なやるせなさに身をまかせながら……。
それにしても、天竜谷ののっぺりした有様に比べて、この木曽谷のうるおいあるのどやかさはどうだ。ガランとした客車に足を投げ出して、うつりかわる谷のようすを見とれている間に、いつか眠り込んでしまった。（倉知）

中央アルプス縦走（秋合宿）

一九六二年一〇月　臼井　弘（リーダー）、村上泰介、佐藤之敏、佐藤久尚、河原　博貞、他一名。
一〇月一六日

夜、横尾尾根パーティと共に離京。目的は裏銀座縦走である。

一〇月一七日
上高地―横尾

一〇月一八日
横尾―上高地―木曽福島
裏銀方面の積雪が意外に多そうであったため、計画を急拠変更。上高地へ下りバスで木曽福島に夕刻着。急いで出発して途中の川岸に設営。イヤな所だ、街灯があるし、トラックが走る。

一〇月一九日
駒の湯―六合目小屋
荷が重くピッチが延びないうえに、一年生がバテ始めたのでやむなく六合目泊り。水場も遠く小屋も汚いが、夕陽はここでも美しい。

一〇月二〇日
六合目を発って風の冷たい稜線へ。西駒からは、天竜、木曽の両河を見降ろしながらの快適な歩行。ガスってきたので檜尾岳にて設営。

一〇月二一日
ガスっていたが迷う程のこともなく出発。予想通り東川岳へ向う頃には陽が射し始めた。雪の少し着いた稜線を、のんびりと楽しい縦走だ。空木岳を越え、スリバチカールへ下って石積みのボロ小屋に入る。

一〇月二二日
スリバチを発って南駒ケ岳を越し越百から与田切川へ下る。長い長い田舎道をたどって飯田線駅に出た。駅前の食堂で解散コンパ。予定の変更、一部の不調で問題のある山行だったが、結構中央アルプスも楽しい。東西の沢は面白そうだ。

（村上）

北岳

一九六二年一一月　村上泰介　池知昭洋

一一月一五日　雨
甲府よりバスで芦安に向う。ここでトラックに便乗させてもらい、広河原にて下車。吊橋を渡って大樺沢より御池小屋へ、雨の中を登る。小屋は人気もなく、周囲はもう、うっすらと雪だ。小屋泊。

一一月一六日　晴
小屋よりサブで、小太郎尾根へ。途中、尾根上の、避難小屋近くで池知がアイゼンに馴れていないと言うので便乗させてもらい、尾根伝いに北岳へ達した。一万尺を越える頂稜の積雪は、意外に多く、膝までのラッセルだ。風は、冷いが、頂上をバットレス側に避けて、時間つぶしに、昼寝をやる。やがて、急いで下山だ。草ナギを、かけるように下った。

一一月一七日　曇
余裕はあったが、下山に決める。樹林の中を、たんたんと、広河原へ向った。トラックを、見つけるのに、時間を要したが、とにかく、便乗、途中、乗り次いで、芦安への紅い道を揺られた。その日の中に、東京だ。

（村上）

竜頭山

一九六二年一一月　半場三雄、他二名

一一月二六日
車で浜松を出発。天竜川沿いに途中秋葉ダムで記念撮影をして、登山口に着く。四年前には全山紅葉の中を夢心地で登った道を、二ピッチ二時間半で一気に頂上（一四〇〇㍍）へ着く。頂上から天竜川、遠州灘、南ア、富士山の眺望は素晴しく、春の様な日射しを浴びて昼飯を食う心地、そばに乙女の姿があったからの み良かった訳ではない。天下りは一ピッチ。落葉を踏みしめて下山。ほんの一〇日程先の冬山が思い起され、生命の喜びにひたる。オーバーかな。
（半場）

中央アルプス縦走（冬合宿）

一九六二年一二月　臼井　弘（リーダー）、高橋信成、蛭川隆夫、竹中　彰、村上泰介、小島和人、半場三雄、小野　肇、三森茂充、山本溢弘

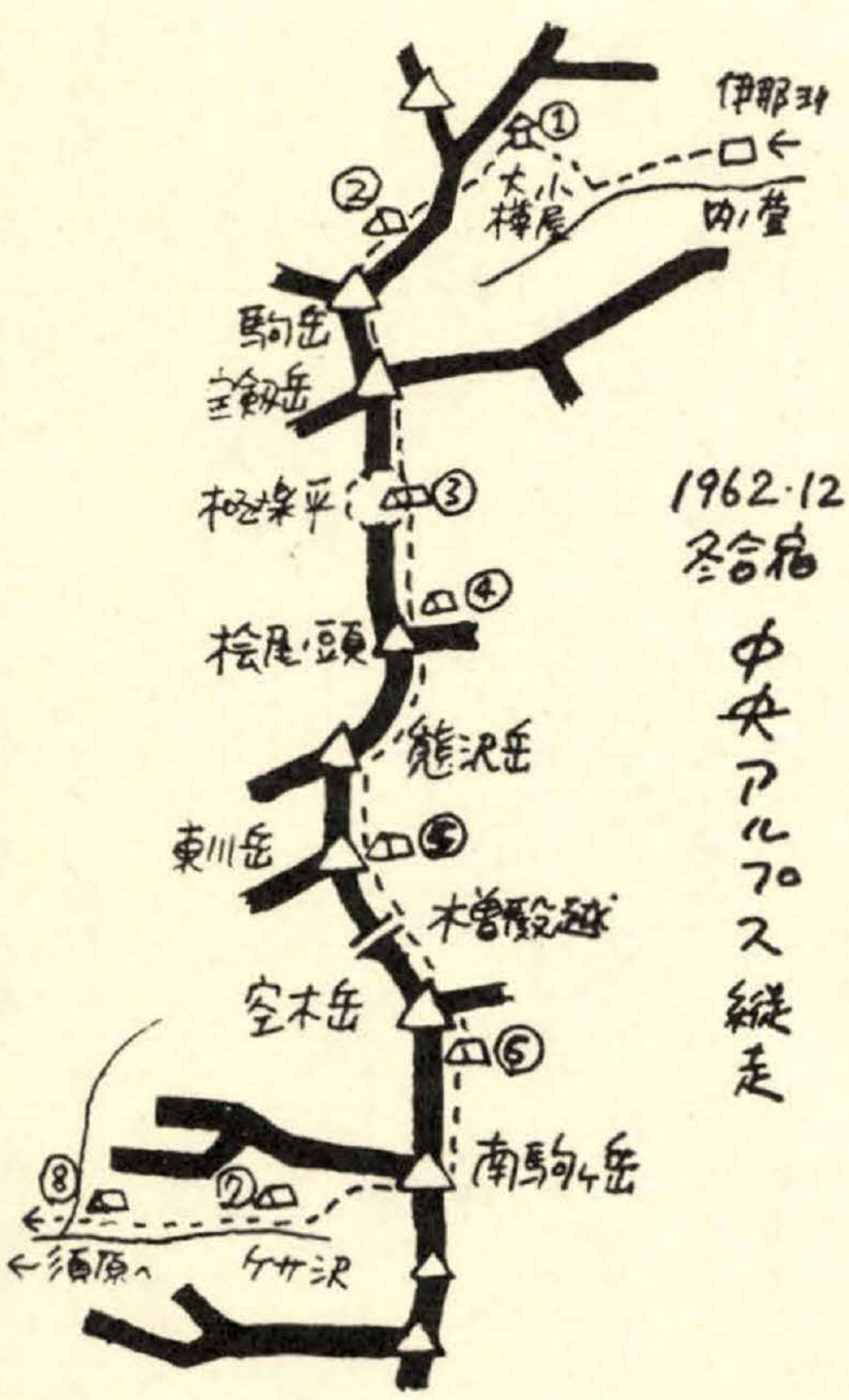
一二月一三日　快晴
発電所まで伊那より部員の実家の世話になり、荷物をトラックで運んでもらう。桂小場九時半発、大樽小屋（C1）に二時半着。初冬のうららかな日射しをあびて爽快な入山日となった。全員C1に入る。

一二月一四日　晴のち風雪
高橋、蛭川、村上、小島、山本でC2建設に向い、竹中、三森はC1の逆ボッカを行う。
尾根の分岐点よりラッセルがあり、馬の背手前の支稜にC2を設営。予定した中岳よりは大分手前であるが、折りから天候急変降雪となったため此処になった。夜半は低気圧が通過し強風がたたきつけた。

一二月一五日　降雪。停滞

一二月一六日　快晴
C1五名はC2に入り、蛭川、村上、小島は極楽平まで偵察に出、高橋、山本はC1へ逆ボッカ。ここにC2が二テント揃う。

一二月一七日　晴
全員で七時発C3建設に向う。快晴に近い好天で、西駒岳宝剣岳を越えて一時過ぎ極楽平の頭にC3一テントを設営する。後発テントの五名は、建設後C2へ戻る。宝剣岳は鎖がゾロゾロとあってフィックスの必要を認めず。一部やせた尾根があるが、雪庇がないので安心して中を割れる。極楽平はゆるい雪面で遙か東に



1962·12
冬合宿
中央アルプス縦走

富士、南アを、西に乗鞍、御岳を望む眺望の勝れた好キャンプサイトである。

一二月一八日　降雪

C3は停滞ときめたがC2は午後の雪の止んだ時を使ってテントを撤収、C3に入る。C3集結するが、この時の交信は困難であった。トランシーバーを使用していた。明日より、全員同一行動。

一二月一九日　晴のち雪

八時C3発、檜尾岳途中のコルにC4を建設。この日も午後降雪に見まわれ、強風で視界もきかず、ラッセルは厳しく、前進は困難と判断されたため三時半、C4を設けることになった。夜、降雪。

一二月二〇日　曇

昨日のラッセルと悪条件にこりていたので、偵察隊として村上、小島、熊沢岳までラッセルに出る。ヤセ尾根二ケ所。濃霧で完全な偵察は出来なかった。残りの者はC4にて停滞、休養。

一二月二一日　曇

七時半、先発として竹中、村上、半場、残りは八時半に出発する。一二時熊沢岳を越し、腰までのラッセルを続けながらも東川岳西斜面にC5を建設。先発、後発ともに三時半着。

一二月二二日　曇のち雪

九時、東川岳C5発。強い西風に天候に不安を覚えながらも一気に木曽殿越へ下る。オーバーズボン、ヤッケ、日出帽、と完全武装してもなお冷い。空木岳を登り始めると、雪に変る。空木岳北方の岩稜は困難な登降となり、空木岳三時着。ただちに南方のコルにC6設営。西から吹き上げる強風雪庇の根元にテントを設ける。この日、三森が軽い凍傷にかかった。夕方より雪。

一二月二三日　雪　停滞

一二月二四日　雪　停滞

一二月二五日　快晴

勇躍C6を出発。七時、モルゲンロートに映える雪稜。久しらしかなと嘆じあい、ただちに西尾根を下る。ラッセルを二年生振りの楽しい登高のためペースは早い。南にやらせるのもこの合宿では始めてである。春めいたクサレ雪をポコポコと下っていたが樹林に入るとたんにルートを間違えたことに気付いた。本来のルートは二四〇〇㍍のピークからも尾根伝いだが、我々は赤布に導かれてやや南に折れて下っている。協議の末、そのまま、方角を確認しながら下ることに決定。小さな沢を三回東南方向にわたり、やがてほぼ東むきに下る。五時を過ぎるも安定したテント場を見付けられず、せまいゴルジュ状の沢をザイルで懸垂して下り、七時、夜闇迫って、両側に青氷のはった廊下状の沢の不安定な雪の上に設営。天候は、日没を期して曇となり、今は全天をつつむ濃霧だ。晩メシを食い大急ぎで九時就寝。

一二月二六日　快晴

八時、仮りのC7発。前述の無名沢を四〇〇㍍のたかまきをしながらケサ沢に出る。仙涯嶺がすぐ真西に見えるから、ずい分東へそれてしまったことになる。ケサ沢にそって右岸に左岸に又右岸にと水につかりながら三時半、北沢出合下の営林署小屋に到着。

これが予定のC7であって、結局、ルートファインディングの拙劣さのため丸一日損をしたことになる。仮りにC8と名付ける。食糧は明日の朝までしかない。予備食をかきあつめての豪華な悲しい夕食となる。焚火をして濡れた靴下などを乾かす。前日との疲労が重なっていたためか、メンバーの士気統一に乱れる所があった。明日は雨でも下山する。

一二月二七日　快晴

最後の食糧を使用、負荷も軽く、八時出発。快適な下りだ。発電小屋をすぎて立派な道となり、ひょいと村落に出、ひょいと須原の町に出たのが二時。すきっ腹にラーメンを食ってほっとする。上松までバスで出てささやかな解散コンパをやり、南へ北へと分れて中央線に乗車する。車窓に見える宝剣あたりの稜線が目にしみる。さあ、年の瀬だ、忙しいぞ。

（村上）

北岳バットレス（OB冬合宿）

一九六二年一二月　丸山則二、大橋喜治、中島　寛、大賀二郎、山本尚禎、宮本英治、倉知　敬

一二月三〇日　雨

朝の一時に新宿を発つ汽車で甲府に着いた頃は、もうパラパラと降り始めていた。かねてから予約しておいた芦安の小型トラックに折重なるようにして乗込み、直ちに夜叉神峠へ向う。ゆられている内に、雨足は段々激しくなり、真暗な中に幌だけがけたたましい音をたてて、陰うつ極まりないことだった。

ひどく長い時間がたったように思われたけれど、終点の深沢の飯場に着いたのはやっとうす明かるくなった頃だった。雨は少しもおとろえずに降り続いている。とても登るどころではない。とまず小屋の中に入り込んだ。中には大勢の登山者がつまらなそうな顔をして座っていた。我々はスミの一角に陣どって朝食にした。とにかく止むのを待つより手がないので、そのままそこに居すわりしゃべったり食ったりして一日暮した。久しぶりに顔を合わせた連中なので話のタネはつきない。午後すぎになって、やっと止む。

一二月三一日　晴のち曇

グッと冷え込んでよい天気になった。凍りついた道を重荷にフラフラしながら登る。毎度のことながら、池山尾根の急坂はこれ程つらい所があろうかと思われる位きびしいのである。登りである。その上、落葉が雨でピッタリ凍りついていて、しばしば足元をすくわれる羽目におち入る。

池山小屋に近くなり尾根の傾斜もおちてくる頃になると、ようやく積雪が現われ、小屋付近で三〇センチ位になった。はじめは一気に砂払いの頭まで登り切るつもりだったが、池山小屋までくるのに予想外に時間とエネルギーをとられたので、半数は小屋に泊ることにして荷を軽くして出かけることにする。積雪はあっても道はよくふまれていてラッセルの苦労はなかった。

しかし、ボーコンの頭付近まで登った所でうす暗くなってしまったので、この日はそれできり上げることになった。丁度樹林帯のつきるあたりであった。天気は午後から悪化して上の方は吹雪になっていた。

一月一日　風雪

弱い風雪。八本歯の頭までテントを上げるが小屋に泊った連中

も登って来て、二つのテントを並べて張った。風よけにしっかり雪のブロックを積み、やっと落ちついた。

一月二日　風雪

バットレスは下の方がわずかにのぞいているだけであとは真白、偵察も出来ない。しかし、まずは皆で頂上まで行ってみることにする。横なぐりに吹きつける風に、首をすくめてあさっての方を向いて登った。

頂上から見降ろすと、バットレスはべったり雪をかぶって、ガスの切れ間に険悪な様を見せている。ちょっとさわればバッサリ雪崩れ落ちそうな気がする。

数秒でいいからもう少し姿を現わさないものか、と思ってかなり待ったが無駄であった。その後、山本と宮本の二人は間ノ岳まで往復した。

一月三日　風雪　停滞

今日こそは、と期待していたが駄目だった。「いつでも夢を」という歌が流行って、終日歌い暮らした。

一月四日　晴のち曇

やっと晴れたが、雪の状態が怪しいので、この日は偵察するに止める。俗称カツブシなる岩峰から派生している小尾根を下り、ガリーへ下るルートを確認する。尾根の上で腿位までもぐって、ひどく不安定だった。沢の中は降雪中にどん落ちてしまうらしく、かえって固くしまっている。午前中途中までルートをつけ、一度引返してから夕方再びその先を探った。

一月六日　晴のち風雪

明日は下山しなくてはならないので、ビバークしなくても登れそうな四尾根だけを試みることにした。大橋、大賀の二人が登り、あとはそれをサポートする。

三時頃テントを出る。雪崩を警戒して、尾根の上を支点に長い距離のピッチをとってトラバースしていった。五尾根下の俗称切断スラブの下あたりで夜明け。そこでサポート隊は五尾根を登ることに決め、四尾根へ行く二人と別れた。

〈第四尾根〉

大橋、大賀

AC発（五・一〇）―第五尾根横断終了（六・三〇サポート隊と別れる）―第四尾根取付（八・〇五）―マッチ箱基部（昼食、一二・二五～五〇）―第一テラス直下より引返す（一四・一〇）―Eガリーで雪崩に会う（一七・一五）―第五尾根でビバーク（一八・〇〇）

一月六日　晴

BP発（八・四五）―ピッチで断念、戻る―サポート隊のフィックスで脱出（一一・二五）―AC（一二・〇〇）

失敗すべくして失敗したアタックだった。第一に、当合宿で出す唯一のアタックなのに、メンバーが最強の二人ではなかったこと。第二に、万一の場合を除き「日帰り」せねばならなかったこと（翌晩には帰京していなければならなかった）。第三に、中央稜という所期の目標を放棄し、せめて第四尾根位登っておこうという、気易さとクサった気分とが入り混って流れていたこと。

これらの事情に加えて、バットレスという東面の風の弱い岩場における積雪の深さに対する認識が不足だった。参照した写真や記録が寡雪の年のものだったせいもあって、北アや谷川だったら当然警戒したはずの積雪量をメ安く踏みすぎた報いを受けた。

技術的には難しくはないが、八時から一四時すぎまで雪壁にトンネルを掘る作業が続き、第一コルにさえ出られなかった。到底一日で抜けることは無理だし、ビバークしても翌日午前中に帰れるかどうか怪しいと思われ、撤退に決めた。下降はかなりのスピードで捗ったが、Dガリーを渡る頃から降雪が強まりEガリーでついに新雪のシャワーに流された。ザイルのおかげで危うく命拾いしたものの、五尾根に戻ってのビバークを強いられ、翌朝サポート隊にフィックスを二〇〇㍍も張ってもらって帰るという情けない破目に陥った。

（大賀）

〈第五尾根〉

丸山、中島、山本、倉知

深い雪のトンネルをエッサエッサと掘りながら、登攀などというには程遠いような行為を続けていった。所々、大分雪崩の危険を感じることがあったけれど、どうやら事もなく過ぎることが出来た。

上部で一カ所、岩壁の上に不安定な雪が積っているややっかいな場所があったが、これも全部雪を掃除してしまうことによって突破する。

天気悪化し雪が舞い出した午後二時頃頂上へ出た。四人で代る代るラッセルを交代して体力の消耗を防ぐことが出来たのでとても楽に登れた。

一月七日　晴のち雪

テントでは心配の一夜を過し朝を迎えたが、バットレスをスッポリおおっていたガスが夜明けと共にあがったので、一生懸命二人の姿を探した所、意外にも、ウンと下の方に見つけ、驚いて直ちに援けに行く。切断スラブまで急行し、憔悴した二人の顔を見て、全く驚きかつどうやら無事なので一安心した。

テントに戻って昼食を摂り、直ちに撤収する。午後三時出発、走るように下った。野呂川から深沢の飯場への登りには参った。それから長い林道を、これ又駈けるように歩いて、一一時頃やっと夜叉神トンネルに着いた。折よくいたマイクロバスを何とか出動させて甲府へ向った。

（倉知）

■上信越■

谷川岳（合宿）

一九六〇年五月　中川滋夫（リーダー）、大賀二郎、中島寛、小林正直、小林進二、石　弘光、永井新也、倉知　敬、三井　博、宮本英治、遠藤晶土、臼井　弘、多田伸治、蛭川隆夫、名和泰三、本間　浩、竹中　彰

五月二〇日　雨

例のテント場に設営後、マチガ沢二の沢でどしゃぶりの中をトレーニング。

五月二一日　快晴のち雨

シンセン尾根（小林（正）、倉知、三井、多田、臼井、高橋）。残り全員でマチガ本谷をつめ芝倉沢経由帰幕。

五月二二日　快晴

小林（進）以下七名堅炭岩で練習。残り全員は一の倉沢でトレーニング。テント場でコムパをして帰京。

（大賀）

谷川岳（合宿）

一九六一年五月　大　建二郎（リーダー）、宮本英治、遠藤晶土、臼井　弘、多田伸治、高橋信成、村下泰介、竹中　彰、本間　浩、名和泰三、門田衛士、山本溢弘、佐藤　力、藤沢恵一、小島和人、半場三雄。

五月二六日　快晴

土合―テント場出発（七・〇五）―マチガ沢二の沢（七・五〇）―練習―出発（一三・三〇）―テント場着（一四・〇〇）。

全員マチガ沢で雪上歩行、ストップ、グリセードの練習をする。

五月二七日　快晴

出発（八・〇〇）―一の倉二の沢（八・五〇）―練習―出発（一五・二〇）―テント着（一六・〇〇）

一の倉の雪渓はほんとに短かくなり、滝沢下部が大きく見えていた。グリセード、ストップ、ダイナミック・ビレイの練習を遅くまで行う。衝立岩正面岩壁を二人でアタックしているパーティがあり、見ものだった。夜ファイアーをたいてコンパを行う。

五月二八日　晴

テント場―蓬峠

今日から縦走に入る。朝ＯＢの渡辺（嘉）さんが会社のハイキングで来て寄られる。これで四日間晴天が続く事になり、夏山を思わせる暑さである。五名は蓬峠を往復した後、帰京。

五月二九日　晴

蓬峠―一の倉岳―谷川岳―肩の小屋
五月三〇日　曇
　肩の小屋―万太郎山―仙倉山―平標山
五月三一日　晴
　平標山―三国山―三国峠―沼田―帰京　（宮本）

谷川岳一ノ倉南稜遭難救助

一九六〇年九月　宮本英治、他多数
九月一日　曇
　小学校時代の仲間が一ノ倉南稜で転落死したと聞き、クラスメート四名とともに谷川へ行く。山学同志会の一ノ倉集中登山に参加し、南稜テラスより二ピッチ目のフェースを登攀中、浮石を踏み転落した。トップのため四〇㍍程下の岩に落ち、ほとんど即死であった。
九月二日　曇のち雨
　山学同志会のメンバー約一〇名に参加し、南稜テラスに固定した友人の死体を降ろす事になった。テラスより衝立沢スラブ迄ザイルをフィックスし、トラバース。谷川救助隊の一〇〇㍍ザイルを死体の確保用に使い、フィックス通りに数名がずらせながら運搬。衝立沢スラブを下降する頃から雨が激しくなり、今日は途中迄にして引きあげた。山学同志会の連中は岩登りのベテランが多く、遭難救助にも慣れているらしく、極めて全員がスムーズに動いていた。
九月三日　晴
　今日は死顔にも逢えると家族の方は一ノ倉出合に待機。衝立スラブの途中から数㍍ずつ下降開始したのが九時、昼に下部迄来て本谷を横断し、一〇〇㍍ばかり対岸に引き上げる。ひょんぐりの大滝はチロリアンブリッジで渡らせた。出合からはクラスメート四名が、担荷で駅迄運んだ。水上火葬場で茶毘に付し、家族と帰京した。
　遭難した友人は唯一の男子であって、父母の嘆きは非常なるものであった。山学同志会の正会員ではなかったが、職場の同僚が会員でたまたま集中山行に参加しての事故であった。それ迄丹沢の沢登り以外に岩場の経験もなかったのに、南稜ルートで自らトップを望み、不幸にも転落死してしまった。皆に好かれ、親孝行の奴だけに可愛そうな事をしたものだと僕ら仲間は話合った。
（宮本）

谷川岳・エボシ沢奥壁

一九六〇年九月　小林　進二、他二名
九月二日　マチガ沢出合
九月三日　午前晴、午後曇時々小雨
　五時半テント出発八時奥壁取付き―一五時半、南稜との合流点―一七時四五分一の倉岳―一八時四五分肩の小屋―二一時〇五分帰幕。
　取付き点より三〇㍍三ピッチで草付きバンドに出、右にトラバースして中央ルンゼに入る。ルンゼは出たり入ったり四ピッチでぬけさらに二ピッチでハングの下に出る。このハングがこのルートの核心であろう。要所にハーケンが打ってあるが、さらに二本打ち足し、アブミ二個をかけて乗越した。以後、簡単な草付きを

四〇㍍ピッチでエボシ岩の下に出た。計一三ピッチ。
ザイル四〇㍍一本、三〇㍍一本、ロックハーケン五本、アブミ二個を使った。概して、非常に困難という個所はないが、草付き、ドロ付きルートで、長いということと、中央ルンゼはまだトレースされた回数が少ないためかアンサウンドな岩が多く注意が必要だった。また、ザイルをといてから帰幕までイヤになるほど歩かなければならないのは実際ウンザリだった。
九月四日　下山。
（小林）

谷川岳

一九六二年五月

五月五日　晴
高崎俊平、他四名
昨日からの雨がやまず、天気予報も悲観的であったが、降られてもともとというような気持で出発。しかし土合に着いたら雨も上がり陽が射し始めていた。テントの数多いマチガ沢の出合はさけて、一の倉の出合に幕営する。
五月六日　晴
天気予報なんぞとんでもない、上天気。堅炭を登るパーティーを送り出して一の倉に入る。人人人……雪上訓練のラッシュ。幽の沢に変えて、そこでグリセード、スリップストップ等をする。やはりここは静かだった。
（高崎）

谷川連峯縦走

一九六二年九月

蛭川隆夫、原　博貞、佐藤久尚、寺尾公男、池知昭洋
九月二日　晴時々曇
土合―白毛門―清水峠
夏山が事故でつぶれたために一年にとっておぎないともなるよう計画された山行であった。意外と一年生ががんばってくれて一応予定通り清水峠へついた。
九月三日　曇
清水峠―谷川岳―大障子小屋
今日は一日中水のない尾根歩きである。山では水のないことなんぞ珍らしくないのだということを知らない一年生は、水筒の水を飲むのを制限されてげんなりしていた。大障子小屋下方の湧水を手に入れた時は、とてもうれしそうであった。
九月四日　曇のち雨
大障子小屋―万太郎山―平標山―法師温泉
「山日記」とはえらくちがう快適に歩いて法師温泉におりた。宿泊代をふっかけられて頭にきた我々は温泉の横で天幕をはって一夜を送った。
九月五日　曇　帰京
温泉前からバスで後閑に出、帰京しました。
（蛭川）

仙ノ倉山

一九六二年一二月

高崎俊平、池知昭洋、原　博貞
一二月三一日　晴
上野発（七・五八）―後閑―三国峠着（一四・二〇）
空前の豪雪といわれた一昨年に較べて何と少ない雪だことよ、と三国峠への道を辿る。峠のお宮の脇に幕営。

一月一日　晴のち曇
テント（七・〇〇）―平標小屋（九・四〇）―平標山往復―テント（一三・三〇）。
初日の出を拝して出発。ここ五、六日雪が降っていないのかトレースがはっきりつき、多少の上下は気にならず平標小屋に到る。小屋の前にはテントが二張り。幕営を終えて偵察に出る。平標山まで直登し、頂上で東に直角に折れて仙の倉山との大きなコルに向うも、濃いガスのため途中から引返す。夕食では正月の味を存分に味わう。

一月二日　風雪のち晴
テント（六・四〇）―仙の倉山（七・四五）―テント（九・〇〇）―バス停（一二・五五）―後閑（一五・三〇）
平標山への登りは昨日のトレースを辿り楽に通る。国境稜線に出るや南風が猛烈に吹きつける。広い稜線を飛ばされそうになりながら仙の倉へと急ぐ。頂上からは、上信越の山は一望のもと。一〇分で退散。風は少しも弱まらず登りと同じ時間を食う。メシをすませて撤収し、前来た道を下る。三国山の下りでは雪が腐り出し、転倒しきり。でも快適な山だった。（高崎）

尾瀬・鬼怒沼林道

一九六〇年九月　小林正直、三井　博

九月一八日　曇
紅葉に早く、まだまだ夏の名残りのある尾瀬を歩き回ろうと思い立ち三井と二人でふらりと出掛ける。
昨夜の夜行で早朝に着く。ところが車中寝過して、起きたところは沼田の一つ先。二人共寝込んでいたんだから大体出発時からついていなかった。というのは、どうせのんびりした山行だからと思い、ツェルトとラジウスで行く予定だったところ、部室にはどちらも見当らない。止む無く、六人用の大テントと石油コンロのでかいのをかつぐ破目になってしまったという訳だ。
鳩待峠迄へは、途中からトラックに乗込んで怠慢に登ってしまう。尾瀬ケ原に入り込んで、山ノ鼻小屋の近くにテンパろうとしたら張らせてくれず、詮なく、ヨッピ川の川辺にでかいテントを張る。夕方、ブヨの群集に悩ませられる。

九月一九日　晴のち曇
景鶴山往復―燧裏林道―御池小屋
テント場近くの景鶴山に行き、上越連峰を一望した後、会津駒に登るべく燧裏林道に入る。途中人並に平滑の滝や三条の滝をめでて、人気の全然ない裏燧に入る。尾瀬特有の田代を時々渡ってひょっこり御池小屋前に出、小屋の前の庭にテンパる。水は小屋のものを使う。

九月二〇日　雨
御池―七入―沼山峠―尾瀬沼
昨夜来の雨のため会津駒ケ岳は断念し、雨の中尾瀬沼まで行く事とす。途中、銀山平開拓地の人とボッカの人に会ったきり。
熊が角力をとったといわれる角力田代などを通り過ぎ、ブナの林道を行く。山の幸はアケビだけだった。沼山峠からテント場を物色するが適当なところなし。峠から長蔵小屋へいく道からはづれた、人目につかぬ川原に洲を見付けたため、泊ることとする。

回りは葦や笹が多いため小屋番の見回りにも見付かるまいと思っていたが、夕飯時、若い見回りが犬を目付に川をさかのぼって来て注意されてしまう。

九月二一日　快晴

テント場―燧岳―温泉小屋―沼尻―テント場

今日は尾瀬沼を歩き回る。オフ・シーズンの為かボートも倉入して我々二人の姿だけ沼に映えていた。

九月二二日　快晴

テント場―鬼怒沼林道―八丁の湯

この山行も今日で終りだ。鬼怒沼林道に入るや、田代が多く散在する。途中伊勢湾台風による倒木多く、登山道も途中迄しか整備されていず、もぐったり木渡りしたり、デカイ荷物がしゃくにさわる一日だった。水場は黒岩山から一寸おりたところだけで、山鳩もよく水場を知っているのか、二、三羽集まっていた。ななかまどは実が赤くなっていた丈でまだまだ葉は緑を呈していた。倒木にしごかれること一〇時間、疲れた体を八丁の湯の露天風呂に休める。暗闇の風呂につかり、秋風を受け、爽快なり。泊り客は他に三人。金が足りないため、食糧の残りを置いて行く事とする。

九月二三日　快晴

奥鬼怒―川俣―川治―治帰

奥鬼怒温泉から川俣迄の鬼怒川上流に沿った道は初秋の山歩きの最後にふさわしかった。

（小林）

尾瀬と丸沼

一九六〇年九月　名和泰三、他一名

九月二二日　晴

東部日光―湯元―金精峠―丸沼―大清水キャンプ場。

台風後なので道が相当荒れていた。川沿いの道は大部分きれていたので浅い川の中をチャップチャップと歩いた。

大清水のキャンプ場は誰もいなかった。

夕方雨が降ってきたのでテントをはって眠る。沼の色がねずみ色に濁っていたのには、余り好感が持てなかった。

九月二三日　雨

キャンプ場を出て、峠を越えて尾瀬に行く途中、豪雨に会ったので、バスの停留所に引返し沼田に出て帰宅する。（名和）

尾瀬

一九六一年六月　小野肇、他一名

六月二日　離京

六月三日　晴

沼田駅（一・一二）―鳩待峠（一〇・二〇）―山の鼻小屋（一二・三〇）―下田代十字路（一五・〇五）

はじめてキスリングをしょっての山行。靴は新しいのですぐ豆をつくるし、パッキングの仕方もなっておらず、ラジウスをタッシュに入れなかったり、シュラフを上に積んだり。可憐な水芭蕉の花の咲いている中を痛い足をひきずってドタバタと歩いていた

の僕達だけだった。
六月四日　晴
出発（六・〇〇）―燧岳（九・三〇）―長蔵小屋（一三・四〇）
小屋につめこまれるだけつめこまれた僕達もここまできて燧岳に登らずに帰る手もあるまいと、痛い足をひきずって燧へ向う。谷に雪がありグリセードをしてくだる奴らを横目でみてようやく紺青色の尾瀬沼のほとりにたどりつく。同行者はすぐさま帰京。明日実習とか。わが大学の良さを思い一人でねる。
六月五日　晴
出発（七・一〇）―三平峠（七・五二）―大清水（一〇・〇〇）―沼田（一二・三〇）―新宿（一六・〇〇）
朝早く静かな沼に一人ボートをこぐ。静寂そのもの。（小野）

尾瀬

一九六二年八月　高橋信成、他一名

八月七日
沼田―長蔵小屋
事故の跡仕末のメドもついたので、妹を連れて尾瀬に行く。
八月八日
長蔵小屋―燧岳―竜宮小屋
ゆっくりと燧岳に登り、沼尻の小屋を経て竜宮小屋に泊る。
八月九日　下山
昨日に比べて人の多くなった尾瀬のメインストリートを沼田へと下る。（高橋）

妙高山群

一九六一年八月　小野肇、他一〇人

八月三〇日　晴
一橋池の平寮（七・一〇）―南地獄谷（九・一〇）―妙高山頂（一一・四〇～一二・三〇）―長助池（一三・三〇）―燕温泉（一六・〇〇）
世界経済研究会の連中をつれて寮から雄大な姿をみせる妙高に登る。リフトに沿っての一直線の登行は暑苦しかった。頂上での展望はよかったが日本海はみえなかった。帰途燕の野天風呂に入り汗を流す。
八月三一日　晴
一橋池の平寮（九・三〇）―杉の沢（一〇・〇〇～一〇・四五）―笹ケ峰牧場（一一・三〇～一二・三〇）―黒沢（一三・一〇）―高谷池ヒュッテ（一五・三〇）
昨年もそうだがこの頃の山は、夏の最盛期には考えられぬ静寂さがある。ひっそりと秋を待っているこの笹ケ峰牧場は、雪一面のスキー合宿と異って又、趣がある。明星荘の竹田氏を訪れるも不在、昼食をそこですまし高谷池へむかう。高谷池の湿原地帯の暮色は、秋の到来を知らせていた。
九月一日　快晴
ヒュッテ（六・二〇）―火打山（七・三〇～八・〇〇）―焼山（一〇・一〇～一〇・三〇）―坊抱岩（一二・一〇）―展望台（一三・三〇）―笹倉温泉（一六・〇〇）

火打、焼からの日本海、そして後立、槍穂高の山塊を見渡すことができた。

佐渡へ行くべく日本海側へ下る。長い降路にあきあきしていたので笹倉温泉でのビールと風呂は格別だった。

今回の山行は、静かな山行だった。

（小野）

前山東尾根より妙高山

一九六一年一月　多田伸治、他一名

一月四日　風雪

直江津（七・〇〇）―田口―丸山（一〇・〇〇）―幕営（一三・〇〇）

豪雪で汽車が動かず、二時間も待たされる。スキーリフトを使って丸山へ登り、すぐワッパをはく。吹雪の中で腰までのラッセルに難渋する。三時間程でとうとう前進をあきらめ、早目に林の中に幕営した。

一月五日　風雪

テント（七・三〇）―引返し地点（九・〇〇）

三時に起床し、天候をうかがうも変わりなし。テントを上げることをあきらめ、大谷ヒュッテに二人アタックメンバーを送ることにする。相変わらず吹雪とラッセルに消耗。天候は更に悪化してきたので、あきらめてテントに引返した。

一月六日　風雪

テント（七・〇〇）―前山（九・三〇）―天狗堂（一〇・三〇）―岩稜（一二・三〇）―引返し地点（一三・〇〇）―テント（一五・三〇）

日もせまったので、テントより一気にラッシュすることにする。荷が軽いのでラッセルははかどり雪も次第に減ってきた。主稜線は快適なスピードでとばす。変化に富んだ稜線に丁度後立山を歩いているかのような錯覚をおぼえた。

午後になって高度二四〇〇㍍位の地点にある最後の岩稜に行きあたる。ワッパ、オーバーシューズをとって登ってみるも不安定。天候も風雪になってきた。頂上を目前にして退却を決意する。帰りには吹雪の中で行きにつけた赤布がとても頼りになった。

一月七日　晴

デカイ荷物を背負って、スキーゲレンデにワッパで大穴をつくりながら、駈け降りた。

（多田）

笹ケ峰（スキー合宿）

一九六二年一月　臼井　弘（リーダー）、多田伸治、高橋信成、長沢道彦、小島和人、小野　肇、山本溢弘、三森茂充、藤沢恵一、他一名

一月七日　曇

田口駅七時集合の予定であったが、降雪のため上野発の列車が大分遅れたため、先着の連中がブーブー云っている。とにかく牧場目指して出発。途中で山荘の持主である竹田さんの家により一緒に行ってもらう。おじさんはナワのシールにストック一本という格好でスイスイ行ってしまったが、一年の連中は皆はじめてスキーをつけた、というだけに、登りは遅い。ワッパの方が速いくらいだ。夜遅くなりヘッドランプに頼りながらやっとの思いで小

屋につく。
一月八日　晴
　全員近くのスロープで歩き方、曲り方の練習。ワッパでラッセルの訓練もやらせられた。
一月九日　晴
　笹ケ峰へスキーツァー。ラッセルは一年生にまかせる。下りは直滑降だ。それしかできないのだ。日照りが強く、スキーに団子がついて消耗した。
一月一〇日　晴のち曇
　御田原山までスキーツァー。樹林のあいだの急登は苦しい。外輪山のふちにたって妙高を望むもガスのために見えない。斜滑降、キックターンを繰り返して下る。
一月一一日　晴
　京大ヒュッテ附近のスロープで練習。一年生のボーゲンの出来上り具合をテスト。合格した順にご褒美をもらう。
一月一二日　晴
　今日は下山だ。明るい日ざしの中を重い荷を背負って各自思い思いに下降。強烈なでんぐり返しを繰返し、足をいためる者も出る。竹田さん宅でささやかなコンパをして泊る。
　明日は講議の待つ東京だ。
（三森）

笹ケ峰（スキー合宿）

一九六三年一月

蛭川隆夫（リーダー）、倉知　敬、高橋信成、長沢道彦、佐藤之敏、原　博貞、高崎俊平、池知昭洋、佐藤久尚

一月七日　曇のち雪
　田口―杉野沢
　雪激しく、杉野沢どまりとなる。池の平スキー場で練習。
一月八日　曇
　杉野沢―笹ケ峰（小屋）
　昨日の新雪のラッセルに苦しめられ、スキー技術のアンバランスも手伝って、実に一日がかりで笹ケ峰に入った。
一月九日　晴
　牧場の中の手頃な斜面で基礎練習をした。
一月一〇日　晴
　昨日の練習の成果（？）をもとに、妙高連山にスキー登山を試みるべく、テントを出すことにする。四名が御田原山の中腹のテントに入る。残りはサポート、ボッカ。重荷と腰までのラッセルであった。
一月一一日　晴
　テントの者は御田原山登頂。小屋の者は笹ケ峰へ行く。
一月一二日　晴のち曇
　テントと小屋とメンバーチェンジをする。
一月一三日　晴のち風雪
　テントの者御田原山へ。帰りはシュプールが消えていて、あやうく迷うところであった。
　小屋の者はスキー練習。
一月一四日　晴
　テント撤収。重い荷のわりには、スムーズに林の中を下った。
　牧場についてからスキー練習。

一月一五日　晴
戸隠へ向う倉知、高橋と別れて下山。杉野沢でコンパ。帰京。
（蛭川）

荒船山（新人歓迎山行）

一九六一年四月　大　建二郎（リーダー）、遠藤晶土、朝木大統、高橋信成、竹中　彰、中橋寿雄、名和泰三、村上泰介、伊藤重道、半場三雄、小島和人、山本溢弘、藤沢恵一、佐藤　力、小野　肇

四月二三日
上野発〇時二〇分の荒船号で出発。下仁田からバスでガーデンハウスにつく頃、夜が明けた。あいにくの霧雨だったが荒船山の頂上につく頃から陽が射し、晴れわたった物見平で妙なスキヤキをつつく頃は、いつもの歓迎山行の気分となる。
荒船山一帯は映画のロケーションのよく行われる所で、せっかく映画を楽しんでいても荒船山の特徴のある姿が出てくると、種を教えてしまった手品の感じで幻滅を感ずるが、神津牧場をひかえて、素晴らしい所である。初谷鉱泉から小海線へ抜けるルートをとりたかったが時間がないので往路を引返す。
（大）

神津牧場・荒船山

一九六一年八月　蛭川隆夫、他三名
八月一七日　晴
軽井沢―物見山―牧場
父妹へのサービス山行。牧場まで小さな山なみは、人気もなくて意外によかった。牧場に泊って、しぼりたての牛乳やそれでつくったソフトクリームを試みた。たしかに都会のソフトなど較べものにならない。
八月一八日　曇
牧場―荒船山―下仁田
荒船山はハイカーでにぎわっていた。三ツ瀬のバス停近くで、浅間爆発の噴煙に全身まっ白になってしまった。下仁田経由で帰京。
（蛭川）

苗場国際スキー場（針葉樹会懇親スキー行）

一九六二年二月　村尾金二、久保孝一郎、須山修平、中村幸正、瀬田　宏、篠原敏弘、丸山則二、江面誠二（以上OB）、大　建二郎、倉知　敬

二月三日
上野―後閑―猿ガ京温泉
学生二人は発車数時間前から上野でがんばり、数ボックスの空席を占拠するも、発車十数分前になっても誰も現われない。満員の中をからくも二ボックス確保しておいた所、発車間ぎわになってバタバタと先輩現わる。どうやら全員すわることが出来た。
後閑で下車、バスで猿ガ京温泉へ。「見晴館」に入る。連絡の手違いで法師温泉へ行かれた久保先輩も無事到着。昔話から始まって山小屋のこと、ヒマラヤのこと、いろいろ話に花が咲いた。なかなか意気盛んな先輩もおられる。
二月四日

猿ガ京―苗場スキー場―後閑
早朝バスで猿ガ京を発った。大雪のためバスは三国峠までしか行かない。この三国峠の長いトンネルをぬけて歩かなければならなかった。
スキー場はすごい人波、だが何とか滑れるもので皆ひとまず満足出来る程滑ったようであった。初めは下の方で遠慮しておられた先輩組も、そのうちに上まで登って来て元気に若手にまじって滑走を楽しまれた。若手の方では、上手と下手の間に大分差があったようで、下手の方は発奮したのだがやっぱり下手のようだった。ころぶ度にバッケンがはづれてしまうという気の毒な人もいた。
客がほとんどいなくなる頃までがんばって、最終のバスで帰途についた。下手の方の人は翌日別のスキー場でコーチをつけて練習を重ね、かなり上達したことを付け加えておく。（倉知）

■八ヶ岳・奥秩父・他■

霧ケ峰・八子ケ峰スキー

一九六〇年二月　遠藤晶土、大　建二郎
二月一八日　晴
強清水（九・三〇）―コロポックルヒュッテ（一〇・三〇）―車山頂上（一一・〇〇）―白樺湖―八子ケ峰―白樺湖―茅野
試験の憂さ晴しにぶらりと出かける。強清水は満員札止めの盛況だが、ツァーに出る人は数えるほどだ。車山からの滑降はなかなか素晴しい。我々でもあまり転ばないで白樺湖へ下った。白樺湖もスケート客で満員だが、裏の八子ケ峰へ登ると全然人が居ない。ささやかな冬山の気分を味い、スキーが上達したような気になって、意気揚々と「銀行論」の待つ下界へ滑りおりた。（大）

霧ケ峰―蓼科山

一九六〇年六月　大　建二郎
六月二五日　雨のち晴
上諏訪（六・二〇）―強清水（七・三〇）―樽ケ沢鉱泉（一六

・〇〇）

久し振りに一人旅がしたくてふらりと出かける。雨がザァザァと降る中をバスで強清水へ。ままよと宿で昼食。目がさめると一面の霧。その名の如き広大な草原をしみじみと歩く。夜は石さんの好きな樽ケ沢で一泊。

六月二六日　快晴

樽ケ沢（六・三〇）―蓼科山（一〇・〇〇）―親湯（一四・〇〇）

朝露に濡れ、クモの巣の光る牧場の道をたどる。昨日の雨の名残りか、水が道に溢れてちょろちょろと流れていた。蓼科山からは北アルプスが良く見えた。大河原峠を経ての下り道、原色の美しさはたとえようもなかった。

八ケ岳縦走

一九六〇年七月　石弘光

ゼミの幹事なる特権を利用して、ゼミ旅行を蓼科でやることを提案、企画し、帰途夏山合宿のトレーニングを兼ねて、八ケ岳に足をのばした。

七月六日　晴

八時の急行で、先生以下ゼミテン七名と共に新宿発、茅野下車、白樺湖経由で多留沢温泉へ。夜はコンパ。

七月七日　曇のち雨

白樺湖（一一・二〇）―茅野（一二・四〇～一三・二五）―渋ノ湯（一五・一〇）―黒百合平（一七・〇〇）

白樺湖で皆と分れて一旦茅野へ下る。渋ノ湯からやにわに急登。雨がポツポツ降り出し、黒百合平では大分激しくなる。予定したオカンは中止、素泊りとする。

七月八日　雨

黒百合平（八・〇〇）―東天狗岳（八・五〇）―オーレン小屋（九・四〇～五〇）泉野（一三・四〇）

朝から濃霧と雨、更に風もひどい。高見石廻りでまた渋ノ湯へバックも考えたが、バス代が高いのを思い出し、まだ登っていない天狗を廻ってバス代の一番安い泉野へ下る。稜線の風は相当なもので、びしょぬれ、夏沢峠から泉野への道の長くかつ面白くない印象のみ強烈な山行だった。シーズンもはじめのためか、余り人に会わぬ静かな単独行だった。

八ケ岳縦走

一九六〇年一一月　蛭川隆夫、他一名

一一月三日

編笠山―キレット小屋

例の夜行でねむれず、編笠までの長い山腹の道は苦しかった。稜線に出てからは、新雪をまとった八ツの美しさに眠気もとれ、快適に歩いた。

一月四日

小屋―天狗岳―渋湯

同行のKは「素晴らしい」の連発である。たしかに薄化粧の山々はきれいだ。T館で酒を飲み前後不覚となる。

一月五日

T館―湯川―茅野

一橋祭に居なかったので、恐る恐る部室に行ったら、月見の宴で皆もう大分まわっている頃だったので安心した。（蛭川）

北八ケ岳縦走（新人合宿）

一九六一年五月　朝木大統、他八名

五月二日　うす曇

渋ノ湯―賽ノ河原―高見石―丸山麦草峠（設営）―駒池往復

高見石からの雨池の眺めは、眺望に恵まれぬ北八ツの縦走にあっては一つの救いである。麦草峠にテント設営後、樹林帯の残雪の踏跡を三〇分程走り碧水を湛える駒池に着く。ところどころ浮氷があり、静寂そのものである。

五月三日　曇

麦草峠―茶臼山―縞枯山―雨池山―大岳―双子池附近

大岳より猟師の踏跡を滑る様に降る。ブッシュの中を二時間程降りて、道を間違えたことに気づく。水場をさがしに背丈程の熊笹をかきわけ、目的の双子池を見て大喜び。

五月四日　曇

双子池―亀甲池―親湯―茅野　（朝木）

北八ケ岳縦走（新人合宿）

一九六二年五月　名和泰三、他一〇名

五月三日

茅野―親湯―大河原峠―双子山―双子峠―双子池。

まことにシマリのないだらだらした山道を登ってゆくと大河原峠に達し、すぐ下って天張る。池にかなり厚い氷張り、テント地は快適だ。

五月四日

双子池―大岳―横岳―壺庭―八丁平―五辻―茶臼峠―麦草峠―白駒池。

白駒池は双子の何倍もあるようなデカイ池である。途中、道を間違えた。部分的にちょっとしたラッセルもある。白駒池に行かざるをえなくなったのは、麦草峠は非指定地でテントを張れず、折角張りかけていたのを又たたんで池に向った、という訳です。麦草峠で、石先輩下山。

五月五日　停滞

まだ二晩しかテントでねてないのに、もう帰りたいと言う奴も居た。

五月六日

白駒池―高見石―中山―中山峠―渋ノ湯―新宿。

まさに出発せんとすると、小屋番があらわれてテント代四〇〇円ぱくられる。麦草峠といい、此処といい、八ケ岳は全く営利主義に徹した山である。やたらに道標があり、やたらに池があり、やたらに小屋番が威張っている。八ケ岳の印象は余り良くない。（名和）

富士山（合宿）

一九六〇年一一月　大建二郎（リーダー）、三井　博、宮本英治、遠藤晶士、朝木大統、倉知　敬、臼井　弘、多田伸治、後閑勉六、竹中彰、村上泰介、蛭川隆夫、小林進二

一一月二六日　曇
新宿―吉田―五合目
先週大沢で雪崩があり、早次を始め多くの遭難者を出したため、天候には極めて神経質になり、前線の通過した前日は出発日を一日遅らせて様子を見た。幸い好天に向ったので朝早く新宿を出る。例年通りの五合目のキャンプ場に三時着。
一一月二七日　晴
大沢で雪上訓練。
一一月二八日　晴
屏風尾根から頂上へ向かう。風が強かった。頂上から下り、そのまま徹収して下山。月明りの道を吉田へ下った。（大）

富士山（合宿）

一九六一年一一月　（臼井）

一一月二二日　雪
富士吉田を出るとまもなくパラパラ降り出す。見る見る白くなる中を、つめたい思いをしながら五合目へ登る。着いてからも、火を点けメシをつくり、口に入れるまでが大変だった。
一一月二三日　曇
大沢でストップ練習。後、八合目付近まで登る。
一一月二四日　晴
風は強いが、うって変って良い日より。南、石両OB、倉知、半場、小野の五人は屏風尾根を登る。他は夏道沿いに頂上へ。上で両隊合流してゆっくり下る。
一一月二五日　晴
下るとなると、なんで皆こう素早いのだろう。三時間で吉田の駅へかけ込んだ。
今年はストップなどよりアイゼン歩行に重点を置いた。だが雪屋へかつぎ込んだが、すっかり練習の時間をとられてしまう。
一一月二七日　晴
朝、撤収して帰京

富士山（合宿）

一九六二年一一月　（臼井）

蛭川降夫（リーダー）、竹中　彰、村上泰介、長沢道彦、小島和人、半場三雄、小野　肇、三森茂充、山本溢弘、佐藤之敏、高崎俊平、池知昭洋、原　博貞、佐藤久尚、石田信隆、南　亮進、石　弘光
倉知　敬

の状態悪く、それほど成果があがらなかったのは残念だった。

（蛭川）

富士山

一九六一年八月　半場三雄、他二名

八月二七日

浜松を昼過ぎに発つ。富士宮からバスで新三合目まで行き、少々仮眠。あいにく霧雨模様で、頂上の灯りは見えるが肌寒い夜だ。八月もこの頃になると、富士山もシーズン終りに近く、あえて人の少ないのを好んだとはいえ、天候に恵まれなかったのはついていなかったということか。それでも九時にはポンチョスタイルで登行開始。同行の一人がバテ気味で苦労したが、九合五勺で御来光が拝めたのは奇跡であった。

というのはすぐこのあとまた霧雨が降り出し剣ケ峰でも寒さに震えていたから。帰路は須走口をとり、外人登山客と競走で須走に着いた。雨も上がり富士の裾野の線が美しく印象に残る。山中湖行を取止め帰浜とするで山の思いを確かめる如くパチンコをする。帰宅は二八日一九時。

小檜山

一九六一年五月　蛭川隆夫、半場三雄

五月九日

一日だけの山行として計画された。連休山行で八ケ岳から帰京した直後だったので足の方の心配をしたが、とに角八日新宿を夜行で発ち、翌早朝塩山に着き、バスで窪平に向った。窪平に着いても未だ真暗だった。そこで農協の人に道を聞き、直ちにリヒトをつけて行動開始。長い長い木馬道を歩くうちに夜が明け、山特有の新鮮な空気を胸一杯吸ってすがすがしい。全峯泉の辺りで一寸回り道をしただけで後は順調に進み、焼山峠の可憐な草花は夏山への意欲をかり立てた。目指す小檜山（一七一二・五㍍）はもうすぐだ。あいにくお山はガスっていたが、ここでは少々しごかれ、印象に残っている。頂上からしばらく急降があり、あとは緩い下りで、一日散に（といっても景色は楽しみながら）桑畑のある〝中屋〟とかいうバス停のある部落に下山。案内書をつくるとすれば健脚向日帰りコースというところ。この日五時頃部室着。

（半場）

明神峠・三国山

一九六一年一二月　大賀二郎（OB）

一二月二四日　快晴

駿河小山（一〇・〇五）―明神峠（一二・五五～一三・三〇）―三国山（一四・二〇～三〇）―駿河小山（一七・〇五）

夏なら明神峠までバスがあるが、季節外れのため全コース歩き。その代り誰一人会わず、富士の裾野を借り切った気分。

足柄峠から塔の沢まで

一九六二年二月　大賀二郎（OB）、他一名

二月四日　晴

足柄駅（一〇・一五）―足柄峠（一一・二〇～四〇）―金時山

（一二・五五～一三・五五）―乙女峠（一四・三〇）仙石（一五・〇五～二〇）―塔の沢（一五・五〇）

冬でも結構ハイカーがいる。金時山の北斜面など一尺位の積雪があるが、短靴で元気なものだ。乙女峠でトランジスタラジオの落語を聞いてゲラゲラ笑っている連中がいた。

仙石から先の自動車道路は命がけだった。定期便がライトを振りかざし、道いっぱいに登ってくるので、道路脇の溝の中や、それでも足りず石垣にへばりついてよける。小田原まで歩くつもりだったが、こわくて塔の沢でやめた。箱根八里は歩く所ではなくなった。

（大賀）

武甲山

一九六二年五月　長沢道彦、名和泰三

五月二一日　晴

長沢と二人で武甲山北面〝こざくらどうえ〟に行く。涸滝が一五ほど続いている。四〇㍍ザイル一本にハーケン四本で軽い気持で登り始めたが、なかなかどうして簡単には登れない。F8あたりで日没。アップザイレンをやること三回、F3あたりまで戻り尾根に逃げる。朋文堂ガイドブックによると近頃注目をあびている岩場だそうだ。後日、誰れか完登されん事を切に望む。（名和）

三ツ峠

一九六二年九月　長沢道彦、中橋寿雄

九月二一日

前日の夜行で発ち、麓の薫風荘にて、睡眠を取る。

一〇時半頃とりつく。最初、長沢がトップする。縦走路下一〇㍍のところで動きがとれなくなり、トップを交替する。それより三㍍くらいのところで、ハーケンが抜ける。中橋転落して右足を捻挫。登攀をあきらめ、その日のうちに下山。

（中橋）

丹沢水無川沖源次郎沢

一九六二年一〇月　高崎俊平、原　博貞、平川紀男

一〇月一二日

前夜新宿発。モミソ沢出合でビヴァーク。懸垂岩にてアプザイレン練習後、本谷遡行。一〇時に沖源出合着。二〇㍍、一五㍍の二段の棚でザイルをつけて楽しみ、そのまま二俣沢をつめて大倉尾根を下る。

（平川）

三ツ峠

一九六一年八月　長沢道彦、小島和人

八月二五日

ダルマ石から二ピッチ位行った所で小島が突然苦しみ出し、腹をおさえて七転八倒の態となった。折から雨が降り出したが、山学同志会の方々の手助けを受けて下山した。原因は不明だが、タフをもってならした小島にしては珍しい出来事であった。（長沢）

ツヅラ岩参り

一九六〇年六月　中川滋夫、他一〇名

六月一一日

一年生のためのトレーニングを行う。アップザイレン練習後、

第一ルートを登攀。

一九六一年三月　大　建二郎、宮本英治、蛭川隆夫、伊藤重道

三月二二日

どうしたことかアプローチにもたついて、岩の下についたのが昼すぎになった。大、伊藤が第二ルート、宮本、蛭川が第一ルートを登りアップザイレンで下降。そのまま帰京した。（蛭川）

一九六一年一一月　臼井　弘、他多数

一一月一〇日

早朝立川を発つ。遅刻者多くあきれる。千足から少し入った林間に幕営。直ちに岩に向い訓練。

一一月一一日

一日中練習して、夕方撤収し帰る。ザイルさばき、バランスクライム、確保等の基礎技術の訓練が足らなかったようだ。（蛭川）

一九六二年五月　竹中　彰、村上泰介、小島和人、佐藤　力他一名

五月二八日

朝八時、立川駅に集合。バスで千足まで行って、登り始める。先ず、下半のクラックを全員で登る。上半は竹中、村上で左側のかぶり気味のルートをハーケン、アブミを使って登る。陽の沈むに追われて下山。（村上）

一九六二年一一月　長沢道彦、小野　肇、原　博貞

一一月一八日

第一ルートと、その左の小さなハングのあるルートの二本を登る。一年生をトップにしたのは反省の余地ありと後日批判された。（長沢）

雲取山

一九六〇年九月　倉知　敬

九月一一日　曇

この夏に痛めた足を、一週間後の南アルプス行のために慣らして置こうと思って出かける。

前夜丹波山荘泊。五時半発ち、ただ何もこの悪口は、かつて或る山まで三時間、雲取まで一時間。雲取は二〇〇〇㍍級の山にしてはお粗末な山、何の特徴もない。（最もこれは、かつて或る人と雲取は二〇〇〇㍍あるかないか賭けて敗けたセイもある）退屈なあまり、二人連れの女性とお近づきになって歌など教えてもらいながら日原へ下った。

鷹の巣山

一九六〇年一〇月　永井新也

一〇月一日

日原発（九・二〇）―鷹の巣山頂着（一一・〇五～一三・〇〇）―六石山頂着（一四・〇五～一四・二〇）―氷川神社（一五・二五）

日原から標識にそってバス道を左に折れ、己の戸橋を渡り小さな沢をつめて左側の尾根に取付き、急な登りをあえぎつつ進む。尾根の途中の笹の中で昼食をとる。急な尾根から右へゆるやかな斜面をしばらく行き林をぬけるとすすきの原、ここが頂上であった。多くの鳥がとび交い鳥の巣山と名付けた方がよいくらいであった。下りは左に七つ石尾根を下るわけだが、途中で多摩湖へ下

る道を間違え一五分程ロスした。六つ石山までは広々としたゆるやかな尾根を下ったが、ここを過ぎると急な下り。雨にぬかったぬかる道に足をとられスッテンコロリンの連続である。編笠部落をすぎれば間もなく氷川神社についた。林ばかりで景色のみえない道ばかりでノンビリ景色を楽しむことはできなかった。

水根沢

一九六〇年一一月　遠藤晶土、宮本英治

一一月一二日

氷川（八・四五）―沢登り（九・二〇）―林道（一三・三〇）―水根（一五・三〇）―水根（一五・三〇）―中和寮にごろごろしている退屈さに耐えかねて、奥多摩の沢登りでもするかと重い腰を上げて出た。季節はずれの事とて、ワラジをはき沢に入った時の痛さ、とても長くは歩けない。三㍍から五㍍程度の小滝続き、岩壁を快適に越えていく。一〇㍍程の大滝は右側を高巻く。バランス悪く調子が出る迄結構恐い感じのする所あり。こけに滑って二㍍程遠藤が滑ったりした。さしたる山場もなく林道と合し、六ツ石山縦走路へ出るのもめんどうとなって、そのまま引返した。奥多摩の楽しさを充分味わえない。ただ他人に逢うことも全く無いので静かな雰囲気にひたりに行くのには最適だ。

（宮本）

雲取山

一九六一年八月　小野肇、他四名

八月二七日　晴のち雨

立川（〇・五一）―氷川（二・一〇）―ビバーク（三・〇〇～七・〇〇）～奥多摩小屋（一五・三〇）

大事をとりすぎて食料、着替え、シュラフ、ラジウスその他奥多摩に行くのには重装備すぎた。氷川から歩き出したのはよいが、みんなねむそうにフラフラ歩いている。シュラフがあったので適当な所でねむった。午後から雨模様になったので雲取の手前の小屋で一泊。

八月二八日　曇のち雨

出発（九・三五）―雲取山（一〇・一五）―三条の湯（一四・三〇）

雨が雲取からくだる頃降り出す。まだ雨の中を歩いたことのない連中ばかりなので衆議一決、将監小屋まで行く予定を三条の湯にする。ざあざあ降る外をながめての鉱泉は格別だった。

八月二九日　曇

出発（九・〇〇）―氷川（一五・〇〇）

河原で残った食料をたいらげた。

（小野）

カロー沢（針葉樹会懇親山行）

一九六一年六月　山田亮三、横山皖一、各務謙蔵、宮川次夫
石原　脩、吉田義則、高崎治郎、柴崎　新
（以上OB）、大　建二郎、高橋信成（以上学生）

六月一〇日

午後三時三五分立川発、奥多摩日原近くの河原にテントを張る。五時五七分の電車で来た横山さん一行はタクシーで来る。夜

スキ焼コンパ。

六月一一日

カロー沢をつめて午後三時帰る。部室へ寄って飲みなおす。二日間飲みつづけで頭がさえなかった。（高橋）

川乗山

一九六二年四月　高橋信成、他二名

四月一五日　晴

鳩ノ巣―川乗山―氷川

大体四月の中端に奥多摩へ他二人と行くとは、メッチェンを鼻の下を長くして案内したのに違いないと思うだろうがさにあらず。弟と妹を連れ、快い一日を過した。

越沢金比羅岩

一九六二年九月　倉知　敬、蛭川隆夫

九月一六日　晴

越沢の金比羅岩へトレーニングかたがた出かける。一応取りついては見たが夏のNの遭難の記憶がよみがえってきて、なんともこわくて仕方がない。結局のところ、左手のスラブの間をぬって登るルート一本を登っただけだった。それでも、スラブあり、ルンゼありで変化に富んでいてなかなか面白いルートだった。（蛭川）

氷川屏風岩

一九六二年九月　大賀二郎（OB）、高橋信成

九月一日　快晴

氷川駅の裏山にあるゲレンデ。ホームからも良く見える。ツヅラ岩よりひとまわり小さいが、変化がある。四時間、四ルート登る。（大賀）

御在所岳（名古屋地区針葉樹会懇親山行）

一九六〇年八月　奥野稔明、佐籏　恭、岡垣治雄、渡辺嘉佑（以上OB）、倉知　敬、臼井　弘（以上学生）

八月二七日

名古屋―四日市―湯の山温泉―北谷兎の耳幕営地

土曜の午後、各自仕事を終えてから、御在所岳岩場下の兎の耳泊場に集まる。学生持参のテントに入って、楽しく夕食をとった。しかし怪しかった天気もくずれ雨が土砂降りとなって来て、テントの漏水浸水甚しい。テント場は河原なので増水と共に、テントの中も一面に水深一〇㌢位の浸水である。だがいくら浸水激しくともいささかも動ぜず、もくもくと食事を続けるとは流石は百戦練磨の先輩達である。こちらは少なからずヤキモキしたが、食事終ってやおら下の小屋へ避難することになって一安心した。小屋で台風が接近したことを知った。

八月二八日　曇

北谷小屋―岩場―小屋―名古屋

雨が上ったので岩場に向う。「一の壁」付近の岩場を登った。この花崗岩の岩場の細かいホールドには、慣れないと一寸とまどう。先輩達の前で学生二人で登らされる羽目になって少しくテレ

くさい思いをした。しばらくそこで遊んでから、「銀座コース」とか称する岩場周遊ルートを通り御在所の頂上に登った。

ゆっくり下ってから、湯の山温泉に寄って汗を流し、四日市では寿司など食して名古屋で解散。

台風等にぶつかってしまって、登山の方はあまり出来なかったけれども、その他の方では仲々楽しい山行だった。こういう懇親山行が定期的に催されるようになって欲しいものだ。（倉知）

表六甲・芦屋川

一九六二年三月　竹中　彰、村上泰介、他多数

三月一八日　晴

母校山岳部の連中が岩登りに行くというので、お供する。朝九時に大阪駅に集まれば、正午にはもう乾いた花崗岩に触れることができるのだから、六甲は実に手軽で、魅力的な山だ。この日は、古くイタリアンリッジと名付けられたルートを登り、夜は、川辺に張ったテントの中で、清談歓談の時を送り、河鹿の声に春眠を貪る。

三月一九日　雨

六甲の雨は、優雅でしかもちゃんと上から降ってくる。けちな岩場をテントの対面に見つけて、全員頭を冷やす。夕方になって雨が止み、見晴らしの良い場所に出向いて、阪神の百万ドルの夜景に目を奪われる。

三月二〇日　晴

分れて、各ルートを登る、A懸、B懸、キャッスル、ウォール等ビヴラムのフリクションに物を言わせて、大胆に登る。三時、テント撤収。「午後三時の山」に長居は無用だ。ロックガーデンを一気に芦屋川駅に下る

（村上）

大山の休日

一九六二年三月　中島　寛

伯耆富士といわれる大山はその端麗な山容と独立峰の故に富士山に似ている。

しかし、山頂が東西に長く広がっている関係で山ふところが深く、元谷の奥にそびえる北壁はけわしく、楽しい登攀の場を提供してくれる。

安来に三ヵ月間滞在する機会を得た僕は毎週のように休日になるのを待ち兼ねては大山へ通った。パートナーを得られなかったことと、たまたま膝を故障したために思いきった登山が出来なかったが、それでも大山での休日は静かで、豊かな山との対話を味わせてくれた。

一九六二年三月一一日。はじめての大山。工場の山岳部員二名と別山沢を登る。雲行きが激しいが、天気はよくなりそうだ。五時半大山寺の寮を出る。

大山寺の樹林帯の中を元谷に沿って一時間で広いカール状の出合に出る。とても明るい雰囲気だが、岩と雪とがおりなす北壁の様相は変化があって奥深い。大屏風、小屏風の岩壁帯が思っていたより魅力的だ。ふとあたりを見まわすと、すっぽりと山の空気に包まれているのを感じて愉快になる。

新雪をラッセルして別山沢に入る。雪はしまっていて雪崩の心配はない。途中でアイゼンをはき、一気に七合目の肩までせり上

る。久し振りの山、しかもアイゼンがよくきいて気持ちがよい。

この頃、一般ルートを登っている工場山岳部のOB連から声がかかる。彼らは頂上からのスキー滑降を楽しむためにスキーをかついでゆっくり登ってくる。こんなところに大山の楽しさがあるのだろう。

僕たちは、なだらかな、まるで平原を思わせる稜線を急ぐ。大山を一廻りしようと考えたからだ。

ガスの中には標識の赤旗がすんで続き、三〇分程でふと気がついたら頂上であった。こんもりとした雪の丘といった感じである。ようやく陽がさし始めて、僕達は陽をあびながら天狗の峯へ縦走に移った。ラクダの背といわれるやせ屋根が一ヵ所あるけれど、全体に気持ちのよい雪稜で、左方にははるか日本海、中の海が光っている。ユートピア小屋から元谷にかけ降りた時はまだ一二時半だった。

その時に見た大屏風が印象的で、僕は翌週も翌々週も大屏風の下にたたずんで北壁を眺めて過した。

一緒に登ってくれる人がいない。そう思うと無性に登って見たくなる。

雪のついていない鏡岩の垂壁が威圧的で、所々に見えるハーケンに親しみを覚え、誰かわからない先人の苦闘を連想する。

あまりすっきりした登攀じゃないにちがいない。しかし、やりがいがありそうだ。一日に何パーティもかちあう岩場でないのが気持ちよい。

右の小屏風の下、元谷のどんずまりのあたりでは地元岳連の雪上訓連が行われていて、元気のいい声が響いてくる。

左側の天狗沢は完全に氷化していて時々氷片がカラカラと滑り落ちてくる。ユートピア小屋へ続く稜線のののどかさがユートピアそのものを思わせる。

晴れあがり、風もない昼下り、けだるさに身をまかせきって山の空気を吸いこむ喜び。

さあこの次はいいパートナーを見つけてやってこよう。山に登るもう一つの喜びをあの屏風岩を登ってみつけるために。

下りはスキーで一息に走る。またたくまに大山寺の部落が目の前にあった。

（中島）

英彦山

一九六二年三月　三井　博、朝木大統

三月一三日　晴

英彦山町（七・三〇）―中岳（八・三〇）―英彦山町（一一・〇〇）

遭難のショックを消すためと、卒論を書き上げた安と感から九州旅行をすることにした。英彦山はその途中に登ったものである。標高七〇〇㍍にある英彦山町の朝は寒い。重要文化財の鳥居をくぐって石段を登っていくと、千本杉の立ちならぶ静寂な道に通ずる。英彦山町から一ピッチで頂上の中岳についた。神社があり、静寂の中に南国の春の訪れが感ぜられる。帰路は南岳から鬼杉のコースをたどって英彦山町に帰ったんずまりのあたりでは地元岳連の雪

（三井）

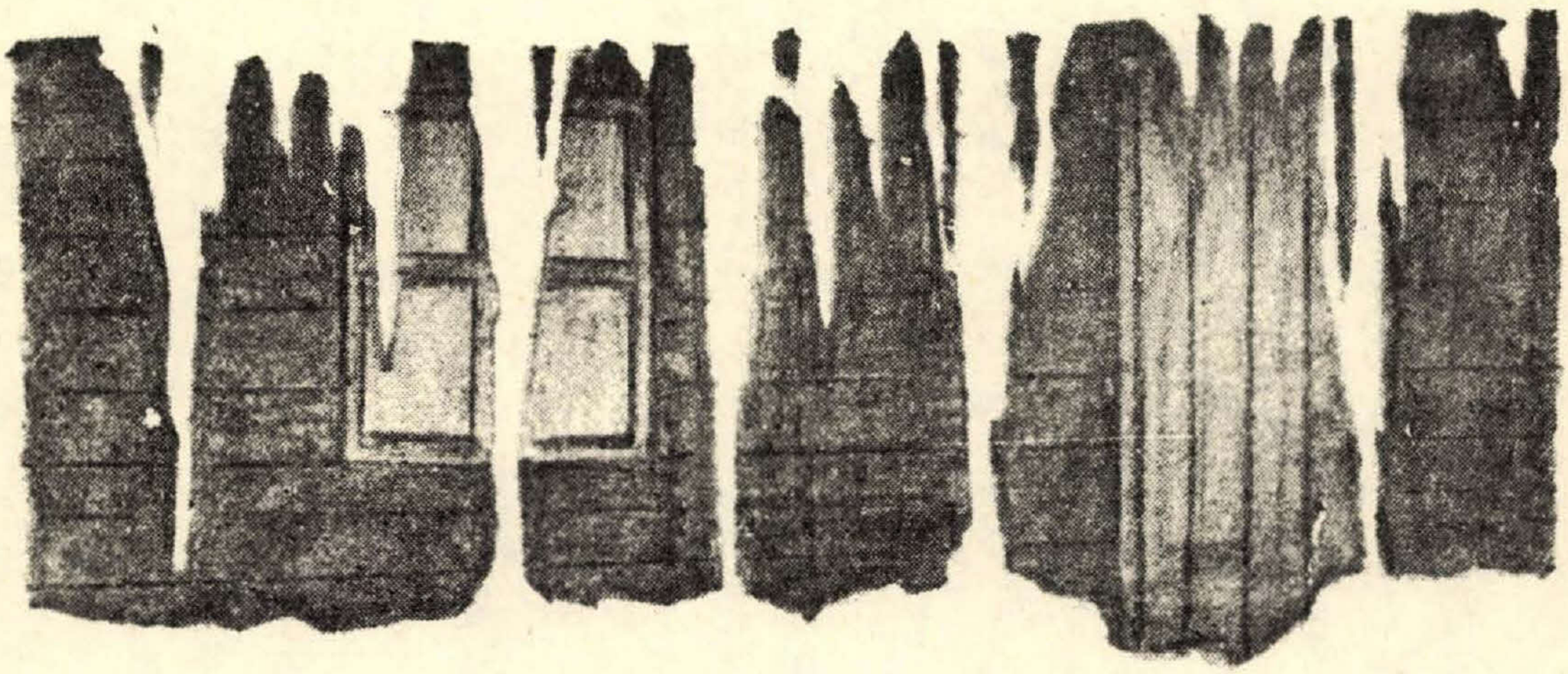
霧島連峰

一九六二年三月　三井　博、朝木大統

三月一七日　快晴

えびの高原（一〇）―韓国岳（一〇・五〇）―獅子戸岳（一二・〇〇）―新燃岳（一二・四〇～一三・二〇）―湯之野温泉（一五・二〇）

えびの高原でバスを捨てて韓国岳へ向う。さすがに霧島は大衆的な山で、女学生が群をなして登っている。韓国岳の頂上も人の鈴なりだ。だが獅子戸岳へ熊笹をわけつつ行く頃には殆んど人がいなくなる。底抜けに明るい草山歩きだ。新燃岳はその名の通り、火口に水がたまっており、お釜のようにぐつぐつ煮えたぎっている。火口のまわりを一周して、獅子戸岳との鞍部へ戻り、まもなく花を開くであろうツツジの大群落の中をのんびり湯之野温泉に下った。全く静かな明るいコースである。（三井）



山小屋

氷雨さらさら降ろうとままよ

春の雪解にゃ　あら　浅みどり……

＜一橋山岳部に寄する＞

藤原　敏（針葉樹１号より）

雪よ岩よ梓の青よ

一一月のホタカは新雪だ。目を奪う静寂だ。優雅な青が背の高い樺の白となり疎林にやわらかく形を失って硬質な黒となる。そして、その上にいや高く青い雪線だ。多彩と自由にタモトを分った雪のピークだ。

身体いっぱいにひろがる心地よいまどろみに我を忘れ、皮ふを貫き臓腑にしみる寒気のように、ぼくたちは外延し、途方もなく霧散する。

午前六時は蝶が地上に舞い降りる時だ。けだるい足が考えはじめる時だ。何故だか、何故登るのか、そんなことは知らない。美しく無力な虚構の世界を構築し、その限定された論理のロマンに安住するのがレアリストなのだと、だから夕陽がまぶしいと困ってしまうのだと、君は言いたいのか。

事実はモノクロームだ。横たわった結末だけだ。理由は彩色だ。いまわしい作為だ。美しいものを美しいと見なし、真なるものを真なりと感ずる、世界のこの優しい無関心のうちに、かくして配置されたオノレを知り、かくして充満したオノレの世界のうちに、その不作為にこそぼくたちは在る。

潤いの均衡と生き甲斐の不均衡の絶妙の中立を保ちつつ、やおら坐折し、再興し、坐折して、なお連続と向上とを遠く抱きながら、やがて淡雪のようにふんわりとだらしなく融解する。だから、ぼくたちはあたり一面の老いを許容せねばならない、と君は言うのか。

午後六時の光の王国はまもなく絶える。岳は白い濃霧に身をひそめて山麓に威赫の烈風をたたきつけながら、古い昔のために今大急ぎで冬化粧をはじめたにちがいない。ぼくたちの小さなコルディアに立って、希望をまた一本燃やすとき、天井のくらがりが、降りてくる。さあ上高地はもう雪なのだ。（チョン）

春合宿の平凡なる朝

ハッとして目を開ける。寝過したのではないか？　時間は……まだ一二時、三時間ある。春合宿も半ば、今日中には残り全部の荷をC3まで上げねばならない。単調なものうい想いが、またねむりをさそう。一歩も出られないような吹雪になればいいのにと思いながら、目を閉じる。

今度は変に時間が気になってなかなか寝られない。時計を見る。三〇分経った。ときどき風の音に耳をすます。外はおそらく地吹雪だろう。顔にたたきつけ、まつげに凍りつく雪のつぶては一種の快感だ。顔からぶら下るつららはいやなものだがある程度を越すとやけくそで、何となく楽しくなるから不思議……。

「僕は北ア特産のつらら付の葦です。風にあまりたたかれたので考える事は忘れてしまいました」とニタして自嘲する……。

や、もう時間だ。思い切りをつけて、ポイと起き上り、ローソクに火をつける。テントの中がチカチカ光る。シュラフの上も、あわてて顔を出した友の髪の毛も、光っている。ひどい霜が降りたな。

「いこい」をくわえ、ラジウスに点火しながら考える。今朝の

ラーメンの生産工程をいくつに分化させようか。紅茶における葉っぱと砂糖の構成率は……。そんな事だけを考えながら手は機械的に湯を作り出す。

ボッカと地吹雪と「いこい」の三部分に構成された春山生活の一日は今朝もこうして始まった……。

（X）

無題

下山だというのに物凄い吹雪だった。メシを食うのもそこそこに木村さんの所を出た。釜トンネルまではトレースも消えていず、さして苦しくもなかったが、トンネルを抜け、中の湯を過ぎると、テブリの数が去年とは比べものにならない程多い。風も雪も下るにつれて激しくなった。百間長屋を過ぎ、何とはなしに足が軽くなったものの、発電所から先はうんと長く感じられた。沢渡の橋を渡るとすぐ、なじみの茶屋だ。例のタヌキみたいな顔をしたオヤジがお茶を注いでくれた。シルコを注文した。今度の合宿では餅を全然使わなかったので、特に餅が食べたかった。少し位高くなってもいいから餅を沢山入れてくれたのんだ。オヤジは、あたり前の事だというように、にべなく断わった。ケチなオヤジだ。しゃくにさわるオヤジだ。だけど、なんとなく親しみの湧くオヤジだな。

（TAKA）

モノローグ

淋しいなあ。試験は悲しいな。

日頃何もしない奴が勉強勉強とわびしいな。

電車を待って一人で寒い部屋にいるのはつらいなあ。

ノート貸してくれる奴を捜してるのは心細いな。

何かある度に、ひょいと変れる人は羨ましいな。

とぎれとぎれの尺八の音は哀しいな。

ぼくの頭はかゆいな。フケがたまってるんだな。

（腹）

マネージャー交代の弁

D君離職のアイサツ

小生、今日限りマネージャーをやめさせて戴きました。後任は狸君にお願いいたします。今日まで色々いろ金の催促で皆様方に大変迷惑をかけ（られ）どうしで、全く恐縮の極み（迷惑千万）でございましたが、今後一切金の督促は致しませんのでご安心下さい。とはいうものの、そもそもマネージャーたるものは「マネーをジャンジャンとるものである。」という考えをもたねばやっていけないものでございまして、長年にわたってその職務を忠実に遂行いたしてまいりました私としましては、当分の間その精神が身について体臭となり、なか脱け難いものと思われます。

従いまして、万が一にも私がかかる言動を弄しました場合は、前マネージャーの長年の苦労を思い遣って、暖かい目でみていただくようお願い申し上げる次第であります。

（DYE）

狸君就任のアイサツ

今回光栄ある一橋山岳部のマネージャーに就任いたしましたことは、感激の至りであります。この係は昔はかの有名なる森川氏、勝田氏などの偉い方々が携わっている、由緒ある係でありまして、不肖私もこの光栄ある諸先輩の業績を汚さぬよう努力してまいりたいと思います。

最近、一部に部費の納入を怠る風潮がありますが、嘆かわしい限りであります。幸い、先任のD君が極めて立派な成績を残していきましたので、私も忠実に職務を遂行してまいりたいと思います。

（タヌキ）

断片

今日は成績表を出しにここまでやってきたのだが、国分寺駅から見る奥多摩の山々は、二、三日前の雪でうっすらと化粧して大変魅惑的であった。いよいよ「山」だという感じで胸が一杯になった次第である。

山よ、山よ、逃げないでおくれ。
たとえ試験があったとて、
もうすぐお前に会えるのさ。
たとえ不可があったとて、
終ってしまえばしめたもの、
とんでいって抱きしめてあげるから。
山よ、山よ、待っておくれ。
たとえお金はないとしても、
一生懸命働いて、
汽車に乗ったらこっちのもの、
もうすぐ行くから待っておくれ。

（……やはり一年だよ、――陰の声）

（一年生）

宿直の夜に

六月一日午後九時。宿直のためにやってくる。そう広くもない部屋に一人すわっていると、いつもの事ながら不思議な世界に入り込んで行く錯覚に陥る。静かな国立の森の内にある部室、電車や自動車の騒音が聞えてくるが、それは遠い別世界の事のように思われる。自分と社会の絆を全くたち切ってしまう雰囲気をもつこの部室。それは寂しく耐え難くもあるが、同時に最高の悦びでもある。こんな部室との付き合いも四年目になった。大学に入り山岳部に入部して以来既に四年目になる。

三年前の六月一日、谷川の合宿を終えて東京に帰った日だったと思う。生まれて初めて一週間という長い山行を経験して法師温泉に帰った時はうれしかったものだ。あの時皆何回も何回も飯のおかわりをして、女中さんを驚かしたっけ。東京に帰ると次の前期合宿が待ちうけていた。その目的地が穂高だと聞いて、ある小説の事を思い出し、少なからず不安になったものである。何もわからず、とにかく先輩に連れていってもらう事で一生懸命であった。山そのものが、段々スケールが大きなものとなって行くし、愉しくてしょうがなかった……。組織的トレーニングが少なくて

不安ではあったが、なにはともあれ山に連れて行ってくれるという部の方針は非常に良いものに思われた。

二年前の六月一日、谷川合宿は無事終り、小平祭、前期合宿の企画、具体化のために、クレージー八ツ会の面々が、喫茶店で討論していた。何でもかんでも上級生に従って行く山から、自分達で計画立案する山へ脱皮する時であった。五月には一人で甲斐駒、仙丈に行き、静かな山に一人でいる事の悦びと、自分で計画し実行する山の充実感を味わった後であった。それ迄にも多くの山々に登り、山の良さを知ったように思っていたが、山の美しさを、偉大さを、そしてその懐に身を横たえる事の悦びを知ったのは、まさにこの時だったと思う。

それは山と私の内的触合いの最初であった。そして発展的意欲を掻き立てられ、その準備と研究の必要を痛感させられた。前期合宿に続いて奥又入りが決定していた。さらに夏合宿後の大延長戦を立案中であった。山と私の距離は急速に縮まった感があった。その時には、間近に私の精神状態を根底から揺り動かす出来事が待ちかまえていようとは予想するべくもなかったのだ。

昨年の六月一日、五月の奥穂における滑落事故は深刻な影響を与えた。部にも私にも。次の岳沢合宿のためにリーダー会が開かれていた。私は一昨年の事故で大きな精神的動揺を経験していた。冬山、春山を経てようやく自信を取戻そうとしていた矢先の出来事であった。部では再建策が練られた。私もサブリーダーとしてリーダー会の一員となり、個人的な悩みにのみ目を向けている事は許されなくなった。我々の山行が健全で充実したものとなるように、その方策を考える事に努力を集中しなければならなかった。それでも私を包んだ恐怖心は、依然として重く私にのしかかって来ていた。この恐怖心を克服する唯一の方法は山に行く事であった。山は恐しかった、しかし山に行きたかった。

そして今年の今月今日、私は宿直として部室に一人座っている。遭難を恐れてばかりいる事がいかに馬鹿らしい事であるかを知った。それを防ぐための準備と努力が、そしてまた、山そのもののための登山が、何より必要である。我々はこれらを再確認しながら次の合宿の計画を建てよう。

× × ×

想いはめぐる。今度、なんとか時間をとって「南ア」に一人で出かけよう。そしたらまた、何かさけびたくなるようなうれしさと、逃げ出したくなるような寂しさを味わう事が出来るだろう。静かだ。もう車の音も絶えた。時々聞える木々のざわめきだけが私の意識を人間社会に引きもどす。

（インゼル）

夏恋し

実に良い天気である。
濃く厚くなった緑の奏でる音楽も楽しい。
ビールのうまい季節となった。
早く夏休みにならないかなァー、
コーヒーも忘れ、政治も忘れ、
勉強も忘れる夏山！
シゴカレの夏山。
アノ冷い水、タルンだ気持を引きしめる水。

アノまずいメシ。
そして岩登り、グリセード。
それにしても多すぎる涸沢の人出。
静かで、強烈な、夏山がほしい。

（牛）

われら同期会

一九六二年度入部した我々も恒例に従って会名が必要になったが、なかなかよい名が見つからないまま三年になってしまった。そして最近になって奇妙な名前が登場、これに決まりそうである。その名は道程会。「みちのり会」と読む事が必要である。しかしながらその由来は音読みした際の同音異字からきている。六人全員深窓育ちのせいか、人格高潔なせいか、単なる運のせいか知らないが、会長の高崎を筆頭に皆で「清らかな青春、さわやかな青春」を謳歌している次第である。さて我らのこの会では基金をつくる事にした。なにがしかの会費を集めて基金をつくる予定であるが、その目的は……。会はOB制度をとる事にし、目出度くOBになった者が、その式典の手違いから後始末の必要になった際、費用の全額又は一部を会が負担しようという趣旨である。もちろん式典費は負担しない予定である。

（NO・1）

告示

我が山岳部に入部以来、自他共に承認されて来ました秀才会なる我が三年会の名称につき、最近巷間で八ッ会なる名称がとってかわりつつある現状は誠に遺憾です。しかし名称とはその本質を表わすものではなく、あくまでもその形式的称号にすぎない（なにッ、名は体を表わすだって？うるさいッ）という点から八ッ会という名を認めることと致しました。（巷間では秀才会の一会員が、八海事件をハッカイジケンと読み間違えたという噂がありますが、それは全然事実無根であります）

（只）

大岳院生の記

久しぶりでゼミが早く終わったので、山の臭いをかぎに部室へやって来た。まったく久しぶりである。学校には水、木、金の三日は来るが、いずれも五～六時頃までであり、ゼミでしぼられた頭で部室までやって来る気になれない。大学院へ入ったら好きな山を選択し、好きなように山を楽しもうと思っていたが、実に甘いはかない夢だった。脇から見ると三日しか来ないとは暇なもんだと思う人もいるだろうが、毎日机に八～十時間はしがみついていなくてはならない。金にもならぬこの商売、つくづく嫌になることもある。山にも行けず、デートする時間なく（めぼしいのが初めて現われかかった――謹んで報告する）ただ横文字の本に追いかけられる毎日。だが老兵は死なず、七月は谷川連峰縦走、八月は日高へ行くつもりだ。そのうちに合宿にも出るぞ！

（STONE）

山の一日

山々が朝日に輝く頃
僕らはテントを出る。

紺碧の空、黒いスカイライン
白い雪渓が急峻なルンゼの
奥深くくいこんでいる。

岩場
全身に闘志がみなぎる、血が躍る、
「いくぞ！」、「O・K」
慎重に一歩をふみだす
ザイルに感じるトップの息づかい
「あと何メートル？」、「五メートル！」
ピトンは歌う
ザイルはのびる。

トップは最後の壁をぬけた
「いいぞ！」
さあ、あせらずに行こう。

山頂の憩い、紫煙をくゆらす
微風が頸をなでる
高嶺の花がゆれる
テントはるかな池の畔

グリセード　はやい、はやい
テントはもうそこだ。

山々の茜色も消えて
満天の星が輝く
静かにうたう山の唄
今日もすばらしい一日だった。
明日も又天気であります様に……

（皆さんがうまいと言ってくれますように——陰の声）

（ヒラ）

一〇年後の一橋山岳部

四月〇日、部員集会。本年度の計画が決まった。まず五月には連休の終ったあと、一〇日間の基礎技術訓練合宿が剣で行なわれる。人の混む連休に出かける愚はさけて、その時には部室で基礎体力トレーニング用合宿をし、科学的理論にのっとった合理的な体造りをする。何しろ超科学的なやり方なので、一週間もあれば、皆たちまち鋼鉄のようなたくましい体になってしまう。

それでもやはり個人的な差というものはあるので、このデータを電子計算機にかけて今後なされるべき方向を定める。

さて、これだけの下準備をしていよいよ陽光あふるる北アルプスに出かける。山岳技術の習得も今や体系的なコースが出来ているので、基礎体力さえついていれば、一〇日程でもう一流の岳人となってしまう。何度も合宿に出かけてやっと一人前になったという一〇年前のOBの話がとても信じられない。

六月は机上訓練である。山の古典を初め、後進国開発の理論書、外国文献など、片っぱしから読破し、ゼミナールを開いて討論し、そして各自のテーマを決める。ここで今年の四年の卒論の題目も決まる。今年は、Aはネパール〇〇地区の農村流通組織の研究、Bは〇〇河地域の総合開発の経済学的効果測定、Cはカトマンズ民族資本の生長の調査、Dは将来自分が着手する観光事業の下準備をポカラでやる……。

夏休みになれば、全員そろって〇〇小屋で今年の遠征合宿の資金獲得のためのアルバイト。何しろ登山人口は増えているからもうけは多い。収入数千万円の予定。

終ったら、軽く北海道で沢登りなど楽しむ。大衆に開放された夏の日本アルプスは、彼等のレジャーのために残しておいてやろう。今では積雪期以外の日本アルプスは我々の興味の対象となり得ない。

夏が過ぎるといそがしくなる。九月には四年を中心にしたヒマラヤ学術登山遠征隊が出発するのだ。ポスト・モンスーンをねらって辺境の〇〇ヒマールを踏査し、その後それぞれのテーマに従って各地で冬を越す。「岳」の方も「学」の方も四年間の総仕上げという訳だ。

さて、リーダーシップをゆずられた三年以下の部員は、上級生を送り出した後、彼等自身の合宿準備にいそがしい。今年はカムチャッカの縦走をやる。これは来るべきベーリング海峡の大横断遠征への一つの布石であり、また将来、グリーンランドや南極に進出する時の基礎訓練の意味もあるのだ。

厳冬期には、氷雪の富士山で耐寒トレーニングを行ない、準備おさおさ怠りない。

二月の試験は軽い気持で終えて、三月には全員カムチャッカへ出発の予定。

皆、希望と期待に満ちあふれている。今や我々の一挙一動は、各方面から注目され、援助の手も数多く差しのべられている。まさに、これこそ一橋パイオニヤスピリットの発露と、学校からも大きな期待を寄せられ、入部希望者は跡をたたぬ。選りすぐるのに苦労する程だ。だが、我々はこれで満足している訳ではない。更に次なる飛躍のために、月へ宇宙へ、その行方は正に止まる所を知らない。

（虹を摑む男）

創作・ここに男あり

×××××××

し、いささか人が恋しくなっていたところであった。ばか云え、ありゃ男だ、Dは云った。よっしっ、そんならカケよう。勝ったら荷物半分だ。ヤッホー、と声をかけたAは、途端に渋い顔になった。きれいなバリトンが返ってきたからだ。おい、出発しようぜ。Aは又云った、待て待てせっかく人が来るんだ、顔くらい見ておこうや。男が近付いて来て云った、小屋番ですが一人三百円づついただきます……。

Aがその日すぐバテたのも無理のない話であった。

××××××××××××M××××××

ハンサムをもって自認するMのたった一つの悩みは、色が人より少々黒いことであった。五月の山行に彼が日焼け止めのクリームの持参を思いついたとしても、至極当然のことである。アタック日は快晴、彼は顔に入念にワンサと引上げた後のなって帰れる。しめしめ。

岩場はむずかしかった。ハングを乗越してやっと悪場を抜けた彼は、流れ出る汗をぬぐいながら帰途についた。日焼け止めのこととは彼の念頭から去ってしまっていた。彼が自分の顔がブチになっているのに気がついたのは、二、三日してからであった。

××××××××××××D××××××

純情が売物のDがまだ一年生の時であった。まず、新人歓迎山行というのに連れて行かれた。登りながら皆の話を聞いていると凄い話ばかりである。どこのクラックはこうだ……。

Dは隣のヒゲ面の少々人間離れした人相の男に聞いた。「合宿はバテるでしょうね」「そうネ。」「今年の夏山はどこですか。」

「涸沢かな。」

その落着きはらった応答ぶりにDはすっかり感心した。この男はリーダーかな。思い切って聞いてみた。

「あのお、あなたは夏合宿は全部出るはずがねえよ。」

男は云った。「俺は一年生のYだ。出ますか。」

××××××××××Y××××××

所は新橋のあるバー。久々のアルコールでいい気持になったYは相棒のEを相手に気炎を上げていた。「現時点に於て最高度の闘争とは」……Eの得意気な顔がチラチラして来た。「何故山へ登るかって、ムニャムニャ」「そろそろ帰ろうぜ」……。

すっかり酩酊した二人が新橋駅のホームの真中に現われた頃は、もはや人影もまばらだった。夜の蝶ホームが何とはなくシブ臭かったのも無理はないが、Yは何を間違えたのか、突然前のボタンをはずしながら我慢を重ねたあげく、やぞ」とあわてふためくEを尻目に、Yはひたり切っていた。ただっと〇〇にたどりついたという満足感にそれが何となく細長いのが気にはなったのだが……。

××××××××××K××××××

Kは生れてはじめて根室へ来た。大雪山漫遊を終えて、ぶらぶらとやって来たのである。日が暮れかかっていた。めんどくさいッ、この辺でいいや、と住宅街の真中の空地に泊ることにした。テントを張る頃から近所のガキ共が二、三集まって来たが、気にしないでメシとなった。しばらくしてテントの外が騒がしいのでひょいと顔を出すと、たまげたことに何十人という人間が取りまいてワイワイやっている。「あれ、出て来た」「何してんの」と

いう声に怒ったKが「アッチへ行ケ！見せ物じゃないぞ。」と怒鳴ったが、全然反響がない。南洋の土人じゃあるまいし、とブツブツ云って引込んだKに、外から「これ食べてよ」とライスカレーが差入れられた。

パクつきながらKは「ああ！土地は変っても人の情は変らないものだなァ」と郷里の方へ飛び行く雁をながめて涙をこぼしたとかこぼさぬとか、いいかげんな話である。

× × ×

これはクロー会の人間の話だという人もいる。だがそんなことはないだろう。

（DYE）

アンデス

中島隊員殿

ご報告ありがとう。フリオはチョクニャコータのBCにて七月二〇日午前一〇時汁に玉ねぎを入れ、アルファ米を半分ほうり込んでおじやを作り七時頃戻って来た。丁度私が味噌食べ終ったところであった。

吉沢　一郎

アリエロ達はその前に戻って来た。寝て帰るというから少し食事をやった。

今朝八時頃、アリエロ等三人は家に向ったが、一人だけどうした訳か残っている。

折角来たのだからせいぜい登っておいてくれ。昨晩と今朝、ピストルを生れてはじめて撃ってみた。撃つまでは興味があったが、撃ってしまえばパーンというだけで、何のことはない。何か心当たりはないかね。

一人では淋しいが、原稿はドンドン書ける。ププヤは探検が主だから、今度は俺が行くつもり。

甘利副隊長によろしく。尖ってない山でもご注意が肝心とくれぐれも言ってくれ。

追記。報告・連絡は総てその隊の責任者が書くべきものと思うがいかがですか。

フリオは暗くならないうちに帰えしてくれ。

雲上の対話

――随分来たな。もうじきだろ頂上は。

――そうでもないよ、まだあんな遠くに尾根が見える。アレとこの尾根が合う所がテッペンなんだからネ。

――ウン、でも大したことはないさ。さて、この上はどうしても真直ぐ登らにゃならんね。

――悪そうだナァ、登れるンかね、一体。

――登れるさ、大体ネ、ここはそんなに大した所じゃないよ。日本の山にもって来たって、それ程難しい内には入らんだろう。

――それもそうだけど、スケールも大きいし、第一不安定な岩場だから、全体から見れば結構悪い方だと思うよ。日本のとは一寸悪さが違うな。先も皆目判らんし、もうそろそろ引返

す時じゃないか。これ以上一寸危険だよ。
――今来た所を戻ろうというのか。あんな所、降りるの大変だぞ。その方がよっぽど危険だ。俺はゴメンだよ。
――何とかなるさ、少くともどんな所だか判ってるじゃないか。上に行ったって、もうじき暗くなるんだから帰りのルートなど判りゃしないよ。
――帰りはあの東のコルに出る尾根サ、それ以外にないネ。初めての山に登るというのに、そんなこと云ってては登れっこないゾ。こうなりゃ執念サ。何としても登ることだ。
――ウーム、まあそうかも知れん。こんな端っこの山、登ったってドウってことないけどネ。結局の所、始めっからこの遠征が執念そのものだったからな。余裕もって楽しむなんて無縁のことだ。やり出したら図太く最後までやり抜いちゃう、というのが俺達の身上って所か。大和魂だな。
――いいか、行くぞ。しっかりジッヘルしてろよ……。（C）

リマにて・東京の部員諸君へ

拝啓。六月二一日付の手紙、受け取った。五月の事故はショックだったが、それにもめげず皆非常に活発にやっているようで、とても心強い。そうした〝盛り上り〟が出て来たというのに、遠くに居て何も出来ないというのは、はがゆい限りだ。しかし、あまりあれを軽く考えるのはどうか。元気なのは結構だが、背伸びせず自重して欲しいと思う。

さて、こちらはプカヒルカ登頂に成功して戻って来た所。（電報等は御覧のことと思う。）一応成功はしたが、勝手のわからぬ内に終ってしまった感じもあるので、正直な所僕としてはいささか不満足でした。第一きれほどあるのに、ほんのコルディエラ・ブランカの端っこを一寸登っただけで帰ってしまうなんて、もったいない山が文字通り山ンカという所は、本当に素晴しい所だから、何とかして又来たいもの、今度は皆でやろうではないか。早くこう掛けられるようにならないものか。

皆の興味の的はやはり何と云っても氷河だろうと思うので、一寸氷河について御報告しよう。一口で云うなら、氷河はヒビの入った洗濯板をたてかけた、といったところ、氷河にあるものと信じ込んでいたので、おっかなびっくりで登っていたけれど、その内に大したことはないことが判って安心した。突然足元がくずれて奈落の底へ、なんていう劇的な目には会えっこない。せいぜい片足がもぐり込む位のヒドン・クレバスしかなかった。それに何しろ氷は硬く、一粁程の厚さのスノウブリッヂだったら平気で渡れる。

氷河といっても氷の露出している所は少なく、積雪の深い所もあって結構もぐる。日中の暑い時には、アイゼンがダンゴになって弱った。こういうことが判ってしまうと、何だか夢が破れたような気がして、ひどくがっかりしました。

ところで、高度の影響の方は大分感じさせられた。キャラバンの最初の頃は、情けない程ひどい高山病にかかってしまって苦労したが、一度低い所へ降りたら直ぐなおってくれた。その時には

低い所は空気が濃いということをあざやかな実感としてとらえることが出来た。六〇〇〇㍍も近くなると、一心に氷河を登っている時など、高度を忘れてつい規則的な呼吸を乱してしまったら大変だ。てきめんに息がつまって胸がキリキリと痛む。あんな切ないことはこの世にあるまい。口をパクパクさせているのも、みっともない。陸に上った魚の苦しみも判ろうというものだ。

さて、大使館で読んだ新聞などから察するに、そちらは大分天候不順のようだが、全く気の毒なことです。もう夏合宿も近いが、しっかりやって下さい。遠くから想っていると、夏山のあの甘いような感触がよみがえって来て非常になつかしい。日本の夏山というのも又格別の情趣があってうれしいものだ……。

七月五日　ホテル・オリエンタルにて。（倉知）

東京より・リマの倉知へ

拝啓。成功おめでとう。全くうれしい。何だかんだのと云っても、登らなきゃしょうがないのが山というものだ。とにかく良かった。関部長も大喜びだ。

いろいろ苦労はあったろうが、そのいかと想像している。アブミを使った割に登り易かったのではなかったか。

所よりも、氷の壁と雪の斜面ではなかったか。

全員登頂とはすばらしい。南竹サンの打った電報の「デカシタ」というのが、われわれの偽らぬ気持だ。吉沢サン、甘利サンをはじめ諸隊員によくやってくれましたということを伝えてくれ。

ニュースの入ったのが六月二二日。午後二ELがきた。二一日の夜部室で宿直当番をしミング良く知らされ、再び部室へ。その前に木サンにTELする。皆大喜びだった。

夕刊の三面のトップに出た。一人一人の顔談、竹田吉文氏の談など。第二報が待たれている。おみやげのことなど気にするな……。

先日、朝日新聞の百々サンに会った。一橋士だとほめて居た。又、ヒマラヤでも出かけてもらえそうだ。

近頃、就職のことで頭が痛い。今年は大部分の会社が七月二〇～三〇日の間に決めるので、合宿と重なって試験を受けられぬ所が多い。三年程前までは八月末日が標準だったが、今年あたりから一ヵ月早くなった。今後もこの調子だと合宿期間にひびいてくるだろう。マア、どこかにもぐり込めるだろうが……。

ところで、学生アンバサダーとして何かやったかね。あとわずかで帰国だろうから大いに遊んでこい、旅のお前はカキステる程恥もかくまいが。早く帰って来い。

七月五日午前一時。むし暑しまい。（大）

アンデス交遊録

××××第一話×××

金なんてひげみたいなものさ

中島　寛

一人旅では、かけがえのない友を得ることがある。ここに紹介

するひげ男もその一人である。
僕は彼をマエストロ（旦那）と呼んだ。とうとう本当の名は聞きそこねてしまったが、そんなことはどうでもいい。とにかく「気のいいあいつ」を僕はどうしても忘れられないのだから。
プカヒルカ登頂後、僕は山あいのアシェンダを訪ねつつ、五日間のわびしい一人旅を続ける羽目になった。その三日目のことだった。パサカンチャに着いて、あとは車を見付ければよいとホッとした時である。
とある、赤い旗の立っている小屋からダミ声が聞えてきた。赤い旗とは軒先に立てた「酒ありマス」の標識。ひげもじゃで、汗だらけのシャツを着た男が、机の上にビールビンを並べて盛んに気焔を上げ、其の側で数人の男達が何やら大声で笑っている。その笑い声につられるように僕は中に入った。
半日歩き続けて喉の乾いていた僕は、何処へ行っても止むを得ず飲まされるコカコーラには嫌気がさして、大声で「セルベッサ（ビール）」と叫んだ。と、そのヒゲ男、「おお、アミーゴ！」と、まるで旧知の間柄でもあるように大声を出して、僕の所へやってきた。その時から僕達のセルベッサ珍道中が始まったのである。
その男はメスティソ（混血）で、いわばペルーでよく見るありふれた男である。しかしインディオの多い山の中であくどいもうけをしているメスティソがいてもそんな輩から僕達は何回か被害を受けてきた。だからその時も、僕は気が進まなかったし、警戒さえしていた。ところが彼の方は酒を飲む奴に悪い奴はない、と僕を最初から信用してかかる。速「カン(竟)！」と呼び捨てにして友人と称するあちらこちらの家にハシゴで案内する。
彼の商売は行商である。山の奥から安い野菜や穀物を買ってきては、カイェホン・デ・ワイラスの町々に売り歩く。一方、町では雑貨を買い込んで山に運ぶ。この往復が彼の生活であり収入源である。家は何処かと聞いたら、そんなものはないと云う。ペルー中が俺の家さと云ってワッハッハと笑った。
パサカンチャは山間の村々から町に出る為の丁度出口にあたり、彼の商売の一方の拠点でもある。その奥の鉱山会社が二日に一回の割合でトラックを運転しており、山間の人々はそれに便乗して町に出るのが通例であった。だから、彼と出逢ったレストランは小さなハタゴも兼ねていた。このトラックを我がマエストロはまるで自分の車の様に「俺のアンデス中央線」と呼んでいた。
四、五時間も飲み続けたあげく、夜更けてやっとやって来た車に乗った。
我がマエストロを先頭に一〇人程のインディオ達が乗り込む。後の半分は荷物、前の半分は人が乗れる様に特別仕立になっている。車が走り出すと、振動は激しいけれど車内は途端に賑やかな社交場になる。男はアガルディエンテをあおり、女は大いに食べる。そして話がはずむ。ここでも我がマエストロは一座の中心であり、皆を笑わせて一人悦に入っている。チステと云うエロ小説の大家である彼は声色と手振を入れて次々と新しい話を披露して行く。スペイン語のあまり良くわからない僕にも、それがよくわかるのだから不思議である。話にあきると柵を乗り越えて、後の荷物置場に行く。そこには彼の恋人と称する丸々と肥えた豚が待

ちわびていて、彼は息をならす恋人に餌を与え、接吻して戻って来る。

それは傍若無人、あるいはキザとさえ見える。しかし底抜けに陽気でタフでユーモア溢れた我がマエストロがやると、実に自然なのだ。僕は新しい発見をしたのがうれしくて、だんだん愉快になってきた。

その夜、僕は彼と一緒の宿をとった。そして翌朝早く車に乗り、次いでワヤンカと云う汽車が通る町に着いた。此の間の丸一日、二人で一体何本の酒を飲んだであろうか。恐らくセルベッサ五〇本は下るまい。正に浴びる程飲んだのだが、こんなに気持良く飲んだことは余りなかった。彼は僕達のこれから訪ねる場所を聞き乍ら、それらの土地の見所をくわしく話してくれた。解らない言葉にぶつかると一緒に辞書を引いてくれた。それよりも、言葉は心で知るということを教えてくれた。

ハシゴ酒の度に僕は恐縮して何回も金を払おうとした。しかし、彼は決して受けとらないのだ。俺の縄張りで金を払う必要はないと云う。彼の哲学によれば、金はひげみたいなものだ。今はひげが生えているからお前は下らない心配するな。ひげがなくなった時は生える迄待てば良い。その時お前がいたら、大いに飲まして貰うさ。僕は気が大きくなってすっかりその言葉に甘えた。

ワヤンカの駅頭で彼と別れる時、我がマエストロは僕に抱きついて離れなかった。涙が辛かった。そしてザラザラするひげが痛かった。

しかしその時以来、ペルー人はすべて此のマエストロと切り離しては考えられなくなってしまったのである。

ハンカパンパ部落の夜

プカヒルカのベース・キャンプには、毎日のように老若男女のインディオ達がやってきた。彼らにとって、色とりどりのテントや奇怪な言葉をしゃべる人間が物珍らしいだけではなく、来れば何か得をするから訪れるのだ。ポリエチレンの袋、缶詰のあきかん……。皆、彼らにとって、文明の匂いのする貴重品である。だから放っておくと混乱も起りかねない。そこでベースキャンプは物々交換のにわか市場に早変り。

価格は煙草一本に卵二個。あきかん一つに卵一個。ポリエチレンの袋一枚に横笛一本。

なかでも、オソバルド・ソロルサーという二二、三才の青年は、なかなかの好人物だった。物々交換の常連で、最後には横笛名演奏一回で煙草一本という相場をつくった男である。

ホソッタというタイヤでつくった草履をはき、ポンチョをまとい、遠くの方から笛を吹きながらやってくる彼はいつもひょうひょうとしていた。なかなか気性はいいのだが、やはりインディオ特有の暗い影がつきまとっている。フェルト帽のかげからじっと注いだ視線はちょっと気味が悪い。視線を感じて眼を向けると、さっとそらしてしまう。

××××××××第二話×××

そして暗澹たる気持になった

このどんよりした、しかし射るような、鋭いようでおどおどした眼の中に、僕はインディオの長い忍従の歴史がこめられているのを感じさせられたことが何度かあった。

プカヒルカ登頂後、僕らが逆にオソバルドの部落を訪ねたこと

があった。ようやく、仕事中のオソバルドを探しあてると、彼は二〇人程の仲間と一緒に畑を耕やしていた。

声をかけると、コマンダンテ（監督）の方を振りかえって、笑おうとした顔を一瞬こわばらせてしまった。後から知ったことだが、このハンカパンパ部落はアシェンダ・ビニアウヤという大農場の一部で、オソバルド達は一週間のうち四日間は農場の土地で働き、あとの二日で家族を養うために小さな自分の土地を耕しているのである。いうなれば、彼らは農奴なのだ。

ベースキャンプに居る時、一年のうち一番楽しい時はいつか、と聞いてみたことがあった。「収穫の時だろうな。何といっても腹一杯食えるもの」と、彼は答えた。そして、雪に閉じこめられて飢えをしのぐのは実につらいんだ、とポツリともらした。ここに彼らの貧しさが集約されている。祭りの時とかせめて農閑期のくつろぎ位を予想していた僕はその答の厳しさに驚いてしまった。

しかし、彼らの暗さは経済的な貧しさだけによるものではないだろう。おどおどした、しかし執拗に追いかけてくる視線は、何かを訴えている。あれは心の鬱屈を伝える。あれは言葉を奪われたものの眼だ。彼らの暗さの背後にあるもっとも大きなものは、身体ごと主人に隷属していることではないだろうか。

オソバルドを訪ねた夜、彼らの話を聞き出そうと、僕らは集った何人かの友人たちに二本のアガルディエンテをおごって気をひきたててみた。しかし、一向に盛上らない。月光の下の酒宴、プカヒルカの山々が青く輝く美しい夜だった。だが僕らは哀しかった。僕らは何かへだてられている。彼等の心の中にどうしてもとびこんでいけない。彼らは主人の手先として僕らを疑っているのではないか。

ところが、真夜中も過ぎた頃だ。ふっと沈黙の一時があった。

「ああ、スペイン語さえ出来りゃ、主人なんてどうでもなるんだ！」。

突如、オソバルドが吐き出すように叫んだ。それは呪いのような言葉だった。しかし、その時はじめて僕は彼等と心が通じあうのを感じた。何かがふっきれたのだ。それまで抑えられていたものをいっぺんに吐き出してしまおうとするかのように、彼等は急に雄弁になり、自分の言葉に興奮して一層話に熱がこもった。

それはことごとく主人の悪業への呪いであり、愚痴だった。しかしそんなことさえ彼等は何ヵ月ぶり、何年ぶりに語れたのだろう。そう思うと、スペイン語を知りたいという欲求は実に切実なるものとしてズシリと響いてくる。

オソバルドのいとこという男は、いくらかスペイン語が出来る。彼はかつてこの部落を脱出して近くの町に移り住もうとしたことがあるそうだ。しかしすぐに見付かって連れ戻されたという。

その時、アシェンダの監督は「去れ」と一言云っただけだった。しかし、それ以上に「去れ」という言葉は「死ね」という言葉と同じだと彼は興奮しながら語った。

国語であるスペイン語さえ知らない彼等は、町にも出られないし、仕事にもつけない。彼等は主人に対してさえ、言葉をもっていないのだ。言語は人間をコミニュケートするためにあるという原初的な意味をつくづく考えないわけにはいかなかった。

憲法によれば、三〇人以上の生徒があったら農場主は学校を設けねばならないことになっている。しかしそんなことはどこ吹く風。主人は金もうけのためには人間以下の彼らを徹底的におし下げ、使いつぶす肚らしい。憲法といえば、たしか兵役の義務があったはずだが、と思って、この地方の中心都市ポマバンバの役場で聞いてみた。

「彼らの徴兵はどうなっているのですか」

「ああ、スペイン語がわからない奴に用はないよ。他にいくらでも兵隊になる奴はいるさ。」

国民の義務からさえ見捨てられたインディオがいる。それも、山間のインディオの半数位は皆そうではないか。そう考えると慄然とする。そして何が何だかさっぱりわからなくなって来た。

〈ふるさとを捨てた男〉

オソバルドの弟フリアンは、死を覚悟してこの故郷を捨てた。二年前に一度だけ便りがあったから、リマに着いたことだけは確かだという。この五〇家族ほどの小部落の長い歴史の上で二人目のことである。

僕らは無性にフリアン君に会ってみたいと思った。何かがわかるかもしれない。生きていて会えさえすれば。彼らは誰一人として字を書けないのだから手紙は書けない。しかし僕らはちょうどテープレコーダーをもっている。「声の便り」を届けることだ。

そこで早速録音にかかる。最初は半信半疑だった彼らも、時々テープを戻して自分の声を聞かせてやると次第に夢中になり、マイクを奪いあう有様だった。

その中でもお母さんの手紙は切々と胸をうった。それまで黙り勝ちだったこの老母は、録音がはじまると生きかえったようになった。云い残したことがあると何回となくマイクをとりあげては涙ながらに「私の愛する息子よ……」と繰りかえす。

しかし、それはほとんど同じ内容なのだ。お前がいなくてどんなにさびしいか、元気でやっているか、ただそれだけを云っているにすぎない。だがそれ以上何が必要だろう。長い長い故郷の歌を唱いながら、涙ぐみ、声もかすれ、ついに絶句して泣き伏してしまった老母の姿が、今でも脳裏に焼きついて離れない。

それから二週間後、リマに帰着すると直ちに僕らは教えられた住所を訪ねた。しかし訪ねるフリアン君は居なかった。多分以前働いていた給仕だろうが、よくわからないという。似たような住所を次々と歩きまわってみた。しかし、とうとう逢えなかった。最後にぶつかったものは、山の上に行ってごらんという嘲笑だった。山の上とはバリアード即ちスラム。

そうかもしれない。多分そうだろう。彼は抜け出したと思った途端、新しい泥沼に入り込まざるを得なかったのだろう。そう思って暗澹たる気持になった。

この果せない約束を思い出す度に、そしてテープを手にとる度に、オソバルド君が、そしてフリアン君が、心の底から笑い、歴史とともに歩ゆむ日を胸の痛みとともに思い描くのである。

×××××××**第三話**×××

あなたがたは実存主義者ですか

T君はサン・マルコス大学経済学部二年の日本人二世である。ボサボサ髪、無性ひげ、身軽な服装で本を片手に、ヤァーとやって来るところは、寝ぼけ眼で寮から授業にかけつける国立あた

りの学生と少しもちがわない。日本語はほとんど話せない。
しかし彼の日常語はスペイン語。日本語はほとんど話せない。
顔は同じようでも、彼はペルー人なのだ。話がはずんで熱っぽくなってくると、その熱気に圧倒されて、ああいつはやっぱりペルー人だ、と改めて顔を見直してしまうことが通例だった。
陽気で話し好き、理性的というよりは感情的。だから議論をしても観念的ではなくて現実的。また夢想家で情熱家、我が強いけれど、酒にも強い。この特色には学生としての共通項が多く含まれているけれど、それ以上に我々とは異るペルー人的なものを感じる方が多かった。
何よりも考えさせられたのは、T君を含めた二世の学生たちが皆、ペルーにおけるインテリとしての役割をはっきり自覚していることだった。しかも観念的にではなく、極めて具体的に自分の仕事、進むべき道として。
この点で日本人二世が他の学生達と変わるところはない。どうすればペルーの新鮮で強烈な問題意識出来るかこの新鮮で強烈な問題意識＝愛国心が、至上的なものとしてではなく、いわば生活意識として彼らの中に根を降ろしている。
こんなことがあった。
リマ滞在中のある日、日本人二世の学生たちと日本から遠征した関学隊、一橋大隊との間で座談会が催された。
その席上、ある女子大生が立って「私は教師を志望している学生だが、日本では性教育はどのように行われているでしょうか」と質問した。関学隊に教育学専攻の学生がいたから出た質問ではあるが、僕らには耳慣れないことで、すっかり面食ってしまった。しかし本人は熱心そのもの、何らの恥らいも見せず、質問は首尾一貫し、自信に満ちていた。自分の仕事に対する情熱にあふれているのだ。
だからこちらの方でも照れたり、ごまかしたりはできない。その時は多分、件の関学のO君もたじたじで、資料を送る約束か何かで逃げたはずだが、二世の学生たちと僕らとの対話にはこんなことが時々起こるのだった。また、こんなこともあった。
僕らはよくT君たちと場末のカフェテリアでセルベッサを飲みながら語りあった。
そういう時、彼らは「なぜ山へ登るのか」という問いをしつこく繰りかえした。スポーツとしての登山がよくつかめないのだ。
あなた方はリクリエーションで登山をしているのではないようだが——という。僕らは「そうだ」と答え、「より高く、より難かしく」というアルピニズムの本質に話題を移そうとする。しかしこのつながりが彼らにはのみこめないのだ。彼らの反応はちがうのだ。
リクリエーション否定から一歩進んで、彼らは動植物の調査あるいは鉱山探しのヤマ屋を頭に描く。だからわれわれの仲間が経済学や法律を専攻する学生であることはなかなか理解できない。探険とかパイオニア・スピリットを語りながら、彼らはまずそれらの効用に心をはせている。
だからお互いに理解しあうということは容易ではないのだ。言葉の違い以上に僕らの間には生活と歴史の違いが横たわっているのだから。僕はこの奇妙なアルピニズム論をやりながら、彼らの健康さがうらめしくてならなかったのを今でもはっきり覚えて

いる。

T君が最後に言った。

「あなた方は実存主義者ですか――。」

彼らは自分の国にどのような形で貢献出来るかを懸命に模索している。貢献し得ない事を考える程、彼らはひまではない。のんきでおおらかなようだけれど、彼らは情熱に燃え、前向きで、若々しい。

しかし僕はこの「二世」という言葉がずっと気になっていた。二世という言葉は日本人とペルー人と区別し、さらに日本人の中で日本生れではないことを区別する。何となく純粋な日本人を最上位におく奇妙な偏見に結びついているように思えていたからだ。ペルーの中で生きている彼ら若い二世たちが、無批判にこんな言葉を使っているのはおかしいぞと考えていた。

しかしT君はこの問いにしみごとに答えてくれた。

「家の中では日本人としての生活を強いられ、外ではペルー人としての生活。何度おれはペルー人だぞと自分に言いきかせてみても、自分の中には矛盾した二つのものがある。これは子供の時からの最大の悩みであった。」

が、最近はちがってきた。ペルー人として、こういうおれたちだけがやれることもあるのじゃないかと思えてきた。理論じゃなく、おれたちの生活や考え方の中には西洋的なもの（ラテン的なもの）と東洋的なもの（日本的なもの）が混りあっている。これは出発点であるとともに、今の世界に欠けているものが何かをおぼろげながらわからせてくれる。だからおれは二世という言葉をむしろ積極的に使う。」

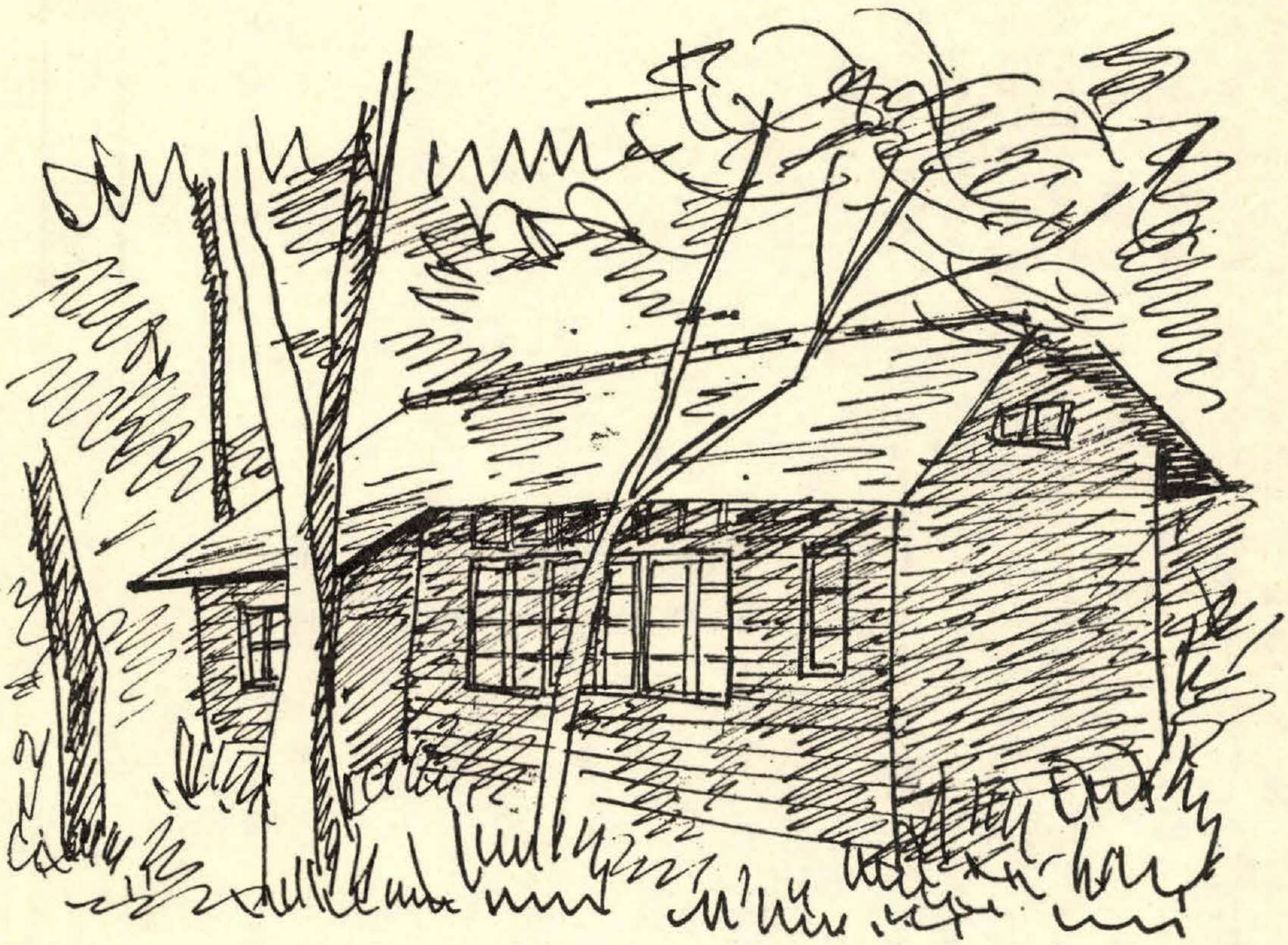
彼はこのように「二世」という言葉を、新しいペルーを創っていくための一つのシンボルとして、自覚された。

場末のカフェテリアで、夜の更けるのも忘れてスペイン語と日本語のちゃんぽんで深遠な議論を闘かわせたのがなつかしい。それが熱っぽい、しかしまとまりのないものであっただけに、彼の言葉の意味がとても鮮やかに浮んでくるのであった。

彼もその会員になっているGENERACION・六四（六四年の世代）という会があった。これはサン・マルコス大学の経済学部に在学する二世のうち、一九六四年に卒業する学生約三〇人で組織しているものである。彼等は、未来のペルーのために働くのだと瞳を輝やかせていた。

講演会やいろいろな啓蒙的な催しをして貯めた金で卒業記念に皆で外国旅行を計画しているとのことだった。一年で一〇万ソーレス（日本円で約一三〇万円）貯めたそうだからそれも夢ではない。

彼等は今年、その金でどこに行ったかを知らない。しかし、彼等が新しい日本人として、また新しいペルー人として飛躍していく道だけはたしかなようだ。



・・・・・部　誌

・・1960・1961・1962・・

一九六〇年度

チーフ・リーダー　中川滋夫
サブ・リーダー　中島寛
リーダー兼マネージャー　石弘光
リーダー　有賀盈
〃　大賀二郎
〃　小林進二
〃　小林正直
〃　永井新也
〃　三股宏
〃　山本尚禎
以下一八名

新入部員歓迎コンパ

四月一八日　新部員一年六名、二年二名を含む二七名が国立部室に集まり、交歓した。

「この歓迎コンパで君達も部生活のスタートを切ったことになる。ここで大きな顔をしている上級生も二、三年前までは君達と同じ状態だったという事実に注意して欲しい。二年後、三年後には自分もトコロテン式に上級していくのではなしに、二、三年後の一橋山岳部は俺達にまかせておけといった気慨をもって欲しい。入部早々、こういうことを望むのは無理かも知れないが、受身で山を登り、部生活を送るのではなしに、自ら積極的に主体性を確立して行動してほしいということです。結局その方がどんなにか自分にとってもためになるかが後程わかると思います。これからは山登りに絶好の季節です。自分の可能性をどこまで伸びるものか試してみようではないですか。」

（中川）

春合宿（剣岩）反省と本年度方針決定

四月二五日、部会にて前年度春山合宿の反省と、今年度の方針決定が行われた。

「天気に特に恵まれたわけではないが、あれだけスムーズにアタック体制を整えられたのは数度にわたる試みで早月を知りつくしていたためである。今後合宿地を他に移すならばこううまくはいかない。前からの積み重ねというものを認めねばならない。

本年度の計画は先刻ご承知の通りだが、明春アンデス遠征があるので、冬山合宿に全力をつくすこととし、剣は一応片づいたので、テーマを後立山に求める。上級部員の技術を断絶なくあとに伝えていくことが重要だ。」

（中川）

城戸先輩来室

四月二七日久し振りに国立へ来てみて感慨無量、部室も大分変ってきた。部の実力がだんだんと盛り上がってきている、そのような空気がひしひしと感じられる。例の如く山行前のあわただしさでゆっくり部誌をひもとく事も出来ないが、皆さんしっかりやってくれ。若手は荒沢へ入り、荒沢奥壁（未登攀であるが、果して登攀価値があるのかないのか皆目わからん）及び南稜、北稜を計画している。夏テント一張拝借します。

（城戸）

五月連休山行

冬山の鹿島槍偵察山行として、鹿島槍へ二パーティ、新入部員の訓練として南アルプスへ一パーティ出すことになり、各パーティとも四月二八日～三〇日に出発。各々成果をおさめて真黒な顔をして帰って来た。

「五月五日、東尾根のパーティ無事今朝帰京しました。鹿島という山はScaleが雄大ですな！　北壁はキレットから、またカクネ里からとくとながめてまいりました。

とにかく、変化に富んだ山行でした。

平地は大谷原までタクシーで乗りつけ、山に登れば痛烈なるヤブこぎから、八ッ峰級のSnow Edge、垂直なるハイマツ登り、つづいて雪壁、岩壁……、お陰で技術的には良いシゴキになったと思います。臼井君などグンと腕を上げましたよ。アイゼンをはき、あれだけの荷物で良く歩って来たものだ。寒心にたえない。」

（牛）

「五月五日、仙丈、駒パーティ今朝全員帰京一年生諸君はまだ体が馴れていない様子で、調子が悪いものも出たが、無理もないことでこれから徐々に強くなっていくことであろう。

ともあれ、まずまず楽しい山行であった。」

（中川）

「五月六日僕はゼミがあるので今朝帰ってきました。中島、大賀、三股の三名明日もしくは明後日中には帰ります。とにかく荒沢奥壁の北稜を登らずには帰らないと張り切っていました。天候も全くついていて、連日の行動にいささかこたえて、今少し足もとがおぼつかない状態。下山の時の荒沢の徒渉には全く消耗しました。」

（天狗尾根パーティ　dye）

泥棒（？）部室を訪問

五月二八日E君にかわって宿直をする。コオロギとクモの合の子のような虫や青い毛虫や蛾がうようよしているのはどうも気分が悪い。

……誰かがやって来て、戸をあけようとガチャガチャやっていたが、内に人がいるのに気付いたらしくあわてて逃げていった。さっき来た時は戸に鍵がさしっぱなしであいたままになっていた。危いことである。宿直は絶対必要だ。

（C）

前期祭

六月三日、小平にて前期祭に山岳部も参加する。春山の写真の展示、登山相談室の開設など好評であったが、今後8㎜映画拡充等を考えていく必要がある。前期部員の積極的な協力が得られなかったのは残念であった。必ずしも盛況といえなかったのは前期祭というものの性格のあいまいさにもよるのであろうが、クラブとして参加する以上、我々の生活の記録、山に対する考え方、人生感といったものを一般学生に理解してもらうような立流な展示会とすべく努力しなければならない。

（中島）

夏合宿（涸沢・二六五頁参照）出発

七月一三日、中川リーダー以下、二七名が穂高に向った。

笠原先輩来室

七月二六日、何年振りかで部室に来た。相変らず乱雑でカビくさくて、これがもと自分がたむろした部室かと思うと感無量。けれどもこれが最も自分にふさわしいような気がして何とも言えない気がした。

段々年をとってきた。三五才になると、行くところは温泉と女のある所しか歩かなくなる。けれどもやはり山が一番いい。この

カビくささを這松の香りと置き換えて山籟を聞くと思うと、過ぎし日の情熱がよみがえってくる。若い人たちは今のうちにどしどし登っておくべきだ。それがきっと将来の生活に豊かな精神的財産を残してくれる。

（笠原）

剣岳強化合宿（二一四頁参照）

八月五日、第二次合宿無事解散。二、三年生にとっては有難迷惑な合宿だったかもしれないが、とにかくみなよくケッパッてくれ、東京から単身駆けつけた甲斐があった。部としての立場からみれば有意義であった合宿と思う。

池の谷をのぞくこともでき、概念の一部がつかめたので、来年の三の窓合宿はぐっと幅のある活動が可能になろう。東大谷については、三井など相当行きたがっていたが、三の窓から行くのには不向きであり、今回は見送らざるを得なかった。

至難とされていた剣尾根主稜も、当日僕らを含め四パーティがトレースする有様で、いよいよ剣での焦点は小窓尾根側壁とか、中央壁とかⅡ峰南壁などに新ルートをひらくことに移ってきたようである。現在のうちの二、三年生ならば（情熱をもち、精進を怠らないならば）これらの開拓を自分らの手でやってのける力をそなえている。岩は逃げない。むしろ君らが来るのを待っている。君たちが意欲をもってぶつかることを僕は心から期待する。

（J・O）

「針葉樹十二号」出版

八月一一日待望の「針葉樹十二号」が出来上った。昨日は午前中から発送の手伝いをやった。

下級生はこの針葉樹の個々の登攀記録を知るだけでなく、「一橋山岳部の流れ」、一橋山岳部のムードといったものをこれを読んでつかんで欲しい。その方がむしろ大切なことを忘れないでくれ。

（中川）

アンデス遠征計画書

八月二三日。新しい遠征計画書が出来上がりそれを可さんと関部長に渡すためにやってきた。部室にも一部置いていく。

現在のところ、遠征準備の具体的な進行状況は当初考えていたような大口スポンサーからの資金援助は望み薄になったので、如水会関係の有力会社、即ち一橋の先輩が有力なポストを占めているような会社を一件一件当ってみて資金援助を仰ぐという形となり、先週の月曜、その会社のリスト作成を行った。これから、おそらく九月に入ってからになるであろうと思われるが、会社に直接交渉することになるであろう。

（中川）

個人山行反省

九月二五日。図書の充実を図るべく「風雪のビバーク」仕入れて来た。やまへ登る事に自分なりの考えを持つことの難かしさと実行の苦しさを痛感した。今回のバットレス行も、今考えてみればやはり一種の敗北であろう。中央稜を登ろうというKやEに水をかけた弱さを退治するにはまだまだ日数がかかりそうだ。山はまだまだ恐い。所詮俺は社会のガヤガヤ人間の集まっている中でなければ登ってやろうというファイトが出てこないのかも知れない。いつかは中央稜を登ってみたい。「いつかは」――。

（DYE）

渡辺先輩来室

一〇月二日。誰かいるんじゃないか？　と思いながら国立の駅

からそわそわしながら来たが、やっぱりいなかった。無理もねえ、日曜日だもんな。いつも見なれているから何とも思わないが、ちと部室がきたなすぎるのじゃないかな。ゲルも払わないくせにもう先輩づらして文句言うな、などというなかれ！　とにかく皆元気でしかも立派な山登りをやっておられるようで何よりです。俺達が下手くそだった岩も皆うまいようだし、一つ連れていって頂きますか。これからは部室に度々現われることが出来ると思います。遊びに来て下さい。（渡辺）

冬合宿（鹿島槍集中・二六頁参照）始まる

一二月一二日。中川以下一四名鹿島に向かう。

今回の合宿ほど盛上りが大きく感ぜられたことはなかった。一つにはアンデス遠征がありまた、春山合宿を持つことさえ危ぶまれたので、積雪期の山は冬山に全力を集中するというテーマが年度始めから打ち出されていた。この四年間、常に一〇名前後の行動部員を擁して部のイニシアティヴをとってきたヤロー会が四年間蓄わえられた力を試す最後の機会として、今までの単なる尾根歩きとは異なって集中登山形式を鹿島槍に選んだこと、この二つの理由によるものであろう。五月の連休の山行から始まって、最近のトレーニング論争、また富士山合宿を冬山のトレーニングとして認識を深めたことなど、この一年足らずの部活動の頂点としての冬山合宿の存在が再確認されたのである。（中川）

景山先輩来室

久し振りに部屋を訪問する。石に断わっておいたカマボコ借用する。今は富士山の帰途。昨日は三時に新宿を出て、一二時過ぎ五合目に寝た。快晴なれども風強し。雪はシマリ気味。齢のほどを思い知らされた。八合目の上でグロッキーになり、両手の感覚を失って逃げて来た。正月の予定は下界に変わりました。（KAGE）

アンデス遠征準備中間報告

一月二〇日。針葉樹会の席上にて、於如水会館。

「プカヒルカへは遠征隊が七隊も出るので、地理的条件からいっても我々の初登は無理であるが、我々の技術の国際的水準を試すということになる。二月一杯に集荷を終り、三月に梱包を行う。事務室は一橋講堂の地下の一室にする。経済調査の件は学生さんも協力して欲しい。」（遠征準備委員長）

遠征準備手伝いの件

一月三〇日。遠征の準備手伝いのため、部員が交代で毎日一橋講堂に詰めることにした。「試験や卒論やらで忙しいのは百も承知ですが、いよいよ準備も大詰めに近くなったので、猫の手も借りたい状態です。どうかよろしく。」（中川）

アンデス遠征隊壮行会

二月三日。午後三時、国立学生食堂において、一橋大学設立八五周年を記念するアンデス遠征隊の吉沢隊長以下隊員全員の前途を祝して壮行会が自治会主催で行われ、学長以下、教授、学生多数が乾杯をあげた。

卒業生追出しコンパ

二月二七日。出席者二六名、於若竹

野郎会といわれた一〇名の圧力団体がゴッソリと追い出されていった。一人も落第しなかったようなのは近来の快挙である。

「四年生が一〇人卒業していった。一〇人とは部員の三分の一以上であり、これまでの水準を保っていくことは難かしいことだ。野郎会の人達が我々に残していったものは、山に対する真剣な打ち込み方であったと言えよう。

山岳部員のすべてが、いつでもリーダーシップをとれることが山岳部生活四年間の中で理解すべき最も重要なことだと思う。」

（DYE）

春合宿（五竜岳東面・二四頁参照）打合わせ会

三月二四日。出席者一〇名、OB二名

「五竜東面はほとんどルンゼと雪稜の登攀であり一部岩壁がある。G2、G5などが難かしそうであるが、我々の力で充分登れそうである。」

（三井）

（編・三井博）

一九六一年度

チーフ・リーダー　大　建二郎
サブ・リーダー　三井　博
リーダー　宮本英治
〃　遠藤晶土
〃　兼マネージャー　朝木大統
〃　倉知　敬
以下一九名

新入部員募集

四月一五日。朝木一人で大奮闘、九人を獲得、他に誰も来ないので大いに怒る。

オーション会訪問

四月一六日。「甘利仁朗君激励会を行う。於八王子甘利新居、かえり道国立まで来るも、可さん起きず、PM一一・〇〇」

（甘利、瀬田、佐ナギ、吉田）

新入部員歓迎コンパ

四月一九日。国立部室にて。太田顧問、関部長他新入部員六名を入れ全員二五名。

新人歓迎山行

四月二三日。荒船山へ。朝の霧雨が上がって快晴になる。新入部員六名を含めて一五名が参加。すきやきを食って下山。

連休計画山行

四月二四日。五月連休山行の計画。鹿島槍、白馬、北八ケ岳へ三パーティ。あと谷川合宿の打合わせ。

爺岳遭難の報入る（二五五頁参照）

五月三日。三時頃南さんからＴＥＬあり、鹿島槍で三井が重傷を負ったらしいとのこと。朝日新聞から学校へ連絡があり、関さん、南さん経由で俺の所へ入った。聞いたとたん、ついにやったかとガクゼンとした……。（石）

事故の反省会にて

五月八日。部会。事故の反省会を勝田、南両先輩を交えて行う。遠征を出して弱体化している部の実力の判断に誤りがあったという意見が多かった。

遠藤「中央稜に登ること自体は背伸びをしているとは考えられないが、時間的に出発が遅かった点や右稜にも若い連中を出したことなどから見て少し安易に考えすぎたようだ。」

蛭川「安心感の出て来る源はやはり経験とか実力といったものの不足なんで、それを厳しく自己反省し、活動レベルを下げて再出発すべきと思う」

宮本「ヤロー会時代の名残りが、今の四年生の行き方に深く根差しているようだ。実力のある部員の多かったある時代と現時点の比較、検討を充分にしようと思う」

遠征事務所より帰る

五月二五日夜八時。神田の一橋講堂から遠征の残り品を全部部室に持って来る。吉沢さんに手をつけないでくれといわれた物以外は全てここに持って来た。村上の車に荷積を終えたのが四時、御徒町で谷川合宿の食料を買い、道に迷いながらハカリを梅ケ丘のＴ中氏の所へおいて帰る。（朝木）

三井退院

六月七日。三井が退院した。「一ケ月の間に一層色が白くなった。皆にいろいろと苦労をかけたがこれからは一日でも早く皆と一緒に山へ行けるよう頑張りたい」（三井）

宿直の夜

六月八日。夜七時半、宿直のため来室。八時、飯を食いに丸吉へ行く。深閑とした森の中を星を仰ぎながら歩いていると故郷の母ちゃんが恋しくなる。八時半、部屋に帰る。部誌を読みにかかる。一人考えにふけってみると、都塵をはるかに離れた山小屋にいるが如き感じで、短歌などひねりたくなる。

山脈は、遠く白雪頂きて
我行く尾根に石楠花の咲く

（長沢）

前期祭終る

六月一一日。新機軸を出す意気込みで準備したが、東女大の山岳部との合唱以外はそうはいかなかった。今後は八ミリ映画をもっと充実させることと見学者へのガイドをもっと積極的に行うことが必要と思う。（蛭川）

針葉樹会懇親山行（三二二頁参照）

六月一二日。岩を楽しむ会山行、奥多摩カロー沢へ。山田亮三、横山皖一先輩をはじめＯＢ八名、学生二名が参加。夜道をシヨウ油を買いに行かされて閉口したが、たまにはロートルと登るのも楽しかった。（大）

雑事報告

六月一八日。可さんの所へ行って碁でも打ってもらおうとしたら「こんなに遅く、ダメダ」と言われた。考えてみたら九時半、もっともなことだ。それではドイツ文学でもやることにしよう。今日は大畑さんの所で二時から七時まで飲んだり食ったり、腹が一杯だ。まったく近頃まれなことだ。（高橋）

山学部員の感想

六月二二日。今日は久しぶりにゼミが早く終ったので、山の臭いをかぎにやって来る。週三回学校へ来るが、ゼミでしぼられた頭で部室まで来る気にはなれない。大学院に入ったら好きな山を選んで好きなように山を楽しめると思っていたのははかない夢だった。毎日机に八～一〇時間もしがみついていなくてはならず、金にもならぬこの商売、楽ではない。（石）

遠征隊初登成る

六月二二日。アンデス遠征隊、プカヒルカ北峰初登頂成る。可さんより電話あり、先生の声もいささかうわずっていた。とき一二時三〇分、場所、研究室。「朝日新聞からの連絡によるとプカヒルカ初登成功とのこと」、お互いにおめでとうを言いあい、可さんは学校並びに如水会へ早速連絡され、小生は学生への連絡に当る。あとはただ遠征隊員の無事着京を願うばかり。（関部長）

金集めこぼれ話

七月一日。針葉樹会費をいただきに出かけたが、不在の人が多く、目白に一寸用事があったので、ついでに夏山のカンパンの事にかこつけて日本女子大の山岳部をのぞいて来た。学生ホールの隅にあるうす汚い所、当部室よりもっときたない。トレーニング表がはってあり、よくよく見ると皆週に二、三回はやっているようだ。カンパンの話をしたが、ポン女でカンパンで過すとのこと、ふだんから沢山の脂肪を身につけていれば粗食にも耐えられるのかも知らん。（朝木）

夏合宿（剣沢・二一九頁参照）計画

七月二日。部会。夏合宿を検討。出席一八名。縦走は剣―槍、剣―裏銀―笠、剣―後立山―白馬までの三パーティとする。

山本先輩来室

七月二九日。いつものように木立ちをぬいながら歩いてくる。しごく自然に足が曲る、部室の方向に！部室はいいな、窓一杯に開けて鳥の声をきいて、静かだなあ。いつものにおいが懐しい。（山本尚禎）

夏山より帰る

八月二日。午前四時四〇分部室到着。期待と不安を混じえたまま参加した夏山合宿も無事終った。中尾峠に立って上高地を見降ろした時は、本当にホッとした。（佐藤）

神田にて大発見！

八月一一日。一昨日神田の古本屋をのぞいていたら、針葉樹の二、三、五、六号が出ていた。そのうち三号には「部所有」と書いてあった。値段は一三〇〇円及び一二〇〇円。（藤沢）

西村先輩来室

八月一三日。八年振りにお邪魔した。昔ながらの臭に感無量、関部長によろしく。（西村・元部室住人）

新役員を決定

九月一八日。部会。リーダー交替、新役員が次のように決まった。CL、臼井弘、SL、多田伸治、マネージャー中橋寿雄。

断　章

九月二六日。昔の部誌を読んでいると先輩諸氏が名文達筆なのをつくづく感ずる。そして同時にオレはまあ、なんと断片的な駄文乱筆なのだろうと思わざるを得ない。この部誌もまた合本になって後に残ることを考えると、こりゃあゴミなことばかり書けないぞ！　用心用心。

（村上）

吉沢隊長帰国

一〇月三日。吉沢さんが昨夜五時帰られた。高橋学長、関部長、中川孫一氏他多勢の出迎えで、おかげで我々学生は遠くからながめるばかり。その存在を認められたかどうか疑わしい。日焼けした顔でピッケルを片手に幸せそうな顔であった。

（大）

上原先輩来室

一〇月一五日。日曜日の午後一時半、三年半振りに部室へやって来る。入るなり、例の特有の臭気がただよっていました。側面に張られた概念図、なるほどこれは良くわかります。ファイトも大いに湧いてきます。山小屋は雰囲気が大切です。少々汚いがこの小屋には雰囲気がありますし、非常に結構ですし、またうらやましい限りです。

（上原利夫）

一橋祭準備始まる

一〇月二六日。一橋祭用のヨーデルを塩川先輩のお宅にうかがって借りる。日本にも数少ないスイス物である。俺と多田じゃ聞いてもよいのか悪いのか解らないが、本場物であるから立派なものであるという単純な論理で満足して借りて来た。

（臼井）

月見の宴

一一月三日。出席者　OB中川孫一、吉沢一郎、増山清太郎、関　恒義、横山皖一、吉田義則、甘利仁郎、篠原敏弘、山本健一郎、石　弘光、有賀　盈、小林正直、太田顧問、学生一五名。

なお一橋祭ではアンデス遠征隊成功を祝ってビヤパーテーがあり、盛況であった。

吉田先輩来室

一一月一九日。ベクさんとここで飲んでうまいもの食べた。雨の日曜日なので誰もいなくて寂しい。新しい奥様と一緒なので長居も出来ぬ。ではまた。

（吉田義則）

冬山近し

一二月二日。あのテントに六人か。キューにしてクツだな。かといってテントを三張にすればラジュウスその他の器具がふえてはなはだ消耗の恐れあり。やはり六人でがまんしよう。アンデス遠征隊の本隊が帰って来た。横浜まで迎えに行ったが、倉知は例によって至極満足しきった顔で不満を言っていた。いわく「八カ月の間に山に登っていたのは二カ月だけ、こんなに山に登らなかったのははじめてだ。早く登りたいよ、ブツブツ」なるほどこのような見方もあり得るわけだ。

（遠藤）

遠征より帰って

一二月五日。帰って来た。帰って来てしまえば、あんなことがあったとは思えないような、以前と少しも変らぬ気がする。遠征ということは本当に大変なことだ。成功したといってもそれは実に微妙な幸運の連続のためだったにすぎないような気がする。出発までは本当に皆の世話になった。向うの山に入ってしみじみ有難いと思った。

ところで自分の余り知らぬことの書かれた部誌というのは案外つまらぬものだということを発見した。部の雰囲気も変ったような気がする。上級生がいないせいかも知れぬが、乱雑な感じがする。まあそれはさておき、小生、留年するつもりなので、皆さんもう一年つきあって下さい。（倉知）

冬合宿（爺岳縦走・二五七頁参照）最終打合わせ

一二月四日部会にて冬山の最終ルート及び参加者を決める。その後、スキー合宿、及び冬休み中の宿直についても決める。

出発前——

一二月一〇日。冬山出発前一時間。これでこの部室とも今年はお別れだ。荷物はそんなに重いわけではないのに、冬山に向う気分は重い。雪崩や吹雪のことを思って怖れるわけでもないが、少人数でラッセルと炊事をやるのが嫌なわけでもないが、無論都会（しゃば）を去るのが淋しいわけでもないが……矢張り気は重い。それが冬山なのだろう。（村上）

冬山より帰京

一二月二七日。冬山合宿、終って全員無事下山、連日の猛吹雪で計画は坐折、新越乗越で七日間沈澱して下山となった。大町から去るに従って青空が次第に広がり、八ケ岳は嘘のように美しく輝いていた。暗く重い雪のテントがまだ背中に感じられる（竹中）

針葉樹会懇親スキー（三一四頁参照）

二月六日。懇親スキー、苗場より帰る。学生は大と小生、共にゲルピンで大の借りて来たゲルをまた借りて出かける。参加一〇数名のささやかな懇親だったが、もっと皆が集まれる工夫がいると思った。（倉知）

部会

二月二六日。春山合宿最終打合わせ。出席者一八名。

クロー会卒業

三月一二日。あんまり天気が良いので家にいるのももったいないから部室へ来る。いろいろ迷惑をかけたクロー会も卒業し、複雑な不思議な気持がする。毎年のことだが三月も中旬になると落着いたのんびりした気分になると同時にこれから何かしてやろうというファイトがもりもりとわいてくる。（名和）

（編・大　建二郎）

一九六二年度

チーフ・リーダー　臼井　弘
サブ・リーダー　多田伸治
リーダー兼マネージャー　高橋信成
リーダー　後閑勉六
リーダー　倉知　敬
以下一九名

部員勧誘

四月一五日。新入部員募集を国立で行う。今年は学生が増えたが、希望者は変らなかった。

春合宿（梅池より唐松岳・二六〇頁参照）反省会

四月一六日。部員集会。出席者一九名。春山合宿の反省。

五月連休の山行計画の概要発表。

「結局、唐松アタックのみに終ったことは合宿前半の悪天候のせいばかりでなく、計画自体に問題がある」

「合宿を通しての中心がボケた感じがある」

「ポーラー合宿にありがちないわば生ぬるさがいろいろな面であらわれたのではないか」

新入部員歓迎コンパ

四月一八日国立部室にて。新入生一二名の参加。関部長も出席され、例によって、騒がしい愉快な春宵を過した。新人の半分が部室に沈没。

新人歓迎山行

四月二二日。御岳、大岳へ。「天気にも恵まれ、食いきれぬ程のすきやきで楽しい一日であったが、肝心の新人の参加が少ない。計画の安易さが災いしたのでは、という反省があった」

連休山行計画

四月二三日部員集会、出席者一七名。

連休山行の具体的な計画を発表。北鎌尾根、横尾尾根、明神最南峰にそれぞれ偵察の目的をもってパーティを出す。北鎌パーティは例年と違いツェルトによる少人数の編成とし、機動性を養う訓練という目的もある。一年生は北八ケ岳縦走。

石原先輩来室

四月二八日。ケチなスキヤキコンパをしていた部員三人は石原先輩オゴリの一升に大喜び。一日の食費が二七円だった話や、旧制から新制に切り換ったときの苦労話などされて一〇時頃帰られた。また、「部室をきれいにしておけ」といわれたが、全く耳が痛かった。

（本間）

合宿計画

四月三〇日。部員集会。出席者二一名。

夏山合宿までの計画について。夏山を目指して技術セミナーを部会毎に開講。講師は三年部員。ヒマラヤ研究を軌道にのせたい。各自資料にあたって研究しておくこと。

大賀先輩来室

五月五日。「連休に槍ケ岳東稜を、大橋、中島（両OB）と登って来た。アプローチの長さが問題だが、急峻かつ長大なルート

としてすぐれている。
部室が汚い。タマに来て、苦言を書きすまないが、ぼくらが大事なものとして受け継ぎ、受け渡した「一橋山岳部」を、現役の皆にも同じように大事にして欲しいと思うのだ。」（大賀）

針葉樹総会

五月一〇日。如水会館にて。針葉樹十三号の発行。次期遠征について等。

五月山行報告会

五月一四日。部員集会。出席者二三名。
連休山行および個人山行の報告ならびに反省。新人の初山行として例年北八ケ岳で合宿しているが、新人のなかに物足りなさを感じる者がいることは再考の余地があろう。
谷川雪上訓練合宿の計画発表。基礎的な技術の訓練に徹する。

谷川合宿より帰る

五月二六日。今朝は一時に目をさまして、二時四七分土合発。鈍行で帰京、ゼミに出た。谷川は今、緑がキレイだ。昨日は降っては止み止んでは降りの空模様で、雪もグショグショしており、なんべんも転んでは突きさすあの単調なストップ練習をやらされタンノウしてしまった。
家に帰ってみるとガス管がはずれてガスが充満し、一昨日思い立って谷川に行かなかったら今頃ガス中毒でオシャカになっているところだった。アアーオソロシヤ。

（村上）

部誌抜萃

〇月〇日

近頃、さっぱり部誌が面白くない。一体、今頃あたりから夏休みまでが部の動きの一番盛んな頃というのが例年のことなのに、今年に限って部を引張っていく若いエネルギーといったものが全然感じられないのはどうしたことだろう。
思うに去年あたりから部のあり方がガラリと変ってしまったようだ。変ることの良否はともかく、少なくとも時が移り人が変ったのだから、これだけ変ったのも必然的で当然のことなのかも知れない。その変化の本質的なものが何なのか正確なところは判らぬが、考えてみるに次のようなことは言えると思う。
第一に、比較的登山に積極的なグループと消極的なグループ、という両者の差がほとんどなくなった。山キチガイみたいなのもいないし、山より仲間と酒を呑む方が好きだというのもいなくなった。第二に、上級部員と下級部員の相対的位置がうんと接近したように思う。こういうのをまとまって来たというのかも知れないが、とにかくリーダー層に権威がなくなって来た。第三に、学生生活乃至社会生活と部生活の間のケジメが非常にはっきりしている。合理的に分けてしまうのはいいかも知れんが、どちらも中途半端にならないか。ある時期には何かに自己の全てを没入するような生き方も必要なのではないだろうか。
一言でいうならば、結局の所、みんな同じようになってしまったということであろう。だから、そこには、ああしよう、いやこうがよい、といった意見の相異もなくて、抵抗なく今あるがままのものを受け入れることになる。合宿の時期がくれば山へ行き、去年やったと同じことをやっていれば誰も文句はないのである。
もう少し、何か、これこそ我々の念願だというはっきりした「目標」をここで打出し、それをみんなで追求するようにしたら

どうか。そうすればみんなで何かやっているんだという張りが湧いてくるんではないだろうか。そして、そこから我々の依って立つべき根本的精神といったものが自然に生まれてくるに違いない。

山岳部とは今のようなもので、他にどうにもならないのだ、という変な固定観念はすてて物事を自由に考えたいものである。特に一、二年の若い連中に言いたいのだが、あまり権威のないようすの上級生に気がねせず、どんどん積極的に独創性あることをやってもらいたいと思う。

（倉知）

○月○日

いささか見方に異論があるので、思ったことを述べさせてもらいます。

積極的グループと消極的グループの解消は部の有機的統制にとってむしろ有益なものです。この傾向は喜ぶべきだと考えます。また部生活と学生生活の接近についても同様でして、これは元々一橋山岳部に特徴的なものだと思われます。かってもそうだったように今も私達は岳友としてと同時に学友としてもザイルを結んでいるのです。さらに上級部員と下級部員との関係ですが具体的にどういうことなのか説明していただかないと良く分かりませんが、礼儀的な面でなら私達にかける点があったことを認めます。これからは改めるべきと痛感しています。

全体としてガラリと変ってしまったという点には同意できません。引っぱっていく若いエネルギーに欠けていたとも思いません。根本的精神ないし目標については考えることにも異論があります。傑出した岳人を多く輩出するこ

（蛭川）

○月○日

かなり現状の把握のしかたに相違があるようだが、これはお互いの立場の違いからくるのだろうか。ただ、繰返しと前進とは全く別物だということは良く理解してもらいたい。

礼儀的な態度について一言させてもらうなら、今、Aという人間は八割を山岳部活動一般に二割を他のことにその精力を投じているとしよう。BはAとは逆の割合である。そこでBが残る八割の事情をもってそれを当然とし、公言をはばからぬとするなら、Aにとっては好ましくない存在である。私は、Bに言うなというのではない。二割しか参加できぬことを恥じ、出来るだけの努力をしようとする、その道徳的態度を失うな、と言いたいのである。

（倉知）

○月○日

私達学生は自由であるが、然し社会と断絶があっては困る。一切のマナーを放棄して創造的に行動しようとするとそこにはあてどもない自由があるばかりである。それは明らかに好ましくない。なぜなら私達は既に不均質な集団であって山が好きだという素朴な感情によってまず結びつけられた集団だからである。しかしもし山岳部が山に対する純粋さに加えて抽象されたアルピニズムに対する純粋さを強制しようとするなら、当然Bは部にとって好ましくないのだから辞めさせてしまえばよろしい。だが私はAの主張によってのみ目標は設定されるべきではないと考えている

まして私達の道徳的態度まで疑われては遺憾という他はない。小さな声で山が好きだといっている者に対して「そんな小声は聞こえん」というような一カツはどうかと思うし、事実山岳部にはAもBもCも同居している。議論はややもすると類型的な極論になりがちだが、実際は独善や妥協が云々される程ではない。どうも強調の差のように思われる。

（村上）

〇月〇日

好きな者があつまって好きなことをやっていればよい、というのでは物足りぬ者がいるところが問題である。それはアルピニズムの問題でなく、むしろ協同体精神の問題だ。また、社会と山岳部を相反するものと思ったら大間違いであろう。誰もが他の所でいろいろやらなければならないことを持っていると同じように、山岳部でも皆がやらねばならぬことが沢山ある。少なくともこれが「命」にかかわることであるからには、ただごとではない。

登山は地位や金には関係なく、メシの種にもならんから取るに足らぬ、という奴はまさか我々の仲間にはおるまい。ただ、それらのために大きな制限を受けていることは事実だ。だが、その許された範囲で、AもBもCもお互いにベストをつくしてやろうではないか。真面目に山に打ち込むと社会と断絶してしまうなどと、功利的に考えぬことだ。若い時は二度と訪れない。（倉知）

谷川合宿反省会

五月二八日。部員集会。出席者一九名。

谷川合宿報告および反省。ストップに重点を置きすぎる、頂上へ皆で行きたかった等、声があった。

前期合宿計画。表銀座縦走および岳沢定着。梅雨期であることを充分注意したいと上級生のアドバイスがあった。小さな声で山が好きだといっている者に対して「そんな小声は聞こえん」というような一カツはどうかと思うし、事実山岳部にはAもBもCも同居している。議論はややもすると類型的な極論になりがちだが、実際は独善や妥協が云々される程ではない。どうも強調の差のように思われる。

（村上）

〇月〇日

好きな者があつまって好きなことをやっていればよい、というのでは物足りぬ者がいるところが問題である。それはアルピニズムの問題でなく、むしろ協同体精神の問題だ。また、社会と山岳部を相反するものと思ったら大間違いであろう。誰もが他の所でいろいろやらなければならないことを持っていると同じように、山岳部でも皆がやらねばならぬことが沢山ある。少なくともこれが「命」にかかわることであるからには、ただごとではない。

登山は地位や金には関係なく、メシの種にもならんから取るに足らぬ、という奴はまさか我々の仲間にはおるまい。ただ、それらのために大きな制限を受けていることは事実だ。だが、その許された範囲で、AもBもCもお互いにベストをつくしてやろうではないか。真面目に山に打ち込むと社会と断絶してしまうなどと、功利的に考えぬことだ。若い時は二度と訪れない。（倉知）

朝木先輩来室

五月三一日。全く静かだ。普段はそう静かだとも感じなかったが、久しぶりに来るとつくづく感じる。今、内外ビル一階の片隅で一生懸命仕事をしている。近くのビルには先輩がたくさんいるし、大も先日ひょっこり現われ、三井も相変らず黒い顔をしてのこのこやってくる。皆東京カイワイでウロチョロしているからせいぜい遊びに来てくれ。

（朝木）

定期部員集会

六月四日。出席者二〇名。

針葉樹会開催について議題の検討。「針葉樹」編集、九〇周年記念遠征の件など。夏山合宿の概略が発表される。全員徳本越え！

小林（正）先輩来室

六月五日。午前二時、たまたま社内野球大会で本社が優勝し、その祝賀会をやった後で飲みまわり有楽町で電車に乗ったのはよいが、目がさめたら国立だった。高円寺の寮まで帰ろうかと思ったが、ゲルが足らず、雨の中、なつかしい部室に来る。今夜は国立に着いたのが一時過ぎだったため、土産もないが、これからは一本位さげて来まっせ。

（小バ正）

石先輩来室

六月六日。本格的な夏が訪れて来たようだ。もう夏山合宿だろう。すべて休みを山にかけられた二、三年前がなつかしい。今年はぜひ数日でもよいから参加したいものだ。来年はもう少し暇がとれそうだから、全部参加したい。

（STONE）

小平祭（前期祭）

六月九日。写真展示は雪上訓練風景など。紅茶無料サービス、登山相談などがうけた。

「こんな多くの人々がいるのに小生と面識ある Mädchen が一人としておらぬという事は、小生をして言いようのない絶望感あるいは頽廃的な気分を起こさしむる。嗚呼！」（Peter）

前期合宿（燕―岳沢・二八一頁参照）出発

六月一三日。小島以下一二名。また、なんと気持のよい事よ。俺は全くあわただしい。しかしまた好きだ。荷物は重くないし、歩か山行前のパッキングの時が一番ピンと緊張するあの気分。とはいなくともいいし。普段とくらべまで暇をつぶす策を考えて見送り俺の分身共の出発だ。一一時越えで涸沢定着。滝谷に主力を注に行きたい。（本間）

定期部員集会

七月二日。出席者二二名。前期合宿、奥又白岩登り山行報告。夏山合宿の計画発表。徳本越えで涸沢定着。滝谷に主力を注ぐ。

吉田先輩来室

七月八日。針葉樹会報告の件で来室。

「ぶらり可さんのご機嫌伺い。部室の中は足を入れる場所もないので表に椅子を出して中のにおいだけ嗅いでいきます。」

（吉田）

大先輩来室

七月一〇日。部室がきれいなのは結構だが、外まわりがいただけない。部誌の議論のエネルギーの一部を掃除に振りむけるべし。この夏は裏銀へ行くつもりだがご声援を乞う。（dye）

夏合宿出発

七月一三日。臼井以下一七名。中川先輩ら多くの人達の見送りあり。「徳泣きが入るようじゃダメだぞ！」と喝を入れられた。

滝谷にて遭難の報

七月一七日。滝谷第四尾根にて名和滑落事故。一九日、松本信大病院収容。

七月二〇日。合宿中止。吉田先輩、甘利先輩らの提案で坂巻に病院にて名和に付添う。宿泊は盲人会館。また、在京部員は資金集めに奔走。

遭難反省部会

九月一七日。部員集会。事故収拾について経過報告。個人山行報告。いよいよ来週から前期の試験が始まる。

秋合宿計画

一〇月一五日。部員集会。秋合宿の計画発表。横尾尾根へ春山偵察の目的をもって出す他、南アルプス、北アルプス裏銀座縦走が組まれた。

秋合宿報告会

一〇月二九日。部員集会。出席者二〇名。秋山合宿反省の中で一年を対象として裏銀座に予定されたパーティが急に中央アルプスに変更された事について、積雪量の予想

の甘さ等厳しい批判がなされた。

一橋祭

一一月一日～三日。写真展示ならびに八ミリ上映。もう少し工夫が必要だ。

月見の宴

一一月三日。今年はオデンヤの屋台を設け、ヤキトリのサービスもつけた。大好評だったが雨で例年より先輩が少なく、少し残念であった。

「オデンヤは僕のアイデアです。アイデア賞をイタダキたいと思うのですがその代り千円会費補充をとられました。何という不合理でしょう。だから部室はコワイです」（Ama）

（影の声――デングリ返しをして部室に大穴をあけたのはダレだったでしょうか？）――

一橋祭の反省

一一月五日部員集会。出席者二一名。

蛭川「写真展示のみという形式では参加する意義がうすい。徒労が多く、得られる事がほとんどないので山行にその時間をまわした方がよい。」

小島「大学の行事に積極的に参加しようという事自体は問題はないと思う。ただその方法についてもっと検討すべきだ。」

臼井「準備や当番にルーズだった者が多いのは、結局部員としての自覚が欠けているからだ。」

蛭川「こういった反省はこの一橋祭の件だけの問題ではなく、部の現状に関するものではないか。各自もっと掘り下げた所でこれから大いに考えて行こう。」

ヒマラヤ研究会発足

学生側からの積極的な働きかけをすることが目的。

冬合宿計画

一一月一二日。部員集会。出席者一六名。三、四年生のみで構成し、密度の濃い即ち程度の高い山行にする。

富士山合宿報告会

一一月二六日部員集会。出席者一五名。

富士山合宿報告および反省。例年のことだが遅刻、出入りの激しいことなどがあげられた。スキー合宿について。冬テントを出して本格的な雪山訓練もする。

中川、大賀、中島先輩来室

一二月五日。学生サンはうらやましい。（大賀）

冬山ガッチリヤレ。（アンリー）

モウチョイ、タクマシイ議論ヲオコスベシ。（Pirate）

冬合宿（中央アルプス・三〇一頁参照）出発

一二月一二日。冬合宿出発。臼井リーダー以下一〇名。

中島、宮本先輩来室

一二月二三日。越沢の帰りに寄った。誰もいない合宿中の部室は、どこか空気が冷たい。またいいものだが、部室というものはいつ誰が来ても、熱気を感じるような雰囲気をもつものでありたい。

今頃は天候がいいから、もう山を降りた頃かも知れぬ。続いてわれわれロートル連がバットレスに入る。おれも山が好きになってしまった以上、〝過去のことを言う必要のない〟山登りをして

いくつもりだ。学生に負けないとかいうのではない。学生には学生の生活があり、サラリーマンにはサラリーマンの生活があるのは当然だ。

われわれもわれわれなりに、山登りをやっていく。学生山岳部はOBに教えを乞うという態度でもなく、また、おれだけが山登りをやっているのだという態度でもなく、まあガッチリやってほしい。

(Pirate)

たまに岩に登るので調子が出ずどうもおかしい、やはり、学生のように俺一人という気でいられないから自然とシュリンクするようになって来た。どうもあかんね。

(宮本)

冬合宿反省会

一月二一日。部員集会。出席者二一名。

冬山合宿の反省。下山路のルートを見失った点について、偵察の不足が反省された。

スキー合宿の報告。雪山に慣れるという意義はほぼ達成されたようだ。

春合宿計画

一月二八日。部員集会。出席者一五名。

春山合宿の計画の詳細が発表さる。横尾尾根より奥穂高、槍へアタック。

山本（健）先輩来室

二月一六日。夕刻思いたって国立に来た。誰もいない。相変らずの散らかしぶり、一度に一〇年の昔に帰る。やはりここの生活はよい。今、トーフ屋のラッパがきこえる。月曜の夕べには、あのトーフ屋が必ず顔を出したのを思い出した。石原、甘利等の呑んべえ達がそろって湯どうふで一杯、というのがきまりだった。今でも、ここの生活を俺はくりかえしたいと思っている。だから今ここに暮せるやつらに、ここの生活を大事にしろよと言いたいのだ。今にもうできなくなる。

(山本)

追出しコンパ

二月二七日。卒業生追い出しコンパ。阿佐ケ谷、伊勢元にて。

卒業生は倉知、臼井、多田、高橋、後閑の五名。（倉知はアンデス遠征で一年遅れ、クロー会のメンバー）今年の卒業生の会名はハッカイ。三蔵法師はいないけれど、孫悟空、妙悟浄、猪八戒とよくもそろったもの。皆卒業出来ました。

春合宿（横尾尾根より奥穂高・二八五頁参照）出発

三月三日。春合宿出発。蛭川以下一四名が参加。

（編・三森茂充）

一九六三年度メモ

部員・二五名

チーフ・リーダー　蛭川隆夫
サブ・リーダー　竹中　彰

四月～五月・西穂稜線（竹中以下六名）、明神岳（蛭川以下五名）、縦走・後立山（小島以下三名）、表銀（他のパーティは中橋の遭難救助）、裏銀（高崎以下五名）、

六月・岳沢合宿（蛭川以下二三名）

七月・夏合宿・剣岳二股（蛭川以下二〇名）縦走・①剣―黒部―三俣（蛭川以下一二名）、②棒小屋沢（竹中以下四名）、③黒薙川（小島以下四名）

九月・奥又白岩登り（小島以下三名）

一〇月・湯俣―三俣―涸沢（小島以下八名）、鋸―鳳凰（本間以下六名）、アスナロ沢（蛭川以下三名）、赤石沢（長沢以下三名）、北岳バットレス（蛭川以下五名）

一一月・富士山合宿（小島以下一八名）

一二月・冬合宿・明神東稜より前穂（蛭川以下九名）

一九六四年一月・スキー合宿・吾妻高（蛭川以下七名）

三月・春合宿・湯俣尾根より北穂高連峰（小島以下一一名）、湯俣より槍まで全員縦走し、後、北穂まで往復した。

白馬岳主稜（蛭川以下六名）

一九六四年度メモ

部員・二一名

チーフ・リーダー　小島和人
サブ・リーダー　半場三雄

五月・縦走・後立山（半場以下六名）、明神岳（高崎以下四名）、鳳凰―仙丈（小島以下五名）、北鎌尾根（本間以下三名）谷川合宿（小島以下一九名）

六月・奥又白岩登り（高崎以下七名）新村ルートの全員トレースと、Dフェース、松高ルート、などの登攀をした。前期合宿・塩見―仙丈（斎藤以下七名）

七月・夏合宿・涸沢（小島以下二〇名）縦走・①穂高―剣（小島以下五名）、②黒部上流（佐藤以下三名）、③金木戸川（原以下四名）、④日高・ポロシリ岳他（半場以下四名）

八月・穂高岩登り（池知以下五名）前穂・右岩稜、屏風・東壁、滝谷・P2フランケ、第一尾根など、多くのルートをトレースした。

富士山（参加・六〇余人）一橋ワンゲル、東京女子大ワンゲル、家政学院ワンゲル等と合同して大清掃をした。

（編・高崎俊平）

■編集後記

十三号を出すに当たって、一体何のために針葉樹をつくるのであるかということが、われわれの議論の的になった。その時、それはわれわれの為した活動を広く世に知らせてその成果を問うのである、という意見と、われわれだけの想い出のために残し一橋山岳部というコミュニティの後継者達に成果を伝える、という点の意義を強調する意見とが対立した。

結局の所、これは両者を兼ね備えるものであるということに落着いたが、このことは単に部の機関誌のみの問題ではなく、もっと大きな部のありのものに直結する問題であろう。まとまった団体としての行為に重点を置くか、個々のメンバーの団体の中での行為に重点を置いていくか、という非常に重要な問題である。

この号の特色は何といってもアンデスである。このアンデスは色々な問題を提起した。例えば山登りと学問の関係。対象が外国となってくると、もう単に登っていればよいというものではない。緻密な計算を要する遠征学も身に着けねばならぬし、学生として学問に直結した登山を考えねばならぬ。

知りつくされた尾根で古くさいポーラーメソッドを繰り返していればよい時代は過ぎ去った。登山も日夜進歩した主体性をもって書かれねばならぬ。地方別に分類してしまったのも、そんな意味からだった。

何分、大勢の人間が三年余にわたる長期間に為したことを、一冊にまとめようというのは、骨の折れることである。これだけ大部なものとなると、やはり今回のアンデスの記録のように、そのバックボーンとなるものがなくてはまとまらない。そして、それは紙の上においてのみならず、行為そのものにおいてこそ言えることであろう。

常に三年先を見て、現在の行動を為そう。これが、後に続く人達に何より伝えたい教訓である。

（倉知）

「彼は退屈な男だ。生まれつき退屈なのだ。だが、今のようになるまでにはさぞ大変な苦労をしたことだろう。あそこまで間が抜けているのは、自然がそうさせたのではない。」とS・ジョンソン氏が言ったそうだが、針葉樹十三号も、ここまで膨大なものにしたのは自然がそうさせたのではないようだ。取りかかってから三年という年月がそうさせたのである。

十三号の編集に当たっては、先ずわれわれ一橋山岳部が総力をあげたアンデス遠征隊の記録を第一部として扱いいかに考えて行動しまた結果したかというプロセスに重点を置いた。これは、続まれる人にとっては理屈っぽく、生硬な感じを持たれるかも知れない。全くわれわれは理屈っぽく生硬なのだから困るのだが、しかし四年間の山岳部生活を経て成長して行く精神の記録といってもよいのではないかと思う。

とにかく発行が遅れたことをお詫びすると共に、次号の速かなる発行を願う次第である。

（大）

十三号上梓の計画が話題にのぼってから、すでに数年経った。連続した遭難など起って、落着いて本を作る訳にはいかなかった。連続した遭難未遂事件は、部としての反省すべき大きな問題であろう。おそらくこの遭難対策は現在、大学山岳部共通の問題であるといってよかろう。

十三号の編集係も私は四代目。記録の整理もつかぬままに仕事を引きわたされたのでバラバラになった先輩から原稿をいただくのに苦労させられた。特に地方にある先輩（当時学生だった）の一部はあまりにも非協力的だったので、挫折しかけた。

出版がのびのびになっても何度かあったことも何度かあった。

めに、僕等の代の山行記録は一部しかのらなくなってしまったた追い回して、他人の尻をた。他人の尻を作に明け暮れした編集だった。せめて自分の記録ぐらい、整理をつけてから卒業したいものだ。

いきおい、編集はねばならなくなり、「学生の機関誌」とからずやぶられることは単に、出版が延期的な理由によるばかりに、アンデス遠征とマールがならしめたある。こうした大きなるには、母体の小さ部にとって何より、なる協力が必要でもこの例にもれない今や部活動は両者の得ないということはても、また事故の反も、そしてまたこのおいても、われわれせざるを得なかったのだ。

最後になったが、編集するに当たって暖かいご助言を下さった望月先輩をはじめ、広告などのいろいろの面で協力して下さった方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。

（三森）

苦労してやった結果が、こうしてりっぱな形となって残ることを思うと、非常にうれしい。しかし、この成果をただ喜んでいるばかりでなく、すぐさま次の十四号完成に向かって、活動を始めたいと思います。

すでに、次の号にのせるべき記録の原稿も少々手元にあります。一つの山行を終れば、すぐ原稿を書き上げるよう、部員各員を強くうながせています。OBの諸兄も、これはと思う記録、ぜひのせたいと思う話などありましたら、ふるって小生まで原稿をお出し下さい。「針葉樹」はあくまで学生の記録ではありますが、卒業しても尚、部生活が続いているという伝統を、やはり何らかの形で残したいと思うのです。

一応、十四号は一九六五年度末発行の予定でありますOB諸兄、部員諸君の協力を重ねてお願いする次第です。

（高崎）

＜編集委員＞
倉　知　　敬
大　　建二郎
三　森　茂　充
高　崎　俊　平

針　葉　樹　第13号　　定価 650円

1964年10月31日　印刷　　1964年11月10日　発行

印刷所　電通印刷所

発行者　一橋山岳部　　東京都北多摩郡国立町一橋大学内

何故山に登るか？
それはそこに
山があるから

何故山に登るか？
それはそこに
山があるから：

三井物産の
缶詰
こけし印ハム
ソーセージ

豊かなくらしに

MITSUI
三井の貸付信託
高利回り・元金保証・1口1万円

三井の貸付信託

1口1万円/元金保証
年7分3厘7毛（5年もの）
年6分5厘（2年もの）
予想配当率

三井信託銀行

本　店　東京都日本橋室町
（三越隣）電話（270）　9511

サロンパスで
頂上征服！

《直接効果》

はりつめた肩、足、腰……の筋肉にジカに効果がとどきます。

主成分がすばやく局所にしみこみ、痛みやこりをほぐします。筋肉痛の直接療法です。

はってスッキリ

サロンパス
プラスター

50円・100円・200円　　久光兄弟株式会社

はかんづめソーセージ
大洋漁業

みんなに愛される
カルピス!

日本の飲料　大ビン280円 / 中ビン160円
カルピス
1ヒン 330円
フルーツ カルピス
オレンジ・パイン・クレープ

★水または炭酸水で
5～6倍にうすめ
てお飲み下さい

ビタミンB1・B2●味つけ
尾西 アルファ・ポ
マナスル登山隊・南極観測隊使用
山の常食!
—160g入60円—
完璧の装備!非常食
山から遭難事故を駆逐しよう!!

東京都港区芝車町四三番地
尾西食品株式会社
TEL (441)4262～5.

疲れ・筋肉痛に

ビオタミン

●無臭・持続性の新型活性ビタミン剤

肩こり・疲れ目・便秘にも

5㎎錠・30入 100入 300入・他に散

●神経痛・リウマチには

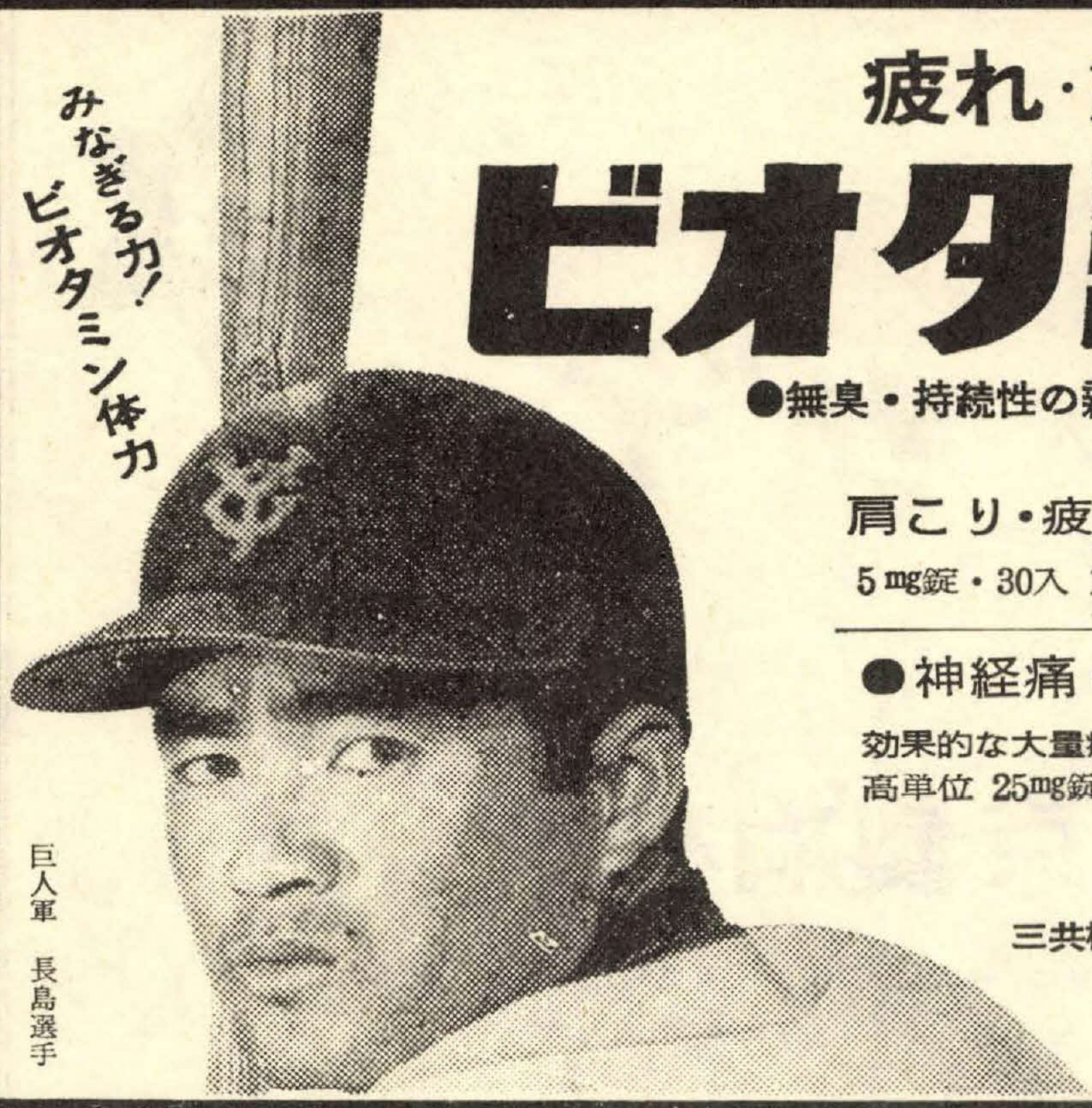
効果的な大量療法（1日50～150㎎）

高単位 25㎎錠・50㎎錠各30入 100入

三共株式会社 三 SANKYO 共

9イ—4

みなぎる力！ビオタミン体力



巨人軍 長島選手

登山のおともに……

明治屋の缶入

マイジュース

オレンジ・パイン・グレープ
アップル・トマト

マイラック

オレンジ・ストロベリー

いつも いちばん いいものを

株式会社 明治屋

東京製綱の

赤線入 ザイル

マニラ・ナイロン・テトロン

東京製綱株式会社

東京都中央区日本橋室町2丁目8番地
電話 211局 2851番（代表）

営業品目

羽根布団

洋掛布団

枕・パンヤ製品

登山防寒用具

羽毛工業株式会社

東京都中央区西八丁堀2の10（高橋ビル内）

代表取締役 宮崎謙次

信州民芸と
特産おみやげ

まつもと駅前

観光土産・白樺工芸品
温泉名所向土産品製作
名所絵葉書発行
喫茶サンモリッツ

松田屋

松本市新伊勢町１８６
２－1838
TEL　２－2139
３－2030
振替　長野２２８１番

岳人とスキーヤーの
喫茶・洋菓子

ケルン

○山の行き帰りに是非
○居ながらにして山岳大パノラマが一望のもとに
○本場ヨーデル等を聞きながら
○集会や懇談会にも応じております。
○国内観光案内を致しております
○最高級ケーキの自家製造

東京・新宿・角筈一－八〇〇
（新宿駅東口二幸ウラ）
TEL(351)－四三八五

奥秩父連峰

原生林の美しさ
さるおがせの幽姿
風化された死木

雲取越え（三峰口－氷川）
主脈縦走（雲取・笠取・甲武信
国師・金峰）
雁坂峠（栃本－雁坂峠－増山）
甲武信岳（十文字峠－甲武信－
真ノ沢－三峰口）
十文字峠（栃本－白泰山－
信濃川上）

三峰山ロープウェイ（71人乗）新線開通

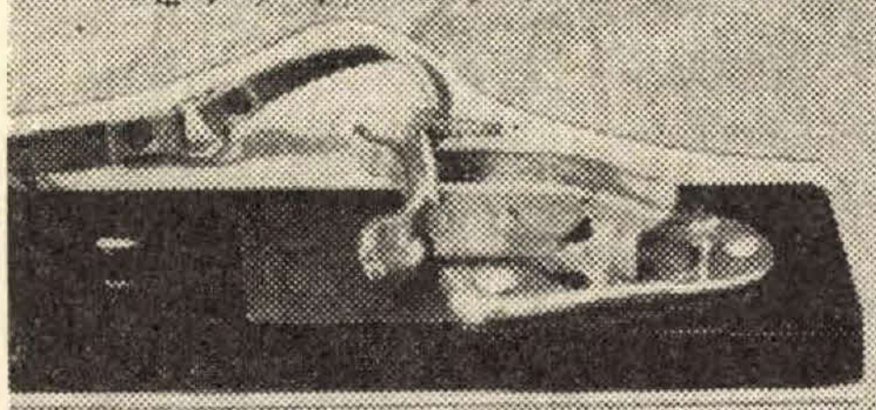
熊谷市 **秩父電鉄** TEL 772 067

永年の伝統と技術を誇る

エバニュー

—遭難防止はエバニューの完全な用具から—

世界の最先端を行く
踏込式締具の決定版
セフティ　ブラック



スキー・登山・ハイキング用品の総合メーカー

エバニュー

スキー

ヘッド（アメリカ）
クナイスル（オーストリア）
西沢
アジア
ヤマハ

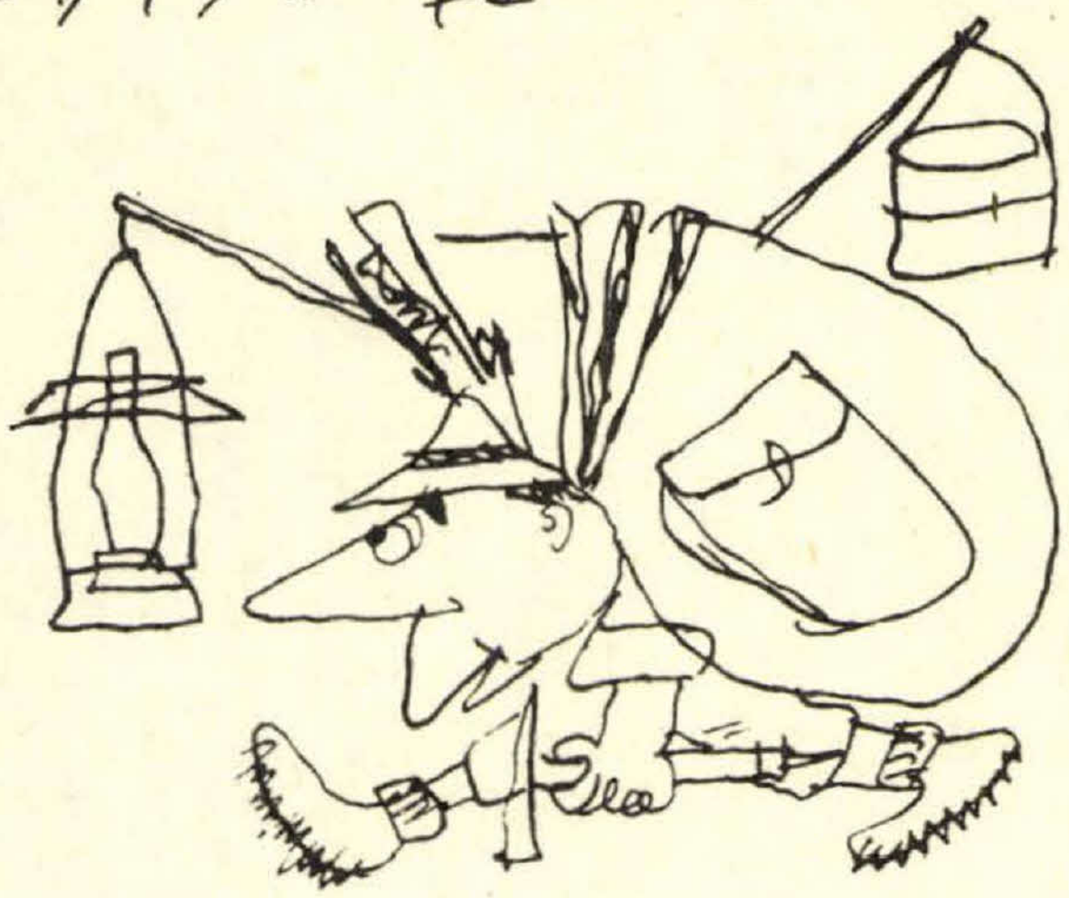
各種取揃え皆様のおいでを
お待ちしております。

HOPE

ホープ

上野アートスステーション
上野松坂屋新館前
TEL 831 ㊤362

脚に豆なく、肩に荷なし、心はウキウキとし
背中とサイフが軽くなる……当店の客



鬼ホカアルがラクタを遠ざる

東京、中央区八重洲4の1
tel 281-8456

鬼ホカアル

登山とスキーの
日本最古の
専門店

好日山荘

東京店 海野治良
東京都中央区銀座西2～5
電話(561)3600
振替 東京113657

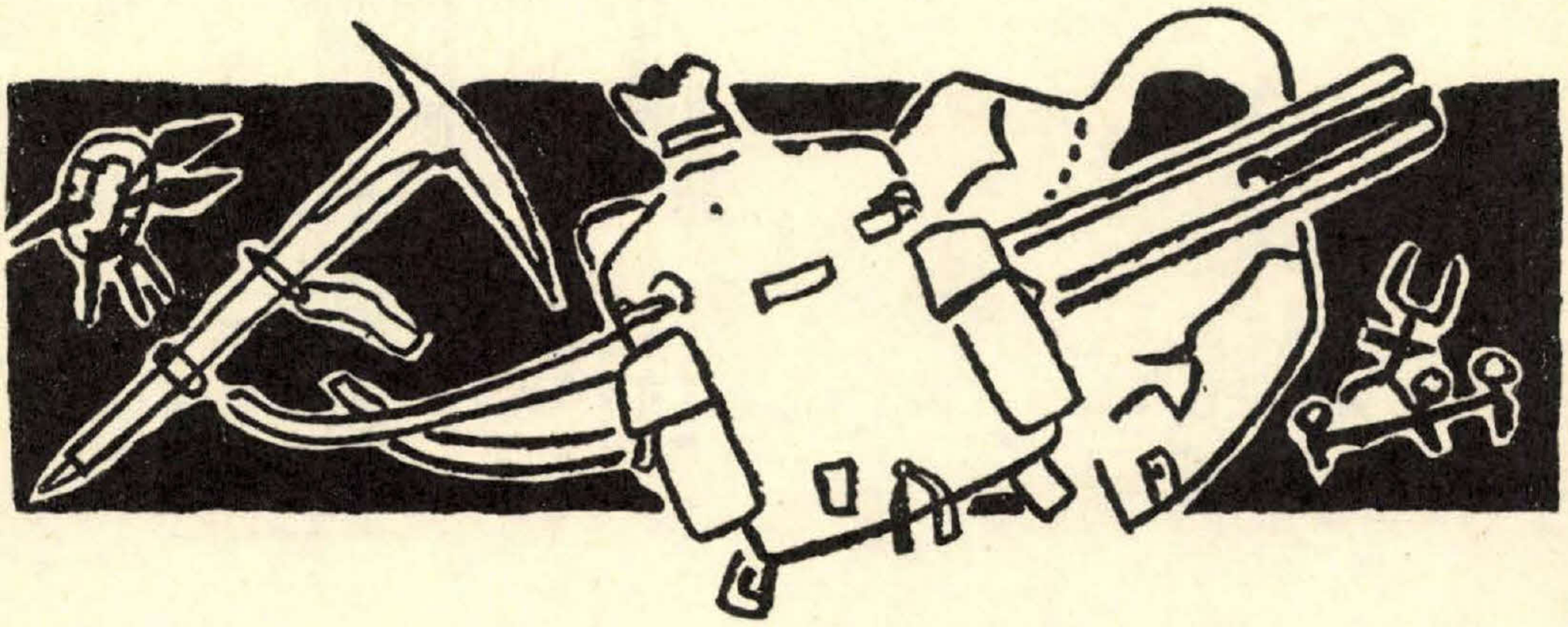
大阪店 大賀寿二
大阪市北区老松町3の12
日進ビル1階
電話(341)7745(361)9330
振替 大阪68763

神戸店 佐々木健二
神戸市生田区三宮町1の31の1
電話(3)7745
振替 21352

福岡店 美濃井
福岡市大名2丁目9番
8号
電話(5)2990

片桐のキスリング型ルックサック

夏冬テント・門田ピッケル



東京都文京区湯島天神町3の19

株式会社 片桐

TEL (831) 1794

登山用天幕・縫製品製造

吉田テント

吉田喜義商店

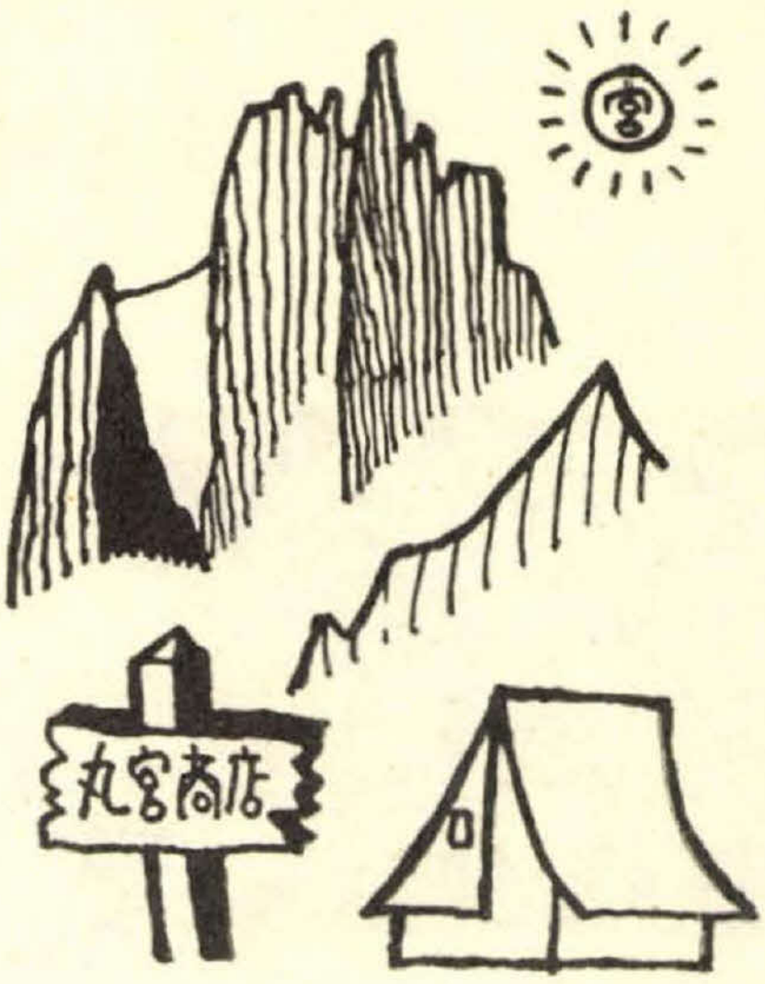
東京都杉並区中通り町1番地

TEL (398) 2548

☒ 学生団体優待

当店特製品と
有名メーカー製品

登山靴・キスリング
各種テント・防寒服
輸入登山用品・放出
品一式卸・小売



台東区仲御徒町3－60上野第一商業問屋街
TEL 831-1962・832-8512

㊗ 丸 宮 商 店

山とスキー専門店

ハイキング用品から冬山用品まで
学校並びに一般山岳団体には特に
割引致します。

秀山荘　立川店 TEL0425(3)0004
大塚店 TEL (981)8690

大塚店：豊島区西巣鴨2－2315
（大塚駅北口下車）

立川店：立川市曙町1－158
（立川駅北口下車）

全国有名運動具店・百貨店にてお求めください。

優れた品質と
技術を誇る

トップ印

登山用具

KK東京トップ
TOKYO TOP
東京・大阪

山とスキー
アカネスポーツ

中央線国立駅前
(富士見通り入口)
TEL (0425)-7-1814

Caravan

軽登山靴のパイオニア

総理大臣賞
受賞

デラックス	2,300.
スタンダード	2,100.
ハイピック	1,300.
ガイドオンリー	1,650.

姉妹品

リザード エアマット
キャラバン アイゼン

カネカロン シラフ
ニチレナイロンキャンパーテント

製造元 藤倉ゴム工業株式会社
発売元 株式会社 山晴社

クライマーの登山靴　　正価￥2,600

アサヒ クレツター シューズ

（日本ゴム株式会社製品）

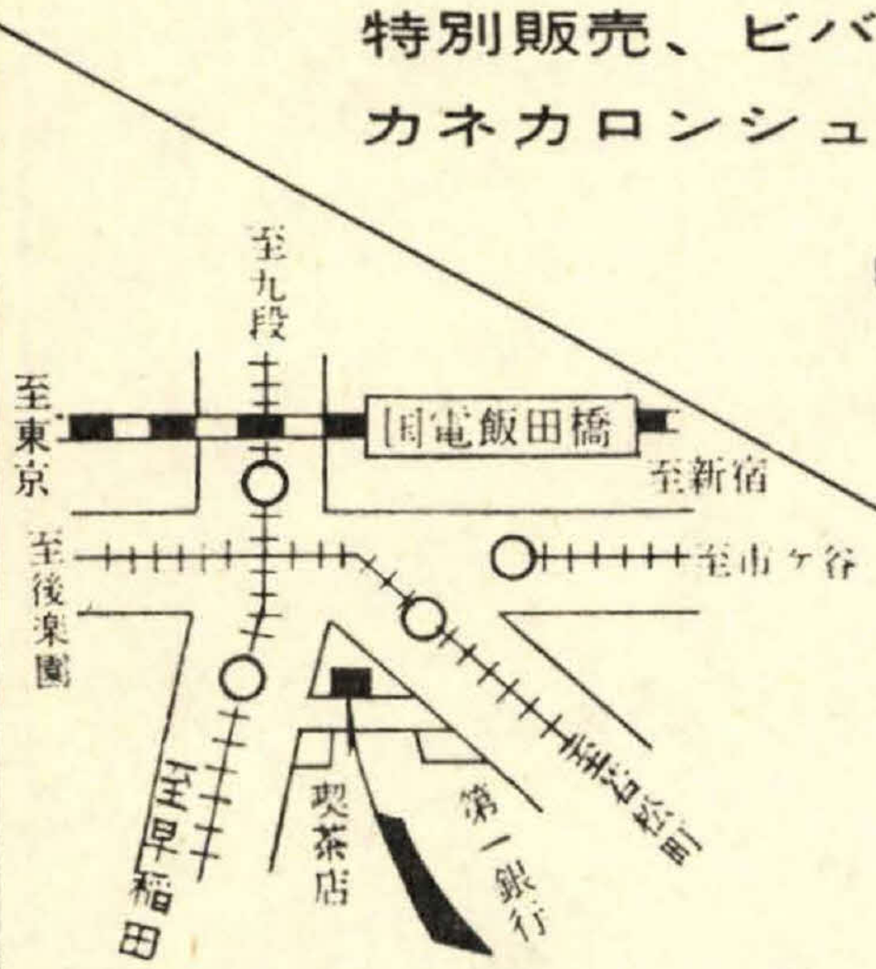
特長
- 疲労が少ない
- 指先を痛めない
- 岩登りに適する
- 雪渓の登り下りに使える
- 急斜面の下りにも足首が疲れない
- ボッカにも最適

販売元
東京アサヒ販売株式会社
東京都千代田区
神田松枝町1
TEL 866－1425

一度お寄りになってごらん下さい

自家製、登山靴、春山用品全般、外国製ピッケル、アイゼン各種、舶来石油、ガソリンコンロ特別販売、ビバークシュラフ、越中輪カンヂキカネカロンシュラフ、薄刃ハーケン埋込ボルト

フカザワ



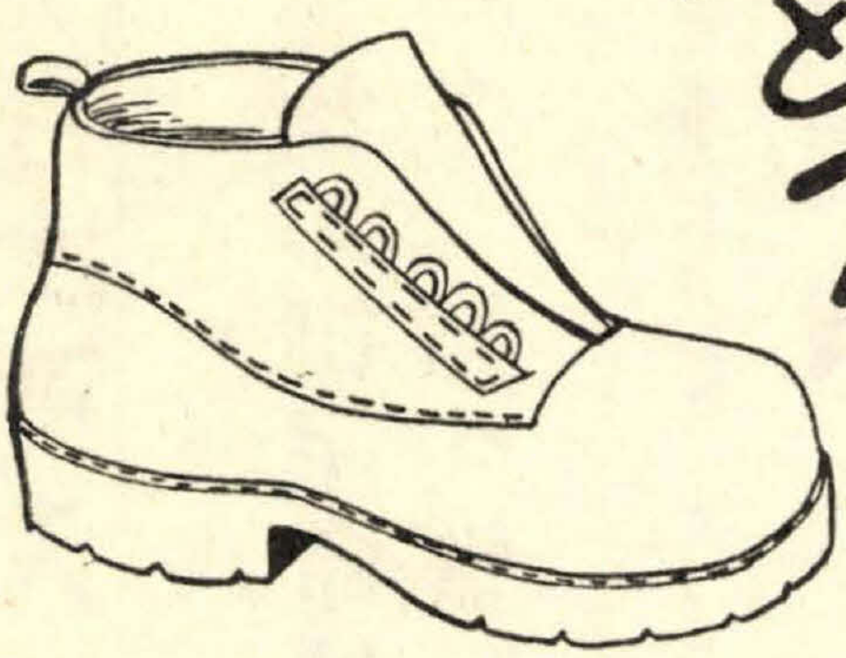
B.B.B

東京都新宿区下宮比町1番地　TEL (331) 0751

国電・飯田橋駅前五俣交叉点際

都電・飯田橋停留所前

二葉



とスキー

はこのマーク

天野

東京都千代田区飯田町1の14

TEL (262) 2439

スイート ホーム は招く

新妻に加えて室内装飾
……何時も貴方を幸福の平原に置く事でしょう

室内装飾なら小川商店へ

室内装飾、カーテン、ジウタン、壁、襖 材

港区芝田村町3～10　(591)1386～9
株式会社　小　川　商　店
代表取締役　小　川　成　信（昭27卒）

古本買入

山の書物の御用命は是非 山専門店〝悠久堂〟へ

小島烏水外・山岳紀行・登攀記・遺稿・山岳写真・山岳部々報・雑誌・文献其の他随筆等

〝誠実売買〟

御不用書の御整理には永年の伝統と信用ある**悠久堂**へ御一報下さい

―営業書目―

全集・国史・郷土誌・資料
和本・其の他一般書籍

東京都千代田区神田神保町一ノ三二

有限会社 **悠久堂書店**

電話東京二九一局㉙①〇七七三番
振替口座 東京三六四〇一番

50年の伝統をささえる三本の柱

文具・印刷・事務機

文祥堂の50年の伝統は、文具・印刷・事務機この三つの柱によって支えられています。鉛筆から電気計算機まで、事務合理化になくてはならないものが、何でもそろいます。オフィースのあらゆる事務用品。カタログ・カレンダーなどの高級印刷。海外の有名事務機、いつでもご相談下さい。

成長する企業とともに

株式会社 **文祥堂**

本社　東京都中央区銀座3の4　電 (535)2271大代表

大阪・名古屋・小倉・横浜・静岡・神戸・岡山・仙台

■東京都千代田区神田駿河台2－1／電話　東京201－9642／振振東京24・723

▶茗渓堂出版の図書目録◀

山で唄う歌

戸野昭・朝倉宏編／A6ポケット型／I ¥130 II ¥160／山で歌を唄う人たちの気持にピッタリ合った歌集　カット絵のピッケルや山岳会のマーク山の線描スケッチがまたたのしい

山　日　記

1964年版／日本山岳会編／A6判ポケット型400頁／¥300／赤い表紙でおなじみの山を愛する人の日記　29輯の伝統を重ねていよいよ充実　新鮮な内容と確実な記事でいっぱい

国立公園カレンダー

1964年版／日本国立公園協会編／B5判リング綴／¥600／さまざまな風景のひろがりをみせる日本の国立　国定公園の美しさを写真で楽しみながら使う大型のデスク・ダイアリイ

山・よき仲間

成瀬　岩雄著／B6判・本文 280頁・写真12頁・箱入上製本・限定版／¥800／よい仲間たちとよい時代にめぐまれた著者30年にわたる山行の記録と折にふれてしたためた小品集

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編／¥690／美しい写真と文章でたのしめる小人数によるヒマラヤ遠征の貴重な記録　京大のなが年のヒマラヤへの夢はここにはじめて実を結んだ　箱入美本

南　極　新　聞

1956～7年／南極研究会編／B5判・横トジ ¥600／第一次南極観測隊の記録　男ばかりの世界に設立された南極新聞社の日刊新聞縮刷版　南極観測隊の活動を　ことごとく網羅

山　　岳

日本山岳会年報／58年版・写真多数／¥1,000 バックナンバー／46・47合併号　48年¥400 51年 52年 53年¥500／54年¥700／57年¥800 日本山岳会における山行の記録と研究報告

山日記の栞

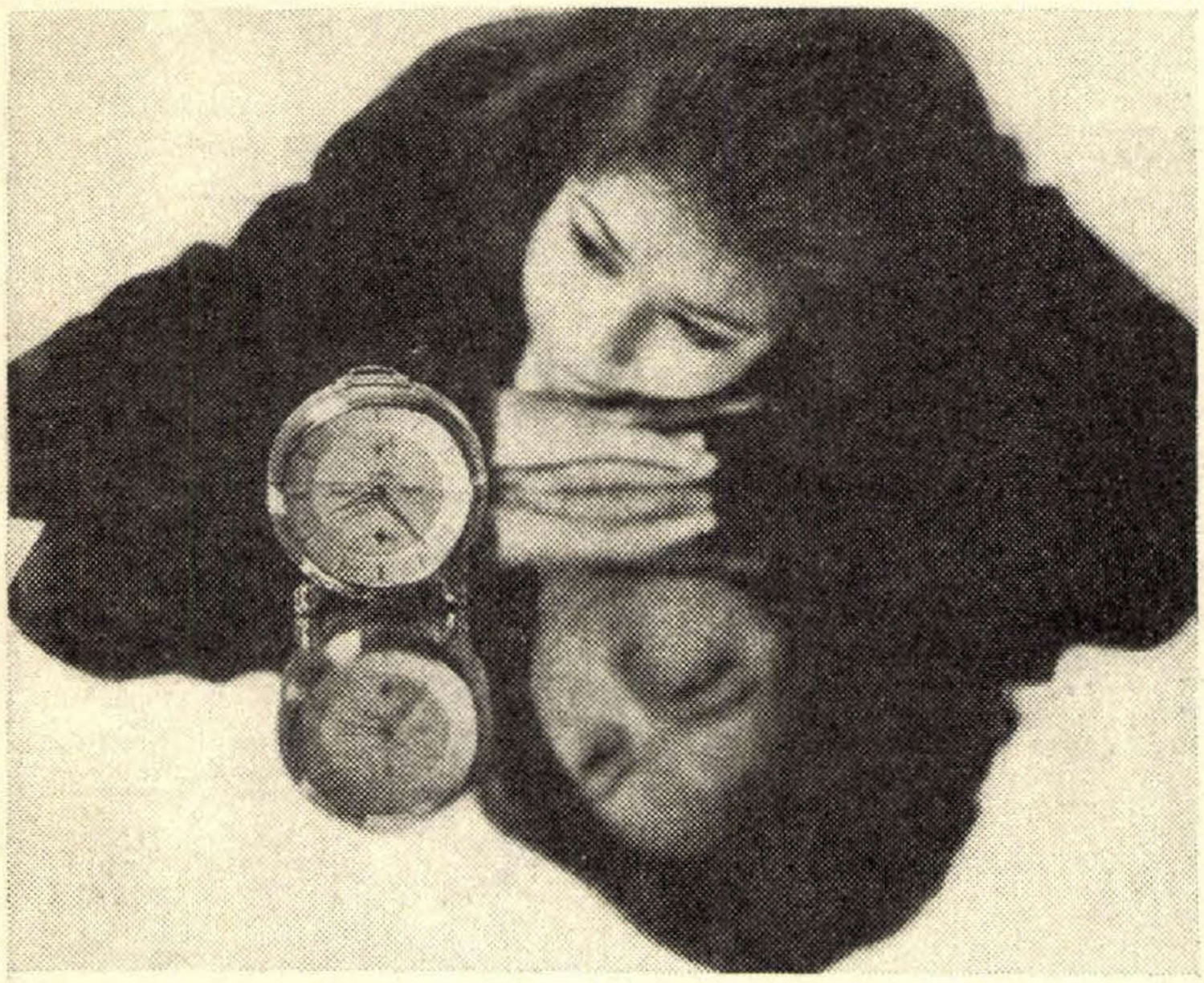
赤い表紙の豆随筆集　山の好きな方々がいろいろな角度からいろいろなことを取りあげて珠玉の小品とエッセイ　書店または小社までお申込下さい　ただちにお送りします　無料

当社の本は全国どこの書店でも取扱っております　目録の本はどれもが在庫あります
書店にない場合は註文して下さると　東京から遠い所でも2週間ぐらいでお手元に届きます

ドイツ製高性能目覚

ユンハンス Jマークの トライボックス目覚時計

■チクタクと耳ざわりな音がしない安眠式
■長期使用に充分耐える正確さ・堅牢さ



第1の声＝ささやくように
第2の声＝いたわるように
第3の声＝確　実　に

〈3つの声〉で
やさしく起します

¥ 3,400

日本総代理店
瑞穂商事株式会社

トランシーバーを加えて 装備完了

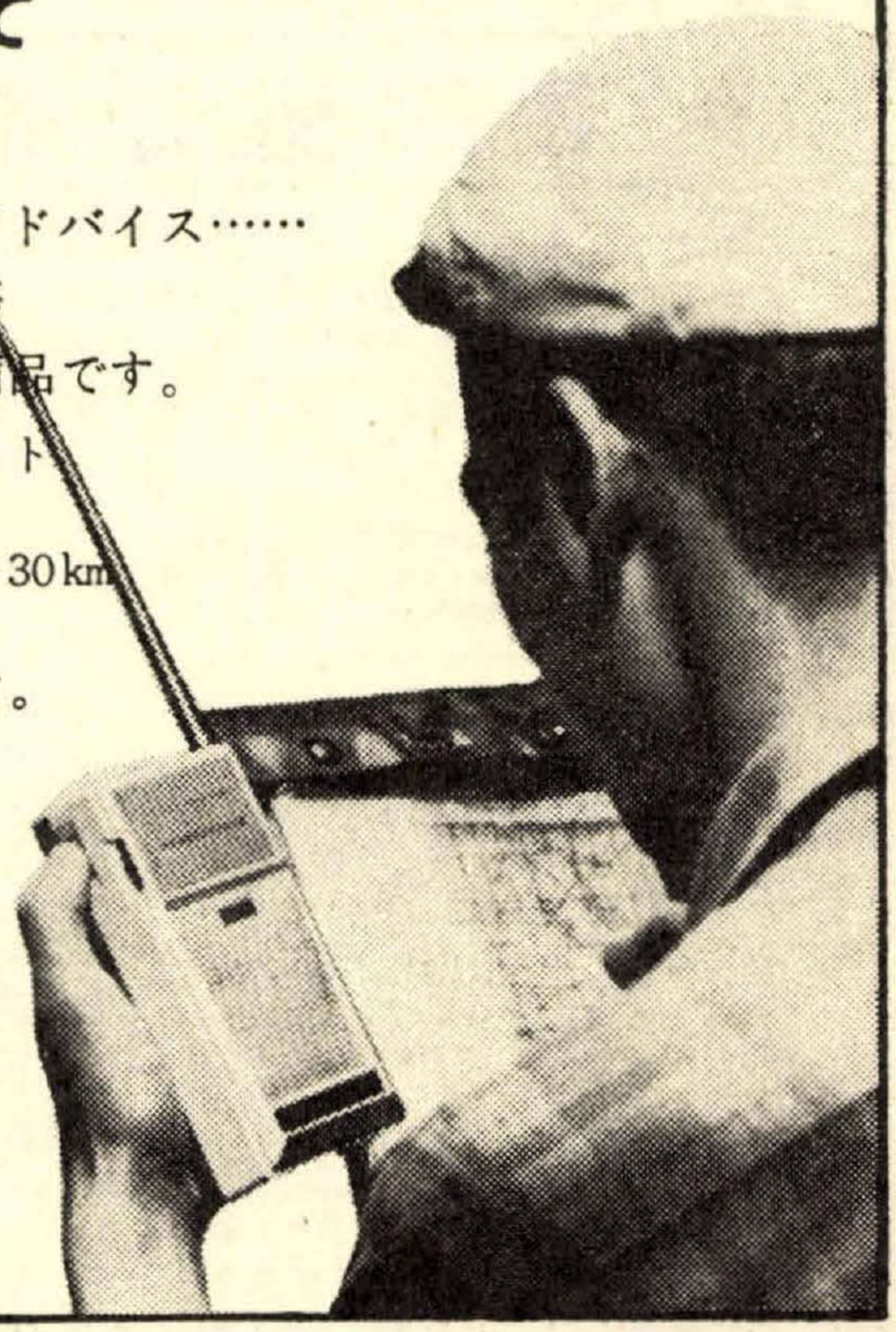
リーダーの注意・連絡・テクニックのアドバイス……
先頭と後方の交信、キャンプとの通信等
パーティーに最低1組は欠かせない装備品です。

●ボタンを押すだけで通信できるポケットサイズの携帯無線電話機です。
●通達距離は、郊外1～5km、水上2～30km
市内200m～1km
●小形で軽量、片手で全部操作できます。

1-A 現金定価 **14,500円**
定価 15,300円

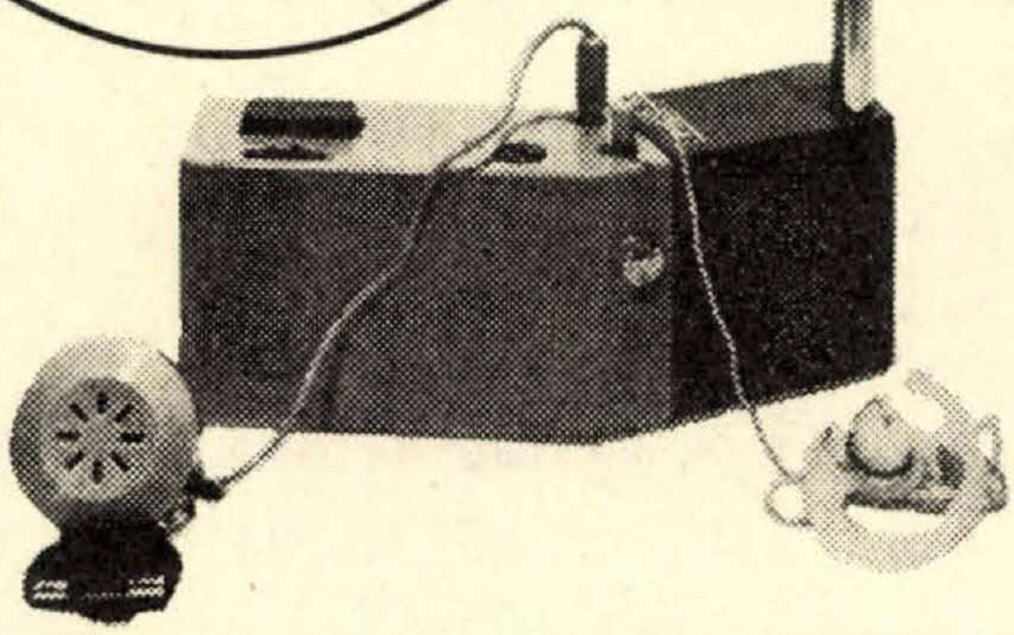
Toshiba 東芝
トランシーバー

東京芝浦電気株式会社 / 東芝商事株式会社

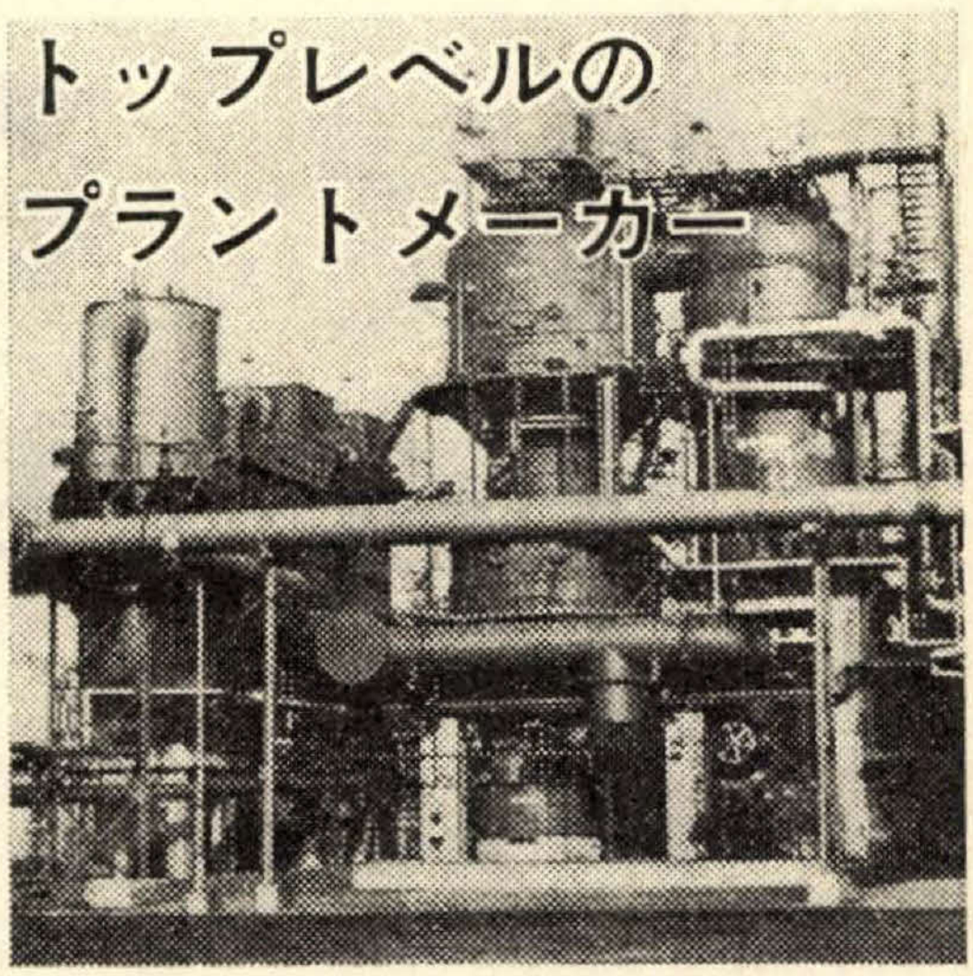


富士通信機製造株式會社
東京都千代田区丸の内2－14（281）6221

富士通
トランシーバー
¥16,300



製品種目
油瓦斯発生装置
各種瓦斯発生装置
各種貯槽
高圧球形容器
浮屋根式油槽
L.P.G貯蔵供給設備
石油積込積卸装置
塩化ビニール製造装置
タール蒸溜装置
硫酸製造装置
化学肥料製造装置
葡萄糖製造装置
電解槽
熱交換器
橋梁鉄骨



株式会社石井鉄工所
本社　東京都中央区銀座西4－3　数寄屋橋富士ビル/TEL 東京 561-9341(代表)
支社　大阪市北区堂島中1－27　堂島第一ビル/TEL 大阪 362－5821(代表)
工場　月島・蒲田・亀戸

繊維製品綜合卸・輸出入

鳴河株式会社

NARUKAWA CO, LTD.

名古屋市中区伝馬町5－5
TEL (20) 8311
東京都新宿区新宿町1－73
TEL (341)4858

森

十全堂株式会社

本社	函館市地蔵町大通	電話 (代表)③1161番
函館営業所	〃	〃 〃
営業本部	札幌市南2条西6丁目	電話 (代表)㉕7116番
札幌営業所	〃	〃 市外専用 177番
旭川営業所	旭川市2条通9丁目	電話 (代表)③3151番
帯広営業所	帯広市西2条南10丁目	電話 (帯広) 4327番
苫小牧営業所	苫小牧市栄町26番地	電話 3330番3603番
室蘭出張所	室蘭市幕西町53番地	電話 (室蘭) 2066番
東京出張所	東京都杉並区上荻窪2－38	電話 (390) 5806番

一級建築士事務所
土木建築設計施工

昭和建業株式会社

高崎市本町３丁目175
TEL (代)(2)５４１８

イタリアンモードニットウェア

株式会社富士ニット

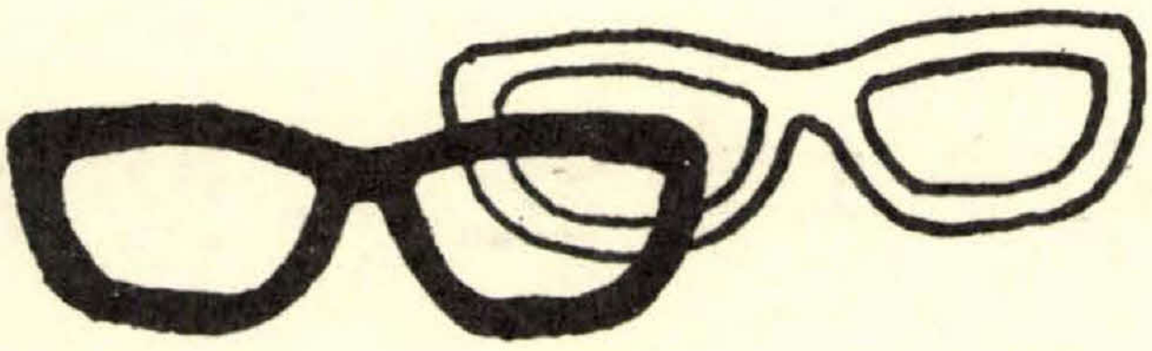
東京都八王子市中野町東１の125
電　話　(0426)(3)　１３５１

灰になっては！
建築基準法指定の
不燃材料
木造乾式防火構造材

浅野スレート株式会社

東京都港区芝浜松町4の2　電(431) 7411 (代)
支店　：　東京・静岡・名古屋・大阪・福岡・札幌・高松

メガネ・コンタクトレンズ



皆様の
眼鏡コンサルタント

●岩崎眼鏡店●

ぎんざ6丁目
小松ストア隣
TEL 571－0319
571－3091

ステンレス界の王座!!

NTKステンレス

鈑・棒・鋳物・線・管・継目無鋼管・電熱線帯

日本金属工業

取締役社長 宮代 彰

本社・東京都千代田区有楽町ニュートーキョービル

蝶理株式会社

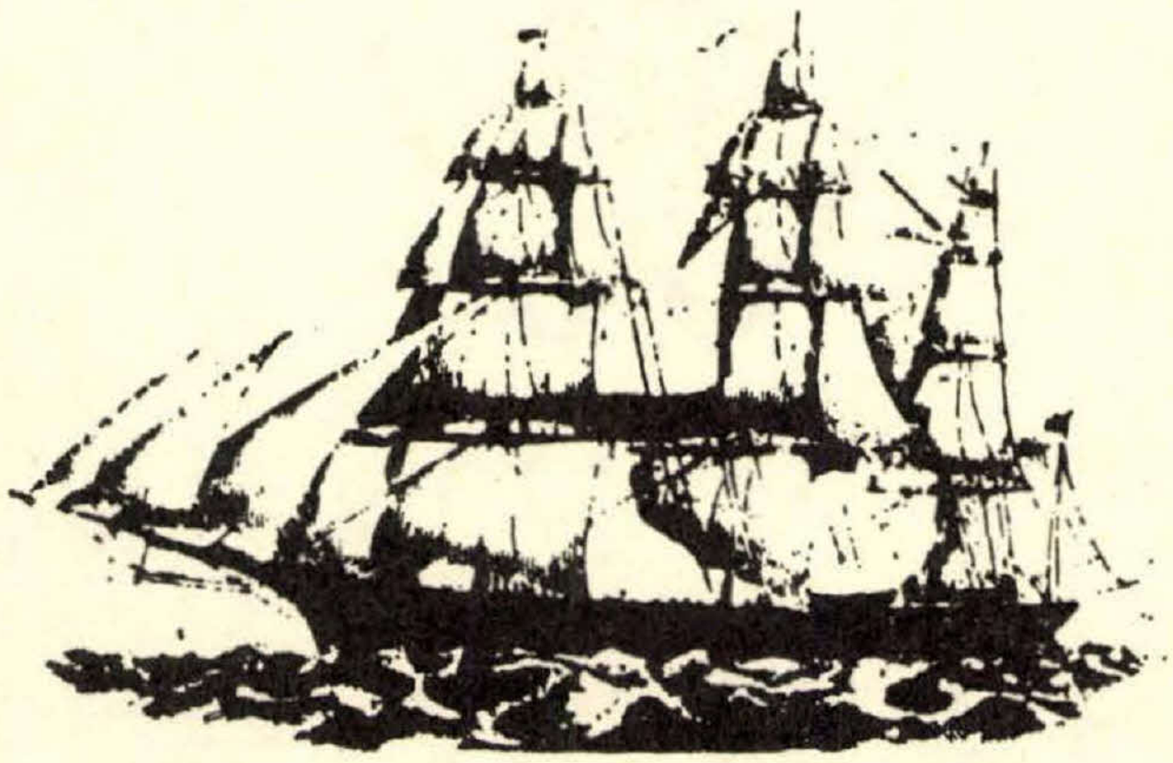
富士電機製造株式会社

富士電機

フラッシュライト

乾電池

80余年の歴史と
信用を誇る



東京海上火災

『針葉樹』復刻　後記

大正十一年、中川孫一、金田近二両氏の呼び掛けにより、東京商科大学山岳部が創設されてから六十有余年。その間、学生・OBにより国内外において様々な山行が実践され、その詳細な記録は東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』に綿々と収録されてまいりました。その中には、わが国登山史上特筆されるような輝かしい登攀の記録も多数含まれており、『針葉樹』は、日本山岳史としても一級品の価値あるものと思われます。

しかしながら、第一号が発刊されてから六十年余り、途中に戦争の混乱期を経たことから、『針葉樹』を第一号から第十三号まで全巻を揃えるのは、ほとんど不可能な状態となっております。このため、かねてより会内外から散逸を惜しむ声が強くあがっておりましたが、たまたま、如水会（学園史編纂委員会）より一橋大学百年を記念して各運動部・文化部に通史編纂の呼び掛けがあり、これを契機として二十年来未発行となっていた『針葉樹』第十四号とともに第一号～第十三号についても復刻版発行の気運が盛り上りました。そして、昭和六十年一月、針葉樹会新年会の場において、会員多数のご賛意を得て、復刻版発行が決定され、以後幹事を中心に作業を進め、ここに復刻を完了いたすことができました。

復刻に際しましては、如水会よりほか、針葉樹会の会員多数の方々から多大なるご支援ご協力をいただいたり原本の提供をいただきました。また、第一部資金面でのご援助をいただきました。近藤恒雄氏より

復刻版編纂担当

佐藤久尚

米田篤裕

宮下克彦

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第13号　復刻

昭和60年７月25日発行

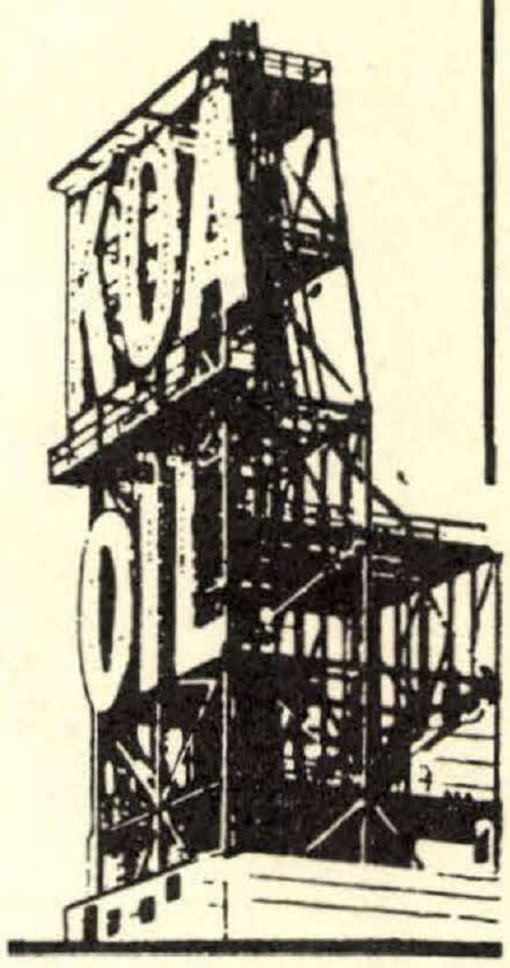
復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７

OIL / 石油精製

興亞石油

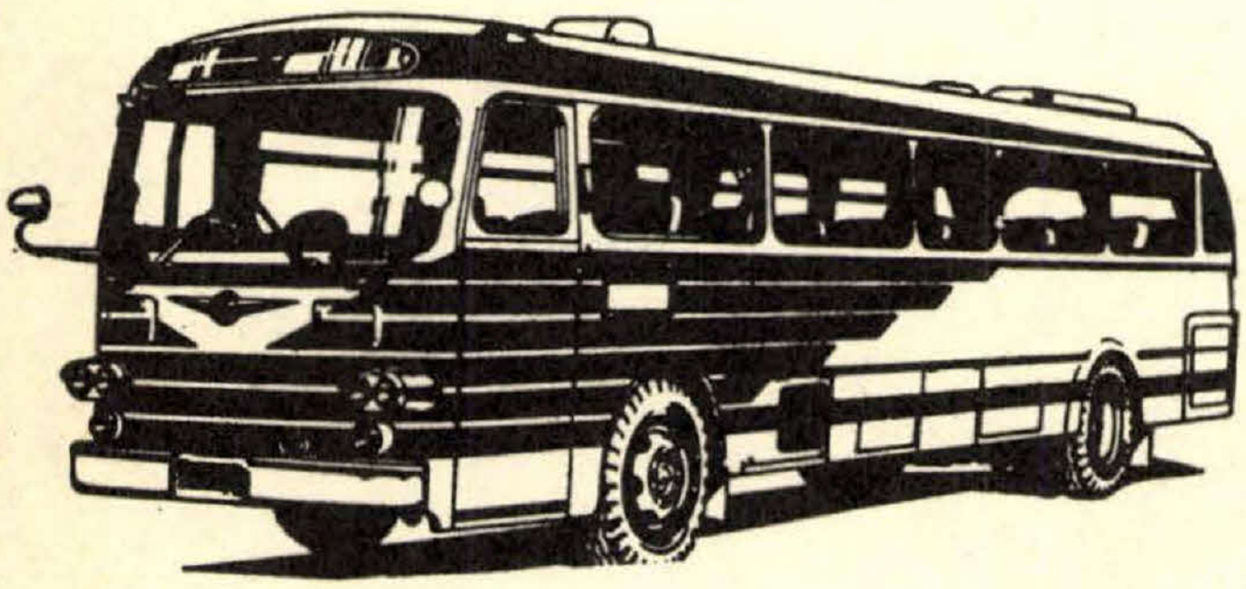


社長・野口栄三郎

ディーゼルも 日産UD

デラックス時代！ 高速UDバス時代！

ハイウェイ時代です。新しい観光路線を繁昌させるには、「高速・デラックス・経済性」がその秘訣。これらを的確に設計したのは高速デラックスバス《6RA型》です。冷暖房から読書灯まで装備した豪華さ！軽合金ボデー設計の広い室内には3段式リクライニングシート採用。〈空気ばね〉のソフトな乗り心地とともに人気急上昇！経済性が自慢のUD6型エンジンを装備しています。



ニッサン ディーゼル

バス 6RA型

日産ディーゼル工業株式会社

埼玉県川口市弥平町253 電話川口(082) 代表3131・5191

822万人のご信頼

みなさまと共に歩んだ75年の歴史が

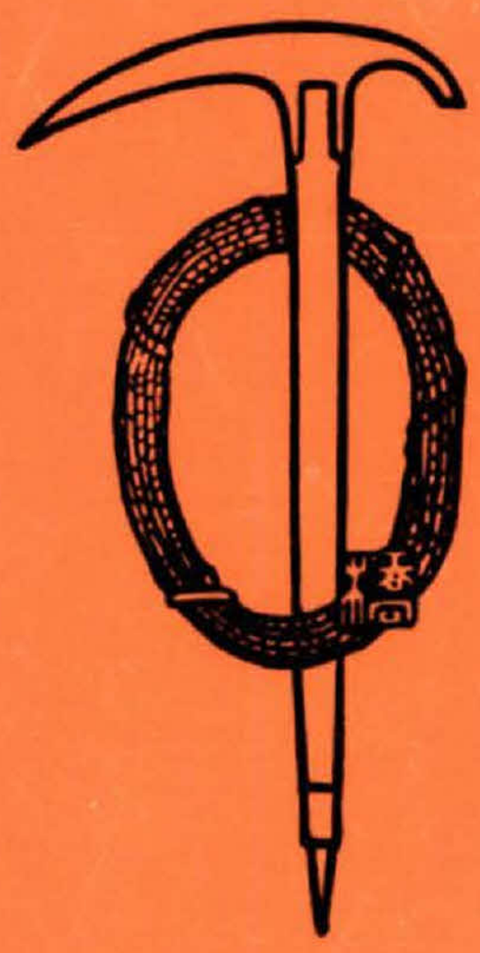
ご加入者822万人のご信頼に成長

いたしました

●日生日比谷ビル

生活設計に奉仕する日生

●本店
大阪市東区今橋4－7
TEL 231－0021

日本生命

●東京総局
東京都千代田区有楽町1－12
TEL 503－0311